

Title	近現代太湖流域農山漁村における自然資源管理に関する 現地調査
Author(s)	卜, 永堅; 吳, 滔; 杜, 正貞; 佐藤, 仁史; 唐, 立宗; 相原, 佳之; 陳, 明華; 村松, 弘一; 山本, 英史; 宮原, 佳昭; 山本, 真; 王, 丹萍
Citation	
Issue Date	2017-03
Type	Research Paper
Text Version	publ isher
URL	http://hdl.handle.net/10086/28524
Right	

近現代太湖流域農山漁村における 自然資源管理に関する現地調査

(研究課題番号 25300033)

平成 25～28 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B))
研究成果報告書

研究代表者 佐藤 仁史

(一橋大学大学院社会学研究科教授)

平成 29 (2017) 年 3 月

はじめに

佐藤仁史

本報告書は、2013年度～2016年度科学研究費基盤研究（B）（海外学術調査）「近現代太湖流域農山漁村における自然資源管理に関する現地調査」（代表：佐藤仁史）による共同研究のうち、浙江省を中心とする山間部に関する研究成果をまとめたものである。以下では、本研究の背景と問題意識を示した上で、4年間における研究活動の経緯と内容を概観し、本研究によって得られた成果と今後の課題を提示する。そして、本報告書では研究活動全体のうち、山林・山村に関する会議論文および報告論文17編を収録する。

1 本研究の背景と問題意識

（1）本研究の学術的背景

筆者が研究代表者を務めた2009-2011年度科学研究費補助金若手研究B「中国建国初期、江南郷鎮社会の再編に関する現地調査」において、高い開放性を有した太湖流域農村に特徴的である文化的統合を主とする「社村」という形態について、中華人民共和国建国後における再編過程を分析した。また、連携研究者として参加した2008-2011年度科学研究費補助金基盤研究B「解放前後、太湖流域農漁村の『郷土社会』とフィールドワーク」（研究代表者太田出）では、近代の太湖流域農村における共同慣行や協同関係、太湖流域漁村における水面利用や生業上の協同関係についての基礎的調査を行った。これらの成果の一部は、『太湖流域社会の歴史学的研究』（汲古書院、2007年）、『中国農村の信仰と生活』（汲古書院、2008年）、『中国農村の民間藝能』（汲古書院、2011年）として刊行した。研究過程において直面したのは、農村以外の漁村・山村も太湖流域社会の自然環境を構成する重要な一部であるにもかかわらず、これらの研究が欠如している状況である。自然資源の循環という観点からも、農村、山村、漁村それぞれの実態を解明し、総合的に基層社会を捉えることの必要性が強く認識され、本研究の着想に至った。

現代中国基層社会史研究は、土地制度史をはじめとする様々な領域において成果が蓄積されてきた。その中で、満鉄慣行調査班による中国農村慣行調査以来の村落共同体研究は重要な位置を占めている。これらの研究の主題である伝統中国の農村における村落共同体の有無、共同性の特質とは何かといった問題は論者によって評価が大きく分かれている。内山雅生は伝統中国における共同体の存在を認めるのに対して、Prasenjit Duara や上田信らは村落共同体の存在を明確に否定する。中国基層社会に共同体が存在しなかったのならば、「共同性」はどのようになり立っていたのか、中華人民共和国建国後それがどのように変容したのか解明されなければならない。

(2) 本研究で明らかにしようとしたこと

①農村、漁村、山村における共同自然資源の管理・利用

従来の中国基層社会史研究では農村を対象とするものが大多数を占め、明示的に漁村や山村を対象としたものは寥々たる状況にある。したがって、本研究における目的の1つに、漁村や山村における自然資源の管理・利用に関する事例を蓄積し、漁村・山村構造を明らかにする手がかりを得ることがあった。具体的検討内容は次の通りである。漁村については、湖や蕩、漾などの水面の所有権の形態と利用形態（オープンアクセスかローカル・コモンズか）、中華人民共和国建国後における水面利用権の発生と利用実態などについてである。山村については、山地・山林の所有権や利用の形態、林産物の利用などに関する慣行、土地改革や集団化が山林を取り巻く自然環境の破壊に与えた影響などが検討対象となった。夙に指摘されているように、中国農村・山村には日本の入会地の如き共有地が存在していなかった。かかる状況のもと、自然資源管理・利用はどのように行われていたのかについて実態を掘り起こすことを目指した。

②聞き取り調査と地方文献による在地慣行の実態の解明

地方文献の収集・読解と聞き取り調査を中心とする現地調査を通じて、基層社会の自然資源管理・利用に関する慣行の実態を明らかにすることを目指した。南京政府期の調査史料の該当部分を整理・分析し、伝統中国期の関連慣行に関する見取り図を作成した上で、浙江や江蘇の市級・県級図書館・檔案館において、地方檔案や地方紙などを精査し、民国期～1950年代にかけての関連史料を抽出することが目指された。とりわけ、山地や水面の境界をめぐる紛争の記録に注目した。文献に十分には表れない、在地における自然資源に関する権利・義務意識については、基層幹部を務めた人物を中心として、聞き取り調査などの現地調査を実施して不足を補う手法を採った。これらの人びとは既に80歳を超える高齢者のため、彼らに対する聞き取り調査は急務となっている。以上のように異なるアプローチから複眼的に在地慣行の実態解明を目指した。

③共同自然資源管理・利用からみた基層社会構造の歴史的変容

太湖流域を中心とする農村・漁村・山村における共同自然資源管理・利用の具体的事例を蓄積した後には、その背後にある社会関係や社会構造の特質の分析に駒を進めることを目指した。農村・漁村・山村それぞれの特徴を明らかにし、異なる類型における共通点と相違点を明らかにした上で、これらを総合的に捉える枠組みについて検討する計画を立てた。主要命題は、(i)伝統中国期の基層社会における共同性とはどのような形で成立していたのか、(ii)国家による基層社会の再編、とりわけ1950年代の土地改革から集団化に至る時期において、かかる共同性がどのように変化したのか、の2点である。

2 調査・研究活動の経緯

(1) 当初設定した全体の研究計画

本研究は、①中国の図書館・檔案館における地方文献の調査・収集、②太湖流域農山漁村における聞き取り調査、③これらに基づく中国基層社会の共同性に関する理論研究、からなる。①では、日本の関連機関所蔵の諸史料を調査した上で、数年間にわたり調査を実施してきた呉江市・湖州市・建徳市の図書館・檔案館における農山漁村に関連する史料の収集を行った。

②では、既に基礎的な調査を実施している農村・漁村・山村を中心として実施する予定を立てた。調査の対象は 1940 年代の状況を知る古老と 1950 年代の社会主義改造時期に基層幹部を務めた人物である。調査にあたっては、これまで共同研究などで研究協力体制を確立している中国中山大学の呉滔氏、南開大学の余新忠氏、浙江大学の杜正貞氏に協力を得た。

③では、年 2 回研究集会を開催して調査結果を報告し、中国の農山漁村における共同性とその歴史の変容について議論を行った。また、外部のゲストを招いて、コモンズ論や環境史研究、農林政策学における成果を学習・吸収することにより、理論的枠組みの検討を行った。

(2) 研究体制

本科研採択時の構成員は次の通りである。

研究代表者	佐藤仁史	一橋大学
研究分担者	太田 出	広島大学
研究分担者	山本 真	筑波大学
連携研究者	山本英史	慶應義塾大学
連携研究者	稲田清一	甲南大学
連携研究者	村松弘一	学習院大学
連携研究者	宮原佳昭	南山大学 (2016 年度より研究分担者)
研究協力者	林 淑美	広島大学
研究協力者	相原佳之	東洋文庫

以下は当初想定していた研究体制である。研究メンバー全員がいずれの作業にも関与するが、①②を実施する際には、全体の統括を研究代表者の佐藤が担当した上で、メンバーは幾つかの部門に分かれ、各部門の統括者のもとで調査・研究を行うものとされていた。それぞれの当初の担当内容は次の通りである。

①農村研究班。江南農村の空間性を専門とする稲田が統括する。稲田は地籍調査と土地制度の角度から、山本英史は郷村の徴税制度・郷村役との関連において、宮原は農村教育がもたらした社会関係の変容という角度から、それぞれ農村の共同性について分析することが目指された。

②漁村研究班。内水面漁民の生業を専門としてきた太田が統括する。太田は水面権など水面

利用をめぐる漁民の共同性について、環境史家である村松は水利史の角度から漁村組織についてそれぞれ分析することが試みられた。

- ③山村研究班。福建地域史研究の山本真が全体統括する。山本真は同族組織の強い福建山村との比較の視点から、林は山間部におけるエスニシティの角度から、相原は森林史や林業をめぐる社会関係の角度から、それぞれ山地の利用・管理方式、およびその変遷を検討するという役割分担であった。

(3) 調査計画の比重の変更と山村調査の重点化

調査の展開の中で、江南農漁村についての知見は前科研調査による蓄積に裏打ちされて比較的多かったのに対し、江南山村に関する基本的な知識が絶対的に不足していることを認識するようになった。したがって、江南農村と漁村の調査についてはメンバーの有志による個別の調査に委ね、中国のカウンターパートを交えた大規模な共同調査については、浙江省の钱塘江流域山村に焦点を絞って調査を進めることとなった。4年間における夏季合同調査の日程と活動内容については、「夏季合同調査の日程表」を参照されたい。

夏季合同調査以外に、2013年12月、2014年12月、2015年12月には南京、蘇州、杭州において、文献史料調査および聞き取り調査を実施した。また、詳細には述べないが、これら以外に研究分担者による個別の現地調査も実施された。それらは、钱塘江流域水資源に景観調査、福建における自然資源に関する調査、長江下流域漁村の調査などである。これらの個別調査による成果の一部も本報告書に収録された各論文に反映されている。

表 夏季合同調査の日程表

2013年度夏期調査 2013年8月7日～8月20日 浙江山村調査

調査者 佐藤仁史・太田出・林淑美・宮原佳昭

同行者 陳明華(浙江大学PD)・李星毅(杭州師範大学院生)・王丹萍(浙江大学学部生)

日 時	地 址	訪問先及び聞き取り対象者	課 題	参 加 者
8月9日午前	杭州市	浙江省図書館	所蔵図書の見学・撮影・複写	佐藤・太田・林
8月9日午後	〃	〃	〃	〃
8月11日午前	建徳市西塢村	葉徳茂氏採訪	解放前、西塢村の土地所有	太田・林・宮原・陳明華・李星毅
	建徳市芳山村	王来生氏採訪	解放前後、芳山村の土地所有	〃
8月11日午後	建徳市芳山村	徐東榮氏採訪	解放前後、芳山村の土地所有	〃
8月12日午前	建徳市芳山村	徐東榮氏採訪	解放前後、芳山村の土地所有	佐藤・太田・林・宮原・陳明華・李星毅
8月12日午後	建徳市西塢村	葉徳茂氏採訪	解放前後、西塢村の土地所有と朝鮮戦争の従軍経験	〃

8月13日午前	建徳市康安路	建徳市檔案館	所蔵檔案の閲覧・撮影・複写	佐藤・宮原・陳明華・李星毅
8月13日午後	〃	〃	〃	〃
8月14日午前	建徳市芳山村	徐東榮氏採訪	解放後、芳山村の土地所有	佐藤・宮原・陳明華・李星毅・王丹萍
8月14日午後	建徳市西塢村	葉德茂氏採訪	解放後、西塢村の土地所有	〃
8月15日午前	建徳市西塢村	林發樟氏採訪	解放後、西塢村の土地所有	佐藤・太田・林・宮原・陳明華・李星毅・王丹萍
8月15日午後	〃	〃	解放後、西塢村の土地所有と会計	〃
8月16日午前	建徳市童家郷童家村	童福生氏採訪	解放後、童家郷の山林所有	佐藤・太田・林・宮原・陳明華・李星毅・王丹萍
8月16日午後	建徳市童家郷緑荷塘村 建徳市壽昌鎮養老院	景觀調査 王水發氏採訪 袁永清氏採訪	緑荷塘古楠木森林公園の見学 解放後の山地所有 解放後の山地所有	〃 〃 〃
8月17日午前	建徳市西塢村	林發樟氏採訪	解放後、供销社と西塢村の山地所有	佐藤・太田・林・宮原・陳明華・李星毅・王丹萍
8月17日午後	淳安県新安江	景觀調査	新安江ダム見学	佐藤・陳明華・李星毅
8月18日午前	建徳市大洲村	吳小関氏採訪	解放前後、大洲村の山地所有	佐藤・太田・林・宮原・陳明華・李星毅・王丹萍
8月18日午後	建徳市芳山村	王来生氏採訪	解放前後、芳山村の山地所有と山地経営	〃
8月19日午前	建徳市西塢村	林發樟氏採訪	解放後、建徳県初級林業学校と西塢村の山地所有	林・宮原・王丹萍
8月19日午後	建徳市芳山村 建徳市康安路	王来生氏採訪 建徳市檔案館	解放前後、芳山村の山地所有と山地経営 所蔵檔案の閲覧・撮影・複写	佐藤・太田・陳明華・李星毅 佐藤・太田・林・宮原・陳明華・李星毅・王丹萍

2014 年度夏期調査 2014年8月14日～8月24日 浙江山村調査

調査者 佐藤仁史・太田出・林淑美・相原佳之・宮原佳昭

同行者 杜正貞(浙江大学副教授)・陳明華(浙江大学PD)・李星毅(杭州師範大学院生)・王丹萍(浙江大学学部生)

日 時	地 址	訪問先及び聞き取り対象者	課 題	参 加 者
8月16日午前	建徳市西塢村	林發樟氏採訪	解放後、西塢村の集団化と会計帳簿	太田・林・相原・杜正貞・王丹萍
8月16日午後	建徳市西塢村 建徳市芳山村	李星毅、合流 林發樟氏採訪 顧福高氏採訪	解放後、西塢村の集団化と会計帳簿 解放前後、芳山村の土地所有と建徳林業学校	” 佐藤・宮原・陳明華・李星毅
8月17日午前	建徳市新安江普山路 建徳市新安江普山路	沈淑琴氏採訪 吳天福氏採訪	解放後、南京林学院と林業教育 解放後、建徳林業学校と林業教育	佐藤・宮原・陳明華・李星毅 太田・林・相原・杜正貞・王丹萍
8月17日午後	建徳市新安江普山路 建徳市西塢村	沈淑琴氏採訪 林發樟氏採訪	解放後、建徳林業学校と林業教育 解放後、西塢村の集団化と会計帳簿	佐藤・宮原・陳明華・李星毅 太田・林・相原・杜正貞・王丹萍
8月18日午前	建徳市大洲村 建徳市西塢村	吳小関氏採訪 林發樟氏採訪	解放後、大洲村の土地所有 解放後、西塢村の山林利用	佐藤・宮原・陳明華・李星毅 太田・林・相原・杜正貞・王丹萍
8月18日午後	建徳市大洲村 建徳市西塢村	吳小関氏採訪 林發樟氏採訪	解放後、大洲村の土地所有と集団化 解放後、西塢村の山林利用	佐藤・宮原・陳明華・李星毅 太田・林・相原・杜正貞・王丹萍
8月19日午前	桐盧県茆坪村	胡明君氏採訪	解放後、茆坪村山林利用と炭焼き	佐藤・宮原・陳明華・李星毅・相原・杜正貞
8月19日午後	桐盧県蘆茨村 ”	方承美氏採訪 陳三畏氏採訪	解放前後、蘆茨村の土地所有 解放前後、蘆茨村の土地所有と炭焼き	宮原・相原・杜正貞 佐藤・陳明華・李星毅
8月20日午前	建徳市康安路	建徳市図書館	所蔵資料の閲覧・撮影	佐藤・宮原・陳明華・李星毅 太田・林・相原・杜正貞・王丹萍
8月21日午前	建徳市西塢村	林發樟氏採訪	解放後、西塢村の承包地参観	佐藤・宮原・陳明華・李星毅 太田・林・相原・杜正貞・王丹萍
8月21日午後	建徳市西塢村	林發樟氏採訪	解放後、西塢村の土	王丹萍

	建徳市芳山村	林登樟氏採訪	地利用 解放後、芳山村の集 団化	太田・林・相 原・杜正貞・ 王丹萍 佐藤・宮原・ 陳明華・李星 毅
8月22日午前	桐廬県富春山 鎮	俞庭璋氏採訪	解放前、富春山鎮の 地主と経営実態	佐藤・太田・ 林・相原・宮 原・杜正貞・ 陳明華・王丹 萍
8月22日午後	桐廬県富春山 鎮	俞庭璋氏採訪	解放後、俞趙村の古 蹟參觀	〃

2015 年度夏期調査 2015年8月18日～8月28日 浙江山村調査

調査者 佐藤仁史・相原佳之・宮原佳昭

同行者 杜正貞（浙江大学副教授）・陳明華（浙江大学PD）・彭滢燕（浙江大学院生）・王丹萍（浙江大学学部生）

日 時	地 址	訪問先及び聞き取り対象者	課 題	参 加 者
8月19日午前	建徳市康安路	建徳市檔案館	所蔵檔案の閲覧・撮 影	佐藤・相原・ 宮原・杜正貞 ・陳明華・彭 滢燕・王丹萍
8月19日午後	〃	〃	〃	〃
8月20日午前	建徳市新安江 普山路	沈淑琴氏採訪	林業教育関連のイン フォーマント選定	佐藤・相原・ 宮原・杜正貞 ・陳明華・彭 滢燕・王丹萍
	建徳市西塢村	林登樟氏採訪	〃	〃
8月20日午後	建徳市康安路	建徳市檔案館	所蔵檔案の閲覧・撮 影	〃
8月21日午前	建徳市康安路	建徳市檔案館	所蔵檔案の閲覧・撮 影	佐藤・相原・ 宮原・杜正貞 ・陳明華・彭 滢燕・王丹萍
8月21日午後	〃	〃	〃	〃
8月22日午前	建徳市乾潭鎮 廟前村	羅雪昌氏採訪	解放後、建徳県初級 林業技術学校の教育	佐藤・相原・ 宮原・杜正貞 ・陳明華・彭 滢燕・王丹萍
8月22日午後	〃	〃	〃	〃
8月23日午前	桐廬県茆坪村	胡明君氏採訪	解放後、茆坪村山林 利用と炭焼きに関す るインフォーマント の選定	佐藤・相原・ 宮原・杜正貞 ・陳明華・彭 滢燕・王丹萍
8月23日午後	〃	胡光繁氏採訪	解放後、茆坪村山林 利用と炭焼き	〃

8月24日午前	桐廬県春江東路	董珠蓮氏採訪	解放後、建徳県初級林業技術学校の教育	佐藤・相原・宮原・杜正貞・陳明華・彭澄燕・王丹萍
8月24日午後	建徳市乾潭鎮廟前村	羅雪昌氏採訪	解放後、羅村・廟前村の集団化	佐藤・相原・宮原・杜正貞・彭澄燕・王丹萍
8月25日午前	建徳市康安路	建徳市檔案館	所蔵檔案の閲覧・撮影	佐藤・相原・宮原・杜正貞・彭澄燕・王丹萍
8月26日午後	杭州市西湖区	浙江図書館古籍部	所蔵史料の閲覧・撮影	佐藤・相原・宮原
8月27日午前	杭州市西湖区	浙江図書館古籍部	所蔵史料の閲覧・撮影	佐藤・相原・宮原
8月27日午後	〃	〃	〃	〃

2016 年度夏期調査 2016年8月7日～8月14日 浙江山村調査

調査者 佐藤仁史・相原佳之・宮原佳昭

同行者 杜正貞(浙江大学副教授)・陳明華(上海大学研究員)・彭澄燕(浙江大学院生)・菅野智宏(一橋大学院生)・施昱丞(台湾大学院生)・趙世瑜(北京大学教授)

日 時	地 址	訪問先及び聞き取り対象者	課 題	参加者
8月8日午前	建徳市乾潭鎮廟前村	羅雪昌氏採訪	羅氏回想録の出版打ち合わせ、内容確認	佐藤・相原・宮原・杜・陳・彭・施・趙
8月8日午後	〃	〃	羅氏回想録にある葛塘・羅村水庫の参観	〃
8月9日午前	建徳市乾潭鎮廟前村	羅雪昌氏採訪	羅氏回想録の内容確認	佐藤・相原・宮原・杜・陳・彭・菅野・施・趙 〃
8月10日午前	龍泉市季山頭村	季山頭村社壇	太平醮の参観	佐藤・相原・宮原・杜・陳・彭・菅野・施・趙
8月10日午後	〃	〃	〃	〃
8月11日午前	龍泉市大舎村	連立舟氏採訪	解放前後、大舎村の祠堂・書院・学校	佐藤・相原・宮原・杜・陳・彭・菅野・施・趙
8月11日午後	〃	仁源古社	越劇の参観	〃
8月12日午前	建徳市康安路	建徳市檔案館	所蔵檔案の閲覧・撮影	佐藤・宮原・陳・施
8月12日午後	建徳市乾潭鎮廟前村	羅雪昌氏採訪	羅氏回想録の出版打ち合わせ、内容確認	相原・杜・彭・菅野
	建徳市康安路	建徳市檔案館	所蔵檔案の閲覧・撮影	佐藤・相原・宮原・杜・陳・彭・施・菅

				野
8月13日午後	杭州市西湖区	浙江図書館地方文献閲覧室	所蔵史料の閲覧・撮影	佐藤・相原・ 宮原・菅野・ 施

(4) シンポジウム・セミナー

本科研では現地調査を進めつつ、現地調査をはじめとする研究活動の成果をより大きな文脈に位置づけ、さらに諸理論との架橋を行うために、海外の研究者を招聘したシンポジウム2回と、隣接分野の研究者を招いたセミナー1回を開催した。具体的な内容は次の通りである。

① 2014年夏開催「中国における山区社会と流域史」シンポジウム

2013年の夏季調査の内容や現地調査における山村調査重点化を受け、山間部社会史研究を進めてきた海外の研究者3名を招聘し、2014年7月5日に慶應義塾大学三田キャンパス452教室において「中国における山区社会と流域史」と題するシンポジウムを開催した。報告題目は以下の通りである。なお、宮原佳昭氏の報告以外の会議論文は本報告書に収録した。

第一部 明清時期的山区社会

ト永堅（香港中文大学） 陰那山田山訴訟与十七世紀的広東程郷県

呉滔（中山大学） 隘口与山区開発—以湖南永明為中心

第二部 近代浙江の山区社会与林学知識

杜正貞（浙江大学） 龍泉檔案的利用与近現代山区史研究

宮原佳昭（南山大学） 近代林学与浙江林業教育研究的可能性

② 2014年秋セミナー

本研究において導入を目指したローカル・コモンズ論に対する理解を深めるために、環境経済学の領域でコモンズ論を専門とする兵庫県立大学の三俣学氏（主要著書：同氏編『エコロジーとコモンズ——環境ガバナンスと地域自立の思想』晃洋書房、2014年）に依頼してコモンズ論のエッセンスをレクチャーいただいた。

全面的にコモンズ論を中国近現代史研究に消化するにはなお更なる研鑽が必要となるが、当該レクチャーによって得られた知見は本報告書の第三部に収録された、相原論文、山本真論文、佐藤論文に一部反映されている。

③ 2016年夏開催第2回「中国の山区社会と流域史」シンポジウム

最終年度となる2016年度には、前年度までの3年間にわたる調査の成果を踏まえ、成果の公表を視野に入れて各活動を展開した。共同研究を進めてきた海外の研究者3

名を招聘し、2016年7月2日に慶應義塾大学三田キャンパス471教室において第2回「中国における山区社会と流域史」と題するシンポジウムを開催した。報告題目は以下の通りである。なお、趣旨文及び会議論文は本報告書に収録した。

趣旨説明 佐藤仁史（一橋大学）

第一部 明清時代の山区社会

唐立宗（暨南国際大学） 従防礦到防菁：晩明浙江山民活動与軍兵因応

相原佳之（東洋文庫） 生存資源供給源としての山野の役割——清代中国を事例とした
考察

第二部 近代浙江の山区社会

杜正貞（浙江大学） 晩清民国浙江山林所有権的獲得与証明

陳明華（上海大学） 山地移民与齋教伝播

3 本研究の成果・課題

(1) 成果と意義

本研究での成果は次の諸点である。

第1は、浙江省の钱塘江流域地域における一次史料（特に檔案）の精査と口述調査を通して、1940年代～1950年代を中心とする近現代山村の共同性とその変容に関する実態を具体的に明らかにしたことである。

第2は、浙江省や、浙江省南部と自然生態環境の近い福建省の状況を含めて中国東南山間部の社会史について長期的な変動を明らかに出来たことである。これは古代史、前近代史、近現代史の各領域を専門とする研究者による共同研究の利点が反映された結果といえる。

第3は、現地研究者の協力のもと、民間に所蔵される種々の地方文献やエゴ・ドキュメントを収集できたことである。かような史料はのうち主要なものは次の二つである。1つは、2013年の夏季調査において、ある村の元生産大体会計担当者から撮影させていただいた、1960年～1980年代初頭にかけての生産隊の帳簿群である。もう1つは2015年の夏季調査において別の村の元生産大隊会計関係者から閲覧させていただいた10万字に及び回想録とその元となった手帳群（1972年～現在）である。

(2) 課題

上述したように、本研究では、従来の研究史において蓄積の薄い山間部の現地調査に重点を置いたため、基礎的な状況の理解や資料の収集といったファクト・ファインディングの作業に費やされることとなった。したがって、環境史的アプローチを導入して、ローカル・コモنز論を参照しつつ分析を加えるという当初の目的は十分に消化されたとは言い難い。ローカル・コモنز論の角度から当該山間部の、ひいては中国山間部の特徴をどのように見出すことができるのかは今後の課題である。

また、現地調査によって発見された地方文献やエゴ・ドキュメントについても、十分な整

理・分析にまで至らなかった。これらの史料は檔案をはじめとする公文書群との対象や他のインフォーマントの証言との対照作業が不可欠となるが、作業の関係上踏み込んだ検証作業をすることは叶わなかった。中国基層社会史研究の方法論上での展開のためにも、収集した諸史料の整理・分析を進めることが急務である。その上で、重厚な史料に裏打ちされた方法論・理論上の議論を明示的に行うことも爾後の課題である。

4 報告書の構成

本報告書の収録論文は全三部からなる。

第一部には、2014年夏に開催した「中国における山区社会と流域史」シンポジウムに提出された論文のうち3編を収録している。これらの諸論考の地域は広東、湖南、浙江と広域にわたるが、山区社会全体の分析に際する多くの示唆を提供するものである。

第二部には、2016年夏に開催した第2回「中国における山区社会と流域史」シンポジウムに提出された論文4編を収録している。いずれも浙江山間部における現地調査に関わったメンバーによる論考であり、現地調査で得られた情報や示唆をもとに著されたものである。その後改稿されて第三部に収録された論考となったものも含まれているが、シンポジウム当時の到達点を示すために重複を恐れず収録した。

第三部には本科研による共同研究の成果として執筆された論考10編を収録している。浙江省を中心とする地域社会に即して、古代、前近代、近代をカバーしていることが特徴である。また、現地調査において研究班が発見した生産隊の帳簿群について、調査班で現地方言の通訳を務めた大学院生による解説文も収録した。

目次

はじめに

目次

第一部 「中国の山区社会と流域史」シンポジウム論文

陰那山田産訴訟与十七世紀的広東程郷県 ……………	ト 永堅	2
隘口与山区開発 ——以湖南永明県為例—— ……………	吳 滔	24
晚清民国林業紛糾中的山産与山界 ……………	杜 正貞	33
——对龍泉司法檔案的研究——		

第二部 第2回「中国の山区社会と流域史」シンポジウム論文

シンポジウム趣旨文 ……………	佐藤仁史	48
従防砦到防菁 ——晚明浙江山民活動与軍兵因応—— ……………	唐 立宗	50
生存資源供給源としての山野の役割 ……………	相原佳之	91
——清代中国を事例とした考察——		
齋教伝播与山区棚民 ——以明清浙閩贛地区為例—— ……………	陳 明華	113
晚清民国浙江山林所有權的獲得与証明 ……………	杜 正貞	126
——龍泉県与建徳県的比較——		

第三部 科研成果論文

錢塘江流域上流の塢と開発 ……………	村松弘一	157
晚明浙江山区的靛民起事与官府応変 ……………	唐 立宗	167
齋教伝播与山区移民 ——以清代浙、閩、贛地区為例—— ……………	陳 明華	191
生存資源供給源としての山野の役割 ……………	相原佳之	205
——清代中国を事例とした考察——		
清代浙江の山林資源紛争 ……………	山本英史	228
——十九世紀末の諸暨県を例として——		
林産物からみる近代錢塘江流域社会 ……………	佐藤仁史	246
——建徳・桐廬における口述調査を手がかりに——		
晚清民国山林所有權的獲得与証明 ……………	杜 正貞	266
——浙江龍泉県与建徳県的比較研究——		
近現代中国における林学知の普及と林学界に関する初歩的考察 ……	宮原佳昭	286
——中国東南部の事例に着目して——		
山林資源の民間における共同管理と国家による掌握・開発の試み ……	山本 真	303
——近代福建省の事例から——		
建徳西塢第一生産隊賬本資料紹介……………	王 丹萍	337

第一部

「中国の山区社会と流域史」 シンポジウム論文

陰那山田產訴訟與十七世紀的廣東程鄉縣

卜永堅

一、問題的提出

我最早的兩篇學術論文，都是關於清代廣東新安縣(今天的香港)地主與佃農之間因田租引起的衝突、訴訟及相關法律條文。¹ 如果要「事後孔明」地為自己建構一個學術史脈絡的話，我會說，多少是因為受了通俗馬克思主義史學觀念的影響，我對於古代中國，了解不多，只知有「階級矛盾」和「階級鬥爭」，即地主與農民之間圍繞着土地而引起的衝突和訴訟。衝突和訴訟意味着王朝國家的干預和仲裁，於是，社會矛盾、訴訟過程、和相關法律條文，就成為三個必須同時處理的問題。我當時對於馬克思主義史學理論的理解，顯然粗糙得很；後來也意識到馬克思主義史學理論對於研究中國歷史的局限和誤區；近年受到日本「地域社會」理論和中國「歷史人類學理論」的影響，我更加意識到，個別地區內的國家-社會關係，非常複雜，而且不斷變化，必須盡量利用當地的文字記錄(方志、衙門檔案、訴訟文書、譜牒、文人著述等)和儀式活動(各類祭祖、神明節誕、游神、打醮等)，來把握當地的歷史脈絡和社會動態。其中，通過訴訟來研究地方社會，我自以為還是一個比較方便和有效的角度，因為訴訟文書如同一個舞臺，衝突各方輪流上場，背誦自己預先寫好的臺詞，研究者比對各人臺詞，理解這些臺詞背後的「劇情」，看出訴訟各方有意隱瞞或扭曲的「情節」，最終把握當地國家-社會關係的真相。

十多年前，我偶然在圖書館發現《陰那山志》，由於「陰那山」這個名字比較奇怪，地點又是我祖籍所在(廣東梅縣)，因此特意翻一翻，才發現這是一本佛寺志，記載了靈光寺田產訴訟的相當複雜而有趣的內容。於是，我就以這場訴訟為題，寫了一篇會議文章，發表於 2007 年 11 月 23-27 日間由贛南師範學院舉辦的「客家民間信仰與地域社會國際學術研討會」上。意猶未盡，兩年後，2009 年底，我組織了「明清法律史專號」，把這篇會議文章擴充修改為學刊論文。² 之後，我陸續發現自己對於這場訴訟的理解仍有許多闕失和誤差，而且一直沒有到過陰那山靈光寺作實地考察，心中不無遺憾。蒙佐藤仁史教授舉辦「中國流域社會與山區社會史會議」，邀請我參加。得到他的鞭策和推動，我就在今年 6 月 6-9

¹ 〈抗租與迎神：從己卯年(1999)香港大埔林村鄉十年一度太平清醮看清代林村與龍躍頭鄧氏之關係〉，《華南研究資料中心通訊》第 18 期(2000 年 1 月)，頁 1-7；〈清代法律中的「不應為」律與雍正五年「奸頑佃戶」例〉，《中國文化研究所學報》2001 年新第十期(總第 41 期)，頁 111-150。

² 〈陰那山田產訴訟與 17 世紀廣東程鄉縣〉，「明清法律史專號」，《歷史人類學》第 7 卷第 2 期(2009 年 10 月)，頁 5-30。

日期間，到梅州一行，在梅州嘉應學院客家研究所蕭文評教授的大力指導下，考察了陰那山靈光寺及其附近部分村落。現在，結合《陰那山志》及相關史料，以及考察所見所得，撰成此文，算是對於自己 2009 年舊作的批判和擴充，並以此就正於各位師友。

本文研究康熙廿六至卅二年間(1687-1693)陰那山靈光寺田產訴訟，所利用的主要史料，是靈光寺自行編纂的《陰那山志》。本文認為：這場訴訟，反映出靈光寺傳統靠山即松口鎮李氏宗的衰微，和新興土豪力量即大坪陳氏的壯大，要理解這個變化過程，必須掌握地方歷史的脈絡、例如地方動亂。另外，雙方對於靈光寺田產的爭奪，表現在對於繳稅權的爭奪，這是因為明清王朝對於土地的管理，是以田賦登記為基礎的。這場訴訟也意外地推進了程鄉縣的國家和社會的整合過程。

二、背景：陰那山、靈光寺、《陰那山志》

位於今日廣東省梅州市市區東北面的陰那山，明清乃至民國時期，都是程鄉縣與大埔縣的分界。程鄉縣從明朝洪武二年(1369)到清朝雍正十一年(1733)為止，都是廣東潮州府的屬縣之一。雍正十一年，清朝政府把程鄉縣取消，將之昇格為嘉應直隸州，領興寧、長樂、平遠、鎮平四縣，形成一州四縣之建制。嘉慶十二年(1807)，嘉應直隸州進一步昇為嘉應府，因此又復設程鄉縣為府治所在之附郭縣，連同上述四縣，形成一府五縣之建制。但僅僅五年之後，嘉慶十七年(1812)，嘉應府又降為嘉應直隸州，程鄉縣又被取消，恢復雍正時期一州四縣之建制，直至清朝滅亡為止。³ 在康熙年間程鄉縣的地方行政區劃內，陰那山位於程鄉縣縣城東面的溪南都第三圖。⁴ 有關陰那山的位置，參見圖一。

陰那山的靈光寺，是佛教慚愧祖師修禪坐化之所。慚愧祖師俗姓潘，名了拳，他的事蹟可以從唐朝說起，就華南歷史和佛教歷史而言，慚愧祖師信仰是個極有意義的題目，但本文關注的是十七世紀末靈光寺的田產訴訟問題。在 1650-1690 年代，靈光寺住持為正瑛，本文所依靠的主要史料---《陰那山志》內的〈審斷佛山全案〉，就是正瑛編纂的，正瑛也是這場訴訟中的靈光寺的代表。本來，訴訟的一方，為維護自己的利益和體現自己的合法性，編纂訴訟文書，有意無意篩選

³ 張廷玉等奉敕纂，《明史》(乾隆四年[1739]刊行，北京：中華書局，1974)，卷 45〈地理志·廣東·潮州府〉，頁 1141-1142；趙爾巽等編纂，《清史稿》(北京：中華書局，1977)，卷 72，〈地理志十九·廣東·嘉應直隸州〉，頁 2283-2284。

⁴ 劉廣聰纂修，《程鄉縣志》，康熙三十年(1691)刊，卷 1，頁 14a-b，載《日本藏中國罕見地方志叢刊》(北京：書目文獻出版社，1992)，總頁 371，以下簡稱康熙《程鄉縣志》；王之正、印光任纂修，《嘉應州志》，乾隆十五年(1750)刊，卷 1，頁 20b，載《故宮珍本叢刊》(海口：海南出版社，2001)，第 174 冊，總頁 205，以下簡稱乾隆《嘉應州志》。

出有利於自己的文字，是司空見慣的。可是，《陰那山志》的編纂極為混亂，而且十七世紀末靈光寺田產訴訟期間，訴訟雙方還互相譴責對方更動碑石紀錄，泐諸金石的文字，尚且不免於鑿改增減，則《陰那山志》這堆紙面文字，作為服務於靈光寺的「有意識史料」的性質，就更加明顯。但是，由於缺乏其他相關史料，本文仍然不得不利用這本充分反映靈光寺利益和立場的《陰那山志》。

目前，《陰那山志》原書僅廣東省中山圖書館藏有一本，另梅縣圖書館(今名梅州劍英圖書館)藏有半本。《陰那山志》最新的版本，是鍾東 2006 年點校本，以下簡稱鍾本《陰那山志》。⁵ 之前，則有程志遠出版於 1994 年的增訂本，⁶ 程志遠把《陰那山志》以簡體字橫排、加標點、加註釋之外，更補充不少新舊史料，從 1990 年代的報紙新聞報道，到十七世紀地方志的記載等等，都有所選載。不憚煩難，盡心盡力，實堪敬佩。但是，《陰那山志》本身從明到清就不斷被增補，程志遠於二十世紀末增入新舊史料時，沒有標明哪些是他自己的手筆，結果，《陰那山志》的舊貌就更難辨認了。鍾東則根據廣東中山圖書館的《陰那山志》，參照程本，整理《陰那山志》的目錄，盡量恢復《陰那山志》的舊貌，並沒有自行增加新史料。因此，本文決定採用鍾本《陰那山志》。⁷

《陰那山志》最早的序言，為李士淳天啟元年辛酉(1621)的序言，但面世之後，就被不斷遞修增補，卷二有稱呼李士淳為「家太史」的李閻中於同治元年(1862)的〈跋〉，⁸ 緊接著的是光緒六年(1880)十二月的〈附記〉，是為全書有年份可稽的最晚的文字。⁹ 但之後，又生出為數四卷之多的內容，包括卷五有關康熙年間訴訟的文書。鍾東在《陰那山志》〈前言〉指出：該志「前後文字、版式、體例也甚不統一。……原刻卷次目錄，甚為凌亂」。¹⁰ 本文將指出，這種凌亂的、持續的增補，有其因地制宜的計算，目的是要把《陰那山志》作為保護田產的法律證據，準備隨時運用於未來可能出現的訴訟之中。

在介紹陰那山靈光寺田產訴訟的具體過程之前，有必要介紹靈光寺佛寺結構、田產來源，否則難以理解訴訟雙方的爭執。讓我們先看兩段史料。

第一段史料是康熙《程鄉縣志》的記載，它大致讓我們明白陰那山三座佛寺

⁵ 鍾東點校，《陰那山志》(嶺南名寺志系列·古志六，北京：中華書局，2006)。以下簡稱鍾本《陰那山志》。

⁶ 程志遠增訂，《陰那山志》(廣州：廣東旅遊出版社，1994)。

⁷ 不過，鍾本《陰那山志》往往自行增添原書所無的類目章節標題，幸好都在注釋內注明為原書所無。

⁸ 李士淳序言，載鍾本《陰那山志》，卷首，頁 1a-2a；李閻中跋，載卷 2，頁 55a-56b。李閻中在〈陰那山圖後紀〉中，稱呼李士淳為「二何家太史」，見卷首 1a，按：卷首頁數並非連貫，而〈陰那山圖後紀〉為原書所無，乃係鍾本加入之標題，見〈校記〉，頁 151a。

⁹ 鍾本《陰那山志》，卷 2，頁 56b-57a。

¹⁰ 鍾本《陰那山志》，前言，頁 1b、2a。

的結構：

陰那教寺，在縣東溪南都陰那山，有寺三。慚愧祖師趺化於此，鄉人即庵祀之。其一為靈光寺，元時皇慶二年(1313)，僧無濟始建，名聖壽寺。明洪武間(1368-1398)，僧翠峰重建，改今名。成化間(1465-1487)，僧德聖又重修，有田地七十二畝，見存當差。國朝順治十年(1653)，知縣葛三陽捐貲一百、太史李士淳捐貲二百，倡首重修。其一由十八折而上，為聖壽寺，□在山巔。邑人李尚理詩有「江南山色醉雙眸」句，言其高也。舊名祖殿，師塔在焉，歲久寺圯，邑賓葉俊華重建，置田十一餘畝。俊華遠孫葉著，中崇禎丙子(1636)科解額，嘗肄業於此，雋後復建下堂，改今名。邑庠楊元昊亦讀書於此，感師靈異，置田租三斗五升。知縣陳燕翼禱雨輒應，置田二石，額於寺，曰「性空真水」。康熙十一年(1672)，俊華裔孫葉夢鵬倡族鵬起等重修，延僧寂悟住持焉。其一由左山少折而東二里許，為仙遇湖，景致幽邃，別一洞天，原名西竺寺，前有湖，光如鏡，師嘗曳杖履于此，故又名仙馭湖。李尚理詩：「漫云仙馭此翱翔」，俗訛以「馭」為「遇」。成化間，殿宇頽廢，僧戒清、戒通，將己私業變三百金重建。康熙十二年(1673)，僧明欽復募眾重建，知縣王仕雲捐俸助成之。(公元紀年、劃綫、斜體為筆者所加)¹¹

可見，作為慚愧祖師修禪坐化之所的陰那山，有三座佛寺。其中靈光寺為主寺，在山腰；聖壽寺在山頂，原本是「師塔」。佛塔位於主殿之後，是佛教建築的通

¹¹康熙《程鄉縣志》，卷 8，頁 4a-b，總頁 513。按：程志遠《陰那山志》頁 7 收錄此段，惟錯漏甚多，且係程志遠添入，非原志所有。

行格局。在靠近陰那山西南山麓處，還有一座西竺寺。這三座佛寺，雖然都供奉慚愧祖師，可視為一體，但其實各有地方勢要及地方官員作為其靠山，也就意味着這三座佛寺各代表着當地的不同利益。¹² 李士淳及程鄉縣知縣葛三陽於順治十年合力重修靈光寺，因此，靈光寺可說代表著李氏宗族的利益。聖壽寺則似乎從明末到清初都與葉氏宗族有關：重建該塔的是葉俊華，而葉俊華後人、於崇禎九年(1636)中舉的葉著，擴建了聖壽寺。至康熙十一年(1672)，葉俊華後人葉夢鵬與族人再度重修聖壽寺。因此，聖壽寺可以說代表著葉氏宗族的利益。至於西竺寺，《陰那山志》力圖予人的印象，是與李士淳家族有關，但縣志僅說是西竺寺僧人明欽於康熙十二年籌款重建，得到當時縣令王仕雲的支持，至於得到程鄉縣什麼人的捐款重建、因此體現什麼人的利益，並不清楚。¹³

第二段史料來自《陰那山志》卷2的〈陰那山靈光寺山場田地碑記〉，它大致讓我們明白康熙年間靈光寺田產結構及訴訟的背景：

慚愧祖師為陰那開山第一祖。當其結茅林麓，托鉢跣足，此外一無所需。迨唐咸通年間，師寂後徵異，眾因刻像建寺，額曰「靈光」。……明高皇帝建元十八年(1385)，寺僧德堅募金重修。適梅御史巡潮，舟歷蓬辣灘，幾沉，師現身立起之。御史訪知師靈，因命官督造，以竣厥功。眎(視)前更覺莊嚴壯麗。於是四方檀信，布金施粟，以求福田利益，蓋比比然也。……順治十年(1653)，邑侯葛公屬余弁冊勸募，……茲主持僧正瑛，復以瞻田勒碑為請。因總計前後善信捨入本寺山基田畝若干，載糧米若干，歲入租穀若干，壽之貞珉，以貽來許，……時康熙四年歲次乙巳(1665)，仲春穀旦，太史氏李士淳謹撰。

計開靈光寺原施山場及新舊田塘屋地產業糧米開列於後：

¹² 我 2009 年舊作頁 13 說：「換言之，這些佛寺是地方勢力的財產管理機構」。這一論點跳躍太快。

¹³ 我 2009 年舊作過分相信《陰那山志》，在該文頁 13-14，我根據《陰那山志》內的材料，認為西竺寺也與李士淳家族有關，現在想來，應該解讀史料不夠細緻。李士淳兒子李梗撰寫〈重修仙遇湖序〉，稱仙遇湖為「山中精舍」之一，自己「幼嘗讀書其處」，但沒有隻字提及西竺寺。見鍾本《陰那山志》，卷 1，頁 16b-17b，引文見頁 16b、17a。

一、山主檀越承事郎陳諱洪讓，喜捨陰那山場一洞，上自五指坑源，下至梅子峰口，四面流水分界。原帶夏米貳斗捌升捌合壹勺(0.2881 石)，前朝混造，更變正耗，例照秋糧一體供輸。又施田租壹拾貳石，帶官民米貳石伍斗伍升柒合肆勺陸抄(2.55746 石)，秋糧夏稅共計貳石捌斗肆升五合五勺陸抄(0.2881+2.55746=2.84556 石)，送入靈光，供奉祖師香燈飯僧之費。後因奉旨變賣田產，資給遼務，蒙山主及十方檀信捐資買回。檀越陳洪讓原施田租，復捨本寺，於下但有買回原田，租糧盡係山主陳洪氏所捨山場田地壹拾貳石數內之租糧也。

.....(以下為 10 筆田產記錄，最早為正德 7 年[1512]，最晚為崇禎 14 年[1641]。)

大清順治玖年，蒙太史李老爺委僧正瑛字石雲頂界住持。承接之後，叨檀喜捨及募續置田租等業，.....號段糧米開明於左：

.....(以下為 16 筆田產記錄，最早為順治 11 年[1654]，最晚為康熙 21 年[1682]) (公元紀年、劃綫、斜體為筆者所加)¹⁴

為何不避煩冗抄錄這一大段文字？因為其中有許多問題有待解釋澄清，這解釋澄清過程，有助於我們理解靈光寺田產訴訟。我們應該注意以下三點。

第一點，李士淳這篇寫於康熙四年(1665)的碑記，並不見於其傳世文集《三柏軒文集》，¹⁵ 而李士淳正好逝世於康熙四年。¹⁶ 我們當然不能因此一口咬定是《陰那山志》造假，但至少可以打上一個問號。至於碑記內所謂明洪武年間梅姓

¹⁴ 鍾本《陰那山志》，卷 2，頁 37a-42b。

¹⁵ 李士淳著，李大中編，《三柏軒集文存》(封面題《李二何先生文存》，汕頭：志成公司，1933)，藏香港大學圖書館特藏部，編號：杜 823 151。據李大中此書例言，「《三柏軒集》為先生自作之文，《古今文範》為先生評選之文」(原書無頁碼)。李大中編纂此書時，似乎打算分成上下編，但結果只有上編而無下編。

¹⁶ 李士淳及其松口鎮李氏宗族的史料，見諸兩種族譜，均以手寫小字於第一面題上「松口李氏族譜」六字，均為無頁碼之抄本。為行文方便，本文將這兩種李氏族譜分別稱為《松口李氏族譜》甲本、《松口李氏族譜》乙本。李士淳逝世於康熙四年(1665)，見《松口李氏族譜》乙本，第 14 面(原書無頁碼)。感謝嘉應學院客家研究所蕭文評教授賜示影印本。

御史巡察潮州、遇險於蓬辣灘頭、得慚愧祖師顯靈救護的傳說，則為程鄉縣當地根深蒂固的「集體記憶」，是靈光寺立足程鄉縣社會的重要基石之一。

第二點，靈光寺住持正瑛緊接着李士淳碑記的田產記錄第一筆，提及陰那山靈光寺田產最早的施主是陳洪讓。但是，李士淳的碑記卻隻字不提陳洪讓其人其事。陳洪讓有三重身份：山主、檀越、承事郎。「檀越」容易理解，凡捐贈財物予佛寺者，都是「檀越」；「承事郎」也不費解，在明代指文官正七品官的散階，¹⁷ 換言之這位「陳洪讓」曾經擔任正七品官。但是，我遍查康熙《程鄉縣志》和順治《潮州府志》，¹⁸ 都找不到任何「陳洪讓」。也許，「陳洪讓」並非一位姓陳名洪讓的人，上述引文「山主陳洪氏」這五個字，似乎暗示這山主可能是兩個人或者兩個姓氏集團：陳氏和洪氏。無論「陳洪讓」的身份多麼神秘，訴訟雙方和官府對於靈光寺田產最早由「陳洪讓」捐贈這一點，都完全接受。

第三點，「陳洪讓」捐給靈光寺的這些田產，曾經「奉旨變賣田產，資給遼務」，¹⁹ 後來又被「陳洪讓」及其他善信買回，究竟所指為何？這句話沒有明確的時間，很容易使人以為是從萬曆末年開始明朝應付東北滿清威脅而採取的緊急財稅政策。但是，在這段文字之後的田產記錄，其中一筆說：「後因奉旨賣訖，伊孫黃一乾、黃一坤等捐資贖回前田，於萬曆拾壹年施轉，以繼先志」，²⁰ 則可見陳洪讓田產被奉旨變賣一事，應該發生於萬曆十一年(1583)前，當時明朝的遼東一帶，尚無重大危機和挑戰，「資給遼務」云云，應該是後人誤會。更加有可能的，應該是萬曆七年(1579)「詔毀天下書院」之舉。²¹ 一般認為，這是當時大權獨攬的張居正打擊在野反對勢力的措施。靈光寺雖非書院，但佛寺作為文人講會結社之所，往往有之，又或者當地有人別有用心地利用這個政策打擊靈光寺，於是靈光寺田產就被「奉旨變賣」，並隨着張居正萬曆十年(1582)逝世而得以由陳洪讓及各方善信重新收購回來。

結合以上三點的解釋和澄清，我們可以作一小結：靈光寺田產由陳洪讓捐助這個傳說，雖然缺乏李士淳碑記和地方志的印證，但卻將成為訴訟雙方和官府都

¹⁷ 《明史》，卷 72〈職官志一·吏部〉，頁 1736。

¹⁸ 吳穎編纂，《潮州府志》，順治 18 年(1661)刻本，載《北京圖書館古籍珍本叢刊》(北京：書目文獻出版社，1988)，第 40 冊。

¹⁹ 鍾本《陰那山志》，卷 2，頁 38a。

²⁰ 鍾本《陰那山志》，卷 2，頁 38b-39a。

²¹ 《明史》，卷 20〈神宗本紀〉，頁 266。

廣為接受的前提。靈光寺的寺產，似乎因為萬曆七年「詔毀天下書院」而遭受無妄之災，但卻因為張居正當權時代的結束而得以恢復。

北齊顏之推《顏氏家訓》〈勉學〉篇有謂：「博士買驢，書券三紙，未有驢字」。²² 本文至此已逾六千字，尚未進入訴訟過程，似難逃顏氏之譏矣。不過，由於案情奇特，不得不詳細介紹背景。我 2009 年著作在介紹訴訟過程之前，也花了九千多字交代背景資料，其中不少篇幅是介紹李士淳及其松口李氏宗族，卻未能清楚指出松口李氏宗族與靈光寺田產的關係。現在，我意識到，之所以講不清楚松口李氏宗族與靈光寺田產的關係，是因為《陰那山志》已經聲明：靈光寺田產原屬一位來歷不明的陳洪讓，因此在文字上就與李氏沒有關係。另外，明末清初顯赫一時的李士淳，已經在康熙四年逝世，距離訴訟發生的時間已經超過二十年，我應該強調的不是松口李氏家族顯赫的事實，而是它在這二十年間衰微的可能性。

以下，我將開始介紹訴訟的過程。我 2009 年舊作介紹訴訟過程時，已發現一個有趣的規律：程鄉縣衙門袒護靈光寺、惠潮道衙門敵視靈光寺，但沒有預先提出。茲預先提出，希望幫助讀者理解案情。另外，我 2009 年舊作還忽略了「大坪陳族」這條重大線索，²³ 因此無法清楚說明挑戰靈光寺的陳氏究竟位於何處。茲預告讀者：與靈光寺產生訴訟的陳思颺，來自大坪陳氏。有關大坪村、靈光寺及周邊村落位置，詳見圖三。

三、陰那山田產訴訟第一階段：靈光寺敗訴

李士淳逝世二十多年後，康熙二十六年(1687)九月二十六日(以下均為陰曆日期)，自稱「身屬僧佃」²⁴的丘毓萬向程鄉縣衙門遞狀，控告陳思颺等非法抽稅，正式掀起靈光寺一方與陳思颺一方的訴訟。丘毓萬控告陳思颺等兩項罪名。第一，他們「借檀越為名，沿山抽稅：凡民戶種畚，每把鋤頭現抽銀貳錢五分，八月秋成，另抽薯薑芋豆」，²⁵ 這種情況已經維持至少五年；第二，丘毓萬畏懼陳思颺，因此「概未種山，專務耕田」，²⁶ 但儘管如此，兩天前、二十四日，陳思颺等率領 38 人，將丘毓萬自己種植的、每顆價值百金的杉木砍走，理由是「燒柴食水，例納山稅」，²⁷ 丘毓萬的狀紙最後提到：「況陰那一洞山岡，原係前朝

²²顏之推撰、趙曦明注、廬文弼補，《顏氏家訓》，中國科學院圖書館藏民國十七年(1928)渭南嚴氏孝義家塾刻本，卷 3〈勉學篇第八〉，頁 11a，收入《續修四庫全書》(上海：上海古籍出版社，1995)，第 1121 冊，總頁 624。

²³ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 122a。

²⁴ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 122a。

²⁵ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 122a。

²⁶ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 122a。

²⁷ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 122a。

陳洪讓所施，與大坪陳族無干。洪讓苗裔，現住在縣，世系、族譜、寺碑確據」。²⁸ 從這一句看來，屬於大坪陳族的陳思颺，應該是自稱靈光寺田產捐助者陳洪讓的後裔，以此名義向丘毓萬等徵收山稅。而丘毓萬則指出：大坪陳族並非陳洪讓後人。

丘毓萬告狀三天之後，王姓知縣即王吉人發出告示，禁止「棍黨」「私抽山稅」，並威脅說，違者將「立斃杖下」。²⁹ 王吉人收到丘毓萬狀子時，應已獲知會調職，因為劉廣聰已於康熙二十六年(1687)八月收到繼任的命令，並於翌年四月正式抵程鄉縣蒞任。³⁰ 王吉人之調職，並非官場例行調遷，而似乎有一段特殊背景：這位在程鄉縣任職縣令達十年之久的縣令，「康熙二十六年，因修海防衙署，為民省費，與同治訐告去官，輿論惜之，通邑紳士里民樂助資斧，方得旋里」。³¹ 而靈光寺田產官司正好是在王、劉兩知縣交替期間打的，王吉人發出告諭之後，應該就已離開程鄉縣，所以〈全案〉的按語謂「縣主去任未審」。³²

陳思颺也不甘示弱，「於十月廿五日起潮州府正堂林告為攻佔屠門事，當批准在案」。³³ 由於〈全案〉並沒有收錄陳思颺的狀詞，所以除了「攻佔屠門」這如此嚇人的四字以外，我們對於陳思颺的理據，一無所知，但至少知道陳思颺的狀子是獲得府衙門受理的。

雙方的訴訟不僅繼續昇級，且越來越緊湊。十一月某日，代表靈光寺利益的丘毓萬與另一名「山佃」劉啟旭同日向惠潮道衙門告狀，指陳思颺「違禁私抽」。³⁴ 劉啟旭的狀子有「偽弁陳思颺、假秀陳志標」之語，可知陳思颺一方，除本人有武職之外，還包括擁有科舉功名的陳志標。同月二十二日，陳思颺也向惠潮道衙門告狀，指丘劉這一方「串勢強占糧山」，惜〈全案〉並未收錄其內容。³⁵ 翌日、二十三日，支持丘劉一方的李梗、丘崙泰、鄧之麟等「通邑紳衿」，向程鄉縣衙門告狀，其中有「欣逢仁慈下車」之語，³⁶ 可知這時劉廣聰接任程鄉縣知縣的消息已經傳出，但由於劉廣聰直至翌年四月才正式蒞任，就由潮陽縣嚴姓縣

²⁸ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 122a。

²⁹ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 122b。王吉人康熙十七年至二十七年(1678-1688)在任，見康熙《程鄉縣志》，卷 5，頁 7a，總頁 421。

³⁰ 樂鍾壺修，趙仁山等纂，《鄒平縣志》（《中國方志叢書·華北地方》第 358 號，臺北：成文出版社，1976 年據民國 3 年 [1914] 修、22 年 [1933] 刊本影印），卷 15，頁 69b，總頁 1410，以下簡稱民國《鄒平縣志》。

³¹ 康熙《程鄉縣志》，卷 5，頁 31b，總頁 433。

³² 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 122b。

³³ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 122b。

³⁴ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 123a-124a。

³⁵ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 124b。

³⁶ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 124a-b。鄧之麟與丘崙泰為分別於康熙八年(1669)及康熙二十年(1681)中舉，見康熙《程鄉縣志》，卷 6，頁 10b-11a，總頁 439-440。

丞代理程鄉縣知縣一職。該案也就由這位嚴姓縣丞審理。³⁷ 李榿等人的狀子遞進之後兩天，十一月二十五日，有「洪讓孫」陳再揚者，也告狀，狀子題為「冒族橫抽」，³⁸ 再根據李榿等人的狀子，知此陳再揚者，實為陳洪讓「裔孫」，³⁹ 且站在丘、劉這一方而非陳思颺這一方，則「冒族橫抽」的罪名，應是指陳思颺冒充陳洪讓宗族，非法抽稅。按理說，陳再揚這狀子應該很有利於丘、劉一方，但〈全案〉並沒有引述陳再揚的狀詞。另一方面，陳思颺又反控對方「強佔糧山、反誣屠陷全族」。⁴⁰ 康熙二十七年二月十四日，程鄉縣嚴姓縣丞「勘山」，即就訴訟進行實地調查，靈光寺住持正瑛(亦即石雲)這時才首次「出呈」。三月三日，劉啟旭與李榿等分別向正在潮州府辦公的惠潮道呂姓署理道員遞狀，呂姓署理道員則催促程鄉縣審理該案。⁴¹

代表靈光寺利益的丘、劉的狀詞與李榿的狀詞，都反對陳思颺抽稅，但也都確認陳洪讓捐田產予靈光寺一事。據李榿狀詞，原來，在明朝，最早捐獻田產給靈光寺的，就是陳洪讓，他「將山場一洞，田租一十餘石，並帶官民夏米，施入寺內」。⁴² 同時，靈光寺也開始擴張，在成化年間形成靈光寺、聖壽寺、西竺寺「三寺鼎峙」的格局，但三寺「均奉(慚愧)祖師香火，均屬洪讓喜捨山場」。⁴³ 為了證明陳思颺非法抽稅，李榿強調，陰那山屬於官山，不應由百姓抽取山稅，而陳洪讓捐給靈光寺的田產，其「夏米」的稅額，早已由「住場坵」的稅戶交納：「況程邑通例，離田三丈，便屬官山，從無絕巘層巔，另抽山稅。況夏稅係住場坵納夏米，未聞山有帶糧之理」。⁴⁴ 劉啟旭的狀詞，也說「陰那一洞山崗，並田一十二石，原係前朝陳洪讓捨入靈光寺」，但更值得注意的，是指陳思颺等「鑿抹碑字，冒為糧山，沿山科抽薯蕷芋豆」這一句。⁴⁵ 靈光寺將田產資料刻於碑上，這本來是尋常不過的做法，而陳思颺為方便抽稅，刻意鑿抹碑文，破壞不利自己的證據，似亦合乎邏輯之一步，且要靠陳思颺對手的材料，來核實對於陳思颺的指控，似也不容易。但幸好〈全案〉有其他材料，透露了事情的另一面。

也許在惠潮道的催促下，程鄉縣嚴姓縣丞加緊審理，傳召陳思颺赴縣衙門受審，康熙二十七年四月四日，嚴姓縣丞發出「看語」即初審報告。〈全案〉稱，

³⁷ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 130a。

³⁸ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 124b。

³⁹ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 124b。

⁴⁰ 〈全案〉基本上是按時間順序排列，陳再揚狀告陳思颺「冒族橫抽」，事在「同月廿五日」即十一月二十五日，而陳思颺反控丘、劉一方「強占糧山」，則為「二十二日」，之後就是康熙二十七年二月十四日程鄉縣嚴姓縣丞的判決，因此，筆者假設陳思颺反控的日期是十二月二十二日或翌年一月二十二日。見鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 124b。

⁴¹ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 125a。

⁴² 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 124a。

⁴³ 李榿等人的狀詞，見鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 124a。

⁴⁴ 李榿等人的狀詞，鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 124b。

⁴⁵ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 123a。

這份「看語」是陳思颺「賂出」的，⁴⁶ 意思是陳思颺通過行賄，公佈嚴姓縣丞的「看語」，換言之，這份「看語」並無法律效力。真相如何，不得而知，但這份「看語」顯然不利靈光寺一方。而惠潮道呂姓署理道員的「審語」及宣判，也完全接受嚴姓縣丞「看語」的分析，茲將「看語」、「審語」，再結合四月二十七日李樞以年老不便出庭為由、委託姪孫李如璣向呂姓署理道員呈遞的呈詞，綜合敘述。

原來，訴訟的田產，陰那山西部盆地及山谷一帶，即「陰那山靈光寺下至梅子峰口，路徑六、七里，山主陳、李、葉各姓管業」。陳思颺抽取山稅，有「山米二斗二升一合，冊載萬二圖內」的賦稅登記作為法律依據，因此，陳思颺「招佃種畝，取稅完糧」，雖手段可能粗暴，但行為本身合法。⁴⁷ 劉啟旭等「皆陳思颺之佃戶也」，他們告陳思颺「違禁私抽」，是受到靈光寺住持正瑛即石雲、武生陳再揚(即上文提及、以陳洪讓後裔名義指控陳思颺「冒族橫抽」者)的教唆。正瑛及陳再揚為佔奪梅子峰等處，趁康熙七年(1669)重修靈光寺、「勒豎新碑」，即立一新碑，將陳洪讓捐給靈光寺田產的舊碑碑文刊刻到新碑上。此舉本來是重修工程的正常一步，但正瑛卻「將土名『梅子峰』鑄入碑內」，這就不是舊碑新刻而是篡改碑文，把梅子峰等原本不屬於陳洪讓捐給靈光寺的田產，也說成是陳洪讓所捐、靈光寺所有了。陳思颺察覺，本來打算告狀，但李樞居間調停，向陳思颺保證，說正瑛已將新碑的「梅子峰」三字鑿去，並已「登回本縣稟換前碑」。⁴⁸ 但李樞又說，陳思颺趁「甲寅變亂，寺僧避散」即康熙十三年(1678)劉進忠之亂期間，「假舉人字約」即偽造李樞授權文件，「將『梅子峰』字樣鑿滅」。⁴⁹ 但呂姓署理道員並不接受李樞的指控，而對靈光寺作出致命一擊：

⁴⁶ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 125a。

⁴⁷ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 125a-b。呂姓署理道員「審語」，對於陳思颺梅子峰田產的賦稅登記，形容得更為仔細：「有山米二斗二升一合，冊載萬二圖內里長張林仕班下」，見卷 6，頁 126b。

⁴⁸ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 126a-b。

⁴⁹ 李樞委託姪孫李如璣向呂姓署理道員呈遞的呈詞，載鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 126a。按鍾本《陰那山志》此處斷句有誤。「情因陳思颺與鄉民劉啟旭等訐告牽累，陰那山住持石雲又假描舉人字約鑿碑，計圖掩飾」，當為「情因陳思颺與鄉民劉啟旭等訐告，牽累陰那山住持石雲，又假描舉人字約鑿碑，計圖掩飾」之誤。至於潮州總兵劉進忠叛亂一事，發生於康熙十三年(1674)，這年也是三藩之亂爆發之年。兩年後，康熙十五年(1676)正月，劉進忠餘部突襲程鄉縣，攻破縣城。程鄉縣衙門的庫吏黃夢奎趁亂放火搶劫，縣衙門的庫房乃至內外建築都被焚燬。見康熙《程鄉縣志》，卷 8，頁 14a-b，總頁 518；乾隆《嘉應州志》，卷 8，頁 15a，總頁 377。可以想見，這場動亂及火災必定導致程鄉縣田產登記出現真空。

揆此，則碑石之鑿去「梅子峰」數字，是僧石雲自願鑿去，而非思颺之盜

鑿也明矣。揆此，則梅子峰一隅之山岡，是思颺之業，而非洪讓原施之業

也明矣。⁵⁰

於是，康熙二十七年五月十三日，呂姓署理道員判決如下：以杖刑懲處陳再揚、石雲即正瑛、劉啟旭三人，其餘姑免追究。⁵¹ 歷時八個月的訴訟告一段落，靈光寺一方敗訴。

四、陰那山田產訴訟第二階段：靈光寺反敗為勝

在敘述訴訟的第二階段前，有必要分析雙方的訴訟策略。根據第一階段官方的判詞，陳思颺已向官府登記了梅子峰一帶土地，又「招佃種畚，取稅完糧」，其實是梅子峰的地主，所以陳思颺向劉啟旭等按鋤頭徵收費用、並徵取部份農作物及木料，實際上是收租而非收稅。收租很難構成罪名，不過，「收稅」卻非平民百姓應有的行為，所以靈光寺一方才以「橫抽」的罪名控告陳思颺。靈光寺則改易陳洪讓捐贈靈光寺田產碑文，添入「梅子峰」三字，作為該寺擁有梅子峰田產的證據。

康熙二十七年(1688)九月三日，劉啟旭等向廣東巡撫衙門告狀，意味著靈光寺一方上訴。劉啟旭狀詞透露出新資料：陳思颺原來於康熙二十一年(1682)「交官結蠹，詭買印票」，「又查印照內夏米二斗二升，共開別處山岡一十餘處，並無魚鱗冊底，委係影佔」，顯然，這就是上文提及陳思颺在梅子峰一帶田產「山米二斗二升一合，冊載萬二圖內」的賦稅登記，但靈光寺指陳思颺這份田產賦稅登記是虛假的，因為並沒有「魚鱗冊底」的登記作為配合。廣東巡撫衙門謂該案本應由惠潮道衙門審理，但因惠潮道道員出差京城，由呂姓署理道員審理，「以致朦朧」，如今惠潮道道員「業已自京回任」，命令惠潮道道員將此案「覆審定奪」，遂掀起第二階段的訴訟。⁵²

剛好一個月後，十月三日，劉啟旭向「業已自京回任」的梁姓惠潮道道員遞狀，梁姓道員命令程鄉縣「確勘解報，速速」！但之後的進度一點也不迅速，原因是梁姓道員很快陞官調職，而繼任程鄉縣知縣的劉廣聰於本年四月才正式上

⁵⁰ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 126b。筆者標點與鍾本有異。

⁵¹ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 126b。

⁵² 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 127a-128b。

任，也許事緒繁多，並未執行道臺衙門的命令，到梅子峰一帶進行實地調查，故〈全案〉稱：「縣主未勘」。康熙二十八年十一月，惠潮道一職，由史姓官員繼任。靈光寺僧代燧再次告狀，史姓道員與之前梁姓道員一樣，把案子發回程鄉縣。⁵³又過了將近一年，康熙二十九年(1690)九月二十三日，程鄉縣知縣劉廣聰才終於完成實地調查，呈交「看語」即覆審報告。

劉廣聰的看語，完全是一篇翻案文章。他說嚴姓縣丞「勘審未確，混行詳報」，而呂姓署理道員也「止據縣詳，斷結在案」，致使劉啟旭等「前冤未雪」。這就等於否定了第一階段的審判結果。劉廣聰又說，陰那山的稻田，「十有八九」都是靈光寺的寺田，並不存在陳思颺的田產。陳思颺之祖陳待聘，曾向西竺寺捐獻田產，「但所捨之田係西竺寺，而非靈光寺。西竺與靈光，各為一寺」，意即陳思颺並不能因此宣稱佔有靈光寺寺田。另外，陳思颺宣稱擁有「山糧一十畝零」，意即在陰那山擁有十畝多已經登記、需要交稅的土地，但劉廣聰查核「三戶清冊」，發現陳思颺原來是用陳乾友的戶名來登記這「山糧一十畝零」的稅地的。劉廣聰認為，陳乾友名下「只有山糧一錢九分、米一斗二升」，但卻開載牽牛坡等十處山地，所須繳納的稅額太小，而所登記的山地太多，根本不合理，完全是在康熙廿一年(1682)「借先年遭亂、鱗冊喪廢為名，詭取印照」的結果，也就是說，陳思颺以陳乾友戶名登記的梅子峰一帶田產，也不被劉廣聰所承認了。但是，本文須提醒讀者：陳洪讓捐給靈光寺的田產，「上至五指坑源，下至梅子峰口」，也就是本文圖三從西北到西南的整片山谷及盆地，其稅糧也不過「夏米二斗八升八合一勺」，⁵⁴這又合理不合理？無論如何，劉廣聰看語還詳細揭露陳思颺透過陳士選以三兩白銀行賄之舉，並宣判：陳思颺干犯了「冒抽山稅」與「行賄」兩項罪名，應按不應為重律判處杖刑。⁵⁵

劉廣聰的覆審判決，雖然判靈光寺一方勝訴，但靈光寺等待勝利，尚需一段時間，原因是惠潮道衙門對於劉廣聰的判決有所保留。康熙二十九年(1690)十一月十一日，惠潮道史姓道員作出批示，同意劉廣聰的分析，謂陳思颺「借陳乾友戶內一錢九分之糧，包收十餘處之山岡，其為冒抽無疑」。但是，史姓道員指出，陳思颺祖父陳待聘曾把梅子峰一帶的田產捐予西竺寺，與陳洪讓捐給靈光寺的田產，「各有處所，不可謂陰那、梅子峰一帶盡係靈光寺山僧之業也」，要求「從公確覆」。⁵⁶翌年(1691)二月二十八日，劉廣聰呈交報告，謂西竺寺與梅子峰相距七、八里，陳思颺的祖先陳待聘即使真的曾經捐田予西竺寺，「其於梅子峰絕無

⁵³ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 128b-129b，史姓道員的命令是：「仰程鄉縣確勘報」，見頁 129b，疑為「確勘解報」之誤。

⁵⁴ 鍾本《陰那山志》，卷 2，頁 37b。

⁵⁵ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 129b-131a。又，「不應為重律」，指《大清律例·刑律·雜犯》內的〈不應為〉律：「凡不應得為而為之者，重，杖八十；輕，笞四十」。這條律文在清代司法制度中被廣泛運用，參見卜永堅，〈清代法律中的「不應為」律與雍正五年「奸頑佃戶」例〉，《中國文化研究所學報》，2001年，新第十期(總第 41 期)，頁 111-150。

⁵⁶ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 131a。

干涉」。必須指出，劉廣聰這個論證是相當勉強的，業主擁有的田產，不必鄰近於業主的居所，崇禎年間，位於程鄉縣東南角落的靈光寺，就已經擁有位於程鄉縣北面平遠縣的田產，⁵⁷ 隔縣尚可置業，怎能僅因西竺寺與梅子峰相距七、八里就說二者在田產方面「絕無干涉」？⁵⁸

無論如何，劉廣聰維持原判。但惠潮道史姓道員又提出新命令，他認為這場訴訟糾纏不清，原因是陰那山一帶田產「未自畫界，無從定議」，因此通過潮州府衙門，命令程鄉縣衙門的豐順巡檢司李洽，連同兩造，把陳洪讓捐給靈光寺的田產、以及陳思颺印照內的田產，各仔細丈量繪圖，各編一冊。史姓道員的命令很嚴格，要求「細繪弓形步口，四址界限」，「逐一押令勘繪」。⁵⁹ 細味史姓道員的命令，要求程鄉縣衙門為陳思颺的田產與靈光寺的田產各繪製一丈量登記冊，仍然是把陳思颺與靈光寺相提並論，有維護陳思颺之意。

潮州府衙門於康熙三十年(1691)六月三日向程鄉縣轉達該命令，21 天後，六月二十四日，程鄉縣衙門轄下的豐順巡檢司巡檢李洽，就完成了丈量繪圖工作，並呈交報告。當然，李洽既然是程鄉縣衙門內執行命令的小吏，這份報告所反映的，肯定仍然是程鄉縣知縣劉廣聰的立場。李洽報告謂，陳洪讓捐給靈光寺的田產，大抵位於靈光寺以北、由 17 座山峰環繞的盆地，「除李、葉二姓紳衿相參之田不開外」，合共 1,213 坵。⁶⁰ 留意，康熙二十七年嚴姓縣丞看語謂「山主陳、李、葉各姓管業」，而如今李洽報告只提及「李、葉二姓紳衿相參之田」，把陳氏踢出局外了。李洽已經把這盆地內的「樹木民房」繪畫成圖，又將「田租坵段」編製成冊。但是，李洽以技術理由拒絕執行史姓道員有關繪製「弓形步口」圖的命令：由於該處為山地，地形複雜，「難以弓步」，且時當農曆六月，「禾正熟在田，難以弓施」，此處歷來「以所下之種計租，以租定畝起糧，原未丈量」，亦即以種籽的多少來決定租額與稅額，⁶¹ 因此，李洽就在田產登記冊內的各個坵段上寫明有關租額。李洽以上的技術理由，可謂充份。但是，史姓道員要求為陳思颺九處田產另繪一冊，李洽以「起止界限有七八里之遙」，「若另繪圖，致難憲閱」這個技術理由拒絕執行，而徑自把陳思颺這九處田產也「一併附繪圖內」，則不不太令人信服。但這九處田產的「山峰田地數目」，李洽還是依足命令「造冊一本」。⁶²

⁵⁷ 鍾本《陰那山志》，卷 2，頁 39b。

⁵⁸ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 131b。

⁵⁹ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 132a。李洽於康熙二十八年至三十五年(1689-1696)間擔任程鄉縣豐順司巡檢，見乾隆《嘉應州志》，卷 4，頁 17a-b，總頁 279。

⁶⁰ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 132b。李洽謂：「東至五指峰，西至梅子峰，南至香爐峰，北至大坳頂」云云，應該是以東方為上方的描繪，參閱圖三。

⁶¹ 鍾本《陰那山志》卷 6 頁 132b。這種做法在華南相當普遍，廣州府新安縣乾隆四十二年(1787)的〈公立大溪山東西涌姜山主佃兩相和好永遠照納碑〉，就有「每斗種穀芽納租銀四錢」之例，見科大衛等編，《香港碑銘彙編》(香港：香港市政局，1986)，頁 43。該碑今仍存於香港東涌之侯王廟內。

⁶² 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 133a。

更關鍵的是陳思颺祖先陳待聘捐田予西竺寺一事，原來，陳思颺引述陳珮所撰碑文，稱「余祖遺下山地，兄陳瑁等不吝其地，同心捨入西竺，永為香燈」，陳珮、陳待聘、陳思颺有何關係？李洽報告並沒有交代，想來陳珮應該是陳思颺祖先，否則陳思颺不會引述之以證明自己有權佔有西竺寺田產。李洽則引述西竺寺僧人真信提供的兩張碑文，謂西竺寺是「明季辛亥年」由僧人戒通、戒清建立，並沒有化緣，而陳待聘之名也不見於碑上，由此反駁陳待聘捐田予西竺寺之說。總之，「待聘所捨之據，無有考究也」，⁶³ 程鄉縣衙門敵視陳思颺的立場，始終不變。

大約就在這個時候，劉廣聰向上司申請離職回鄉，照顧母親，得到批准，「解綬而歸」、「奉旨養親」，⁶⁴ 同年，曹延懿接任。⁶⁵ 曹之接任，必定不遲於康熙三十年(1691)十二月，因為下文該年十二月十七日程鄉縣衙門的判決，就是以他名義發出的。劉廣聰於靈光寺田產訴訟的關鍵一年內離職，是否有甚麼隱情呢？但目前能找到的史料，僅有劉廣聰家鄉山東鄒平縣方志裡的傳記，大略謂劉廣聰極為孝順，以「家無次丁，例宜終養」為由，向上司申請回鄉照顧母親，得到批准，並無任何與靈光寺田產訴訟有關的蛛絲馬跡。⁶⁶

康熙三十年九月九日，潮州府衙門向也作出判決，立場與程鄉縣一致，認為陳思颺犯了「強占官民山場」及「行賄」兩條罪，鑒於「強占官民山場」罪行較重，就以此罪處罰陳思颺，行賄罪可以不予計較，但陳思颺砍去的木料，仍須交還。⁶⁷ 史姓道員雖也同意：「民田既捨為僧業，即係寺僧納糧，何得復聽施主抽稅？」但是，史姓道員仍然下達兩項命令，第一，陳思颺既然以陳乾友名義登記了稅地，這些稅地「有無在陰那洞、梅子峰等處，務細勘查明」；第二，陳思颺歷年「冒抽山稅」，究竟金額多少，程鄉縣必須查明，這樣，「方服其心」。⁶⁸

惠潮道的這兩項命令，於十月九日由潮州府轉達程鄉縣。十二月十七日，繼劉廣聰而任程鄉縣知縣的曹延懿向潮州府呈交報告，按照官方文牘格式，首先撮要引述前項公文內容，竟把惠潮道「方服其心」四字改成「以服奸心」四字，可說有意扭曲上級文件精神。惠潮道第一項命令，要求再次調查陳思颺稅地之所在。曹延懿謂經過實地調查，發現陳思颺稅地位於梅子峰者「僅有四畝」，並非報稱的十畝，有查黃冊，則陳思颺寄於「萬二圖張林仕甲丁」名下的山地 11 畝，

⁶³ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 133a-b。

⁶⁴ 康熙《程鄉縣志》，卷首李鍾麟序，頁 5b；卷 5，頁 7a，總頁 351、421。

⁶⁵ 乾隆《嘉應州志》，卷 4，頁 15b，總頁 278。

⁶⁶ 民國《鄒平縣志》，卷 15，頁 69b-70b，總頁 1410-2，引文載總頁 1411。又，劉廣聰似與廣東有緣，於母親過世之後，「起補南海縣知縣」，見總頁 1411。

⁶⁷ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 134a。

⁶⁸ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 134b。

「亦無住址」。至於陳思颺於康熙二十一年登記田產的印照所開載的土地，「俱在梅子峰外」，足夠繳納「二斗二升一合」的糧稅有餘，完全不必再牽涉梅子峰的土地。惠潮道第二項命令，要求調查陳思颺歷年合共非法收稅的金額。曹延懿謂，康熙二十年至二十六年(1681-7)這七年間，陳思颺分別向劉啟旭一家及丘毓萬一家非法收稅 7 兩及 1.75 兩，又砍去大木 78 根，總值 4.68 兩，三項非法徵收所得，合共 13.4 兩。⁶⁹

康熙三十一年(1692)三月三十日，潮州府向惠潮道轉達了程鄉縣的報告。五月二十七日，惠潮道史姓道員終於接受了潮州府、程鄉縣的意見，判陳思颺「冒抽靈光寺之山稅」，罪名成立，但「事在二十六年赦前，免其究擬」，陳思颺既不必受杖也不必繳錢，可見史姓道員對於潮州府、程鄉縣衙門的不信任、對於陳思颺的維護，是一以貫之的。程鄉縣衙門又將靈光寺的「田地山峰冊」製成兩本，一存官府，一交予靈光寺僧正瑛，「其冊內開載前陳洪讓所施陰那山、梅子峰等田地、山峰、樹木、著領僧正瑛管正收稅完課，永供佛前香燈」。兩天之後，五月二十九日，程鄉縣衙門正式發出這份得到惠潮道及潮州府衙門批准的判決，換言之，康熙二十六年九月開始的訴訟，至康熙三十一年五月二十九日，靈光寺先敗後勝，終於結束。之後的餘緒，對於靈光寺而言只是鞏固勝利成果而已。康熙三十二年(1693)八月二十六日，潮州府又批准靈光寺將該判決書勒石刊碑，樹立與寺門前，並要求把碑文拓片，收藏於程鄉縣衙門。⁷⁰ 十月二十日，靈光寺僧正瑛編集〈陳姓冒占佛山審案〉亦即收錄於《陰那山志》卷六的〈審斷佛山全案〉，並加前言。⁷¹

五、總結

陰那山靈光寺的田產訴訟，算是敘述完畢了，我們能夠看出什麼呢？與自己 2009 年舊作相比，我從《陰那山志》中發現了陳思颺來自大坪陳族這一重大線索。在本年 6 月 7 日梅州考察期間，得蒙嘉應學院客家研究所蕭文評教授的指引，我走訪了大坪村，並且在該村陳氏祠堂---陳屋---內發現刻在牆壁上的〈太平開基宗譜序〉，《陰那山志》提及的陳思颺「祖陳待聘」，⁷² 赫然在目！該碑刻於 1993 年，文字力圖突顯古文氣息，但恐怕是今人所為，雖然如此，應該是有古舊譜牒作為根據的，茲摘錄如下：

⁶⁹ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 134b-135a。

⁷⁰ 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 136b-137b。

⁷¹ 該前言撰寫之日期，見鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 121b。

⁷² 鍾本《陰那山志》，卷 6，頁 130a。

.....若吾祖居士諱百三公，在宋季由閩來于廣東梅州，距城二十里白土堡鐵爐潭為爐商。因爐商所係，遂留家於茲土，生一子，諱居簡公，處士。居簡公生一子，諱福海公，恩賜大夫，又遷居於金盤堡、塔沙埧，亦生一子，諱待聘公，恩榮冠帶，亦為爐商。始遷居於雁洋堡太平鄉，承糧山數處，創建三祠，又捐囊金於陰那山，開闢二圳。一圳從陰那山之右半嶺至南福村，溉田租壹百餘石；一圳從陰那山之左、梅子峰至太平，溉田租亦百餘石。而四世待聘公，係太平開基祖也，壽臻耄六，鄉鄰以齒德重之。生四子，長諱瑁公，二諱璽公，三諱珮公，四諱珀公，俱邑庠。珀公後裔聞徙江西，而四世待聘公，遂將所創三祠，命分長二三子，各居一祠，而為小宗祠。.....⁷³

據此可知，大坪陳氏的開基祖就是陳待聘，他定居於大坪即雁洋堡太平鄉，向官府登記了數處山地，又在陰那山開闢兩套灌溉系統(二圳)，其灌溉範圍包括南福村和梅子峰，正好就是靈光寺田產所在，梅子峰尤其是田產訴訟地點之一。向官府註冊山地，又開闢水利，正符合上述訴訟內容所謂按鋤頭徵收費用、糾眾入山、逼寫租約的條件。陳待聘的四個兒子都能進入縣學，顯示這個家族已經開始從冶鐵商人轉型為地主，並且開始擁有科舉功名，累積文化資本了。

不無遺憾的是，我雖然在大坪村找到陳待聘這個名字，卻找不到陳思颺這個名字，當地村民說，的確有一本古老的族譜，但不知道存放在何人手上。單憑《陰那山志》說陳待聘是陳思颺的「祖」這一點，就推斷說陳思颺就是陳待聘的孫子，恐怕有點冒險。

但是，在缺乏進一步證據的話，假設陳思颺就是陳待聘的孫子，則大坪陳氏日益壯大之際，靈光寺舊有的靠山松口李氏宗族日漸衰微，李士淳逝世於康熙四年。到了康熙十五至十七年(1676-78)期間，程鄉縣更受到劉進忠之亂的波及，

⁷³ 據 2014 年 6 月 7 日在大坪村陳屋祠堂內拍攝照片整理。

縣衙被毀，縣城被佔，需要出動官兵才把縣城收復。⁷⁴ 劉進忠之亂，可以說是《陰那山志》頻頻提及的「甲寅變亂」⁷⁵即康熙十三年(1674)三藩之亂這個主旋律的小插曲，《陰那山志》說陳思颺在三藩之亂爆發後「領劄招兵，鑿滅寺碑，票取山物，答應兵需，吞佔入隙」云云，⁷⁶ 是否「鑿滅寺碑」不得而知，但以陳思颺為首的大坪陳氏，在三藩之亂期間響應官府的軍事動員，因而進一步壯大力量，是很順理成章的。這一切，都意味着大坪陳氏在地緣上、在人力物力上，的確具備了對外擴張、挑戰靈光寺的條件。

無論如何，靈光寺與陳思颺的田產訴訟，其是非曲直，對於本文而言，並不重要。重要的是訴訟過程所反映出的十七世紀程鄉縣社會。松口李氏是靈光寺的靠山，但靈光寺主要捐助人為陳洪讓這樣一種傳說，卻又在當地根深蒂固。究竟這意味着什麼？是否意味着松口李氏把田產轉移到靈光寺、而又維持陳洪讓這樣一塊與李氏沒有關係的牌子，以便逃避稅賦？可是，從上文可見，田地稅賦本來就微不足道，而且，誰向官府交稅，誰就是此地業主，這是官府一貫政策，正如惠潮道史姓道員所說：「民田既捨為僧業，即係寺僧納糧，何得復聽施主抽稅？」⁷⁷ 因此，在這種土地登記制度下，百姓應該是踴躍急公、樂於登記土地才是。大概正是出於這個原因，所以陳思颺才努力爭取自己作為陳洪讓後裔的身份，試圖佔有靈光寺田產。其佔有之法，並不是直接向佃農收租，而是通過繳稅的名義向佃農徵收費用。

最後，這宗訴訟固然是法律的操作過程，但也是地方社會與王朝國家整合的過程。康熙二十五年(1686)三月，清聖祖下令編纂《一統志》，⁷⁸ 引發全國各級地方政府州縣衙門編纂地方志的熱潮。劉廣聰康熙二十九年(1690)「仲秋」為其康熙《程鄉縣志》寫序，第一句就提及此事。如果我們不知道這宗訴訟，大概也想不到有何其他原因促成康熙《程鄉縣志》的面世。但是，程鄉縣衙門奉惠潮道史姓道員之命，委派豐順司巡檢李洽全面調查陰那山靈光寺及陳思颺名下的田產，正是在康熙三十年的六月。潮州府知府李鍾麟則於同年七月為康熙《程鄉縣志》寫序，正式刊行康熙《程鄉縣志》。這兩件事的時間何其接近！雖說序言是最後才添加上去的，全書內容似乎應該早於康熙二十九年劉廣聰撰寫序言之前就已定型，但從《陰那山志》的編纂，我們就知道，這類地方歷史的編纂，總可以「及時」地「更新」。所以，康熙《程鄉縣志》的刊行，除了奉旨行事之外，也一定反映程鄉縣社會的動態。

⁷⁴ 參見康熙《程鄉縣志》，卷2，頁3a，總頁380；卷8，頁14a-14b，總頁518。

⁷⁵ 鍾本《陰那山志》，卷6，頁126a、127b。

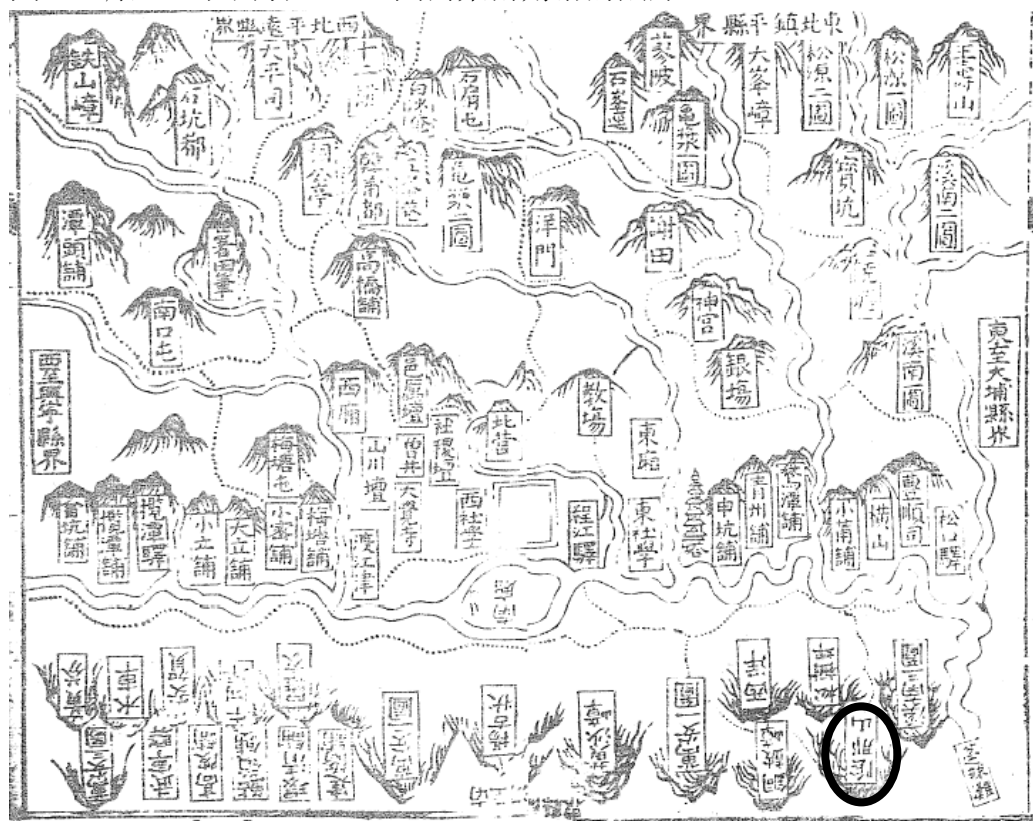
⁷⁶ 鍾本《陰那山志》，卷6，頁127b。

⁷⁷ 鍾本《陰那山志》，卷6，頁134b。

⁷⁸ 《清史稿》，卷7，總頁219。

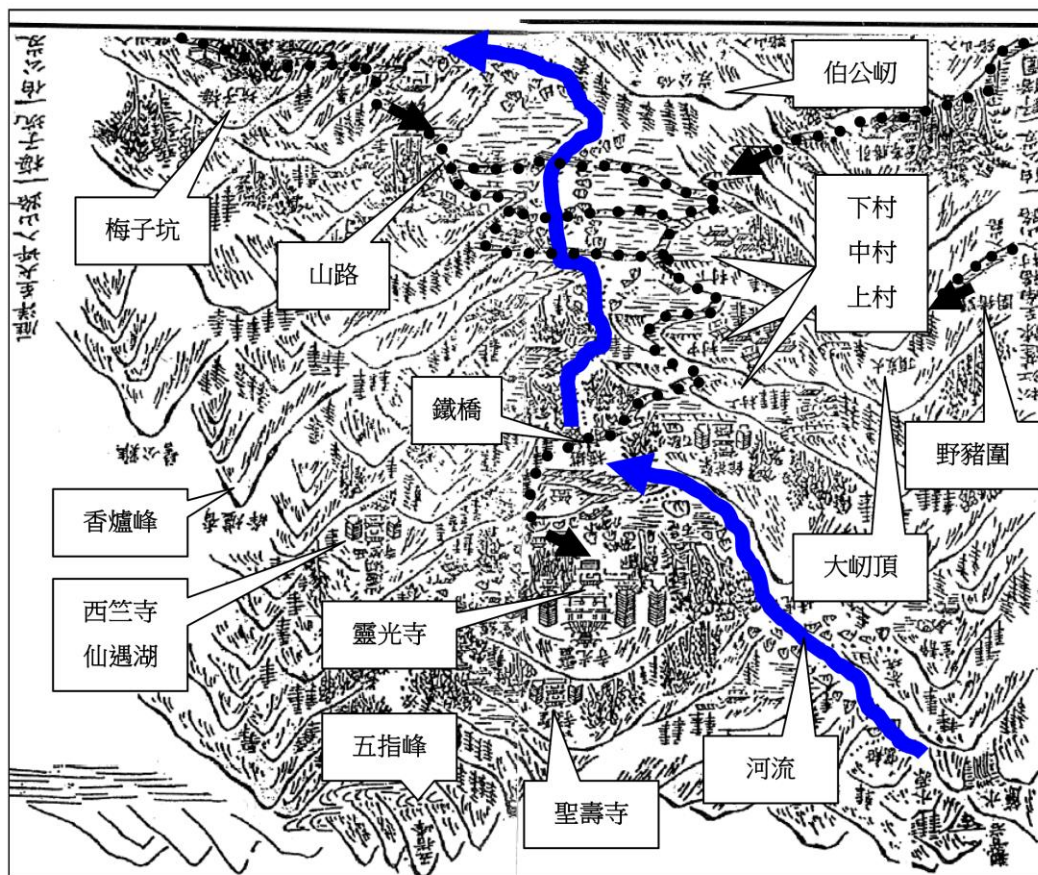
在這場陰那山田產的訴訟中，田產的登記、康熙《程鄉縣志》的刊行、《陰那山志》的不斷增修，可謂互為因果，反映出地方社會的各種勢力如士紳如李榘等、宗族如陳思颺等、佛寺如靈光寺等，利用訴訟，競相援引王朝國家的力量，編造或者毀滅證據(例如田產碑文)，打擊對手，建立自己對於田產的控制。而王朝國家的基層政府程鄉縣衙門，盡管其田土登記極為混亂、雖然其行政建制及司法機制極為脆弱，但也半推半就地擴大其管治範圍，增強其統治的合法性，並且加強了對於程鄉縣地方社會的整合。

圖一、康熙《程鄉縣志》地圖內東南角落的陰那山：79



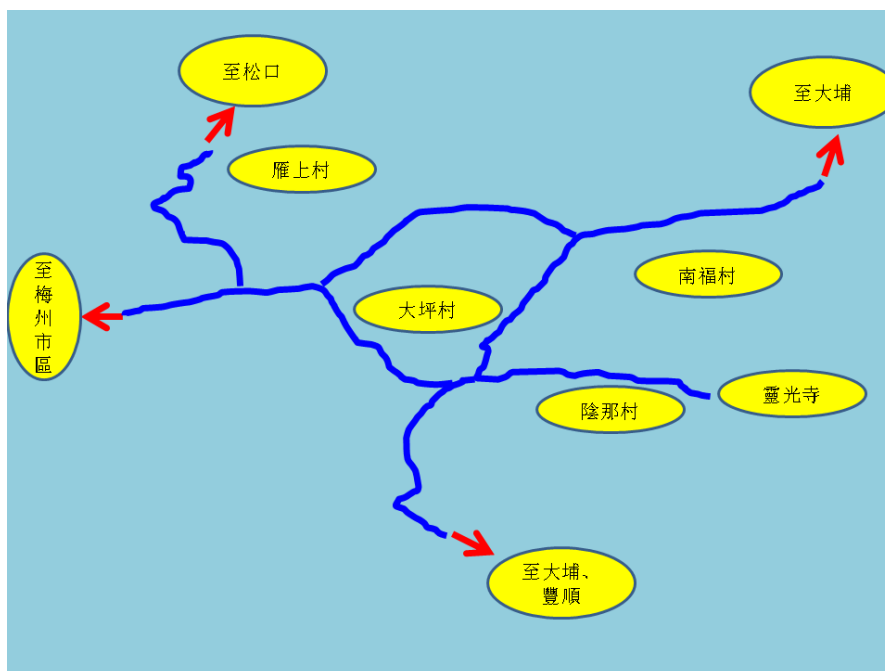
⁷⁹康熙《程鄉縣志》，卷首〈程鄉縣圖景〉，總頁 360。

圖二、《陰那山志》內的〈新增陰那山全圖〉⁸⁰ 按：陰那山東麓接蓬辣灘，而該圖左下角稱「松江、蓬辣至南福村入山路」，可知此圖上南下北，因此本文反轉該圖，並標明有關地點、河流、山路：



⁸⁰鍾本《陰那山志》，卷首。

圖三、大坪村、靈光寺位置圖



資料來源：據 2014 年 6 月 7 日在陰那山靈光寺周邊村落之旅遊圖整理，藍色線為公路。

隘口与山区开发

——以湖南永明县为例

吴滔

地处湖南省南部的永明县（今江永县），自宋明以来逐渐成为一个“典型”的瑶族聚居区。洪武末年，明王朝在该县南部增设桃川、枇杷二守御千户所。¹卫所军屯在“抛荒田”和“绝户田”上进行，从而引致卫所与州县之间犬牙交错状态的形成。之后，当地以扶灵、清溪、古调、勾蓝等代表的平地瑶村落的部分瑶人凭藉“垦耕守隘”的承诺，由“生瑶”转化为“熟瑶”，并享受优免赋役的特权。

优免赋役的特权广泛记载于明清时期南岭地区的各种瑶人文献中。在著名的瑶族《过山榜》（又称《评皇券牒》）里，除了记有族源传说和迁移路线等内容外，主要开列了瑶人子孙过山耕种不纳粮当差等官颁的权利。尽管“此文显然是由许多时期之多种传说和文件集合而成，经历世传抄，遂致讹伪日甚，不能完全置信”，²但我们仍可从中得知一些“入籍熟瑶”的生存智慧。在科大卫看来，历史上的“瑶”与其说是一个实体的族群，不如说是对化外群体的代称。他认为，“在北宋，‘徭’本来指住在南岭北麓的人，他们威胁湖南洞庭湖平原的人民，也就是说威胁长沙城附近的人民。然后，‘徭’这个字又被莫名其妙地借用到岭南，形容广西、广东北部的族群，然后再被借用到整个两广地区”。而洞庭湖以南的“莫瑶”，自隋代开始就成为“因为祖先效力朝廷而无须承担徭役之人”的称呼。³到了明代，瑶族的族群边界更是广泛地由特定的户籍赋役制度所定义：“瑶，就是在明初在广东和广西没有参加里甲登记，也没有受‘土司’所管理的人。也就是到了明代（天顺、成化年间），受到广西土司和登记在里甲内的‘民’所攻击的人”。⁴如果以上推论大致成立，那么，南岭地区熟瑶群体的形成及其强化，或是明代中叶以后的事。以此类推，一些号称形成于明初的“垦耕守隘”的说法就非常值得仔细推敲了。施添福在对清代台湾竹塹地区的研究中发现，乾隆末官方在生番与熟番、汉民之间设立“隘垦区”，由当地的熟番“平埔族”担任守隘工作，隘垦区的社会变迁可作为理解原住民和汉移民社会构

¹ 李贤等：《大明一统志》卷六十五《永州府》，第1008页。

² 徐松石：《粤江流域人民史》，上海：中华书局，1939年，第130、137页。

³ 科大卫：《皇帝与祖宗——华南的国家与宗族》，南京：江苏人民出版社，2009年，第56页。

⁴ 科大卫：《告别华南研究》，华南研究会：《学步与超越：华南研究论文集》，文化创造出版社，2004年，第25页。

成的关键。¹受此启发，本文也希望通过明清时期永明县“垦耕守隘”故事的建构来透视瑶人在卫所和州县的夹缝中找寻生存空间的复杂经历。

文章所用的瑶人文献（《扶灵统纪》、清溪《田氏族谱》等）大都成书于清乾嘉道三朝，具有较强的文本指向性。如果原封不动地用之来研究明清时期永明县瑶族的历史，获取的只不过是部分熟瑶所制造的片面的历史叙事而已。现存的抄本《扶灵统纪》由首德胜初辑，何可训续辑。首得胜和何可训分别为乾隆时代与道光时代的瑶长。乾隆十九年，永明知县周泽奉上命查各瑶苗裔编造来历册，首得胜将扶灵瑶的“沿革原由”汇集上报，成为该书的最初雏形。²扉页又题有“大清道光廿一年岁次辛丑……庐江何可训照旧纂辑”，然而，虽号称“照旧纂辑”，书中还抄录了少许光绪年间的内容，可见绝非初撰时的模样。姑且不论经过历代传抄，已渐失原貌，即便从首得胜算起，所记前朝史事也很难游离于诸多“现实”诉求之外。该书《凡例》中有言“原本印册系前瑶长首德胜公纂辑，赴县呈验”，为了在呈验中搏得更多的好处，就不得不在与自身来历有关的文献上做些文章，于是直接导致书中内容充满着错乱、窜改乃至造伪等现象，欲对之加以利用，就不得不依靠明代的其他史料对之加以严格的筛选才行。成书于乾隆五十二年的《乾隆伍拾贰年岁次丁未四月田太运描录族谱》（以下简称乾隆清溪《田氏族谱》），在文献性质上与《扶灵统纪》相类，亦可依此例加以处理。

有关“瑶人守隘”说，《扶灵统纪·给凭》有较为详细的记载：“洪武九年四月初十日，奉蒙张丁爷召安下山，给赏红袍玳瑁与瑶把守，奉蒙钦差户部侍郎曹踏拨边山五里，俵瑶陆续开垦成熟。”³在各种汉人文献或职官年表中，均不见瑶人文献中的张丁爷及其身份，曹侍郎也为子虚乌有，即便暂时抛开这些难以落实的人名信息，洪武九年离洪武末桃川所的设立尚差20年左右，卫所制度在当地正式推行之前，瑶人到底替谁守隘，不由得令人生疑。这段话的实际意图，恐怕更应落实在“踏拨边山五里，俵瑶陆续开垦成熟”这句话上。把户籍信息和田粮赋役责任尽量追溯到洪武初年，乃是明清时期的人们经常采取的生存策略之一。一旦这些信息被官方认可，即可直接为相关的利益争夺提供最有力的证据。既然如此，洪武初年“守隘”说法的出炉，并不是件非常意外的事。

《扶灵统纪》中所收清顺治年间的一份瑶人禀状，详细勾画了明初屯军和瑶人各自的居住空间：“蚁等前朝洪武十一年向化招抚。设立三屯四隘，三屯名比村、刘村、蔡家，屯军居住；四隘马涧白竹、董岭、梅母、毛东，瑶人居堵，屡御苗贼。”“三屯四隘”的

¹ 施添福：《清代台湾的地域社会——竹塹地区的历史地理研究》，新竹：新竹县文化局2002年，第87—109页。

² 《扶灵统纪》，第39-40页。

³ 《扶灵统纪·给凭》，第26页。

划分，固然纠缠着清代扶灵瑶人的诸多现实利益，但在隘口之外专门标注屯田所在，在《扶灵统纪》中却比较罕见。除了这一处，另一处出现在该书的《地界》部分：“东界抵富川塘湾村背岭，土名白竹隘，……内有马涧口、当门岭、大瓮，直出毛东隘。八羊冈内，洪武二十九年设立有羊头营、刘村屯。”两处同样提及刘村屯，后者甚至明确交代该屯位于扶灵源东界附近的八羊冈内。在笔者最近的一次实地考察中，得知八羊冈、马涧口等地名至今仍在沿用（详见附图“扶灵村图”），且位置与《扶灵统纪》中所记完全对应。隘口与军屯地点的交错，多少透露出明中叶以后瑶人借卫所军屯制度败坏的大好时机将部分屯田占为己有的事实。史载，嘉隆之际，为解决卫所军屯大量荒废的困局，永州府曾不断地降低承垦卫所屯田的准入门槛：“各处屯额，既丈出余田，自可募人领种，所入子粒，自可尽供兵食”，¹这就给瑶人和其他民户介入军屯打开了方便之门。在“三屯四隘”中，四隘分别指扶灵瑶村往东西南北四个方向的隘口，马涧白竹隘居东，董岭隘居南，梅母（子）隘居西，毛东隘居北，三屯中除了刘村，比村和葵家二屯已无从查知位置，不过，参照刘村屯与白竹隘之间的位置关系，似乎可为熟瑶“垦耕守隘”乃至占垦军屯的故事，提供一种空间表达上的直接证据。

实际上，“瑶人守隘”的说法，也并非迟至清朝才真正出现，早在明代就有这样的提法。在一块古调村的残碑上，依稀可见“瑶祖洪初奏拨边山荒耗田地，垦耕把隘”等字样，这块碑的镌刻年代虽已严重毁坏，但现存碑文大多可以辨识，从碑中所有年号“永乐二年、成化八年、加（嘉）靖年间”，均不出有明一朝，且数次提及“加派辽饷”、“州县佐领、卫所屯哨”²、“九年清丈”等片段信息看来，当为万历末至崇祯间所刻。³万历《富川县志》中记有“国初土旷，居民瑶代耕”之句，⁴虽未直接提及守隘，但瑶人参与“垦耕”则是可以确定的。另据广西恭城县西岭乡《瑶目万历二年石碑古记》载：

申告恩赏给照七姓良瑶赵中金、邓金通、赵进珠、邓音、郑元安、盘金章。七姓瑶目乃系广[东]德庆（洲）[州]肇庆府铁莲山（风）[封]川县入广西恭城县，到平源。雷伍子反，所有招主黄口口[措逼]、黄明、李富山闻知广东有好良瑶，即行招（德）[得]。大朝兵马之因洪武下山，景（太）[泰]元年润三月初三日进平源，剿杀强首雷

¹ 隆庆《永州府志》卷十一《兵戎志·防守》，第695页。

² 按：“州县佐领、卫所屯哨”的称呼，与明正德、嘉靖之后在当地出现的营堡制密切相关，至清初，该制废止。

³ 此碑今存湖南江永县粗石江镇古调村古调小学内。

。按：虽然瑶人的历史记忆和口传习惯不一定完全对应于王朝系年，但在基本确定该碑为明碑后，碑中“永乐二年”、“成化八年”、“加（嘉）靖年间”、“（万历）九年清丈”等重要年代信息，或可成为判断《扶灵统纪》、乾隆清溪《田氏族谱》等瑶人文书中所收官方告示及相关记述之真实性的主要标准之一。

⁴ 万历《富川县志·夷情志》，广西壮族自治区富川瑶族自治县档案馆藏清传抄本，第13页。

通天、李通地，贼首退散，给赏良瑶把（手）〔守〕山隘口，开垦山场，安居乐土，悬给立至，守把隘口。又到嘉靖三十七年七月十一日，被东乡贼脚越过阴家洞，抢得万（名）〔民〕不安。本县提调瑶（名）〔民〕邓贵明、郑海成、赵进旺通口带瑶丁拿得生工七名，李长同解本县，赏给白银五十两，给瑶目回源守真山源隘口地方。后至万历十五年三月十八日，贼首越过苏被口并沙江立剿，万（名）〔民〕不安。本县提调瑶（名）〔民〕郑进旺、郑德元、赵殊禄捅带瑶丁拿得生工名十解报本县，实时打死，赏给白银七十两，给瑶目回家用心固守地方。至万历二十年，守把隘口地方，奉公守法，照越过地方，屡蒙恩赏。¹

姑且不论碑文年代与碑额的不一致以及内容的土俗字和异体字连篇，此碑带给人最深刻的印象是，瑶人守隘事例之确立绝非一蹴而就，与之对应的事件是，瑶人在历次“叛乱”之后陆续下山归附官府，入瑶籍成为“良瑶”。易言之，所谓瑶人守隘绝不只是单一的时间节点，而是对应着一个较长的历史过程。指望“良瑶”及其后代用王朝纪年来准确地定位他们的历史记忆，本身就有些吹毛求疵。但无论怎样，碑中所涉绝大多数的时间节点均在景泰以后，与科大卫的判断并不抵牾，正德、嘉靖之后官方在南岭地区“平叛”的诸多举动尤其值得注意。明中叶以后，“熟瑶”参与把截要路的事例常见于官方奏疏之中。嘉靖二十七年，在两广总督张岳平定连山、贺县的瑶乱中，曾派“永州府通判林一正等，督率民快乡团瑶款，各另分定把截通贼要路地方，相机策应。及永明县桃川迤西，桂阳、宜章二县迤东，与广西贺县、富川、广东连山地方但交界去处，俱各委官督兵把截”。²这里的“瑶款”可能就是《瑶目万历二年石碑古记》中的“良瑶”。

“瑶人守隘”的故事在明中后期楚粤交界的瑶人聚居地区已流传甚广。在广东乳源县牛婆峒发现的崇祯十六年《察院甦瑶碑》中也记有一则类似的故事：“瑶等祖李本琛，原籍肇庆，于弘治年间奉部院易调乳源，把守连阳、英德、清远交界隘口，居住牛婆峒、连塘、茶山、大布、大木角、坪瓮、瓦窑岗、塔塘等处，籍凿糊口，不食钱粮，屡奉府县严拔守瑶示，得遇猖獗获功，历代无异，蠲免杂税。”³这里着重强调的是瑶人守隘所应享有的特殊权利——蠲免杂税，《扶灵统纪》将这项权利称作“纳粮不差”。另据万历《富川县志·灾祥》记载，自景泰元年至嘉靖三十六年这段时间，富川县先后招抚了奉溪源、车角源、外八源、内八源等地的瑶人入籍，到了万历朝，全县“三十源曰瑶者，轮赋而不当差即其后也”。⁴由此可见，招抚、守隘和免役已成为永明及周边地区“民瑶”或“熟瑶”用

¹ 此碑今存广西恭城县西岭乡新合村委路口村邓新民老屋外。

² 《报连山贺县捷音疏（嘉靖二十七年戊申）》，张岳：《小山类稿》，福建人民出版社2003年，第45页。

³ 李默：《牛婆峒甦瑶碑的发现对研究瑶族史的重要意义》，《广东社会科学》1987年第4期。

⁴ 万历《富川县志·灾祥》，第8-9页。

来表述他们与官方之间关系最重要的三个关键词。明中后期每一次的官方招抚，都极有可能直接转化为“瑶人守隘”说成立的关键时间节点，并为人们将之追溯到洪武时期提供了宝贵素材。当然，前朝“因功免役”的制度先例也是必不可少的，否则，即便再完美的“守隘”文本构建也缺乏任何实际意义。

瑶人因功“免徭役”之例早在隋唐时期就已见记载，但惟限于长沙一地，¹直至北宋庆历年间，楚粤交界地带的瑶人仍不仅不服徭役，甚至连赋税也不缴纳：“蛮瑶者，居山谷间，其山自衡州常宁县属，于桂阳，郴、连、贺、韶四州，环紆千余里，蛮居其中，不事赋役，谓之瑶人”。²这些瑶人大都没有入籍，直到南宋以后才开始陆续被官方招募，成为听调纳粮的“熟户、山徭，峒丁”。据《宋史》卷四百九十四《蛮夷二·西南溪峒诸蛮下》：

嘉定五年，臣僚上言：“辰、沅、靖等州旧尝募民为弓弩手，给地以耕，俾为世业。边陲获保障之安，州县无转输之费。”

七年，臣僚复上言：“辰、沅、靖三州之地，多接溪峒，其居内地者谓之省民，熟户、山徭、峒丁乃居外为捍蔽。其初，区处详密，立法行事，悉有定制。峒丁等皆计口给田，多寡阔狭，疆畔井井，擅鬻者有禁，私易者有罚。一夫岁输租三斗，无他繇役，故皆乐为之用。边陲有警，众庶云集，争负弩矢前驱，出万死不顾。”³

可见，辰、沅、靖三州的熟户、山徭、峒丁等在南宋中叶即被征作弓弩手（或称瑶兵），由官府计口给田让其耕种。他们一方面要承担防守安边之责，另一方面也享有纳粮免差的权利。这种模式为后世所效法，隆庆《永州府志》直接将本府与瑶人打交道的传统追溯到了宋代：“观今日之所施为，或者法古之遗意欤！今之所谓良瑶，禀听官府号令，即宋之所谓熟户近瑶也。其田有税而无役，即宋之丁米而无他科也。其耕民田者，富民役属之，有盗贼亦可用以御之，即宋之任其耕种生界，有警而极力为卫也。”⁴以上种种资源，既增添了明初实施“瑶人守隘”的可能性，也给明中叶以后各种版本的“瑶人守隘说”的不断完善提供了丰厚的土壤，古调村残碑上的相关记述即可置于这一背景下进行理解。进言之，虽然那些与官府有着紧密联系的瑶人，各地称谓不一，有称熟瑶、良瑶、民瑶，或称平地

¹ 据《隋书》卷三十一《志第二十六·地理下》（北京：中华书局，1982年，第898页）：“长沙郡又杂有夷蜒，名曰莫徭，白云其先祖有功，常免徭役，故以为名”；《元和郡县图志》卷二十九《江南道五·潭州》（第701页）：“今按其俗，杂有夷人名瑶，自言先祖有功免徭役也”。

² 《宋史》卷四百九十三《蛮夷一·西南溪峒诸蛮上》，北京：中华书局，1977年，第14183页。

³ 《宋史》卷四百九十四《蛮夷二·西南溪峒诸蛮下》，第14195-14196页。

⁴ 隆庆《永州府志》卷十七《外传·瑶岗》，第734页。

瑶、听招瑶、听调瑶等，¹但终难免将“招抚（或入籍）、守隘和免役”之类的叙述套路安在自己身上。

康熙四十八年《永明县志》专门交代，在清初桃川所应纳的屯田折银子粒中，“内除招安黑、白二瑶屯饷银一十二两八钱七分，以作奖赏花红”；²道光《永州府志》亦称：“闔府故卫所屯田，……又免征永明桃川所招安黑、白二瑶下山向化籽粒粮石，以作奖赏。”³由此看来，的确有黑、白二支瑶人曾在明代被桃川所招安，并获得了该所的长期优待。至于他们受招安入籍的时间是否在桃川所成立之初，则不得而知。但无论怎样，这种模糊的历史记忆恰好为后人建构其早期履历留下了巨大的空间。《扶灵统纪》特意强调：“一屯支招安黑白二瑶屯饷银一十二两八钱七分，以作赏瑶奖花红”。⁴经过类似的努力，清代永明县扶灵、古调、清溪、勾蓝等地的“熟瑶”顺理成章地成为奖赏花红的合法继承者，即使在卫所制度渐渐销声匿迹的清代，其余绪还是如此深刻地影响着人们的生活。

康熙二十七年，桃川所和枇杷所正式裁撤，⁵改“置守弁于县城，拨分防于白象营、祖山冈诸要害”。⁶驻防在原桃川、枇杷二所辖境的兵力较明朝大幅度减少，祖山冈营额兵 72 人，白象营额兵 76 名，⁷加起来尚不足 150 人。这种改变对当地社会产生的巨大影响如光绪《永明县志》所言：

若乾隆以前，上溯有明三百年弹丸之邑，营戍重叠，见者几疑处縻，不知地逼獠獠，久觊伐山之利。迨乾嘉间，移把总驻县城，仅留白象、祖山二外委，尽撤防獠各垒。不二十年，而生獠占山开垦，水源短缩，腴田变瘠，致地方官屡次会兵驱逐。⁸

客籍占居，遍于穷谷，伐山畚种，水源缩小，地利尽农事伤矣。⁹

由此看来，乾嘉间兵力的回撤收缩，成为生瑶下山占垦和客民大量涌入永明南境的直接原因之一。此后，人地关系空前紧张，各种纠纷和冲突层出不穷。原来“瑶买瑶业，免行投

¹ 李默：《牛婆峒甦瑶碑的发现对研究瑶族史的重要意义》，《广东社会科学》1987年第4期。

² 康熙四十八年《永明县志》卷五《赋役·屯田》，第455页。

³ 道光《永州府志》卷七中《食货志·田赋》，《湖湘文库》，长沙：岳麓书社，2008年，第486页。

⁴ 《扶灵统纪·县志粮》，第21页。

⁵ 道光《永明县志》卷五《秩官志·武职》，第24页。

⁶ 道光《永明县志》卷九《兵防志》，第2页。

⁷ 道光《永明县志》卷九《兵防志·营汛》，第5页。

⁸ 光绪《永明县志》卷七《地理志七·关垒》，第278页。

⁹ 光绪《永明县志》卷十一《风俗志·性情》，第300页。

税，瑶买民业，照例投税”，但至清中叶，一方面，“客民、民人买瑶业，伪造印契，争占瑶业产”的现象逐渐增多，¹甚有“奸民希图附近田产，先以放债诱之，辗转盘算，知其力不能偿，然后抑勒准折”；²另一方面，瑶人置买民田而不纳契税的事例也不在少数。嘉庆间，知县顾烺昕“令瑶一旦变改旧章，遽勒投税责比”，³也就是说，瑶产过割如同民产一样，也需要投税。这本是为了制约瑶、客之间互相影射争占田产的对症良药，却遭到了瑶人的强烈抵制，不得不又重新回复到“瑶买瑶产，无论年月远近，优免投税，如瑶买民业，照例投税”⁴的制度原点。民、瑶争产的事件于是屡禁不止，愈演愈烈。

另有迹象表明，部分移住进来的客民并非乌合之众，往往有着较为严密的组织：“嘉庆四年己未，盗聚县西南扶灵山。其地重冈复岭，跨连富川，内平衍百余里。盗据其中，不可数计，名曰担子。各有眷属，衣服楚楚，如民间巨富，设渠魁一，其次以行相呼，法令严明。”⁵从这些称作“担子”的客民的富裕程度，可以想见开发永明县南境山地的利润之厚。最终，这一宋元时代尚是山瑶木客的聚居之区终于在清嘉道以后被从周边涌进的人群开发殆尽。正如道光《永州府志》所云：“凡今之民瑶耕凿生聚恬熙丛箐绝巘胥成乐土者，皆当日风鹤时闻兵戈出入之地也。”⁶

综上所述，唐宋二朝对于南岭地区瑶民的控制长期处于相对松懈的状态，明初在永州府南部的永明县设置卫所彰显了王朝强化对该区域控制的意图。部分瑶人以“垦耕把隘”的形式逐渐转化成“熟瑶”，他们通过对官方政治权威的认可与归附，获得了一定的赋役优免权。无论“守隘”、“编立瑶籍”还是“赋而不役”，皆非永明一地的孤立现象，而是在周边邻近区域像富川、恭城等地普遍而广泛地存在过，且直接见于各种明代文献当中。这些关键词乃是理解入籍瑶户与卫所、州县之间发生深刻互动的重要线索之一。虽然瑶人的历史记忆和口传习惯已经难以提供准确而可信的王朝系年，来对应与之切身利益密不可分的承担卫所州县赋税及历次平定“瑶乱”的具体时间，但为了现实利益的诉求，这些信息已经被刻意的遮蔽掉或者加工过。然而，无论文本如何“层累”，历史的细节均无法原汁原味地被全部复制或者删除，我们还是能够剥丝抽茧，重新认识瑶族文献的“层累”和“语境”。清乾嘉间，客民大量涌入永明南境，当地山区开发不断深化，民瑶的特殊利益遭遇冲击，他们通过构建或修改既有的文本叙事，逐渐完成了一个相对完整的“垦耕把隘”

¹ 《为沥情呈明叩赏批示给照存案以别民瑶以垂德政事情》，《扶灵统纪·给照》，第52-53页。

² 《扶灵统纪·抚绥苗瑶条款》，第62页。

³ 《奉院给照循旧免差碑》，《扶灵统纪》，第47页。

⁴ 《特授湖南永州府正堂加十级军功纪录十次锡为给照安瑶事》，《扶灵统纪·给照》，第49页。

⁵ 道光《永明县志》卷九《兵防志·靖寇》，第10页。

⁶ 道光《永州府志》卷八《武备志·明营堡考》，第524页。

的故事。人们对于“熟瑶”身份的最初选择，或多或少都会取决于其承担的“差粮轻重”。在这一原则之下，瑶人文本中的“守隘”说便可置于明清卫所制度的推行和军屯在当地社会的渐次渗透这一背景下加以理解。今天，号称为“扶灵瑶”的人们已经不再居住在条件相对恶劣的隘口，而是居于扶灵源¹的核心位置，这些条件相对优越的土地，到底属于明代卫所的屯地，还是民户的土地，背后涉及了哪些具体人群的移动和社会组织的转变，目前我们尚不清楚，但几乎可以肯定的是，目前这一居住格局的形成，或多或少与清代卫所制度的改制、山区开发的深入等历史进程有所关联。

¹按：源在当地指“山间盆地”，较适合农业垦作。

晚清民国林业纠纷中的山产与山界

——对龙泉司法档案¹的研究

杜正贞

龙泉县，地处浙江省西南仙霞岭山区，山多田少，当地向有“九山半水半分田”之谣。林业在地方经济中占有重要的地位。有关山产木业的案件是龙泉司法档案比重最大的一类，内容涉及山业的继承、买卖、租佃，以及木材的出拚、运销等各个环节。在这些纠纷中，不仅展现了山地开发和经营的形态、习惯，也体现了当地人对山林以及山林产权的观念。

一、龙泉山林经营的一般模式

清代龙泉山地的经营，一般是由山主自种自管，或出佃给佃户养林培育，树木成材后，再出拚给山客砍伐获利。在现存最早的档案“咸丰元年四月李联芳为强霸阻砍挽迈图诈事呈状”中，就描述了这样一个木材生产的流程。李联芳在呈状中称：

“缘生叔父手于道光七年，价买韩林秀、石玄秀故父奇富兄弟等土名铜坑见山场一处，坐落西乡七都安着，契载杜绝字样。买后该山原属荒芜废业，当生家先后迭废工本，仰佃吴定郁栽插苗木青竹，递岁开刹养箐，今二十余载，兹植成林。生于本春雇工登山砍伐为货……。”²

这是山主招佃植木管理、雇工砍伐发卖的例子。与田土经营相比，山木的生产周期长，山地的开发，耗费工本甚巨，竹木栽培少则3、5年，多则20-30年才能成才收益，而一次性收益数额也往往颇为巨大。在这些诉讼中所涉及的木材价值大都在100元以上，甚至高达数千元。

在木材买卖的环节中，也已经形成了一套成熟的机制。木行直接与山主联系，或者先期放贷给山客作为砍运之资，并议定以木材出卖以后的价值作为偿还，以此保证木材必须在该木行贸易。木材由山客砍伐之后，木行会在砍伐下来的木段

¹ 关于龙泉司法档案的基本情况，见杜正贞、吴铮强：《龙泉司法档案的主要特点与史料价值》，《民国档案》，2011年第1期。

² 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-01501，第4页。

上，盖上自己商号的印记。在运输、发卖的过程中，就依木段上的印记为凭证。

“宣统二年季庆元控吴荣昌等藉买混争案”³中，季庆元起诉称，他将自己山界内的杉木，出拚给黄姓客商，但被告吴荣昌兄弟强行盖上“永发”斧号印。经过协商，“吴荣昌、如昌兄弟故口许被盖百余株之树，愿还生客黄某发运，而退号字样，抗不肯写，无奈商规，已盖斧号，如无退号字迹，到行万难出售。”⁴

在“光绪三十四年刘绍芳控刘朝高等抢匿契票等案”⁵中，东瓯宝森行以及商务分会的禀状、领状等资料，反映木材的交易过程和惯例。⁶据“宣统三年三月东瓯宝森行为请准具领事禀知县禀”：“龙邑木客刘日新前向小行借去英洋三百元为砍运木排之用。订名

木排到行，售出归收。迺闻该客木排已至邑城，因与伊兄涉讼，由宪台截留在案。”⁷宝森行在禀文中特别说明，他们所垫付的这笔钱只是“砍伐搬运各费”，并不涉及山产的归属问题，因此要求先行发运。之后商务分会也为此向龙泉县知事申请。但可能是由于没有获得批准，所以该案卷宗中，还保留了宝森行将木段退回给刘姓，刘姓返还借款的收字⁸。

木材的运输，一般是扎排沿着龙泉溪，进入瓯江到温州销售，龙泉北部少数地方也通过乌溪江进入衢江-富春江河道，直达杭州江干的木材市场。龙泉竹木的扎排放运，早在明代就有记载，嘉靖年间知县朱世忠主持重修蒋溪堰，就是因为该堰常被木牌撞击损毁的缘故：

“蒋堰前此积土累薪成之，留隙以通筏，每触于筏，徒勤修筑之劳。侯度其非久远计，咸以石增筑之。计田资户，民乐输之。截流生二十丈，广筏之所经约十有三丈，仍塞其隙，命居民守之，竹木非过此，不得辄成筏，著为令。”⁹

这则史料同时也说明，最晚在明代，龙泉当地的林木的商品化已经出现。

围绕着山林开发、运销的整个过程，都会产生各种纠纷。但是在成材树木出拚、砍木之际，是纠纷最易爆发的时刻：或者是因为产权和山界不明而引起的越

³ 该案档案存于浙江龙泉档案馆藏《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，卷宗号：M003-01-00495，M003-01-00986，M003-01-01042，M003-01-03745，M003-01-04288，M003-01-10087，M003-01-15239。

⁴ 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-01042，第21页。

⁵ 该案档案存于浙江龙泉档案馆藏《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，卷宗号：M003-01-02235，M003-01-03361，M003-01-08573，M003-01-17086。

⁶ 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-02235，第58页。

⁷ 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-02235，第58-59页。

⁸ “宣统三年四月初五日东瓯宝森行与刘林氏立收字”，《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-02235，第60页。

⁹ 顺治《龙泉县志》，卷七，艺文，四十五页上，《遗爱亭记》。

界强砍，或者是木行在已伐木段上抢盖斧印占为己有；或者抢运藏匿、低价散卖等等，不一而足。但是这些纠纷发生的根本原因，则多为山业产权不明，山界不清，契据不实。

二、 晚清龙泉的山林产权

晚清龙泉山产的所有权形式比较复杂。与田土析分为“田骨”“田皮”一样，山产也分为“山骨”和“山皮”。“民间产业必有山骨于先，方能开田亩、厝坟莹于后，普天皆然。”¹⁰“山骨”和“山皮”的所有者可以是个人或家族，也可以由数人以合同的方式合股共占。如“光绪二十八年叶广轮与杨张生互控山业案”¹¹：“据叶广轮供称，这坪溪儿山场，从前毛姓合二股，伊合一股，立有约字存据。毛基南将山卖与杨姓，曾于光绪五年拚木一次，分洋八元，后杨张生灭伊一股山场。”¹²这是涉及山骨的合股占有和买卖的纠纷。

“山皮”的所有者同样可以自己管理种植山林，或者再次转卖或转佃给他人。“宣统二年叶以通控钟瑞芝越界强占案”¹³典型地反映了晚清龙泉山产产权和经营形态的复杂性。这次纠纷的直接起因是山界不清、越界强砍，但所涉及的深层原因，是山皮数次买卖后山业产权的混乱。据“宣统二年九月原差叶旺等为禀复查封等事禀”，原被两造所争这处山产“山皮”曾经过数次易手：

“村邻耆老人等皆言：叶以通契管墩头坳、麻香坞山场二处，乃是山皮，递年要完纳陈姓山主骨租银的。这山皮从前是钟瑞芝的祖名唤德全管的，续后钟德全立字退与曹姓，曹姓再卖与叶姓。本年钟瑞芝拚把客人陈天华砍伐魁大杉木一百零五株，叶以通的山界内，被他砍有八十株光景，每株抵洋三元左右。”¹⁴

而根据当事人钟漾鳌的诉状，这处山产山皮的买卖和所有权情况，则更加复杂，他说他的祖父钟德全出退给曹姓的并不是两处山产（的“山皮”），而是被分为四股的一处“山皮”中的两股：

“民祖出退者是一处之山，作四大股，续将该山退二股与曹国忠。其未退二股之山，民祖手分作小股五份。民故父兄弟五份合一，其一份中民故父兄弟三人再将一份分为三小分。

¹⁰ 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-10898，第7页。

¹¹ 该案档案存于浙江龙泉档案馆藏《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，卷宗号：M003-01-05341，M003-01-15661。

¹² 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-15661，第11页。

¹³ 该案档案存于浙江龙泉档案馆藏《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，卷宗号：M003-01-01002，M003-01-11897，M003-01-14532，M003-01-15035。

¹⁴ 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-14532-3。

民父又向堂□□□受买一份，凑二小份，契仰完租收字，界址凿凿。”¹⁵

也就是说，仅这处山产的山皮在钟德全一人手上，就经历了合股、股份买卖、继承等诸多经历。在这个过程中，所买卖的山皮是股份、还是有确切界址的山产，都成了问题。

“宣统元年叶天茂控廖立汉一业两卖案”¹⁶则既涉及佃户和山主（山骨所有人）之间的关系；也涉及山骨所有人之间的合股关系。原告叶天茂原来是这处山产的佃户，后来又买下了山骨的一股股份：“身所买龚绍梁十六股之一山业，皆由身系是山山佃，去尽苦工，扞苗养箠。但山佃是管皮，主边管骨。去冬身曾向龚姓买管一股山业。而龚姓系廖立汉出卖，管下十几载，相安无事。”但廖立汉等将木拵出后，并未将十六分之一的木价银三十四元五角付给叶天茂。叶天茂因此提起诉讼。¹⁷

被告廖立汉的诉词揭示出在山骨股份的买卖中，另一重复复杂的交易方式，我们在田土的买卖中通常称之为“活卖”：

“该山十六股内，身合半股。身父于光绪廿九年，将自合股份活卖与供（龚）远亲为业。计价洋十六元，契内注明，卖者办得契内本利取赎，受者不得执留字样。卖后于光绪三十二年交有谷一百八十六觔，三十三年交有内洋二元与供（龚）姓照收，且俟山树出拵凑齐向赎。旧岁股份各主将该山树木出拵与张成泰砍伐，计价洋三百元，张合应砍伐，计价洋七百□元。价洋□分，叶天茂佃息肆佰零八元。各主即股分拍，身合分价洋十八元。将所分木价向供（龚）绍梁取赎活业。突出叶天茂□全供（龚）绍梁指不放赎，增价向□□夺买分业，立契倒填年月，临时投税。供（龚）绍梁故避浦邑不面，叶天茂胆敢奔辕诬控张石德与身串噬树价等谎冒渎，希图压制。切身父将山活卖供（龚）姓，契注回赎，卖契已缴，叶天茂非不知情，恶敢增价夺买，反肆捏诬，□横过甚。况股份业主于拵树后经众立有议簿为凭，叶天茂如果执有股份，何以当时不载议簿，仅为扞佃列见批押，夺买显然。”¹⁸

按照廖立汉的这份诉词，虽然他的父亲确曾将山骨的股份卖与龚姓，但这是一次活卖，卖契中注明日后还清卖价的本息，就可以赎回这股山骨股份，买主龚姓不得执留。而且廖立汉父子在四年中已陆续归还部分本息，所以叶天茂从龚姓

¹⁵ 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-01002-4。

¹⁶ 该案档案存于浙江龙泉档案馆藏《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，卷宗号：M003-01-02527。

¹⁷ 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-02527，第7-8页。

¹⁸ 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-02527，第15-16页。

手上购买这股山骨，违背了民间活卖惯例，即属于“增价夺买”。在这个案子中，关键的人物，即违背了活卖契中“取赎不得执留”的规则，将股份转卖给叶天茂的龚姓，一直回避不出，这是造成该案迟迟不能理清结案的原因之一。但奇怪的是，他并没有被原被两造列为被告。

在龙泉档案中，我们还发现，当事人并不仅仅用山林的所有权来证明他们对山林的占有和使用；而是常常反过来，用对山产的实际占有和使用，来证明他们的所有权。例如，山佃的证词、租佃的契据成为论证山林所有权时有用的证据。例如在“宣统二年范绍文控刘文贵越界强砍案”¹⁹中，在典史当场查勘山场的时候，山佃也到场作证，并出具出佃的契约“仰字”：“现沐捕主勘明，在勘厂时，两造山佃俱经吊问供确，并文贵之佃张得根前向邱利财仰来仰字，亦经抄白，当厂呈阅。”²⁰

前述“宣统二年季庆元控吴荣昌等藉买混争案”中也有同样的事例。季姓兄弟共有的一处山业，虽然已经分关，但有关山业的契据都保存在兄长季庆麒处，当季庆麒出卖自己的山业时，买主拿走了这些契据。虽然季庆元随后要求在买卖合同中注明其中有一块山地不再出卖之列，但是此后的纠纷说明，这其中仍有漏洞。据“宣统二年六月十八日季庆元为控吴荣昌等奸谋罩占蛇足显然事呈状”：

“生兄麒读书亏空，背托中向买阴边松房山业，全手老契，系麒收拾，俱被套去，续生查知，投入理论，始将契尾注明，内有柏房关内竹园四至未在卖内等字。生想柏房竹园，自有四至确凿，关内为凭，沧桑迭变，万不能竹园便是毛竹而已。于上年昌等竟串季春旺勒写全山全界佃领一纸，意在久为连占护符。”²¹

根据季庆元的控诉，吴荣昌试图通过在出佃时，写具包含“全山全界”的契据，从而造成拥有所有山产的事实依据。这从另一个方面说明，作为证明事实占有、使用状况的出佃契据，在山产所有权的纠纷中往往能够发挥证据作用。

山林产权中多层次的权利关系，以及交易过程中多层次的买卖关系，使龙泉的山林产权变得非常复杂。这与田土的情况有相似之处，山林产权、买卖关系与田土产权和买卖关系的方式也几乎完全一样。但是山林纠纷与田土纠纷也有不同

¹⁹ 该案档案存于浙江龙泉档案馆藏《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，卷宗号：M003-01-03829，M003-01-10203，M003-01-13421，M003-01-14426，M003-01-14459，M003-01-16844。

²⁰ 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，卷宗号：M003-01-12324，第13页。

²¹ 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，卷宗号：M003-01-00495，第20页。

的地方：因为绝大部分山林不像田土需要向国家交纳田赋，它们不像田土至少有每年的完粮串票证明管业，也就是说山林的产权变动和管业经历都更少在官府有登记。这使得山林纠纷比田土纠纷更缺少官方证据。

三、 山界与契约

在这些有关山产木业的诉讼案件中，多涉及到对山界的认定。以“光绪三十年金林养等控吴礼顺纠党强砍案”²²为例，吴礼顺在“光绪三十年八月初三吴礼顺为控金林养藉连跨占好讼诬良事呈状”中说明自己山林的界址：

“承太祖文照遗有历管数代之山场一处，坐落木岱庄，土名沙木坑口安着，半系佃管，半属自管，四至零清。只因北至牛萌岗与地恶金林养等契管之上至牛萌地毗连，日前身家插扦杉苗，该恶等早存越占之意，惟是杉木非三四年不大，彼此各未砍木，任由指东作西，不与计较。刻因自杉木颇大，雇工砍下，计砍杉木六百七十余株，且砍之木还是山内小土名承除，远距金姓毗连牛萌岗相隔甚远，不谓金林养□□□□□□，辄敢跨岗逾湾，混讼强占。”²³

金林养则在“光绪三十年八月十八日金林养等为控吴礼顺势欺占砍越界混争事呈状”辩称：

“身旋邀宪差登山看明山界，外至高际大岗直下大溪，此界高际分明，有际有水，通流直下大溪，毫无混杂，界内又有身家坟莹赤凿。砍木八百余株，系坟莹之岗湾直上，现有树脑可验。吴礼顺恃强欲将魁杉先放，希图运销，前经伊亲核契勘界，又经宪差看明实情，足可吊质，该山界址与礼顺悬隔分明，并无纠葛。”²⁴

关于山界纠纷的陈述，大都与此类似。与田土一样，山林有土名、有四至，四至一般都以山的自然形态，如山岗、分水岭、巨石、溪流为界。这不仅反映在诉状中，也表现在大量的山林契约中。²⁵此外，“籍坟占山”一直是常见的问题。

《大清律例》中有一条乾隆三十二年（1767）添加的一条针对告争坟山的例：

“凡民人告争坟山，近年者以印契为凭，如系远年之业，须将山地字号、亩数及库贮鳞册、并完粮印串，逐一丈勘查对，果相符合，即断令管业。若查勘不符，又无完粮印串，

²² 该案档案存于浙江龙泉档案馆藏《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，卷宗号：M003-01-09762。

²³ 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，卷宗号：M003-01-09762，第3页。

²⁴ 同上，第24页。

²⁵ 参见曹树基等编：《石仓契约》，浙江大学出版社，2011年。

其所执远年旧契及碑谱等项，均不得执为凭据，即将滥控侵占之人，按例治罪。”²⁶

但即便《大清律例》已经明确，碑谱并不能作为告争山产的依据，仍有不少山林诉讼的当事人都以是否在山上有自己祖先的坟茔，作为重要依据，甚至有毁坏、涂改墓碑的控诉。薛允升特别说：“此等案件南省最多，与北省情形大不相同。”龙泉的情况也不例外。上述“光绪三十年八月十八日金林养等为控吴礼顺势欺占砍越界混争事呈状”中就有“界内又有身家坟茔赤凿”的申述。又如，“光绪三十二年洪大猷与沈陈养互争山业案”²⁷，两造供词中均强调山产内有自家坟茔：“监生（洪大猷）坟茔有几十穴，这沈陈养越界砍木，监生曾是走出，今蒙复讯，还说监生无坟墓碑，总不能移。”“（沈陈养）山里他无坟茔，就是小的墓多。”²⁸不论法律是否承认、不论是否有契约对山界进行过描述，坟茔在纠纷中总是会被作为证据而被强调，这一现象是值得思考的。这是否是在早期山林契约还未发展的时代，人们“籍坟占山”的习惯在观念和行为中的遗存？

当然，在契约还未普及之前，山产山界的最初认定是如何进行和表述的？我们并没有确凿的史料可以追述。山林契约出现，是山林开发过程中，开始出现山林产权转移和确认的需求的产物。最晚在明代，龙泉山界的确认就需要以契约为依据。但是，在纠纷中真正要凭借这些契约确认山界、保证所有权却并不容易。

“宣统元年郭梦程等与郭梦璧等互控祖遗山产案”²⁹，是一起两村郭姓族人之间的山林族产纠纷。该案中保留了从明弘治三年至清道光十三年间的相关契约抄件 8 件。最早的明代弘治三年围书的抄件如下：

七都住人吴怀真同弟怀义承祖置有坟山一处，坐落本村，土名西山头等处安着。其山东上至三兵儿山顶，南至车盘坑直上，西下至石门栏横路，北至霹雳尖分水为界。□□四至明白。今因家道贫难，兄弟相义，欲行移居去到庆元县住□。思及前山并等处坟穴、荒田等管业不便，自愿凭中将其山场等项围与一都女婿郭永增前去管业为主。所围之山等件，日先即无重叠交为碍等事。如有此色，围者自能一力支当，不涉业主之事。其有当日接收围书内银一两正。自围之后与伯叔子侄内外人等，不得遗悞言止。如有子孙逆悞言止，仰执此围书经公陈理。今恐人言难信，故立此围书，永远为用者可。

²⁶薛允升著、艾文博主编《读例存疑重刊本》（台北：成文出版社，1970），第二册，第 277 页。

²⁷ 该案档案存于浙江龙泉档案馆藏《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，卷宗号：M003-01-00091。

²⁸ M003-01-00091-2。

²⁹ 该案档案存于浙江龙泉档案馆藏《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，卷宗号：M003-01-10898、M003-01-02800、M003-01-03627、M003-01-02561、M003-01-13785、M003-01-09653、M003-01-14035、M003-01-02536、M003-01-15375、M003-01-05739、M003-01-01900、M003-01-10026。

弘治三年闰九月十四日立围书人吴怀真 仝弟 怀义

在见 母舅 沈宗 代笔人 连普藏 俱押

这件围书对山产的描述信息，包括坐落、土名、四至。山林四至以山的自然形态、分水、道路为标志，这基本上与清代的山林契约是一致的。但是，在这一契约中描述的山产，只包含有山林、坟穴和荒田，也就是说，即便有垦林为田的开发，这些山田还未在官府登记。此后，这块山地显然经过了多次分割、继承和买卖。但现存 8 件契约抄件，只记载了某几次的交易，无法依据这些片段的契约，追踪所争山产自明代以来至清末 400 多年间管业、分割、买卖的具体过程。但从这些契约中看到，在山产的历次转让、买卖、租佃等过程中，形成了众多小土名和表述各异的界址。事实上，凭借这些契约中互不相同的土名、四至，甚至很难确认它们是否同出于明代第一件契约中的山产。

不仅如此，从明代延至民国契据的遗失、篡改、假冒等代代有之。龙泉县执事长李为蛟于民国元年六月裁判郭梦程等以伪契、废契图占山产、抢运山木。郭梦程等对此判决立有甘结。但是，民国元年十二月，郭梦程等不服判决，并以“李执法员偏断勒结”，上诉至浙江第十一地方法院。在他们的辩诉中，我们得知，对方当事人争夺山产的论据是“因田管山”：“据壁呈称，原丈之田，无论前明谁氏开垦，凡前清雍正间原丈过者即为开垦之田。田傍之山，即可因田管山云云。”³⁰这一论据得到了法院的认可，民国二年二月二十八日浙江省第十一地方法院判决书中直指：“两造所呈契据均无何等价值，难以即凭契断案。”

“讯得两造所争之业，既无别项确实证据，自应即以官册为凭，如官册原文之名为车盘坑族太祖，即为车盘坑族原来之业。如官册原文之名为地畚村族太祖，即为地畚村族原来之业。但官册只载既垦之田，并无载未垦之山。本院因是推定，以自己之山垦田为原则，买他人之山垦田为例外。如他人无确凿之反对证据，则田为谁家原丈，即推定田旁之山为谁家之业。至原丈后，田有出入，当仍以契据为凭，不在此例。”³¹

这份民国初年的判决书认为，不完整的或者难以判断真伪的契约，无法作为裁判的依据。可以依据的是所谓的“官册”，也就是官府对田土的登记。但是山产并没有官方的登记，所以只能以就近的田土登记为参考。

³⁰ 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-10026，第 3 页。

³¹ 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-05739，第 19-20 页。

“宣统元年郭梦程等与郭梦璧等互控祖遗山产案”案及其判决，让我们对契约在确认山产权利以及山界上的作用，产生了怀疑。在各方的表述中，晚清龙泉的山产与田产一样，管业全凭契据。但我们仔细研读每个案件的档案，就会发现实际情况并不这么简单。山产的继承、租佃、抵押、买卖等经济行为，都伴随着对山界的重新划分、定义。这个过程往往起始于数十甚至数百年前，中间转手、分割多次。这些经济行为在传统中国仅依靠契约来记录，但仅凭契约文书并不能在山产山界的纠纷中“定份止争”。一方面，相关契约、文件在漫长岁月中的遗失、错伪，使得人们难以凭藉契约追究山产管业的历史过程。另一方面，契约之外的因素，如山林中的坟茔，新开的山田等等同样被当事人作为争夺山产权利的论据。而且这些契约不载的因素，也往往为官方所认可。

四、民国时期的查勘图与山区的地方知识

如上所述，山林的界址是在开发、买卖、分家析产的过程中不断变动的，这些变动有的记载在契约中，有的则没有。所以在山产木业纠纷中，实地查勘山界，对照契据和山场是否相符，查访当事人的村邻、亲戚，以确定山名、界址，以及是否有越界砍伐的情况就成为必要的步骤。

查勘可以由乡绅、族尊、耆老等充任的公人进行，也可以由知县派差或亲自前往。例如，在“宣统二年范绍文控刘文贵越界强砍案”³²中，两方各自邀请公人，范绍文的供词中说：

“挪(那)时候，经过公人陈日新同郭梦华看过山界契据的，刘文贵不遵契界，他的契据不把公人看。刘文贵供称乡有公正的人，就是李方棠、周师望二人，请他们去看便清楚的。生员们候刘文贵请李方棠周师望看明界址，再求断追。”³³

知县也认可他们先经由公人勘踏调解。公人查勘调解不成后，知县才派典史前往查勘。但这同样没有解决问题。据刘文贵在民国元年的呈状，“前周县令派卑鄙之典史李某查勘，范绍文又向李串贿，将山作弊变形呈图。”³⁴很可惜，这些晚清山产诉讼中绘制的查勘图，在档案中均未能保存下来。但我们能以民国时期

³²该案档案存于浙江龙泉档案馆藏《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，卷宗号：M003-01-03829，M003-01-10203，M003-01-12324，M003-01-13421，M003-01-14426，M003-01-14426，M003-01-14459，M003-01-16844。

³³《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-14426，第10页。

³⁴《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-13421，第5页。

的相关档案来一窥查勘图的样貌。

“民国十一年周陈养等与张绍鹏等山场纠葛案”³⁵，双方就争议山场提供了自康熙五年至民国十一年间的各式契约共 14 件，这些契约在结案后被领回，因此我们在档案中无法看到这些契约。但根据原被两造的呈状，两造所提供的契约中所记录的土名，以及这些土名、四至与所争山场的实际名称并不能完全吻合。原告周陈养在“周陈养与季文光为不凭契约突肆强砍事民事诉状”中称，所争山场为“和尚坞”：“缘民承祖手遗下有山一处，坐落西乡河村地方，土名和尚坞，自道光年间买得该山，历管至今，并无少异。”³⁶关于“和尚坞”的四至，据“周陈养等与张绍鹏等为补叙理由请求民事诉状”：

“民受买叶为贵山场，契内载有照依上手契据管业。嘉庆廿三年，吴复瑞之卖契为民管有山之正手上契。契不云乎，上至**山顶**，下至**坑**，内至**庚磨戍岗背分水直下漈**，外至**王家田**。以上所开四至，即民管有和尚坞山之四至。上下外三至，具与本案无涉。惟内至**庚磨戍**，为本山本契之关键。盖因**柱上畈**在**和尚坞**内也。庚磨戍下有水田，土名亦是庚磨戍，如季文光砍树处，其下之水田土名和尚坞也。山本之土名，原以附近之田之土名为土名。民管有和尚坞上，上手源流契据，纸纸载明，内至庚磨戍岗背分水直下漈，是和尚坞山场，应当管庚磨戍岗分水处也。庚磨戍下之田，有粮有号，一查便知。解决本案之点，是在查明季文光砍树之处，是否在庚磨戍外，如在庚磨戍外，即是侵占民之所有权。”³⁷

被告张绍明（鹏）的契约所记载的土名为“柱上”。据“张绍明等与周金养等为聚党纠抢无法无天事刑事诉状”：“缘民等先祖遗有西乡河村地方，土名柱上山场一处，历管已久，拚砍多次，并无置喙。”³⁸此处山产的四至，据“张绍鹏等为强阻强抢无法无天事民事辩诉状”：

“民等太祖张海林于嘉庆年间受买叶水寿山场一处，土名**柱上**安着。该山四至，东至**大堍旱岗**，南至**骑马坞**，西至**岗顶坞林头**，北至**乌连坑**为界。”³⁹

这些零零总总的土名，在实地究竟是指何处？所砍林木到底属于那片山场？

³⁵ 该案存于该案档案存于浙江龙泉档案馆藏《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》M003-01-8257，M003-01-9821，M003-01-10054 等卷宗。

³⁶ 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-09821，第 5 页。

³⁷ 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-09821，第 54 页。

³⁸ 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-09821，第 10 页。

³⁹ 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-09821，第 21 页。

两造都有不同的理解。龙泉县知事暨承审官派出承发吏前往实地查验，并绘制查勘图。根据承发吏的《为遵谕查勘据实报告事》，当地父老对所争山产的土名、四至有不同的说法。

“切吏奉钧署谕飭查勘周陈养与张绍鹏等砍木地点究在柱上，抑或在和尚坞，往查勘具覆核夺等。因奉此遵即前往西乡何（河）村地方，会同原被两造亲赴该山切实查勘。查得该山总土名为柱上，其大垄早岗与乌连坑、乌连头、鸦鹊坞、和尚坞、骑马坞等处，系属柱上之小土名。现在砍木地点，据原（告）称为和尚坞，据被（告）称为鸦鹊坞。吏讯该地耆老云：两名均有人称。砍木之内半里许有一大畝田垄，称为柱上畝，砍木之外半里许亦有一湾田亩称为骑马坞（查此田为本城周灵峰执管）当查勘时，该田适有本地村人在此耘田。吏暗询此处山名，据称确系骑马坞。惟庚磨戍地名，据原告指称系坐砍木之内岩濼，据被告指称系坐骑马坞之外岩濼。询诸村众，说坐内岩濼者有之，又说座外岩濼者亦有之，半吞半吐不肯直说。至于三石儿、山苗下、及晚旦活、碓石玄等处之山，均坐骑马坞以外，离砍木地点有三四里之遥，向为周姓执管，确与张姓无干。奉谕前因，合将查勘情形附绘图说，据实报请知事暨承审官察核施行。计呈原飭一件 山图一幅 承发吏陆赞庭谨呈 中华民国十一年七月十五日 呈”

所附绘图如下：

不论是契约，还是查勘报告、查勘图都显示，山林的开发已经造成了几乎每一片山都各有其名，各有其主的状况。这些小片山林的名称的形成，应该经历了一个过程。根据前引“周陈养等与张绍鹏等为补叙理由请求民事诉状”中“山本之土名，原以附近之田之土名为土名”的说法，山林土名的获得是与山田的开垦有关的。但这可能只是一部分与田毗连的山林的情况，因为毕竟还有大量与山田并不相邻的山林。而且，究竟是以山田土名命名了山林，还是以山林土名命名了新开垦的山田，也仍然是有待了解的问题。在档案所反映的晚清民国时期，这些山界、山名在当地社会中是有一定程度的共识的，换言之，对山林的这种细致化的认识，在龙泉这样的山区社会已是一种普及性的地方知识。这些地方知识和社区共识，构成了山林契约成立和有效运作的基础。

但同时，这些地方知识和共识又具有随意性和不确定性。不仅土名和山界在历史过程中会发生变化，而且由于这些知识往往还相当依赖于口头的传承，在口传的过程中出现多个不同的版本。例如在上述案例中，承发吏在调查询问当地人时得到的答案，砍树所在山林既被称为“鸦鹊坞”也被称为“和尚坞”，只因在当地土语中两者发音相似。而将口语的知识转化为契约的文字时，很容易发生记录的随意性和不统一性。这些都会成为诉讼中两造相互攻击的理据。这一状态至少在整个民国时期都没有改变。

五 国民政府时期的山产纠纷和山界认定

因为山林没有官方的登记，唯独依靠各类契约形成文字化、书面化的记录，而契约对山林的描述，也极少出现具体的亩数，而只有四至。尽管浙江省自民国元年以来，就数次发起不动产登记，但这些登记都以业主自动申报为主要方式，所以成效不佳。民国三十二年后，龙泉开始推行土地测量和强制性的产权登记，但也仅限于城区和几个镇的田土，大量山产并不在测量和登记范围之内⁴⁰。因此，民国时期的土地政策和历次运动，似乎并未对民间山产的产权和管业状态产生影响。

例如，“民国十七年汤嘉铨等与项承林等山场纠葛案”⁴¹历时十数年，“龙泉

40 关于龙泉民国时期的土地登记问题，将有另著文《从契约到土地产权状——以龙泉司法档案中产权证明方式的演变为例》介绍。

41 该案档案存于浙江龙泉档案馆藏《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，卷宗号：M003-01-10620，M003-01-14419，M003-01-15508。

县政府民事判决书十七年民字第九十七号”⁴²、“浙江永嘉地方法院民事判决二十年再字第四十三号”⁴³等现存的判决书档案都显示，原被两造对山产、山界的描述方式与晚清时期一样，他们对山产权利的申诉，仍然还都是围绕着契约进行的；各级审判机关的审理手段，也是对照契约记载进行的查勘调查或辨别契约真伪。

再如“民国三十五年曾贤谦等与李振汉确认山场杉木所有权案”，是民国晚期的案件。该案所涉之山原为曾姓兄弟五人所有，后其中一部分被一人出卖于李振汉。从两造的言词辩论和状词的论辩可知，虽然两造都有契约、宗谱等为证据，但因为前代数件契约所记载的土名、四至都不完全相同，契约所记与当时人口称的土名、四至都不能吻合，因此成为互相攻击的对象。如在被告李振汉的辩诉中就说：

“原告呈崇祯二年王德政卖契土名为白石玄路后，与其状称土名白石玄口已不相符，而系争山为土名白石玄底外竹山安着，又与原告之契载状称均不相符。又其契载四至为东至岗顶，南至梅树湾，西至坑，北至大溪为界，与其庭供系争山四至为东至横岗、南至湾，西至小坑，北至火路大岗直下坑为界，亦两不相符。足见该契对其起诉原因不能为相当之证明。”

44

这类在状词或言词辩论中的语言，当然只是一面之词，但其所描述的契约与状词、口述之间的差异，却不可能是编造。从法院的判决来看，曾贤谦要求确认所有权的请求也被认为契据不足，而被驳回。⁴⁵至于双方确认山界的请求，法院换派调查员进行了查勘，在查勘过程中双方承认山界在“火路大岗直下坑”，但是对于这条大岗的确切位置，又有不同的说法。最后龙泉县法院的判决，完全是出于法院调查人员的主观推断，而对山界的进行了重新划定。

这件发生在 1946 年的山界和山产所有权纠纷，不论是双方论辩的依据，还是法院调查、判决的方式都与晚清民初的案件是一样的。换言之，在民国四十余年中，对于山产所有权的确认，以及管业模式等等并没有大的变化。可以说整个民国时期，龙泉的山林产权和山界，仍然是处于传统时代以契约为主要凭据的状

⁴² 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-15508，第 417-420 页。

⁴³ 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-15508，第 432-442 页。

⁴⁴ “李振汉与曾贤谦等为对于原告曾风振请求确认山场及杉木共有权事件民事辩诉状”，《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-09181，第 64 页。

⁴⁵ “浙江龙泉地方法院民事判决民国三十五年度诉字第一零五号”，《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉档案馆藏，卷宗号：M003-01-09181，第 127-132 页。

态中。但根据我们上述的讨论，这种以契约管业的状态，是依靠着社区内有一定共识的地方知识而运作的。而这些知识并非确定不变。

龙泉档案所记录的山产纠纷和审判反映出，在山林产权的格局和产权认定、山产的管业方式、山界描述、甚至司法山产案的审理手段等方面，从晚清至民国时期的并没有大的变化。但这并不意味着传统的、以契约为主要手段而建立起来的山产权利秩序是稳定的，契约并非山区社会中确认山产权利的唯一途径，它也需要山区社会中对山林认识的共识来保障。而这种共识是脆弱而缺乏制度保障的。例如山界，山界并非仅是一道确定不变的自然地理分界线，而是人们围绕着这些地理标志物以及记载历次管业的契据、查勘报告、判决书等等，而建立起来的对山林的认识，这种认识永远是动态和变化的，在认识过程中充满了各方的解释、协商和斗争。

第二部

第2回「中国の山区社会と流域史」 シンポジウム論文

シンポジウム趣旨文

佐藤仁史

本科研（科研費基盤研究 B（海外学術調査）「近現代太湖流域農山漁村における自然資源管理に関する現地調査」）では、調査・研究の中間報告として 2014 年 7 月に「中国の山区社会と流域史」シンポジウムを開催し、国内外より 4 名の研究者を招いて報告いただきました（別紙参照）。今回は科研最終年度を迎え、約 4 年間にわたる調査・研究を纏めるべく本科研究班のメンバー 4 名を招いてシンポジウムを開催することにしました。

まず、シンポジウムのタイトルと着想に至った経緯を説明します。ここでいう「流域史」とは主要な調査地域である钱塘江水系（钱塘江、富春江、新安江）を想定しています。研究代表者を含む本科研のメンバー 2 人はいわゆる「ニプロ」（科学研究費補助金特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生」（研究代表者小島毅）の現地調査部門「海港をとりまく地域社会」（代表岡元司）に参加し、2007 年～2010 年の夏季休暇を中心に調査を進めました。調査に過程において、钱塘江水系の水面で生業を営んでいた九姓漁戸のうち、航運業に従事していたものが山間部の林産物を下流の大都市に運搬し、都市からは加工品や山間部では入手不能な物品を上流へと運搬する物流と深く関わっていたことを発見しました。近接する浙東の流域社会史については上田信氏による卓越した研究（『伝統中国』講談社、1995 年）が存在していますが、当該流域は盆地すなわち一定の低地を擁する地域であるのに対し、低地がほとんど限定された钱塘江水系における生産や自然との関わり方の有り様は流域毎に具体的に検討する必要があると思われます。

続いて「山区社会」ですが、钱塘江水系において九姓漁戸を初めとする航運業者が運搬していた林産物に着目し、林産物の生産や交易を取り巻く社会関係へと関心が移ってきたことから、本科研では钱塘江水系の山区社会の調査を重点的に実施してきました。調査の過程で、一口に同一地域の山区といっても土壌や林相によってその自然環境は様々であり、人々の自然に対する関わり方や社会関係も自然環境によって大きく規定されていることが具体的に明らかになりました。また、従来の農村研究はデルタ地帯に集中しており、中国の山村については基本的な知識についての蓄積も十分ではありませんでした。ところで、日本の中国農村に対する関心が村落共同体論から出発し、日本型の村落共同体を見いだせないということは夙に指摘されてきたところです。であるならば、中国山村においてはどのようにして共同性が成り立っていたのかという疑問が浮かび上がります。日本の里山のごとき共有地やその自然資源に対する共同性が中国において見いだせるのか否か。このようにして、中国農山村におけるローカル・コモンズについての問題関心へと発展してきました。

ローカル・コモンズの議論は環境史の問題関心と密接に関わるものです。近年では、グローバルヒストリーの隆盛とともに、一国史の枠組みにとらわれない歴史研究のあり方が提唱されています。環境史はその主要なテーマとして近年特に注目を浴びています。森林の開発(破壊)過程や動植物との関係については、マークエルビンの **The Retreat of the Elephants: An Environmental History of China** や上田信による一連のモノグラフ (『森と緑の中国史』『トラが語る中国史』など) が先駆的な研究を行っています。これらの研究は全中国を視野に入れたマクロなものであり、個別の流域社会や基層社会との関係については検討の余地が少なくありません。近年では、清水江文書の発見による清水江流域の分析や上海交通大学による石倉村文書の整理・刊行などの進展がみられているもののさらなる事例の蓄積は不可欠です。また、国民国家建設過程において生み出された近代制度や近代知の導入による影響や、20世紀中葉における土地改革、土地私有制の廃止、集団化など一連の政策によってもたらされた変化も重要な分析対象です。これらについても地域からアプローチする環境史の枠組みのなかで分析することは相当な有効性を有していると考えられます。

以上が本科研を開始した当初の問題関心です。しかしながら、かようなアプローチによる研究や分析対象に関する文献が十分に蓄積されてきてはいないため、研究班による調査は基礎的な状況の理解や資料の収集といったファクト・ファインディングの作業に費やされることとなりました。特に大きな成果としては2つの異なる種類の史料の発見を挙げることができます。1つは、2013年の夏季調査において、ある村の元生産大体会計担当者から、1960年～1980年代初頭にかけての生産隊の帳簿群を撮影させていただいたことです。これらの解読を通じて、集団化期から改革開放初期における山村の生産活動をつぶさに分析することが可能になると思われます。もう1つは2015年の夏季調査において発見した個人的資料です。これは別の村の元生産大隊会計関係者を訪ねた際に閲覧させていただいたもので、10万字に及び回想録とその元となった手帳群(1972年～現在)です。これらの資料は一農民の視点から現代中国山村の実態を理解するのに好個の史料であると思われます。こうした資料を中心としてまず現代中国山村を理解し、その上で近代中国山村について遡及的に理解を深めていくという方法を今後模索したいと考えています。

以上述べてきた問題関心と調査の過程を踏まえ、本シンポジウムでは中国の山区社会研究を専門とする4人の研究者が次のような報告を行います。唐立宗報告は明末浙江における山間部の開発と山間部住民の活動の変容を分析するものです。相原佳之報告は山野を「生存資源供給源」としてみなし、清代中国においてどのように利用されてきたかを考察するもので、本科研の主題の1つであるコモンズ論を踏まえたものです。杜正貞報告は近代的な法制観念が登場した清末以降において浙江の山林所有権をめぐる手続きがどのように変化したのかを検討します。陳明華は浙江の山地社会の変容のなかで齋教が伝播していく過程を追跡します。

從防礦到防菁：晚明浙江山民活動與軍兵因應

唐立宗

前言

浙江是明代中國的東南重地，無論是文教發展、農工生產乃至財賦稅收，都有相當突出的表現。但在文風鼎盛、富裕繁華的外觀下，特別是自明代中葉以降，也有許多暴力型態的經濟活動，是以不斷動用武力、強制壓迫，或是掠奪方式進行財富累積，小民、豪紳競相參與，難以遏止。正如浙江巡撫趙炳然(1507-1569)所言：「惟浙江地方，在邊海則有倭寇，在內地則有盜賊，在河港則有鹽徒，在山僻則有礦徒。中間外作嚮導，姦細內為接濟，窩家往往有之。」¹大致上來看，我們可以區分為沿海與山區兩股勢力在活動發展。關於浙江沿海的倭亂問題，現今已有大量的相關文獻與研究著述。相較之下，浙江山區礦徒活動的研究討論則遜色不少，且多集中於葉宗留(1404-1448)領導的礦工抗爭，並被標示為「農民起義」的性質。²

¹ [明]兵部編，《浙江海防兵糧疏》（《天一閣藏明代政書珍本叢刊》16，據嘉靖刻本影印，北京：線裝書局，2010），頁506。

² 早期代表性的研究有：胡寄馨，〈明代的礦賊和鹽盜〉，《社會科學》，3：1、2(1947)，頁75-87；何鵬毓，〈明正統年間東南地區的農民大起義〉，《史學月刊》，10(1951)，頁5-9；田中正俊、佐伯有一，〈十五世紀における福建の農民叛乱〉，《歴史学研究》，167(1954)，後修改成〈起ちあがる農民たち—一五世紀における中国の農民叛乱〉，收入田中正俊，《田中正俊歴史論集》（東京：汲古書院，2004），頁4-51；于貴信，〈關於葉宗留、鄧茂七起義的幾個問題〉，《史學集刊》，1(1956)，頁47-62；李龍潛，〈明正統年間葉宗留鄧茂七起義的經過及特點〉，《歷史教學》，3(1957)，頁11-16；李龍潛，〈試論明代礦工運動的反抗鬥爭〉，《史學月刊》，3(1959)，頁30-36。近年研究則重新審視明代浙江礦業開採的發展與矛盾癥結，如陳衍德，〈明中葉浙閩礦工

此外，晚明浙江山區還出現一群來自閩汀移民的「菁民」，他們主要是租山或受雇於從事藍靛的種植與加工業，也有的是進行種麻、植杉、燒炭、造紙等山區開發工作，時而因市場需求改變經營生產方式，亦常因細故激起衝突糾紛，同樣是值得關注研究的課題。³礦徒、菁民勢力相繼崛起於全國重要的經濟、文化重心，引起有關當局的高度重視，欲傾全力去圍堵防範，但目前的研究討論卻顯不足。因此本文將藉由晚明浙江山區出現非法採冶、經濟開發所引發的衝突，進而論析官府的軍事因應措施。

一、「礦盜」復聚與軍兵招募

所謂「礦盜」，〔順治〕《龍泉縣志》有很好的詮釋：「聞之昔者鑿坑之徒，悉屬亡命。偶而獲，則肝腦塗地亦不憚；不獲，則哨眾劫奪，遂流而為礦盜。」⁴這

農民起義與資本主義萌芽》，《中國社會經濟史研究》，3(1993)，頁 36-42、71；董郁奎，〈明代浙江的銀礦開採〉，《浙江方志》，3(1994)，頁 38-40。或是強調官府的應對措施：劉利平，〈明正統以降銀礦盜採活動及政府對策〉，《蘭州學刊》，11(2006)，頁 51-54。相關討論亦可參見唐立宗，〈明初浙江礦盜事件與善後措施〉，收入中國明史學會等編，《第十四屆明史國際學術研討會論文集》(昆明：雲南人民出版社，2013)，頁 184-187。

³ 以傅衣凌研究最具開創性，參見傅衣凌，〈明清之際的“奴變”和佃農解放運動〉，收入《明清農村社會經濟》(北京：生活·讀書·新知三聯書店，1961)，頁 68-153；傅衣凌，〈關於中國資本主義萌芽的若干問題的商榷——附論中國封建社會長期停滯的原因〉(1961)，後收入《明清社會經濟史論文集》(北京：中華書局，2008)，頁 1-15。關於明清閩浙山區開發，還可參考森田明，〈明末清代之「棚民」について〉，《人文研究》，28-9(1976)，頁 1-38。Stephen C. Averill, “The Shed People and the Opening of the Yangzi Highlands,” *Modern China*, 9:1 (Jan., 1983), pp. 84-126; Sow-Theng Leong, *Migration and Ethnicity in Chinese History: Hakkas, Pengmin, and Their Neighbors* (Stanford, Calif.: Stanford University Press, 1997). 曹樹基，〈清代前期浙江山區的客家移民〉，《客家學研究》，第四輯(1997)，頁 1-13；劉秀生，〈清代閩浙贛皖的棚民經濟〉，《中國社會經濟史研究》，1998 年第 1 期，頁 53-60；徐曉望，〈明清東南山區社會經濟轉型——以閩浙贛邊為中心〉(北京：中國文史出版社，2014)。

⁴ 〔順治〕《龍泉縣志》(《稀見中國地方志彙刊》第 19 冊，據清順治十二年刻本影印)，卷 4，〈貨食·坑場〉，頁 1240。

說明了採礦者在一般官民的眼中，幾乎都是亡命凶狠之徒。這些流聚礦徒究竟來自何方？為何會一再犯禁，屢與官方發生衝突？

當處州礦徒葉宗留起事時，御史柳華(1393-?)分析過原因：「浙江處州山多田少，民無以為生，往往於福建、江西諸銀鐵鉛場盜採。」⁵這是指處州百姓常因生計到毗鄰礦區非法採礦。擔任過溫處分守道的馮時可(1547-1617)就指出處州府境七縣就有五十一處礦場，已是浙江之冠，接著他將處州與同屬浙江轄下的十府做比較，得出處州礦徒獨盛他郡與私採盜礦極易倡亂之因：

十郡之民皆通商，而處獨無商。十郡之民皆力田，而處獨少田。生計鮮少，救死不贍，故相習盜礦以自糊其口。然所稱五十一處，皆係鉛鐵銅錫，而銀礦百無一二，採取無利，徒眾難解，因而為亂。⁶

依此來看，受環境條件使然，不少小民耳濡目染，對開採技藝相當熟練，成為礦徒並非偶然。只是受到礦場採收多寡，以及挖掘後所提煉的金屬是否符合採收效益，或是要投入多少人力物力與時間才能獲利，都必須全盤考量，否則必然落到血本無歸的下場，最終投入倡亂起事的行列。

到了嘉靖年間(1522-1566)，浙江礦徒倡亂的場域，已不僅止集中於浙南地區一帶，而是有漸往北至衢州、嚴州與江西交界地區發展的態勢，甚者沿伸到南直隸的徽州、寧國府等地，造成深遠影響，故《明史》評論曰：「浙江、江西盜礦

⁵ [明]陳文等撰，《明英宗實錄》(臺北：中央研究院歷史語言研究所，1966)，卷152，「正統十二年四月辛亥條」。

⁶ [明]馮時可，《超然樓集》(臺北傅斯年圖書館據內閣文庫藏明萬曆丁酉年鄭汝璧序刊本影印)，卷10，〈議停止採礦狀〉，頁42b-43a。

者且劫徽、寧，天下漸多事矣。」⁷礦徒活動範圍的擴大，深究其原因，除了地方對於礦防管理的輕忽外，各界對白銀渴望與消費需求，以及政府發動開礦運動的舉措，皆起了關鍵性作用。此時浙江官員已漸感到日後礦徒問題定將格外棘手，他們注意到「嚴州淳安等縣礦徒嘯聚，出沒無常，雖一時為患未深，而不早為撲滅，俟其燎原，而後徐圖之，計亦晚矣」，曾題請杭州城內應再添設一名參將駐守防禦。⁸

浙江地方軍事防禦力量的補強，還有賴於增加兵員、訓練精實以及武器與軍餉補給是否充分，無兵員、無餉源即無法應戰。兵員方面，嘉靖二十八年(1549)，官府允准百姓「有能率眾報効，招至百名以上者，給冠帶」，若是「三百名以上者，授散官」職銜。⁹自嘉靖三十二年(1553)起，有官員提出「各府州縣隨宜招募，使人自為戰，家自為守」，同時也有官員建議「募土人，習水者為篙師，有力者為戰卒，仍調溫、處坑兵，或山東長鎗手，有警則隨機策應，無事則分投教習」等策略。¹⁰特別強調「吳浙間耆民、沙民、鹽徒、礦徒，類皆可用」。¹¹數年後，適逢嘉靖三十七年(1558)浙江義烏縣發生八寶山採礦事件，縣官集結地方民兵成功擊潰來自處州等地的礦徒，此後官方極為讚賞義烏民兵的力量：「處賊稱悍，

⁷ [清]張廷玉等撰·《明史》(北京：中華書局·1997)，卷81·〈志第五十七·食貨五〉·頁1971。

⁸ [明]胡宗憲著·山根幸夫解題·《三巡奏議》(東京：古典研究會·據德山毛利家藏本影印·1964)，卷3·〈題為議添將官以備戰守以保地方疏〉·頁237-246。

⁹ [崇禎]《義烏縣志》(《稀見中國地方志彙刊》第17冊·據明崇禎年間刻本影印)·卷8·〈時務書·民兵〉·頁453。

¹⁰ [明]張居正等撰·《明世宗實錄》(臺北：中央研究院歷史語言研究所·1966)·卷401·「嘉靖三十二年八月壬寅條」。

¹¹ 《明世宗實錄》·卷417·「嘉靖三十三年十二月辛巳條」。

烏民一戰殲之，勇可知已！」¹²這些民兵，「其技以長槍勝，鄉人私相傳，稍得兵法」，因而深受各界矚目，遠近競募。¹³

此時招募來的民兵在省城分入東、西兩大營，各營統由游擊將軍訓練，並受督撫、道台等官員調遣節制。其下則有中軍官、旗牌官等軍官統籌指揮，營兵再分左、右、中、前、後共五總，每總各有一員名色把總率領轄下兵員，設營的用意就是在「教練義烏民兵」。¹⁴戚繼光(1528-1588)對於義烏兵的評價相當高，尤其是義烏縣廿七都人的陳大成，他以武生應募從軍，統率子姪親兵五千訓練，能以一當百，授台州衛百戶官，並隨同戚繼光參與閩浙等地剿倭戰事，前後告捷十二次，欽賞銀三次，特別晉級一次，歷授台州衛指揮僉事，轉陞任浙江管理中軍都司署都指揮，兼統西大營官兵。¹⁵中軍都司又稱中軍坐營都司，是專為軍事防倭而添設的職官，為分理軍門庶務之官，凡發號布令，繕器選兵，提調營操，輯睦將士，皆其職責，若非素識兵情、練達軍務者，難任其職。¹⁶所以，戚繼光一再地讚揚陳大成等將士的卓越貢獻。¹⁷

¹²〔明〕朱國禎著，繆宏點校，《湧幢小品》（北京：文化藝術出版社，1998），卷30，〈平倭〉，頁733。

¹³〔萬曆〕《紹興府志》（《中國方志叢書》華中浙江520，據明萬曆十五年刊本影印），卷23，〈武備志一〉，頁1728。

¹⁴〔萬曆〕《杭州府志》（《中國方志叢書》華中浙江524，據明萬曆七年刊本影印），卷36，〈兵防下·標兵〉，頁662。

¹⁵〔明〕戚祚國彙纂，晁毓虹等點校，《戚繼光年譜》（濟南：山東大學出版社，1999），頁24；〔崇禎〕《義烏縣志》，卷16，〈人物傳·武功·陳大臣〉，頁598。

¹⁶〔明〕劉畿，《督撫疏議》（上海圖書館藏明隆慶元年杭州吳一介刻本），卷10，〈議補中軍官員〉，頁17a-b。

¹⁷如〔明〕戚祚國彙纂，晁毓虹等點校，《戚繼光年譜》，頁23-24引戚繼光〈練兵議〉：「聞義烏露金穴，括徒遞陳兵于疆，邑人奮荊棘禦之，暴骨盈野。其氣敵愾，其習慣而自輕，其俗力本無他，宜可鼓舞。及今簡練訊習，即一旅可當三軍，何患無兵。」戚繼光之子戚祚國按語曰：「時有陳大成者，著名里中，家嚴善之，而不謂能戎事者也。」即強調陳大成還有軍事以外的才幹。

義烏民兵跟隨戚繼光南征北討，戰功彪炳，帶動地方從軍的熱潮，如汪道昆(1525-1593)所云：「義烏兵殺倭既久，獲功亦多，赤立而出，歸懷百金；起自宵人，立至連帥，比比然也。」¹⁸從軍成為名利雙收的最佳途徑。然而百姓趨之若鶩的投入軍旅生活後，卻導致地方「小民力農者少，田地拋荒者多」，不久陳大成就呈報「義烏縣冊止一萬五千戶，今投兵者三萬七千餘名」這樣的怪象。¹⁹翻查《義烏縣志》，嘉靖四十一年(1562)的戶口記錄是一萬五千五百一十戶、七萬一千二百九十口。²⁰象徵帳冊上全縣過半的民人皆入軍伍，當然非同小可，吏部尚書楊博(1509-1574)即認為：「義烏民俗獷悍，竄名兵籍，散無所歸，恐生他變，先事預籌，不可不加之意也。」²¹

兵餉是由地方政府支應，過多的兵員，也就帶來地方財政負擔過重的問題，為了節省兵餉，陳大成建議可將省城西大營的民兵調回家鄉屯練：「查得把總陳文澄等五總兵勇，俱係義烏縣人民，請乞發回本縣，一月三操，閒日務農，止給廩糧之半；遇警聽調，仍准全給，則兵糧不費，而地方無虞矣。」台金嚴兵備道僉事趙大河(1508-1572)認為此舉有四利：(1)「講武於農隙，養銳於平時，當汛調用，既畢復還，隱然虎豹在山」。(2)金華八寶等山「盜礦頑民，萬一竊發，就近移兵，即可撲捕」。(3)使其「歸治農業，樂爾妻孥，啟流移復業之端，免糧差逋

¹⁸ [明] 汪道昆撰，胡益民、余國慶點校，《太函集·太函副墨》(合肥：黃山書社，2004)，卷2，〈備倭議〉，頁2787。

¹⁹ [明] 劉畿，《督撫疏議》，卷2，〈減徵山蕩餉銀疏〉，頁9a。

²⁰ [崇禎]《義烏縣志》，卷6，〈物土考·戶口〉，頁427。

²¹ [明] 楊博，〈議天下郡縣繁簡疏〉，「隆慶元年八月二十五日題」，收入[明] 張鹵，《皇明嘉隆疏抄》(《四庫全書存目叢書》史部73，據上海圖書館藏明萬曆刻本影印)，卷18，頁333-334。

負之累」。(4)「五營兵士，通縣人民，眾口稱便，誠為經久可行之良法」。這些建議更得到浙江都布按三司官員，以及浙江巡撫劉畿(1509-1569)的支持，自嘉靖四十四年(1565)七月起，劉畿遂調遣標下西大營中軍坐營都司陳大成領五總兵，駐節於義烏縣，操練聽調。²²

西大營的五總義烏民兵回縣操練，官方的估算是可省銀八千七百二十七兩六錢，加上汰減冗弱官兵的省費，更是可以減徵浙江地區的山蕩稅銀。²³〔崇禎〕《義烏縣志》亦稱：

時倭寇既殄，而士卒多虛糜廩糧，民不勝困罷。(陳)大成乃建議領兵屯操，每年春訊[汛]四箇月，照舊給糧，出守六箇月，減糧回縣。逢五赴操，遇警聽調，兵既得以附家，地方又可保守，而院道是其議。於是各兵工食，量行裁減，共得省銀九千七百八十五兩八錢，減派山蕩額稅之半，是舉盡是多矣。²⁴

不論是八千或九千餘兩，陳大成領兵回縣操練確實是省卻一筆龐大的兵餉，尤其是領兵屯操，仍復有枕戈待旦訓練寓意，浙江巡撫劉畿即說調兵：「正慮礦徒竊發，則就近調遣，緩急有備耳。」²⁵強調陳大成是奉命「發回義烏練兵」。²⁶

值得注意的是，本職是中軍坐營都司的陳大成，由於率領五總軍兵移置義烏練

²²〔明〕劉畿，《督撫疏議》，卷2，〈減徵山蕩餉銀疏〉，頁7b-14b。此外，關於趙大河與義烏兵的事蹟，可參考陳學文，〈明代抗倭監軍趙大河評述——以趙用賢撰寫的墓誌銘為中心〉，《江蘇科技大學學報(社會科學版)》，9：2(2009)，頁10-12、16。

²³〔明〕劉畿，《督撫疏議》，卷5，〈議減田地餉銀疏〉，頁1a-10b。

²⁴〔崇禎〕《義烏縣志》，卷16，〈人物傳·武功·陳大臣〉，頁598。

²⁵〔明〕劉畿，《督撫疏議》，卷4，〈請改兵備及防礦官兵疏〉，頁13b-14a。

²⁶〔明〕劉畿，《督撫疏議》，卷10，〈議補中軍官員〉，頁17a。

兵，因此官文書上往往慣稱其職銜為「練兵都司」，如「原委練兵中軍都司陳大成」或是「練兵都司陳大成」。²⁷

二、都司與守備編制下的防礦軍事體系

以往浙江並未有練兵都司，陳大成是第一位擁有這個官職稱謂的軍官，專責練兵以防範礦徒，後來擔任過浙江巡撫的溫純(1539-1607)即稱：「惟浙故無防礦，都司有之，自嘉靖四十四年始。」²⁸關於明代都司，原為管軍機構，即都指揮使司的簡稱，但後來漸成為營兵制下的中級武官職銜，都司之上有總兵官、參將、遊擊，其下則有把總的軍事鎮戍層級。營兵制中營官的主要來源是從衛所官中抽調，因事而命，無定制，是一種不成熟的兵制，但隨著衛所制的日益廢弛，營兵制愈來愈受到朝廷的倚重，經常藉以強化整體的軍事實力，而都司等營伍職官也扮演重要的角色。²⁹就浙江而論，明代中後期東南沿海地區倭亂不絕，山區則迸發礦徒私採事件，「浙江軍衛狼狽日久，尺籍空存」。³⁰原先的地方軍事體系早已不堪一擊，為求儘早恢復社會秩序，於是官員設法調整與補強地方軍事力量，在過程中進而推動營兵制的發展。

²⁷ [明] 劉畿，〈督撫疏議〉，卷 4，〈剿平流賊大捷疏〉，頁 4a、10a。

²⁸ [明] 溫純，〈溫恭毅集〉（《景印文淵閣四庫全書》第 1288 冊），卷 4，〈俯竭愚衷敬陳末議以求少裨治理疏·酌礦防〉，頁 469。

²⁹ 參見王莉，〈明代營兵制初探〉，《北京師範大學學報(社會科學)》，1991 年第 2 期，頁 85-93；彭勇，〈從“都司”含義的演變看明代衛所制與營兵制的并行與交錯——以從“都司領班”到“領班都司”的轉變為線索〉，《明史研究論叢》，第 13 輯(北京：中國廣播影視出版社，2014)，頁 140-153。

³⁰ [明] 兵部編，〈浙江海防兵糧疏〉，頁 502；《明世宗實錄》，卷 521，「嘉靖四十二年五月庚辰條」。

嘉靖四十四年(1565)十一月，浙江、南直隸交界山區屢傳礦徒倡亂事件。起初「遊民據銅山者，聚至萬人，始以採礦為利，間者為寇，有司莫能詰」。³¹接著在南直隸徽州府歙、休寧縣境內，「所過鹵掠斫人」，燒毀民舍，「見大舍，入據蓐食，錢物為之一空，官、民兵遷延，不敢往擊、尾隨之」。³²並糾聚一千五百餘人，抵至徽州婺源縣界，「放兵四掠」。³³隔年正月，攻入婺源，還分眾「流劫德興、玉山等處」，³⁴這段期間亦有四百餘人劫掠遂安縣的五都、十五都七保等地。³⁵十七日，二百餘人突至開化縣華埠等處行劫。³⁶十八日，常山縣城郊則有密謀攻城者，遣其徒三、四十人進城貿易，打算擇期發動內應夾攻，城內士民終日惶恐。³⁷嘉靖四十五年(1566)二月，婺源縣治遭焚燬，礦徒「大掠而去」。³⁸十二日，常山縣奏報這些徒眾從江西德興來到玉山縣陂口，並抵至「本縣七都連界，勢頗猖獗」。³⁹三月五日，有礦徒自處州府遂昌縣進入嚴州府境，至十一日，遂昌、遂安兩地礦徒「合而為一」，沿途雖屢遭官兵驅擊，但仍「尚千計」。⁴⁰後來復

³¹ [明]方弘靜，《素園存稿》(《四庫全書存目叢書》集部 121，據北京大學圖書館藏明萬曆刻本印)，卷 12，〈通奉大夫貴州布政使司左布政使漸江先生江公行狀〉，頁 201。

³² [明]吳子玉撰，《大鄞山人集》(《四庫全書存目叢書》集部 141，據吉林大學圖書館藏明萬曆十六年黃正蒙刻本影印)，卷 31，〈兵防略〉，頁 607。

³³ [明]焦竑撰，李劍雄點校，《澹園集》(北京：中華書局，1999)，卷 24，〈潘朝言傳〉，頁 322。

³⁴ 《明世宗實錄》，卷 554，「嘉靖四十五年正月己未條」。

³⁵ [萬曆]《遂安縣志》(《中國方志叢書》華中浙江 571，據明萬曆四十年修鈔本影印)，卷 3，〈武備志〉，頁 319。

³⁶ [明]劉畿，《三省礦防考》(臺北傅斯年圖書館藏明隆慶元年刊本)，卷上，〈兵部為飛報地方賊情事〉，頁 1a。

³⁷ [康熙]《常山縣志》(《日本藏中國罕見地方志叢刊續編》4，據清康熙二十二年年抄本影印)，卷 15，〈雜紀表·變異〉，頁 760-161。

³⁸ 《明世宗實錄》，卷 556，「嘉靖四十五年三月庚申條」。

³⁹ [明]劉畿，《三省礦防考》，卷上，〈兵部為飛報地方賊情事〉，頁 1b-2a。

⁴⁰ [明]唐汝楫，《小漁先生遺稿》(《四庫全書存目叢書》集部 122，據北京大學圖書館藏明萬曆四十三年刻本印)，卷 5，〈兵部右侍郎劉公平寇生祠碑〉，頁 122。

流入徽州府歙縣境內之陽湖邊，官兵隔岸觀望，「無敢狙擊」，幸有射手奪舟匿於蘆葦中，射傷渠魁，礦徒氣奪，方漸散去。⁴¹

婺源城陷後，各地風聲鶴唳，徽州、寧國各府縣均加強戒備因應。如績溪縣令郁蘭(1512-1585)「率民兵百，疾驅據險阨」，「手糧鉏，待之境上」。⁴²寧國府旌德縣則因傳聞雲霧山的礦徒將來犯，為此闔邑戒嚴，「奉督撫檄造」，始建城郭。⁴³較令人意外的是，當礦徒來襲時，居然還有勢豪接濟油糧，百姓嚮導引路，走報軍情，以圖厚利，更引發地方士子們的議論。⁴⁴處州礦徒怎麼會在衢州一帶活躍不已呢？浙江巡撫劉畿接獲婺源城陷消息，不敢相信地說：「處固我所治，且又安能越千里而為寇哉？」派人打探結果才知道處州礦徒的發展情勢，有感而發：「處人者，非人也。」⁴⁵

據明人范欽(1506-1585)的描述，衢州「當浙上游，接江、閩，風氣相薄，俗故彌鷙悍」，更甚以往的是，「邇者，蓋岌岌矣，山寇侵掠，驚動遠邇」。⁴⁶面對浙江衢州山區的動亂，巡撫劉畿親自到衢州指揮調度各級官兵，發牌督令在義烏練

⁴¹ [明] 吳子玉撰，《大鄣山人集》，卷 31，〈兵防略〉，頁 607。

⁴² [明] 陳懿典，《陳學士先生初集》（《四庫禁燬書叢刊》集部 79，據北京大學圖書館藏明萬曆四十八年曹憲來刻本影印），卷 16，〈刑部主事暘川郁公行狀〉，頁 278；[明] 茅坤撰，張大芝、張夢新點校，《茅坤集·茅鹿門先生文集》（杭州：浙江古籍出版社，1993），卷 25，〈承德郎南京刑部主事郁陽川公墓表〉，頁 735。

⁴³ [萬曆]《旌德縣志》（《南京圖書館孤本善本叢刊·明代孤本方志專輯》，據明萬曆二十七年刻本影印），卷 10，〈疆域志第二·城郭〉，頁 9a。其實雲霧山並無礦產，但各地居民皆以為礦徒來自於雲霧山，可參見邱仲麟，〈另一座封禁山——明清浙贛交界雲霧山的採木事件〉，《歷史地理》，2014 年第 2 期，頁 279-296。

⁴⁴ 朱開宇，《科舉社會、地域秩序與宗族發展——宋明間的徽州，1100-1644》（《國立臺灣大學文史叢刊》124，國立臺灣大學出版委員會，2004）。

⁴⁵ [明] 詹萊，〈報功祠記〉，收入 [康熙]《常山縣志》，卷 5，〈學校〉，頁 302-304。

⁴⁶ [明] 范欽著，袁慧整理，《天一閣集》（寧波：寧波出版社，2006），卷 21，〈贈見庵王大尹丞衢郡序〉，頁 289。

兵都司陳大成，分發部下把總陳子鑾、陳猷官兵二枝，前往衢州相機協剿。⁴⁷並批公文指示溫處兵備道趕緊因應：「近訪礦徒、流賊，皆係泰順、龍泉等縣之民，俱從遂昌而來，流劫衢、嚴二府，延及徽、歙、饒、信之間。」⁴⁸有鑒於南直隸、浙江、江西三省交界地勢崎嶇，礦徒在山區要地不時嘯聚，巡撫劉畿遂將原來的義烏五總官兵建置重新整編，命都司陳大成帶兵駐紮衢州防禦，其後再調整為民兵二總仍駐義烏，以聽調用，其餘三總兵由陳大成統於衢州駐紮，原題所減月糧兵餉照舊全給。⁴⁹所以此時的練兵都司領導編制、駐防地與士兵待遇都有了很大的變化。

嘉靖四十五年(1566)三月三十日，劉畿陞授為浙江、南直隸、江西三省總督，在任上極力釐清職權，爭取兵備道駐地及其管轄區域，並盡力解決各省軍兵糧餉的供給爭議。⁵⁰例如針對新設的徽饒嚴衢兵備道統轄兵員，他指示「將見駐衢州府都司陳大成部下，把總陳文澄等三總官兵，共一千七百八十一員名，作為該道標兵，以二總駐衢州，一總駐蘭谿，分投巡緝，封塞礦源」，同時增加徽州募兵員額以協守駐防。為專責起見，劉畿提議「陳大成原係中軍坐營都司，今既領兵防礦，似應量改職銜」，官兵糧餉犒賞等費用約計銀二萬四千兩，由徽州、衢州、金華、嚴州四府均派銀六千兩出辦。又因都司駐地有常守之責，「亦須量蓋公宇

⁴⁷ [明] 劉畿，〈《三省礦防考》·卷上·〈兵部為飛報地方賊情事〉〉，頁 2a-b。

⁴⁸ [明] 劉畿，〈《督撫疏議》·卷 10·〈批行溫處兵備道調兵遂昌防禦礦寇〉〉，頁 5b。

⁴⁹ [明] 劉畿，〈《督撫疏議》·卷 4·〈請改兵備及防礦官兵疏〉〉，頁 13b-14a。

⁵⁰ 唐立宗，〈《抗冶競利——明代礦政、礦盜與地方社會》〉(臺北：國立政治大學歷史學系，2011)，頁 379-391。

一所」，故決定在衢州府城內教場改造廳宇衙署，「兩旁蓋列各兵營房」。⁵¹於是在嘉靖四十五年(1566)十月，兵部下令將陳大成以原職改為「總捕都司」，「專駐衢州防禦，遇有礦寇出沒」，合同兵備道調度剿捕。⁵²

關於明代總捕都司，萬曆年間重修的《明會典》記載相當簡略，在浙江鎮戍將領條下有記：「總捕都司一員，嘉靖四十五年添設，駐劄衢州。」⁵³總捕都司職責首在防禦礦徒出沒，部分史料即冠以「防礦」之名，如〔天啟〕《衢州府志》稱總捕都司一職是在嘉靖四十五年「添設防礦」；〔康熙〕《衢州府志》更稱「世宗嘉靖四十五年，設防礦總捕都司一員」。⁵⁴所以真正具有「防礦」職掌寓意的「都司」將領，應該是始自嘉靖四十五年(1566)十月。

就指揮系統而言，總捕都司必須接受督撫、兵備道的指揮調度，而總捕都司轄下的軍兵亦均為徽饒嚴衢兵備道統轄之標兵。自總捕都司率兵常駐衢州後，浙江一省的防礦工作已漸臻於完備，果然有效嚇阻礦徒起事，彼時僅在隆慶四年(1570)傳出南直隸寧國、池州府有「浙礦盜」劫掠災情。⁵⁵兵力編制方面，在衢州

⁵¹〔明〕劉畿，《督撫疏議》，卷4，〈議處衢徽防礦兵餉疏〉，頁25b-30b。

⁵²〔明〕劉畿，《三省礦防考》，卷上，〈兵部為欽奉明旨議處善後事宜以安三省地方事〉，頁35a-b、45b；《督撫疏議》，卷4，〈請改兵備及防礦官兵疏〉，頁13b-14a；〔明〕楊博，《楊襄毅公本兵疏議》（《四庫全書存目叢書》史部61，據浙江圖書館藏明萬曆十四年師貞堂刻本影印），卷20，〈覆浙直總督侍郎劉畿等計處徽饒兵備兵餉疏〉，「嘉靖四十五年十月初五日題」，頁721-722。

⁵³〔萬曆〕《大明會典》（南京：江蘇廣陵古籍刻印社據明萬曆刊本影印，1989），卷127，〈兵部十·鎮戍二·將領下·浙江〉，頁1828。

⁵⁴〔天啟〕《衢州府志》（《中國方志叢書》華中浙江582，據傅斯年圖書館藏明天啟二年刊本影印），卷5，〈兵戎志〉，頁619；〔康熙〕《衢州府志》（《中國方志叢書》華中浙江195，據清康熙五十年修、清光緒八年重刊本影印），卷16，〈武官〉，頁1189。

⁵⁵〔萬曆〕《池州府志》（《中國方志叢書》華中安徽635，據明萬曆四十年刊本影印），卷7，〈通考志〉，頁945。

設有一營的防礦官兵，其下設兵三總，兵馬額共一千六百二十三員匹，其中一總支領徽州府協濟兵餉，俱屯插衢州府城訓練。⁵⁶其後地方稍寧，隆慶六年(1572)六月起，開始調整兵備道轄區，止管金華、衢州二府。⁵⁷同時裁撤徽州募兵，即減去一總兵力，實存二總，名為前、左二營，約有千名軍兵，一總(前營)由都司直接管領，另一總(左營)官兵則受當地千百戶軍官指揮，俱聽總捕都司節制。⁵⁸

總捕都司及其營兵是穩定地方社會秩序的力量，浙江巡撫溫純相當重視總捕都司的角色，在〈練兵檄〉中要求總捕都司統領前營、左營這二總民兵，「每遇秋末冬初，水涸土堅，恐奸徒垂涎盜掘，督令將二營官兵，每月初二、十六為期，輪撥哨隊什兵各三十一名，哨探防禦」。其中前營定期分派三路哨兵：一路官兵往西安縣的杜澤、雙橋、銅山等地；一路發往西安縣湖南、嚴剝等地；一路往蘭谿縣永昌街、壽昌縣白沙渡等地。至於左營兵力巡哨則分作四路：一路從開化縣華埠前往馬金嶺，直抵嚴州府遂安縣交界；一路往開化縣四都葉坑深山下，至遂安縣長山交界處；一路往開化縣雲霧山，由葉谿嶺直抵江山、德興縣交界；一路往徽州婺源縣大容嶺，自容田坑直抵徽州交界。而江山縣之石門另撥兵一哨專守，「以扼鑛賊之喉吭」。⁵⁹

⁵⁶ [明] 范涑，《兩浙海防類考續編》(《四庫全書存目叢書》史部 226，據北京大學圖書館明萬曆三十年刻本影印)，卷 3，〈原考·衢州兵巡道監督·總捕都司統領〉，頁 366；[天啟]《衢州府志》，卷 5，〈兵戎志·防礦兵〉，頁 641。

⁵⁷ 《明神宗實錄》，卷 2，「隆慶六年六月庚午條」記載徽州府、《明神宗實錄》，卷 53，「萬曆四年八月辛未條」記載嚴州府、《明神宗實錄》，卷 75，「萬曆六年五月癸酉條」記載饒州府。

⁵⁸ [康熙]《衢州府志》，卷 28，〈兵防〉，頁 1783-1784。

⁵⁹ [明] 溫純，〈練兵檄〉，引自 [明] 王在晉，《海防纂要》(《四庫禁燬書叢刊》史部 17，據華東師範大學圖書館藏明萬曆四十一年自刻本影印)，卷 11，〈約法·一防礦盜〉，頁 656-657。

為了加強浙江防礦力量，溫純另在處州設「團操兵二總，輪撥哨兵」，在金華地區「選練民壯五百，防守應援」。⁶⁰即衢州的總捕都司二總民兵、處州團操二總與金華民壯五百，可合而成為浙江全省完整的防礦體系。溫純還曾就總捕都司存廢提出看法：

欽依特設總捕都司，駐筴衢州，督練營兵二總，設名色把總二員，秋末冬初，水涸土堅，即以二營官兵分布三府通礦、產礦、要害巡哨，不惟二十年來礦盜絕跡，即隣壤徽、閩、江西，亦借彈壓，誠不宜以一時無事遂議裁革。

但地方財政困難，府庫錢糧告匱，兵餉不敷，溫純只好督行指示兵備道量裁二哨，共減官兵二百餘員，省餉銀二千餘兩，此時總捕都司轄下的二總官兵只剩八百餘員了。⁶¹

萬曆十五年(1587)，巡撫溫純認為總捕都司轄下官兵，實已不及各區被倭把總之半，然而總捕都司的「從役廩餼」等優禮待遇，均比照參將等級，「且名列三司，交際難已，居是官者，往往告困」，所以他在百般考量下，建議將都司改為「欽依守備一員，兼領前營兵務，屯筴府城」，並裁革前營名色把總，僅保留左營名色把總；另改以兵備道中軍官管左營軍務事，「臨期屯筴開化華埠，仍聽守備節制」。而前營、左營等二總防礦事宜，悉照原定哨道巡緝，「遇有礦賊，就

⁶⁰ [明] 溫自知，《海印樓集》(上海圖書館藏民國二十五年鉛印本)，卷 7，〈明故特進光祿大夫柱國太子太保都察院掌院事左都御史贈少保諡恭毅先考府君行實〉，頁 43a。

⁶¹ [明] 溫純，《溫恭毅集》，卷 4，〈俯竭愚衷敬陳末議以求少裨治理疏·酌礦防〉，頁 469-470。

行協捕」，都司將領原有的「從役廩餼」等優禮待遇，俱比照「欽依備倭把總事例」。即都司改為守備，「費少易辦」；裁革名色把總一員，又可歲省官役餉銀四百餘兩，「無兵少官多之擾」。⁶²〔天啟〕《衢州府志》遂稱：「郡設總捕都司，自嘉靖四十五年始，後改總捕守備，自萬曆十五年始。」⁶³

不僅浙江巡撫重視總捕都司的防礦角色，萬曆二十年(1592)擔任過浙江總兵官的侯繼高(1533-1602)在《全浙兵制》中亦云：

至如衢、嚴二郡，與徽、饒錯峙，海警雖云弗虞，蓋其地產礦，據于三省諸山各路通達之中，故先年特設一都司轄之，甚當。夫倭，外患也，來則易知；奸宄，內患也，隱而難覺。制人之術，在所宜先，而當其事者，陸兵之備，不可忽諸。⁶⁴

可見在衢州駐留重兵已是各界的共識，金衢兵備道副使林涇(1540-1616)也認為：「自若設三總營兵千七百有奇，以總捕都司，承平良久，牙孽不生。」⁶⁵即使後來已改設總捕守備，但仍具有穩定地方秩序的作用。萬曆二十三年(1595)，林涇初至衢州時，地方傳來盜亂警報，他馬上表示：「是當責成總捕耳。」⁶⁶在在顯示增添專職文武官員，統領總捕官兵，建立起防礦的軍事體系，確實能有效阻

⁶²〔明〕溫純，《溫恭毅集》，卷4，〈俯竭愚衷敬陳末議以求少裨治理疏·酌礦防〉，頁469-470。

⁶³〔天啟〕《衢州府志》，〈志目凡例·兵戎志第三〉，頁69。

⁶⁴〔明〕侯繼高，《全浙兵制》（《四庫全書存目叢書》子部31，據天津圖書館藏舊鈔本影印），卷2，〈台金嚴區圖說〉，頁148。

⁶⁵〔明〕林涇，〈兵道題名記〉，收入〔天啟〕《衢州府志》，卷12，〈藝文志〉，頁1390。

⁶⁶林涇同樣提到：「衢有二營，每營有五百人，皆為防礦設者。左營則守備領之，右營把總領之，歲費餉金萬餘，按月支給。……且歲汰其老弱及獷悍不馴者若干人，亦漸可銷兵省費也。」參見〔明〕林涇，《林氏雜記摘錄》，〈宦遊紀〉，收入《明史資料叢刊》，第5輯（南京：江蘇古籍出版社，1986），頁262-263。

截礦徒在三省交界的活動。

三、明末的薈民活動

至明末，因海外白銀大量流入、礦場開採殆盡與礦防體系的建立，入山開礦風險驟增，在浙江活動的礦徒人數已大為下降。可是另一個影響地方社會的問題，就是此時另有大批的移民進入閩浙贛邊山區發展，如衢州府常山縣，隨著礦徒事件落幕後，人口流失，田土荒蕪，「閩中流民，羣來開墾，得利旋去，歲賦多逋，中有奸民，萑苻為祟」。⁶⁷閩北壽寧縣「山無曠土，近得種苧之利」，因而前往浙江南部，「走龍泉、慶元、雲和之境如鶩」。⁶⁸以至處州府龍泉縣已是「土著鮮少，客塵多閩暨豫章」。⁶⁹

來到山區開發者，主要是從事種藍、種杉、種麻、種蔗等農業經濟作物的生產，亦有投入燒炭、造紙、冶鐵等手工業生產者，他們搭棚暫居，遠離原鄉，即所謂的「棚民」。其中，藍靛又稱靛青，種植獲利甚豐，「每年於二三月間，下子佈種，疏削成林，取汁成靛，獲其價值，數倍於穀麥」。⁷⁰並且受到棉紡、絲織業的發展影響，明代染布業相當的興盛，製作染布原料的藍靛物種更是炙手可熱。藍靛不只能染藍，還可加工成各類顏色。〔康熙〕《義烏縣志》有云：「崧藍可為

⁶⁷〔天啟〕《衢州府志》，〈常山縣治圖六〉，頁 102。

⁶⁸〔崇禎〕《壽寧待誌》（福州：福建人民出版社據明崇禎十年刻本點校，1983），卷上，〈風俗〉，頁 47。

⁶⁹〔順治〕《龍泉縣志》，〈序〉，頁 1159。

⁷⁰〔乾隆〕《海鹽縣續圖經》（臺北故宮博物院圖書文獻館藏乾隆十三年刊本），卷 1，〈方域篇·風土記〉，頁 5a。

澱，蓼藍可染碧，紅藍即款冬花，可染紅。」⁷¹〔康熙〕《新修東陽縣志》則稱：

「尖葉名蓼兒青，不甚佳；圓葉者馬蹄靛，每家皆種，至冬間發之，以染絲布，色可深碧。或不自用，則以貿錢，無棄者。」⁷²

明清浙江有不少藍靛品種與種植的紀錄，根據現有的史料，明代中期浙江台州地區已開始引進藍靛作物，〔嘉靖〕《太平縣志》即稱：「近自汀得種，然終不似汀之宜染。」⁷³反映當地的新靛種是來自於福建汀州。浙江處州舊稱括州，明清時期也多是福建人來關山種靛，因此「閩之關山而靛者，於括最多」。⁷⁴但是，並非每一本地方志都會詳盡紀錄當地的農產品，例如〔康熙〕《遂昌縣志》在〈食貨志·物產〉中就開宗明義表示是「志珍異者」，故藍靛物產並未列名。⁷⁵

藍靛產業獲利雖高，可是種植經營與產銷仍須投入相當的資金，高成本已非一般小民、地主所能負擔。在明末浙江山區經濟農作物的生產關係上，主要的勞動力並非本地人，而是來自福建汀州府上杭等地的貧民，其中有一大部分還跟畚族群體有關，「蓋浙東多山，惟汀之畚民能力耕火耨，梯蟹螺田之，而納稈于土

⁷¹〔康熙〕《義烏縣志》（《復旦大學圖書館藏稀見方志叢刊》第15冊，據清康熙三十一年刻本影印），卷8，〈利病志·土物·草之屬〉，頁527。

⁷²〔康熙〕《新修東陽縣志》（臺北故宮博物院圖書文獻館藏清康熙二十年刊本），卷3，〈職方志·物產·草之屬·靛青〉，頁19a。

⁷³〔嘉靖〕《太平縣志》（《天一閣藏明代方志選刊》17，據浙江寧波天一閣藏明嘉靖十九年刻本重印），卷3，〈食貨志·貨之類·藍靛〉，頁13b。

⁷⁴〔清〕侯杲，〈勝蓮菴碑〉，收入〔順治〕《宣平縣志》（《稀見中國地方志彙刊》第19冊，據清順治十二年刻本影印），卷8，〈禋祀志·菴〉，頁384。

⁷⁵〔康熙〕《遂昌縣志》（《中國地方志集成》浙江府縣志輯68，據南京大學圖書館藏清康熙五十一年刻本影印），卷2，〈食貨志·物產〉，頁71。

著。其不可田者則藝麻菽，不可藝麻菽者則藝菁，咸有納焉」。⁷⁶這些「畚民」每年數百為群，因以「藝藍為生，徧至各邑結寮而居」，被統稱為「菁民」，他們往往身無分文，「赤手至各邑」，都受雇於有相當財力的客商。出資租山的富商則稱為「寮主」，「披寮蓬以待菁民之至，給所藝之種，俾為鋤植而征其租」。而當地的地主，是「土著有山之人」，號稱「山主」，並將山地租給「寮主」去經營。⁷⁷

這和閩北山地種苧麻的生產關係頗類似，即「富者買山，貧者為傭，中人則自力其地」。⁷⁸其中富者多是閩商，我們再透過一則案例可以看出種靛菁民與出資閩商的關係：

據衢營守備潘起龍、把總葛邦熙報稱：奉令剿捕，賊即聞(風)，復遁松(陽)、龍(泉)山源。職奉方略商確……四路捕緝，生擒窩犯陳大謙，向與靛賊華重吾、華光宇父子交厚，將贓物寄頓大謙之家，復付楊一冲挑回賊巢，交還重吾，留在一冲舖內，為應捕捉。獲起竹籠二隻，內有紬十八疋、鞋十四雙，又搜獲所致賊首李輝宇、耀宇、之字[宇?]等因。又獲(遂昌縣)門陣靛賊吳冲宇、華廷升、公同亭，九保正、虞邦仁等，至陳大謙家起出靛青七十五簍，床頭藏有利斧一把，閩竹籠內藏有牙梳一副、花斑布一疋、紅幔鬚頭一副、綾包頭二個，相應一併解奪等因。⁷⁹

⁷⁶ [明] 熊人霖，《南榮集·文選》(臺北傅斯年圖書館據日本內閣文庫藏明崇禎十六年刊本影印)，卷 11·〈芑田草序〉，頁 24b。

⁷⁷ [明] 熊人霖，《南榮集·文選》，卷 12·〈防菁議上〉，頁 37b；〈防菁議下〉，頁 39b。

⁷⁸ [崇禎]《壽寧待詒》，卷上·〈風俗〉，頁 48。

⁷⁹ 〈內有「又據金衢兵巡道夏尚綱呈」殘件〉，「崇禎十四年」，收入《明清史料》，辛編第七本(臺北：中央研究院歷史語言研究所，1962)，頁 653a。

受雇靛民所採收製作的靛青，即存放於窩主陳大謙家中，有其依附關係，雙方自然往來密切，而楊一冲的店鋪很可能為經辦米穀麻靛等商品買賣，或是相關借貸業務，甚至經手「贓物」的交易。從窩主陳大謙家中擁有的「閩竹籠」器具，似乎可反映出其身分背景。

福建靛商在福建、浙江、江西的山區都相當活躍，亦有史料記錄明末一名福建靛商岳鴻，為了「業價，往來于群靛之山家」。⁸⁰這是因為閩商的地緣與業緣雙重身份，較易掌握靛種、技術和人力資源，故能在經營上大放異彩。清初杭州人王晫(1636-1715)曾提到一位福建靛商軼事：

閩中邱則飛以賣靛為業，遊於山水之間，喜吟詠集成，求雲間張洮侯作序，過虔州關，以詩謁，權使者見張序云：「詩能張洮侯作序，豈尋常商賈耶！」輒免其稅。⁸¹

顯示這位靛商經營有術，累積足夠的資金，賦閒時優游山水，進而結交晚明名士張彥之(字洮侯，1611?-?)，讓人為之側目。福建客商在各地獲利，收益比地主還高，以致時人批評：「至於一切百工之業，俱為異郡寄民所專，尤見鈍絀，靛、苧諸利，歸之閩人。」⁸²當時也有人開始擔心說：「浙之山海，閩人居十之二三，食于浙而蠹浙，尙未知彼終耳。」⁸³

⁸⁰ [清] 侯杲，〈勝蓮菴碑〉，收入〔順治〕《宣平縣志》，卷 8，〈禋祀志·菴〉，頁 384。

⁸¹ [清] 王晫，《今世說》（《續修四庫全書》子部 1175，據華東師範大學圖書館藏清康熙二十二年霞舉堂刻本影印），卷 6，〈企羨〉，頁 529-530。

⁸² [順治]《宣平縣志》，卷 1，〈輿地志·風俗〉，頁 279。

⁸³ [明] 蔣鳴玉，《政餘筆錄》（《續修四庫全書》子部 1134，據清華大學圖書館藏清順治刻本影印），卷 3，頁 247。

崇禎初年(1628)·「閩人來浙東諸郡·種靛、蔴、蔗者·布滿山谷·久之與土人為仇」。⁸⁴諸如「山主取息太刻·每激菁民走險」。⁸⁵土著居民亦常將外來移民視作眼中釘·如湯溪縣境·「閩漳人植青靛其中·盡多富饒·願婚巨族·邑人擯不與齒」。⁸⁶況且山區地形險峻·官方統治管理困難·「閩人種靛種蔴·僑居有年」·容易被煽動·引發事端。⁸⁷而種靛者「春來冬去·或留過冬為長顧者也」·是屬於季節性的移民。⁸⁸〔康熙〕《新修東陽縣志》稱明末時·「每當冬春之交·來者熙熙·往者攘攘·不啻數千餘人·其遷居著籍者·又不勝數也。」⁸⁹可見當地人口流移增多·土客磨擦衝突已難避免。處州界於衢州、金華·及鄰省的閩北建寧、江西廣信等山地·「恆為逋逃淵藪」·因此「閩之流人種藍藝麥於中者·日以益眾·主客不相安·則聚而為盜·四方亡命附麗之至數千人」。⁹⁰

至崇禎十一年(1638)·汀州人丘凌霄父子因與金華人陳海九有隙·「勾海賊·稱兵作亂」·他們自金華起事·亂事蔓延到處州府遂昌縣等地。⁹¹如浦江縣的「靛

⁸⁴〔康熙〕《遂昌縣志》·卷 6·〈兵戎志·武功〉·頁 145。

⁸⁵〔明〕熊人霖·《南榮集·文選》·卷 12·〈防菁議下〉·頁 40a。

⁸⁶〔道光〕《元和唯亭志》(《中國地方志集成》鄉鎮志專輯 7·據清道光二十三年、民國二十三年元和沈三益堂鉛印本)·卷 13·〈人物·盛王贊〉·頁 180。

⁸⁷〈兵科抄出浙江巡撫熊奮渭殘題本〉·「崇禎十二年正月初一日」·收入《明清史料》·癸編第二本(臺北：中央研究院歷史語言研究所·1975)·頁 152b-153a。

⁸⁸〔明〕熊人霖·《南榮集·文選》·卷 12·〈防菁議下〉·頁 39b。

⁸⁹〔康熙〕《新修東陽縣志》·卷 4·〈職方志·風俗〉·頁 20a-b。

⁹⁰〔明〕陳子龍著·王英志輯校·《陳忠裕公全集》·卷 31〈陳子龍年譜卷中〉·收入《陳子龍全集》(北京：人民文學出版社·2011)·頁 953。

⁹¹〔康熙〕《遂昌縣志》·卷 6·〈兵戎志·武功〉·頁 145-146。根據該志·靛民從金華流移到處州遂昌稱兵作亂的原因在於「巡撫羅公新蒞任·親至勸寇·寇懼以義烏、湯溪皆有備·陡至遂昌縣·殺傷相當·走石練屯駐」。關於這位「巡撫羅公」·谷口規矩雄的考證是崇禎五年至六年擔任浙江巡撫的羅汝元。參見谷口規矩雄·〈東陽民變—所謂許都の亂について—〉·《東方學報》·

賊震隣，谿谷塵起」。⁹²湯溪縣「靛寇竊發，眾號萬人，焚掠山澤」。⁹³號萬人或有誇張之嫌，但當時所謂「勾海賊」的說法並非毫無根據，因為官員的奏疏就指出「海賊入之，乘機煽動」，於該年七月間「糾集劫掠金華湯溪地方」。⁹⁴這或也突顯地方產銷體系實已結合山運與海販，客商網絡互動密切，進而相約起事。

土客關係的緊張，其所衍生出的動亂問題，大致上受到以下幾項因素相互牽動而加劇。首先，是地方荒歉造成的影響。崇禎九年(1636)，浙江全境開始出現嚴重的旱災，糧食作物顆粒無收，遑論納糧。浙東地區，「剡、台大旱，草根木皮食盡，而屑土以繼」。⁹⁵義烏、東陽、浦江等地的百姓亦搶地上泥土，「以土之膩白者，和米食之」，「賴以活者甚眾」，稱為「觀音粉」。⁹⁶浙江災荒連連，最能反映糧食的短缺就是糧價高漲。如遂昌縣，「崇禎九年大饑，穀價騰貴，每斛至銀壹分貳厘。崇禎十四年，大饑，穀價與九年全」。災情還持續至崇禎十五年(1642)，「水災異常，東北鄉田園、廬舍，漂流殆盡」。⁹⁷同樣浙西地區「荒已繼荒」，平

58(1986)，頁 629、645。但羅汝元任期甚短，且任職事蹟與崇禎十一年靛民稱兵作亂的時間不符，很可能地方志是將當年甫上任的巡撫熊奮渭誤記為羅公。

⁹² [明]王德溥，〈脩城誦并序〉，收入 [康熙]《浦江縣志》(《復旦大學圖書館藏稀見方志叢刊》第 13 冊，據清康熙十二年刻本影印)，卷 10，〈藝文志〉，頁 376。

⁹³ [乾隆]《吳江縣志》(《中國方志叢書》華中江蘇 163，據清乾隆十二年刊本影印)，卷 29〈人物六·名臣四·盛王贊〉，頁 886。

⁹⁴ 〈兵科抄出浙江巡撫熊奮渭殘題本〉，「崇禎十二年正月初一日」，頁 153a。

⁹⁵ [明]蔣鳴玉，〈亂民抄殺事〉，收入 [清]李漁著，張道勤點校，《資治新書·初集》(杭州：浙江古籍出版社，1992)，卷 14，〈判語部〉，頁 537。

⁹⁶ [崇禎]《義烏縣志》，卷 18，〈雜述考·災祥〉，頁 606；[康熙]《新修東陽縣志》，卷 4，〈職方志·災祥〉，頁 2a-b；[康熙]《浦江縣志》(《復旦大學圖書館藏稀見方志叢刊》第 12 冊)，卷 6，〈雜事誌·災祥〉，頁 616。

⁹⁷ [康熙]《遂昌縣志》，卷 10，〈雜事志·災害〉，頁 264。

時「米價至貴，每石不過七八錢，兩年踵荒，遂增至三兩」。⁹⁸以致造成「三百年所未有之災」⁹⁹對此，金衢兵巡道夏尚綱(1593-1645?)特地指出靛民起事，「總為米貴枵腹所致」。¹⁰⁰浙江巡撫熊奮渭(1580-1674)也強調：「兼以連年荒歉，米價三兩，民不聊生，沿海貧民，遂有勾賊入犯之勢。」¹⁰¹

其次，是藍靛市場的消長效應。其實江南的棉布、絲織品需求一直很大，原物料價格相應攀升，還有浙江也生產大量的絲織品，其中杭州、衢州等地都須將部分織造緞匹上供，同樣需要大量的染色原料。當時江西、福建、浙江均為藍靛的主要產地，江南更是多從福建等地進口。¹⁰²然而先是浙江經歷大旱，藍靛採收已受到嚴重的打擊。不巧的是，受北方戰亂波及，商貨阻滯，藍靛價格下滑。根據時任義烏知縣熊人霖(1604-1667)的觀察：「近江北兵荒，青布不行，靛賤穀貴，此輩無以自存，遂出掠山旁村落。」¹⁰³這正足以說明，山區開發的高成本、高風險，以及山區流民的經濟在遭遇市場的壓力時相當脆弱，其聚居地在面對自然災害和欠收時又具有高度的敏感性，都使得武裝衝突難以避免。¹⁰⁴

⁹⁸ [明]左光先，《左侍御公集》(國立臺灣大學圖書館藏清乾隆四年刊本)，〈報水災并申漕困疏〉，頁 20a。

⁹⁹ [明]倪元璐，《倪文貞集》(《景印文淵閣四庫全書》1297 冊)，卷 19，〈與浙中丞暨鹽使者(辛巳)〉，頁 222。

¹⁰⁰ 〈內有「又據金衢兵巡道夏尚綱呈」殘件〉，「崇禎十四年」，頁 655b。

¹⁰¹ 〈兵部題行「兵科抄出浙江巡撫熊奮渭題」稿〉，「崇禎十五年九月」，收入《明清史料》，乙編第八本(臺北：中央研究院歷史語言研究所，1999 景印二版)，頁 793b-794a。

¹⁰² 傅衣凌，〈關於中國資本主義萌芽的若干問題的商榷〉，頁 11-12。清初上海人葉夢珠就說藍靛出自福建，本地所無，直到清順治初年方引進種植。〔清〕葉夢珠撰，來新夏點校，《閩世編》(北京：中華書局，2007)，卷 7，〈種植〉，頁 189。

¹⁰³ [明]熊人霖，《南榮集·文選》，卷 12，〈防菁議上〉，頁 37b。

¹⁰⁴ Sow-Theng Leong, *Migration and Ethnicity in Chinese History*, p. 130.

同時在諸暨山區已封禁的礦場，「山旁奸民往往窟穴其中」，歲饑時，「聚眾至數千人」。¹⁰⁵災荒、市場效應引發的結果，礦徒、菁民最終均與失業饑民合流。熊人霖就說：「近歲梯田盡甌脫，而畚民無所竄，其搔手之功，其藝菁者終不肯盡去，相聚為剽掠，而睦、歙之群盜不軌者，復入而雄長其間，鋒甚銳。」¹⁰⁶睦、歙分別是指涉來自嚴州、徽州有勢之徒，顯示移民群體內部的地域複雜性。

另一方面，客商投資失利，也會尋求其他獲利管道，如龍泉縣爆發的山民倡亂事件，領導者是福建政和縣的一名張姓世家子弟，雖為「明經之子」，卻被「不肖所誘，遂散家千金，募麻賊，編字得千餘人」，肆行劫掠，甚至分兩路突入龍泉縣，途中綁縛縣令，「俱挾重資」。¹⁰⁷地方官員曾「逐一確察」，研判出山民多來自於閩北的政和、建安、壽寧，政和縣更是「衣食之地，兼各有親知在焉」，所以政和縣反倒是「自始至終，一無搶掠」。¹⁰⁸

四、防礦兵力調撥與防菁軍事布置

浙江種靛菁民崛起的地區，與原先礦徒起事地點有重疊之處，但並非完全一致。我們可從清人所描述的情況：「聞之父老，明時南有靛賊，北有鑛盜，生民

¹⁰⁵ [明] 陳子龍著，王英志輯校，《陳忠裕公全集》，卷 31〈陳子龍年譜卷中〉，頁 947。

¹⁰⁶ [明] 熊人霖，《南榮集·文選》，卷 11，〈芑田草序〉，頁 24b。

¹⁰⁷ [順治]《龍泉縣志》，卷 9，〈兵戎志·大事〉，頁 1367。比對《慶元縣志》的紀錄，可知這位世家子弟姓名是張其卿，他先是領眾大掠龍泉，崇禎十四年十一月再突至慶元，知縣楊芝瑞曾率鄉兵禦之。參見 [康熙]《慶元縣志》（《中國方志叢書》華中浙江 521，據國立故宮博物院藏清康熙十一年刊本影印），卷 10，〈雜事志·災異〉，頁 408。

¹⁰⁸ 〈內有「福建兵備道吳之屏」殘稿〉，「崇禎十四年」，收入《明清史料》，癸編第三本，頁 283b。

皆大被其害。」其指涉的就是衢州府西安縣境山民起事地點不同。¹⁰⁹總體上來說，新移民是分布在金衢盆地的兩側山地，主要活動於明清浙江衢州、金華、處州等府縣境內的山區，擴及鄰省交界地帶。如何防範靛民的滋擾生事，成為官方刻不容緩必須處理的課題，甫任浙江巡按的左光先(1580-1659)就說：「自去年二月初六入境，爾時漕事正急，寇氛復猖，湖寇、海寇外，深慮靛賊盤踞三省，逋逃數歲，不勦不可，非身經相度，必不能勦。」¹¹⁰

1. 調兵與築城

浙江的靛民倡亂是始於崇禎十一年(1638)。[康熙]《武義縣志》曾紀錄：「崇禎十一年，山寇竊發，邑令袁公會同兵道協剿，擒賊首張華。」光憑這段紀載，我們很難與靛民聯想在一起。但是透過《明清史料》檔案，我們可以從浙江巡撫關於「安撫種靛山民」的題本中，看到崇禎十一年(1638)七月，「首獲巨盜張華，已供各賊情形」等記載。¹¹¹針對靛民於金華地區起事，浙江撫按官員立刻調動在衢州的防礦軍力，任命守備成紹譽前往遂昌縣阻截，「躡其後，追至石練，大戰于溪灘」，可是「眾寡不敵，紹譽死之，寇遁浦城界而去」。¹¹²官員在奏疏中則稱大兵未集時，守備成紹譽「帶兵不滿百人，追至石練，分兵對敵，炮打死賊夥十數人，後又殺死十五、六人，得勝而回，不意昏夜迷路，墜足溪田，山凹草叢，

¹⁰⁹ [康熙]《西安縣志》(《復旦大學圖書館稀見方志叢刊》第18冊，據清康熙三十八年刻本影印)，卷1·〈輿地志·形勝〉，頁119。

¹¹⁰ [明]左光先，《左侍御公集》·〈復命寬限疏〉，頁48a。

¹¹¹ 〈兵科抄出浙江巡撫熊奮渭殘題本〉，「崇禎十二年正月初一日」，頁153b。

¹¹² [康熙]《遂昌縣志》，卷6·〈兵戎志·武功〉，頁145-146。

伏黨槍刺，墜伏而死」。數日後官兵反擊，「共剿賊黨不下五十餘人矣」，「賊勢衰落」，「潛遁碧龍地方，燒械拋戈，暗逃獅子上[山]下，埋旗瘞賊，鼠竄閩中浦城，而星散無踪」。¹¹³其說法有諱飾與避重就輕之嫌，這次的結局，反映此時防礦軍兵因大量裁減，實力不復往時，加上遠離駐防，才會「眾寡不敵」，甚至也凸顯了閩浙兩省未能同心協防的癥結。而官府急忙調遣衢州兵力南下，原因是浙江軍兵布防失衡，當時就有人指出：「浙東困於防海，上游數千里，環疊萬山無城無兵，一夫嘯而民難婦子保矣。」¹¹⁴同時也有出現「閩左十室九空，邑又無城無兵」的看法。¹¹⁵

地方動亂是影響明代後期中國南方出現築城運動的重要因素，更使內靠山區

的府縣有築城之議。¹¹⁶晚明浙江亦然，當「金華山菁民弗靖」時，撫按官員呼籲地方趕緊戒備，浦江知縣吳應台(1614-?)顧慮「斗城傾圮難恃」，遂銳意繕治，動員當地士民重建城堞、門樓，「不兩月而績已落成矣」。¹¹⁷義烏縣原以恃山濱湖為屏障，只有門樓四座，「頗如城門之制，便於守望」，實際上還是無城的。崇禎十一年(1638)菁民事件爆發不久，知縣熊人霖到任，為呼應上級的築城指示，又擔心修築耗費過大，故「肇造七門敵樓」，趕在年底完工。¹¹⁸可見山民倡亂的衝擊，

¹¹³ 〈兵科抄出浙江巡撫熊奮渭殘題本〉，「崇禎十二年正月初一日」，頁 152-154b。

¹¹⁴ [明] 蔣鳴玉，《政餘筆錄》，卷 3，頁 247。

¹¹⁵ [明] 熊人霖，《南榮集·文選》，卷 11，〈星言草自序〉，頁 12a-b。

¹¹⁶ 徐泓，〈明代福建的築城運動〉，《暨大學報》，3：1(1999)，頁 25-76。

¹¹⁷ [康熙]《浦江縣志》(《復旦大學圖書館藏稀見方志叢刊》第 12 冊)，卷 2，〈規制誌·城池〉，頁 274；[明] 王德溥，〈脩城誦并序〉，收入 [康熙]《浦江縣志》(《復旦大學圖書館藏稀見方志叢刊》第 13 冊)，卷 10，〈藝文誌〉，頁 373-374。

¹¹⁸ [崇禎]《義烏縣志》，卷 2，〈方輿考·城池〉，頁 358。

讓地方不得不急促因應。正因「築垣伊急」，到了崇禎十二年(1639)，當浦江縣城遭逢大雨時，「堞傾者十而一，裂者十而三，外城傾者三十而一」，還是得要再次修繕。¹¹⁹湯溪縣為確保城牆鞏固，即「改造城樓，城用磚石封砌，堞高四尺」，使「城雖小而堅」。¹²⁰

崇禎十三年(1640)四月，朝廷明令：「浙省無城處所，著該撫按通察奏明，仍多方鼓舞，設法創建。」嚴州府壽昌縣即響應建城。¹²¹武義縣「向無城郭」，因「明崇禎十三年嚴修練儲事」，縣令倡建，「築砌周圍十里八步，門九」。¹²²衢州府修城浚濠，豎譙樓，建窩鋪、造女牆，「卑者崇之，缺者補之」。¹²³處州府景寧知縣擔憂「盜賊叢生，出沒無定，苦難防守」，於是召集百姓商議，捐款輸助，「用財五千金」，「曩石為城，周二餘里，作六門」，是該縣首次建城。¹²⁴至崇禎十五年(1642)，慶元縣則是重修城環，「增磚堞三尺，建城樓五」，「窩鋪一十二，東南敵樓各一」。¹²⁵由於慶元縣築城完善，因此當「壽寧山寇」來犯時，「不敢窺城，邑

¹¹⁹ [明]熊人霖，《南榮集·文選》，卷1，〈浦江縣修城導河碑記〉，頁7b-8a。

¹²⁰ [康熙]《湯谿縣志》(《中國地方志集成》浙江府縣志輯52，據上海圖書館藏清康熙二十二年(1683)刻本影印)，第17冊，〈輿地志〉，頁6。

¹²¹ 〈兵部題行「兵科抄出浙江巡撫熊奮渭題」殘稿〉，「崇禎十四年三月二十九日」，收入《明清史料》，辛編第五本，頁481b-482b。

¹²² [康熙]《新修武義縣志》(臺北故宮博物院圖書文獻館藏清康熙三十七年刊本)，卷1，〈建置志〉，頁4a。

¹²³ [康熙]《西安縣志》(《復旦大學圖書館藏稀見方志叢刊》第18冊)，卷2，〈建置志·城池〉，頁148。

¹²⁴ [雍正]《景寧縣志》(《南京大學圖書館藏稀見方志叢刊》第28冊，據清雍正十三年刻本影印)，卷8，〈武備志·城池〉，頁461；[明]陳子龍著，王英志輯校，《安雅堂稿》，卷7，〈景寧縣建城記〉，收入《陳子龍全集》，頁1168-1169。

¹²⁵ [康熙]《慶元縣志》，卷1，〈輿地志·城池〉，頁68。

人咸歡呼」。¹²⁶

2. 置兵與練兵

明末蕩民起事波及十餘縣，事發突然，臨時築城常緩不濟急。時值「藍寇充斥」，浦江知縣隨即「團練鄉勇，威震境外，賊不敢窺」。¹²⁷正由於「無城，不得不以兵為衛」，崇禎十三年(1640)，金華府義烏知縣熊人霖奉命倡議募兵，設置「總練所」，委巡檢移駐訓練鄉勇。投石超距者可作為營兵，共選出壯士一百二十人，月俸六錢，再從中挑出武藝精良三十人為武職幹部，隨級別調增俸祿，「每日簿書稍暇，即當堂較藝，賞罰必行，每月赴教場習陣法，束伍簡器」。兵器方面，派員赴福建採購品質精良的「建鐵」，「取鐵官之利於閩中，設處工費，購銃三十六」。又訪得已故名將劉顯(1515-1581)家舊匠，「造刀鎗五百」，並就近從山中取得竹木，打造「篁竹之矛、堅木之挺，約千竿」，其火藥則給引採辦。集訓三月後，為防「兵民雜處」，遂在邑治東西創建兩營，東為金城營，西為講武營，營各有總，總各轄三哨，每月更番輪班。¹²⁸

受饑荒與季節因素影響，崇禎十三年(1640)冬，金華府武義縣「靛寇擁眾，焚劫下村」。¹²⁹隔年正月，金華山區「蕩民弗恭」，金衢兵巡道夏尚綱親自率兵彈

¹²⁶ [嘉慶]《慶元縣志》(《中國方志叢書》華中浙江 522，據國立故宮博物院藏清嘉慶六年刊本影印)，卷 2，〈建置志·城池〉，頁 53。

¹²⁷ [康熙]《長沙縣志》(《稀見中國地方志彙刊》第 37 冊，據清康熙二十四年刻本影印)，卷 11，〈人物上·吳應台〉，頁 664。

¹²⁸ [明]熊人霖，《南榮集·文選》，卷 7，〈兩營志〉，頁 1a-3b；崇禎《義烏縣志》，卷 4，〈經制考·屬署〉，頁 390-391。

¹²⁹ [嘉慶]《武義縣志》(《中國地方志集成》浙江府縣志輯 51，據清嘉慶九年修、宣統二年石印本影印)，卷 8，〈人物·義行〉，頁 881。

壓，亂事暫弭，但該年秋季地方豐收，卻又引發山區「菁民復取民家之禾，躡及村落」。¹³⁰生活困頓的靛農以打家劫舍的方式展開倡亂行動，處州府遂昌縣「靛賊結巢廿一都磔下」，不久又移至江山、浦城界，「劫殺村落，出沒無常」。¹³¹是歲，紹興推官陳子龍(1608-1647)從處州至金華，正好歷經變亂地區，因「菁民震於鄰」，為此請知縣熊人霖的「防菁」看法，熊人霖認為應該開屯編戶、多設偵間、縛其渠魁、漸蹙以兵、使之竄歸、火其窩蓬、扼要置丁、置柵為衛、嚴禁接濟。¹³²

從官府的文書紀錄來看，菁民再度起事，防礦兵力仍是最主要的防禦力量，下令「發兵于金衢嚴處，扼要協防」。因此「衢兵道復統官兵」，除了金衢兵巡道統籌外，還由衢營守備、把總率領營兵分路搜捕；金華、處州各府是派同知、推官擔任監紀，「監督金衢官兵」；各縣則由縣官、典史任捕官，負責調遣鄉總、鄉兵、哨總、民壯、地保等兵丁沿山堵禦起事菁民。值得一提的是，前一年熊人霖創建的兩營鄉兵，也投入這次捕緝行列，故衢營守備潘起龍報稱其功勞「加閩外兩營文武將士，不憚艱難，鼓勇窮追，且能擒渠散黨」。另一方面，菁民起事讓官方了解到，「與其時切戒嚴，莫若專官防禦」，官員建議應在金華、衢州、處州

¹³⁰ [明] 熊人霖，《南榮集·文選》，卷 10，〈平菁寇凱歌敘〉，頁 14a-b。

¹³¹ [康熙]《遂昌縣志》，卷 6，〈兵戎〉，頁 146。

¹³² [明] 熊人霖，《南榮集·文選》，卷 12，〈防菁議上〉，頁 37a-38b。曾任義烏知縣的熊人霖在〈防菁議〉這篇文章中，以「蘭亭子」隱喻為紹興府推官陳子龍，因蘭亭在紹興轄境之故。而以「稽亭子」作為自稱，正因稽亭里位於義烏縣境雲黃山麓下。兩人曾同登雲黃山，贈詩唱和，熊子霖也留有一封書信贈陳子龍，時間與〈防菁議上〉同時，並非巧合。參見 [明] 熊人霖，《南榮集·詩選》，卷 6，〈陪陳臥子登黃雲山〉，頁 4a-b；卷 6，〈附陳臥子詩〉，頁 4a-b；卷 8，〈柬陳臥子(辛巳)〉，頁 14b-15a。

三府之中，擇一要地，在處州宣平縣境的礮坑等地專設守備一員，長期屯駐軍兵，建署添俸，各府撥兵一百名，「再酌標兵百餘名，共為一總之數」，其糧餉、營兵署宇、各兵茅寮修建費用，均統由三府二十三縣分擔，並推派衢州右營把總葛邦熙陞任當地守備，換言之，此時官員試圖架構新的防薈軍事體系。¹³³

3. 三省會剿

防礦兵力雖已南下布防，但從地方志書等相關紀錄，我們卻找不到明末官府在宣平縣置兵設官常駐的證據，似乎仍以防剿驅離為務，軍兵事平即返。到了崇禎十五年(1642)春季，「處州山寇大作，聚眾數千，蹂躪遂昌、松陽、龍泉、江山、武義等數縣，而江、閩之境咸受其害」。¹³⁴至夏季，「山寇益劇」，此時「寇往來之地」，已擴及「江山、常山、武義、湯溪、宣平、遂昌、松陽、浦城、永豐、開化、玉山、鉛山」等閩、浙、贛諸省縣境。¹³⁵諸如江山縣的廿七都，「閩人種靛者揭竿而起，屠戮張村、石門、清湖等處」。¹³⁶開化縣的「山寇縱橫焚劫，鄉民流竄，五六十里內田地，盡成荊棘」。¹³⁷均造成地方極大的傷亡與損失。巡按左光先就說：「靛賊之橫縱于閩、浙間已兩年，于茲始路截，繼村劫矣；始遮頭蓋面，

¹³³ 〈內有「又據金衢兵巡道夏尚綱呈」殘件〉，「崇禎十四年」，頁 653a-655b。

¹³⁴ 〔明〕陳子龍著，王英志輯校，《兵垣奏議》，〈補敘浙功疏〉，「崇禎十七年八月十七日奉旨」，收入《陳子龍全集》，頁 1534。

¹³⁵ 〔明〕熊人霖，《南榮集·文選》，卷 12，〈防薈議下〉，頁 39a-b。

¹³⁶ 〔康熙〕《江山縣志》（《中國地方志集成》浙江府縣志輯 59，據康熙四十年刻本影印），卷 9，〈雜記志·災祥〉，頁 143。

¹³⁷ 〔康熙〕《開化縣志》（臺北漢學研究中心據日本內閣文庫藏清康熙二十二年序鈔本影印），卷 6〈雜志〉，頁 5a。

遇兵即逃；頃樹旗列陣，與官兵對壘，且勝負相當，殺傷各半矣！」¹³⁸

為何崇禎十五年(1642)菁民的勢力會再起？〔康熙〕《遂昌縣志》的解釋是：

「閩寇在浙者將歸，而福建浦城縣防守戒嚴甚，不得過。由是積累多人，嘯聚于遂之西鄉茶園，而江西之永豐縣、衢州之江山縣並震鄰。」¹³⁹但這也可能是一面之詞，菁民在官府的追捕中屢屢逃逸，福建浦城常是突破口，他們勢力集結重返後，使得金華、處州等地再度陷入動亂的威脅。再者，福建官兵「見賊遠去，浦城境內毫無失事，恐兵壓境煩擾」，或「逕自撤兵回府」，均造成「賊仍屯江山地方」。¹⁴⁰

這年菁民起事震鄰，突顯前次征剿的輕忽草率，常困於險惡環境，株守一地。更大的問題是，福建官兵以鄰為壑，即「兵一步不肯入浙境，賊皆閩人，而所擾多屬浙地，各郡縣痛癢絕不相關，不謂寇禍金處衢三府，而以為此三府大家公共之寇也，畫疆株守，一城之外，竟同胡越，故此呼而彼不應，前倡而後不隨，是以有渙散推卸之弊，惟互相推卸，遂互相朦朧，借紙上之首級，塞上官之責成，是以有掩耳盜鈴之弊」。因此左光先在〈題本〉中提到：「舊歲今春，若衢之江山，處之龍(泉)、遂(昌)等縣，屢有斬獲，難掩微勞，總之是防局，非勦局也。」¹⁴¹

當地方官員陸續奏報後，崇禎帝朱由檢(1611-1644)聞知震怒，「奪閩中諸司

¹³⁸ 〈浙江巡按左光先殘題本〉，「崇禎十五年八月十五日科抄」，收入《明清史料》，乙編第八本，頁 796a。

¹³⁹ 〔康熙〕《遂昌縣志》，卷 6·〈兵戎志·武功〉，頁 146。

¹⁴⁰ 〈內有「福建兵備道吳之屏」殘稿〉，「崇禎十四年」，頁 283a。

¹⁴¹ 〈浙江巡按左光先殘題本〉，「崇禎十五年八月十五日科抄」，頁 796a。

職，而責浙以合剿」，特召新任浙江巡撫董象恆(1596-?)賜宴，面諭時提到：「山寇不亟撲滅，其勢將復為流寇，而東南大事去矣！」責令限期五月平定。¹⁴²董象恆甫到任，也與巡按左光先共商旨意：「此賊不勦，終成流寇之續，若不擇人耑委，使功罪獨肩、脫卸無地，則此賊斷難刻勦。」¹⁴³於是董象恆立即向紹興府推官陳子龍諮詢。陳子龍是松江府華亭縣人，與董象恆同鄉，且是同榜登科故人之子，所以當陳子龍建議「今欲一舉蕩平，必大發兵，約閩中合攻之」，表示願意協助時，董象恆大喜，檄令陳子龍擔任監軍。¹⁴⁴

朝廷下令三省征討合剿，主力是浙江與福建兩省，故熊人霖曰：「有旨督三省兩臺速靖，于是閩中推黃石公，浙中推陳臥子為監紀。」黃石公是福建建寧知縣黃國琦(1594-1672)，陳臥子就是紹興府推官陳子龍，兩人各自擔任兩省的監軍工作。崇禎十五年(1642)五月，義烏知縣熊人霖因陞任工部都水司主事，前向浙江巡按左光先辭行，左光先正「恐疆場之事，一彼一此」，遂央請熊人霖暫留，六月初，熊人霖即以新陞部銜擔任護軍之職。¹⁴⁵接著巡按左光先就向朝廷題報特委監軍，以及調派浙江「軍兵分地進剿，總聽兩監軍節制」等事宜。¹⁴⁶

陳子龍和熊人霖是舊交，根據陳子龍自撰的《年譜》，熊人霖的新職還是陳子龍大力推薦的，「予知其嫻於兵事，說左公疏留之，與共事」。陳子龍一面調遣

¹⁴² [明] 陳子龍著，王英志輯校，《陳忠裕公全集》，卷 31，〈陳子龍年譜卷中〉，頁 953。

¹⁴³ 〈浙江巡按左光先殘題本〉，「崇禎十五年八月十五日科抄」，頁 796a。

¹⁴⁴ [明] 陳子龍著，王英志輯校，《陳忠裕公全集》，卷 31，〈陳子龍年譜卷中〉，頁 953-954。

¹⁴⁵ [明] 熊人霖，《鶴臺先生熊山文選》(臺北漢學研究中心影印日本內閣文庫藏清順治間刊本)，卷 14，〈跋滌江天合圖記〉。

¹⁴⁶ 〈浙江巡按左光先殘題本〉，「崇禎十五年八月十五日科抄」，頁 796a-b。

督撫標兵千人沿水路西進，另一面招納東陽、義烏等地「壯士百餘人以為衛」，各路人馬於遂昌縣會師。熊人霖則是在衢州選調軍兵，「往督三衢之兵，遣使閩中、江右會師期」。¹⁴⁷陳子龍相當欣賞熊人霖的防菁主張，對其去年的看法未能落實感到惋惜，兩人會面時曾曰：「惜也！子之議未之有能行也，以及此。」其實熊人霖並不主張「遽合三省之兵」冒然出征，他認為萬一「寇轉徙不與兵值，徒曠日耳」。熊人霖認為長久解決之道仍在選能官、行保甲，督責寮主、山主約束菁民，同時也不必新設山區營哨軍兵，恐此舉徒增民擾，該當速撤，其兵應各歸縣官訓練、調遣，原設營兵或可在三省中增設一護軍來聯絡規措，總之應該儘量避免力戰勞師。¹⁴⁸

熊人霖不主力戰的防菁看法其來有自。他和陳子龍「偕履行間」¹⁴⁹，「屢發兵深入死鬪，終以厄於地險，殺傷相當」，官兵與菁民均困於拉鋸戰中，給予兩人很深刻的印象。到了崇禎十五年(1642)六月底，官兵好不容易才「奪其一寨，斬數百級」，「賊始失據，遁入茶園老巢」。熊、陳兩人發現「賊西走，所棲益峻，不可攻」，相度形勢，「見萬無進攻之理」，所以改採包圍方式，「凡近賊巢五十里內，民家牛羊、米粟，皆遠徙」，官兵「伐木塞道，伏兵要徑」，分據要害，讓起

¹⁴⁷ [明] 陳子龍著，王英志輯校，《陳忠裕公全集》，卷 31，〈陳子龍年譜卷中〉，頁 954。關於熊人霖監軍的紀錄，可見 [明] 熊人霖，《鶴臺先生熊山文選》，卷 14，〈跋澱江天合圖記〉。

¹⁴⁸ [明] 熊人霖，《南榮集·文選》，卷 12，〈防菁議下〉，頁 39a-40b。

¹⁴⁹ [明] 熊人霖，《南榮集·文選》，卷 11，〈芭田草序〉，頁 24b。兩人均有留詩紀行，參見 [明] 熊人霖，《南榮集·詩選》，卷 11，〈六日直指以菁寇急疏留余同臥子護諸將會勦遂以次日同發〉，頁 55b；〈附臥子詩〉，頁 55b-56b。

事者更加乏食益困。¹⁵⁰此時倡亂陣營內部也出現分裂，熊人霖在〈會剿紀成揭〉中透露，他施反間計，派人入「賊中，搆徽賊與閩廣賊，攜使自相圖」，讓內部矛盾加劇，使其力量消解，經歷數日激戰，「思竄閩中矣」。¹⁵¹

至崇禎十五(1642)七月十日，「銳師四路來攻，賊遂奔遯于獅子峰」。¹⁵²獅子峰在福建浦城縣境內，福建監軍黃國琦也採剿撫兼施，「購得賊主藏，持其事，縱之入巢，說以利害。適浙兵深入，賊內悔，遂於七月降閩」。¹⁵³根據熊人霖〈會剿紀成揭〉紀錄：「降閩者閩中安插，降浙者除解散六百卅七人外，渠魁汪敬松、章今勝、勞志等二百五十四人願軍前報效，謹差官押至轅門聽用。」熊人霖又遣員入山散票，「安揖良民嚴繼完等五百二十五人，招撫難民黃邦道等五百五十三人」，長達五年的戰事總算結束。¹⁵⁴對此兵部官員稱道：「三省同心，數年之逋寇，廓清于一朝。」¹⁵⁵

4. 善後措施

亂事平定後，招撫難民、安插流寓，成為官府最重要的工作，如何將山中的

¹⁵⁰ [明] 陳子龍著，王英志輯校，《陳忠裕公全集》，卷 31，〈陳子龍年譜卷中〉，頁 954；

[明] 陳子龍著，王英志輯校，《兵垣奏議》，〈補敘浙功疏〉，「崇禎十七年八月十七日奉旨」，頁 1534。

¹⁵¹ [明] 熊人霖，《南榮集·文選》，卷 11，〈附錄會剿紀成揭〉，「崇禎十五年七月二十日具揭」，頁 27b-28a。

¹⁵² [明] 熊人霖，《南榮集·文選》，卷 11，〈附錄會剿紀成揭〉，「崇禎十五年七月二十日具揭」，頁 28a。

¹⁵³ [明] 陳子龍著，王英志輯校，《陳忠裕公全集》，卷 31，〈陳子龍年譜卷中〉，頁 955。

¹⁵⁴ [明] 熊人霖，《南榮集·文選》，卷 11，〈附錄會剿紀成揭〉，「崇禎十五年七月二十日具揭」，頁 28a-b。

¹⁵⁵ 〈兵部覆疏〉，「崇禎十六年六月具題」，收入 [明] 熊人霖，《南榮集·文選》，卷 11，頁 30a。

寮蓬納入管理，也是當務之急。參與過會剿的台州府推官蔣鳴玉(1600-1654)提到：

「歲荒民散，無空土空居，若使不占客籍、不編里甲，其後患有不可言者，山居茅廩，所在為難。」¹⁵⁶所以最初靛民起事平定，「投狀者千有餘人」，官方隨即「安撫種靛山民，編入牌甲，各安生理」。¹⁵⁷而開屯編戶，以及菁民、寮主與山主的約束保結，更是熊人霖撰述〈防菁議〉中一再強調的重點。¹⁵⁸因此兩人互動關係甚深的陳子龍及時呼應熊人霖的主張，「復上善後數事，凡編流民於主戶，互相保結，及被兵各邑，宜緩徵」。¹⁵⁹

至於地方防禦的補強，督撫官員以處州府遂昌縣「地界遼遠」為由，「議析石練為練溪縣，陞遂昌為平昌州，以縣丞駐黃[王]村口，并龍泉隸之」，但可能是牽涉層面甚廣，最終未被採納。¹⁶⁰因此浙江巡撫董象恆另議「設一府佐於王村口，兼制三省各邑」，陳子龍也認為王村口是要害之地，「必得設一道臣兼制三省，以便彈壓」。只是陳子龍的「王村口設官事宜」建議，直到崇禎十七年(1644)八月，才被南明朝廷再度重視。¹⁶¹在此期間，浙江的防菁工作由溫州府通判暫代，「春冬防禦，夏秋仍回溫州，復取處(州)原額兵二百名借在溫州蒲圻[岐]所者來縣，永

¹⁵⁶ [明] 蔣鳴玉，《政餘筆錄》，卷 3，頁 241。

¹⁵⁷ 〈兵科抄出浙江巡撫熊奮渭殘題本〉，「崇禎十二年正月初一日」，頁 153a。

¹⁵⁸ [明] 熊人霖，《南榮集·文選》，卷 12，〈防菁議上〉，頁 37a-38b；〈防菁議下〉，頁 39a-40b。

¹⁵⁹ [明] 陳子龍著，王英志輯校，《陳忠裕公全集》，卷 31，〈陳子龍年譜卷中〉，頁 955。

¹⁶⁰ [康熙]《遂昌縣志》，卷 6，〈兵戎〉，頁 146。

¹⁶¹ [明] 陳子龍著，王英志輯校，《兵垣奏議》，〈補敘浙功疏〉，「崇禎十七年八月十七日奉旨」，頁 1537。曹樹基推論王村口鎮的興起，正是與靛業有關，之後更確立其商業中心的地位。參見曹樹基，〈移民與古民居——浙江省遂昌縣田野考察之一〉，《歷史學家茶座》，7(2007)，頁 75-87。

為防守」。¹⁶²也就是說，至此已不再從衢州的防礦軍兵調撥作防菁兵力，防菁主力改由處州、溫州軍兵來調防承擔。

餘論

明代浙江山區迸發採礦與種靛的熱潮，各自代表手工業與種植農業的商品經濟相當活絡，也反映市場上的需求在推波助瀾，使之方興未艾。但是對官府而言，山區開發的加速往往連帶激發社會治安惡化的隱憂，官方的山林政策、管理法規以及控制系統均遠遠落後於社會經濟發展的變化，有時要強制禁令，卻又造成更大的衝突。為求禁令落實，官方試圖尋求軍事力量的增強防禦，進而出現專為防礦與防菁的軍兵建置。

浙江「總捕都司」是專為防禦浙江礦徒出沒而設的軍事鎮戍營官，轄下營兵主要是由金華府義烏等地招募得來。嘉靖四十四年(1565)七月，浙江巡撫劉畿命令中軍坐營都司陳大成率領五總軍兵，返回義烏屯練，遇警聽調，此時陳大成的都司職銜，常因練兵之故，在公文上簡稱作「練兵都司」。其後針對浙江、南直隸、江西交界爆發的礦徒倡亂事件，巡撫劉畿將義烏五總官兵建置重新整編，命都司陳大成帶領部分官兵移駐衢州，追捕流劫礦徒。嘉靖四十五年(1566)十月，在衢州府城建蓋兵營，設置都司衙署，將陳大成職銜改為總捕都司，衢州防礦軍事建置遂為定制。

萬曆十五年(1587)以後，浙江地區的防礦軍事體系，轉由總捕守備負責領導，

¹⁶² [康熙]《遂昌縣志》，卷6·〈兵戎〉，頁146。

其統領的營兵或有裁減或部份移防。不過，即使是兵部官員，似乎也不太了解地方都司職官的裁革，例如在天啟四年(1624)，兵部為戶部主事曹履吉(?-1642)陞補浙江按察司僉事一事，在公文上稱該官責任分巡杭州、嚴州二府，兼管兵備事務，專住省城，不時往來嚴州地方巡歷，「如遇江、礦各賊生發，小則會同各該參將并總捕都司，徑自剿捕，大則呈請巡撫衙門，調兵剿除」。¹⁶³無獨有偶，在天啟七年(1627)，為調任浙江按察司副使的一份公文，仍然有遇事會同「總捕都司」剿捕的文字內容。¹⁶⁴當然，明末官員一昧公文抄襲，自然無法理解總捕都司已被總捕守備取代，但卻彰顯出當地防礦軍事的重要性。

崇禎十一年(1638)，浙江山區首次爆發稍具規模的蕩民倡亂，官府立即調遣衢州總捕守備領兵，並配合各縣地方團練鄉兵共同追捕，此後這些防礦軍兵屢屢承擔起防蕩的剿捕任務。除了調撥衢州防礦軍兵外，浙江地方同時採取築城、募兵、保甲等防備措施，來因應山民活動的失序。崇禎十四年(1641)，地方官員開始籌畫建置防蕩軍事體系，打算在處州府宣平縣的礮坑設置營兵四百餘人，合為一總，並督委守備一員長期駐鎮。崇禎十五年(1642)，為避免亂事延宕，朝廷下令浙江、福建、江西三省會剿，事平後，大致是朝向熊人霖〈防蕩議〉的主張進行善後工作，而防蕩軍事體系則是改於處州府遂昌縣的王村口等地重新布防，增

¹⁶³ 〈兵部為戶部主事曹履吉陞補浙江按察司僉事員缺事行稿〉，「天啟四年五月二十四日」，收入中國第一歷史檔案館、遼寧省檔案館編，《中國明朝檔案總匯》，第79冊(桂林：廣西師範大學出版社，2001)，頁96-97。

¹⁶⁴ 〈兵部行「浙江杭嚴道補官請敕」稿〉，「天啟七年九月二十日」，收入《明清史料》，乙編第1本，頁35a。

設專官地方治理。也就是說，針對山民的移墾活動，浙江衢州與處州地方各自擁有獨立的駐防軍兵，作好及早應變，以防不測。¹⁶⁵

但是數年後，隨著明朝政局的土崩瓦解，地方自顧不暇，原先浙江防礦與防菁的軍事體系也迅速解體。浙江、福建、江西三省交界山民的活動，再度成為地方關注與顧慮的焦點。例如當南明朝廷決議在江西廣信、浙江處州安置藩王時，江西巡按周燦(1603-1655)不無擔心表示：「昨歲靛賊竊發，負嵎走險，深山窮谷，緝捕為艱，此孰非廣信疆域以內事乎？」¹⁶⁶縉雲人鄭賡唐(1607-1678)也反對明室宗藩置於處州，理由是：「近靛賊、麻盜遊食窟山，且屢見告矣，兼之白蓮邪教在處簧鼓，聞有藩服，激變生心，猝然有警，無兵無食之孤城，何以禦之？」¹⁶⁷這正說明處州的防菁軍力已然解散。而清軍入浙時，隸屬南明隆武政權下的金衢巡撫劉中藻(1605-1649)趕緊奏請選取當地山民練兵，得到隆武帝朱聿鍵(1602-

¹⁶⁵ 過一年後，即崇禎十六年底爆發東陽民變，這場事件有許多複雜的面向，學者已做了不少討論，就目前史料而言，許都倡亂與種靛移住民的關係正如谷口規矩雄指出，其證據還不充分。參見 Dennerline Jerry, "Hsü Tu and the Lesson of Nanking: Political Integration and the Local Defense in Chiang-Nan, 1634-1645," in Spence J. D. and J. E. Wills, eds., *From Ming to Ching: Conquest, Region, and Continuity in Seventeenth-Century China* (New Haven: Yale University Press, 1979), pp. 89-132. 谷口規矩雄，〈東陽民變—所謂許都の亂について—〉，頁 619-646；潘星輝，〈明季東陽民變考論〉，《明清論叢》，1(北京：紫禁城出版社，1999)，頁 349-365；張憲博，〈明末東陽“許都之亂”探究〉，《明史研究論叢》，11(北京：故宮出版社，2013)，頁 202-210；丁國祥，〈陳子龍與“東陽民變”〉，《蘇州教育學院學報》，31：6(2014)，頁 69-72。不過，就浙江地勢與軍兵布置而論，當許都在金華地區起事時，官兵是從平原地帶的杭州、紹興、台州三路進攻，攔阻起事者進入開發先進地區。而衢州與處州兩地軍兵則是位居高地，正好可鉗制金華盆地，遮斷起事者的退路。此外，民變弭平最關鍵的人物，依舊是參與過平定菁亂的推官陳子龍。也就是說，許都事件落幕，多少與防菁軍兵有關聯。

¹⁶⁶ [明]周燦，《西巡政略》(上海圖書館藏明崇禎十七年刻本)，卷 2，〈陳廣信風土難建兩藩疏〉，「崇禎十七年九月十四日具題」，頁 40b-41a。

¹⁶⁷ [明]鄭賡唐，〈諫止處州分藩疏〉，收入[清]湯成烈輯，《縉雲文徵》(北京中國社會科學院近代史研究所圖書館藏清道光三十年五雲書院本)，卷 18，頁 2a。

1646)的同意：「選練精兵，可取於苧蕨、菁蕨、畚蕨三項，此議誠是。取用之後，即當給示，免其差徭；仍勉令與百姓相安。兵數准一千名，衣甲銀兩准於該州動支二千兩正項，務期兵精而餉不糜。」¹⁶⁸其作法與當初招募礦徒作為礦防主力極為類似。

南明政權吸收地方種蕨菁民舉兵抗清，確實讓清軍吃盡苦頭。清順治四年(1647)十月，清軍已攻佔浙江大半土地，然而領地統治力量有限，敵軍不時來犯，甚至連地方官都先行躲避。當時官員即報稱：「景寧之賊，都是本地種麻閩人起衅，縣官、百姓皆是知情，不然才報賊到，職等帶兵遇敵大鈞地方，而縣中百姓即於是日一夜盡行逃去，只留空城以待賊來。」¹⁶⁹順治八年(1651)，遼東人徐治國出任遂昌知縣，到任後發現「蕨寇」才是滋擾當地社會最大的問題，他說：「明之末，蕨寇即已滋種，延及於今已十餘載，日夕靡寧。余蒞茲土三碁，介馬而馳，躬閱險阻，以與周旋橐鞬。」¹⁷⁰反映出任職三年間他都是在忙於處理蕨民的起事。

清初蕨民倡亂不僅是處州遂昌一地的問題，而是浙江山區普遍的現象。所以順治十三至十七年(1656-1660)，擔任浙江提學副使的谷應泰(1620-1690)才會針對

¹⁶⁸ [明]佚名編，《思文大紀》(《臺灣文獻叢刊》第111種，臺北：臺灣銀行經濟研究室，1961)，頁118。又，根據《魯之春秋》記載，劉中藻則是擢任溫處巡撫，「處州多山，其地多苧蕨、菁蕨、茶蕨諸種，皆稱精悍善鬪，中藻練為一旅」。史料記錄尚待釐清，但無論是金衢或是溫處山區，都是菁民最常往來活動之地。參見〔清〕李聿求撰，凌毅標點，《魯之春秋》(杭州：浙江古籍出版社，1984)，卷7，〈傳第二·閣臣·劉中藻〉，頁73。

¹⁶⁹ [清]秦世禎，〈處州府景寧縣麻農暴動〉，「順治四年十月二十二日」，引自中國人民大學歷史系、中國第一歷史檔案館合編，《清代農民戰爭史資料選編》，第1冊下(北京：中國人民大學出版社，1983)，頁316。

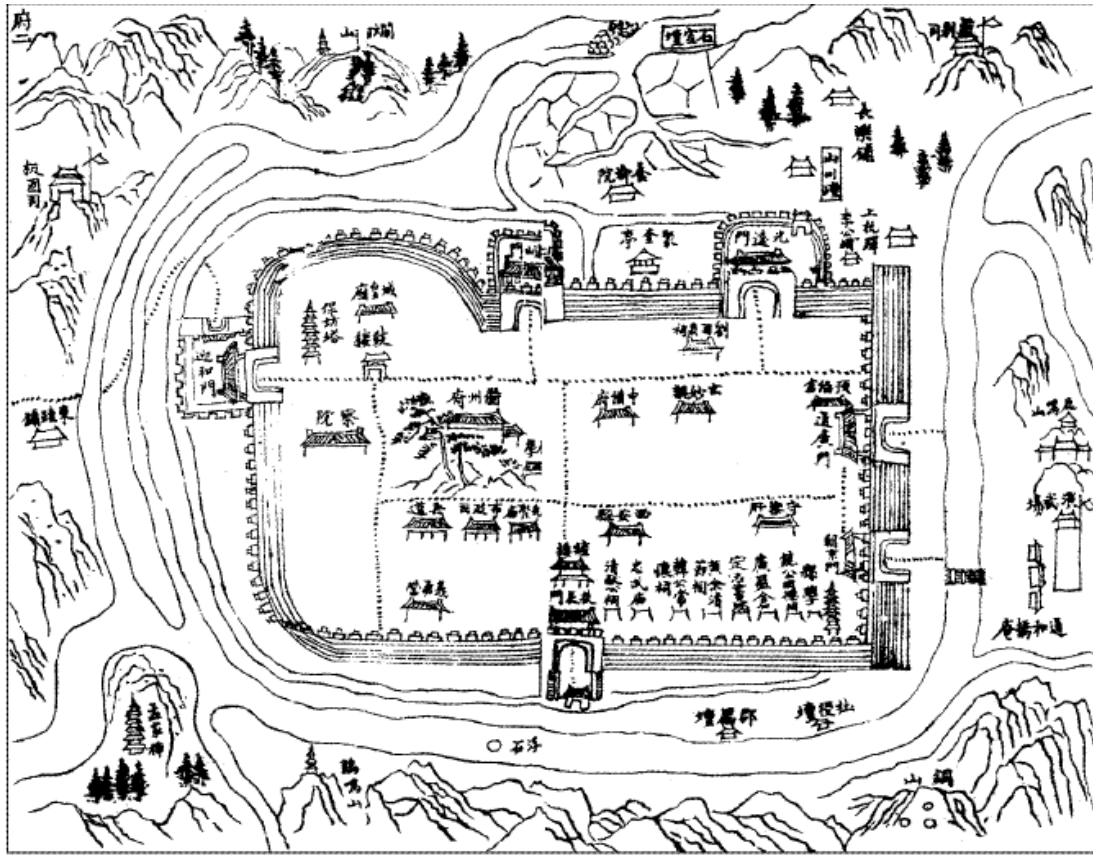
¹⁷⁰ [清]徐治國，〈遂昌縣志舊序〉，收入〔康熙〕《遂昌縣志》，頁17。

衢州江山縣形勢論曰：「今礦害雖無，而繼靛以射利者，其弊已伏於麻篷。大約流移雜處，閩人居其三，而江右之人居其七。日引月長岌岌乎，有反客為主之勢，綢繆陰雨，當先事而大為之防已。」¹⁷¹清初地方官為了防菁事件疲於奔命，曠日廢時卻又徒勞無功，可謂受到深刻的教訓。即使過了半個世紀，康熙五十一年(1712)，已來到處州任官長達十五年之久的知府劉起龍，還會在為《遂昌縣志》寫序文中感嘆：「遂固巖邑也，界接閩豫，居多異籍，所業者藝麻靛、采鐵，故多聚徒眾，而不能無爭鬪，地皆崇山邃谷，尤奸宄之所易匿，防維必嚴，洵宜急講，若如議者之說，一改易州縣間，遂足以盡防維之善歟！」¹⁷²像是發出今夕何夕之言，倘若清初能有機會延續明末防菁政策的議論主張，或許浙江的山林開發與地方治理將有不同的局面。

¹⁷¹ [清] 谷應泰，〈形勢論〉，收入〔康熙〕《江山縣志》(東京大學東洋文化研究所藏，據清康熙五十二年重修序刊本數位化影像)，卷 1，〈輿地志·形勢〉，頁 12b-13a。

¹⁷² [清] 劉起龍，〈遂昌縣志序〉，收入〔康熙〕《遂昌縣志》，頁 11。

圖一 〔天啟〕《衢州府志》中的衢州府圖



資料說明：城內的守備府即為總捕守備衙署，亦是原總捕都司的駐所。防礦軍兵除了定期要在衢州府城訓練，每到秋末冬初之際，還須分派哨兵至城外巡探扼守，如圖中右上方的嚴剝巡檢司，即為一防礦哨地。

圖二 明代浙江地區的礦防與菁防地點



資料說明：萬曆十五年，總捕守備兼領前營兵務，駐紮衢州府城，中軍官管左

營事務，哨兵不時前往分守開化縣華埠等地，兩營均作為浙江地區的防礦主力。

針對山區菁民起事，崇禎十五年，則另議於王村口設置專官軍兵以防菁。

生存資源供給源としての山野の役割

——清代中国を事例とした考察

相原佳之

1. はじめに

本論の目的は、清代中国において山野¹が地域社会の人々の経済生活においてはたしていた役割に着目し、それが如何なる仕組みのもとで維持されていたのかに関して、一定の見通しを示すことにある。具体的には、当時の裁判行政文書の一つである刑科題本から山野の所有・利用・管理にかかわる記述を抽出整理し、検討を加える。なかでも、史料上の表現で「官山」や「官荒」と称される、いわゆる「無主の山野」においておこなわれた人々の営みを取り上げることにより、これまで大規模林業経営や農地開墾といった主要な土地利用・土地管理の影に隠れて検討の対象とされにくかった、薪取りや燃料用の草取り、小規模な樹木栽培などに光をあてる。

2. 重層的コモンズ論・「業」論と「官山」

上記のような自然資源と人々とのかかわりを検討する際に、今日、「コモンズ」という概念と言葉を用いた分析が盛んになっている。その論の広がりや、「資源」をめぐる社会運動の促進に繋げる意図をもつものから、過去に存在した資源利用のあり方を検討するものまで幅広い。

なかでも本論でとくに参照したのが宮内泰介の「レジティマシー (legitimacy. 正統性/正当性)」概念を用いた重層的コモンズ論である。宮内のいうレジティマシーとは、「ある環境について、誰がどんな価値のもとに、あるいはどんなしくみのもとに、かかわり、管理していくか、ということについて社会的認知・承認がなされた状態（あるいは、認知・承認の様態）を指している」[宮内 2006 : 20 頁]。この論の一つの特長は、ある土地の自然環境に対して、ある人々は濃いかわりを持ち、他のある人々は薄いかわりを持つという形で重層的なかかわりが存在しており、それぞれのかかわりが社会的に認知されている状態を前提としていることにある。濃淡のあるそれぞれのかかわり（権利）の源泉や正統性を分析するという手法は、耕地や宅地と比較してかわりや権限が重層的になりやすい森林や水面などと人々とのかわりを検討するに際して参照できる。

一方、清代中国において人々がどのような観念のもとにいかなる仕組みで自然を領有していたのかについては、寺田浩明による整理がある。寺田によれば、清代中国農村における土地売買契約や典契約などの定型などに基くかぎり、当時契約で取引の対象となっているのは、実体としての自然領域（土地以外も含む）に対する包括的排他的全面的な支配ではなく、経営収益のための土地である。そして収益行為を行う対象領域と、そこに働きかければ相応の収益を生み出す集積方法とがまとめて「業」として取引されるとする。この「業」について寺田は、「特定の（ある領域姓を持つ）収益経営形態を巡り、それぞれに独自の正当性が社会的に成り立ち対世的に承認され、その正当性が順次、次主へと付与され

て行くという正当性付与の連鎖構造が存在している」[寺田 1989 : 219] とし、この連鎖構造を「来歴と管業のシステム」と名付けている。

ここから分かるように、対象となる自然領域に対して、複数のかかわりを持つ主体があることを容認するシステムであること、正当性／正統性の付与と社会的認知が重要となる点などで、寺田の「業」論で整理された清代の自然領有システムは宮内の重層的コモンズ論とかなりの部分一致を見る。

ただし、寺田の挙げる「業」で、宮内のいう濃いかかわりから薄いかかわりまでの全てが捉え切れているわけではない。「業」として捉えられるのは相応に安定した収益形態に限定され、それらは基本的には契約文書などで売買・譲渡されるものである。山野について言えば、収益を生み出す林業経営やそれに関わる労働などは「業」と見なされやすいが、薪取りをはじめとする日常的な山野とのかかわりは「業」となりにくい。

こうした日常的な山野とのかかわりは、「業」のある土地では「業」に付随して取引されることが多いため、その内実が史料上の文字としてあらわれづらい。それに対し、「業」となりにくい自然資源とのかかわりが最も実行されやすく、表面にあらわれやすいのが、誰も「業」を持っておらず、観念上はいまだ王朝の統御のもとにある土地であった。こうした土地は「官」の語をつけて、地形等に応じて「官地」、「官山」、「官荒」、「官湖」、「官水」などと呼ばれた。本論で山野と人とのかかわりを分析する際に、「官山」に着目する理由は、この誰も業を持たない土地においてこそ、薪取りなどのマイナーだが生業にとっては無視できない山野とのかかわりが表に現れやすいことにある。

もちろん、「官山」の土地は、誰も業を持たない土地であるからといって、地域のなかで複数の人々がその土地にかかわりを持っている以上、全く無秩序に関わっていたわけではない。それぞれが何らかの形で自らのかかわりに正統性を基礎づけながら、かかわりを持っていた。その正統性の交錯のあり方をといていき、いかなる秩序のもとで人々と山野とのかかわりが実現されていたのかを検討するのが、本論の課題となる。

なお、清代の史料をみるかぎり、史料上で「官山」と称される土地は、その経営・管理・利用に国家的行政的コントロールがどの程度濃くかかわっているのかに着目すれば、次の三種類に分類できる。第一は、官が管理・経営し、かつ官が利用する山である。毎年秋に皇帝が狩猟を行う囲場や、盛京郊外で木材や人參が採取された山、また皇帝の陵墓周辺の土地などがこれにあたる。この種の官山は、皇帝または皇室のみにその便益が供されるという理由で、とくに民業と区別する必要があった。第二は、叛乱の淵藪となった、あるいはその虞があるなどの理由で、官が明文で立ち入りを禁じ開発を停止した山である。原則として官も民もその土地や土地から上がる生産物を利用できない。福建・江西境界にある銅塘山など全国各地にある「封禁山」や、利用を停止（封閉）された鉞山はここに含まれる。この種の官山は、ある時点において民の業が停止されたという記憶をとどめるために、民業と区別し「官山」と称された。官側の政策上、第一、第二の官山については、民による利用を制限する施策、具体的には盗伐・盗採の禁止や封禁の確実な実行が課題であった。そして三番目が、官が直接管理せず、かつ誰の業ともなっていないため山である。「未陞科（税糧未設定）の地」、「無主の地」と同義である。こうした土地は税糧が設定されていない土地であることをとくに明示するために「無税官山」とも称され、民業と区別された²。本論でおもに扱うのはこの三番目の土地である。

この三番目の官山につき、無主であり原則として誰に対しても利用が認められていたことについては、仁井田陞が夙に指摘している³。また森田明は『福寧府志』の資料を用い、官山の利用が広く一般に開放されていたが、開発の進行にともない次第に私有化が促されたものの、私占者も用益条件のよい場所から占有していくため、私有化の範囲には自ずから一定の限界があったことを論じる⁴。メンジーズは官山が自由利用に供されていたと同時に、王朝が開墾という形で今後課税地に含める可能性のある土地として位置づけている⁵。さらに漁業や交通に使われる内水面においても同様な「官」の語が冠された「官湖」という語が使用されていた事例に基づき、太田出が論じている。太田は太湖流域の漁民の事例を用いて、この事例と同じく「官」の語を冠されて「官湖」と呼ばれる水面が存在し、ここでは誰も利用権を持っていないことを指摘した。またその土地が生活弱者への資源供給地としての役割を果たしていたとも見通している⁶。

また本論では、「刑科題本」という資料群から事例を抽出する。清代中国において、刑罰を決定する権限は官僚機構の階層構造に応じて制限があった。そのため、重大な科刑が予期される案件は軽重に応じて下級衙門から上級衙門へ上申され、上級衙門での覆審を経て最終的な科刑が決定された。死刑については原則として皇帝が最終的に決定する権限を有していた。そのため、総督・巡撫など地方官が死刑を科すべきと判断した事案については、刑部を通じて皇帝に題本の形式で上奏が為された。現在「刑科題本」として整理されている資料群は、総督・巡撫が皇帝に提出した題本と、三法司（刑部・都察院・大理寺）の議を経て最終決定の旨を請うため皇帝に提出された題本の二種類が含まれる。

清代の刑事裁判においては、容疑者および関係者の供述が事実認定と科刑決定の重要な判断材料となったため、刑科題本にも容疑者・関係者の供述が記述される。供述には容疑者・関係者の年齢や籍貫のほか、生活状況や事件現場の状況、事件に至る経緯などが含まれるが、そこに見られる多様な情報を抽出して社会史研究に利用できる可能性を持つ。たとえば、食糧暴動、満洲地域への移民の出身地や生活、人口移動、宗族、女性、宗教活動、商業活動、物価、体格など多様な研究が試みられている⁷。

なお、本稿では主に中国第一歴史檔案館所蔵のもの、中央研究院歴史語言研究所所蔵のものを用いた。それぞれ下記の略称を用い、檔案番号、作成者、年月日、地域とともに示した。

- ・一檔刑：中国第一歴史檔案館所蔵刑科題本。
- ・内大：中央研究院歴史語言研究所所蔵内閣大庫檔案。張偉仁主編『明清檔案』に収録されるものは、その情報も示した。

3. 刑科題本からの事例抽出

①山における経済活動

まず、山野利用の重層性、多様性を見るため、史料の中から様々な経済活動の事例を挙げる。最も多いのは樵採（薪取り）と埋葬であるが、下記にみるように、人々は山野でバラエティに富んだ活動をおこなっていた。

タケノコ取りや放牧⁸、「断腸毒草」の採取⁹、炊爨用の竹の葉の採取¹⁰、田に鋤き込むための草の採取¹¹¹²、松葉の採取¹³、打雀¹⁴、墨石の採取¹⁵、外来者による採石¹⁶などがある。また樹木の植栽の目的には、風水保護や田畑の灌漑もあった¹⁷。

②官山における樵採

先述のように、官山は誰にでもアクセス可能な土地であったが、史料上、それはどういった人々として表記されているだろうか。最も一般的なのが、「附近居民」ないし「附近郷民」すなわち近くに住む民に対してである¹⁸¹⁹²⁰²¹²²。「衆姓」とする事例もある²³。一方、「族衆」²⁴や、近くにある三つの「保」に対し認められている事例もある²⁵。このように幾つかの事例では、特定の族や村の名が明示されているが、これらは山の地理的な位置などから樵採に行ける人が実質上その範囲に限られていたことを示すのか、特権的な地位が与えられていたのかについては、判断できない場合が多い。

また民間の認識としては、「官山」が村の境界にある場合、それぞれの村が近い方から利用するのが通例であったことがうかがわれる²⁶。

「官山」は誰でも入って樵採・草刈りをしてよい場所であり、他人の「税業」と区別されることが人々にある程度共有されていたことは、官山と思い込んで他人の土地に入った案件における供述などから伺うことができる²⁷。

一人あるいは一族のみで官山上での独占を図り、他人の侵入と樵採を認めないことは禁止されている。他人を阻む側の言い分としては、山が自分の村の近くにあることや²⁸、生えている芝草が少ないこと²⁹、自分の祖先の墳墓があること³⁰等があったが、いずれも認められていない。また、秋冬の柴草が少なくなる時期を見越してあらかじめ一定区画の山場草地に印を付けておくことも禁止されている³¹。さらに、連日何度も柴を刈りに行くことも非難された³²。

また興味深い事例として、官山の資源を優先的に使えるのは土地を持たない居民であると考えられていた例がある。乾隆三十四年、江西の余干県において、官山上の薪採取をめぐる万姓と朱姓が争いを起こした案件については、「争いの対象となった官山を調査したところ、砂礫地であり開墾はできず、無業の住民に薪取りを認めるべきである。朱姓と万姓は官山附近に山場を持っており、炊爨に供すことのできる柴薪が育っている。今後はどちらの姓も（官）山で草取りをしてはならず、そのことによって争いの元を防ぐ³³。」との判断がなされている。死傷事件を起こした万姓だけでなく、被害者側の朱姓についても官山の利用を禁止し、「無業居民」の樵採のために官山が優先的に使われるべきであるという判断からは、紛争を防ぐと同時に、貧窮者への配慮がうかがわれるだろう。

③樵採と他の経済活動

官山は樵採のみが行われる土地ではなく、同じ土地上で、樹木の植栽など他の経済活動と重層的に行われていた。

最も多く見られるのは、ある個人ないし一族が官山上に植えた樹木については、その植えた樹木については権利をもつものの、土地そのものは開放し附近住民の樵採を認めるというものである。事例をみてみよう。乾隆十年、広東省海豊県の人謝法科が、頼俊祥が官山に植えた松柏林の側で雑木を取り炭に焼いた。頼俊祥は謝法科が松柏を盗み切りしたものだと思って阻んだため悶着が起り、謝法科が頼俊祥を殴り死なせた。この事件では、調査の結果、謝が炭に焼いた雑木は頼が植えたものではないとされたが、判決の中ではさらに「官山の柴木については、頼俊英（頼俊洋の一族）に対して現在松柏が植えてある範

囲を境界として経営させるが、そのほかの場所は民の樵採を認めて、境界を越えさせないようにする」と述べられる³⁴。同様の傾向は数多い。たとえば風水の護衛や田畝の灌漑を目的に植えた樹木について、植えた者の親族が管理を引き継ぐ事例がある³⁵。

官山にある樹木をめぐることは、近隣で認知された慣習的な利用法があるものの、それに対し異議が唱えられている場合もあったことが見て取れる。

道光七年、広西宣化県の事例では、ある一族の祖先が官山に松樹を植えて以来、附近の村民はそこで薪取りはせず、放牧のみを行う状態が続いてきた。しかし後に別な一族はその松樹を植えた一族が管業の契拠を持っていないことを理由に、その山での薪取りを認めさせようと協議し、県に訴え出ようとした。見解の相違から生じた諍いが元で人命が失われ裁判となったが、山に関する結論は、「那壠嶺官山については、従来どおり村衆が牛を放牧することを認めるが、山内の松樹は韋書勝の祖先が費用と工本をかけて植えたものであり、今までどおり村衆による薪取りを禁止し、それで争いの種を絶つ」というものであった³⁶。

乾隆十三年、広東陽春県の事例では、官山に樹木を植えた側と、植えられた樹木を伐採する側の双方の論理が明瞭に示される。植えた側の韓垂寒は「これは叔父の韓振挙が植えた者だから、お前等は伐採するな」といい、一方伐採する側の謝誉聖は「これは官山官樹であり、誰でも伐って良いのだ」と述べたと記録にある。判決の中では、謝姓に対して伐採した樹木の価格に応じて賠償するよう命じられ、「その山は官業に属するが、樹木は韓振挙が植えたものであり、むやみに伐採してはならない」と決めている³⁷。

そして、乾隆三十九年、広東河源県の事例では、従来認められている樵採のほかに、小屋がけ用の材木の採取が認められるかどうかで、村落内の居住者間で意見の相違が表面化した、諍いになった³⁸。嘉慶十七年、広東陸豊県の事例では、工本や手間をかけて植えたものではないが、家屋の風水の護衛になっている樹木が伐採された際、家屋の持ち主が「郷規」によって檳榔を買って賠償させようとしたが、その履行をめぐる諍いが起こり、結果として伐採を禁じる判断が下されている³⁹。さらに、伐採禁止だが、「郷衆」に断れば伐採が認められるという言が一定の説得力を持っていた⁴⁰。

官山の上で長年にわたり管理している樹木は、そのまま権利が認められる場合がある。たとえば、乾隆八年、貴州貴陽府開州で起こった官山上の樹木の紛争において、伐採を咎められて紛争の上殺された人物の伯父である趙君之は「この山は小地名を阿利田といい、総地名を猪場坡といい、官山ではありますが、私の家が長年保護して、はじめて成林したということは、その一帯の人々はみな知っています。それゆえ、外甥がそこに柴刈りに行ったのです。決して騙したものではありません。」と述べ、判決では「争われた阿利田の山林は、調査したところ官山であり、(外甥を殺した)趙阿十の業ではない。すでに趙君之が長年樹木を栽培しているので、これまでどおり趙君之に保護樵採させるべきである。」と述べられている⁴¹。

乾隆十五年、広東高州府石城県の事例では、村の背後にある「無税官山」で鍾姓と李姓が紙竹を植え、境界を分けて伐採していた。この紙竹の伐採をめぐる諍いが起こり人命が失われたが、県の命令で境界は確定されたものの、紙竹の栽培と伐採そのものは禁止されていない⁴²。

総じて言えば、官山における経済活動が禁止されることは少なく、手間と資金をかけて

植えた樹木や竹については、樵採など他の活動を害しない限りにおいて、認められる傾向があったと言えるであろう。それは一方で、官山における樵採は個人あるいは特定の一族の利益を求めた活動よりも、官にとっては保護の優先度が高かったことを示すだろう。

④官山分割の判断をめぐって

官山を空間的に分割する、もしくは境界を明確にする判断がなされる事例がある。乾隆十六年、広西全州の事例では、唐姓と胡姓がそれぞれ祖墳の所在によって管轄範囲を分けていた金盆形官山について、燃料用の草刈りの場所をめぐって争論が起こったことをきっかけに、郷地の立会のもとで分割して絵図を作り分界した⁴³。また、嘉慶五年、江西吉水県の事例では、官山の東側に居住する一族と西側に居住する一族との間で官山上の茅草採取をめぐっていざござが起こった際に、中間に境界の標識を立てて境界を越えないように命じ、争いの元を絶つとしている⁴⁴。

一方、嘉慶十五年、江西樂安県の事例では、これとは反対に分割しないという判断が支持されている。十一都と三十九都の間にある三角峰官山には境界がなく、もともと十一都の民は東から、三十九都の民は西から柴草を採取していた。ある日、十一都に属する陳言仔らが、東側の山に柴草が少ないために西側に入って採取していた所、三十九都の黄三保らに見咎められた。陳言仔らは「どちらも官山である」という理由で言い返したが、それが元でもみ合いになり、黄三保が落命した。この案件では、やはり「争いの元を絶つ」ということが理由で「強引に境界を分けてはならない」とされた⁴⁵。

この二つの案件では、境界を分ける／分けないの判断は異なるものの、いずれも「開墾に堪えない」ことが調査された上で、樵採は禁止されていないという共通点がある。

また県境を跨ぐ形で存在する官山について、判断がなされる場合もある。福建の長樂県と福清県の境界にある官山については、境界を分けて樵採の範囲を定めた⁴⁶。一方、下記の江西の樂平県と弋陽県の境界にある野鷄窩山場については、人々による樵採までを禁じている。また樵採の実行については不明だが、荒山に境界がないという状態が争いを招いたとして、境界を跨ぐ二県の知県が主導して山の調査と分割が行われている事例もある⁴⁷。

⑤官山伐採禁止の判断

一方、官山について、民の活動が禁止される事例を見てみよう。

最も厳格なものは、山を封禁して樵採を認めないものである。江西の樂平県と弋陽県の境界にある野鷄窩山場は、嘉慶二十五年に官山とされ、石碑が立てられて封禁され、樵採を認めない判決が下されている⁴⁸。また、草取りをめぐる争論の結果、知県がその山について絵図を提出させ、樵採を禁じる事例がある⁴⁹。

道光元年の広西富川県の事例では、村全体の風水に関わるとして、村の衆議により樹木の伐採が禁じられていた大壩寨官山について、違法伐採事件が起こった後も、村の取り決めを追認する形で従来どおり樹木伐採を禁止している⁵⁰。一方、道光二年の広西灌陽県の事例では、封禁された官山の禁樹が伐採された事件を受けて、「樵採を認めず、争いの元を絶つ（不許樵採，以杜争端）」との決定がなされているが、この山は従来「砍伐を認めなかった（不許砍伐）」山であり、事件を切っ掛けとして、樹木の伐採のみから、薪取り全般まで禁止事項が拡大したと考えられる⁵¹。

同様に樹木伐採のみが禁じられている場合もある。遠近の居民に対して伐採の禁止が通達された乾隆五十二年の広東英徳県の事例⁵²。

一方、嘉慶十七年の広東陸豊県の事例では、家屋の風水の保護となっている官山上の樹木の枝を他人が伐採した場合に家屋の持ち主に檳榔を買って渡すという「郷規」があったが、その郷規の実行をめぐる人命案件が生じたため、伐採自体を禁じるという決定がなされている⁵³。

⑥官山と契拋・税糧

官山が官の判断によって民業に転化する場合もある。乾隆五十六年、江西省峽江県の事例を見てみよう⁵⁴。「張鼎妹の供述。この禾擔腦山は私の家と顔晚妹・習冬妹の三姓が祖先の代から代々共同で管理してきたもので、三姓とも契據は持たず、税糧も納めていません。樵採のみを認め、栽種は許さないと共同で取り決めしていました。私の家の祖墳二塚がそこにあります。五十五年二月、顔晚妹が勝手に山内で松秧を栽種しましたが、私たちは知りませんでした。二十日の夜明け、私と族人の張傑六はそれぞれ擔棍を持って山に行き祖先の墓で祭祀を行った時にそれを発見し、ただちに松秧を抜き取りました。たまたま顔晚妹が顔料十とともに通りかかり、私たちに抜いた松秧の賠償を求め、我々の祭籃を蹴飛ばしたため、もみ合いになりました。」……「禾擔腦の山場は、契約文書がなく、税糧の支払いもしていないけれども、顔・張・習の三姓が先祖の代から受け継いできたもので、彼らが占拠して管理しているものではない。もしこの土地を官に帰すことにしたら、山に専ら業を持つ人がなくなれば、かえって揉め事を引き起こしてしまうだろう。現在、三姓がそれぞれに開墾を請け負い税額を定めることを望んでいるので、測量に基づいて三股に分けて、境界を定め、それぞれに開墾許可証を与え、試墾の年限が終わったら、税則に応じて課税をはじめる。」

またもう一例、江西泰和県の事例では、土名「油潭嶺」の荒山について、長年東南を鳳崗村が、西北を帰仁城村が管業の契拋なしに管轄してきた。その山で死傷事件が起こり山の管轄も問題となったが、「その油潭嶺山場は、双方に管業の契拋はないものの、この二村によって長いこと分けて管轄されてきた。もし判決により官荒としたら、双方とも樵採放牧する場所がなくなってしまう、必ずや揉め事が起こるだろう」と述べて明確な境界を設けて樵牧の場所を分けている⁵⁵。

また、江西の武寧県で引き続いて冷姓と聶姓による山場土地争いの裁判では、裁判の過程で双方から提出された契約や冊子が実際と符合しないことが判明した。そのため、「本来は全て官荒にすべきであるが、冷姓は明代より管業しており、今となつてはその山の下截に祖墳もあるため、全てを官荒にするのは難しい」との理由で、山を上截下截に分け、上截のみを官山にし、下截を冷姓の業としている。その新たな官山については、冷姓・聶姓とも開墾と埋葬をしてはならないとされた。この山場については十数年後に再び訴訟となり、境界の誤認を防ぐためにより詳細な範囲が決められるが、その訴訟における聶姓の供述では、官山で燃料用の草取りが行われていたことがうかがわれる⁵⁶。

江西の新昌県の事例をみよう。土名を院前坑という荒地は、もともと官山であるが、梅姓が近くに住んでいるので代々管理し樵牧をおこなってきたが、契約書はなかった。この山に徐定喜が母親を埋葬したことから諍いになり、梅安能が徐定喜を殺害した。判決で

は、「調査したところ、院前坑の山場は、梅姓が代々管理しているものの、そもそも官山であり、自分の業とは異なる。徐定喜が徐雨とともに山で母親を埋葬し、梅安能が徐定喜を毆殺した件は、闘殺にしたがって処理する。」とされ、官山で起きた事案は自分の業の土地で起きた事案と区別されている。一方、「院前坑は官山であるものの、梅姓が附近に住み代々長年管理している。もし判断により官荒としたら、梅姓が一朝にして業を失い、樵牧する場所を無くしてしまう。さらに山に業をもつばらにする戸がいなければ、かえって争いがおきるものになってしまうであろう。県に命じて旧のとおり測量して境界に印をたて、梅姓に管業させ、もし開墾できれば、報告して課税を開始する⁵⁷。」とも述べられ、梅姓の生計やさらなる紛争の可能性なども考慮した上で、山の管理を追認している。

一方、その土地を代々受け継いできたり、隣接して管業する土地を持っていたりしても、契拠がない場合、官山のままとされる例も多い。訴訟の当事者双方とも契拠がなく官山(官荒)であることが確認された場合、すでに作った祖墳での祭祀は認めるが、新たな埋葬は認めず、作りかけの灰屋も取り壊すとされた事例もある⁵⁸。「祖遺」すなわち祖先から引き継いだものであることは認められたものの、契拠がないため官荒とし、附近の郷民に樵採を認める例もある⁵⁹。両姓の管業地に挟まれて誰も業を持っていない土地を「入官」つまり官へ没収し、人に開墾させる例もある⁶⁰。

これらの事案では、いずれも契拠がないことが訴訟の場で確認されたが、判決によりそれを税業に変えるか官山のままとするかについては判断が分かれている。おそらくは継続的に開墾できる土地であり、開墾に耐えうる能力をもつ一族がいる場合は開墾させ、それ以外の場合は樵採を保護しているということになる。

またこれらの事例では、契拠がなくとも訴訟前の段階で「〇姓の山」という形で実際上ある一族の管轄となっている場合もなっており、その状態が継続的に社会的な認知を受けてきた状態があることが着目される。

⑦官山による経済活動の禁止。

官山における経済活動を行ったことで、個人に対して刑罰が加えられている事例は二例ある。一つは、広東省帰善県の事例で、官山上に松樹を五十株植えていたことにより、「不応重律」によって「杖八十折責三十板」とされた⁶¹。また一つは浙江省仙居県の事例で、他姓の祖墳の風水に関わる官山で窰を開き炭を焼いていることが罪とされ、同じく「不応重律」によって「杖八十折責三十板」とされた⁶²。

また、個人に対する刑罰はないものの、経済活動の種類を特定して禁止が命じられる事例もある。嘉慶十八年の広東省南康県の事例では、居民による樵採が認められている「油槽官山」という土名の土地に、卓姓は雑穀を、黎姓は松の苗を植えたが、互いの諍いにより命案が発生した後に、「その油槽官山は、砂石混じりで開墾升科しがたいことが明らかになった。双方に対して、以後はものを植えないように命じ、争いの種を絶つ」として、雑穀・樹木の栽培が禁止されている⁶³。この場合は、樵採は従来どおり認められていたと考える良いであろう。

おそらくは獠民叛乱との関連で封禁されたと思われる官山について、そこに浙江からの客民を招いてシイタケ栽培をさせていた事例については、「強占官山律」を用いた処断がなされている⁶⁴。

⑧ 樵採と女性・外来者・貧窮者

関連資料を通覧すると、樵採や割草には女性や子供も大きく関わっている。女性同士が樵採に行き争いとなった事例もあれば⁶⁵、男女に樵採させることを明確に示した資料もある⁶⁶。草取りを行っていた子供同士の争いに端を発して訴訟となったケースも存在する⁶⁷。

こうした事例は、山野における薪取りなどの経済活動の担い手に関わる資料として着目される。

一方、山野から取れる薪が自家用ではなく販売用に供されていたことも分かる。乾隆七年、河南省宝豊県のある夫婦の資料からは、山で柴を刈り、それを市場（集）で売って生計をたてていた様子がうかがえる⁶⁸。また乾隆十三年、福建甌寧県で起きた事件では、殺された朱章生は「砍柴度日」していたとされ、県城の外河にいる柴運搬船の船主に対して「火柴五百担」を運んでくることを約束していた⁶⁹。さらに嘉慶二年、四川省西昌県の事例では、同省名山県籍の羅正擧がその地の官荒山地に来て薪を刈って販売していた。地元の夷人啣鐵はそれを見て、外来の人は刈るべきではないと咎めたが、官の判断は無主官荒の柴草は誰でも刈り取ってよいとの旨であった⁷⁰。

ただ、「樵採度日」すなわち薪を伐って生活するという生き方は、貧窮者が行う活動としても認識されていた。広東省、陽江県の人梁振奇は妻を娶って四年になったが、ずっと次姉の夫である潘尚志の家に住んでいた。乾隆十九年九月、梁振奇は妻の馮氏とともに長姉の夫である謝天爵の家に行き、「貧しく生活が苦しいので、柴を刈って生活させて欲しい」と頼み込んだ。謝天爵は梁振奇夫妻が親戚であることを思い、夫妻を家に住ませることとしたが、たまたま山には刈って売れる柴が無かったため、十月十三日、梁振奇夫妻は再び潘尚志の家で耕作するため戻って行った⁷¹。この事例は、貧窮した親戚などの関係者に対して、自分の家で薪取りをさせる形で生活の糧を提供する場合があったことを示す。また別の事例では、法廷における供述をした人物が自ら「私の家は貧しいので、柴を砍って生活しています」と述べている⁷²。また、広東従化県の事例では、官山に生える竹の伐採をめぐる争いから相手の父を殺した謝東華について、「採樵貧民」であり「無力」であることが汲むべき事情として附言されている⁷³。

これらの事例からは、「官山」を含めた山野は、附近住民に対して生活資源を供給するだけでなく、そこに入り込む外来者が稼ぎをおこなうことのできる場所であったことがうかがわれる。もちろん、そこに大きな収益が見込まれたり、客民流入による秩序不安が見込まれる可能性があれば王朝の態度は異なっただけと思われるが、「樵採度日」という生活様式は収益を見込む事業というよりも生活の糧としての側面が強かったために、外来者の活動として認められることが多かったのであろう。

⑨ 族山、公山における樵採

全面的検討には至らないが、「官山」ではなく、一般に「公山」と呼ばれる共有の山場の事例も見てみたい。「公山」とは一般にある一族が持っている山であるが、刑科題本の事例ではしばしば、その山が「官山」と同様、附近の居民が燃料を確保する場所としての役割を担っている事例に行き当たる。いくつか事例を挙げてみよう。

江西省鉛山県の劉姓は土名を北源嶺という山場を持っており、山上の柴草は誰でも刈ってよかった。嘉慶四年九月、費繼矮は甥とともに刀を持ってその山に行き柴を刈った。たまたま通りがかった劉大丑が、嚴寒の季節に当たり、山内の柴草も多くないので、自分の分を残しておくようにと言って遮った。これに費繼矮が反発して諍いが起こり、揉み合いの中で劉大丑が命を落とした。この案件の判決の中で、その山については、「その山の柴草は従来どおり人々による採取を認めて、民用を便するように」⁷⁴と述べられる。

湖南省綏寧県の事例では、曾姓の山場で牛羅姓の人々が牛にやるための草を刈り豆を播いていたのを咎められたことがもとで諍いが起こり、豆を播いていた羅伯賢が揉み合いの中で無くなった。訴訟の中でなぜ自分の産業でない曾姓の山場で草取りをしていたのかを問われた傅博侯は、「その山場の樹木は外人に勝手に伐採させないが、青草採取は代々禁止されず、人々に伐採されていた」と述べている。判決は「曾姓の山場は羅姓が旧来どおり管業するのを認めるべきである」と述べていて、他姓の山で樵採する側に有利な内容になっている。⁷⁵ また浙江省建德県の事例でも、山主章姓が持っていた丁家塢の山場の茅草が「附近郷民」に対して開かれている⁷⁶。

これらの事例からは、ある宗族が所有する山場であろうとも、官によって「民用の便」を実現するために樵採の実現が実施されており、訴訟の場でもそれが追認されている。

また、公山における地域単位でのルール、取り決めがあることも明らかである。

湖南省長沙府安化県では、李一族が顔家塘に共有の山を持っており、一族の者の薪取りの場となっていたが、李茂奇は（その山で）自分の栽培した樹木が伐採されるのを恐れ、碑を立てて（樵採を）禁止した。李茂求はその碑に気がつく、「勝手に碑を立てるべきではない」と言ってとがめたが、争いになった。判決では、その墳山は共同で伐採を禁じよ、と判断された。ここで言う「公共樵採」とは一族内での樵採を指し示すと思われる⁷⁷。

また、浙江省遂昌県の事例では、山場に植えられた松木がたびたび村人によって切られたため、もし再び伐採事件が起こったら、「村規」にしたがって伐採した者が銭を出して肉を買い皆に食べさせると決めた。再び事件が起こったため「村規」にしたがって処理をしようとしたが、犯人が取り合わなかったため争論になった。これに対して知県は「民間の窃盗事件は官に訴えて取り調べるべきで、勝手に規則を議論してはならない」として禁止の通達を出している⁷⁸。

さらに次の事例は、共有山の重層的権利関係を伺う上で興味深い。江西樂平県と万年県の境界付近にある胡姓の山場は荒地であり、伸びた茅柴は人々による樵採を認めて長く時間が経過していた。乾隆十年、胡張がその山に松の苗を植えたが、茅柴を採取に来る人が誤って松苗まで傷つけてしまうことを恐れて、「隣村の長輩を酒席に呼んでともに禁を議し、茅柴の採取は禁じないが松苗は切ってはならないとし、衆人が全て納得した。」⁷⁹

自姓の持ち山で樹木の植栽をおこなう時に隣村の長輩たちと協議した方が順調にことが運ぶ可能性があったこと、また長輩らから衆人へ禁止の通達が伝わっていたことなどが着目される。複数村の中における取り決めがあった可能性を示唆する。

おわりに

以上、刑科題本のなかから、人々による山野の利用につき、事例をあげてきた。予測どおりではあるが、官山および公山における樵採などのかかわりが、相応のボリュームで存

在していることが、示された。そのかわりを支える秩序については、断片的であり、また訴訟における官の判断についても相互に異なるものも存在するため、にわかに結論することは難しい。だが、おおむねの傾向としては、官は現状維持と紛争の防止という原則に基づき、とりわけ弱者・貧困者の官山利用を保護してきたことが窺える。

また評価が困難なのは、こうした弱者扶助的な意味を持った官山が、どの程度持続的なものであったかという点である。

たとえばムスコリノは近世から近代の水産資源を論じる中で、自然資源に関する合意や慣習のある種の脆弱さを論じている。彼によれば、清代末期に建てられたある漁業碑文は、一見すると資源の持続的な利用を目的としているように見えるが、取り決めは異なる集団間における紛争防止の規定でしかなかったため、近代以降の漁業の新技术が獲得されて以降、その技術を用いた乱獲に対する歯止めにはならなかったとする (Muscolino 2009)。

近代以降、山野や森林に関しても、科学的林業管理が導入されたり、排他的所有権を内実を持つ形での財産制度が確立するなど、資源に関する新しい関わりの方法が進展する(それが各地方においてどの程度普及したかは、別に検討すべき問題ではあるが)。これらの変化の中で、本稿で取り上げたような「官山」における薪取りや草取りに代表されるマイナーな生業活動がどのように保障されていたのか、いかなかったのか、これが今後検討すべき課題である。

文献：

Osborne, Anne, "Property, taxes, and state protection of rights", Madeleine Zelin, Jonathan K. Ocko, and Robert Gardella eds., *Contract and property in early modern China*, Stanford University Press, 2004

Menzies, Nicholas K., *Forest and land management in Imperial China*, St. Martin's Press, 1994

Buoye, Thomas M., *Manslaughter, markets, and moral economy: violent disputes over property rights in eighteenth-century China*, Cambridge University Press, 2000

Menzies, Nicholas K., "A survey of customary law and control over trees and wildlands in China", Louise Fortmann and John W. Bruce eds., *Whose trees? Property dimensions of forestry*, Westview Press, 1988.

Menzies, Nicholas K., *Forest and land management in Imperial China*, St. Martin's Press, 1994

Muscolino, Micah S., *Fishing Wars and Environmental Change in Late Imperial and Modern China*, Cambridge, Mass.: Harvard University Asia Center, 2009

Osborne, Anne, "Property, taxes, and state protection of rights", Madeleine Zelin, Jonathan K. Ocko, and Robert Gardella eds., *Contract and property in early modern China*, Stanford University Press, 2004

井上真『コモンズの思想を求めて——カリマンタンの森で考える』岩波書店、2004

井上真・宮内泰介編『コモンズの社会学——森・川・海の資源共同管理を考える』新曜社、

2001

- 太田出「中国太湖流域漁民と内水面漁業——権利関係のあり方をめぐる試論」『グローバル時代のローカル・コモンズ』ミネルヴァ書房、2009
- 菅豊「中国の伝統的コモンズの現代的含意」『グローバル時代のローカル・コモンズ』ミネルヴァ書房、2009
- 寺田浩明「中国近世における自然の領有」『シリーズ世界史への問い第1巻 歴史における自然』岩波書店、1989
- 唐立（クリスチャン・ダニエルス）編『中国雲南少数民族生態関連碑文集』総合地球環境学研究所、2008
- 仁井田陞『中国法制史研究 奴隸農奴法・家族村落法』東京大学出版会、1962年
- 旗田巍『中国村落と共同体理論』岩波書店、1973
- 平野悠一郎「森が資源となるいくつかのみち——中国の歴史という事例から」佐藤仁編著『人々の資源論——開発と環境の統合に向けて』明石書店、2008
- 堀地明「清代刑科題本と乾隆十年（一七四五）山西大同府天鎮県開賑案」吉尾寛編『民衆反乱と中華世界——新しい中国史像の構築に向けて』汲古書院、2012
- 三俣学編著『エコロジーとコモンズ——環境ガバナンスと地域自立の思想』晃洋書房、2014
- 宮内泰介編『コモンズをささえるしくみ——レジティマシーの環境社会学』新曜社、2006
- 森田明「清末清代の『棚民』について」『人文研究』28巻9号、1976年
- 倪根金「明清護林碑研究」『中国農史』1995-4、1995
- 夏炎「古代山林川沢利用問題再検討——以“公私共利”原則為中心」『安徽史学』2013-6、2013
- 相原佳之「清朝中期的森林政策——以乾隆二十年代的植樹討論為中心」王利華主編『中国歴史上環境与社会』、生活・読書・新知三聯書店、2007

【刑科題本】関係資料集

- 中国人民大学清史研究所等編『康雍乾時期城郷人民反抗闘争資料』中華書局、1979
- 中国第一歴史檔案館・中国社会科学院歴史研究所合編『清代地租剝削形態』中華書局、1982
- 同編『清代土地占有関係与佃農抗租闘争』中華書局、1988
- 杜家驥編『清嘉慶朝刑科題本社会史料輯刊』天津古籍出版社、2008
- 趙雄『清代「服制」命案』中国政法大学出版社、1999
- 台湾中央研究院歴史語言研究所所蔵の檔案 *題本の副本（掲帖）を多く所蔵
（張偉仁主編『明清檔案』中央研究院歴史語言研究所、1986年～ にも一部収録）

¹ 史料上では「山」あるいは「荒」と表現されることが多い。事例分析する史料からうかがわれる土地の状態は、草のみ生える荒地から、高木の茂る森林までさまざまである。本論ではそれらを含み比較的こなれている用語として、ひとまず「山野」という言葉を用いた。

² 官山の分類については、相原 2007 を参照。

³ 仁井田陞 1962

⁴ 森田明 1976

⁵ Menzies 1994

⁶ 太田出 2009

⁷ 刑科題本の内容および関連文献については、堀地明 2012 を参照。

⁸ 内大 044535-001 (《明清檔案》A161-069)、湖南巡撫開泰、乾隆 141208、[湖南、芷江縣]。

「緣文璧籍隸芷江、搬居永順縣、乾隆拾肆年參月、文璧外出、其妻田氏赴山摘筍、忠富亦在山牧牛唱歌調戲搶氏頭帕、肆月初參日、文璧歸家、攜斧往山砍柴、田氏將忠富調戲情由告知、」

⁹ 内大 059406-001 (《明清檔案》A358-001)、廣東巡撫成格、道光 070526、[廣東、長樂縣]。

「緣由朱亞二戀姦情密、起意商同朱鄧氏、用藥將朱丙秀毒死、乘間帶逃、做長久夫妻、朱鄧氏允從、朱亞二回家、尋取瓦罐壹個、帶赴山上採摘斷腸毒草、併取水放入罐內、用樹枝然火煎濃、將藥罐交給朱鄧氏攜回、囑令乘便下毒、朱鄧氏隨將毒罐收藏廚房水缸腳下」

¹⁰ 内大 066706-001、刑部尚書兼內務府總管來保、乾隆 100202、[福建、安溪縣]

「據陳左狀告前事、詞稱蟻妻吳氏、年方二十七歲、本月初六日往山採取竹葉供炊」

¹¹ 内大 001306-001 (《明清檔案》A294-080)、護理湖南巡撫布政使通恩題、嘉慶 050122、[湖南、茶陵州]

「曾維供……小的見山上有草可以肥田、攜帶鐵鋤并挑草柴棍、同曾從隴曾新妹赴山挖草」

¹² 内大 062797-001、刑部尚書來保題、乾隆 081216、[浙江、諸暨縣]

「五福赴郭姓山上割草肥田、侵入庵界」

¹³ 内大 062797-001、刑部尚書來保題、乾隆 081216、[浙江、諸暨縣]

「小的在冠珠庵後山採摘松花、看見綏五福在庵山割草、本隆看見走去」

¹⁴ 一檔刑 02-01-07-12092-020、江西巡撫陸應穀題、咸豐 010302 [江西、樂平縣]。「邵叔 [小興] 魯盛佶同邵鬼仔郡年麻子、分拏禾鎗竹銃、在野雞窩山脚砍柴打雀、」

¹⁵ 一檔刑 02-01-07-08694-017、大學士管理刑部事務慶桂題、嘉慶 040621 [江西、信豐縣]

「該處產石官山應仍聽村民照舊挖取、曾姓不得混阻滋事。」

¹⁶ 一檔刑 02-01-07-05574-007、刑部尚書鄂彌達題、乾隆 230521、[貴州、綏陽縣]

「據原任貴州巡撫周琬疏稱、符之節與劉章富素識無嫌。緣劉章富籍隸楚省、在綏邑皮家山打石售賣。」

¹⁷ 一檔刑 02-01-07-05036-008、廣東巡撫蘇昌題、乾隆 161111、[廣東、河源縣]。

「緣土端屋後有土名平石官山種植樹木、護衛風水、并蓄水灌蔭田畝。乾隆十六年五月二十九日、陳繼瑞往山樵採砍伐樹木、土端見而攔阻、維瑞不依、致相爭論。」

¹⁸ 一檔刑 02-01-07-05483-014、署理廣東巡撫周人驥題、乾隆 221220、[廣東、潮陽縣]。「土名鷄籠山係屬官山、應聽附近居民樵採、毋許爭占滋事。」

¹⁹ 一檔刑 02-01-07-06720-002、廣東巡撫德保題、乾隆 370326、[廣東、陸豐縣]。

「緣吳阿信於乾隆三十六年六月初十日、至林郁杞屋後官山砍伐松枝陸株、時林郁杞在田望見、上山喝阻、吳阿信拾起松枝向打。」……「查吳阿信砍伐官山松樹、並非偷竊、應照鬪殺律科斷。」……「官山樹木應聽附近居民樵採、毋許爭阻、以杜爭端。」

²⁰ 一檔刑 02-01-07-06765-002、廣東巡撫德保題、乾隆 370504、[廣東]。

「該處官山樹木、應聽附近鄉民樵採、不許廖姓占管、以杜鬪端。」

²¹ 一檔刑 02-01-07-09733-001、大學士管理刑部事務董誥題、嘉慶 190315、[廣東、南雄州]。

「村外有土名黃茅坪官山、所產茅草向係鄧謝兩村男婦採割發賣。」……「茅坪官山茅草、飭令附近居民公同採割、毋許恃強爭占、以杜鬪端。」

²² 内大 027180-001 (《明清檔案》A164-067) 署刑部尚書阿克敦題、乾隆 150607、[廣東、

揭陽縣]。

「緣周嘉利有祖棺葬在官山，乾隆十三年九月十五日早，鄭聯招在旁割草，適周嘉利攜帶挑刀守稻，看見向前爭阻，鄭聯招用鐮刀向擲」……「至石母官山，應聽附近居民樵採，毋許爭阻，以杜釁端」

²³ 內大 050512-001、大學士內務府總管兼管刑部事務來保題、乾隆 140528、[江西、樂安縣]

「邱流民與吳文二各村居住，緣該地有官山一嶂，山內柴薪向係眾姓樵採，吳文二在山砍柴，比邱流民亦至山採樵，吳文二稱係伊業，不容邱流民砍柴，致相爭角」

²⁴ 一檔刑 02-01-07-09498-018、江西巡撫先福題、嘉慶 160629、[江西、新淦縣]。

「土名打古坪官山一嶂，山上茅柴向係該族公砍。」……「屍弟鄒照四供……近村有土名打古坪官山，山上茅柴向聽族眾公砍。嘉慶拾伍年捌月貳拾陸日下午，哥子同族人鄒仟九往官山砍柴，路過南山地方，撞過鄒沈二也在官山砍柴回家，哥子因鄒沈二連日往砍多次，斥責鄒沈二不是，沈二不服，致相爭鬧。」……「該處打古坪山係屬官荒，應聽該族照舊樵砍，嚴飭毋許爭競，以杜後釁。」

²⁵ 一檔刑 02-01-07-05512-011、刑部尚書鄂彌達題、乾隆 221106、[福建、建寧縣]。「該處官山土名桃林嶺，所生柴草向係隆安癸洋靜安三保居民樵採，汪龍山住居隆安保，與汪學藉有祖墳在山下，議禁不許靜安癸洋二保之人採取。乾隆二十一年十月初六日，靜安保余都同余星文赴山砍柴，汪龍山執持扁挑向阻，用扁挑打傷」……「桃林嶺一帶官山，仍聽三保居民樵採，不許汪姓藉墳阻占。」

²⁶ 一檔刑 02-01-07-09466-024、刑部尚書勒保、嘉慶 150830、[江西、樂安縣]

「該處山場止生茅草，不堪墾種，應仍聽都民公共割取，毋許強分界址，以杜釁端。」……「據陳言仔供，樂安縣十一都人，年三十七歲，父親陳峻九於乾隆五十九年身故，母親謝氏現年五十四歲，並無兄弟，聘妻何氏，尚未過門，與黃三保素識無嫌。小的十一都與黃三保住的三十九都有三角峰官山一嶂，並無界址。山上茅草向來十一都人在附近東首割取，三十九都人在附近西首割取。嘉慶十四年八月十六日，小的順帶防獸鐵鎗，同族人陳破仔各帶刀槍赴山割草。小的因東首山上茅草無多，順到西首山上割取。適黃三保與曾禮九各攜刀擔走來看見，黃三保斥責小的們不應越割，上前阻止。小的因都是官山，不依詈罵，致相爭鬧。」

²⁷ 內大 012901-001 (《明清檔案》A111-061)、廣東巡撫王安國題、乾隆 070421、[廣東、英德縣]。「路經白水際、不知此山屬鄧姓稅業、因見茅草甚多、上貴等即在該山採割。」……「小的們同族叔謝上貴一供四人往山割草、經過白水際山、不曉得是鄧伯祥的稅業、因見茅草多、只道是官山、就在那裡採割」……「小的同族姪謝得正們、錯認這山是官山、實不知是鄧伯祥的糧業。」……「白水[石祭]山訊係鄧姓祖遺稅業，應令照舊管業。」

²⁸ 一檔刑 02-01-07-07699-006、暫署廣東巡撫巴延山題、乾隆 470509、[廣東]。「緣乾隆十六年八月二十三日，陳先裔往土名心頭嶺官山割草，適曾宗昌先在山上裁割，曾宗昌聲言，該山在伊村前，不許陳先裔樵採。陳先裔冒其強占官山，互相嚷鬧。…土名心頭嶺官山，飭令聽人樵採，毋許曾姓踞占滋事。」

²⁹ 一檔刑 02-01-07-10932-016、大學士管理刑部事務托津題、道光 100718 [廣東、從化縣]。

「問據駱試安供，本縣人，年三十六歲，父親已故，母親李氏現年七十八歲，弟兄三人，哥子駱試奇，小的居次，娶妻劉氏，生有一女，小的與謝亞文隣村居住，素識沒嫌。道光八年四月二十六日已牌時候，謝亞文攜帶柴刀，在小的們住居銀溪村後土名山涯凹官山樵採。適小的同族人駱亞九駱幅隆各拿鐵[金邦]木扁挑往田工作，走到看見，駱幅隆因那山柴草無多，喝令謝亞文往別處採取，謝亞文不依，」……「該處官山柴草，應聽附近居民照舊樵採，毋許爭占，以杜釁端。」

³⁰ 一檔刑 02-01-07-05512-011、刑部尚書鄂彌達題、乾隆 221106、[福建、建寧縣]。「該

處官山土名桃林嶺，所生柴草向係隆安癸洋靜安三保居民樵採，汪龍山住居隆安保，與汪學藉有祖墳在山下，議禁不許靜安癸洋二保之人採取。乾隆二十一年十月初六日，靜安保余都同余星文赴山砍柴，汪龍山執持扁挑向阻，用扁挑打傷」……「桃林嶺一帶官山，仍聽三保居民樵採，不許汪姓藉墳阻占。」

³¹ 內大 043620-001 (《明清檔案》A146-113)。「該臣看得、連平州民陳亞隆毆傷歐師宗越伍日身死一案。緣州屬無稅官山柴草聽民樵採、乾隆拾壹年參月內、亞隆在黎峒凹山場草地預先號記、秋冬收割、迨捌月拾伍日、亞隆將刈割之草堆積在山、拾捌日師宗亦往該山割草、亞隆以伊號記在先、向前攔阻、互相爭論。」……「黎峒凹官山柴草、飭令聽民樵採、毋許預行號記、致滋釁端。」

³² 一檔刑 02-01-07-09498-018、江西巡撫先福題、嘉慶 160629、[江西、新淦縣]。「土名打古坪官山一嶂，山上茅柴向係該族公砍。」……「屍弟鄒照四供……近村有土名打古坪官山，山上茅柴向聽族眾公砍。嘉慶拾伍年捌月貳拾陸日下午，哥子同族人鄒仔九往官山砍柴，路過南山地方，撞過鄒沈二也在官山砍柴回家，哥子因鄒沈二連日往砍多次，斥責鄒沈二不是，沈二不服，致相爭鬧。」……「該處打古坪山係屬官荒，應聽該族照舊樵砍，嚴飭毋許爭競，以杜後釁。」

³³ 一檔刑 02-01-07-06475-001、大學士管理刑部事務劉統勳題、乾隆 340728、[江西、余干縣]。「緣萬姓族有祖遺土名城崗殿柴山，坐落東鄉縣界內，與餘干縣官山相近。乾隆三十三年七月二十九日，萬良先同族人萬層俚萬公和萬欽然萬會吉萬妹俚萬丈俚萬思俚等先後往官山砍柴，適朱文獻看見，以萬姓原籍東鄉，不應砍取餘干官山柴草。」(7 畫)「所爭官山業經勘明，均係砂石，不能開墾，應聽無業居民樵採，朱萬兩姓於官山附近各有山場，自蓄柴薪可以供爨，嗣後均不許赴山採草，以杜爭端。」

³⁴ 內大 013518-001 (《明清檔案》A139-053)、兩廣總督暫署廣東巡撫印務策楞、乾隆 100818、[廣東、海豐縣]「緣賴俊祥在官山栽有松柏、乾隆十年三月初五日謝法科往山砍取雜木燒炭、適俊祥遇見、疑係偷砍伊樹、向前爭阻噴角、……」……「乾隆十年三月初五日、小的在賴俊祥栽種松柏林邊、砍取雜木燒炭、纔砍了三條、俊祥走來罵小的偷砍他的松柏、小的說砍的是山上雜木」……「官山柴木、飭令賴俊英照現栽松柏為界經管、其餘聽民樵採、毋許越佔。謝法科所砍雜木三條、並非俊祥所植之木、毋庸議追。」

³⁵ 一檔刑 02-01-07-05036-008、廣東巡撫蘇昌題、乾隆 161111、[廣東、河源縣]。「緣 [田] 土端屋後有土名平石官山種植樹木，護衛風水，并蓄水灌蔭田畝。乾隆十六年五月二十九日，陳繼瑞往山樵採砍伐樹木，土端見而攔阻，維瑞不依，致相爭論。」……「至平石官山，既經田土端種植樹木，應聽土端親屬管理，陳姓不許砍伐，以杜訟端。陳維瑞所伐樹木，已經土端獲回，應毋庸議。」

³⁶ 一檔刑 02-01-07-11316-018、廣西巡撫梁章鉅題、道光 170320、[廣西、宣化縣]「緣何建棕籍隸宣化縣，與已死韋李氏同村無嫌。村外有那壠嶺官山，於乾隆年間，經韋李氏之翁韋學賢種植松樹，遺傳管業，附近村民在山牧牛，向未樵採。道光拾陸年伍月初肆日，何建棕因係官山樹木，欲議歸村眾公共樵採，即邀同方臣化，方紹位並子何大經往向韋李氏之子韋書勝理論。韋書勝以該山樹木係伊祖費用工本栽種，不允歸公樵採。何建棕不服爭鬧，欲赴縣呈請官斷。」……「據何建棕供，……村外有土名那壠嶺官山一座，於乾隆年間，經韋李氏公公韋學賢種植松樹，遺傳管業，附近村民只在山牧牛，向未樵採。道光拾陸年伍月內，小的見那壠山樹木叢茂，韋李氏家並無管業契據，不應獨佔，要議歸村眾公共樵採。」……「方臣化，方臣位救阻不及，共隨同何建棕向韋書勝理論，欲將樹株歸公樵採，並無恃強情事，應毋庸議。那壠嶺官山斷令村眾照舊公共牧牛，山內松樹係韋書勝之祖費用工本種植，仍禁村眾樵採，以杜爭端。」

³⁷ 內大 049759-001、廣東巡撫岳濬、乾隆 130711、[廣東、陽春縣]

「問據謝譽聖供，小的今年肆拾貳綏，謝昌富是小的堂姪，乾隆拾壹年捌月貳拾伍日，小的與姪子同到王氏屋後官山砍柴，姪子見有壹株小樹用刀砍伐，小的也幫砍樹枝。韓亞寒走來說，這是我叔子韓振舉種的，你們不要砍伐。小的們說，這是官山官樹，人人砍得的。亞寒就跑回，叫他祖母王氏同來嚷鬧，亞寒信口詈罵辱及姪子的父母，姪子拾石…」……「謝昌富等所砍韓振舉樹木、照估追賠、該山雖屬官業、但樹木係韓振舉所種、應禁濶砍、以杜爭端」

³⁸ 一檔刑 02-01-07-06973-013、大學士管理刑部事務舒赫德題、乾隆 391204、[廣東、河源縣]

「緣邱文奉屋後官山一座，山上樹木向係附近居民公同樵採，乾隆三十九年二月二十日，陳亞甲搭蓋寮房需用木料，遂攜柴斧前往，邱文奉看見上山攔阻，陳亞甲不依，致相爭鬧。」……「官山樹木應聽附近居民樵採，無許爭阻，以杜釁端。」

³⁹ 一檔刑 02-01-07-09562-021、廣東巡撫韓崱題、嘉慶 170328、[廣東、陸豐縣]

「查吳亞汪等所砍樹枝，係產自官山，並非劉日開用工本栽種，劉日開欲圖護衛住屋風水，因而拏取刀桃令其照鄉規買送檳榔賠禮，以致索討爭毆斃命。」……「該處樹木係在官山，既釀人命，應請禁止砍伐，以杜釁端。」

⁴⁰ 一檔刑 02-01-07-05052-006、署理刑部尚書阿克敦題、乾隆 160568、[廣東、豐順縣]

(2 畫)「緣學古鄉中有土名三岐章官山一所，種植樹木不許砍伐。乾隆十五年四月二十三日，黃學古見樹木茂盛，商同蔡景祥賣與蔡宰臣砍做做履坯，宰臣慮及鄉眾不允，學成答以先交銀分給鄉眾，宰臣信以為實，議定每擔履坯價錢二百六十文，并出定銀二十兩交與學成接收。五月初九日，學成雇蔡景祥及景祥之弟蔡阿邗，蔡阿完進山砍伐，許給景祥每擔酬謝錢十五文。十六日，甲長葉用梅鄉老彭玉林日新，劉端才查知，」

⁴¹ 內大 011911-001 (《明清檔案》A125-071)、貴州總督管巡撫事張廣泗題、乾隆 080906、[貴州、開州] 族長趙大廷「豬場坡之阿利田係是官山、為趙君之護蓄有年、並非趙阿十之業。其阿十伯父文契得買趙君之山、地名坡上寨丫口寨、相隔一嶺、並不相連。」……「前審拋趙阿十供稱、這山林是你壳与他家的、況又拋鄉約同你族長人等查明係官山、你怎樣冒認你家的、叫你外甥尚奇学去偷砍滋釁、以致打死人命呢。」……「小苗壳与趙阿十伯爺趙良廷地方、是坡上寨丫口寨、並不是這山。這山小地名叫做阿利田、總地名叫猪場坡、雖是官山、實係小苗家護蓄多年、纔得成林、那一塊地方通知的。因此、纔叫外甥去砍柴、並不是冒認。」……「所爭阿利田山林、既已查係官山、並非趙阿十之業、已經趙君之蓄養多年、應仍聽趙君之護蓄樵採。」

⁴² 內大 052697-001、廣東巡撫蘇昌題、乾隆 150910、[廣東、石城縣]。

「緣鍾璣與永國村後有官山嶂無稅官山、向係鍾李貳姓種植紙竹、分界砍伐、乾隆拾肆年捌月貳拾貳日、永國同姪李亞二在界邊砍伐紙竹、鍾璣看見、恐其越砍理阻、彼此爭論、永國用拳向打鍾璣、鍾璣閃側回拳打傷永國左耳根、永國氣忿、又拾砍竹刀向砍鍾璣」……「鍾璣與永國村後有土名官山嶂無稅官山，向係鍾李貳姓種植紙竹，分界砍伐，乾隆拾肆年捌月貳拾貳日，永國同姪李亞二在界邊砍伐紙竹，鍾璣看見，恐其越砍理阻，彼此爭論，永國用拳向打鍾璣，鍾璣閃側回拳打傷永國左耳根，永國氣忿，又拾砍竹刀向砍鍾璣」……「官山嶂紙竹，經縣飭令立界，以杜爭端。」

⁴³ 一檔刑 02-01-07-05102-005、署理刑部尚書阿克敦、乾隆 160568 [廣西、全州]

「緣該州恩鄉金盆形官山上下，唐胡兩姓各壅有祖墳 上下毗連 俱倚墳管山 未分界址。」……「金盆形山場，已飭令分界繪圖，胡唐二姓各照界址管業，應毋庸議等語。」

⁴⁴ 一檔刑 02-01-07-08749-016、大學士管理刑部事務董誥、嘉慶 051119、[江西、吉水縣]

「據屍兄郭銘四供，已死郭鏡八是小的胞弟，小的村外有官山一嶂，土名塔坑。小的家住在

那山西邊，族叔郭潤堂住在那山東邊，山上茅草向聽附近居民樵採，不分界限。乾隆四年八月十二日，小的兄弟郭鏡八同族人郭向榮往東邊山上割草，郭九苟郭星照郭潤堂向阻爭毆，」……「郭澄九供，…適郭九苟郭星照…走來看見，郭九苟說小的們西邊人不該到他東邊山上割草，向前阻止。」……「該處山場業據該縣勘明砂石間雜，僅生茅草，不能墾種，應飭於山之中間釘立界限，聽其兩造各分東西就近樵牧，毋許越界，以杜爭端。」

⁴⁵一檔刑 02-01-07-09466-024、刑部尚書勒保、嘉慶 150830、[江西、樂安縣]

「據陳言仔供，樂安縣十一都人，年三十七歲，……附近東首割取，三十九都人在附近西首割取。嘉慶十四年八月十六日，小的順帶防獸鐵鎗，同族人陳破仔各帶刀槍赴山割草。小的因東首山上茅草無多，順到西首山上割取。適黃三保與曾禮九各攜刀擔走來看見，黃三保斥責小的們不應越割，上前阻止。小的因都是官山，不依詈罵，致相爭鬧。」……「該處山場止生茅草，不堪墾種，應仍聽都民公共割取，毋許強分界址，以杜釁端。」

⁴⁶一檔刑 02-01-07-10063-001、兵部尚書管理刑部尚書章煦、嘉慶 230304、[福建、長樂縣]。

「該處山場，係屬長福兩縣分界官山，飭令嗣後各分界址樵採，毋許越界，以杜爭端。」……「陳學桂供…福清縣人，與長樂縣人陳嫩嫩隔山居住，同姓不宗，素無嫌隙。小的村內有土名南陽官山一崙，與長樂縣界址毗連，以山頂倒水分界，南屬福清，北屬長樂，山上柴草向聽鄉人樵採」

⁴⁷內大 043351-001 (《明清檔案》A192-060) 署刑部尚書阿里袞題、乾隆 210230、[浙江、永康縣]「該地有栢巖山一座，係東永二邑交界荒山，向係聽人樵採。盧起耕有管業山場，土名山樹凹，與栢巖荒山相連。」……「實因荒山無界，偶爾誤砍，一時爭角，失手致傷，並非偷砍，亦非有心致死，” “山界已經勘明，卑職會同東邑曉諭居民照界管業，毋許越砍滋事」

⁴⁸一檔刑 02-01-07-12092-020、江西巡撫陸應穀題、咸豐 010302 [江西、樂平縣]。「卷查野鷄窩山場坐落樂平弋陽二縣交界處所，嘉慶二十五年，樂平縣民馬修竹京控弋陽縣民邵周文等占山案內，斷作官山，勒石封禁，不准樵採，詳奉咨准部覆飭遵在案。」……「道光二十九年六月二十二日，邵叔 [小興] 魯盛信同邵鬼仔郡年麻子，分拏禾鎗竹銃，在野雞窩山脚砍柴打雀，適馬保中們族人馬文欽馬興周馬福建老馬信仇馬致才馬兆千并程克成赴墟挑柴，經見那山向禁樵採，前向斥阻。」……「該處野鷄窩山場，飭令照舊封禁，不准樵採，以杜釁端等情。」

⁴⁹一檔刑 02-01-07-08073-006、大學士管理刑部事務阿桂題、乾隆 570327、[廣東、平和縣]。「官山禁止樵採，以杜爭端。」

⁵⁰一檔刑 02-01-07-10287-015、大學士管理刑部事務戴均元題、道光 010420、[廣西、富川縣]。「緣甘曹養籍隸富川，於于玉才隣村無隙，甘曹養村內有土名大壩寨官山樹木，因關合村風水，經眾議明禁止砍伐，嘉慶貳拾肆年拾貳月，」……「于玉才攜帶柴斧前赴該山砍取樹木，經甘曹養族人甘揚連遇見不依，將柴斧奪去。」……「大壩寨官山樹木，既有礙合村風水，應仍聽該村議禁砍伐。」

⁵¹一檔刑 02-01-07-10322-006、護理廣西巡撫嵩溥題、道光 020302 [廣西、灌陽縣]。「據趙大和趙雲材同供，小的們村處有土名呂福庵官山一座，長有樹木，歷來封禁，不許砍伐。道光元年陸月貳拾日，史道良與史道七因村內修理社廟需用木料，在山砍樹，經陳思梅查知，邀同小的們前往向阻。」……「此案史道良砍伐官山禁樹，雖有不合，陳思梅並非山主向阻被毆致死，應仍照鬪殺問擬。」……「該處官山仍行封禁，不許樵採，以杜爭端。」

⁵²一檔刑 02-01-07-07868-003、大學士管理刑部事務阿桂題、乾隆 520306、[廣東、英德縣]「砍取小樹二株。」……「村後官山樹木飭行封禁，毋許遠近居民砍伐，以杜釁端。」

⁵³一檔刑 02-01-07-09562-021、廣東巡撫韓對題、嘉慶 170328、[廣東、陸豐縣]。「查吳亞

汪等所砍樹枝，係產自官山，並非劉日開用工本栽種，劉日開欲圖護衛住屋風水，因而拏取刀桃令其照鄉規買送檳榔賠禮，以致索討爭毆斃命。」……「該處樹木係在官山，既釀人命，應請禁止砍伐，以杜弊端。」

⁵⁴ 一檔刑 02-01-07-07988-016、大學士管理刑部事務阿桂、乾隆 560415 [江西、峽江縣]，張杰六，私栽松秧，傷斃顏晚妹 *

(2 畫)「據保正顏庭發報，據顏傳一投稱，伊村後有禾擔腦山一嶂，係伊家與張傑六習東妹三姓祖傳公管，議明不許栽種。本年二月初間，伊叔顏晚妹在山栽插松秧，二十日張傑六張鼎妹赴山祭墳看見，將松秧拔起。」

(4 畫)「問據張鼎妹供，這禾擔腦山是小的家與顏晚妹習冬妹三姓祖傳公管，各無契據，都未承糧。公議只許樵採，不許栽種。小的家墓有祖墳二塚在內。五十五年二月裡，顏晚妹私在山內栽種松秧，小的們先不知道。二十日清明，小的與族人張傑六各用擔棍挑祭禮往山祭墳看見，當把松秧拔起，適顏晚妹同顏料十路過看見，要小的們賠種，并把小的們祭籃踢翻，致相爭鬧。」

(10 畫)「禾擔腦山場，顏張習三姓雖無契據，亦未承糧，但究係三姓祖手流傳，並非伊等占管，若斷令歸官，恐山無專業，轉致紛爭。現據各願認墾陞科，據勘丈分作三股，立定界限，各給墾照，俟扣滿試墾年限，按則陞科。」

⁵⁵ 一檔刑 02-01-07-11475-009、大學士管理刑部事務王鼎、道光 200424、[江西、泰和縣]。

「道光十七年三月初十日，據地保蕭樂拱報，據蕭繼青投稱，伊家住居仁城村，同姓不宗之蕭首霑及曾衍棋等住居鳳崗村，兩村中間有土名油潭嶺，即下嶺荒山一嶂，向係兩村居民分界樵牧，東南歸鳳崗村，西北歸仁城村，歷年已久，均無管業契據。本月初九日，鳳崗村蕭首霑蕭命勝等赴山樵採，蕭命勝因誤認界址越砍伊界松秧，伊姪蕭承梧同族人蕭繼峯等見阻爭鬧，蕭繼峯將蕭命勝砍傷」……「據蕭命勝供，道光十七年三月初九日，小的同族人蕭首霑蕭首銘們各帶刀擔往山樵採，小的因誤認界址越砍仁城村界內松秧，適蕭繼峯們看見，斥阻。」……「該處油潭嶺山場，雖兩造均無管業契據，惟該二村分管已久，若斷作管荒，兩造無處樵牧，勢必復起爭端。查該山共有五坑，中坑土名白禾，斷令以白禾坑直下立石為界，東南二坑歸鳳崗村，西北二坑歸仁城村，白禾坑各管半坑，毋許越界樵牧，以杜弊端等語。」

⁵⁶ 一檔刑 02-01-07-10268-012、大學士管理刑部事務戴均元、道光 010525、[江西、武寧縣]

「該處茅嶺山南面并相連之石壁塢山場，現經委員勘丈界止畝數，核與兩造所呈契冊不符，本應概斷官荒，惟冷姓自前明管業，至今歷於該山下截墓有祖墳，未便全行入官。應請將該山分為上下兩截，中以冷姓祖墳九弓之外斷作官山，聶冷二姓俱不得墾墾，以杜爭端。下截山場仍斷結冷拔崇等管業，飭令明立界址，內除一畝三分有糧外，餘仍報丈陞科。所有北面山場向無爭競，仍聽聶煥冬等照管，茅腦尖山仍歸冷陳鄧黃等姓照契各管各業，拔毀小麥照估追賠，聶斗澗推斷冷張氏墳碑，業已身死，毋庸議賠，所呈白契廢冊塗銷附卷。」

一檔刑 02-01-07-10944-004、大學士管理刑部事務盧蔭溥題、道光 110304、[江西、武寧縣]。

「據屍親冷日照供，已死冷繼溪是小的胞姪，聶冷二姓村內有土名茅嶺石壁塢連號山場一嶂，坐北向南，先於嘉慶二十三年四月內，因小的族人冷點亨致傷聶斗澗身死案內，蒙委員勘斷，把那南面分為上下兩截，中以小的冷姓祖墳九弓以上為界，上截斷為官山，聶冷二姓都不得墾墾，下截仍歸小的冷姓管業，北面山場給聶姓管業。」……「據聶象志供，…前往茅嶺南面上截官山割草，看見下截冷張氏墳西山內種有蕎麥，因未立界址，誤為冷姓越佔官山，小的起意與聶華彬們把蕎麥打毀。」……「冷繼圭栽種蕎麥之處，係在冷債長墳下冷姓應管山

內，並未越佔。聶象志等打毀蕎麥價值無幾，免其追賠。該處茅嶺石壁塢山場，原斷南面上截以冷姓祖墳上九弓之外，斷作官山，下截仍歸冷姓管業，本未指明以冷姓何塚祖墳為準。茲據兩造中證查明，冷偵長之墳係在該山南面適中之處，應自冷偵長墳上九弓之外，直至山頂二十六弓，橫長四十八弓，作為官山，下歸冷姓管業，已據掘溝為界，飭令冷姓照界承管，仍報丈陞科。」

⁵⁷ 一檔刑 02-01-07-08386-011、江西巡撫陳准題、乾隆 601011、[江西、新昌縣]。

「緣該處有荒山壹嶂，土名院前坑，本係官山，因梅姓住居附近，世管樵牧，並無契據。乾隆伍拾玖年陸月貳拾肆日，徐定喜之族人徐雨，因母故未葬，知院前坑係屬官荒可以安埋，邀同徐定喜，將母棺擡往院前坑葬畢。正在培土，梅安能走至瞥見斥阻，徐定喜不服，致相爭罵。」……「查院前坑山場，雖係梅姓世管，但本屬官山，與已業不同。徐定喜幫徐雨赴山葬母，梅安能向阻爭毆致傷徐定喜身死，應照鬪殺，定擬梅安能依律擬絞監候，請題請旨。」……「徐雨母棺竝免起遷。再院前坑雖係官山，但梅姓住居附近世管有年。若斷作官荒，不特梅姓一旦失業，樵牧無所，且山無專業之戶，恐轉起爭端，應飭縣照舊勘丈立界，給梅姓管業，如可開墾，報明陞科。嗣後徐姓不得續葬，以杜後釁。」

⁵⁸ 一檔刑 02-01-07-08152-002、署江西巡撫約棻題、乾隆 570415、[江西、安福縣]

「該處楊陂山，兩造既無契據，亦未承糧，其為官荒無疑，所有周姓祖塋仍許醮祭，毋許添葬，彭雅操所墾房屋尚未完工，應令拆毀，以杜後釁。」

⁵⁹ 一檔刑 02-01-07-11312-010、協辦大學士管理刑部事務王鼎題、道光 170311、[湖南、晃州]

「據馬老二供，年二十二歲，晃州人……楊倡玥有祖遺地名鬼講[土幼]各處山場，並無契據，向來聽人樵採，並不禁止。道光十五年十二月二十三日，小的前往那山檢柴，楊倡玥手拿木杆擔」……「該處雖係楊姓祖遺，第楊姓既無契據，即不得踞為私業，自應斷作官荒，照舊聽人樵採，毋許混爭，以杜後釁。」

⁶⁰ 一檔刑 02-01-07-09935-003、刑部尚書崇祿題、嘉慶 210508、[江西、會昌縣]

「據胡吉沾供，年三十歲，小的家與王姓各有祖遺山一嶂，地名猪子狹。王姓的山在左，小的家山在右，中有荒山一塊，歷久無人管業，所長茅草兩姓向禁樵採。二十年四月十四日，小的與堂兄胡吉月胡吉汪胡吉佩各帶鐮刀夾竹桿赴荒山割草，胡吉月順帶舊存竹銃裝好藥砂並香火藥砂袋，備防野獸，走到山上。小的先行割取，適王金友王紹林王賢坤赴已山樵採，看見向阻，小的不服，兩下爭鬧。」……「該處無主荒山照例入官，召人認墾，以杜覬覦爭端，兩姓祖遺山場，仍令各管各業。」

⁶¹ 一檔刑 02-01-07-06148-011、大學士管理刑部事務劉統勳、乾隆 310421、[廣東、歸善縣]。

「據楊氏供，本年三月三十日，小婦人媳婦林氏盧氏往山割草，午候盧氏回家告訴我，同林氏在何崗官山割草，林氏隨手砍了小松五枝，鄧茂樟同劉氏走來說，山上松樹不許砍伐，林氏與他爭辯。」……「據鄧茂容供，小的是本縣人，今年二十七歲，平日與呂得盛並無嫌隙。因小的弟兄在屋旁何崗官山種有松樹五十株」……「鄧茂樟等房屋一座，上下六間，右邊橫屋三間，屋後大山左邊山上種有松樹，約五十餘株，每株高四尺五尺不等，砍去樹枝五枝現有痕跡，勘畢繪圖附卷，人犯兇器帶回，分別堅保貯庫。」……「鄧茂樟除毆傷林氏楊氏，呂晚定輕罪不議外，其於官山擅行種樹，應照不應重律，丈八十折責三十板。」……「鄧茂樟現植松樹，并林氏砍伐松枝，一併追變入官。」

⁶² 一檔刑 02-01-07-07387-016、浙江巡撫王亶望、乾隆 430724、[浙江、仙居縣]

「李德音，李逢京到附近李公坑的官山內禁阻窑戶不許在山燒炭，不想被窑戶楊洪多……打傷死。」……「據李德音，李逢京同供，生員們是縉雲縣人，有完糧山三十畝，土名李公坑，內葬祖墳，栽種樹木，坐落治下三都地方。乾隆四十二年三月內，聞得有人在附近李公坑官

山內開窑燒炭，生員們恐礙祖墳風水，赴案具呈。已蒙示禁，後因他們還在那裡燒炭。」……「據楊直大供，小的是本縣人，」……「楊直大混在官山開窑燒炭，應照不應重律，杖捌拾折責三十板，所得賣炭錢文，同楊洪多等續燒炭價，一併追賠入官。」……「仍飭將窑拆毀，永禁開燒。」

⁶³ 一檔刑 02-01-07-09639-006、刑部尚書崇祿、嘉慶 180812、[廣東、南康縣]

「屍叔卓紹維供，已死卓士元是小的姪儿，小的村外有土名油槽官山一嶂，向聽居民樵採，因小的們卓姓住屋距山較近，就在山上零星栽種雜糧。嘉慶十七年正月十八日，黎裡超同子黎賢青在山栽種松秧，姪儿卓士元看見阻止，口角走散。」……「據黎裡超供，小的村外……嘉慶十七年正月十八日，小的因那山本是官荒，兩姓均可栽種，當同兒子黎賢青赴山栽種松秧，」……「該處油槽官山，既據勘明砂石間雜，難以開墾升課，飭令兩造嗣後均毋許栽種，以杜釁端。」

⁶⁴ 一檔刑 02-01-07-08639-014、大學士管理刑部事務和珅、嘉慶 030916 [江西、江華縣]

「嘉慶二年九月二十九日，據客民胡奇超報稱，蟻與弟胡應毓批佃獠人唐世芳楊梅源山場，砍樹種菌。」

「緣方德與胡應與素無嫌隙。該縣有楊梅源官山，內有水注蔭莫廖潘三姓田畝。獠人唐世芳於乾隆五十九年將楊梅源官山佃給客民胡奇榮，胡奇超，胡應毓弟兄砍樹種菌，並將泉水堵截，莫應德等具控。嘉慶二年六月，經縣勘審，將唐世芳責懲令胡奇榮等退山，豎碑永禁。胡奇榮回籍，留弟胡奇毓收賬，唐世芳貪圖租息，將碑毀匿，指稱私山，仍令胡奇超砍種。九月二十七日，莫先瑞查知，同潘苟任，莫秉賜往阻爭鬧。」……「該縣有楊梅源，黃貫源，大塘源，大木源官山內，楊梅源泉水注蔭莫廖潘三姓田畝，前被獠人占山，涉過通詳封禁。附近楊梅源居住之獠人唐世芳，於乾隆五十九年將楊梅源官山佃給浙江客民胡奇榮，胡奇超，應毓弟兄砍樹種菌，得受進莊錢八千文，議定每年租錢一千二百文，並將泉水堵截，從伊門首滙流，莫應德等田畝乏蔭，赴縣具控。」……「獠民唐世芳將封禁官山膽敢節次霸占，應照強占官山律杖一百流三千里，至配所折責發落。該犯係薙髮衣冠，與民人無異，毋庸議請折枷。」

⁶⁵ 一檔刑 02-01-07-06148-011、大學士管理刑部事務劉統勳、乾隆 310421、[廣東、歸善縣]

民人鄧茂容因斥阻砍取官山松枝致啟釁毆斃呂得盛一案依律擬絞監候事 *

⁶⁶ 一檔刑 02-01-07-09733-001、大學士管理刑部事務董誥、嘉慶 190315、[廣東、南雄州]

「村外有土名黃茅坪官山，所產茅草向係鄧謝兩村男婦採割發賣。」……「茅坪官山茅草，飭令附近居民公同採割，毋許恃強爭占，以杜釁端。」

⁶⁷ 內大 047448-001 (《明清檔案》A158-021) 安徽巡撫納敏題、乾隆 140204、[安徽、安慶府]

「緣殷九保年僅拾肆、與李勝保比鄰而居、均屬童稚、素無嫌怨、乾隆拾參年閏柒月初陸日、李勝保與幼童胡雙保方懷保在殷九保公山爬取山草、殷九保見而喊止、胡雙保方懷保聞聲奔避、惟李勝保仍在爬取、殷九保趕至山上、扭住拳毆李勝保脊背壹下、李勝保受傷跌倒、旋即爬起啼哭回家、」

⁶⁸ 內大 013783-001 (《明清檔案》A113-077) 河南巡撫兼提督銜雅爾圖題、乾隆 070714、[河南、寶豐縣]

「乾隆六年十月初六日，孔二丟自集賣柴歸家，令趙氏造飯，趙氏不理，旋即出外，孔二丟待氏不回，攜帶鋤頭赴山砍柴，行至山邊，見趙氏在鄰家場內竊豆，孔二丟理阻不聽，隨出言責罵」……「孔二丟供，小的是本縣人，二十九歲，了娶女人趙氏有十三年了，平日是和好的，小的每日在山裡打柴度日」

⁶⁹ 內大 026972-001 (《明清檔案》A156-018)、署刑部尚書兼掌翰林院事鑲白旗漢軍都統阿克敦、乾隆 131017、[福建、甌寧縣]

「小婦人丈夫砍柴度日，與吳公琳並無讎隙。問據溫天賜供，小的在本縣城外河邊搭運販柴生理，上年十二月初五日，朱章生來對小的說，他有五百擔火柴搭邱廣琳的船載來發賣十二月初六日就到，我先來等候，小的留他喫飯，在小的廠裡歇宿。」

⁷⁰ 一檔刑 02-01-07-08530-007、大學士管理刑部事務和坤題、嘉慶 021117、[四川、西昌縣]

「問據羅正舉供，小的名山縣人，年十八歲，來案下。在這荒山採賣柴草度日，與死的夷人啣鐵素不認識，並沒讎隙。」「該臣等會同都察院大理寺會看得，西昌縣審解民人羅正舉毆傷夷人啣鐵身死一案。據陝甘總督兼辦四川事務宜綿疏稱，緣羅正舉，籍隸名山，來至該縣，在官荒山地砍賣柴薪度日，與啣鐵素不認識，並無讎隙。嘉慶二年二月二十六日，羅正舉赴山砍柴，啣鐵以羅正舉係外來之人，不許砍取。羅正舉分辯，啣鐵混罵，羅正舉回罵，啣鐵拔刀向毆，羅正舉閃開，奪刀過手，，，」……「至荒山柴草，原是無主官荒，隨人砍取是實。」

⁷¹內大 041692-001 (《明清檔案》A164-074)、廣東巡撫蘇昌題、乾隆 150609、[廣東、陽江縣]

「緣振奇娶妻已經肆載、一向借住貳姊夫潘尚志家、乾隆拾肆年玖月內、振奇貧乏無聊、攜妻搬往大姊夫謝天爵家住歇、就近砍柴度活、適山上無柴砍賣、拾月拾參日、偕妻仍回尚志之家、行至石狗坑地方、馮氏怨恨命苦坐地不起、」「問據謝天爵供，梁振奇是小的妻弟，一向在潘尚志家居住，乾隆拾肆年玖月內，振奇同妻馮氏搬到小的家來說，家裏貧窮，要來砍柴度活，小的見是至親，就留地住下，因山上沒得柴砍，他又想搬回潘尚志家耕種，拾月拾參日，振奇就帶同馮氏去了，至他走到石狗坑地方，夫妻怎麼角口，如何踢傷」

⁷² 內大 071529-001、刑部尚書兼內務府總管來保、乾隆 080230 日、[江西、新喻縣]

「據江撫陳弘謀疏稱，緣乾隆七年五月二十六日早，周受二喚妻炊飯，乘涼往山砍柴，詎孫氏貪睡，嗔夫喚醒勉強起床，即將幼子打罵，周受二見其遷怒於子，掌打孫氏左腮頰」……

「問周受二……小的今年四十一歲，孫氏氏小的結髮的妻子，平日和好，生了兩個兒子……因小的家貧，砍柴為生，乾隆七年五月二十六日清早，小的叫妻子起床煮飯，吃了乘天涼好去砍柴，妻子貪睡，小的罵他，他纔勉強起床，他一起來，就把兒子打罵，小的說他這不是，打兒子是恨我不該要你起來，隨手打了妻子左腮頰……」

⁷³內大 012471-001 (《明清檔案》A107-081)、廣東巡撫王安國題、乾隆 061112、[廣東、從化縣]

「再謝東華因被李伯宗拾石擲打，致用竹棍打傷伯宗右胳膊偏右二處，並非金刃，尚屬情輕，且採樵貧民，委係無力，合併聲明」

⁷⁴ 一檔刑 02-01-07-08720-012、江西巡撫張誠基題、嘉慶 040902、[江西、鉛山縣]。

「據劉蘭孫投稱，族內有北源嶺公山一嶂，山上柴草向來聽人砍取，並不禁止。本月初十日，有費繼矮在伊山內砍柴，伊姓劉打丑向阻爭鬧。」……「據費繼矮即費繼而供，沿山縣人，年十七歲，……劉姓有公共北源嶺山場一嶂，山上柴草向來聽人樵採，並不禁止。嘉慶三年拾二月初拾日，小的與族姪費宗矮攜帶刀擔，赴劉姓山上砍柴，適劉大丑路遇看見，說時值寒冬，山內柴草不多，要留他自己取用，向小的攔阻。」……「該山柴草仍飭照舊聽人砍取，以便民用。」

⁷⁵ 內大 071100-001、刑部尚書來保題、乾隆 061215、[湖南、綏寧縣]。

「據羅漢祖供……，乾隆五年六月初十日，傅伯侯傅再祥傅大昌走到小的曾家山內割草喂牛，小的同哥子羅伯賢往山種豆，看見他們割草，哥子就罵傅伯侯不應在我羅姓山裡割草」……「問傅伯侯……詰問那曾家山既不是你們的產業，你們為什麼往那裡去割草，這不是你蠻要

去強佔山場，有心把他打死的嗎。供，小的們那裡山上的樹木是不許外人亂砍，至青草歷來不論，彼此聽憑人割的，並不是小的們圖佔他的山場……」……「曾家山場應聽羅姓照舊管業」。

⁷⁶ 一檔刑 02-01-07-09114-016、浙江巡撫清安泰題、嘉慶 100921、[浙江、建德縣]。

「據山主章世經供，貢生家有土名丁家塢山場，向托族人章年開看管，山上茅草向聽附近鄉民樵採。嘉慶九年十二月二十九日，章百祿如何在山割草，誤把留養松秧砍斫，被章年開撞見爭鬧，失跌磕傷。二十六日，章年開又如何被章年貴們毆傷身死，貢生都不知道，是實。」

⁷⁷ 內大 000148-001 (《明清檔案》A294-081)、護理湖南巡撫印務布政使通恩題、嘉慶 050122 [湖南、安化縣]。

「李茂求等有顏家塘公山向供族內樵採、李茂奇因蓄有樹木、惟恐砍去、豎碑禁止。嘉慶肆年陸月初玖日、李茂求知覺遇見李茂奇、斥其不應私立禁碑、李茂奇不服、彼此吵鬧、」……「向來族人在山砍柴，嘉慶肆年陸月初玖日，兄弟因山上蓄有樹木，恐被砍伐，豎立禁碑，李茂求曉得，說兄弟不應私自立碑，兩相爭鬧」……「該處墳山飭令公共禁採」。

⁷⁸ 內大 015540-001 (《明清檔案》A355-030)、浙江巡撫帥承瀛題、道光 010524、[浙江、遂昌縣]。

「兒子（劉雲學）赴山砍柴，順砍方元進山上松枝一束，被他工人李應鰲見，報知方元進的妻子，方何氏把松枝奪回。貳拾玖日早，方元進走來，就兒子犯了村規要罰錢買肉，挨家分食，兒子認出錢八百文，約拾日內交付，方元進不依，必要見錢二千四百文，兒子拏不出錢，不肯應允。」……「小的（李應鰲）向在方元進家幫工，方元進有土名犁樹降山場栽養松木，嘉慶貳拾伍年柒月貳拾捌日，小的路過山下，見劉雲學在山砍斫松枝，當去通知方元進，」……「據方元進供，……小的有土名犁樹降山場栽養松木，屢被村人砍斫樹枝，公議再有人砍斫，照村規罰錢買肉，挨家分食，」……「至民間被竊例應告官緝究，另擅自議規，實屬滋事，並出示嚴禁，以杜弊端。」

⁷⁹ 一檔刑 02-01-07-04773-008、刑部尚書阿克敦題、乾隆 111118、[江西、樂平縣]。

「訊據孫廣居供，小的是樂平縣人，因小的住的地方與這萬年縣連界，界上原有胡姓山場，長有茅柴，向來荒蕪，聽人樵採，向沿已久，從未禁阻。到乾隆十年，胡張在那山上栽了松秧，恐怕那砍茅柴的人混將松秧損壞，就設酒請鄰村的長輩公飲議禁。當議砍伐茅柴仍不禁阻，只不許砍伐松秧，衆人都依允了。以後小的們村鄰仍照常在山內砍柴供爨，並無說話。到今年正月內，因天時雨雪過多，小的家中沒有柴燒，二十三日小的走去山上砍柴，因那山上茅草叢雜，一時失手誤砍了胡家栽的小松秧約有二十多枝。不料胡張走來看見，說小的不遵議禁，砍了他的松秧，就把鐮刀奪去了。小的只得丟了茅柴，空手回家。到第二日，小的又因天冷沒有柴火，想昨日砍的松秧茅柴還在山上，想來胡姓尚未搬回，趁早去挑些來燒也好，隨拿了扁擔，剛到山脚下，不想胡張同胡世肇先在山上檢取松枝，胡張看見小的，就奔下山來，向小的趕打。」……「查胡姓茶園等處山場本屬荒蕪，向聽村鄰樵採，孫廣居並非有意盜砍，被毆抵格，亦與拒捕不同。」

斋教传播与山区棚民

—以明清浙闽赣地区为例

陈明华

斋教是罗教影响的教派。明中后期，其在浙、闽、赣等南方省份发展颇为迅速，至清晚期，势力日渐蔓延至苏、皖、鄂、湘、桂等省。斋教的发展与当地山区移民有着密切的关系，而太平天国运动之后，浙、闽、赣地区爆发了一系列震动地方的“斋匪”暴动。本文通过文本梳理，试图探讨斋教在浙、闽、赣山区迅速传播的机制何在？它为何受到山中移民的青睐以及太平天国以后斋教徒为何连续参与暴动等问题。

一、斋教在浙、闽、赣山区的传播

斋教主要是指明代中晚期南方省份受到罗教（无为教）影响而形成的教派，大体可以分为“狭义”和“广义”两种。

就狭义而言，斋教专指以浙江处州府姚氏家族为核心的姚门教。明末，浙江处州庆元县松源东隅人姚文宇加入罗教，后逐渐统一浙江罗教各派，成为宗教领袖。而他领导的这支罗教采取教权世袭制，姚氏后裔始终掌握核心权力。雍正七年（1729）年，政府开始查禁各地罗教。为了躲避政府打击，这支姚门罗教改称一字教，又名老官斋教，是为狭义“斋教”。¹此后随着教势的扩大，各地分支的增加，这一教派变异出多个名字，如：姚门教、大乘教、无为教、罗祖教等。

广义斋教则包括其他受到罗教影响的南方各教派。清代实行严禁民间宗教的政策，教派活动不为外人所道。政府官员不甚了解各教的源流派系，往往将形式类似的教派贴上一个统一标签。白莲教就是一个很好的例子。在官府文件中，“白莲教”一词并非一个统一的教派，而是泛指各类官员所认为的邪教。斋教一词亦是如此，在清代官员的文书中，往往将受到罗教影响的教派视为斋教徒，将那些既奉行吃斋受戒而又有不法行为之人称为“斋匪”。²虽然如此，不过斋教一词还是有比较集中的所指，除了上面姚门教及其衍生的名字外，还有龙华教、金幢教、观音教、三乘教、无为教等名目。

即使在人员构成、活动区域及组织结构等具体因素上存在差异，不过这些教派在信仰、仪式、经典乃至运作模式上主要都受罗教影响，而人员之间也不乏相互传承和关联。因此的确可以被视为同一类别。当然斋教诸派中以姚门教影响最大，为江南斋教的中枢，留下的资料相对最多，因此本文的关于斋教的论述主要以姚门教为例。

罗教最重要的经典为《大乘苦功悟道经》、《叹世无为卷》、《破邪显证钥匙》、《正信除疑无修证自在宝卷》和《巍巍不动太山深根结果宝卷》，即世所谓“五部六册”。这些经典被斋教继承，清廷各次查禁斋教时，搜出的经卷基本都包含全部或部分“五部六册”。当然斋教在经典上也有所创造，撰写了《明宗孝义达本宝卷》、《圣论宝卷》、《天缘结经录》、《三祖行

¹ 《朱批奏折》，乾隆十三年十一月二十四日江西巡抚开泰奏折，转引自马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，中国社会科学出版社，2004年，第271页。

² 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，上海人民出版社，1992年，第340页。

脚因由宝卷》、《西林开元宝卷》等新的经卷。

斋教形成过程中，除了大量汲取罗教的资源外，还结合了浙、闽、赣当地的宗教传统，最典型的便是吸收了摩尼教和白莲教的元素。

斋教教内信众在给二祖殷继南（也作应继南）所作传记中有：“生长舟峰，三岁而母逝，七岁而父亡，赖叔婶之抚育，感道友之周全。鼓银炉而糊口，修摩教而功成”。³这里的摩教就是指摩尼教。摩尼教在隋唐时期，从西域及东南沿海两线传入中国。因为强调吃斋，外人称信奉该教之人为“吃菜事魔”、“事魔食菜”。该教在唐代传入福建，至晚在宋代传至浙江。浙江的睦州、处州、温州都是摩尼教活动的主要区域。斋教的不少元素与摩尼教相似，除了素食之外，在称呼、活动范围、戒律仪上都有相似之处。如摩尼教称教徒有“斋姊”之称，活动场所称为“斋堂”，而斋教信徒亦有“斋公”、“斋婆”之称，活动之地也以“斋堂”名之。摩尼教崇尚光明，崇拜日月，斋教亦如之，作会（蜡会）之日“燃巨烛十六或十二”，有的地方则点燃两支蜡烛，“称为两轮日月”。⁴

白莲教的影响主要体现在弥勒崇拜上。罗教创始人罗梦鸿坚决反对白莲教，但是斋教的二祖殷继南开始在信仰中加入弥勒崇拜。而弥勒下生是白莲教的基本特征。乾隆十三年（1748）年福建的老官斋教（姚门教）起事中，就有“弥勒下降诒世”、“弥勒欲入府城”的口号。此外宋元的白莲教，皆以“善、觉、妙、道”四字派命法名。而斋教的信仰者在法名中的第二个字都为“普”字。⁵

斋教系受到罗教的影响而发展，因此都将罗教创始人罗梦鸿追认为始祖，尊称为“罗祖”，而真正开创斋教发展格局的是二祖殷继南和三祖姚文宇。

殷继南，为处州缙云县五台馆人。十七岁成为处州一带罗教领袖。殷继南掌教后，设立“化师”、“引进”等位阶，初步建立教阶制度。据说当时有二十八位“化师”，七十二位“引进”，信徒三千七百余人。⁶

三祖姚文宇则为庆元县松源东隅人。父母早逝，为人牧鸭。自幼食长斋，后偶遇一道者，劝其皈依，并取法名普善，道号镜山。三十一岁时正式加入罗教。在殷继南女弟子“普福化师位下归依解表”。⁷他掌教后在前人基础上发展出一套独特的修习阶梯制度：

.....其授受不称**师弟**，名曰**引进**，法名上一字皆曰普，惟以下一字别之。同教相称为**道友**，习教次第有**十二步**，最尊者为**总勅**，姚氏子孙世主之，现今主教者名**普德**。凡始入教，**诵真言二十八字**，曰**小乘**。再**进**读**大乘经者**，曰**大乘**。再**进**曰**三乘**，始取普字派法名。再**进**可引人为**小乘法**，曰**小引**。再**进**可引入**大乘法**，曰**大引**。此二者能引而不教。再**进**曰**四句**，许传**二十八字法**，以授**小乘**。再**进**曰**传灯**，始有**教单**，如**执照然**，始许**领导常拜佛法事**。再**进**曰**号勅**，许传**大乘法**；再**进**曰**明偈**，许代**三乘人取法名**；再**进**曰**蜡敕**，许作**蜡会领法事**；再**进**曰**清虚**，副掌**教事**，蜡勅以下，皆听**指挥**。其教蔓延**闽、浙、楚、粤、皖、**

³ 《太上祖师三世因由总录·缙云舟转》，王见川等编：《明清民间宗教经卷文献》（第六册），第256页。

⁴ 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，第388-389页。

⁵ 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，第390-391页。

⁶ 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，社科出版社版，第266页。

⁷ 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，社科出版社版，第267页。

江、豫、章诸省，有清虚数人分领，时往来焉。各步岁有费用，多寡不一，积储以待清虚，携奉总勅。⁸

这套修习制度对于斋教发展壮大颇为重要。从入教初学的“小乘”到教主的“总勅”共分十二等（“步”），既是习教的进阶，同时也是一套利益分配的等级。从第一步“小乘”到第三步“三乘”都是初等教徒，只有缴钱供奉上面等级的义务，而第四步“小引”和第五步“大引”负责引人入教，不能教授教义。他们每引一人是否有相关报酬不甚清楚。第六步“四句”开始既能引人又能传教，越往上权限越多，不仅能传教还能发布教单、取法名、作法事，而这些事务都是有收益的。如“教单”一般是要教徒供奉相当金钱才能购买，而取法名时也需要出一定资财。根据后来斋教徒的招供“凡拜师传徒，须出根基钱，多寡不等”。⁹

蜡会又叫斋会或点蜡，是一种重要的仪式，也是教内领袖获利的重要途径。根据教内人士的介绍，作蜡会的具体情况如下：

其作蜡会，则择僻地，赁夏屋行之。上设无极老祖位，旁列文殊普贤，或曰普理、普波，乃习教之夫妇二人。中设香斗大如椀，建布旗，焚旃檀，旁热巨烛十六，或十二。昼夜诵经不辍，五六日乃罢。领单人辄于蜡坛请发。掌清虚者，预于总勅处携空白印单，存蜡勅所，届是时，视其值而给焉。其口诀，有不肖言者，即置之死地，亦坚不吐，有愿述者，讯时曾令默出，今忘之矣。¹⁰

蜡会通过点蜡诵经，吸引信徒。在高度宗教仪式感的情况下，将“印单”发给领单人，这里的印单可能是一种宗教商品，因为由教主所发，对于信徒来说有着特殊的价值。所以可以“视其值而给焉。”这种仪式一直被斋教徒所采用。1874年8月份，温州地区的斋教徒，在离城十里的南延（今梧埭镇）举行过蜡会。当时部分斋教徒加入天主教，因此一些天主教教徒目睹了此会，并将此会称为“烛灯大普会”。根据天主教徒的描述，在该会上，斋教“主持者潘汝成竟在讲话中公然要人信奉天主教，并挑动民众谋反，使许多与会者为之惊骇！而他则鼓鼓囊囊而归。”我们暂时不讨论其政治反叛层面的内容，从中看到的是，组织者通过作蜡会可以满载而归。¹¹

“各步岁有费用，多寡不一”。而教主则通过第十一步的“清虚”每年向以下各步收取钱财。这样就能明白担任教主的姚文字为何可以数年间就从一个贫苦短工转变成信徒成群，拥有广第良园的富豪。其传记作者称其：“未经纪于婺州，衣粗衣，食淡如也。今倏焉而人衣其衣，人食其食，且不啻若田横之士五百，孟尝之门客三千众，实甚也。矧广第良园，旋易夫华门圭窠之常，朽贯腐仓，顿改夫一丝一粟之素。以为异，异莫异于此矣。以为善，善

⁸ 此段内容据江西斋教徒口供记载，道光丁未，江西长宁县斋教头目谢奉嗣“作乱围城”，失败后不少教徒被捕，作者当年参与审讯，将口供采入笔记。【清】采蘅子：《虫鸣漫录》卷一，转引自傅衣凌：《清乾隆福建吃老官斋匪滋事考》，《福建文化季刊》第一卷第四期，第1-2页。

⁹ 《军机处录副奏折》，嘉庆二十年十月二十九日两江总督百龄奏折。转引自马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，社科出版社版，276页。

¹⁰ 【清】采蘅子：《虫鸣漫录》卷一，转引自傅衣凌：《清乾隆福建吃老官斋匪滋事考》，《福建文化季刊》第一卷第四期，第1-2页。

¹¹ 方志刚译编：《施鸿鹄事件始末》，《温州文史资料》第9辑，第221页。

莫善于此矣。”¹²其秘诀便在于此。

通过这样一套制度，除了总勅之外，各个层级的人都不同程度能够通过传教获利，即使最低“小乘”和“大乘”也有希望通过不断修行获得升级，从而有望获利。其他传教人士未必能够都如姚文宇一样富甲一方，但是传教的确可以成为他们改善生活的一种手段。我们可以看到不少人的确通过此道积累财富。如温州的斋教徒吴恒选，本已亡命山林，身无分文。但后来通过传教，因“入会者很快发展到好几千人。因入会者要按规定交纳会费，吴全家的生活也就变得十分富有。”¹³

这套体制大大刺激斋教徒吸收新人的积极性及传教的积极性，因此被姚氏徒子徒孙和其他斋教派别所复制应用，成为他们的生财之道。嘉庆二十年（1815）十月，由江西传入湖北之大乘教教案内，教徒万顺辉供称：

（大乘教）系山东前明罗祖所传，有十二步道行……第一为小乘，次为大乘，三为三乘，四为小引，五为大引，六为祀主，七为传灯，八为号池（勅），九为明池（敕），十为蜡池（敕），十一为清虚，十二为总池（勅）。第一步有二十八字咒语，第二步有一百零八字咒语，第三步以上即无咒语，只系讲明心见性功夫。凡拜师传徒，须出根基钱，多寡不等。学至三步即取法名。¹⁴

这里的“十二步道行”与姚文宇所创造的修习制度相比，除了个别名字外有所修改外，内容大致相仿。这套制度大大刺激教徒吸收新人和传教的热情，从而促进了其在浙、闽、赣地区的传播。殷继南掌教时，斋教已经在浙江处州、缙云、台州、松阳、武义、温州、青田、金华、景宁、宣平浙南和浙中诸州县设有分支。¹⁵姚文宇时期，教势更为扩张。根据各支分布情况看，除了以上各地外，庆元、寿宁、兰溪、连城、武义、旌德、丰城、福建、延山、抚州、休宁、歙县、赣县、建德、临川、上杭、崇安、石城、合肥、怀远、金陵都有所传播。金陵为罗教的中心，罗教经典五部六册即在南京印行，因此斋教在此有传播点并不奇怪。其他传教州县都是处于浙江、福建和江西三省，特别集中于三省交界的山区。

早期处州即是斋教的中心所在，殷继南和姚文宇分别是处州属县缙云和庆元。姚文宇在庆元设立斋教祖堂，遥控各地教事。姚文宇巨大的财富给其带来杀身之祸。清顺治三年（1646），驻守处州龙泉县的杨鼎臣听从姚文宇义子耸动，将姚氏劫至处州龙泉县，再三令其认饷出钱，姚氏不允，最后在五月二十九日“被害归天”，时年六十九岁。¹⁶姚文宇遭杨鼎臣杀害后，教内形势混乱。一些势力比较强的领袖曾一度伺机夺权。“江西引进陈普想同身后刘普就等言，师既归天，香信无人可掌，竟将三乘封止。另出机关，名曰直指。各方或行或止。”此举遭到教内其他派系的反对，反对派还是坚持要行“三乘”。此举可能造成了教派的分裂，不同的派系以新的名称各自发展。姚文宇后代依然掌握一定的教众，继续发展。二房周氏之子姚铎“承值宗祠，栽培道脉”。¹⁷不过家族已经开始向温州迁移。康熙年间，姚文宇之子

¹² 五云郑载颺拜撰《远七十二公讳文字字汝盛号镜山传》（千八公房第十二镜山公传），《庆元姚氏总谱》。此篇传记也载于王见川：《关于台湾斋教渊源的史料调查》，《民间宗教》第一期。

¹³ 方志刚译编：《施鸿鳌事件始末》，《温州文史资料》第9辑，第219-220页。

¹⁴ 《军机处录副奏折》，嘉庆二十年十月二十九日两江总督百龄奏折。转引自马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，社科出版社版，276页。

¹⁵ 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，社科出版社版，第384页。

¹⁶ 《太上祖师三世因由总录·庆云三复》，王见川等编：《明清民间宗教经卷文献》（第六册），第299页。

¹⁷ 《太上祖师三世因由总录·庆云三复》，王见川等编：《明清民间宗教经卷文献》（第六册），第300页。

姚绎（法号普法）已举家迁至温州永嘉县，并在温州设立老官斋教祖堂，温州成为斋教新的中心。¹⁸

康熙以后，温州和处州一直是斋教势力较为发达的区域。此外三省交界的各州县也是斋教活跃的区域。姚文宇掌教后期，还一度到湖州、嘉兴、瓶窑、松江各处传教，甚至在广东都拥有一些信众和骨干，¹⁹并且在姚氏后代的掌教时期，斋教势力已经蔓延到安徽、湖北、湖南等地。但其信徒最为集中的还是在三省交界的州县。

二、与山区棚民相遇

斋教活跃的区域主要集中在浙、闽、赣交界的山区。据记载：“江西、浙江、福建各山县内，向有民人搭棚居住。种麻种菁，开炉煽铁，造纸作菇为业，”而这批移民往往被当地土著称为“棚民”。²⁰

明中晚期，时局动荡，山区成为毗连省份贫民的避难之所。大批脱离原有社会网络的移民，成为各类民间教派的潜在受众。明末各类教派在各地活跃与此类人群的出现不无关系。如河北邢台黄山的刘、彭、马等八姓“聚族以居，持准提斋教”，在他们影响下“乡人相率吃斋者众”。这些人都是“明末避寇屏居山麓”，他们在危难之际，“勾福于神，祈免锋镝，誓世世子孙不茹葷以答神贶”。²¹这里的准提斋教应该也是罗教系统的教派。

浙、闽、赣三省之间的情况大致与此相同。后来成为姚门教二祖的殷继南，便出生于山县缙云。父母早亡，由叔婶抚养。婶婶亡故后，叔叔将其送入金沙寺中出家。修行六年后又住持赶出，嘉靖二十三年（1544）殷继南跟永康籍的银匠丁某作学徒。²²闽、浙山区多银矿，明朝官府严禁民间“偷开穴坑”、“私煎银矿”，违者要处以极刑，家属发配边疆。但是明代中晚期，不断有移民入山开矿，还曾出现叶宗留领导的大规模矿工起义。银匠丁某很可能就是非法开矿煎银的移民。他在遇到殷继南时已是一位修习罗教的“化师”，法号四维普慎。在他的引导下，殷继南皈依罗教。²³

同样，三祖姚文宇本身出生于山区庆元县松源东隅人，父母早逝，以替人牧鸭为生。他在学道过程中，曾在武义县逆溪地方遇到数位罗教化师。在他们的资助和同意下，开始在逆溪“开堂接众”。其中一位李姓化师，法名普敬，“别号老麻，福建汀州府连城县人，在逆溪种靛营生。”²⁴可见当时罗教信众和传播者多为闽、浙、赣交界的山区垦殖移民。

可以推测，姚氏日后在这些区域所吸收的信徒也多是此类移民。乾隆十三年（1748）福

¹⁸ 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，社科出版社版，272页。

¹⁹ （崇祯）五年，（姚文宇从徽州）同普金公从陆路到于湖州、嘉兴各处，有长枝普露引进，许普计同孙仰槐在善璫地方明蜡。……登舟往瓶窑，郎引进言有蜡事，及至未备，师（姚文宇）责之求懺。又往松江各处道场。上海县八团地方，有女化师，姓袁法名普鸾，婆媳茹素，况又青年收志，夫亦皈依，乃普金公所化。（崇祯）十三年十月，（姚文宇）回堂，广东有一引进，姓康，劝一女众，原是妖魔应身，皈依之后，修习五通之道。……《太上祖师三世因由总录·庆云三复》，王见川等编：《明清民间宗教经卷文献》（第六册），第291、292、294页。

²⁰ 《清文献通考·户口考》，转引自吴宗慈：《江西棚民始末记》，《国史馆馆刊》，第57页。

²¹ 《中宪大夫慎斋曾君暨元配陈恭人合葬墓志铭》，（清）钱陈群《香树斋诗文集》文集卷二十五墓志铭二，清乾隆刻本。

²² 《太上祖师三世因由总录·缙云舟转》，王见川等编：《明清民间宗教经卷文献》（第六册），第260页。

²³ 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，社科出版社版，第266页。

²⁴ 《太上祖师三世因由总录·庆云三复》，王见川等编：《明清民间宗教经卷文献》（第六册），第284页。

建省北部建安、瓯宁两县爆发了一次大规模的斋教暴动。该地向来为斋教的重要传教地，而这些参加暴动的斋教成员更是明确承认他们所信之教直接传自“处州府庆元县姚姓”。“庆元县姚姓后裔姚普益、姚正益每年来闽一次，各堂入会吃斋之人欲其命名者，每名给银三钱三分，以供普善香火。”²⁵

参与暴动的斋教徒很可能就是外来的开山移民。据官方档案所述，这些斋教徒“与附近不吃斋村民素日原系交恶，及至贼徒倡逆沿村迫胁恐吓，肆意焚劫，其时何人指挥主使，乡民原所目击，犹畏贼凶焰，未敢轻与对敌，后见贼势稍弱，各痛心疾首迫一遇指挥主使之，轻无论男妇一齐奋力赶杀。”²⁶从中可见斋教信徒与其他村民之间隐然存在界线，这种界线很可能就是土客之间的隔膜。由此可见棚民是参加斋教的主要来源。

由于清初棚民大量起义，清朝统治者极力将一些山林封禁，将移民驱逐回籍。棚民数量曾一度减少。²⁷不过到清中后期，随着局势动荡，三省交界山区又开始出现新一波移民。

江西的封禁山（今铜钹山）及其周边地区是斋教比较活跃的区域。封禁山“约宽百里，其自西北以至西南皆与上饶属境毗连，正北以至正东与广丰民山相接，东南一带则号闽省浦城、崇安接壤，又东面与广丰连界之处，又与浙省江山、龙泉等县密迩，犬牙相错，路径纷歧。”太平天国时期，周边浙、闽、赣各县人民纷纷避祸山中，“入山垦地，借以糊口，”成为“在山耕种棚民”。²⁸

太平天国运动以后，由于战争的破坏，人口损失惨重，田地荒芜，地方政府为了恢复生产有不同程度优惠政策，主动招徕移民，垦种田地。这些新来的移民再次刺激斋教的活跃。

太平天国运动过后不久，临近的福建崇安县爆发斋教起义，封禁山及其周边便被官方视为当地斋教徒的老巢。左宗棠便说：“窃福建崇安一县，地与江西封禁山一带毗连，县之西北大湫、岚角等处，近有斋匪传徒习教情事。”²⁹根据后来被抓获的暴动成员供称，除了一些头目外，所谓斋匪成员“多江西南丰及崇安东北乡一带棚民。”³⁰

浙江的情况大致相仿。如浙江衢州龙游县：

自咸丰兵燹后，本县人存者十不逮一，外来客民，温处人占其十之二三，余皆江西广丰人。虽亦有循谨安分之民，而人数既众，所为遂多不法，抗租霸种，习以为常。其间更有传教吃斋结盟拜会者，当时谓之斋匪。³¹

浙江衢州开化县地处“界徽之婺源，江右之玉山、德兴，浙之遂安、常山，大抵土民居十之五，客民三，棚民二。”³²这里的棚民可能为先前开山移民，而客民则是太平天国以后招徕的移民。³³这些移民“室家妻子困苦艰难，衣则无非褴褛，食则多是苞芦，住居则皆

²⁵ 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，第 363-364 页。

²⁶ 《乾隆十三年四月初二日福州将军新柱等折》，《史料旬刊》第二十八期，转引自傅衣凌：《清乾隆福建吃老官斋匪滋事考》，《福建文化季刊》第一卷第四期，第 6 页。

²⁷ 吴宗慈：《江西棚民始末记》，《国史馆馆刊》，第 56 页。

²⁸ 刘坤一撰、陈代湘、何超凡、龙泽黯、李翠校点：《刘坤一奏疏 1》，第 100-105 页。

²⁹ 《斋匪突陷崇安建阳两城旋即收复现在追缴情形折》（同治五年三月初十日），《左宗棠全集·奏稿 3》，第 18-20 页。

³⁰ 《斋匪突陷崇安建阳两城旋即收复现在追缴情形折》（同治五年三月初十日），《左宗棠全集·奏稿 3》，第 18-20 页。

³¹ （民国）《龙游县志》卷一《通纪》，第二十一-二十二页。《中国地方志集成·浙江府县志辑》，第 32 页。

³² 《禁三清山进香示（1873 年）》，汤肇熙《出山草谱》出山草谱卷一，清光绪昆阳縣署刻本

³³ 可以参见戴槃：《定严属垦荒章程并招棚民开垦记》，《皇朝经世通编》，上海关旭七年刊本，卷 10，第 11 上-12 上。

破砖败壁。”³⁴ 斋教在他们中间迅速传播，吃斋之人“处处尚有，而山谷棚民尤多。”³⁵ “每届开堂辄聚男妇数百人”。³⁶

那么斋教为何可以在山区移民中找到如此多的信众？这与移民社会特殊的社会文化情况有关。

一些官员将信仰斋教的棚民视为愚不可及之人，认为他们因“惑于祸福灾祥之说”而投入斋教怀抱。³⁷ 且不论官员这种精英的视角是否正确，但“惑于祸福灾祥之说”却道出了棚民信仰斋教的心理根源。不少棚民因为躲避战乱而进入深山，战祸的威胁对于他们是如此现实而剧烈。而在深山中生存亦面临诸多困难，生命时刻受到威胁，他们需要寻求一套强有力的信仰体系的庇护。不过作为官方认可的主流价值体系——儒家却无法提供足够而有效的信仰资源，而且多数士人缺少宗教传道精神，根本没有向下层民众传播信仰的冲动，到清代中后期此种状况尤其明显。长期浸淫儒学，对儒家文化有着深刻认同的刘绍宽在光绪二十四年（1898）正月读《四书绎》阐发“人能宏道”之句时心生共鸣，在日记中写道：“人能宏道”章，绎云：耶稣之教，与中华言语不通，其徒蹈汤赴火，不惮艰险，重绎以行其道。自欧至中，四万余里，赁地安居，视为故土。民教一争，动至粉身碎首，而不以为畏。所往来皆椎鲁之民，而不以为厌，卒能使其说遍行内地，而孔教转不及矣，夫非以其人哉！夫非以其人哉！被服孔教者，宜自思矣。孔教宗旨总在求仁，观“颜季言志”章可见。³⁸

正统儒家对于信仰领域的不作为，给其他信仰的流行留出了大量的空间。浙江山区往往有崇尚巫鬼之风。如温州地区就“信鬼尚巫之风盛行，佛教盛行，不信佛反以为非。”³⁹ “多山少田”的缙云县中，民众“信鬼尚巫，虽士大夫之家亦不能免。”⁴⁰ 士大夫不仅不能向普通民众传播儒家的伦理价值，而且自身难免“信鬼尚巫”。这种情况在清代中后期非常普遍，梁其姿在《施善与教化》中就有所论述。

熟读圣贤书的士子尚且如此，那些文化水准不高的棚民更是容易被斋教之类民间教派所席卷而去。当然儒家价值的缺位或式微，只是为斋教的传播提供了巨大可能，而非唯一原因。斋教征服山中移民还有其他的原因。除了第一部分已经阐述的斋教“十二步道行”可能带来实际的经济利益外，斋教还有一些实际的功能吸引着在山区开垦的民众。

第一，斋教提供了一种形成群体认同的机会。移民脱离了原有的关系网络，进入新的社会。他们需要结成群体，对抗外部的各种风险。而宗教信仰提供了一种很好的纽带。信众法名中第二个字都为“普”字，即象征着成为兄弟姐妹。此外，斋教信徒活动时多聚在斋堂共同焚香诵经，这就为新群体形成提供了机会。其实共同信仰和经典本身就是一种相当重要的群体认同纽带。教徒们可以通过研讨教义获得共同话题，产生共同的规范。团体一经结成，棚民们遇到危机时可以相互帮助。汤肇熙主政斋匪流行的开化县时就极力严禁各类宗教结会，他顾虑那些信众一旦结成群体，遇事便可“滋闹、挟制、扛帮。”⁴¹

第二，斋教设有一些必要互助救济方式。姚文宇在世时，便采取“贫穷者给之衣粮，暴路者助之棺襚，涉渡之水架以桥梁，难行之路砌而平坦”等举动。⁴² 此后斋教内部一直有互助活动。乾隆十三年福建省北部建安、瓯宁两县的斋教暴动被镇压后，福建巡抚喀尔吉善在六月份的奏折中罗列了查获的当地各教派斋堂数量，还提及这些教派的教众的日常所为，其

³⁴ 汤肇熙：《出山草谱》卷一，第二十二页。

³⁵ 汤肇熙：《出山草谱》卷一，第二十四页。

³⁶ 《禁三清山进香示（1873年）》，汤肇熙《出山草谱》出山草谱卷一，清光绪昆阳縣署刻本。

³⁷ 《委员查办斋匪土匪暨资遣鲍席两军折》（同治五年五月初四日），《刘坤一遗集1》第79-80页。

³⁸ 《厚庄日记》戊戌年正月初三条，温州市图书馆藏，手稿本。

³⁹ 《光绪乐清县志·风俗》，文成出版社版，第914页。

⁴⁰ 潘树棠纂：葛华、何乃容修：《光绪缙云县志》，《中国地方志集成·浙江府县志辑》，第521页。

⁴¹ 汤肇熙：《禁结党饮香灰酒示》，《出山草谱》卷一，清光绪昆阳縣署刻本。

⁴² 《太上祖师三世因由总录·庆云三复》，王见川等编：《明清民间宗教经卷文献》（第六册），第298页。

中提到“察其平日所为不过诵经礼忏，更有废疾衰老，无所依倚之人，藉以存活者。”⁴³

第三，斋教的伦理规训可能改善信众的生活状况。斋教承袭罗教的戒律，严禁酒色。教内有偈劝导：“酒色财气四堵墙，多少贤愚在内藏，有人跳出墙儿外，便是长生不老方。色做船头气把稍，中间财酒两相交，劝君莫下船中去，四面分明四把刀。”此外有大量通俗易懂的偈文劝人戒酒禁色。如“酒本合欢养内神，节饮方能益己身。修真炼士须戒酒，清净玲宫做主人。”“色本续世继后代，劝君切莫尽贪淫，修得精固丹田壮，返本还源始透玄。”“财是养命之根源，劝君须要义中求，悟道玄人修炼子，莫将此物挂心头。”“人气存心祸不招，劝君毁却斩人刀，莫招怨恨争长短，自古恒言忍自高。”⁴⁴开山棚民容易嗜酒纵欲，这些规训能够正中他们弱点。如果按照这些伦理的规训，戒除酒色，不仅可以保养身体，还可减少花费。自然可以让他们感到入教的好处。

以上精神上与物质上种种的功能促使不少开山棚民向斋教靠拢，加之斋教本身的修习体系能够刺激信众的吸纳，从而是斋教在浙、闽、赣三省山区中迅速扩展影响。

三、从“斋教”到“斋匪”

清代晚期，斋教徒参与的暴动突然变得频繁。据统计雍正、乾隆、嘉庆三朝，仅有两次斋教暴动，一次为乾隆十三年（1748）闽北两县的老官斋教（即姚门教）暴动，一次为嘉庆八年（1803）宁都、广昌、石城廖干周等人的未遂暴动。但道光以后，斋教暴动不胜枚举，同治和光绪尤为集中。⁴⁵

同治五年（1866）年二月十五日，一支数百人的队伍突然冲入福建崇安县城。根据官员左宗棠的奏报，这伙暴动者“从北乡突入县城”，他们“头裹白巾、红巾、绿巾者已遍塞街衢，旗帜大书‘天国普有’等字，戈矛林立。”县内的官军很快被击溃，匪徒占据县城。二十一日，暴动者攻入建阳县城。时任闽浙总督的左宗棠听闻战报，立即调集闽、浙六路官军水陆并进。二十三日，在官军重兵压境下，匪徒从建阳县城撤退，一路“由西北回崇安”，一路“由西南出麻沙以入九龙山”。⁴⁶九龙山有陈仕成等人领导“红巾军”武装，暴动者或许希望得到他们的庇护。二月底，受到闽军的压迫，退回崇安的暴动者“向北避入岚角山内，”并于“三月初一日出岑阳关，至江西上饶县所属之高洲、甘溪等处焚掠，胁诱日众，约六七千人。”后在上炉坂地方”遭遇清军围剿，损失惨重。剩余部分向铅山逃窜，不久就被剿灭。而逃向九龙山方向的一支也被官军堵截击散。官军乘势将九龙山内“红巾军”势力剿除。⁴⁷

左宗棠等官员笼统的将此次暴动与斋教徒想勾连。与崇安县相近的江西封禁山向来是斋教活跃之处。而此前不久与此地毗连的崇安县西北大浑、岚角等处“有斋匪传徒习教情事”。而攻击县城的匪徒即从西北冲入县城，所以左宗棠就把此次暴动视为来自封禁山的“斋匪”所为，他在奏折中写道：

查斋教一种，即宋时吃菜祀魔邪教。其始以戒杀、放生、消灾、避劫为言，愚民动于

⁴³ 《史料旬刊》第二十九期喀尔吉善等折，转引自马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，第368页（电子版）。

⁴⁴ 《太上祖师三世因由总录·缙云舟转》，王见川等编：《明清民间宗教经卷文献》（第六册），第258-259页。

⁴⁵ 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，第380页。

⁴⁶ 《斋匪突陷崇安建阳两城旋即收复现在追缴情形折》（同治五年三月初十日），《左宗棠全集·奏稿3》，第18-20页。

⁴⁷ 《斋匪窜扰上饶铅山叠经官军击散折》（同治五年三月十五日），《刘坤一奏疏1》，第73-75页。

祸福之说，易为所惑。迨人数既多，竟敢谋为叛逆，戕官踞城，蔓延四起。其党坚交秘，执迷不悟，实有出寻常意料之外者。此次斋匪之起，由江西流传闽境，其巢穴在江西封禁山。是山旧名铜塘山，盘亘广信、建昌两郡之交，延袤数百里，岩谷幽邃，素为逋逃之藪。昔人于山贼戡定后，禁民入山耕垦，良有深意。嗣因年久禁弛，棚民垦辟益多，乃奏请展界安插，而外来奸民遂得隐匿其间。是欲清匪源，非入山搜捕不可也。⁴⁸

左宗棠认为问题的根源在于封禁山“年久禁弛”以至于“棚民垦辟益多”，“外来奸民遂得隐匿其间”。所以为彻底消灭斋匪，他请求朝廷下令“入山搜捕”。朝廷很快同意其请，要求“带兵各员会合两省兵力，分赴封禁山内，实力穷搜。务将积年潜匿匪徒悉数捕戮，以期一劳永逸”。⁴⁹

在镇压崇安斋教暴动后，浙、闽、赣三省交界县份不断传出“斋匪”袭击的消息，兹将地方志书相关记录罗列如下：

同治五年九月初七日，（江西省吉安永新县）该县韩懿章与署莲花营都司余大胜；访闻南乡绥源山内有匪徒敛钱聚众，图扑县城，即公同商定畚大胜与县丞、典史督率兵勇绅团防守城池，韩懿章与把总、外委率领兵勇添调乡团驰往拏办；一面移会连界之龙泉、泰和等县，一体兜捕。

（浙江省处州府庆元县）地处万山界连，闽省匪徒最易出没。县属山岱村地方，访有斋匪潜集滋事。（同治七年）九月十一日前往查拿。该匪窜至四都境内，放火杀人，召集匪类，意在拒敌。该县会营募勇迎头堵剿。该匪闻风窜踞险要，负隅固守，距城约二十里许。四面搜捕，获得吴启庭等二名，起获红布上写“威灵显应，万古传名”八字。并称匪首头戴红巾，身披红布，令人吃斋。愿入教者，散给红布为号，纠约闽匪。现已聚集二三百人等语。

同治八年，（浙江省衢州府龙游县）有斋匪之警，一夕数惊。自咸丰兵燹后，本县人存者十不逮一，外来客民，温处人占其十之二三，余皆江西广丰人。……其间更有传教、吃

⁴⁸ 《官军越境追剿斋匪殄灭净尽并提臣前赴署任折》（同治五年四月十九日），《左宗棠全集·奏稿3》，第34-35页。

⁴⁹ 《附录上谕左宗棠等会剿江西封禁山斋匪》（同治五年五月初八日），《左宗棠全集·奏稿3》，第37页。

斋、结盟、拜会者，当时谓之斋匪。匪首周洪海意图起事，而客民附和者颇众。是年三月三日，遂有三更破城之谣，居民惶恐，连夜出城避匿。继又传言北乡某处藏贼若干，东西两乡匪聚尤众，人心益觉不安。知县黄秉中虽令民团防堵而谣言终不止，自八月后乱象益甚，竟无宁日矣。⁵⁰

浙江衢严二府，界连江、闽，时有斋匪溷迹。本年（同治十年）四月见，（浙江严州府）寿昌县地方，谣传外来匪徒暗中勾结滋事。经该县督团缉获徐保洪、包膳幅二名。五月初八夜间，复有匪徒突入严州府城。⁵¹

此外，同治九年（1870）十一月，闽、赣崇安、浦城交界的黄柏山内“聚有江西斋匪多人，希图起事。”后因走漏消息被当局挫败。⁵²

从同治七年（1868）至同治十年（1871），“斋匪”袭击的消息在三省交界地区相继而发。与左宗棠一样，这些记录者或报告者多将暴动成员指向了三省交界山区（不过都将来源定在他省）的斋教徒，归咎于斋教的传播。

那么为何此时的斋教徒如此密集的参与暴动？而斋教的信仰内容是否刺激了这种举动？

毋庸置疑，在被捕的斋教徒中多是三省交界山区的棚民，如崇安暴动中除了几个头目，“余多江西南丰及崇安东北乡一带棚民”。⁵³他们本来就是斋教的主要受众，所以被视为“斋匪”并不奇怪，不过以此就认为斋教传播导致了暴动则有失偏颇。

左宗棠在回福建部署围剿崇安斋匪时，路过兴化府，当地官绅“均言近日地方吃斋念佛者多，但无包藏祸心之事。”⁵⁴参与斋教的棚民并没有特别的造反意愿，或者说他们的宗教信仰并没有刺激他们造反的因子。无独有偶，汤肇熙在开化任县令时，严禁吃斋拜会之类行为。不仅自撰禁条，招贴告知，而且经常向谒见的绅耆询问情况，但是地方绅耆“大抵多以斋而不匪为辞”，为吃斋受戒者辩护。⁵⁵

一些比较开明的官员已经看到信仰斋教并不一定导致棚民参与暴乱。何绍祺就提出：“持斋者未必皆习教，习教者未必皆敛钱，敛钱者未必皆谋逆。”如果一并处以重刑，可能导致局面失控，因此他建议政府在镇压过程中，区别对待：“有官职僭号者为一等，有藏匿军器者为一等，有荒谬经咒者为一等，仅持斋念佛者为一等。”⁵⁶

以上所列的斋匪暴动，有些只是地方官员报称的起事，并非已见诸实行。其中可能存在一些官方围剿扩大化的问题，这需要另文讨论。当然也有一些已经见诸施行的暴动，那是什么因素推动三省交界的棚民频繁参与到袭击县城的暴动中来呢？粮食匮乏起到了很重要的

⁵⁰（民国）《龙游县志》卷一《通纪》，第二十一-二十二页。《中国地方志集成·浙江府县志辑》，第32页。

⁵¹（清）王先谦：《东华续录（同治朝）》同治九十，清刻本。

⁵²马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，第382页。

⁵³《斋匪突陷崇安建阳两城旋即收复现在追缴情形折》（同治五年三月初十日），《左宗棠全集·奏稿3》，第18-20页。

⁵⁴《官军越境追剿斋匪殄灭净尽并提臣前赴署任折》（同治五年四月十九日），《左宗棠全集·奏稿3》，第34-35页。

⁵⁵《复西安张明府言保甲事》，（清）汤肇熙：《出山草谱》卷一，清光绪昆阳县署刻本。

⁵⁶何绍祺《请泉宪区别斋匪稟》，（清）葛士浚：《清经世文续编》卷八十七刑政四，清光绪石印本。

推波助澜作用。三省多次斋教的暴动多爆发于灾荒年份，当地都处于粮食匮乏的状态。同治八年（1869）龙游县“有斋匪之警”。⁵⁷此时该县已经连续两年遭受水灾。七年五月的水灾造成“歉收田凡一千三百二顷十一亩有奇，占原额十分之三强。”⁵⁸而同治九年（1870）崇安、浦城交界的黄柏山斋匪希图起事也正是江西遭遇天灾民食紧张之时。⁵⁹棚民多是耕种山地，出产本就少，一遇荒歉，粮食就紧张。不过由于作为客民，可能还会遭到地方政府的催逼，或者遭到地主土著的转嫁，在这种情况下想，他们可能都无法糊口保命。不满情绪自然蔓延，但这并非暴动的充分条件。要演变一场暴动还需要有效的组织。

在另一份报告中，刘坤一认为：“江西各属斋民虽多，而行教传徒、敛财谋逆，匪首不过数人，余皆惑于祸福灾祥之说，被诱入伙，初非尽怀不轨之心，迨既受其挟持，不得不随而附和。”⁶⁰那么诱惑斋民入伙的是宗教的因素吗？

值得玩味的是，所谓的斋匪袭击事件中，一些口号或装扮也没有展现出斋教元素。如崇安暴动时，打出写有“天国普有”的旗帜，起义者还头裹白巾、绿巾、红巾。而庆元斋匪暴动时，官方起获红布，上写“威灵显应，万古传名”八字。并称“”匪首头戴红巾，身披红布”。⁶¹

这些口号似乎都不是斋教所应有的内容，“天国普有”像是受到太平天国的影响，而头裹各色布巾则有会党的做派。与之形成鲜明对比的是乾隆十三年福建建阳、甌宁一带的斋教起事。当时斋教徒公然“聚集多人，念经点蜡”。起事时，信徒也用绸布包头，但盖用“无极圣祖”图记。旗帜也书有“无极圣祖、代天行事”，“无为大道”，“代天行事”等内容。⁶²念经点蜡为斋教的宗教仪式，而无极圣祖正是其崇拜偶像。而同治时期的起事中却看不到这些元素。这暗示着斋教信仰并没有成为暴动动员的力量，那么什么才是动员棚民的力量？

崇安县的暴动主要组织者并不是单纯的斋教信徒，而是一些游兵散勇和土匪：

.....陆续捕获窜扰建阳匪首伪大将军陈奴奴即武生陈顺光、伪将军安亲德即安宝妹、王搭耳、杨富孙及起意倡乱之杨维忠，并安寿仔（即安邦庆）、安喜孙叛属，讯明分别办理。.....据江西广信府知府钟世楨稟报，讯据安寿仔供：系崇安县人，年二十六岁，先充营兵，因事责革。并供认与陈奴奴等为首谋叛、戕官、踞城等情不讳。⁶³

张树英留驻崇安搜剿馀匪，除捕斩匪首陈奴奴等七犯，业经专折奏报外，续获谋逆戕官匪首安坎孙，.....并获造作谣言，乘机抢掠之游勇陈文魁、陈得胜、吴弟等三名；又会同分驻崇安之署建宁左营游击朱光斗，查拿通逆内应之革兵彭元标、吴占标、衷占兴、衷元标、范占荣、周海亮、章凤高等七犯。.....

⁵⁷（民国）《龙游县志》卷一《通纪》，第二十一页。《中国地方志集成·浙江府县志辑》，第32页。

⁵⁸（民国）《龙游县志》卷一《通纪》，第二十一页。《中国地方志集成·浙江府县志辑》，第32页。

⁵⁹ 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，第365页。

⁶⁰ 《委员查办斋匪土匪暨资遣鲍席两军折》（同治五年五月初四日），《刘坤一遗集1》第79-80页。

⁶¹（光绪）《庆元县志》卷十二《艺文·奏疏五》，《中国地方志集成·浙江府县志辑》，第871-872页。

⁶² 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，第365页。

⁶³ 《官军越境追剿斋匪殄灭净尽并提臣前赴署任折》（同治五年四月十九日），《左宗棠全集·奏稿3》，第34-35页。

据黄少春、张树葵擒获逆匪金供：首匪胡老大、胡老三，江西南昌府人，家距府城四十里，在家为匪不法，房屋被焚，逃至铅山石溪空口牌楼前破屋内居住。大浑、石塘诸战，该逆兄弟曾否歼毙，无从查悉。比即飞咨江西抚臣派队搜山，闽军随时会缉。⁶⁴

以上资料可以看到负责暴动的人员一大部分为武生、革退兵勇和土匪，或许我们可以称之为“武力份子”。他们并非采用斋教的宗教资源动员棚民，而是用他们所熟悉的一套军事政治的象征资源进行动员。当然在崇安暴动中我们无法看到，但在官方对于永新县斋匪情况的报告中我们可以看到相当具体的细节：

.....此次图攻永新县城，系吴宾官起意，勾结金生亮、吴光发纠党帮助。吴宾官因知李合其曾充贼目，藏有伪印执照，足以假藉号召。至年七、八月，屡至李合其山棚声称愿归管束，请封伪职。李合其当给吴宾官正统戎执照，并刑审伪印一颗，在逃之段五庆副统戎执照、统戎伪印一颗，金生亮统戎执照，涂观生巡察伪印一颗；邹三指挥执照。吴宾官又向李合其领得空白纸布伪照多张，转封吴光发为大元帅，杨九俚为将军，吴亚俚为检点，张映俚为指挥，并各处胁人上名，每名得钱三千六百文至三百六十文不等。随令周接俚制造旗帜，雇在逃铁匠唐恩普、朱寿禄打造大刀、腰刀数十把，遥胁过路铁匠朱鹤龄打造大刀、腰刀各一把，买得线抢数杆。议定九月初八夜子丑时破城，令龙仔官邀党入城为内应，商允城内斋妇刘陈氏窝藏，其乞养子刘接开适在外不知情。又约定攻城之时，各人左手衣袖卷起，右手衣袖放落，左腿裤脚卷起，右腿裤脚放落，南乡以红布裹头，西乡以青布裹头，东乡以三角纸旗插头为记，城内放火，城外杀人。张凤开恐吴宾官人少，转纠永宁县（民国改宁冈县）斋匪黄三详邀人助逆。.....⁶⁵

李合其曾被太平天国翼王石达开掳去，并在太平军内担任“刑审”一职。被官军击败后，“携带大军略、统戎、巡察、刑审伪印四颗，潜逃回江”，⁶⁶因此才有引文中所提及各种印信。从以上文字，我们可以看到吴宾官等人正是借助他的这套权力象征工具，分封职位。同时，还用暴力威胁和金钱收买的方式招募团伙，制备武器。其中采用的手段完全与斋教的宗教内容无关。如此我们就可以理解为何同治五年以后的斋匪暴动并没有明显的斋教元素。

斋教或许暴乱的组织者不乏来自斋教等教派的信徒，但暴乱的组织手段和所采用的象征资源却与斋教关系并不密切。斋教在政府打击下，信仰力量已经大不如前，其内部人员都知

⁶⁴ 《查办崇安斋教余匪搜缉事竣折》（同治五年十月初十日），《左宗棠全集·奏稿3》，第152-154页。

⁶⁵ 《永新县匪徒谋逆获犯审办折》（同治五年十二月二十日），《刘坤一遗集1》，第114-116页。

⁶⁶ 《永新县匪徒谋逆获犯审办折》（同治五年十二月二十日），《刘坤一遗集1》，第114-116页。

道“斋匪骗不动人”，而是要采取“封官”等新的手段吸引民众。⁶⁷

唯一与斋教有关的动员资源可能是暴动所需的资金。因为那些革退兵勇和土匪不太可能拥有丰富的积蓄，而斋教领袖可以通过传教积累部分资金，所以当时民间“有斋匪出钱，会匪打仗之说。”⁶⁸

左宗棠将斋匪叛乱归结为斋教的传播，显然将问题简单化。因为真正的问题恰恰与太平天国以后武装力量的处理有关。斋匪袭击事件的动员来自一系列军事政治的权威系统，而暴动的组织者部分曾参与太平天国的武装，部分则是参与清军的团勇，无论如何他们都是战后军事力量过剩的产物。

结论

明朝中后期，罗教在山区的传播，衍生了各种变异教派，在南方一般称为斋教。其中以处州地区姚氏家族为核心的教派影响为大。姚氏创制了一套可以使各级传播者获得不同收益的“十二步道行”（引用后来的称呼）而使教势扩展迅猛，其后这套体制也被其他斋教团体所复制。斋教在山区的迅速扩展与其满足大量开山棚民的精神与物质需求有密切关系。斋教的仪式和活动为在山中开垦的棚民提供面对灾害威胁的心理力量，同时，为这群移民提供了群体凝聚的条件以及种种互助的机制。这背后折射的是在人口压力下，清政府在思想意识形态以及基层的保障体系建设所面临的种种调整。

不过斋教在浙、闽、赣三省山区的传播并没有成为棚民参与各种暴动的刺激因素。以左宗棠为代表的官员将晚清闽、浙、赣一系列斋匪起义归结为斋教的传播，无疑将复杂的问题简单化。其实在太平天国运动以后一系列密集的斋教起义与斋教信仰传播并无太直接的联系，而是与灾荒和社会结构的变化有关。较之于土著，棚民的生计模式可能更加无法抵抗天灾的侵袭。多数山区并没有建立义仓等粮食救济体系。一旦遇到灾害，棚民便面临饿毙山野的命运。其中比较强悍者自然更可能采取铤而走险的方式。

晚清长期的叛乱，特别是太平天国运动，导致了大量过剩的武装力量。不少斋教领袖也曾参与太平天国运动中的暴乱。太平天国运动被镇压后，不少参与者流亡四处，而那些战时募建起来的团勇也面临解散的命运。这些“过剩的武装力量”渗透到山林，用之前习得的军事组织方法动员棚民，从而造成了同治时期浙、闽、赣三省山区连续的斋教起义。所以太平天国运动过后一波连续的斋匪暴动，是当时社会军事化所面临的问题。

⁶⁷（清）張鑿：《雷塘庵主弟子記》卷五，清光緒間儀徵阮氏刻本

⁶⁸ 史部集成·歷史地理與方志·方志典籍·各地縣志·河南·新鄉縣續志（成文出版社影民國十二年刻本）·卷三·藝文志上·公牘

晚清民国浙江山林所有权的获得与证明

——龙泉县与建德县的比较

杜正贞

一、 山林产权法律的变迁

林业史对中国历史上山林的产权，常常只是笼统地将其定性为“官有林和私有林”、“朝廷和各级官府占有”，“私人占有”或“地主阶级所有制”、“农民阶级所有制”等¹。这些抽象的概念，并不能让我们了解古代山林产权的观念和实际占有的状况；也忽视了这些问题的历史演变过程和区域差异。唐长孺曾经从历史过程的角度研究南朝山泽占领。他依据历史文献，勾画了山林川泽从国有（天子所有）到被迫承认私人占有的过程。他说：

“山林川泽在古代一向不承认私人有占领的权利。……在中国似乎维持山泽公有更久，直到出现了国家以后，便算作天子所有，私家还不能占领。……随着皇权的消涨与禁令的宽严，对于山泽的控制虽不能常常十分严格，但山泽王有的法律依据却始终保存。”

根据他的研究，南朝的宋开始承认私人（主要是豪强、品官对山川的占有）对山泽的占有，这就是“羊希立法”。羊希立法不仅“反映了魏晋以来大族经济之发展与皇权之衰弱”，而且也是在山泽开发的过程中，国家试图对大族以及山泽之利进行有效管辖的一种努力。²但是，唐长孺也证明了这些限制和管理都是不成功的。

唐宋以后封禁或弛禁山泽的政令，所针对的大部分是皇陵、园囿、名山等一些特殊的山林，它们被认为是“国有”或皇家专有，设专门的官员管理。但对于其他广大的山林地，国家并没有常态化的管理机制。与田土很早就因为赋税而进行了清丈，并建立起砧基簿、鱼鳞册等官方档案相比；山林地的赋税记录也少很多。因此，在漫长的帝制时期，有大量的森林都处于法理上的“国有”（天子所有）和在事实上的“失管”状态。

我们在现有的研究中看到的，明清时期民间以契约的方式形成林业的产权市场和经营秩序，是在这个大的法律背景下发生的。民间在林业开发过程中自发建立林地的产权秩序，是以契约为基础的。换言之，林产的占有、转移和买卖都仅依靠契约为凭据。这在清水江等

1 参见南京林业大学林业遗产研究室主编，熊大桐等编著《中国近代林业史》，中国林业出版社，1989年，第131-133页；樊宝敏《中国林业思想与政策史（1644-2008年）》，科学出版社，2009年，第40-42页。

2 唐长孺《南朝的屯、邸、别墅及山泽占领》，《山居存稿》，中华书局，1989年，第13-17页。

林区的研究中,已经一再被证明和强调了。依靠近 20 年来在该地发现的大批清代林业契约,张应强、梁聪、罗洪洋等人,对这一地区的林业开发、经营习惯和规则,以及社会组织和文化等都进行了详细的考察³。其中梁聪和罗洪洋的研究主要是从法律的角度进行的。梁聪对文斗苗寨契约的分析,特别利用了“法秩序”的概念⁴,分析林业契约在一个苗寨社会中的作用机制,也探讨了契约所代表的“民间规范”与“国家法律”之间的关系。

如果以现代国家的标准来看,明清政府和法律对于山林的干预和“权利”保护都是非常薄弱的。《大清律例》中涉及平民的山产林木的法律,仅有“盗卖田宅”条下对盗卖坟山、告争坟山的系列规定,以及“弃毁器物稼穡”条下对“毁伐林木”的量刑。《大清律例》乾隆三十二年(1767)的“凡民人告争坟山”例虽然只针对坟山,但其实在很多山林诉讼的理断中都被援引。或者也有很多山林纠纷为了能与法律相合,而以坟山之名告争。不少山林诉讼的当事人都以是否在山上有自己祖先的坟茔,作为重要依据,甚至有毁坏、涂改墓碑的控诉。薛允升特别说明:“此等案件南省最多,与北省情形大不相同。”龙泉司法档案中“光绪三十年八月十八日金林养等为控吴礼顺势欺占砍越界混争事呈状”中就有“界内又有身家坟茔赤凿”的申述。又如,“光绪三十二年洪大猷与沈陈养互争山业案”⁵,两造供词中均强调山产内有自家坟茔:“监生(洪大猷)坟茔有几十穴,这沈陈养越界砍木,监生曾是走出,今蒙复讯,还说监生无坟墓碑,总不能移。”“(沈陈养)山里他无坟茔,就是小的墓多。”⁶不论法律是否承认、不论是否有契约对山界进行过描述,在纠纷诉讼中,坟茔总是会被作为证据而被强调。这种“籍坟占山”的观念和行为在乡民中是普遍存在的。

值得注意的是,“告争坟山”例在承认近年山林的买卖转移以印契为凭的同时,还否定了远年契约的证据力,而是诉诸于依靠官方档案,即“山地字号、亩数及库贮鳞册、并完粮印串”。换言之,山林只有开发为山地,纳粮升科之后,才能获得官方的认定和保障。这一法律仍然基于农业赋税体制而制定,并没有赋予林业产权以独立的地位。

晚清新政,清廷设立农工商局,并屡屡颁布各种诏令,振兴林业作为一种求治之道进入各级官员的视野。山林地的开荒植种和产权确认,也开始成为一些地方官关注的事务。光绪年间陕甘、福建等地的官员在劝民种树的各项规定中,都提出了产权保护的问题。例如《福

3 张应强《木材与流动:清代清水江下游地区的市场、权力与社会》,上海三联出版社,2006年;梁聪《清代清水江下游村寨社会的契约规范与秩序——以文斗苗寨契约为中心的研究》,人民出版社,2008年;罗洪洋《清代黔东南锦屏人工林业中财产关系的法律分析》,云南大学博士论文,2003年。

4 作者对“法秩序”的定义是:“将法秩序看成是法律与社会结合的产物,法秩序并非仅仅是法律规则、原则、制度的本身,还包括了人们普遍地依据法律规则、原则、制度去进行社会活动从而体现着的一种社会状态。”梁聪《清代清水江下游村寨社会的契约规范与秩序——以文斗苗寨契约为中心的研究》,第21页。

5 该案档案存于《龙泉民国法院民刑档案卷(1912—1949)》,浙江省龙泉市档案馆藏, M003-01-91。

6 《龙泉民国法院民刑档案卷(1912—1949)》,浙江省龙泉市档案馆藏, M003-01-91,第2页。

州府程听彝太守劝民种树利益章程》中就说：“九、民间契管山场，听其自种。如无主官荒，有能开种各项树木者，准其呈县立案，以杜争端。十、有主荒地，自此次开种后，定以五年为限，勒令本主随时种植。如五年后尚未种植者，即以无主论，听凭他人开种管业，旧时地主不得出而阻挠。”⁷这一章程，一方面正式承认了原来民间自发形成的、以契约管业的状态。另一方面，也提出了“荒山官有”的理念，并鼓励人们开垦荒山，以到县“立案”的方式获得林地产权。同样的章程在陕甘等地也有颁布。但我们还并不清楚它们在晚清的施行效果。

民国初建，无主荒地、荒山的国有化成为最早宣布的法令之一。民国元年（1912），农林部制定的林政方针里就说：“凡国内山林，除已属民有者由民间自营并责成地方官监督保护外，其余均定为国有，由部直接管理，仍仰各该管地方就近保护，严禁私伐。”⁸1914年11月《森林法》颁布，确立了无主森林均编为国有林。同时这第一部森林法也鼓励人们承领荒山，开荒造林。“第十二条，个人或团体愿承领官荒山地造林者，得无偿给予之。”自承领之日起，得免五年以外三十年以内之租税。为了督促承领者及时造林，承领者要缴纳一定数量的价保证金，如果承领后一年内没有造林，就要收回荒山并没收保证金。民国四年（1915）六月三十日农商部颁布了《森林法施行细则》，第一、二两条就是林地权属的问题：

“公有或私有森林，自本细则施行之日起，六个月以内，应将该林地之位置、亩数及森林之种类，报由该管县知事，详由道尹转详地方行政长官，咨陈农商部备案。其森林区域涉及二县以上者，须分别报告之。第二条，本细则实行后，公有或私有森林之所有权之变更，及营林之废止或新设，均须于三个月内，依前条之规定办理。”⁹

这些法令的目的，是结束山林产权模糊的状态，在承认已经存在的、有确切证明（主要是契约证明）的私有山林的前提下，将无主山林、林地都划归国有。最关键的改变是，这在法律上中止了过去民众通过垦植开发，纳粮升科，即占有山林，即获得山林所有权的做法。

国民政府时期森林国有化进步一加深。1931年5月《实业部管理国有林共有林暂行规则》停止了国有林、公有林的发放。1945年的《森林法》继承了北洋时期《森林法》确认国有林的基本方针。例如，“森林所有权及所有权以外之森林权利，除提出公有或私有之证件并依法呈准登记者外，概属国有。”¹⁰国家认为必要时，可以给予补偿金的方式征收公有林和私有林为国有，等等。根据这些法律，国民政府对森林所有权的确认，仅限于对民国之前

7 《农学报》，上海，农学报馆，1902年第185期。

8 陈嵘著：《历代森林史略及民国林政史料》，金陵大学农学院森林系林业推广部，1934年，第65页。

9 陈嵘著：《历代森林史略及民国林政史料》，金陵大学农学院森林系林业推广部，第68页。

10 陈嵘著：《历代森林史略及民国林政史料》，金陵大学农学院森林系林业推广部，第68页。

契约的登记，对森林他项权利的确认则限于承领执照等官方证书，承领荒山不等于获得对荒山地所有权。但是，这一政策在民国末年发生了变化，1948年2月28日农林部修正公布《森林法施行细则》，承诺荒山荒地造林完竣后，由地政机关依法发给土地所有权状。但这一法令出台后不久，国民政府就失去了对大部分地区的实际控制，因此并无太大的效果。

民国时期这一系列林业产权国有化的趋势，以往林业史的学者已经有所论及。戴丽萍认为，近现代林权制度变迁过程“它首先是一个政治过程。……林权供给主体的利益（国家或政党）在林权制度变迁过程中居于非常重要、甚至是决定性的地位，而林权需求主体的利益在林权制度变迁中则相对居于次要地位，但对林权制度变迁的影响有上升的趋势。总体而言，近现代中国林权制度变迁始终是一个强制性制度变迁过程。”¹¹近代民国的林权法律是一个由国家强制推行的制度，并且在制定过程中甚少考虑林区原有的产权秩序和民众利益。但它们却对传统林区产生了一系列的影响。

与以往同类问题的研究主要梳理政策和法律的制定、颁布不同，本文将把注意力转移到传统林区管业、经营秩序的变化上。一方面，国家确认国有林的行为，以及提倡开荒造林鼓励承领荒山的法律和运动，激发了这些林区民众新的“占山”行为，从而对旧有的山林产权和经营秩序形成挑战。另一方面，国家对林业资源、林地产权确认等环节加强控制，也开启了林权证明从以私契为凭到以官方登记和官颁证书为准的转变过程。这两方面的变化，不仅是传统产权概念向近代产权概念演变过程中的一个例证，同时也展现出现代国家林业管理的初步实践，以及它在地方上的实施过程。我们将利用浙江民国时期的地方档案资料，从山区民众的行动和策略的角度，来考察这个变化的过程，探讨这些法律和制度实践对于林业经营秩序和山区社会的实际影响。

二、无税之山的产权纠纷和确权

清代浙江的山林分为有粮额和无粮额两种。雍正《浙江通志》记载，浙省“原额山壹拾贰万七千四百六十九顷四十三亩五分四厘二毫七忽”，这个数字历年稍有变动，如“康熙六年，丈缺山三百八十六顷七十六亩四分八厘六毫二丝一忽五微，加历年新升并常山、丽水二县丈增，共山二百一十四顷十一亩九分七厘三毫七丝三忽八微……”。¹²这些数字当然

¹¹ 戴丽萍：《近现代中国林权制度变迁研究》，河北农业大学硕士学位论文，2009年，第46页。
¹² 稽曾筠、李卫等修：雍正《浙江通志》，卷六十七，田赋一，中华书局，2001年，第1667页。

不是实际的山地亩数，但它们也说明清代浙江的山升科纳税的比例其实非常小，而且山税在各个地区情况也很不相同。例如在严州府建德县，田额仅 1667 余顷，而山额达到了 5125 余顷。¹³ 而在同样以山区为主的处州府各县，山额的比重却小得多。如遂昌县实在田为 1339 余顷，而实在山仅为 795 余顷；龙泉县实在田 1699 余顷，而实在山仅为 133 余顷。¹⁴ 大约只有部分开垦为山地的，才有登记报税。而且根据民国年间的调查，丽水地区的山税并入田地，“丽邑民田，可分为田、地、山、塘四类……山、塘现均无税，并入田地内科征”。¹⁵ 1920 年植物学家胡先骕到龙泉考察，他在日记中写道：

“九月二十七日午往晤赖丰煦知事少春。晚赖君招饮席次谈及县中状况，知米食不足者约二成。而竹木出产，年逾百数十万金。**此间山林与山田皆无税。**盖在明初朱太祖以刘诚意伯故，免处州全境山税。清季与民国皆仍其旧也。亦以此故，至官厅无存案可稽，诉讼遂极夥，且十九皆须上诉至三甲始止云。”¹⁶

换言之，直到民国年间，龙泉乃至整个处州山区的山林都无官方档案可以稽查，这被认为是山林诉讼难以决断的重要原因。在清代和民国时期，龙泉的山林诉讼都依赖私人间的契约，作为确权的凭证。

（一）凭契管业与据契判决

根据浙江军政府在民国二年（1913）颁布的不动产登记修正案，除田地外，需登记的不动产也包括山、荡¹⁷。但此次登记以业主自动申报为主要方式，成效不佳。民国十一年（1922）北洋政府颁布的《不动产登记条例》第一章总纲第一条：“本条例不动产以土地及建筑物为限”¹⁸，则这次不动产的登记并不涉及山产。民国三十二年（1943）后，龙泉开始推行土地测量和强制性的产权登记，但也仅限于城区和几个镇的田土，大量山产仍不在测量和登记范围之内。因此，可以说整个民国时期，龙泉的山林仍然没有统一的官方登记，除了少数官山承领，由政府发给执照外，山林产权的证明主要仍然依赖各类契约，司法机关对山产、林木诉讼的判决也以契约为主要证据。

司法机关以契约为证据审理山林产权案件的方法，主要包括两个步骤：一是验证契约本身的真伪；二是在实地勘验调查中，对比契约的记载与争执山场、林木的实际位置是否相

13 同上，卷六十九，田赋三，第 1424 页。

14 同上，卷七十，田赋四，第 1737 页。

15 李盛唐《丽水田赋之研究》，第 2133 页。

16 胡先骕《浙江采集植物游记》，《胡先骕文存》，江西高校出版社，1995 年，第 166-167 页。

17 《浙江公报》，民国元年二月廿三日第二十一册，第 3 页。

18 《浙江公报》，民国十一年五月三十日第三千六百十九号，第 1 页。

合。以“民国八年张元兴等控叶樟护等盗砍坟木案”¹⁹为例。该案经龙泉县公署、浙江永嘉地方审判厅和浙江第一高等审判分厅三审判决。尽管判决结果相同，但是对比三份判决，龙泉县与上级审判机构的理由陈述重点却有不同。龙泉县的判决理由主要依据实地履勘，判断被告恃蛮强砍。被告始终抗传避不到案，也是被告败诉的重要原因。但永嘉地方审判厅和浙江第一高等审判分厅的判决理由，则主要针对双方的契约：

“审究该山之所有权应归谁属，尤当以两造之凭证孰系确凿为准。查被控诉人提出周仁盛买契在前清时曾经投税，盖有官印，而契载四至与第一审堪图丝毫不爽，并于山内葬有伊祖张承翼墓，其墓碑所刊四至与契载又属相符。证据确凿，毫无疑问。至控诉人提出张姓宗谱载有张昭墓图，指称张昭葬在系争坟山之西，并称张昭为宋时人，然提出叶春茂之卖契却在康熙五十七年，是葬坟在宋而买地在清，此中情弊已难索解。本厅查阅该卖契在前清时又未遵章投税，则该卖契之本身究否足凭，尚滋疑窦。”²⁰

上述永嘉地方审判厅的判决理由，既强调了原告（即被上诉人）契约的真伪（其中清代已税契是重要的证明），也论证了契约和实地勘验之间是否吻合的问题。被告的契约则因为无法和葬坟的年代相匹配，而受到质疑。然后再指即便被告契约为真实，其中所载四至范围与查勘情况也不符，因此做出驳诉的判决。可见，契约的真伪，以及契约所描述的山界与实地查勘结果的吻合程度，是审断的首要理由。

但被用作管业证明的契约，不仅仅是山林的买卖契约，在龙泉档案中，当事人不仅用山林的所有权来证明他们对山林的占有和使用；而且也常常反过来，用对山产的实际占有和使用，来证明他们的所有权。例如，山佃的证词、租佃的契据也成为论证山林所有权的证据。在“宣统二年范绍文控刘文贵越界强砍案”²¹中，在典史当场查勘山场的时候，山佃也到场作证，并出具出佃的契约“仰字”：“现沐捕主勘明，在勘厂时，两造山佃俱经吊问供确，并文贵之佃张得根前向邱利财仰来仰字，亦经抄白，当厂呈阅。”²²

“宣统二年季庆元控吴荣昌等藉买混争案”中也有同样的事例。季姓兄弟共有的一处山业，虽然已经分关，但有关山业的契据都保存在兄长季庆麒处，当季庆麒出卖自己的山业时，

¹⁹ 该案存于《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-14720，M003-01-17214。

²⁰ 《民国九年十一月二十六日浙江永嘉地方审判厅民事判决九年控字第八五九号判决正本》，《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-17214，第167-168页，第165-166页，第171-172页，第169-170页。

²¹ 该案档案存于《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，卷宗号：M003-01-3829，M003-01-10203，M003-01-13421，M003-01-14426，M003-01-14459，M003-01-16844。

²² 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，卷宗号：M003-01-12324，第13页。

买主拿走了这些契据。据“宣统二年六月十八日季庆元为控吴荣昌等奸谋罩占蛇足显然事呈状”：

“生兄麒读书亏空，背托中向买阴边松房山业，全手老契，系麒收拾，俱被套去，续生查知，投入理论，始将契尾注明，内有柏房关内竹园四至未在卖内等字。生想柏房竹园，自有四至确凿，关内为凭，沧桑迭变，万不能竹园便是毛竹而已。于上年昌等竟串季春旺勒写全山全界佃领一纸，意在久为连占护符。”²³

虽然季庆元要求在买卖契约中注明其中有一块山地不在出卖之列，吴荣昌试图通过在出佃时，写具包含“全山全界”的契据，从而造成拥有所有山产的事实依据。这从另一个方面说明，作为证明事实占有、使用状况的出佃契据，在山产所有权的纠纷中往往能够发挥证据作用。

各类契约无疑是民间山林产权保护和诉讼判决的主要凭证，但我们仍然可以在晚清乃至民国的诉讼判决中看到司法机构对于田赋档案证据的依赖。

（二）傍田立名与鱼鳞册号在山林确权中的作用

据 1920 年代浙江民商事习惯调查报告称：

“遂昌县民间买卖山场先由卖主检出源流旧契，照其所载经界四至，订立卖契连同源流旧契付与买主管业。买主并不问其山地之字号、亩数及粮额。契上亦不载明前项字样，惟记载某某山场一处，以及东西南北界至，出卖于某某永远照契管业而已。倘遇山地毗连经界之讼争，如一造提出源流旧契及买契，所载界至与系争山场界至相符，彼造则俯首无词，并不主张以字号亩数及粮额为凭而加以攻击也。按前项习惯系遂昌县公署程、温会员所报告。据称遂昌山粮究系何年截止，年湮代远，无卷可稽详考。前清光绪年间，实征堂簿内则载有山额永不加赋之语，核诸全县民间户册仅有田地塘之粮额，亦无山粮之记载，故民间买卖山场向不以推收粮额及山地字号为凭也。又是项习惯不独遂昌一县为然，即旧处属十县亦一律相同云。”²⁴

换言之，山场因为没有税粮，在官方并无登记，因此山场本身并没有字号。但在山林诉

23 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，卷宗号：M003-01-495，第 20 页。

24 《浙江民商事习惯调查报告会第二期报告》，第 4 页上-下。

讼中，仍然存在以田土的赋税登记作为附近山林权属判断依据的做法。龙泉档案“宣统元年郭梦程等与郭梦璧等互控祖遗山产案”，是一起两村郭姓族人之间的山林族产纠纷。原被两造都呈交有契约，但这些契约都是片段的，只记载了某几次的交易，无法依据这些片段的契约，追踪所争山产自明代以来至清末 400 多年的管业、买卖过程，也无法确定它在清末的权利归属。民国二年（1913）二月二十八日，浙江省第十一地方法院判决文中直指，“两造所呈契据均无何等价值，难以即凭契断案。”²⁵判决书中说：

“讯得两造所争之业，既无别项确实证据，自应即以官册为凭，如官册原文之名为车盘坑族太祖，即为车盘坑族原来之业。如官册原文之名为地畚村族太祖，即为地畚村族原来之业。但官册只载既垦之田，并无载未垦之山。本院因是推定，以自己之山垦田为原则，买他人之山垦田为例外。如他人无确凿之反对证据，则田为谁家原丈，即推定田旁之山为谁家之业。至原丈后，田有出入，当仍以契据为凭，不在此例。”

这份判决书认为，不完整的或难以判断真伪的契约，无法作为裁判的依据。可以依据的是所谓的“官册”，也就是官府对田土的登记，根据田土的权属来确定它们邻近的山林的归属。以田土“官册”作为山林产权的参考证据，显然有很多缺陷。在长期的开发管业过程中，经过多次的产业转移，毗邻的山林和田土属于不同业主的情况是很常见的；而且由于民间田土买卖，很多并未在官方及时推割过户，田土实际管业情况，并不能在“官册”上得到反映，因此由田土的所有情况推定附近山林的所有权属，也不可能准确。

“民国十八年吴继德与李亦梅山业纠葛等案”²⁶，被告人在辩诉词中还说，根据当地习惯，在契约中山名、四至的命名方法，也和附近田土的登记字号、名称有关：

“山业应凭源流契据，乞察龙泉习惯买卖山业必照源流老契土名界至填写，方为有效。辩诉人契管之山均有源流老契为据。阅原告人状称土名圳古后，究竟从前有无此种名称。假如有此种名称，应照上手源流老契填注，方为证实。无则捏造矣。**查龙泉山场之土名向无册号，傍田立名，田名甲者，田上之山名亦为甲。此为成立山契缘起一定之方式。辩诉人契管山场以下之田均名畚上地与山相符，并无圳古后土名之名称**

25 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉市档案馆藏，M003-01-5739，第 19-20 页。

26 相关档案保存于《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉市档案馆藏，M003-01-1160、M003-01-1711、M003-01-4810、M003-01-6171、M003-01-8030、M003-01-9941、M003-01-14524 號卷宗”

(有必字号官册可查)。²⁷

但被告所称的这一习惯，并没有被法院所认可，判决理由说：“虽该被告攻击原告所执系争山场契据，其上手契与黄陈宝徐承发出卖之契据土名四至，两有异同，此点已由本院票传黄陈宝徐承发到案讯明……即核与本院勘验时所得情形，大致亦互相吻合。”²⁸被告人指责原告契约中的土名、四至名与上手契不同，且在官册中无据可查的。龙泉地方法院的做法是，票传立契人（也就是卖主）到案质询，证明契约所描述的山场四至究竟对应着实际山场中的哪一处。

由于不是每块山林附近都有已升科、登记入册的田地作为参照物，而且很多山林开发和契约订立年代，早于附近山地的开垦和升科，“傍田立名”之说，即便真的存在，也不可能是一种普遍的做法。以此裁断契约中出现的山林土名和界址是否真实，并不合理。但在上述案件中，司法机构和当地民众在为山林确权时，仍然有依赖附近田土赋税登记档案的观念，这种观念也反映出山林契约本身在确定山林权利、界址上存在的缺陷。

（三）契约对山林的描述和山界纠纷

山林契约不仅和田土契约一样存在着伪契和上手契不完整的问题，而且还因为它对于山林的定义和描述方式，带来很多不确定性。在清代和民国时期，诉状和契约中对于山产的界定和描述，都是以地名、土名和四至构成的。山林纠纷诉讼多因界址问题而起。以“光绪三十年金林养等控吴礼顺纠党强砍案”²⁹为例，吴礼顺在“光绪三十年八月初三吴礼顺为控金林养藉连跨占好讼诬良事呈状”中，这样说明自己山林的界址以及与金林养的纠纷：

“承太祖文照遗有历管数代之山场一处，坐落木岱庄，土名沙木坑口安着，半系佃管，半属自管，四至零清。只因北至牛萌岗，与地恶金林养等契管之上至牛萌地毗连，日前身家插扞杉苗，该恶等早存越占之意，惟是杉木非三四十年不大，彼此各未砍木，任由指东作西，不与计较。刻因自杉木颇大，雇工砍下，计砍杉木六百七十余株，且砍之木还是山内小土名承除，远距金姓毗连牛萌岗相隔甚远，不谓金林养□□□□□□□□，辄敢跨岗逾湾，混讼强占。”³⁰

27 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉市档案馆藏，M003-01-4810，第71—77页。

28 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江龙泉市档案馆藏，M003-01-4810，第35—39页。

29 该案档案存于《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-9762。

30 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-9762，第3页。

金林养则在“光绪三十年八月十八日金林养等为控吴礼顺势欺占砍越界混争事呈状”辩称：

“身旋邀宪差登山看明山界，外至高际大岗直下大溪，此界高际分明，有际有水，通流直下大溪，毫无混杂，界内又有身家坟莹赤凿。砍木八百余株，系坟莹之岗湾直上，现有树脑可验。吴礼顺恃强欲将魁杉先放，希图运销，前经伊亲核契勘界，又经宪差看明实情，足可吊质，该山界址与礼顺悬隔分明，并无纠葛。”³¹

类似的陈述充斥于所有山界纠纷中。山林是由土名、四至来确定的，但无字号，也没有亩数。所谓“本县山场，向以土名片段四至为重，绝不记载亩分，全县同此习惯，不仅一地一姓为然”。³²其中，土名又有大土名和小土名的分别，大土名中的山林可以分属于数个小土名。大小各片山林的东南西北四至几乎是划定山场范围的唯一标准，但四至一般都只以地形的自然形态，如山岗、分水岭、巨石、溪流为界，是相当粗略的。

诉状中这种定义和描述山林的方式，与山林契约是一致的。契约的出现，是山林开发过程中，开始出现山林产权转移和确认需求的产物。所谓的凭契管业、凭契管山，也就是对契约规定的四至山界之内的山林拥有权利。最晚在明代，龙泉山界的确认就需要以契约为依据。但是，山产纠纷和诉讼却显示，真正要凭借这些契约对山产的描述、记载确认山界、保障权益却并不容易。

前述“宣统元年郭梦程等与郭梦璧等互控祖遗山产案”³³中保留了从明弘治三年至清道光十三年间的相关契约抄件 8 件。最早的明代弘治三年（1490）围书的抄件如下：

七都住人吴怀真同弟怀义承祖置有坟山一处，坐落本村，土名西山头等安着。

其山东上至三兵儿山顶，南至车盘坑直上，西下至石门栏横路，北至霹雳尖分水为界。

□□四至明白。今因家道贫难，兄弟相义，欲行移居去到庆元县住□。思及前山并等处坟穴、荒田等管业不便，自愿凭中将其山场等项围与一都女婿郭永增前去管业为主。

所围之山等件，日先即无重叠交为碍等事。如有此色，围者自能一力支当，不涉业主

31 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-9762，第 24 页。

32 《呈一件为查勘张案山场情形造具一览表并缴山图请察核销委由呈》，浙江省龙泉市档案馆藏，M10-1-170-1，第 125-127 页。

33 该案档案存于浙江省龙泉市档案馆藏《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-10898、M003-01-2800、M003-01-3627、M003-01-2561、M003-01-13785、M003-01-9653、M003-01-14035、M003-01-2536、M003-01-15375、M003-01-5739、M003-01-1900、M003-01-10026。

之事。其有当日接收围书内银一两正。自围之后与伯叔子侄内外人等，不得遗悞言止。如有子孙逆悞言止，仰执此围书经公陈理。今恐人言难信，故立此围书，永远为用者。可。

弘治三年闰九月十四日立围书人吴怀真 仝弟 怀义

在见 母舅 沈宗 代笔人 连普藏 俱押

这件围书对山产的描述信息，包括坐落、土名、四至。山林四至以山的自然形态、分水、道路为标志，这是明清和民国时代的山林契约的一致做法。³⁴其中“四至”对于确定山场最为关键。我们在档案中也看到当地人强调：“龙泉风俗民间所管山场均以契内四至为凭，四至之外即是他人所管产业”³⁵。在这张契约中描述的山产，只包含有山林、坟穴和荒田，也就是说，即便有垦林为田的开发，这些山田还未在官府登记。此后，这块山地显然经过了多次分割、继承和买卖。现存 8 件契约抄件，只记载了其中的某几次交易，无法依据这些片段的契约，追踪所争山产自明代以来至清末 400 多年间管业、分割、买卖的具体过程。但我们从这些契约中看到，在山产的历次转让、买卖、租佃等过程中，又形成了众多小土名和表述各异的四至界址。它们中的大多数与这张最早的契约中出现的地名都不一样。换言之，凭借这组契约中互不相同的土名、四至，甚至很难确认这些契约中所涉及的山产，是否同属于明代第一件契约中的山产。这也是前引浙江省第十一地方法院判决文中直指“两造所呈契据均无何等价值，难以即凭契断案”的原因之一。³⁶

在围绕契约证据的辩论中，契约对于山林界址范围的描述本身，常常成为争讼的焦点。“民国十年叶水根诉叶有绍杉木纠葛案”，原被两造因山产争讼，原告叶水根以嘉庆年间的买契、和息约的草稿为据。被告叶有绍则提出有乾隆年间“投税之印契”，以及民国三年“山皮”买卖的契约，“叶正炎又将所植杉木卖与民为业，原契呈电，自此以后山骨山皮完全为民所有。”³⁷被告攻击原告之契，所载土名与所争之山不是同一处山产。原告叶水根继而反击，称被告所提供的民国三年的契约“立字民国三年，直至本年始行投税，显系临讼捏造，倒填年月，不问可知。”而且，被告所提供的上手契和卖契记载的土名、界址也都不相同，难以认为是同一处山场的源流老契：“民间置买产业，入手契之土名界址必根据于上手契而来，以证明

34 契约中对山产的描述和定义，同样是由坐落、土名和四至构成的。参见曹树基等编《石仓契约》，浙江大学出版社，2011年。

35 《中华民国十九年十月十七日龙泉县卷宗土地类三号一件为关于测丈张雨亭案由》，浙江省龙泉市档案馆藏，M10-1-170-1，第 115-117 页。

36 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-05739，第 19-20 页。

37 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-00761，第 45 页。

其权原真实，莫不皆然。查叶有绍所呈乾隆四十九年之契及民国三年之契，土名界址，南辕北辙，判若天壤”。³⁸最后，该案以亲族调解，两造和息结案。

此案中原被双方之间的论辩相当典型，即两造虽然都有契约作为凭证，但这些契约证据都有瑕疵，各件契约（包括历次买卖契约、分家书、租佃契约、出拚契约或者合股合同等）中描述的山产土名、四至各不同，无法证明这些契约是同一处山林的证明文件。回到契约的生产过程，这种情况的出现，是很好理解的。尽管在签订契约时，有“必照源流老契土名界至填写”的习惯，但山林的界址是在开发、买卖、分家析产的过程中不断变化，统契约格式中以描述四至的方式定义山场，无法记录这个复杂和长期的变动过程。有关的纠纷和诉讼在整个民国时期都层出不穷。

“民国三十一年王祖达与吴燮梅等杉木纠纷案”则涉及山场的定名。原告王祖达要求返还被抢的杉木十二株，而被告吴燮梅则反诉原告越界强砍，要求确认产权。双方均提出山契为证。但双方契约上山产的土名有所差异。原告契约描述山名为“西乡富岱扎弄土名鸭雄坵”，被告山契上的土名为“南乡则弄湾”。原告在状词中指责被告是“籍废（契）混争”。龙泉县法院依据实地查勘和查勘中当事人的口头陈述，判决原告败诉，但对于双方契约记载上的差异没有回应，甚至说：“又两造契载土名，虽稍有文字之不同，而所争山场则一。”³⁹

败诉的原告一方不能认同这样的判决，上诉至上级法院。他们在上诉状中说：

“况所争之山确乎坐南向北，界于西南两乡之中，水流入西者属于西乡管辖，水流入南者属于南乡管辖。天然境界，显而易见。上诉人之山坐落西乡，有鸭雄坵水田铁证，并有鸭雄坵粮册可查。但原审判决理由谓‘系争山场内有坟穴一处，既载被告契内，则此项系争山场即应认为被告所有。毫无疑问。’等语，殊不察被上诉人之山契，载坐落南乡，与上诉人坐落西乡各不相涉，尤其被上诉人之山早经卖与季姓管业，就以坟穴论，季姓山中尚有大坟一穴亦存。原审派员勘验时，适遇大雨淋漓，突然而至，并未详细履勘，偏听被上诉人凭空妄指，马虎判决。更有说者，查被上诉人所持契据内有问吴姓错买字样之记载。既云错买，必有瑕疵，原审亦未加深究，应请吊核被上诉

38 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-00761，第54页。

39 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-2731，第127-132页。

人之所谓错买契据以明真相。”⁴⁰

上诉人质疑原诉被告用属于南乡的一块山林的契约，出而混争附近属于西乡的山林。诉词中也援用了山林附近田土粮税登记的档案，作为自己山林坐落的证据：“上诉人之山坐落西乡，有鸭雄坵水田铁证，并有鸭雄坵粮册可查。”经过此番上诉，浙江高等法院第三分院要求龙泉县重新实地勘验。根据勘验报告，两造在勘验之后，经过亲友调解，互相让步成立和解。和解的结果是，在一审中败诉的原告一方付出一仟柒佰元给被告方，获得所争山产，已砍山木归被告所有，诉讼费各自负担。⁴¹我们无法判断，到底是那一方的契约有问题或者是伪契，但显然他们各自的契约，都没有清晰地定义他们想要获得或持有的山产。

“民国三十五年曾贤谦等与李振汉确认山场杉木所有权案”是民国晚期的案件。该案所涉之山林原为曾姓兄弟五人所有，后其中一部分被一人出卖于李振汉。从两造的言词辩论和状词可知，虽然两造都有契约、宗谱等为证据，但前代数件契约所记载的土名、四至都不完全相同，契约所记与当时人们口头上称呼的土名、四至也不能吻合。被告李振汉的辩诉中就说：

“原告呈崇祯二年王德政卖契土名为白石玄路后，与其状称土名白石玄口已不相符，而系争山为土名白石玄底外竹山安着，又与原告之契载状称均不相符。又其契载四至为东至岗顶，南至梅树湾，西至坑，北至大溪为界，与其庭供系争山四至为东至横岗、南至湾，西至小坑，北至火路大岗直下坑为界，亦两不相符。足见该契对其起诉原因不能为相当之证明。”⁴²

这类在状词或言词辩论中的语言，当然只是一面之词，但其所描述的契约对山场的记录与状词、口述之间的差异，却是常见的事实。从法院的判决来看，曾贤谦要求确认所有权的请求也被认为契据不足，而被驳回。⁴³至于双方确认山界的请求，法院换派调查员进行了查勘，在查勘过程中双方承认山界在“火路大岗直下坑”，但是对于这条大岗的确切位置，又有不同的说法。最后龙泉县法院的判决，以法院调查人员的主观推断，对山界的进行了重新划定。

这件发生在1946年的山界和山产所有权纠纷，不论是双方论辩的依据，还是法院调查、判决的方式都与晚清民初的案件是一样的。换言之，在民国四十余年中，对于山产所有权的

40 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-2731，第152-155页、第157-158页。

41 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-2731，第178页。

42 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-9181，第64页。

43 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-9181，第127-132页。

确认，以及管业模式等并没有大的变化。

上述案件都与山林契约中对山产的定义方式有关，由于契约书写格式，它对山林的描述并不严密和也不统一，非常容易受到攻击。前述“民国三十一年王祖达与吴燮梅等杉木纠纷案”，龙泉县法院初审对契约的忽视，可能是不得已而为之的结果：两造对同一片山林土名的定义各不相同，而对于山界四至的描述，也多是类似“东至坪下、南至塆、西至岗顶、北至塆”⁴⁴，这样含混不清的词汇，要据以指认实际的山林的确切范围，并不容易。在民国二十二年（1933）张姓山场案的一份查勘报告中，测勘人员曾写道：“又张姓受买各该山场，其卖契所载之四至，均系依据界址形势俗称，详载于契，其字句冗长衍蔓，非目睹该山形状者，几不解所载是何意。”⁴⁵这恐怕不仅是龙泉的情况，而是多数山区社会的山林契约的共同特点。在山产木业纠纷中，即便有充分的契约证据，这些契约也必须回到山林现场，实地查勘山界，查访当事人的村邻、亲戚，以对契约中出现的山名、界址，进行实地的指认，才能被法官所理解和判断，甚或在很多情况下，只有抛离原有契约，对山界的重新划定。

换言之，尽管明清至于民国龙泉山林的产权秩序都以契约为基础，相关的纠纷和诉讼也以契约为主要凭证，但契约对产权的保护并不周全，诉讼中的查勘和判决并不完全是以维护和执行契约为目的的。

三、民国验契与山林产权诉讼

进入到民国时期，尽管龙泉山林的产权秩仍都以契约为基础，但多次验契运动，也使山林“凭契管业”的状态，屡屡受到国家权力的干涉。民国的历次验契运动，都包括对山林契约的查核和登记。民国元年浙江省军政府提出契约登记的要求。最迟在民国二年，浙江各县就已经设立了契约登记所。几乎是在同一时间的山产诉讼中，就都出现了契约登记和契约登记所的内容。

“民国二年张仁钱等与张德财等互争山业案”⁴⁶发生在当年的四月至九月间。该案由张仁钱一方率先提起诉状讼。他们在状纸中说，宣统三年（1911）自己在祖遗山场上砍伐的木段，民国二年在放排运售的途中，被张德财等强盖斧印，计图抢运。在述及对这些木段的所有权证明时，张仁钱等是这样表述的：木段所来自的山场“界址零清，前清契税，历管至今，毛无

44 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-2731，第145-147页。

45 《呈一件为查勘张案山场情形造具一览表并缴山图请察核销委由呈》，浙江省龙泉市档案馆藏，M10-1-170-1，第125-127页。

46 该案相关档案保存于《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，卷宗号：M003-01-1048、M003-01-9135、M003-01-9149、M003-01-10793、M003-01-10943、M003-01-14365、M003-01-16797号案卷。

异议，其契据早交登记所，因证书未到，契存登记所，一时无从呈电……”⁴⁷而张德财一方的诉状随即宣称，张仁钱（田）等人不过是他们的山佃，这些山场，“民等祖公张定元于前清道光年间，向张智元、张德林二手受买有本庄杉山七处，概归为张春豪太祖清明祭产无异……受买契据已送登记所登记。”⁴⁸。双方都宣称拥有该块山场的契约，并且双方的契约都正在“登记所”进行登记，等候政府发放“证书”。县知事对于双方状纸的批词也是一样的，令向登记所领回契约呈阅再行核办。

在该案中，双方后续的控辩和县知事的理断，都围绕着契约进行。根据县知事的历次批词，双方的契约均无法完全证明自己拥有山场的所有权。因为张仁钱一方声称山场买卖的正契遗失，而只有之前两次出拚的拚批。张德财等持有乾隆年间的一张买卖契和出当反赎契约，但却缺乏能够证明将山场出领给张仁钱的领契。这些契约也并不是一次性完整地提交给县知事的，而是在他数次批词的严厉催促下，不断地“被发现”出来的。而且县知事还提出，双方所提交的各类契约中，山场的四至、地点的叙述，均不相同。

“且现呈之契土名各异，与张仁钱等所呈之契土名又不同，其间不无疑窦，姑存质对，以免混淆。”⁴⁹

“况各项契据时经百余年，均未投税，迄今结讼，始行登记，其间不无别情。仰即捡齐受缴项姓源流各契，并佃查领字呈验核夺。此批。契并证书均存。”⁵⁰

契约的来源、与所争山场之间的契合度、可信度，均存有疑问，所以县知事派出承发吏和法警前往调查。但前后两次调查的报告也完全相反：

民国二年五月六日，承发吏、法警查勘后的回覆中说：

“复查邻近村人皆曰：此山自有树以来，或砍或拚，惟知仁钱等执管，与张德财主佃分息，未知闻也。且张文有与德财并非亲房，此契系出洋六元，向张世炎取来，其土名四至与此稍合。至于究竟如何，民等不能深知。”⁵¹

张德财被指责花钱购买了一张别人的契约以图争产。这次查勘当然被张德财一方所质疑。于是县知事再次发票改派承发吏调查，调查结果与前次迥异：

47 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-9135，第15-17页。

48 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-9135，第1-4页。

49 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-10793，第12-13页，第7-10页。

50 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-10793，第1-6页。

51 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-1048，第7-8页。

“询问山邻及密查村内耆老，均云张德财等房众，只知沙田寮后之山是伊众山，因契据未曾寻着，不便争管。故此山向属李钱看管，今李钱将该山杉木砍卖，众等始向张世炎家检寻老契验看，踏勘四至，确系张李钱砍树之山，故将树木阻留。而张李钱说，张德财向张世炎买出山契混争。”⁵²

因此，实地调查的结果，也不过是各自口说，均无实据。不论是契约、还是调查，都无法确证山场的归属。在这种情况下，县知事将山场判给了能够证明自己历年在管理山场的张仁钱一方“永远管业”。“惟张文有买契存在德财族内，着民提出木价英洋五十元缴案给交德财族内公用，作为酬劳之费。张文有买契准民具领。”⁵³

民国二年的这起山场争讼，仍然反映了在凭契管业的“制度”之下，山林所有权证明的困境：契约链的不完整、契约写作的不规范、白契、伪契、契约对于地方熟人社会网络和“地方知识”的依赖等等。这些问题在清代和民国初年的山林诉讼中频繁出现。仅在民国二年，龙泉县就还有以“藉废（契）混争”而起的“徐永炎与章学伦互争山业案”⁵⁴和被控以“狡串立契”的“陈秋亭与徐世克等互争山业案”⁵⁵等，都是凭契约无法确权管业的案件。但同时，这些案件中还透露出一些新的变化，即契约登记所的出现。在这个背景下，当事双方以及县知事对于契约“登记”也特别强调。这说明当时民众对此项政策的反应是极为快速和积极的。尤其是对于那些本身可能存在有“瑕疵”的契约和山林产业来说，这种登记不啻于一个让契约和产业获得合法性的机会。但该案的审理过程和判决结果也证明，这项契约登记的制度并没有，或者还没有来得及发挥作用。

与龙泉相邻，同属于浙南林区的遂昌县，档案中也记录了民国初年契约登记政令下达之后，民众的即时反应。遂昌县档案馆藏 415-2-719 号卷宗里，包括了民国二年遂昌县政府司法处收到的两起要求山产登记的申请。《叶树清称求准予登记一案》（1913 年正月十八日-1913 年二月一日），叶树清（居地距城百另五里）呈状称：“历管山场，正契遗失，检呈老契，并粘契底，恳恩照章悬牌宣示，一面准予登记，给发证据，以杜后患，而清业产。”事因叶族祠产契约均存于祠长家中，祠长去世无嗣，族人会同到家检点字据，发现一张谢姓出

52 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，卷宗号：M003-01-16797，第 25 页。

53 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-16797，第 7-8 页。

54 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-16803。

55 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-1748、M003-01-8562。在这个案件中，县知事采用了与山林相邻的山田赋税粮册作为证据。案件所争主要在确认契约中的土名、四至的实际方位。“查粮亩田段字号册，内载三百七十九号后坑突，三百八十九号上攀儿。田垦于山，突上有田，田名则本山名而呼，事所常有。” M003-01-8562，第 2-5 页；“此案判决系根据粮亩田段字号册，并非专凭承吏之勘覆。” M003-01-1748，第 25 页。

卖过手正契遗失。

“兹阅知事遍贴通衢告示，凡前清之产业契据一律须要登记，如果逾限不登，加费五倍云云。耆等是项祠山，界至分明，产业清楚，虽过手正契遗失，而上手老墨而存，似此历管山场，非沐照章悬牌宣示，一面准予登记，发给证据，不但后患难防，亦诚辜负先人创业之苦心矣。为此检呈老契，并粘谢姓契底，伏乞兼执法长电准照章悬牌宣示，一面准予登记，发给证据，以杜后患而清业产，翘首切上呈。”⁵⁶

申请书的批词显示，当时遂昌县章姓知事兼任登记所长一职，他在民国二年正月十八日的处理意见是：“既无正契未便遽尔登记。惟据称，业系祠产，契由前祠长叶金荣遗失，是否属实，姑准榜示一月，如果无人争告，再行核办。仍仰补缴保证以符定章。”三天后即发牌公示，其公示稿中印有“遂昌县不动产登记处之钤记”。

同卷宗还有巫承福（商人，西乡廿一都距城百五十里）的登记申请。据巫承福呈称，自己在清末分几次买得一处山场十六股中的十四股。该处山场在宣统元年还因为纠纷有过诉讼。在这次诉讼中，“民将两次受业契据抄白呈归案中，后经陶令讯断，迄今卷在经承童宝华处，彼时正契并源流残墨概在家中。”但是不知为何，这买卖正契却遗失了。

“今民国成立，浙省登记施行，民谨按登记法第五条第二款证据遗失应亟呈明理由，请求榜示。并邀前本都庄书王品廉（据卷宗他居于城中）作为保证。民两次买契投税，皆伊经手，业蒙承认署名，担负登记法第七条所列情事之责任，其与登记法施行细则第十九条规定之保证人须与业主同居一县，确系有资财者亦无不合。所有前清控案时呈案之契白及裁拚约底，民现已领回，合并粘呈，以备电核。民国二年三月五号”

章知事批：“察阅白契及拚约似尚实在，惟契已遗失，究竟陶令判决以后有无别情，殊难悬揣，姑准照章榜示。一俟期满，如无争告，再行酌夺。”

这两份登记申请都说明，民国元年浙江省的契约登记法令在地方曾经切实实行过。同样，两案也都是以“契约遗失”为由而提起的。特别是第二个案例，呈请登记的山产是在晚清争讼未决的产业。申请人显然看到了这次登记是一次“合法”占有的机会。知县的批词说明，按照民国元年的登记法令，只要将申请“榜示”一个月，如果没有人提出异议，登记处就可

56 《民国遂昌县政府司法处档案》，浙江省遂昌县档案馆藏，M415-2-719。

以为这些山产进行登记、发给证书。

随着一轮又一轮验契运动的进行，在司法审判中，对税契的要求也在严格化。“临讼投税”受到了更严厉的指责和禁止。在民国十八年（1929）的一起山产纠纷的判决理由中说：

“依现行法例，凡不动产之移转，必交付上手契为证明，并无他项纠葛之要件。

兹查本案被告人主张，系争山木为其太祖蔡玉星所受买，只能提出临讼投税之季世业远年卖契一纸，并无他项上手老契可资证明，殊难信其所持之契即为管有系争山场之证凭。且核其契载四至，又与勘图内载全山界址不符。纵被告人坚称，系争山内历届祖坟多穴，墓碑赤存可靠。然无论籍坟争山，法所不许，早著判例。即如被告诉称有碑之墓，亦仅蔡日华一穴，核之勘图，其坟尤在被告指勘西至横路界址之外，余坟均无墓碑可考，足征坟之与山并无连锁关系。反之，原告主张系争山木为其所有，既呈民国十一年王心聪先后卖契以为入手产权之证凭，复提康熙年间季云翔夏允臣出卖之印契，以证明其上手之权源，手手衔接，源流正确，其契载四至，复与实地勘图，形势符合，自属征而有信，应认原告人之请求为有理由。”⁵⁷

这份龙泉县政府的民事判决，从两方面论证山林产权的归属，一是契载四至与实地勘图的相符度；一是契约本身的可信性，其中又涉及两个问题，一是契税，二是上手契的完整性。该判决后，败诉的被告以前次判决为缺席审判为理由，根据“民国二年上字第九十七号大理院判决理由栏内有查诉讼通例，缺席判决本可于一定期间内依式向原审衙门申明窒碍，请求恢复缺席审判前之程度，重开审理之明文”要求重申⁵⁸，并且针对前次判决对“临讼投税”的指责进行辩护：

“前任承审员谓民只能提出临讼投税之季世业远年卖契一纸，殊难信其所持之契，即为管有系争山场之证凭云云。窃**龙泉山契**，古时遗下未曾投税者多，判后**临时投税**者亦复不少。官厅解决契据，只研究其所持契据之真伪，并不因其临时投税之故而失其契据之效力。”⁵⁹

57 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-8351，第25-30页。

58 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-8351，第31-34页、第36页。

59 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-8351，第37-42页、第46页。

核诸我们在龙泉档案中看到的案例，之前契约临时投税而被司法机构容忍的情况，确实不乏其例。但龙泉县政府遂在第二次审判的判决书中，强调了税契在证明山林产权上的重要性：

“按现行法例，我国不动产登记办法未施行以前，现行税契允为证明取得不动产所有权之要件。被告所提康熙年间契据，当时既不投税，即不能为取得该系争山所有权之证明，亦不能断定该契确为康熙年间所订立。至籍坟争山例所不许。”而原告以康熙年间的上手印契为权源，其主张系争山为其所有当属可信。⁶⁰

但是这一判决理据显然与《大理院判决例》七年上字第五七六号例相违背，七年上字第五七六号例说：“税契乃是国家一定征税的方法，而非私权关系成立的要件。故不动产让与契约虽系白契，未经过印投税，苟依其他凭证，可认为真实者，法律上仍属有效”⁶¹。但在民国财政部门不断强调契税征收的背景下，这类判决的出现，不能不对民间以私契管业的做法产生影响，也使得官方产权凭证的权威性更加受到认可。

以各种水火兵灾等理由，报告契据丢失，要求官府给予执照或证明的案例，在整个民国时期都时有发生。在县知事兼理司法的时期，山产契约纠纷和诉讼案件的处理由县知事负责，执照的核发也是县知事职权范围。地方法院成立，行政和司法分离后，契约、产权诉讼和补发执照成为两个部门不同的事务。龙泉县法院收到“民国二十五年程应发因契据焚毁请备案”，据声请状，此处山产在民国五年、二十二年经历了两次诉讼，均“和解销案”。

“自此以后，该山由民照旧管业，相安无事，不意于民国二十三年十二月十八日，残匪窜境，当事出仓卒，只顾避身，各种营业证据，不及收集，全遭焚如。所幸该山契销号字据虽遭焚毁，然因该山曾发生纠葛，将原证据摄有照像二幅，兹为防患未然，保有业权起见，除请求县府颁给执照外，理合附具摄影抄白，请求准予备案，实为公便。”⁶²

在该案的当事人看来，县政府和法院的双重保证无疑是更可靠的。但法院拒绝了 this 请求：“状悉该民契据被毁，照章向县政府补给执照，所请备案，于法无据。”⁶³在地方行政和

60 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-8351，第70-74页。

61 郭卫编《大理院判决例全书》，成文出版社有限公司，1972年，第157页。

62 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-4148，第4-5页。

63 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-0418，第11页。

司法分离之后，验契、契约登记和执照的颁发由专门的行政部门负责，而由此形成的各类文书、凭证只有在诉讼中才作为证据出现在法院里。

但是，不论是在北洋还是民国时期，验契、登记的真实目的只在增加政府的财政收入，因此基本上并不对所涉山产进行查勘，甚至并未对所验契约中的山产进行登记，各类官颁执照在证明山产权利中的证据力，仍然备受质疑。

“民国四年杨明惠等与项夏祥盗砍盗葬案”中留有一张康熙二十九年的卖契，原为白契，诉讼中验契投税，上盖民国的“龙泉县知事印”及一分面额的“中华民国印花税”票。另有一张民国四年十二月的验契执照，该执照中写明查验费若干（不清）、注册费若干，“并将该契登入私有不动产册第 册第 页。”⁶⁴但册页数目空白未填，可能仅发放了验契执照而并未有登记。“民国十二年项祖适控蒋保藻山场纠葛案”，其中附有数份验契执照。这些验契执照都能与档案中的契约对应。这些被要求重新契税的契约，有清代“白契”，也有清代“红契”。这几件验契执照，不论对应契约交易所涉金额为多少，都只征收二角的登记费，而没有查验费。还有一些事例说明，验契手续在地方的执行是徒具形式的，颁发验契执照时，并未经过真正的查验手续，以至于一些获得“验契执照”的契约，在诉讼最后却被认定为伪契。“民国七年季仙护等控季盛荣等乘阅抢据案”，该案中的一件契约证据，是光绪二十八年季仁教出卖梨树岗契，粘有民国六年（1917）二月的补税执照和验契执照。但是在民国七年（1918）的诉讼中，却被披露说立契人季仁教在光绪二十一年（1895）就已经去世，这张契约是伪契，是季庆堂为争产专门伪造并到县署投税的。⁶⁵

不动产登记程序中也有同样的问题。按照民国元年（1912）的登记法令，只要将申请“榜示”一个月，如果没有人提出异议，登记处就可以为这些山产进行登记、发给证书。其间并没有现场勘验的程序。正如我们在前面几件申请登记和发给执照的案例中看到的，申请人和他们要求登记的山产都远在县城百里之外，山产利益的相关人很可能因为无法获得榜示信息而错失申辩时机，留下了很多隐患。在稍后的诉讼中也常常可以见到质疑这些登记以及官方执照有效性的案例。

“民国二十五年潘樟春诉杨嘉兴等请求确认山场案”，潘樟春诉状攻击被告谎称遗失契据、骗取政府执照谋产占山：

“去年赤匪蔓延各乡，而契纸被遭焚毁者，所在多有，其间亦不少心存恶意，乘机

64 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-4346，第7-8页。

65 该案见于《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-3140、M003-01-5585、M003-01-5611、M003-01-9971、M003-01-11130、M003-01-14622、M003-01-17284。

借题，希冀谋利益者，而政府不察，多被蒙蔽，动辄准予给照。虽有通告，无如乡下农民，多不识字，又罕至城中，错过时间，不知声明者，实繁有徒。本案被告藉口被匪劫毁，希图将民故父出当一小部分之山，作为清业管有，且复野心勃勃，进行并吞全部山场之谋，而呈请给照，而越界盗砍，咄咄逼人，侵略不已。”

但县知事的批词和最后法院的判决，均认为被告杨嘉兴报请登记执照的过程合法有效。“此项管业证经公告期满后，并无纠葛，当经照验契给，证备在案。”⁶⁶龙泉地方法院的判决理由如下：1、杨家契据遗失后，报请登记执照的过程合法有效。“查被告杨嘉兴家于民国二十四年六月间被赤匪掳掠财物，焚毁契据，呈报县政府，并由杨嘉兴等呈送申告表，复经县政府派员查明属实，公告，限期给发管业证书（见县政府杨嘉兴等请给执照卷宗）各有案，是被告契据被匪焚毁事实已属无疑。”⁶⁷2、被告分关书中有该争山地的记载。3、原告亲属为被告证明。4、原告所提供的证据，即一件民国二年的当契有瑕疵，执笔人的笔迹不符。这份档案透露了民国县政府在动乱之后为民众提供补办执照的程序，以稳定、重建山林产权秩序的做法。但在这一系列的程序中，只是依靠业主的申报和公示，并没有官方实地查勘的步骤。在进入诉讼程序后，法院的调查扩展到对其他相关契约证据的调取和证人的传讯，但县政府所颁发的执照仍然是最重要的证据。

概言之，尽管契税是明清时期的中国正式的法律制度，但在诉讼实践中山林的凭契管业，仍然为私契留有极大的空间。民国政府试图通过验契和登记而加强国家对确权的控制，但由于政府无法对呈请登记或声称遗失的契约进行调查核实，也无力对辖区内的所有契约进行检核，所以这一系列举措并不成功。不仅民国元年、二年的第一次登记法令的结果如此，此后的验契、不动产登记和发给执照等工作也都是如此。“运动式”的契税和验契要求，产生的效果，更多地是对地方山林产权秩序的扰动，山林契约在确定产权、定纷止争上的瑕疵和局限，并未因之而改变。

四、“鱼鳞山册”、官产承领与山林产权纠纷

与上述龙泉、遂昌等浙南山区依靠契约为主要山林产权凭证的情况不同，在清代山额即已占相当比重的地区，如严州府，大部分山林曾造有鱼鳞册图。但是保存于官府的清代鱼

66 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-3594，第39-40页。

67 《龙泉民国法院民刑档案卷（1912—1949）》，浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-3594，第158-166页。

鳞册图，在太平天国之乱中遭到破坏。到了晚清民国时期，田、地、山、塘的赋税、交易、推收，都是由乡村中的庄书册书所把持的。他们手中保存和编制的私册，成为私人契约之外，唯一的田地山林权属的证明档案。

1860-1861年，太平天国军队两次占领严州，人口大量损失、逃散。1865年戴盘任严州知府时，即开始大力招募各地棚民前来开荒。尽管他的《定严属垦荒章程并招棚民开垦记》，主要吸引棚民下山开垦田土，但显然很多棚民到了严州之后仍然是种山为业。他们对山产的占有并没有契约凭证。直到民国末年，他们中的很多人，还在为自己垦种的山林向政府申请管业凭证。建德县民国档案在民国三十六年至三十七年，有数件集体申请对已开荒山报请科粮并请求发给所有权状的卷宗。居住在麻车上庄陈村乡第十保的周土金等十九人在民国三十六年九月呈递申请，其中就说：

“民等原籍缙云，自祖手或父手迁居建德山中，垦辟荒山（在第二份申请中，他们称自己由温台处等属县迁来，垦植荒山七十余年）。至民国廿四、五年间均已成熟，现可栽植山木及各种杂粮，理合依照土地法第一百三十三条但书之规定，开列清册，报请钧府核准发给土地所有权状，并照章课税，以便完纳田赋。”

根据他们开列的山产清单，每人名下有二至六处山产，这些山多则四十余亩，少则一亩，均有土名、字号，可见在报请县田赋粮食管理处升科之前，应该已经在庄册那里有过登记。但是，在民国政府鼓励承领荒山的政策下，他们一直没有到官府申请。直到新土地法颁布，承认开垦者的所有权之后，才申请课税。后来该村又陆续有人报荒升科，县政府要求有乡公所和四邻和当地保长的证明。⁶⁸

在太平天国之乱后，除了上述一部分外来的棚民占有开垦了大量的山林之外，此后还经历了当地人回乡，收回或者霸占山林的过程。1949年之后的调查和档案中，经常谴责原来的地主通过伪造契约或绘制鱼鳞图册，占有山林的情况。如《建德县山鹤乡山林情况调查》：

“山鹤乡为山区，山林面积较多，在全乡土地中占有很大比重。……原先这些山地本是无主的，后为地主凭藉势力勾结旧官府强行霸占，特别是太平天国农民革命失败后，逃亡地主陆续归来，伪造假契来欺骗农民，或依仗恶势力诬指农民开垦的山地地权是他的，而

⁶⁸ 建德县档案馆藏，卷宗号 1815-20-237。

将这些土地从农民手中掠夺过去，再通过租佃形式来剥削农民。”⁶⁹

相邻的分水县王的秉融所主持的“清山”曾被作为典型批判。

“地主由对土地的兼并发展到对山林的霸占，有钱有势的人向官府“报粮认税”领取山林，有的则依靠势力“指山为界”，将大片“无主”的山林归并在自己私造的契约之内。如分水县蠡湖乡在一九一七年以前人口特别少，许多山林无主经营。一九一七年段祺瑞执政时，并勒令建立“清山局”，要群众领山认税。清山局多为地主豪绅所把持，该乡清山局即是本乡的满清拔贡王秉融任总董事，王曾任淳安县知事，其子王植民任清山局秘书，父子二人总揽大权，霸占了该乡四分之一的山林。”⁷⁰

今天我们仍然可以在档案馆中看到，王秉融这次清山所编订的大量鱼鳞山册。这些调查也证明了，在山林无主或者因战乱失去原有主人的状态下，人们怎样通过创造契约和鱼鳞册图，为山林确权、重建山林产权秩序的过程。

在上述背景下，围绕着民国年间的几次官产承领纠纷，我们可以借以分析这类地区的山林权属的证明方式的变迁。正如前文所述，晚清民国政府均鼓励开辟荒山造林，但是，由于此前国家并没有建立正式完整的林业产权档案，哪些山林属于“官荒”可以被承领，哪些是有主山林，其实并无统一可靠的官方记录。承领或承买“官荒”也就成为了民众占山的又一个战场。

民国十七年（1928），建德县东关统捐局的职员方梅庵以其兄弟的名义承领该县东乡杨家庄的一处“官荒山”。他在申请书中声称，自己早在民国七八年间就响应政府的号召，在这片山上开荒种植树木。这份申请经田赋征收主任的查勘、绘图、定价、山邻保证，上报至浙江省财政厅，财政厅重新定价并两次要求重新绘图后，在民国十七年九月八日颁发给承买执照。似乎产权由此而得以确定。但仅仅一年多之后，该处山产即发生了纠纷，方梅庵对蔡德松等人和杨家庄册书朱逊德提起呈诉，称“承买官山有照，被册书串同蔡姓私收强占”，“距近以土地陈报期内，发见该管庄册书朱某将前项山场四至内土名塘吼宿字第九百十号、九百一十一号、九百十二号、九百十三号，计四号；又土名火烧山宿字八百七十一号各山场，串通陈

⁶⁹ 华东军政委委员会土地改革委员会编：《浙江省农村调查》，《建德县山鹤乡山林情况调查》，第257页，

⁷⁰ 华东军政委委员会土地改革委员会编：《浙江省农村调查》，《天目山区农村情况》，第9页，1952年12月。

家街居民蔡德松倒填年月，付入蔡姓户摺，今蔡德松出头争占。”⁷¹

方梅庵这样指责册书的行为：

“从前民间报荒，必以逃亡绝户、废弃无粮之产为限，其手续亦当由报户呈县批令该坐落地册书前往查明，确为无主者，而后丈量绘图具复，钧府据以核准承垦升科。

自民三清理官产处机关成立，凡有民荒亦同官产，其处分则给以布照。前项报荒承粮之例，因抵触而废除。今册书朱于已卖官山重为处分，既不须呈候钧府之示，又毋庸报部请照之烦，直截令蔡姓承粮。所谓目无成案，处分自由，文墨之吏，权大若此，能不骇人。”⁷²

换言之，在清代报荒承粮获得山产的程序，虽然有经过册书查核、丈量、绘图的程序，但也必须报由政府，由政府批准升科。到了民国，“迨民三以后迄于今，兹凡无人承粮之产，国家为收入起见，一律划在官产范围，必须经过国家处分价卖给照，方可取得产权。”⁷³方梅庵指责册书私自将荒山给蔡姓承粮，即将官产化为私产。

但根据册书朱逊德的具呈，方梅庵拿着省财政厅给予的执照到他那里要求晰册时，他发现在执照中所开列四至内的山产，早已有人完粮。根据之前习惯，这些已经完粮纳税，在册书籍册中已有登记的田土山林，就是民有私产，而非官荒。

“缘杨家庄清理书向书故父承当，自民国十七年七月间父故，即由书接管。奉公守法至今无误。乃该民方仰宋前因省买得荒山，令书晰册，无如查得底册，该所买之山，按照来图四至实越出范围数倍。且均系有人完粮之产，无从再晰。内计汪守芝一户山八亩八分，完粮壹仟三分二厘，系民国九年间奉前知事张谕飭查明晰收；又陈凤林山七亩完粮一钱五厘；陈兆余山三十四亩，完粮五钱一分。是五十六年间，凭各户老册晰收。又蔡汝标山十七亩三分，完粮二钱六分；胡德富山二亩五分，完粮三分八厘，由该户出立认字认承开垦完粮，晰收过户。此种荒山，准民间认粮，虽未奉有明令，但建德各庄习惯，为顾全国课

⁷¹该案存于建德县档案馆，“建德县府办理方琦承买官产纠葛问卷”，卷宗号 1808-7-14。

⁷²“方琦为承买官山有照被册书串同蔡姓私收强占事呈请书”，“建德县府办理方琦承买官产纠葛问卷”，卷宗号 1808-7-14。

⁷³“方琦为补充简明意见仰祈鉴察施行事呈”，同上。

起见，照此办理者甚多。况前知事张任时，并因提倡森林，曾有面谕，准各书照办。书故父手内晰出似亦与违法飞洒者不同。”⁷⁴

方梅庵的指责和庄册书朱逊德的具呈，透露出在民国官产承买制度出现之前，地方山林产权确认的基本制度和实际运作的情况。在制度上，与荒田、荒地一样，人们获得荒山所有权，唯一的合法途径就是承粮纳税。首先，业主需要向县衙提出申请，县衙责成册书进行调查，如果为无主之山，即报告县衙，县衙出具执照，业主凭执照回到册书那里，登记入册，从此开始每年交纳税赋。在这个程序中，册书本来只是一个中间环节。但是由于赋税征收也由册书把持，这一制度在实践过程中，人们往往绕过县衙这一层级，直接在册书那里登记，即所谓册书的私推私收。晚清太平天国运动之后，浙江多地的官方册籍（主要是鱼鳞册）都被破坏，而赋税档案只存于各册书私家，这种私推私收的情况就更加普遍。正如朱逊德在具呈中所说：“此种荒山，准民间认粮，虽未奉有明令，但建德各庄习惯为顾全国课起见，照此办理者甚多。”它成为一种在国家制度之外的“习惯”。

方梅庵作为一名外来的地方公职人员，挑战当地庄册私推的“习惯”，他还有一个新的“武器”，即民国三年的《官产处分条例》。民国三年以后，以报荒承粮获得产权的制度，已经被新的官产承买制度所代替了。正如他在呈状中说的：“对于册书职权论，民三以后，清理官产条例未奉废除。凡遇荒山荒地只有官厅处分，毋再准民间报荒升科理，今册书为蔡陈等姓晰收，而时间又明注民十四年之后，此项晰收显属与条例抵触，当然根本取消。”⁷⁵

民国三年七月三十一日颁布的《官产处分条例》中，对官产的处分分为三种形式，一变卖、二租佃、三垦荒，并且在第十八条规定“以前私垦之官荒自本条例施行后应补缴荒价，照章升科。”换言之，报荒升科之前，需履行承买的环节，才能获得产权。这当然是重大的变化，但即便当时负责处理这一纠纷的建德县政府，恐怕也还并不领会这一点。在旧式观念中，持续地缴纳税粮才是保有产业的官方凭证。因此在讯问中，方梅庵被质问的最后一个问题，仍然是：“你买官产后承过粮吗？”方梅庵只能回答：“于今尚未承粮是实”。⁷⁶

蔡德松是这次纠纷中另一方的主要人物，他对自己山产权利的声称是这样的：

“曩时张知事提倡森林，民国七八年间发贴布告，无论官荒私荒，都准农民垦植森林。

至民国十四年由先父手晰收户册是实。溯民国八九年间，蒙前知事张以提倡森林为急务，

⁷⁴ “杨家庄清理书朱德逊为声明事呈”，同上。

⁷⁵ “方琦为再行呈明事清折”，同上。

⁷⁶ “民国十九年三月十四日讯问笔录”，同上。

明示煌煌，劝谕人民垦荒造林，因此益知注重林业，计全县四十余庄，凡开垦者无一律众多。森林发达，国课增加，早有明效。民故父见此情形，故于十四年间，敢将上述各号山场出立认字，向庄认垦，迄今完粮已阅五年之久，其取得之产权，自系遵从本邑惯例及官厅认可之办法，与其他私晰者不同。况各号按照鱼鳞册籍，均载明系民蔡姓祖业，燹后失管，今仍由原业主认明纳税，更属恪遵理法。⁷⁷

与方梅庵一样，他们都将民国七八年间县知事提倡整理荒山的布告，作为自己权利的来源。而且，同样他们也都声称自己早年已在开荒种植，却没有即时申请执照，将山晰入户册。所不同的是，蔡家在民国十四年由庄册私登入册，他声称这是当地的“习惯”；而方梅庵则在稍后依照官产条例的官方程序获得了执照。他们两方的争辩，典型地反映了人们分别利用旧的地方制度、习惯与新法律、观念进行竞争的过程。

在讯问记录里，其他林产占有人的回答也非常有趣，很直接地反映出当时普通的林业主对于林权来历的认识。其中一名叫陈顺桃的山主，当被问及“小坞的山你有多少税？”时，他回答说：“是民外婆家遗下的坟山，土名徐湾坞，计税五分，民家经管数十年了。”一名叫郑福培德山佃则说他是仙居人，在建德为他的娘舅照料这片山和几亩地，每年娘舅会派人来一次（收租？）。陈兆余则强调自己的山产“还是洪杨前管起，今呈上老册一本”。⁷⁸在他们的观念中，祖传的山产（尤其是坟山）；长期实际的占有和管理；以及承粮登记，仍然是证明林产权利的最重要的证据。

在这场纠纷中，只有外来人方梅庵利用了新的官方法律，并刻意回避了原来的地方习惯。在被问及承买时为什么没有到册书那里查询时，他说：“我们查不来的。”后来，他又在清摺里这样解释“查不来”的含义：

“无主之产，册书利在民间收付，于官卖非其所愿，盖一公一私绝不相容者也。承买官产而曰必先查庄册，是犹夺食于虎口，岂事可实之可能藉曰可矣。民间同一出钱，恐将乐于册书私人之拨付，又何事报官勘查缴价请照作种种麻烦之手续乎。”⁷⁹

同样，正如方梅庵在此指责的，之前册书私晰的所谓习惯，也不过是当地人们刻意规避国家制度的方法。不仅两位当事人在刻意回避与己不利的制度，我们也注意到，民国十七

⁷⁷ “蔡德松为陈述承粮造林经过请求察核排除侵害事呈”，同上。

⁷⁸ “民国十九年四月一日问讯笔录”，同上。

⁷⁹ “方琦为再行呈明事清折”，同上。

年方梅庵承买荒山的一系列程序中，负责的田赋征收主任和作为上级最终核审机关的浙江省财政厅，也都没有要求其向册书核实官荒。这种有意无意的对旧习惯和旧地方制度的漠视，与新政权对册书以及他们所代表的那一套在国家之外的旧体制的恶感有关，但也并无补于清理林业产权不清、混乱的状况。⁸⁰

制度变革初期，政府、册书和不同的人群之间围绕旧规旧习和新法律之间的纷争和纷乱无序，在之后慢慢得到了改善。民国二十五年（1936），建德林场森林学校同学会的12位成员提出承领杨家庄的另一块山林。县政府下令清理书（即前案中的册书朱德逊）详细查明这块山林的归属。根据之后的一系列档案，朱德逊以下乡催粮为由，迟迟未予回复。申请人自行清查一番，并将附近山林的字号、承粮情况具呈于县政府。这次承领申请，同样出现了与附近山主之间的纠纷，有一位叫做鲍吴氏的人出而声称，该处山产原属于她家所有。县政府即飭传朱德逊带同庄册及原图在规定时间内到府接受讯问⁸¹。朱德逊的讯问笔录记录如下：

问：你管的庄有田地山塘多少？

答：二千余亩山，田千七百余亩，塘四十余亩，地约二千亩，一共六百多元正税。历年没有很大进出。

问：你管的庄有无无税山地？

答：不甚清楚。

问：你管的庄册有无鱼鳞？

答：土地陈报时，造过新册。老鱼鳞已经不齐，所有推收根据他们的户册推收。

问：现征粮的山税，照老号还是照新号？

答：老号新号都有，在三爨地* 自一号至四十号均照新号，余照老号。

问：鲍吴氏的地土地陈报时曾否编过新号？

⁸⁰ 其实不仅林产如此，在缺乏准确全面的官方档案的前提下，官产承买的政策所造成的社会经济的混乱，不久就被政府所察觉，因此在不到两年后，即民国五年五月二十五日，即有《大总统申令》停止官产的变卖。“现在近畿清理官产，应以实在未垦官荒为限，其民间业经垦之田或漏未升科，或始系私垦，往往辗转售卖，承业之主屡易其人，耕辟之费十百原数，？以法例，则受罚者非原来冒垦？法之徒，相似者尤共存夺旧予新之虑。奉行不善，惊扰实多。”

⁸¹ 建德县吴锦荣等请领官荒造林卷，卷宗号 1808-7-61。

答：编过的。

问：鲍吴氏在吴锦荣等请领官荒内管有山地多少？

答：依照土名所在计算三爨，（苏州码）在龙门顶有十四亩，（苏州码）金鸡岩有二亩八分三厘，（苏州码）西坞殿二亩六分六厘六毛，（苏州码）毛竹里三亩三分三厘五毛。

问：吴锦荣等请领官荒地带有多少亩山？

答：除仰天坪、狮子岩已由福利公司承领，张家坟山、汪家坟山外，其余尚有二百余亩山。

问：此二百余亩内，除鲍吴氏外尚有民税多少？

答：陈立功在毛竹里尚有山三爨二千三百四十一号，土名牵绳石山四亩正，（苏州码）号山枣红山七亩，（苏州码）大岸山十四亩。⁸²

根据朱逊德的供词，他的手中存有的鱼鳞山册有新旧两种，但这并不是他所在的乡村中所有山林的档案，只有有主的山林才有鱼鳞的记录，而新报开垦的山，并无字号和确切的亩数。换言之，原来册书手中的山林记录，也是根据人们的开垦报税而逐步积累起来的。这个积累的过程在民国年间还在继续。只不过这时候，再承垦的山林，即便经查证原属无主荒山，其性质也属于“官荒”，即为国有。在这个民国末年的案例中，虽然政府本身还没有能力对山林进行全面的清丈、建立官方的山林档案，但是通过对原来册书的整编和控制，政府将产权确认的权力重新拿到了自己的手中，册书回到了中间人和执行者的角色上。

我们还注意到，在上述林产纠纷中，并没有契约出现。建德县政府在谕令传唤当事人时，要求册书朱逊德带同庄册，鲍吴氏、陈立功、陈秀松等“带同管业证据及最近三年粮串”候讯。其中的“管业证据”应该包含契约。但是，不管是试图通过新的官产承买制度而获得林产的方梅庵，还是以坟山、祖产、开垦有年或在册书那里已经登记等等理由，声称产权的人，他们都没有提出一张契约作为证据。这种情形也许是前述太平天国之乱后社会经济秩序重建的结果，但却为我们提供了一个难得的个案，即在以契约为重心的产权秩序之外的另一种情形。

⁸² 《建德县吴锦荣等请领官荒造林卷》，建德县档案馆藏，卷宗号 1808-7-61。

五、结语

如前所述，在清代没有山税粮额的浙南山区，直到民国，山林产权和经营秩序都是以私人间的契约为基础的。但各种有关契税和不动产登记的新法律的颁行、国家行政权力的拓展和深入、司法机构和制度的变化，也对山林的产权获得和管业，以及山林诉讼的处理方式发生了影响。同时，这些纠纷和诉讼也显示，以契约为主要手段而建立起来的山产权利秩序本身并不完善。契约的有效运作，不仅需要山区社会中的人们对契约的尊重，也需要人们对山林以及社会关系一定程度上的共识。山界，并非仅是一道确定不变的自然地理分界线，而是人们围绕着这些地理标志物以及记载历次管业的契据、查勘报告、判决书等等，建立起来的对山林的认识。这种认识永远是动态和变化的，在认识过程中充满了各方的解释、协商和斗争。同时，田土赋税档案也作为邻近山林产权的辅助性证明，在山林确权中发挥作用。

但是在清代以来山税粮额占很大比重的浙西严州府山区，由于鱼鳞山册的存在，这些山税档案成为主要的山林产权凭证。然而，由于庄书册手阶层的存在，最晚在清代中期以后山林的升科、登记和纳税、推割等，就由庄书册手所把持。经过太平天国的破坏，人们对山林产权的争夺也主要围绕着鱼鳞山册的再造而展开。官方册籍的破坏，进一步加大了庄书和他们手中的册籍的权威性。在民国政府开始推行官荒承领、承买的过程中，人们通过开荒升科，获得山林的所有权的办法被宣布无效。庄书册手所把持的山林产权授予和证明的地方旧习，与新政府之间发生了矛盾。这种矛盾通过试图投资林业的外来个人或新团体，与当地居民之间的林权纠纷表现出来。

在以往对明清代山林产权的研究中，学者们往往更多地强调契约和地方习惯的作用，即认为各种林业权利的来源、获得和保护是来自并仰赖于契约的。同时也承认“国家法律在这个法秩序体系中有保障社会稳定、肯定和维护民间规范并对民间规范进行调控改造的功能。”⁸³但是，如果放在一个长时段的角度来考察，要明了针对林业的产权和秩序的历史过程，那么我们需要考察在这种契约秩序的确立到底是怎样发生的？山林的最初开发与产权初步确立的机制是什么？在这个过程中，国家的森林制度、契税、赋税制度的变化所造成的影响？国家制度和法律怎样通过诉讼审判等活动参与了地方林业秩序的形成？等等。尤其是考虑到林产与田土之间的差异，不仅是在经营方式和出产周期上的不同，更重要的是在国家赋税体系中的不同（其中还包括地方制度的差异），林业领域的法秩序，以林业为主的山区社

⁸³ 梁聪《清代清水江下游村寨社会的契约规范与秩序——以文斗苗寨契约为中心的研究》，人民出版社，2008年，第257页。

会的历史，以及它们与国家体制之间的关系，还有更多探讨的空间。

进入到晚清民国时期，在面临山林的确权问题时，还有更复杂的、新的因素。民国时期林业国有化的趋势，不仅包括国家对无主官荒的确认和占有，同时也包括收回、强化和独占山林确权、证明的权力。国家政府权力的扩张，现代国家在契税、契约管理、山林丈量和登记、建立土地档案等方面不断进取，在创造一种新的国家与山区地方社会之间的关系。在此一过程中，原来以契约（私契）为主要确权凭证的方式、原来由庄书册手把持的、通过升科纳粮获得山林产权的方式，都遭遇了挑战。

第三部

科研成果論文

钱塘江流域上流の塢と開発

村松 弘一

1、はじめに

杭州の南から東シナ海へと流れ出る钱塘江流域の地図をながめると、河沿いに「○○塢」「××塢」という地名が多く見られることがわかる。この塢という名称は中国古代の漢代から見られるもので、のちに朝鮮半島にも伝わった。それは時代や場所によって、防塁を意味することもあるれば、水利施設を意味することもあり、また、地形を示すこともあった。本稿では钱塘江の上中流域の新安江・富春江の現地調査を踏まえつつ、「塢」の歴史の変遷について漢から明清時代までのスケールで概説し、钱塘江の開発と塢との関係を中心に読み解く準備をしたい。

2、钱塘江沿岸をめぐる一建徳市・梅城鎮・桐廬県・富陽市

2015年3月14日から17日にかけて钱塘江を建徳から杭州へと下る調査旅行をおこなった。3月14日には杭州から建徳に高速バスで移動した。15日には建徳からバスで梅城鎮に移動し、梅城鎮を踏査、16日には建徳から新安江・富春江・钱塘江沿いにバスで移動し、桐廬・富陽を踏査し、杭州へと戻り、17日に帰国した。ここでは建徳・梅城鎮・桐廬・富陽の前近代における集落の形成と開発について現地の調査と文献資料をもとに考察したい。

建徳市

建徳は、杭州西バスターミナルから高速バスに乗るとおよそ2時間で到着する距離にある。現在の建徳市はもともと白沙鎮と呼ばれる集落で、1960年になりこの白沙鎮に建徳市の政府が置かれた。歴史文献に見られる「建徳」は後述する梅城鎮のことで、現在の建徳市は建徳郷とは呼ばれていた行政区画の一部で白沙渡という渡し場がおかれた。現在でも、建徳市と南の寿昌鎮をつなぐ建徳大橋・白沙大橋・新安江大橋の三つの橋が新安江に架けられている。河幅が狭まる場所にある。水路から陸路へと主要な交通手段が移る過程で架橋しやすい河幅の白沙鎮が建徳市の中心になったのであろう。市の中心と言っても寂れた街である。なお、建徳から新安江を遡ると千島湖がある。この湖は1959年に新安江発電所を建設した時にできた。湖の周辺にはリゾートホテルが建設され、観光地開発も進んでいる。もともと、この湖の区画には淳安県と遂安県が存在していたが、現在は水中に沈んでいる。遂安県は『水経注』にもその地名が見られる古い商業都市である。新安江の上流は徽州へとつながり、新安商人の拠点となった。ここから杭州にまで至る新安江・钱塘江の水の道は新安商人の商業の道であった。

さて、杭州から建徳に至るバスのなかで、富春江鎮を過ぎて、建徳市内に入ったあたりから、右手に多くの小さな谷が見えた。なかには谷出口に堤防を築き、水をためる谷締め切り型のため池が見えた。地図を見ると、この地域の谷戸は塢もしくは坑と名付けられる場所が多い。建徳市内にもどり北部の塢を調査。劬坑塢（広興北路）・程周塢（健康路）・

白頭塢（政法路）の三カ所を確認したが、いずれも谷出口にあたる部分で、現在は谷に高層住宅が建てられている。建徳市内（白沙鎮）は新安江が寿昌河と合流し、北へ屈曲して流れる部分に泥砂が堆積し形成された狭隘な平地に建設されており、開発が進み、人口が増加するなかで、塢にも住宅が建設されたと考えられる。この塢の問題については後に検討を加えたい。



建徳市の南を流れる新安江



建徳市北の谷とため池



谷出口の農地



劭坑塢

梅城鎮

建徳市すなわち白沙鎮から東南へ 30 km、公共バスで 40 分のところに梅城鎮がある。ここが歴史文献で建徳と称される街になる。梅城鎮の南には新安江が西から東へとながれ、鎮の東で南から北へ流れる蘭溪水と合流し、富春江と名を変え、東北流する。

梅城鎮すなわち建徳県は三国時代の呉の孫権の黄武 4 年（225 年）に富春県を分けて設置された。北魏時代の『水経注』の記載には「浙江（新安江）は、また、東北に流れて、建徳県の南をすぎる。県の北には烏山がある。山の下には廟があり、廟は県の東七里にある。廟の渚には大きな石があり、高さは十丈、周りは五尺、水の流れは速く、深く、激しく、雲や雨になるほどである。浙江はまた東に流れて寿昌県（桐廬県の誤りか）の南をすぎる。建徳からここまでの八十里のなかには十二の瀬（水の流れの速いところ）があり、瀬はみな高く激しく、そこを旅するのは難しい¹⁾」とある。烏山とは鎮の北にある、現在は烏龍山と呼ばれる山である。現在の河道や河幅からみると、新安江は蘭溪水との合流後、河幅が

狭まり、流れは激しくなる。唐代には孟浩然がこの梅城鎮から新安江の風景を見て「建徳江に宿す」の詩を詠んだ²⁾。

梅城鎮は現在でも明清時代の街の構造がよく残されている。街の中心の南北に正大街があり、その南端は新安江公園に至り、定川門と城壁が復元され、河を望むことができる。河沿いに西へ行くと開元禪寺がある。梅城鎮内には正大街の東西にはそれぞれ西湖と東湖がある。西湖は唐の咸通年間に刺史の侯温によって開設された水利施設で、宋代に入り、靖康・景定の間、暴雨が発生し、烏龍山から洪水が流れ込み、湖が決壊し、涸れてしまった。明の嘉靖年間に修理した。万暦年間には来賢湖とも称された（明「重修西湖壩記」ほか）。両湖の資源は烏龍山から流れる水である。東湖の東南が梅城鎮東南部（現在の梅城汚水処理所）にあたり、その付近で蘭江が新安江に合流する。これ以降、新安江は富春江と名称を変える。そこから対岸に南塔が見える。この二つの河川が合流する地点は、調査の当日、小雨が降っており対岸がよく見えなかったこともあり、あたかも大きな湖を見ているかのような風景であった。合流点の南には南塔、北には北塔がそれぞれ山の上に建てられており、行き交う船のための灯台のような役割をしていた。



定川門



新安江・蘭溪水合流点付近



西湖



東湖

桐廬県

梅城鎮から富春江を下った場所にある桐廬県は西北から流れてくる分水江が富春江に合流する地点にあたる。桐廬県のバスターミナルは富春江の東岸の新開発区にあるが、もともとの県城は西岸にあった。東岸はやや開けた平地が広がるが、水上交通の要衝として、

富春江と分水江の合流点にあたる西岸に集落が形成された。桐廬県は漢代には富春県桐廬郷と呼ばれていたが、三国呉の黄武4年(225年)に富春県を分けて設置された。『水経注』の記載には「浙江また北に流れて新城県(現在の桐廬県)をすぎる。桐溪水がこれに注ぐ。桐溪水は呉興郡の潜県の北の天目山から出る。山は非常に高く急峻で、崖や嶺が並び立ち、西は峻澗に望んでいた。山の上には霜木があり、みなこれらは数百年の樹であり、これを翔鳳林と呼んだ。東面には瀑布があり、その水がおちて数畝の深い沼に注ぐ、その名を蛟龍池と言った。池の水は南に流れ県の西をすぎる、そのため県の西溪という。溪水はまた東南に流れて紫溪と合流する。紫溪水は県の西の百丈山つまり潜山から出る。山の水は東南に流れ、紫溪と名付けた。・・・紫溪はまた東南に流れ、白石山の北をながれる。山はたいへん急峻で、北は紫溪に臨んでいる。・・・紫溪は東南に流れ、桐廬県の東をすぎて桐溪となる。・・・桐廬溪はまた東北に流れ、新城県をすぎて浙江に入る³⁾」とある。この浙江は富春江、桐溪水は現在の分水江である。『水経注』の新城県が現在の桐廬県、桐廬県が現在の分水鎮にあたる。古名に桐溪、別名に天目溪などの名称を持つ分水江は、山間部を抜けて流れる急流である。浙江省臨安市から流れる天目溪、安徽省績溪県から流れる昌化溪などを水源とし、桐廬県内に入り、東南方向に流れ、印渚鎮、分水鎮、華浦鎮を流れ、桐廬県の東、桐君山の麓で富春江に入る。上流域は水害が多発したため、新中国建国後は分水江水庫が建設された。

水上交通の拠点として富春江と分水江の合流点に現在の桐廬県が建設されたのに対して、分水江上流の分水鎮(『水経注』に桐廬県とある集落)は淳安県へとつながる陸路の要衝であった。明代の徐宏祖『徐露客遊記』の西南遊記にも分水鎮付近を通過したことが記されている。自宅の江蘇省江陰県を出発した著者は船で無錫・蘇州を経て、余山・杭州を経て、徒歩とかごにのって陸行し、新城県の洞山で洞窟を探検、その後、南に下り、船に乗り、桐廬県を経て金華府城に至るというルートを通った。その途上、分水県から陸路で淳安に向かおうとしたが担ぎ手が逃亡してしまい、仕方がないので船で桐廬に出たという⁴⁾。翌日、徐宏祖は桐廬県から水路で建徳に入り、東関の宿屋に宿泊している。なお、『遊記』には内楮村塢・外楮村塢などの塢の地名も多く見える。



桐廬県を流れる富春江



分水江と富春江合流点

富陽市

桐廬県からさらに富春江を下ったところに富陽市がある。富陽はかつての富春のことで、

三国・呉の孫権の父である孫堅の出身地である。呉の黄武四年には富春県を治所として東安郡がおかれ、太守の全琮は山越（周辺の山地の異民族）の討伐を命じられた。東晋時代に富陽と改められた。『水経注』には「浙江また東北に流れて富陽県に入る、もとの富春である。晋代の皇后の名が春であったため、改めて富陽といった。東に流れて分れて湖浦となる。浙江また東北に流れて富春県の南をすぎる。・・・浙江また東北に流れて亭山西をすぎる。山の上に孫権の父の冢あり⁵」とある。

富陽は北に虎山、南に鹿山の二つの山に挟まれた新橋江・青云浦が西北から東南方向に流れる平野で、北渠・南渠と称される灌漑水路網も設置されており、平地での農地開発が進展していることがわかる。それは、漢代以来、富春が銭塘江一帯の開発の中心であったことと関係あるだろう。建徳・梅城鎮・桐廬は河川の合流・屈曲点に土砂が堆積して形成された小さな平地であり、水上交通の流通の拠点であったこととは異なると思われる。

鶴山公園から新沙という砂州が見え、この砂州の右と左に富春江が分離し、また、合流する。そののち、この河川は銭塘江となり杭州市内へと入ることとなる。



富陽市鶴山公園から望む富春江



新沙



北渠①



北渠②

以上、建徳市・梅城鎮・桐廬・富陽と銭塘江に沿った諸市県を踏査した所見をまとめた。梅城・桐廬については新安江・富春江の水上交通上の拠点であること、富陽は水上交通の拠点であるとともに、二つの山に挟まれた平地の農地開発もおこなわれた点がほかの都市とは異なると考えられる。

3、塢の履歴と銭塘江流域開発

これまで見てきた錢塘江流域の地図を見ると「○○塢」「××塢」の地名が多く見られる。試みに浙江省地図集（中国地図出版社、2008年）から塢の地名を抽出すると以下のような事例が見られる。総じて、山間部に位置し、河沿いにはほとんど見られないことが特徴と
言ってよい。

[建徳市—杭州市間の塢]

建徳市

<新安江北岸>

芹坑塢／劭坑塢／程周塢／白頭塢／西塢／蔣車塢／寺塢／朱畝塢／佑嶺塢／西塢／北塢／
法洪塢口／日晒塢／周家塢／白皮塢／小塢頭／烏豊塢／坑塢／清溪塢／余家塢／塔石塢／
羊毛塢／松源塢／桑梅塢／洪塢／金竹塢／大石塢／碧溪塢／姚塢／小塢崗頭／桃花塢／黄
家塢／羊毛塢／桃樹塢／韓家塢／大塢／

<新安江南岸>

灘頭塢／麒麟塢／高塘塢／黄嶺塢／十里塢口／毛塢里／黄金塢／黄塢／水塢坑／大塢／蔣
塢／航塢／下葉塢／楊塢／方塢里／樟宅塢／廟后塢／真塢／東塢／大刀塢／馬目塢／馬塢
／駱塢／鄭塢／西塢／上坑塢／劉塢／清塘塢／高塘塢／郎樹塢／上塘塢／黄婆塢／大塢山
／蔡塢／白岩塢／大畝塢／方塢／落塢／王皮塢／湯家塢／上徐塢／後塢／上七塢／横塢口
／七星塢／江南塢／

桐廬県

<富春江西岸>

皂金塢／童家塢／担石塢／河宅塢／張家塢／後生塢／和田塢／双塢口／汪家塢／葛師塢口
／大塢頭／杯坑塢／小塢／塘塢／双塢／倉包塢口／義塢口／智明塢／潘家塢／毛嶺塢
梅樹塢／上塢／高山塢／梓塢／干田塢／華樟塢／葛家塢／脈地塢／梓芳塢／下塢

<富春江東岸>

西塢里／彰塢／外蔣塢／大塢里／雷塢／天井塢／西下塢／梅樹塢／塢岩／
嚴陵塢／桐樹塢頭

富陽市

<富春江西岸>

東塢山／大塢口／高塢里／沈家塢／唐家塢／水塢／銅嶺塢／顔公塢／虎尾塢／西塢／塔塢
／尖山塢／賠銷塢／道士塢／大目塢／梨樹塢／鉄塢口／塢口／西塢坑／順塢里／水泡塢／
干塢浦／余家塢／遙高塢／陸家塢／株林塢

<富春江東岸>

鷄籠塢／觀塢／大塢底／蔡家塢／船塢山／青山塢／宬家塢／下盤塢／双溪塢／秦塢／上塢
／木塢／大岩塢／白石塢／北塢／野猫塢／楊家塢／后潘塢／瑶塢／諸佳塢／下塢／馬家塢
／鄭家塢／甌塢／烈塢／東村塢／范家塢／老山塢／趙村塢／上南塢／下南塢

杭州市

<錢塘江西岸>

龍塢／梅家塢／姚家塢／桐塢／外桐塢／東穆塢

この「塢」とはどのようなものなのだろうか。後漢代の『説文解字』（許慎著）では「塢」

の定義として「塙とは小さな障壁である。また、庫城ともいう（塙、小障也。一曰庫城也）」とあり、塙は障壁さらにはその障壁に囲まれた防塁を意味していた。紀元前一世紀の前漢代の居延新簡に塙長の文字が見られ、それは遂長、つまり烽遂の長と同じ意味と考えられる。烽遂も障壁に囲まれた防塁という語義を脱してはいない。後漢代に入ると伝世資料に塙の記載が盛んに見られるようになる。有名なものであると、後漢末期に実権を握った董卓が築いた郿塙（万歳塙）⁶、三国時代の諸葛亮が亡くなったと言われる郭氏塙⁷、西晋時代に洛陽に建設された石梁塙⁸などがある。漢代から三国、西晋代までの塙の事例は西北地域から黄河中流域にかけての地域に集中している。なかでも『後漢書』西羌伝や羌族の内地への侵入と関係する記載が多い⁹。羌はもともと青海省・甘肅省一帯に居住していたが、後漢中期以降、反乱を起こしたため、内地に徙民されていた。塙の語源はチベット語由来との説もあり、羌族とのかかわりが指摘されている¹⁰。後漢初期には羌族等の西北地域における障壁・防塁の字義を有していた塙が後漢中期の羌族内徙とともに、黄河中下流域にまで広がった可能性がある。前述の董卓も隴西の出身で、幼少期より羌族のなかで暮らしていた。後漢時代の塙は西域の障壁を発祥とし、羌族の反乱と内地への移民によって、黄河下流域へと広がった。後漢末から三国期に入ると、濡須塙¹¹など呉の領域内の長江中流域にも塙の記載がみられるようになる。西晋の永嘉の乱以降には「塙主」という語が多くみられるようになる。塙主とは戦乱のなかで組成された自衛移動集団を率いる人物を示す。この移動集団の拠点（砦）が塙ということになる。「村塙」とも称される集落形態は漢代の固定化した行政区画から魏晋期の人々の移動と流動的な社会を示す特徴と言える。西晋から東晋・元帝期までの塙主の事例は黄河下流域に集中している。例えば、李矩という人物は、自らの居住していた郷の人々から愛され、推されて塙主となり、その後、郷人を率いて東の滎陽に駐屯し、さらに新鄭へと移っている¹²。塙主とは固定された障壁としての塙の主という意味だけではなく、移動性を持った集団の首長的の意味も持つことになった。その後の、五胡十六国時代から南北朝時代にかけては、洛陽や黄河下流域に要塞としての塙の事例が多く見られた。このように塙とはほとんどが防塁・砦および塙主の事例であるが、数は4例と少ないながらも、水利施設を示す「塙」というものが見られる¹³。

①『文選』卷三十、沈休文「三月三日率爾成篇一首」李善注引『廣雅』

堰、潜堰也、謂潜築土以壅水也、一作塙、音竭。塙、烏古切。堰、一建切。然三字義同而音則異也。

（堰は潜堰である。潜とは土を築いて水を壅めることを謂う。また塙とし、音は竭である。塙は烏と古の反切である。堰は一と建の反切。よってこの三字の意味は同じであるが音は異なる。）

三国魏の張揖が編纂した『廣雅』（『文選』卷三十注引）の記載で、堤防によって水を堰き止める水利施設を示す「堰」・「塙」と同義の語として「塙」があることから、この「塙」も「堰」・「塙」の機能を有する水利施設と判断できる。

②『文選』卷三十、沈休文「三月三日率爾成篇一首」李善注引『朱超石與兄書』

千金堤旧堰穀水、魏時更脩、謂之千金塙。

（千金堤はもとは穀水を堰き止めたもので、魏の時にあらためて修築した、これを千金塙と謂う）

南朝・宋の人であった朱超石が兄の朱齡石に送った書の一部分の記載。洛陽付近の穀水

を堰き止める水利施設である千金堤が魏の時に修造され、千金塙と呼ばれるとある。このことから、ここでも「堤」や「堰」と「塙」が同義であったことがうかがえる。なお、『水経注』穀水注には「千金塙」とある。

③『晋書』束皙伝

荆・揚・兗・豫、汗泥之土、渠塙之宜、必多此類、最是不待天時而豊年可獲者也。

(荆・揚・兗・豫は汗泥の土で、渠・塙によって、必ずこの類のものが多ければ、最も天の時にたよらずとも豊年となり収穫できる。)

長江中下流の荆・揚と黄河中下流の兗・豫の土壌は「汗泥之土」で、「渠」「塙」によって天の時を待たずして豊年となり収穫をうることができる。水利施設としての「渠」と並列して「塙」があることからここでも塙は水利施設、特に「渠」という用水路と対応する貯水池として挙げられていると考えられる。

④梁武帝「子夜四時歌」『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩卷一

花塙蝶双飛、柳堤鳥百舌。

(花塙に蝶がならんで飛び、柳堤の鳥は百舌)

一般的にこの塙は唐代の塙のような「くぼみ」を示すとされているが、「塙」と「堤」が並列に述べられていることから、「堤」と同義のとも考えられなくもない。つまり、くぼみのまわりの高くなっている部分、すなわち「堤」の義、さらには堤防を含む水利施設の可能性を考えたい。

以上、このように、魏晉南朝にかけて、「塙」を「堰」「塙」「堤」といった溜め池型の水利施設と同義と見なし、渠とともに水利施設のひとつとしてとりあげられたものがあつた。水利施設としての「塙」の存在を確認することができるのである。時期は三世紀の三国・魏から六世紀前半の梁までの間。地域は①は不明、②の千金堰は洛陽にあるが、史料は南朝宋の朱超石が記したものであり、南朝人の塙の解釈が書かれていると見ることもできる。③は淮北平原の兗・豫も含むが長江中下流域の荊州・揚州を含む。④は南朝梁である。このように見てみると、水利施設の「塙」は長江中下流域、南朝の人々とのかかわりが見えてくる。

この水利施設としての塙は朝鮮半島へと伝わってゆく。大邱で発見された「戊戌塙作碑」(慶北大学校博物館所蔵、五七八年もしくは六三八年)には「高口塙」と称される広さが二十歩(四十一m)、高さが五歩四尺(十一m)、長さが五十歩(一〇四m)の規模のため池(ダム)の造築について記載があり、三一人もの人々が工事に参加し十三日間で完工したという。また、慶尚北道の永川の菁堤「丙辰築堤銘」(五三六年)には「大塙」とあり、堤防もしくは堤防によって堰止められた貯水池全体を示す。これらは六世紀前半には存在していた。おそらくは、水利施設としての「塙」の名称は、ため池建設の技術とともに五世紀から六世紀にかけて中国大陸の長江流域から朝鮮半島へと伝わったと考えられる。

では、その後、中国大陸における水利施設としての塙はどうなったのか。北田英人氏の研究によれば、唐宋時代になると、江南においても、その開発において「塙」が盛んにつくられた。この塙は、それ以前の障壁の意味ではなく、景観として一望に把握できるような小谷、中がくぼみ四周が高いもの、四周の一部が開けた谷のような地形の名称を塙と呼んだ。江南の太湖周辺は、宋元期には低地に塘路や囿田が築かれ稲作が盛んにおこなわれた。それに対して西部と南部には山地が存在し、その小谷が塙であった。このような地形

は漢代までは現地では「阿」「山阿」とよばれ、六朝期以降は「阿」にかわり「塢」が日常的に用いられるようになり、宋代以降は「灣」と呼ばれるものが多くなったという。この江南の塢は山地の定住拠点であるとともに、山地開発の拠点であった。谷の底部の低地は谷およびその周辺からの水を利用した稲作がおこなわれ、谷の奥部は山の産物すなわち竹木・果樹が採集され、両者が地域の経済を支えていたという¹⁴。

つまり、太湖周辺では、塢は谷間の地形、そこから集落を意味するようになった。現在の錢塘江流域の塢もほぼ同じ地形を示すと言ってよい。太湖周辺には広大な平野が存在し、平野開発と並行して塢を拠点とした山地開発が進展した。新安江・富春江流域にはほとんど平地開発をするべき平野が存在しない。建徳・梅城・桐廬は丘陵部が河岸にまで迫っており、河川沿いの小さな谷間に塢が形成された。それに対して、二つの山に挟まれた平野に建設された富陽では、灌漑水路が整備され、平地開発が進んだ。この平野をめぐるようにある山地の谷間には塢が存在している。さらに、桐廬県の分水鎮は、富春江から離れた山間部に位置し、該所を流れる分水江（かつての桐溪水）の支流沿いの小さな谷間に塢が存在する。このように、錢塘江では太湖とはまた異なる地理条件で塢が存在していた。

では、錢塘江の塢も地形を示すだけのものではあったのだろうか。水利施設としての語義はなくなってしまったのだろうか。いくつか明清時代の地方誌からヒントを探したい。現代の地図に見られる塢の地名の多さに対して、地方誌史料に掲載されている塢が少ないことには驚かされる。

まず、淳祐『臨安志』（宋元方志叢刊）の卷九「諸塢」の項目には、「掃帚塢・楊梅塢・錦塢・葛塢・楓木塢・水竹塢・青枝塢・靈石塢・真珠塢・石人塢・龍駒塢・法華塢・木塢」があり、多くが西溪や玉泉後山など山間部の地名である。康熙増修『臨安県志』（稀見中国地方志匯刊）卷一與地には「郜溪堰・灌郜塢田」「上下堰灌西墅塢田」「廟塘堰 灌下塘塢田」「青桐灣塘 灌蘇塢田」とあり、また、「孫家塢塘」「蝦臺塢塘」「化同塢塘」との記述もある。「堰」はため池の堰、塘はため池を示す。郜溪堰の水は郜塢の田を灌漑することを意味する。○塢は谷間の地名、○塢田は○塢の谷間の田、その田は谷出口に建設された堰・塘からの供水で灌漑をしている。また、康熙『新修 壽昌県志』（稀見中国地方志叢刊）卷1の水利の「塘」の項目のなかには、「下塢塘・何塢塘・梭塢塘・邵慈塢塘・葉塢塘・葉塢塘・馱塢塘・方塢塘・王塢塘・牛崗塢塘・金竹塢塘・東塢下塘・塢塘・葉塢塘・後塢塘・東塢下塘・梅塢塘・原塢塘・葉塢塘・張塢塘・大塢塘」とある。ここでも○塢+塘という形式で、○塢は谷間の地形、塘は○塢に建設されたため池を示す。これらの事例は、谷間の地名の塢が水利施設の塘と密接な関係にあることを示している。

谷の底部における稲作には自ずと谷につらなる山間部の泉や河川の水を利用することとなり、「×塢田」「×塢塘」という表現で集落としての塢のなかの塘や堰からの水を利用した田がみられる。しかしながら、いずれも、「塢」単独で水利施設を示すような事例は見られない。

以上、新安江・富春江流域の都市の实地調査を通じて、注目した塢についての、古代から明清期の史料を概観しつつ、まとめた。明清期の塢は谷間の地形・集落名を示すものがほとんどであったが、その谷間の農地開発には堰や塘といった水利施設は不可欠であり、塢の形成を時系列的にまとめることができれば、錢塘江の開発の展開を新たな視点から議

論することが可能であると考えている。

- 1 「浙江又東北逕建德縣南。縣北有烏山、山下有廟、廟在縣東七里。廟渚有大石、高十丈、五尺圍、水瀨睿激而能致雲雨。浙江又東逕壽昌縣南、自建德至此八十里中、有十二瀨、瀨皆峻嶮、行旅所難」『水經注』漸江水注
- 2 孟浩然『宿建德江』「移舟泊烟渚／日暮客愁新／野曠天低樹／江清月近人」（舟を移して煙渚に泊まれば／日暮れて客愁新たなり／野は曠く天は樹に低たれ／江は清く月は人に近し）
- 3 浙江又北逕新城縣、桐溪水注之、水出吳興郡于潛縣北天目山。山極高峻、崖嶺竦疊、西臨峻澗。山上有霜木、皆是數百年樹、謂之翔鳳林。東面有瀑布、下注數畝深沼、名曰蛟龍池。池水南流逕縣西、為縣之西溪。溪水又東南與紫溪合、水出縣西百丈山、即潛山也。山水東南流、名為紫溪……紫溪又東南流逕白石山之陰。山甚峻極、北臨紫溪……紫溪東南流、逕桐廬縣東為桐溪。……桐廬溪又東北逕新城縣入浙江。」『水經注』漸江水注
- 4 「(十月五日) 船で川を下り、東南に十里進むと、嚴州府の分水嶺(桐廬縣分水鎮)である。縣城は川の西岸にある。分水嶺の地は、川は東南に流れる一水があるのみである。縣城の西は山が開けてはいるものの、陸路だけであり、八十里で淳安縣(淳安縣)に達する。私は、はじめはこの道をたどろうと思っていたのだが、召使い(担夫)の王が逃げてしまったため、陸行は不便である。そこでやむなく水行を選び、逆の方向の東南へと進む。分水嶺を東南に二十里で頭鋪(畢浦)である。また十里で、桐廬縣の焦山である。店舗や市場が賑やかである。已に日が暮れたが、食材を買うことができない。そこで水主の残りを借り、飯を炊く。水主は流れに沿って夜も櫂をこぐ。五十里で桐廬縣城の旧縣(桐廬市内)に達する。夜も半ばを過ぎていた。」(薄井俊二『徐霞客遊記』訳注稿 西南遊記篇(其一))『埼玉大学紀要 教育学部』61-2、2012年より転載)
- 5 「浙江又東北入富陽縣、故富春也。晉后名春、改曰富陽也。東分為湖浦。浙江又東北逕富春縣南。……浙江又東北逕亭山西、山上有孫權父冢」『水經注』漸江水注。
- 6 「又築塢於鄆、高厚七丈、号曰「萬歲塢。」」『後漢書』董卓伝
- 7 「(諸葛)亮卒于郭氏塢。」『三国志』蜀・諸葛亮伝注引『漢晉春秋』
- 8 「及洛陽陷、屯于洛北石梁塢、撫養遺衆、漸修軍器。」『晋書』魏浚伝
- 9 『後漢書』西羌伝には「詔魏郡・趙國・常山・中山繕作塢候六百一十六所」、「元初元年春、遣兵屯河内、通谷衝要三十三所、皆作塢壁、設鳴鼓。」、「(任尚)築馮翊北界候塢五百所」とあるように、魏郡・趙國・常山・中山・河内・馮翊と黄河中下流域に数百の塢が建設されたことが書かれている。
- 10 那波利貞「塢主攷」『人文学報』二-四、一九四二年。
- 11 「城石頭、改秣陵為建業。聞曹公将来侵、作濡須塢」『三国志』呉・孫權伝
- 12 「(李)矩素為鄉人所愛、乃推為塢主、東屯滎陽、後移新鄭。」『晋書』李矩伝
- 13 村松弘一「塢から見る東アジア海文明と水利技術」『東アジア海文明の歴史と環境』、東方書店、2013年。のち『中国古代環境史の研究』汲古書院、2016所収)
- 14 北田英人「中国太湖周辺の『塢』と定住」(『史朋』17号、1984年)および同「宋元江南デルタの灌漑農業と塢の産業」(『日中文化研究』14号、1999年)ほか参照

晚明浙江山區的畝民起事與官府應變

唐立宗

前言

浙江是明代中國的東南重地，無論是文教發展、農工生產乃至財賦稅收，都有相當突出的表現。但在文風鼎盛、富裕繁華的外觀下，特別是自明代中葉以降，也有許多暴力型態的經濟活動，是以不斷動用武力、強制壓迫，或是掠奪方式進行財富累積，小民、豪紳競相參與，難以遏止。其中，關於明代浙江沿海的倭亂問題，現今已有大量的相關文獻與研究著述，相較之下，山區活動的研究則多集中於葉宗留(1404-1448)領導的礦工抗爭，並被標示為「農民起義」的性質。¹

到了晚明，浙江山區聚集一群來自閩汀的移民，他們主要是租山或受雇於從事藍靛的種植與加工業，也有的是進行種麻、植杉、燒炭、造紙等山區開發產業，時而因市場需求改變經營生產方式，亦常因細故激起衝突糾紛，同樣是值得關注研究的課題。²山區礦徒、畝民勢力相繼崛起於全國重要的經濟、文化

¹ 相關討論可參見唐立宗，〈明初浙江礦盜事件與善後措施〉，收入中國明史學會等編，《第十四屆明史國際學術研討會論文集》(昆明：雲南人民出版社，2013)，頁184-187。

² 參見傅衣凌，〈明清之際的“奴變”和佃農解放運動〉，收入《明清農村社會經濟》(北京：生活·讀書·新知三聯書店，1961)，頁68-153；傅衣凌，〈關於中國資本主義萌芽的若干問題的商榷——附論中國封建社會長期停滯的原因〉(1961)，後收入《明清社會經濟史論文集》(北京：中華書局，2008)，頁1-15。關於明清閩浙山區開發，還可參考森田明，〈明末清代的「棚民」について〉，《人文研究》，28-9(1976)，頁1-38。Stephen C. Averill, “The Shed People and the Opening of the Yangzi Highlands,” *Modern China*, 9:1 (Jan., 1983), pp. 84-126; Sow-Theng Leong, *Migration and Ethnicity in Chinese History: Hakkas, Pengmin, and Their Neighbors* (Stanford, Calif.: Stanford University Press, 1997). 曹樹基，〈清代前期浙江山區的客家移民〉，《客家學研究》，第4輯(1997)，頁1-13；劉秀生，〈清代閩浙贛皖的棚民經濟〉，《中國社會經濟史研究》，1998年第1期，頁

周遭地帶，引起有關當局的高度重視，欲傾全力去圍堵防範，是以本文將焦點集中在彼時浙江山區的種靛菁民活動，探究官方的因應作法。

一、異地而來的靛民

至明末，因海外白銀大量流入、礦場開採殆盡與「防礦」體系的建立，入山開礦風險驟增，在浙江活動的礦徒人數已大為下降。³可是另一個影響地方社會的問題，就是此時另有大批的移民進入閩浙贛邊山區發展，如衢州府常山縣，隨著礦徒事件落幕後，人口流失，田土荒蕪，「閩中流民，羣來開墾，得利旋去，歲賦多逋，中有奸民，萑苻為崇」。⁴閩北壽寧縣「山無曠土，近得種苧之利」，因而前往浙江南部，「走龍泉、慶元、雲和之境如鶩」。⁵以至處州府龍泉縣已是「土著鮮少」，居住者多是來自福建、江西等地的客民。⁶

來到山區開發者，主要是從事種藍、種杉、種蕨、種蔗等農業經濟作物的生產，亦有投入燒炭、造紙、冶鐵等手工業生產者，他們搭棚暫居，遠離原鄉，即所謂的「棚民」。其中，藍靛主要是以大菁植物提煉而成的，又稱靛青，種植

53-60；徐曉望·《明清東南山區社會經濟轉型——以閩浙贛邊為中心》(北京：中國文史出版社·2014)。

³ 明代浙江曾為防禦礦徒起事而增設專職的鎮戍武官，建立都司或守備編制下的「防礦」軍事體系。參見唐立宗·〈明代浙江總捕都司與防礦兵力小考〉·收入中國明史學會等編·《第十五屆明史國際學術研討會暨第五屆戚繼光國際學術研討會論文集》(煙台：黃海數字出版社·2015)·頁 86-93·〈明代中後期浙江山區礦亂事件與軍事鎮戍體系演變——以總捕都司為對象的考察〉·《南嶺歷史地理研究》·第 2 輯(2017 年待刊)。

⁴ [天啟]《衢州府志》(《中國方志叢書》華中浙江 582)·〈常山縣治圖六〉·頁 102。

⁵ [崇禎]《壽寧待誌》(福州：福建人民出版社·1983)·卷上·〈風俗〉·頁 47。

⁶ [順治]《龍泉縣志》(《稀見中國地方志彙刊》第 19 冊)·〈序〉·頁 1159。

獲利甚豐，「每年於二三月間，下子佈種，疏削成林，取汁成靛，獲其價值，數倍於穀麥」。⁷浙江本地生產的藍靛不只能染藍，還可加工成各類顏色。⁸受到棉紡、絲織業的蓬勃發展影響，明代染布業相當的興盛，製作染布原料的藍靛物種更是炙手可熱。

明清浙江有不少藍靛品種與種植的紀錄，根據現有的史料，明代中期浙江台州已開始引進藍靛作物，〔嘉靖〕《太平縣志》即稱：「近自汀得種，然終不似汀之宜染。」⁹反映當地的新靛種是來自於福建汀州。浙江處州舊稱括州，明清時期鄰省的福建人常來墾山種靛，因此「閩之關山而靛者，於括最多」。¹⁰但是，並非每一本地方志都會詳盡紀錄當地的農產品，例如〔康熙〕《遂昌縣志》在〈食貨志·物產〉中就開宗明義表示是「志珍異者」，故藍靛物產並未列名。¹¹

藍靛產業獲利雖高，可是種植經營與產銷仍須投入相當的資金，高成本已非一般小民、地主所能負擔。在明末浙江山區經濟農作物的生產關係上，主要的勞動力是來自福建汀州府上杭等地的貧民，其中有一大部分還跟畬族群體有

⁷〔乾隆〕《海鹽縣續圖經》（臺北故宮博物院圖書文獻館藏乾隆十三年刊本），卷1，〈方域篇·風土記〉，頁5a。

⁸如〔康熙〕《義烏縣志》有云：「菘藍可為澱，蓼藍可染碧，紅藍即款冬花，可染紅。」〔康熙〕《新修東陽縣志》則稱：「尖葉名蓼兒青，不甚佳；圓葉者馬蹄靛，每家皆種，至冬間發之，以染絲布，色可深碧。或不自用，則以買錢，無棄者。」以上參見〔康熙〕《義烏縣志》（《復旦大學圖書館藏稀見方志叢刊》第15冊），卷8，〈利病志·土物·草之屬〉，頁527；〔康熙〕《新修東陽縣志》（臺北故宮博物院圖書文獻館藏清康熙二十年刊本），卷3，〈職方志·物產·草之屬·靛青〉，頁19a。

⁹〔嘉靖〕《太平縣志》（《天一閣藏明代方志選刊》17），卷3，〈食貨志·貨之類·藍靛〉，頁13b。

¹⁰〔清〕侯杲，〈勝蓬菴碑〉，收入〔順治〕《宣平縣志》（《稀見中國地方志叢刊》第19冊），卷8，〈禋祀志·菴〉，頁384。

¹¹〔康熙〕《遂昌縣志》（《中國地方志集成》浙江府縣志輯68），卷2，〈食貨志·物產〉，頁71。

關，「蓋浙東多山，惟汀之畚民，能力耕火耨」。¹²「畚民」每年數百為群，「藝藍為生，遍至各邑結寮而居」，這些種藍種菁者又被稱為「菁民」，由於身無分文，「赤手至各邑」，只能受雇勞動。出資租山的富商「披寮蓬以待菁民之至」，則稱作「寮主」，提供種子農具，使之耕鋤，進而征租。至於當地的地主，是「土著有山之人」，號稱「山主」，將山地租給「寮主」去經營。¹³

這和閩北山地種苧麻的生產關係頗類似，即「富者買山，貧者為傭，中人則自力其地」。¹⁴買山者又是具有相當財力的閩商，我們再透過一則案例來梳理種靛菁民與出資閩商的關係：

據衢營守備潘起龍、把總葛邦熙報稱：奉令剿捕，賊即聞(風)，復遁松(陽)、龍(泉)山源。職奉方略商確……四路捕緝，生擒窩犯陳大謙，向與靛賊華重吾、華光宇父子交厚，將贓物寄頓大謙之家，復付楊一冲挑回賊巢，交還重吾，留在一冲舖內，為應捕捉。獲起竹籠二隻，內有紬十八疋、鞋十四雙，又搜獲所致賊首李輝宇、耀宇、之字[宇?]等因。又獲(遂昌縣)門陣靛賊吳冲宇、華廷升、公同亭，九保正、虞邦仁等，至陳大謙家起出靛青七十五簍，床頭藏有利斧一把，閩竹籠內藏有牙梳一副、花斑布一疋、紅幔鬚頭一副、綾包頭二個，相應一併解奪等因。¹⁵

¹² [明]熊人霖，《南榮集·文選》(日本國立公文書館藏明崇禎十六年刊本)，卷11，〈芑田草序〉，頁24b。

¹³ [明]熊人霖，《南榮集·文選》，卷12，〈防菁議上〉，頁37b；〈防菁議下〉，頁39b。

¹⁴ [崇禎]《壽寧待詒》，卷上，〈風俗〉，頁48。

¹⁵ 〈內有「又據金衢兵巡道夏尚綱呈」殘件〉，「崇禎十四年」，收入《明清史料》，辛編第七本(臺北：中央研究院歷史語言研究所，1962)，頁653a。

受雇靛民所採收製作的靛青，即存放於窩主陳大謙家中，有其依附關係，雙方自然往來密切，而楊一冲的店鋪很可能為經辦米穀麻靛等商品買賣，或是相關借貸業務，甚至經手所謂「贓物」的交易處理。從窩主陳大謙家中擁有的「閩竹籠」器具，似乎也能反映其身分背景。

福建靛商在福建、浙江、江西各地都相當活躍，亦有史料記錄明末一名福建靛商岳鴻，為了「業價，往來於群靛之山家」。¹⁶這是因為閩商的地緣與業緣雙重身份，較易掌握靛種、技術和人力資源，故能在經營上大放異彩。清初杭州人王暉(1636-1715)曾提到一位福建靛商軼事：

閩中邱則飛以賣靛為業，遊於山水之間，喜吟詠。集成，求雲間張洮侯作序。過虔州關，以詩謁樞使者。見張序，云：「詩能張洮侯作序，豈尋常商賈耶！」輒免其稅。¹⁷

顯示這位靛商經營有術，累積充足的資金，賦閒時優游山水，進而以詩文結交名士張彥之(字洮侯，1611?-?)，讓人為之側目，運銷商貨更加暢行無阻。福建客商在各地獲利，收益比地主還高，以致時人批評：「至於一切百工之業，俱為異郡寄民所專，尤見鈍絀，靛、苧諸利，歸之閩人。」¹⁸當時也有人開始擔心說：「浙之山海，閩人居十之二三，食於浙而蠹浙，尙未知彼終耳。」¹⁹

¹⁶ [清] 侯杲·〈勝蓮菴碑〉·收入〔順治〕《宣平縣志》·卷8·〈禋祀志·菴〉·頁384。

¹⁷ [清] 王暉·陳大康校點·《今世說》(上海：上海古籍出版社，2012)·卷6·〈企羨〉·頁198。

¹⁸ [順治]《宣平縣志》·卷1·〈輿地志·風俗〉·頁279。

¹⁹ [明] 蔣鳴玉·《政餘筆錄》(《續修四庫全書》子部1134)·卷3·頁247。

二、土客衝突的加劇

崇禎初年(1628)，「閩人來浙東諸郡，種靛、麻、蔗者，布滿山谷，久之與土人為仇」。²⁰仇恨的產生，部分是出自「山主取息太刻，每激菁民走險」。²¹土著居民亦常將外來移民視作眼中釘，像是當時在湯溪縣境，「閩漳人植青靛其中，盡多富饒，願婚巨族」，但邑人不齒，回絕親事。²²所以當「閩人種靛種麻，僑居有年」，一被煽動，就容易激發事變。²³

在當地的種植藍靛者，有些是「春來冬去，或留過冬」，是屬於季節性的移民。²⁴[康熙]《新修東陽縣志》稱明末時：「每當冬春之交，來者熙熙，往者攘攘，不啻數千餘人，其遷居著籍者，又不勝數也。」²⁵當地人口流移增多複雜，土客磨擦衝突實難避免。況且山區地形險峻，官方統治管理困難，處州界於衢州、金華，及鄰省的閩北建寧、江西廣信等山地，「恆為逋逃淵藪」，因此「閩之流人種藍藝麥於中者，日以益眾，主客不相安，則聚而為盜，四方亡命附麗之至數千人」。²⁶

至崇禎十一年(1638)，汀州人丘凌霄父子因與金華人陳海九有隙，「勾海賊，

²⁰ [康熙]《遂昌縣志》，卷 6，〈兵戎志·武功〉，頁 145。

²¹ [明]熊人霖，《南榮集·文選》，卷 12，〈防菁議下〉，頁 40a。

²² [道光]《元和唯亭志》(《中國地方志集成》鄉鎮志專輯 7)，卷 13，〈人物·盛王贊〉，頁 180。

²³ 〈兵科抄出浙江巡撫熊奮渭殘題本〉，「崇禎十二年正月初一日」，收入《明清史料》，癸編第二本(臺北：中央研究院歷史語言研究所，1975)，頁 152b-153a。

²⁴ [明]熊人霖，《南榮集·文選》，卷 12，〈防菁議下〉，頁 39b。

²⁵ [康熙]《新修東陽縣志》，卷 4，〈職方志·風俗〉，頁 20a-b。

²⁶ [明]陳子龍著，王英志輯校，《陳忠裕公全集》，卷 31〈陳子龍年譜卷中〉，收入《陳子龍全集》(北京：人民文學出版社，2011)，頁 953。

稱兵作亂」，他們自金華起事，亂事蔓延到處州府遂昌縣等地。²⁷特別是浦江縣的「靛賊震隣，谿谷塵起」。²⁸湯溪縣「靛寇竊發，眾號萬人，焚掠山澤」。²⁹號萬人或有誇張之嫌，但當時所謂「勾海賊」的說法並非毫無根據，因為官員的奏疏就指出「海賊入之，乘機煽動」，並於該年七月間「糾集劫掠金華湯溪地方」。³⁰這或也突顯地方產銷體系實已結合山運與海販，客商網絡互動密切，進而相約起事。

土客關係的緊張，其所衍生出的動亂問題，大致上受到以下幾項因素相互牽動而加劇。首先，是地方荒歉造成的影響。崇禎九年(1636)，浙江全境出現嚴重的旱災，糧食作物顆粒無收，遑論賦稅納糧。浙東地區，「剡、台大旱，草根木皮食盡，而屑土以繼」。³¹義烏、東陽、浦江等地的百姓亦搶地上泥土，「以土之膩白者，和米食之」，賴以活者甚眾，稱為「觀音粉」。³²浙江災荒連連，

²⁷ [康熙]《遂昌縣志》，卷 6·〈兵戎志·武功〉，頁 145-146。根據該志，靛民從金華流移到處州遂昌稱兵作亂的原因在於「巡撫羅公新蒞任，親至勦寇，寇懼以義烏、湯溪皆有備，陡至遂昌縣，殺傷相當，走石練屯駐」。關於這位「巡撫羅公」，谷口規矩雄的考證是崇禎五年至六年擔任浙江巡撫的羅汝元。參見谷口規矩雄·〈東陽民變—所謂許都の亂について—〉·《東方學報》，58(1986)，頁 629、645。但羅汝元任期甚短，且任職事蹟與崇禎十一年靛民稱兵作亂的時間不符，很可能是志書將當年甫上任的巡撫熊奮渭誤記為羅公。

²⁸ [明]王德溥·〈脩城誦并序〉，收入 [康熙]《浦江縣志》(《復旦大學圖書館藏稀見方志叢刊》第 13 冊)，卷 10·〈藝文志〉，頁 376。

²⁹ [乾隆]《吳江縣志》(《中國方志叢書》華中江蘇 163)，卷 29〈人物六·名臣四·盛王贊〉，頁 886。

³⁰ 〈兵科抄出浙江巡撫熊奮渭殘題本〉，「崇禎十二年正月初一日」，頁 153a。

³¹ [明]蔣鳴玉·〈亂民抄殺事〉，收入 [清]李漁著，張道勤點校·《資治新書·初集》(杭州：浙江古籍出版社，1992)，卷 14·〈判語部〉，頁 537。

³² [崇禎]《義烏縣志》，卷 18·〈雜述考·災祥〉，頁 606；[康熙]《新修東陽縣志》，卷 4·〈職方志·災祥〉，頁 2a-b；[康熙]《浦江縣志》(《復旦大學圖書館藏稀見方志叢刊》第 12 冊)，卷 6·〈雜事誌·災祥〉，頁 616。

最能反映糧食的短缺就是糧價高漲。如遂昌縣，崇禎九年(1636)，「大饑，穀價騰貴，每斛至銀壹分貳厘」。崇禎十四年(1641)的大饑荒，穀價也一路攀升至五年前的高價位，更不幸的是到了隔年，「水災異常，東北鄉田園、廬舍，漂流殆盡」。³³同樣在浙西地區，平時「米價至貴，每石不過七八錢，兩年踵荒，遂增至三兩」。³⁴以至於造成「三百年所未有之災」。³⁵對此，金衢兵巡道的夏尚綱(1593-1645?)指出靛民起事，「總為米貴枵腹所致」。³⁶浙江巡撫熊奮渭(1580-1674)也強調：「兼以連年荒歉，米價三兩，民不聊生，沿海貧民，遂有勾賊入犯之勢。」³⁷

其次，是藍靛市場的消長效應。其實江南的棉布、絲織品需求一直很大，原物料價格相應攀升，還有浙江也生產大量的絲織品，杭州、衢州等地都須將部分織造緞匹上供，需要大量的染色原料。當時江西、福建、浙江均為藍靛的主要產地，江南更是多從福建等地進口。³⁸然而先是浙江經歷大旱，藍靛採收已受到嚴重的打擊。不巧的是，受北方戰亂波及，商貨阻滯，藍靛價格下滑。根

³³ [康熙]《遂昌縣志》·卷10·〈雜事志·災眚〉·頁264。

³⁴ [明]左光先·《左侍御公集》(國立臺灣大學圖書館藏清乾隆四年刊本)·〈報水災并申漕困疏〉·頁20a。

³⁵ [明]倪元璐·《倪文貞集》(《景印文淵閣四庫全書》1297冊)·卷19·〈與浙中丞暨鹽使者(辛巳)〉·頁222。

³⁶ 〈內有「又據金衢兵巡道夏尚綱呈」殘件〉·「崇禎十四年」·頁655b。

³⁷ 〈兵部題行「兵科抄出浙江巡撫熊奮渭題」稿〉·「崇禎十五年九月」·收入《明清史料》·乙編第八本(臺北：中央研究院歷史語言研究所·1999景印二版)·頁793b-794a。

³⁸ 傅衣凌·〈關於中國資本主義萌芽的若干問題的商榷〉·頁11-12。清初上海人葉夢珠就說藍靛出自福建·本地所無·直到清順治初年方引進種植。[清]葉夢珠撰·來新夏點校·《閱世編》(北京：中華書局·2007)·卷7·〈種植〉·頁189。

據時任義烏知縣熊人霖(1604-1667)的觀察：「近江北兵荒，青布不行，靛賤穀貴，此輩無以自存，遂出掠山旁村落。」³⁹這正足以說明，山區開發的高成本、高風險，以及山區流民的經濟在遭遇市場的壓力時相當脆弱，其聚居地在面對自然災害和欠收時又具有高度的敏感性，都使得武裝衝突難以避免。⁴⁰

同時在諸暨山區已封禁的礦場，「山旁奸民往往窟穴其中」，歲饑時，「聚眾至數千人」。⁴¹災荒、市場效應引發的結果，礦徒、種靛菁民最終均與失業饑民合流。熊人霖就說：「其藝菁者終不肯盡去，相聚為剽掠，而睦、歙之群盜不軌者，復入而雄長其間，鋒甚銳。」⁴²睦、歙分別是指涉來自嚴州、徽州有勢之徒，顯示移民群體、客商內部的地域複雜性。

另一方面，無論客商投資失利與否，都會尋求有利可圖的管道，有時武力能降低成本、擴展商業型態、增加競爭優勢，採取暴力更像是一本萬利的投資事業，積累財富的慾望容易促使搶奪事件的發生。⁴³崇禎十三年(1640)，浙江景寧縣出現一樁劫掠事件，「寇八十三人」，俱是福建壽寧縣李長坑的居民，他們在夜間行動，次日遭到圍堵「拒其歸路」，見狀遂脅迫縣官隨行，仍得以逃脫出境。⁴⁴無獨有偶，隔年，龍泉縣爆發劫案，領導者是福建政和縣的一名張姓世家

³⁹ [明] 熊人霖·《南榮集·文選》·卷 12·〈防菁議上〉·頁 37b。

⁴⁰ Sow-Theng Leong, *Migration and Ethnicity in Chinese History*, p. 130.

⁴¹ [明] 陳子龍著·王英志輯校·《陳忠裕公全集》·卷 31〈陳子龍年譜卷中〉·頁 947。

⁴² [明] 熊人霖·《南榮集·文選》·卷 11·〈芑田草序〉·頁 24b。

⁴³ 參見彭慕蘭(Kenneth Pomeranz)、史蒂夫·托皮克(Steven Topik)著·黃中憲譯·《貿易打造的世界——社會、文化、世界經濟·從 1400 年到現在》(臺北：如果出版社·2007)·頁 223-232。

⁴⁴ [雍正]《景寧縣志》(《南京大學圖書館藏稀見方志叢刊》第 28 冊)·卷 8·〈武備志·紀事〉·頁 473。

子弟，被「不肖所誘，遂散家千金，募蕪賊，編字得千餘人」，肆行劫掠，甚至分兩路突入龍泉縣，途中綁縛縣令，「俱挾重資」。⁴⁵地方官員「逐一確察」，研判出山民多來自於閩北的政和、建安、壽寧，政和縣是「衣食之地，兼各有親知在焉」，所以政和縣反倒是「自始至終，一無搶掠」。⁴⁶在在突顯即使是書香門第、殷實世家，也會受利驅使，從事非法活動，以及閩浙山區交界特殊地緣的暴力流動性。

三、「防菁」軍兵的布置

浙江種靛菁民崛起的地區，與原先礦徒起事地點有重疊之處，但並非完全一致。我們可從清人所描述的情況：「聞之父老，明時南有靛賊，北有鑛盜，生民皆大被其害。」其指涉的就是衢州府西安縣境山民起事地點不同。⁴⁷總體上來說，新移民是分布在金衢盆地的兩側山地，主要活動於明清浙江衢州、金華、處州等府縣境內的山區，擴及鄰省交界地帶。如何防範靛民的滋擾生事，即時調兵遣將，成為官方刻不容緩的課題，甫任浙江巡按的左光先(1580-1659)就說：「自去年二月初六入境，爾時漕事正急，寇氛復猖，湖寇、海寇外，深慮靛賊盤踞

⁴⁵ [順治]《龍泉縣志》，卷9·〈兵戎志·大事〉，頁1367。比對《慶元縣志》的紀錄，可知這位世家子弟姓名是張其卿，他先是領眾大掠龍泉，崇禎十四年十一月再突至慶元，知縣楊芝瑞曾率鄉兵禦之。參見[康熙]《慶元縣志》(《中國方志叢書》華中浙江521)，卷10·〈雜事志·災異〉，頁408。

⁴⁶ 〈內有「福建兵備道吳之屏」殘稿〉，「崇禎十四年」，收入《明清史料》，癸編第三本，頁283b。

⁴⁷ [康熙]《西安縣志》(《復旦大學圖書館稀見方志叢刊》第18冊)，卷1·〈輿地志·形勝〉，頁119。

三省，逋逃數歲，不勦不可，非身經相度，必不能勦。」⁴⁸

1. 調兵與築城

浙江的靛民倡亂是始於崇禎十一年(1638)。〔康熙〕《武義縣志》曾紀錄該年：「山寇竊發，邑令袁公會同兵道協剿，擒賊首張華。」光憑這段記載，我們很難與靛民聯想在一起。但是透過《明清史料》檔案，我們可以從浙江巡撫關於「安撫種靛山民」的題本中，看到崇禎十一年(1638)七月，「首獲巨盜張華，已供各賊情形」等記載，進而能了解到這是一樁靛民倡亂事件。⁴⁹

針對靛民於金華地區起事，浙江撫按官員立刻調動在衢州的「防礦」駐軍，任命總捕守備成紹譽前往遂昌縣阻截，「躡其後，追至石練，大戰於溪灘」，可是「眾寡不敵，紹譽死之，寇遁浦城界而去」。⁵⁰官員在奏疏中則稱大兵未集時，成紹譽「帶兵不滿百人，追至石練，分兵對敵，炮打死賊夥十數人，後又殺死十五、六人，得勝而回，不意昏夜迷路，墜足溪田，山凹草叢，伏黨槍刺，墜伏而死」。數日後官兵反擊，「共剿賊黨不下五十餘人矣」，「賊勢衰落」，「竄閩中浦城，而星散無踪」。⁵¹其說法有諱飾與避重就輕之嫌，這次的結局，反映此時「防礦」軍兵因大量裁減，實力不復往時，加上遠離駐防，才會「眾寡不敵」，甚至也凸顯了閩浙兩省未能同心協防的癥結。而官府急忙調遣衢州兵力南下，原因是浙江軍兵布防失衡，當時就有人指出：「浙東困於防海，上游數千里，環疊

⁴⁸ 〔明〕左光先·《左侍御公集》·〈復命寬限疏〉·頁 48a。

⁴⁹ 〈兵科抄出浙江巡撫熊奮渭殘題本〉·「崇禎十二年正月初一日」·頁 153b。

⁵⁰ 〔康熙〕《遂昌縣志》·卷 6·〈兵戎志·武功〉·頁 145-146。

⁵¹ 〈兵科抄出浙江巡撫熊奮渭殘題本〉·「崇禎十二年正月初一日」·頁 152-154b。

萬山，無城無兵，一夫嘯而民難婦子保矣。」⁵²

地方動亂是影響明代後期中國南方出現築城運動的重要因素，更使內靠山區的府縣有築城之議。⁵³晚明浙江亦然，當「金華山菁民弗靖」時，撫按官員呼籲地方趕緊戒備，浦江知縣吳應台(1614-?)顧慮「斗城傾圮難恃」，遂銳意繕治，動員當地士民重建城堞、門樓，不到兩個月的時間就落成。⁵⁴義烏縣原以恃山濱湖為屏障，只有門樓四座，「頗如城門之制，便於守望」，實際上還是無城的。崇禎十一年(1638)靛民事件爆發不久，知縣熊人霖到任，為呼應上級的築城指示，故「肇造七門敵樓」，趕在年底完工。⁵⁵可見山民倡亂的衝擊，讓地方不得不急促因應。可是正因「築垣伊急」，到了崇禎十二年(1639)，當浦江縣城遭逢大雨時，「堞傾者十而一，裂者十而三，外城傾者三十而一」，結果還是得要再次修繕。⁵⁶湯溪縣則為確保城牆鞏固，即「改造城樓，城用磚石封砌，堞高四尺」，使「城雖小而堅」。⁵⁷

崇禎十三年(1640)四月，朝廷明令：「浙省無城處所，著該撫按通察奏明，仍多方鼓舞，設法創建。」嚴州府壽昌縣即響應建城。⁵⁸武義縣「向無城郭」，因

⁵² [明] 蔣鳴玉·《政餘筆錄》·卷3·頁247。

⁵³ 徐泓·〈明代福建的築城運動〉·《暨大學報》·3:1(1999)·頁25-76。

⁵⁴ [康熙]《浦江縣志》(《復旦大學圖書館藏稀見方志叢刊》第12冊)·卷2·〈規制誌·城池〉·頁274; [明] 王德溥·〈脩城誦并序〉·收入 [康熙]《浦江縣志》(《復旦大學圖書館藏稀見方志叢刊》第13冊)·卷10·〈藝文誌〉·頁373-374。

⁵⁵ [崇禎]《義烏縣志》·卷2·〈方輿考·城池〉·頁358。

⁵⁶ [明] 熊人霖·《南榮集·文選》·卷1·〈浦江縣修城導河碑記〉·頁7b-8a。

⁵⁷ [康熙]《湯溪縣志》(《中國地方志集成》浙江府縣志輯52)·〈輿地志〉·頁6。

⁵⁸ 〈兵部題行「兵科抄出浙江巡撫熊奮渭題」殘稿〉·「崇禎十四年三月二十九日」·收入《明清史料》·辛編第五本·頁481b-482b。

「明崇禎十三年嚴修練儲事」，縣令倡建，「築砌周圍十里八步，門九」。⁵⁹衢州府修城浚濠，豎譙樓，建窩鋪、造女牆，「卑者崇之，缺者補之」。⁶⁰處州府的景寧知縣徐日隆(1598-1649)同樣擔憂「盜賊叢生，出沒無定，苦難防守」，於是召集百姓商議，捐款輸助，「用財五千金」，「纍石為城，周二餘里，作六門」，是該縣首次建城。⁶¹至崇禎十五年(1642)，慶元縣則是重修城垣，「增磚堞三尺，建城樓五」，「窩鋪一十二，東南敵樓各一」。⁶²這次慶元縣築城完善，因此當「壽寧山寇」來犯時，「不敢窺城，邑人咸歡呼」。⁶³

2. 置兵與練兵

明末浙江種藍靛民起事波及十餘縣，事發突然，臨時築城常緩不濟急。時值「藍寇充斥」，浦江知縣隨即「團練鄉勇，威震境外，賊不敢窺」。⁶⁴正由於「無城，不得不以兵為衛」，崇禎十三年(1640)，金華府義烏知縣熊人霖奉命倡議募兵，設置「總練所」，委巡檢移駐訓練鄉勇。投石超距者可作為營兵，共選出壯士一百二十人，月俸六錢，再從中挑出武藝精良三十人為武職幹部，隨級別調增俸祿，考核武藝，賞罰必行，每月赴教場習陣法，約束部伍，檢閱裝備。兵

⁵⁹ [康熙]《新修武義縣志》(臺北故宮博物院圖書文獻館藏清康熙三十七年刊本)·卷1·〈建置志〉·頁4a。

⁶⁰ [康熙]《西安縣志》(《復旦大學圖書館藏稀見方志叢刊》第18冊)·卷2·〈建置志·城池〉·頁148。

⁶¹ [雍正]《景寧縣志》·卷8·〈武備志·城池〉·頁461；[明]陳子龍著，王英志輯校，《安雅堂稿》·卷7·〈景寧縣建城記〉·收入《陳子龍全集》·頁1168-1169。

⁶² [康熙]《慶元縣志》·卷1·〈輿地志·城池〉·頁68。

⁶³ [嘉慶]《慶元縣志》(《中國方志叢書》華中浙江522)·卷2·〈建置志·城池〉·頁53。

⁶⁴ [康熙]《長沙縣志》(《稀見中國地方志彙刊》第37冊)·卷11·〈人物上·吳應台〉·頁664。

器方面，派員赴福建採購品質精良的「建鐵」⁶⁵，「取鐵官之利於閩中，設處工費，購銃三十六」。又訪得已故名將劉顯(1515-1581)家舊匠，「造刀鎗五百」，並就近從山中取得竹木，打造「箠竹之矛、堅木之挺，約千竿」，其火藥則給引採辦。集訓三月後，為防兵民雜處，還在邑治東西創建金城、講武兩兵營，營各有總，總各轄三哨，每月更番輪班。⁶⁶

受饑荒與季節因素影響，崇禎十三年(1640)冬，金華府武義縣「靛寇擁眾，焚劫下村」。⁶⁷隔年正月，金華山區「菁民弗恭」，金衢兵巡道夏尚綱親自率兵彈壓，亂事暫弭，至該年秋季，地方豐收，卻又引發山區「菁民復取民家之禾，躡及村落」。⁶⁸生活困頓的靛農以打家劫舍的方式展開倡亂行動，諸如處州府遂昌縣「靛賊結巢廿一都礮下」，不久又移至江山、浦城界，「劫殺村落，出沒無常」。⁶⁹是歲，紹興推官陳子龍(1608-1647)從處州來到金華，正好歷經這些變亂地區，因「菁民震於鄰」，為此請教知縣熊人霖的「防菁」看法，熊人霖認為應該開屯編戶、多設偵間、縛其渠魁、漸蹙以兵、使之竄歸、火其窩蓬、扼要置丁、置柵為衛、嚴禁接濟。⁷⁰

⁶⁵ 福建生產的熟鐵經過多次冶煉錘鍛，常製作成刀銃器皿，號稱「建鐵」，在明代相當炙手可熱，鐵冶業的蓬勃發展也衝擊到地方社會的常態秩序。參見唐立宗，《坑冶競利——明代礦政、礦盜與地方社會》(臺北：國立政治大學歷史學系，2011)，頁407-488。

⁶⁶ [明]熊人霖，《南榮集·文選》，卷7·〈兩營志〉，頁1a-3b；崇禎《義烏縣志》，卷4·〈經制考·屬署〉，頁390-391。

⁶⁷ [嘉慶]《武義縣志》(《中國地方志集成》浙江府縣志輯51)，卷8·〈人物·義行〉，頁881。

⁶⁸ [明]熊人霖，《南榮集·文選》，卷10·〈平菁寇凱歌敘〉，頁14a-b。

⁶⁹ [康熙]《遂昌縣志》，卷6·〈兵戎〉，頁146。

⁷⁰ [明]熊人霖，《南榮集·文選》，卷12·〈防菁議上〉，頁37a-38b。曾任義烏知縣的熊人霖在〈防菁議〉這篇文章中，以「蘭亭子」隱喻為紹興府推官陳子龍，因蘭亭在紹興轄境之故。而以「稽

從官府的文書紀錄來看，針對靛民再度起事，「防礦」兵力仍是最主要的防禦力量，下令「發兵於金衢嚴處，扼要協防」。因此「衢兵道復統官兵」，除了命令金衢兵巡道來統籌外，還要求衢營守備、把總率領營兵分路搜捕；金華、處州各府是派同知、推官擔任監紀，「監督金衢官兵」；各縣則由縣官、典史任捕官，負責調遣鄉總、鄉兵、哨總、民壯、地保等兵丁沿山堵禦起事靛民。值得一提的是，前一年熊人霖創建的兩營鄉兵，也投入這次捕緝行列，所以衢營守備潘起龍在公文中報稱其功勞「加閩外兩營文武將士，不憚艱難，鼓勇窮追，且能擒渠散黨」。另一方面，靛民起事讓官方了解到，「與其時切戒嚴，莫若專官防禦」，官員建議應在金華、衢州、處州三府之中，擇一要地，在處州宣平縣境的礪坑等地專設守備一員，長期屯駐軍兵，建署添俸，各府撥兵一百名，「再酌標兵百餘名，共為一總之數」，其糧餉、營兵署宇、各兵茅寮修建費用，均統由三府二十三縣分擔，並推派衢州右營把總葛邦熙陞任當地守備，換言之，此時官員試圖架構新的「防菁」軍事體系。⁷¹

四、三省會剿與善後措施

調遣「防礦」兵力南下，即是為了抵禦種靛菁民倡亂，但從地方志書等相關紀錄，我們卻找不到明末官府在宣平縣置兵設官常駐的證據，似乎仍以防剿驅

亭子」作為自稱，正因稽亭里位於義烏縣境雲黃山麓下。兩人曾同登雲黃山，贈詩唱和，熊子霖也留有一封書信贈陳子龍，時間與〈防菁議上〉同時，並非巧合。參見〔明〕熊人霖，《南榮集·詩選》，卷6·〈陪陳臥子登黃雲山〉，頁4a-b；卷6·〈附陳臥子詩〉，頁4a-b；卷8·〈東陳臥子(辛巳)〉，頁14b-15a。

⁷¹ 〈內有「又據金衢兵巡道夏尚綱呈」殘件〉，「崇禎十四年」，頁653a-655b。

離為務，軍兵事平即返。到了崇禎十五年(1642)春季，「處州山寇大作，聚眾數千，蹂躪遂昌、松陽、龍泉、江山、武義等數縣，而江、閩之境咸受其害」。⁷²至夏季，「山寇益劇」，此時「寇往來之地」，已擴及江山、常山、武義、湯溪、宣平、遂昌、松陽、浦城、永豐、開化、玉山、鉛山等閩、浙、贛諸省交界地區。⁷³諸如江山縣的廿七都，「閩人種靛者揭竿而起，屠戮張村、石門、清湖等處」。⁷⁴開化縣的「山寇縱橫焚劫，鄉民流竄，五六十里內田地，盡成荊棘」。⁷⁵均造成地方極大的傷亡與損失。巡按左光先就說：「靛賊之橫縱於閩、浙間已兩年，於茲始路截，繼村劫矣；始遮頭蓋面，遇兵即逃；頃樹旗列陣，與官兵對壘，且勝負相當，殺傷各半矣！」⁷⁶

為何崇禎十五年(1642)種靛菁民的勢力會再起？[康熙]《遂昌縣志》的解釋是：「閩寇在浙者將歸，而福建浦城縣防守戒嚴甚，不得過。由是積累多人，嘯聚於遂之西鄉茶園，而江西之永豐縣、衢州之江山縣並震鄰。」⁷⁷但這也可能是一面之詞，靛民在官府的追捕中屢屢逃逸，福建浦城常是突破口，他們勢力集結重返後，使得金華、處州等地再度陷入動亂的威脅。再者，福建官兵「見賊遠去，浦城境內毫無失事，恐兵壓境煩擾」，不再進兵，或逕自撤兵，均造成「賊

⁷² [明] 陳子龍著，王英志輯校，《兵垣奏議》·〈補敘浙功疏〉·「崇禎十七年八月十七日奉旨」·收入《陳子龍全集》·頁 1534。

⁷³ [明] 熊人霖·《南榮集·文選》·卷 12·〈防菁議下〉·頁 39a-b。

⁷⁴ [康熙]《江山縣志》(《中國地方志集成》浙江府縣志輯 59)·卷 9·〈雜記志·災祥〉·頁 143。

⁷⁵ [康熙]《開化縣志》(日本國立公文書館藏清康熙二十二年序鈔本)·卷 6〈雜誌〉·頁 5a。

⁷⁶ 〈浙江巡按左光先殘題本〉·「崇禎十五年八月十五日科抄」·收入《明清史料》·乙編第八本·頁 796a。

⁷⁷ [康熙]《遂昌縣志》·卷 6·〈兵戎志·武功〉·頁 146。

仍屯江山地方」。⁷⁸

這年靛民起事震鄰，突顯前次征剿的輕忽草率，常困於險惡環境，株守一地。更大的問題是，福建官兵以鄰為壑，即「兵一步不肯入浙境，賊皆閩人，而所擾多屬浙地，各郡縣痛癢絕不相關，不謂寇禍金處衢三府，而以為此三府大家公共之寇也」，在多一事不如少一事的消極心態下，演變成各方推卸責任、掩耳盜鈴的弊端，因此左光先會在〈題本〉中提到：「舊歲今春，若衢之江山，處之龍(泉)、遂(昌)等縣，屢有斬獲，難掩微勞，總之是防局，非勦局也。」⁷⁹

當地方官員陸續奏報後，崇禎帝朱由檢(1611-1644)聞知震怒，「奪閩中諸司職，而責浙以合剿」，特召新任浙江巡撫董象恆(1596-?)賜宴會見，面諭時提到：「山寇不亟撲滅，其勢將復為流寇，而東南大事去矣！」責令限期五月平定。⁸⁰董象恆甫到任，與巡按左光先共商旨意：「此賊不勦，終成流寇之續，若不擇人耑委，使功罪獨肩、脫卸無地，則此賊斷難刻勦。」⁸¹於是董象恆立即向紹興府推官陳子龍諮詢。陳子龍是松江府華亭縣人，與董象恆同鄉，且是同榜登科故人之子，所以當陳子龍建議「今欲一舉蕩平，必大發兵，約閩中合攻之」，表示願意協助時，董象恆大喜，檄令陳子龍擔任監軍。⁸²

朝廷下令三省征討合剿，主力是浙江與福建兩省，故熊人霖曰：「有旨督三

⁷⁸ 〈內有「福建兵備道吳之屏」殘稿〉，「崇禎十四年」，頁 283a。

⁷⁹ 〈浙江巡按左光先殘題本〉，「崇禎十五年八月十五日科抄」，頁 796a。

⁸⁰ [明] 陳子龍著，王英志輯校，《陳忠裕公全集》，卷 31，〈陳子龍年譜卷中〉，頁 953。

⁸¹ 〈浙江巡按左光先殘題本〉，「崇禎十五年八月十五日科抄」，頁 796a。

⁸² [明] 陳子龍著，王英志輯校，《陳忠裕公全集》，卷 31，〈陳子龍年譜卷中〉，頁 953-954。

省兩臺速靖，於是閩中推黃石公，浙中推陳臥子為監紀。」黃石公是福建建寧知縣黃國琦(1594-1672)，陳臥子就是紹興府推官陳子龍，兩人各自擔任兩省的監軍工作。崇禎十五年(1642)五月，義烏知縣熊人霖因陞任工部都水司主事，前向浙江巡按左光先辭行，左光先正「恐疆場之事，一彼一此」，央請熊人霖暫留，六月初，熊人霖即以新陞部銜任護軍之職。⁸³接著巡按左光先就向朝廷題報特委監軍，以及調派浙江「軍兵分地進剿，總聽兩監軍節制」等事宜。⁸⁴

陳子龍和熊人霖是舊交，根據陳子龍自撰的《年譜》，熊人霖的新職還是陳子龍大力推薦的，「予知其嫻於兵事，說左公疏留之，與共事」。陳子龍一面調遣督撫標兵千人沿水路西進，另一面招納東陽、義烏等地「壯士百餘人以為衛」，各路人馬於遂昌縣會師。熊人霖則是在衢州選調軍兵，「往督三衢之兵，遣使閩中、江右會師期」。⁸⁵陳子龍相當欣賞熊人霖的「防菁」主張，對其去年的看法未能落實感到惋惜，兩人會面時曾曰：「惜也！子之議未之有能行也，以及此。」其實熊人霖並不主張「遽合三省之兵」冒然出征，他認為萬一「寇轉徙不與兵值，徒曠日耳」。熊人霖認為長久解決之道仍在選能官、行保甲，督責寮主、山主約束菁民，同時也不必新設山區營哨軍兵，恐此舉徒增民擾，該當速撤，其兵應各歸縣官訓練、調遣，原設營兵或可在三省中增設一護軍來聯絡規措，總之應

⁸³ [明] 熊人霖·《鶴臺先生熊山文選》(日本國立公文書館藏清順治間刊本)·卷 14·〈跋澱江天合圖記〉。

⁸⁴ 〈浙江巡按左光先殘題本〉·「崇禎十五年八月十五日科抄」·頁 796a-b。

⁸⁵ [明] 陳子龍著·王英志輯校·《陳忠裕公全集》·卷 31·〈陳子龍年譜卷中〉·頁 954。關於熊人霖監軍的紀錄·可見 [明] 熊人霖·《鶴臺先生熊山文選》·卷 14·〈跋澱江天合圖記〉。

該儘量避免力戰勞師。⁸⁶

熊人霖不主力戰的「防菁」看法其來有自。他和陳子龍「偕履行間」⁸⁷，「屢發兵深入死鬪，終以厄於地險，殺傷相當」，官兵與靛民均困於拉鋸戰中，給予兩人很深刻的印象。到了崇禎十五年(1642)六月底，官兵好不容易才「奪其一寨，斬數百級」，「賊始失據，遁入茶園老巢」。熊、陳兩人發現「賊西走，所棲益峻，不可攻」，相度形勢，「見萬無進攻之理」，所以改採包圍方式，「凡近賊巢五十里內，民家牛羊、米粟，皆遠徙」，官兵「伐木塞道，伏兵要徑」，分據要害，讓起事者更加乏食益困。⁸⁸此時倡亂陣營內部也出現分裂，熊人霖在〈會剿紀成揭〉中透露，他施反間計，派人入「賊中，搆徽賊與閩廣賊，攜使自相圖」，讓內部矛盾加劇，使其力量消解，經歷數日激戰，倡亂者「思竄閩中矣」。⁸⁹

至崇禎十五(1642)七月十日，「銳師四路來攻，賊遂奔遯於獅子峰」。⁹⁰獅子峰在福建浦城縣境內，福建監軍黃國琦也採剿撫兼施，「購得賊主藏，持其事，縱之入巢，說以利害。適浙兵深入，賊內悔，遂於七月降閩」。⁹¹根據熊人霖

⁸⁶ [明] 熊人霖·《南榮集·文選》，卷 12·〈防菁議下〉，頁 39a-40b。

⁸⁷ [明] 熊人霖·《南榮集·文選》，卷 11·〈芑田草序〉，頁 24b。兩人均有留詩紀行，參見 [明] 熊人霖·《南榮集·詩選》，卷 11·〈六日直指以菁寇急疏留余同臥子護諸將會勦遂以次日同發〉，頁 55b；〈附臥子詩〉，頁 55b-56b。

⁸⁸ [明] 陳子龍著，王英志輯校·《陳忠裕公全集》，卷 31·〈陳子龍年譜卷中〉，頁 954；[明] 陳子龍著，王英志輯校·《兵垣奏議》·〈補敘浙功疏〉·「崇禎十七年八月十七日奉旨」，頁 1534。

⁸⁹ [明] 熊人霖·《南榮集·文選》，卷 11·〈附錄會剿紀成揭〉·「崇禎十五年七月二十日具揭」，頁 27b-28a。

⁹⁰ [明] 熊人霖·《南榮集·文選》，卷 11·〈附錄會剿紀成揭〉·「崇禎十五年七月二十日具揭」，頁 28a。

⁹¹ [明] 陳子龍著，王英志輯校·《陳忠裕公全集》，卷 31·〈陳子龍年譜卷中〉，頁 955。

〈會剿紀成揭〉紀錄：「降閩者閩中安插，降浙者除解散六百卅七人外，渠魁汪敬松、章今勝、勞志等二百五十四人願軍前報效，謹差官押至轅門聽用。」熊人霖又遣員入山散票，「安揖良民嚴繼完等五百二十五人，招撫難民黃邦道等五百五十三人」，長達五年的戰事總算結束。⁹²對此兵部官員稱道：「三省同心，數年之逋寇，廓清於一朝。」⁹³

亂事平定後，招撫難民、安插流寓，成為官府最重要的工作，如何將山中的寮蓬納入管理，也是當務之急。參與過會剿的台州府推官蔣鳴玉(1600-1654)提到：「歲荒民散，無空土空居，若使不占客籍、不編里甲，其後患有不可言者，山居茅廩，所在為難。」⁹⁴所以最初靛民起事平定，「投狀者千有餘人」，官方隨即「安撫種靛山民，編入牌甲，各安生理」。⁹⁵而開屯編戶，以及菁民、寮主與山主的約束保結，更是熊人霖撰述〈防菁議〉中一再強調的重點。⁹⁶因此兩人互動關係甚深的陳子龍及時呼應熊人霖的主張，「復上善後數事，凡編流民於主戶，互相保結，及被兵各邑，宜緩徵」。⁹⁷

至於地方防禦的補強，督撫官員以處州府遂昌縣「地界遼遠」為由，議析石練為練溪縣，陞遂昌為平昌州，以縣丞駐王村口，併龍泉縣統由州轄，但可能

⁹² [明]熊人霖·《南榮集·文選》，卷11·〈附錄會剿紀成揭〉·「崇禎十五年七月二十日具揭」·頁28a-b。

⁹³ 〈兵部覆疏〉·「崇禎十六年六月具題」·收入[明]熊人霖·《南榮集·文選》，卷11·頁30a。

⁹⁴ [明]蔣鳴玉·《政餘筆錄》，卷3·頁241。

⁹⁵ 〈兵科抄出浙江巡撫熊奮渭殘題本〉·「崇禎十二年正月初一日」·頁153a。

⁹⁶ [明]熊人霖·《南榮集·文選》，卷12·〈防菁議上〉·頁37a-38b；〈防菁議下〉·頁39a-40b。

⁹⁷ [明]陳子龍著·王英志輯校·《陳忠裕公全集》，卷31·〈陳子龍年譜卷中〉·頁955。

是調整地方行政區劃建置牽涉層面甚廣，最終未被採納。⁹⁸因此浙江巡撫董象恆另議「設一府佐於王村口，兼制三省各邑」，陳子龍也認為王村口是要害之地，「必得設一道臣兼制三省，以便彈壓」。只是陳子龍的「王村口設官事宜」建議，直到崇禎十七年(1644)八月，才被南明朝廷再度重視。⁹⁹在此期間，浙江的「防菁」工作由溫州府通判暫代，「春冬防禦，夏秋仍回溫州」，再調回派在溫州蒲岐千戶所二百名員額的兵力，常駐於處州府遂昌縣，「永為防守」。¹⁰⁰也就是說，至此「防菁」主力改由處州、溫州軍兵來調防承擔。

餘論

明代浙江山區迸發採礦與種靛的熱潮，各自代表手工業與種植農業的商品經濟相當活絡，也反映市場上的需求在推波助瀾，使之方興未艾。但是對官府而言，山區開發的加速往往連帶激發社會治安惡化的隱憂，官方的山林政策、管理法規以及控制系統均遠遠落後於社會經濟發展的變化，有時要強制禁令，卻又造成更大的衝突。為求禁令落實，官方試圖尋求軍事力量的增強防禦，進而出現專為「防礦」與「防菁」的軍兵建置。

崇禎十一年(1638)，浙江山區首次爆發稍具規模的靛民倡亂，官府立即調

⁹⁸ [康熙]《遂昌縣志》，卷6·〈兵戎〉，頁146。

⁹⁹ [明]陳子龍著，王英志輯校，《兵垣奏議》，〈補敘浙功疏〉，「崇禎十七年八月十七日奉旨」，頁1537。曹樹基推論王村口鎮的興起，正是與靛業有關，之後更確立其商業中心的地位。參見曹樹基，〈移民與古民居——浙江省遂昌縣田野考察之一〉，《歷史學家茶座》，7(2007)，頁75-87。

¹⁰⁰ [康熙]《遂昌縣志》，卷6·〈兵戎〉，頁146。

遣衢州總捕守備領兵，並配合各縣地方團練鄉兵共同追捕，此後這些「防礦」軍兵屢屢承擔起「防菁」的剿捕任務。除了調撥衢州「防礦」軍兵外，浙江地方同時採取築城、募兵、保甲等防備措施，來因應山民活動的失序。崇禎十四年(1641)，地方官員開始籌畫建置「防菁」軍事體系，打算在處州府宣平縣的礪坑設置營兵四百餘人，合為一總，並督委守備一員長期駐鎮。崇禎十五年(1642)，為避免亂事延宕，朝廷下令浙江、福建、江西三省會剿，事平後，大致是朝向熊人霖〈防菁議〉的主張進行善後工作，而「防菁」軍事體系則是改於處州府遂昌縣的王村口等地重新布防，增設專官地方治理。也就是說，針對山民的移墾活動，浙江衢州與處州地方各自擁有獨立的駐防軍兵，作好及早應變，以防不測。

但是數年後，隨著明朝政局的土崩瓦解，地方自顧不暇，原先浙江山區防禦的軍事體系也迅速解體，浙江、福建、江西三省交界山民的活動，再度成為地方關注與顧慮的焦點。例如當南明朝廷決議在江西廣信、浙江處州安置藩王時，江西巡按周燦(1603-1655)不無擔心表示：「昨歲靛賊竊發，負嵎走險，深山窮谷，緝捕為艱，此孰非廣信疆域以內事乎？」¹⁰¹縉雲人鄭賡唐(1607-1678)也反對明室宗藩置於處州，理由是：「近靛賊、蕪盜遊食窟山，且屢見告矣，兼之白蓮邪教在處簧鼓，聞有藩服，激變生心，猝然有警，無兵無食之孤城，何以禦之？」¹⁰²這正說明處州的「防菁」軍力已然解散。而清軍入浙時，隸屬南明隆武政

¹⁰¹ [明]周燦·《西巡政略》(上海圖書館藏明崇禎十七年刻本)·卷2·〈陳廣信風土難建兩藩疏〉·「崇禎十七年九月十四日具題」·頁40b-41a。

¹⁰² [明]鄭賡唐·〈諫止處州分藩疏〉·收入[清]湯成烈輯·《縉雲文徵》(北京中國社會科學院近代史研究所圖書館藏清道光三十年五雲書院本)·卷18·頁2a。

權下的金衢巡撫劉中藻(1605-1649)趕緊奏請選取當地山民練兵，得到隆武帝朱聿鍵(1602-1646)的同意：「選練精兵，可取於苧蕨、菁蕨、畚蕨三項，此議誠是。取用之後，即當給示，免其差徭；仍勉令與百姓相安。兵數准一千名，衣甲銀兩准於該州動支二千兩正項，務期兵精而餉不糜。」¹⁰³其作法與當初招募礦徒作為「防礦」主力極為類似。

南明政權吸收地方種靛菁民舉兵抗清，確實讓清軍吃盡苦頭。清順治四年(1647)十月，清軍已攻佔浙江大半土地，然而領地統治力量有限，敵軍不時來犯，甚至連地方官都先行躲避。當時官員即報稱：「景寧之賊，都是本地種麻閩人起衅，縣官、百姓皆是知情，不然才報賊到，職等帶兵遇敵大鈞地方，而縣中百姓即於是日一夜盡行逃去，只留空城以待賊來。」¹⁰⁴順治八年(1651)，遼東人徐治國出任遂昌知縣，到任後發現「靛寇」才是滋擾當地社會最大的問題，他說：「明之末，靛寇即已滋種，延及於今已十餘載，日夕靡寧。余蒞茲土三碁，介馬而馳，躬閱險阻，以與周旋橐鞬。」¹⁰⁵反映出他任職三年間，就像橐包著鞬一樣，朝夕都在忙於處理靛民的起事。

¹⁰³ [明]佚名編，《思文大紀》（《臺灣文獻叢刊》第111種），頁118。又，根據《魯之春秋》記載，劉中藻則是擢任溫處巡撫，「處州多山，其地多苧蕨、菁蕨、茶蕨諸種，皆稱精悍善鬪，中藻練為一旅」。史料記錄尚待釐清，但無論是金衢或是溫處山區，都是種靛菁民最常往來活動之地。參見〔清〕李聿求撰，凌毅標點，《魯之春秋》（杭州：浙江古籍出版社，1984），卷7，〈傳第二·閣臣·劉中藻〉，頁73。

¹⁰⁴ [清]秦世禎，〈處州府景寧縣麻農暴動〉，「順治四年十月二十二日」，引自中國人民大學歷史系、中國第一歷史檔案館合編，《清代農民戰爭史資料選編》，第1冊下（北京：中國人民大學出版社，1983），頁316。

¹⁰⁵ [清]徐治國，〈遂昌縣志舊序〉，收入〔康熙〕《遂昌縣志》，頁17。

清初靛民倡亂不僅是處州遂昌一地的問題，而是浙江山區普遍的現象。所以順治十三至十七年(1656-1660)，擔任浙江提學副使的谷應泰(1620-1690)才會針對衢州江山縣形勢論曰：「今礦害雖無，而繼靛以射利者，其弊已伏於麻篷。大約流移雜處，閩人居其三，而江右之人居其七。日引月長岌岌乎，有反客為主之勢，綢繆陰雨，當先事而大為之防已。」¹⁰⁶清初地方官為了「防菁」事件疲於奔命，曠日廢時卻又徒勞無功，可謂受到深刻的教訓。即使過了半個世紀，康熙五十一年(1712)，已來到處州任官長達十五年之久的知府劉起龍，還會在為《遂昌縣志》寫序文中感嘆：「遂固巖邑也，界接閩豫，居多異籍，所業者藝麻靛、采鐵，故多聚徒眾，而不能無爭鬪，地皆崇山邃谷，尤奸宄之所易匿，防維必嚴，洵宜急講，若如議者之說，一改易州縣間，遂足以盡防維之善歟！」¹⁰⁷像是發出今夕何夕之言，倘若清初能有機會延續明末「防菁」政策的議論主張，或許浙江的山林開發與地方治理將有不同的局面。

¹⁰⁶ [清] 谷應泰·〈形勢論〉·收入〔康熙〕《江山縣志》(東京大學東洋文化研究所藏·據清康熙五十二年重修序刊本數位化影像)·卷1·〈輿地志·形勢〉·頁12b-13a。

¹⁰⁷ [清] 劉起龍·〈遂昌縣志序〉·收入〔康熙〕《遂昌縣志》·頁11。

斋教传播与山区移民

——以清代闽、浙、赣地区为例

陈明华

斋教是受到罗教影响而产生的教派。明中后期以来，其在浙、闽、赣等南方诸省信众日增，教势甚至蔓延至苏、皖、鄂、湘、桂等省。斋教参与者多为底层百姓，入山开垦的移民则为其中之一。教内活动多以吃斋念经为主，很长时间内并未受到上层的“关照”。但是，乾隆以后，斋教信众开始以叛乱者的身份进入官方视线。太平天国运动之后，斋教成员开始持续的参与到大规模暴动之中，其中尤以浙、闽、赣毗邻地区为甚。“斋匪”一词一而再地出现在公文之中，成为与不少地方官员息息相关的存在。一个仅仅提倡吃斋念经的教派，为何突然持续地参与到暴乱之中？

教派叛乱是清代历史中重要议题。爆发于乾嘉之际的白莲教起义，历时九年，波及 200 多个州县，耗费清王朝 2 亿军费，因而被视为康乾盛世终结的标志性事件。而其后教派叛乱不断，1900 年爆发的义和团运动，八卦教等教派亦是其重要来源之一，可以说教派叛乱称为王朝后期统治面临的症结。那么那些教派成员为何会成为暴乱的参与者？是因为这些教派有某种蛊惑人心的“邪术”吗？教派与叛乱之间的关系受到不少研究者关注。欧大年通过对于白莲教等教派的研究，认为那些教派与叛乱的关系并不明显，参与教派之人只是“很诚实的教徒，他们是不要找麻烦的这种人”。韩书瑞（Susan Naquin）则认为情况复杂，不能一概而论。她将教派分成两种类型，一种为“念经型”，一种为“打坐运气型”，在随后的分析中，她似乎暗示后者发展壮大时如果遇到政府的打压更容易走向暴力叛乱。而千禧年思想和教首人物的宣传起着重要作用。¹韩书瑞以类型学的方式解释不同教派的不同表现。但是，斋教在清中后期的表现却挑战此种解释。按照韩氏的划分，斋教等南方教派属于“念经型”，但在清代中后期，这类教派也大量参与到暴力叛乱中，那么如何解释清代中晚期此类教派与暴力的关系？本文通过文本梳理，试图探讨斋教在浙、闽、赣山区为何能够迅速传播并日渐与暴力叛乱产生联系。斋教流布甚广，尤以闽浙赣毗邻地区为甚，本文的讨论侧重此地区。

一、斋教在闽、浙、赣山区的传播

乾隆十三年正月十五清晨，福建建安县西北的山村芝田村集结了一群被称作老官斋的教徒。在一位严姓女巫的号令下，队伍开始向建安县城进发。女巫“坐轿张盖”，由众人抬着前行。同行乡人则个个头裹绸布包头，包头颜色虽各不相同，但都盖有“无极圣祖”的图记。不少人手中打着大小不一的蓝白旗帜，上面书写着各色名号，或书“无为大道”，或书“代天行事”，或书“无极圣祖”，或书“劝富济贫”，或书“令”字，或书“招军全”，不一而足。另外一些人则抬着“扛抬神像，一路跳跃”前进，远远看去犹如节庆时期的游神队伍。不过，官府从各个渠道得到报告却称这批人目的在于进城劫狱。原来，去年十一月瓯宁县丞收押了五名老官斋的成员，其中一位叫陈光耀是该教会在建瓯地区五大会首之一。该教其他会首及

¹ 韩书瑞：《山东的叛乱——1774 年王伦起义》，刘平、唐雁超译，江苏人民出版社，2008 年，第 61-65 页。

骨干听闻此消息，害怕遭受牵连，计划劫狱救人（此种说法颇有可疑）。正月十二日女巫严氏作法，“假托降神谶语，捏称弥勒佛要入城”动员信众，正月十五日正是进城之时。除了这支女巫带领的队伍外，还有另外两股队伍从临近村落赶过来策应。于是建宁府立即派把总吴雄带兵震慑。吴雄所带士兵在狭窄的单岭头与该游行队伍正面遭遇，官军把教徒打得四散奔逃。

此案震惊朝野，乾隆帝亲自坐镇，要求臣属严厉查处。此后，地方官府展开连串搜捕和审讯，从而牵扯出一个活跃在闽浙交界山区的教派。原来建、瓯两县教徒所习老官斋教传自毗邻的浙江省处州府庆元县姚氏家族，由姚氏后裔承袭主教之位，因此该教也被称为“姚门教”。该教“无论男妇皆许入会吃斋”，入教者“概以普字为法派命名”，会众都称为“老官”。

2

“姚门教”为罗教一支。在姚门教的传承谱系上，罗教教主罗梦鸿为一世祖，殷继南为二世祖，姚氏祖先姚文字为三世祖。罗教又称无为教，明代成化至正德年间，产生于北直隶密云卫山区之中。创教者为山东即墨县人罗梦鸿（1442-1527），后来教内信徒尊称为罗祖。罗梦鸿成化十八年（1482）年悟道以后，四出传教。弟子门人将其思想言论记录整理，形成教内经典五部六册——《苦功悟道卷》、《叹世无为卷》、《破邪显证钥匙卷》、《正信除疑无修证自在宝卷》和《巍巍不动泰山深根结果宝卷》。

罗教杂糅了儒、释、道三教内容（佛教色彩最为突出），在此基础上形成“一套具有内在逻辑联系的完整思想体系”。宣扬人生在世充满各种困难。世人只有不为邪道所骗，信奉无为大法，无极正道，顿悟明心，与无边虚空合为一体。才能自在纵横，安享极乐。³

在罗梦鸿及其信徒的努力下，罗教获得了大量下层社会民众的信奉。明代后期，罗教广泛传播于河北、山东、山西、河南等。并且沿大运河而下，向江苏、浙江、福建和江西等地传播。在世代传播过程中，罗教逐渐形成了四大分支，其中之一就是在闽、浙、赣地区的斋教，⁴而斋教中姚门教尤为兴盛。

在形成独立的姚门教过程中，殷继南和姚文字两位宗教领袖起着重要作用，因此两人被姚门教内部封为二世祖和三世祖（一世祖为罗祖）。目前，罗教沿大运河向南京、杭州等城市传播为学界所悉，但如何传入闽、浙、赣等省山区却不甚明了。不过可以确定的是明代嘉靖年间浙江处州地区已有罗教的活动。姚门教的二世祖殷继南（也作殷继能或应继南）就是在缙云加入罗教。此后殷氏以“五部法轮”掌教，以本教为“无为正派”。并且分封了二十八位“化师”，七十二位“引进”，初步建立了教阶制度，信仰者达三千七百余人，教势遍及浙江处州、缙云、台州、松阳、武义、温州、青田、金华、瑞昌、景宁、宣平等浙江中部及沿海诸州县。三世祖姚文字，庆元县松源东隅人，三十一岁时正式加入罗教，拜殷继南的嫡传女弟子普福为师。此后，姚文字成功统一浙江罗教各教派，成为殷继南之后最有权威的教内领袖。⁵

从姚文字之子姚绎开始，教内施行教权世袭制度，由姚氏后裔继承主教之位，并且掌控核心组织，该教成为名副其实的“姚门教”。⁶雍正七年（1729）年，政府开始查禁各地罗教。为了避免受到牵连，姚门罗教改称一字教，又名老官斋教。⁷此后，闽、浙、赣等南方诸省所称的罗教、无为教、斋教等名目多指该支教派或受姚门教影响的支派，狭义上说，斋教即

² 《新柱折》（乾隆十三年三月十四日），《清代档案史料选编 2》，第 535-538 页。

³ 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，1992 年，第 177 页。

⁴ 其他三支分别为罗氏家族依照血统世代相传一派，外姓弟子衣钵传授的一派以及大运河运量军工形成的一派（即青帮前身）。马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，1992 年，第 222-223 页。

⁵ 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，1992 年，第 348-349 页。

⁶ 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，1992 年，第 351 页。

⁷ 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，中国社会科学出版社，2004 年，第 271 页。

指姚门教。⁸清代实行严禁民间宗教的政策，教派活动不为外人所道。政府官员不甚了解各教的源流派系，有时也笼统将形式类似的教派贴上一个统一标签。白莲教就是一个很好的例子。在官府文件中，“白莲教”一词并非一个统一的教派，而是泛指各类官员所认为的邪教。斋教一词亦是如此，在清代官员的文书中，往往将受到罗教影响的教派视为斋教徒，将那些既奉行吃斋受戒而又有不法行为之人称为“斋匪”。⁹因此，广义来说斋教包括了南方诸省其他与罗教有渊源的教派。当然斋教诸派中以姚门教影响最大，为南方斋教的中枢，留下的资料相对最多，因此本文的关于斋教的论述主要以姚门教为例。

姚门教在形成和发展过程中，主要继承了罗教的内容，但也受到当地宗教传统的影响，形成了自己的特色，最典型的便是吸收了摩尼教和白莲教的元素。

斋教教内信众在给二祖殷继南所作传记中有：“生长舟峰，三岁而母逝，七岁而父亡，赖叔婶之抚育，感道友之周全。鼓银炉而糊口，修摩教而功成”。¹⁰这里的摩教就是指摩尼教。摩尼教在隋唐时期，从西域及东南沿海两线传入中国。因为强调吃斋，外人称信奉该教之人为“吃菜事魔”、“事魔食菜”。该教在唐代传入福建，至晚在宋代传至浙江。浙江的睦州、处州、温州都是摩尼教活动的主要区域。斋教的不少元素与摩尼教相似，除了素食之外，在称呼、活动范围、戒律仪上都有相似之处。如摩尼教称教徒有“斋姊”之称，活动场所称为“斋堂”，而斋教信徒亦有“斋公”、“斋婆”之称，活动之地也以“斋堂”名之。摩尼教崇尚光明，崇拜日月，斋教亦如之，作会（蜡会）之日“燃巨烛十六或十二”，有的地方则点燃两支蜡烛，“称为两轮日月”。¹¹

白莲教的影响主要体现在弥勒崇拜上。罗教创始人罗梦鸿坚决反对白莲教，但是斋教的二祖殷继南开始在信仰中加入弥勒崇拜。而弥勒下生是白莲教的基本特征。乾隆十三年（1748）年福建的老官斋教起事中，就有“弥勒下降诒世”、“弥勒欲入府城”的口号。此外宋元的白莲教，皆以“善、觉、妙、道”四字派命法名。而斋教的信仰者在法名中的第二个字都为“普”字。¹²

此外，姚文字掌教后在前人基础上发展出一套独特的修习阶梯制度：

.....其授受不称**师弟**，名曰**引进**，法名上一字皆曰普，惟以下一字**别之**。同教相称为**道友**，习教次第有**十二步**，最尊者为**总勅**，姚氏子孙世主之，现今主教者名**普德**。凡始入教，**诵真言二十八字**，曰**小乘**。再**进唵大乘经者**，曰**大乘**。再**进曰三乘**，始取普字派法名。再**进可引人为小乘法**，曰**小引**。再**进可引入大乘法**，曰**大引**。此二者能引而不教。再**进曰四句**，**许传二十八字法**，以授**小乘**。再**进曰传灯**，始有**教单**，如**执照然**，始**许领寻常拜佛法事**。再**进曰号勅**，**许传大乘法**；再**进曰明偈**，**许代三乘人取法名**；再**进曰蜡敕**，**许作蜡**

⁸ 民国初年曾有罗教（无为教）徒致函《申报》社，声称：本教系佛教禅宗之别派，为奉佛而不出家之居士所组织。于沙门各宗外，别树一帜，而独得我佛正法眼藏之真传，以阐大乘顿教之秘旨。以慈悲定慧为宗指，以宏法利生为事业，以不着一字，无智无得，万物一体，无他无自为究竟，故立名无为，表有名而无名也。现主持教务者系姚姓名普如者为本教姚祖之裔从。这份声明可以反应所谓的罗教（无为教）在当时主要即指姚门教（老官斋教）。见《无为教徒来函》，《申报》1913年3月4日，第**版。

⁹ 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，上海人民出版社，1992年，第340页。

¹⁰ 《太上祖师三世因由总录·缙云舟转》，王见川等编：《明清民间宗教经卷文献》（第六册），第256页。

¹¹ 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，第388-389页。

¹² 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，第390-391页。

会领法事；再进曰清虚，副掌教事，蜡勅以下，皆听指挥。其教蔓延闽、浙、楚、粤、皖、江、豫、章诸省，有清虚数人分领，时往来焉。各步岁有费用，多寡不一，积储以待清虚，携奉总勅。¹³

这套修习制度对于斋教发展壮大颇为重要。从入教初学的“小乘”到教主的“总勅”共分十二等（“步”），既是习教的进阶，同时也是一套利益分配的等级。从第一步“小乘”到第三步“三乘”都是初等教徒，只有缴钱供奉上面等级的义务，而第四步“小引”和第五步“大引”负责引人入教，不能教授教义。他们每引一人是否有相关报酬不甚清楚。第六步“四句”开始既能引人又能传教，越往上权限越多，不仅能传教还能发布教单、取法名、作法事，而这些事务都是有收益的。如“教单”一般是要教徒供奉相当金钱才能购买，而取法名时也需要出一定资财。根据后来斋教徒的招供“凡拜师传徒，须出根基钱，多寡不等”。¹⁴

蜡会又叫斋会或点蜡，是一种重要的仪式，也是教内领袖获利的重要途径。根据教内人士的介绍，作蜡会的具体情况如下：

其作蜡会，则择僻地，赁夏屋行之。上设无极老祖位，旁列文殊普贤，或曰普理、普波，乃习教之夫妇二人。中设香斗大如柁，建布旗，焚旃檀，旁热巨烛十六，或十二。昼夜诵经不辍，五六日乃罢。领单人辄于蜡坛请发。掌清虚者，预于总勅处携空白印单，存蜡勅所，届是时，视其值而给焉。¹⁵

蜡会通过点蜡诵经，吸引信徒。在高度宗教仪式感的情况下，将“印单”发给领单人，这里的印单可能是一种宗教商品，因为由教主所发，对于信徒来说有着特殊的价值。所以可以“视其值而给焉。”这种仪式一直被斋教徒所采用。1874年8月份，温州地区的斋教徒，在离城十里的南延（今梧埏镇）举行过蜡会。当时部分斋教徒加入天主教，因此一些天主教教徒目睹了此会，并将此会称为“烛灯大普会”。根据天主教徒的描述，在该会上，斋教“主持者潘汝成竟在讲话中公然要人信奉天主教，并挑动民众谋反，使许多与会者为之惊骇！而他则鼓鼓囊囊而归。”我们暂时不讨论其政治反叛层面的内容，从中看到的是，组织者通过作蜡会可以满载而归。¹⁶

“各步岁有费用，多寡不一”。而教主则通过第十一步的“清虚”每年向以下各步收取钱财。由此，才能明白担任教主的姚文字何以数年间就从一个贫苦短工转变成信徒成群，拥有广第良园的富豪。其传记作者称其：“未经纪于婺州，衣粗衣，食淡如也。今倏焉而人衣其衣，人食其食，且不啻若田横之士五百，孟尝之门客三千众，实甚也。矧广第良园，旋易夫革门圭窠之常，朽贯腐仓，顿改夫一丝一粟之素。以为异，异莫异于此矣。以为善，善莫

¹³ 此段内容据江西斋教徒口供记载，道光丁未，江西长宁县斋教头目谢奉嗣“作乱围城”，失败后不少教徒被捕，作者当年参与审讯，将口供采入笔记。【清】采蘅子：《虫鸣漫录》卷一，转引自傅衣凌：《清乾隆福建吃老官斋匪滋事考》，《福建文化季刊》第一卷第四期，第1-2页。

¹⁴ 《军机处录副奏折》，嘉庆二十年十月二十九日两江总督百龄奏折。转引自马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，社科出版社版，276页。

¹⁵ 【清】采蘅子：《虫鸣漫录》卷一，转引自傅衣凌：《清乾隆福建吃老官斋匪滋事考》，《福建文化季刊》第一卷第四期，第1-2页。

¹⁶ 方志刚译编：《施鸿螯事件始末》，《温州文史资料》第9辑，第221页。

善于此矣。”¹⁷其秘诀便在于此。

通过这样一套制度，除了总勅之外，各个层级的人都不同程度能够通过传教获利，即使最低“小乘”和“大乘”也有希望通过不断修行获得升级，从而有望获利。其他传教人士未必能够都如姚文宇一样富甲一方，但是传教的确可以成为他们改善生活的一种手段。我们可以看到不少人的确通过此道积累财富。如温州的斋教徒吴恒选，本已亡命山林，身无分文。但后来通过传教，因“入会者很快发展到好几千人。因入会者要按规定交纳会费，吴全家的生活也就变得十分富有。”¹⁸

这套体制大大刺激斋教徒传教的积极性，因此被姚氏徒子徒孙和其他斋教派别所复制应用。¹⁹从而促进了姚门教和其他斋教派别在浙、闽、赣地区的传播。处州地区是该教早期活动的核心区域。殷继南和姚文宇分别是处州属县缙云县人和庆元县人。姚文宇在庆元设立斋教祖堂，遥控各地教事。姚氏第二代开始向温州迁移。康熙年间，姚文宇之子姚绎（法号普法）已举家迁至温州永嘉县，并在温州设立老官斋教祖堂，温州成为斋教新的中心。²⁰

康熙以后，温州和处州一直是斋教势力较为发达的区域。此外三省交界的各州县也是斋教活跃的区域。姚文宇掌教后期，还一度到湖州、嘉兴、瓶窑、松江各处传教，甚至在广东都拥有一些信众和骨干，²¹姚氏后代的掌教时期，斋教势力已经蔓延到安徽、湖北、湖南等地。这表明山区的信仰又沿着河流等通路向平原地区扩展传播。不过信徒最为集中的还是在三省交界的山区州县，乾隆十三年老官斋案发生地——建安、瓯宁地区——即在其中。

二、与山区棚民相遇

闽、浙、赣交界山区，吸收了大量移民。据记载：“江西、浙江、福建各山县内，向有民人搭棚居住。种麻种菁，开炉煽铁，造纸作菇为业，”而这批移民往往被当地土著称为“棚民”。²²这些在山地垦殖的移民成为斋教信徒的主要来源。

明中后期，时局动荡，山区成为毗连省份民众的避难所。大批脱离原有社会网络的移民，成了各类民间教派的潜在受众。明末各类教派在各地活跃与此类人群的出现不无关系。如河北邢台黄山的刘、彭、马等八姓“聚族以居，持准提斋教”，在他们影响下“乡人相率吃斋者众”。这些人都是“明末避寇屏居山麓”，他们在危难之际，“勾福于神，祈免锋镝，誓世世子孙不茹荤以答神祝”。²³这里的准提斋教应该也是罗教系统的教派。

浙、闽、赣三省之间的情况大致与此相同。后来成为姚门教二祖的殷继南，很可能就是移民后代。他出生于山县缙云，父母早亡，由叔婶抚养。婶婶亡故后，叔叔将其送入金沙寺

17 五云郑载庵拜撰《远七十二公讳文字字汝盛号镜山传》（千八公房第十二镜山公传），《庆元姚氏总谱》。此篇传记也载于王见川：《关于台湾斋教渊源的史料调查》，《民间宗教》第一期。

18 方志刚译编：《施鸿鳌事件始末》，《温州文史资料》第9辑，第219-220页。

19 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，社科出版社版，276页。

20 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，社科出版社版，272页。

21 （崇祯）五年，（姚文宇从徽州）同普金公从陆路到于湖州、嘉兴各处，有长枝普露引进，许普计同孙仰槐在善璠地方明蜡。……登舟往瓶窑，郎引进言有蜡事，及至未备，师（姚文宇）责之求懺。又往松江各处道场。上海县八团地方，有女化师，姓袁法名普鸾，婆媳茹素，况又青年收志，夫亦皈依，乃普金公所化。（崇祯）十三年十月，（姚文宇）回堂，广东有一引进，姓康，劝一女众，原是妖魔应身，皈依之后，修习五通之道。……《太上祖师三世因由总录·庆云三复》，王见川等编：《明清民间宗教经卷文献》（第六册），第291、292、294页。

22 《清文献通考·户口考》，转引自吴宗慈：《江西棚民始末记》，《国史馆馆刊》，第57页。

23 《中宪大夫慎斋曾君暨元配陈恭人合葬墓志铭》，（清）钱陈群《香树斋诗文集》文集卷二十五墓志铭二，清乾隆刻本。

中出家。送入寺庙很可能因其没有庞大亲族，不然应该会有族人收养照顾。很可能他父亲与叔叔就是早期移民。而向他传播罗教的化师也是山地移民。嘉靖二十三年（1544）殷继南跟永康籍银匠丁某做学徒。²⁴闽、浙山区多银矿，明朝官府严禁民间“偷开穴坑”、“私煎银矿”，违者要处以极刑，家属发配边疆。但是还是有移民不断入山开矿，还曾出现叶宗留领导的大规模矿工起义。银匠丁某很可能就是非法开矿煎银的移民。他在遇到殷继南时已是一位修习罗教的“化师”，法号四维普慎。²⁵

三祖姚文宇与殷继南出身类似。他出生于山区庆元县松源，父母早逝，以替人牧鸭为生。他在武义县逆溪地方遇到数位罗教化师。在他们的资助和同意下，开始在逆溪“开堂接众”。其中一位李姓化师，法名普敬，“别号老麻，福建汀州府连城县人，在逆溪种靛营生。”²⁶可见当时罗教信众和传播者多为闽、浙、赣交界的山区垦殖移民。

可以推测，姚氏日后在这些区域所吸收的信徒也多是此类移民。乾隆十三年（1748）老官斋的案发地建安、瓯宁两县斋教活跃，建有多处斋堂。根据地方官员报告，这些地区崇山叠嶂，出产“杉桐麻菁、茶笋纸铁”，棚民在深山中“搭盖藜棚，雇倩工丁，垦辟种作，岁收其利。”²⁷显然这里也是移民开垦聚集之处。

由于清初棚民大量参与起义，清朝统治者极力将一些山林封禁，将移民驱逐回籍。棚民数量曾一度减少。²⁸不过到清中后期，三省交界山区又开始出现移民，尤其在太平天国之后，随着一些地方政府推行招垦政策，移民数量急剧攀升。

处于闽、浙、赣交界的封禁山范围及周边地区是斋教比较活跃的区域。封禁山“约宽百里，其自西北以至西南皆与上饶属境毗连，正北以至正东与广丰民山相接，东南一带则号闽省浦城、崇安接壤，又东面与广丰连界之处，又与浙省江山、龙泉等县密迹，犬牙相错，路径纷歧。”太平天国时期，周边浙、闽、赣各县人民纷纷避祸山中，“入山垦地，借以糊口，”成为“在山耕种棚民”。²⁹而这些新来移民带动斋教的活跃。

太平天国运动过后不久，临近的福建崇安县爆发斋教暴动，封禁山便被官方视为“斋匪”巢穴。左宗棠便说：“窃福建崇安一县，地与江西封禁山一带毗连，县之西北大浑、岚角等处，近有斋匪传徒习教情事。”³⁰根据后来被抓获的暴动成员供称，除了一些头目外，所谓斋匪成员“多江西南丰及崇安东北乡一带棚民。”³¹

其他浙闽山村情况也大致相仿，如浙江衢州龙游县：

自咸丰兵燹后，本县人存者十不逮一，外来客民，温处人占其十之二三，余皆江西广丰人。虽亦有循谨安分之民，而人数既众，所为遂多不法，抗租霸种，习以为常。其间更有传教吃斋、结盟、拜会者，当时谓之斋匪。³²

浙江衢州开化县地处“界徽之婺源，江右之玉山、德兴，浙之遂安、常山，大抵土民居

²⁴ 《太上祖师三世因由总录·缙云舟转》，王见川等编：《明清民间宗教经卷文献》（第六册），第260页。

²⁵ 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，社科出版社版，第266页。

²⁶ 《太上祖师三世因由总录·庆元三复》，王见川等编：《明清民间宗教经卷文献》（第六册），第284页。

²⁷ 《喀尔吉善潘思榘》（乾隆十三年六月二十六日），《清代档案史料选编2》，第564页。

²⁸ 吴宗慈：《江西棚民始末记》，《国史馆馆刊》，第56页。

²⁹ 刘坤一撰、陈代湘、何超凡、龙泽黯、李翠校点：《刘坤一奏疏1》，第100-105页。

³⁰ 《斋匪突陷崇安建阳两城旋即收复现在追缴情形折》（同治五年三月初十日），《左宗棠全集·奏稿3》，第18-20页。

³¹ 《斋匪突陷崇安建阳两城旋即收复现在追缴情形折》（同治五年三月初十日），《左宗棠全集·奏稿3》，第18-20页。

³² （民国）《龙游县志》卷一《通纪》，第二十一-二十二页。《中国地方志集成·浙江府县志辑》，第32页。

十之五，客民三，棚民二。”³³这里的棚民可能为先前开山移民，而客民则是太平天国以后招徕的移民。³⁴ 这些移民“室家妻子困苦艰难，衣则无非褴褛，食则多是苞芦，住居则皆破砖败壁。”³⁵ 斋教在他们中间迅速传播，吃斋之人“处处尚有，而山谷棚民尤多。”³⁶ “每届开堂辄聚男妇数百人”。³⁷

金华汤溪县东谷源“地方山隄僻深，棚民聚居烧炭，阴设斋会。有闽人严姓，习符咒，众奉为祖师。则奉一王姓婴儿为主，谬言其先墓有王气，用相煽惑无藉流民附之。”³⁸

其他斋教传布的区域也存在类似情况。蔡少卿的研究提及石达开部转战川湘时，曾有不少斋会成员，他们不少都是湖南“无业山民”。³⁹可见斋教在山地移民中间颇为盛行，尤其吸引那些“无稽流民”。那么斋教对于山区移民何以有如此大的吸引力？

蒲慕州总结中国古代民间信仰的核心目的在于追求一己之福，崇拜者希望神灵能够切实解决生活中实际的生养、老病、死亡等具体问题。⁴⁰这一论断不仅适合秦汉之时的信仰，也适合清代的斋教徒。刘坤一有人在查处崇安地区斋匪案时，一针见血指出吃斋信众被斋教所惑的原因，即在于“意在祈福。”⁴¹

山区移民多脱离了既有社会网络，较少受到国家和宗族等社会组织的束缚，但同时也意味着缺乏这些机构的保护。他们参与斋教至少在两个层面可以获得救济。一方面，为精神层面的安慰。不少棚民因为躲避战乱而进入深山，战祸的威胁对于他们是如此现实而剧烈。而在深山中生存亦面临诸多困难，生命时刻受到威胁，他们需要寻求精神层面的慰藉。不过，山区是政权控制较弱的区域，这也意味着主流价值体系影响较小（当然主即使在国家控制强的区域，作为主流的儒家也未必能够对下层民众心理形成多少影响），这就给其他“异端”的流行留出了大量的空间。浙江山区往往有崇尚巫鬼之风。如温州地区就“信鬼尚巫之风盛行，佛教盛行，不信佛反以为非。”⁴²“多山少田”的缙云县中，民众“信鬼尚巫，虽士大夫之家亦不能免。”⁴³作为儒家信仰载体的士大夫不仅不能向普通民众传播儒家的伦理价值，而且自身难免“信鬼尚巫”，其他山野村民就可想而知。斋教从罗教继承而来的教义，不仅拥有完整的逻辑体系，并且较佛教、道教更为浅白易懂，自然更适合那些缺少文化的移民。此外斋教还有各类仪式，可助人祈福避祸。这也是为何在遭遇天灾人祸时，往往是斋教之类教派活跃的时候。道光十三年（1833）夏季，江南各地遭遇水灾，此后包括斋教（罗教）在内的各类教派忙于“传灯、点蜡、募缘”等各类活动，以致于引起一些士人的不满，要求有司出手，“当务绝其源”。⁴⁴

第二，物质层面。从已经参与斋教的信徒来说，按照第一部分已经述及的“十二步道行”获利机制，传教也称为劳作之外的谋生手段。尤其在劳作无法获得足够的生存资源时，传教不啻为补充收入。因此上文灾荒年份教派的活跃，除了民众心理需要外，教徒本身利用传教解决收入不足也是原因之一。此外，斋教的伦理规训可能改善信众的生活状况。斋教承袭罗教的戒律，严禁酒色。教内有偈劝导：“酒色财气四堵墙，多少贤愚在内藏，有人跳出墙儿外，便是长生不老方。色做船头气把稍，中间财酒两相交，劝君莫下船中去，四面分明四把

33 《禁三清山進香示（1873年）》，湯肇熙《出山草譜》出山草譜卷一，清光緒昆陽縣署刻本

34 可以参见戴槃：《定严属垦荒章程并招棚民开垦记》，《皇朝经世通编》，上海光绪七年刊本，卷10，第11上-12上。

35 （清）汤肇熙：《出山草谱》卷一，第二十二页。

36 （清）汤肇熙：《出山草谱》卷一，第二十四页。

37 （清）汤肇熙：《禁三清山進香示（1873年）》，《出山草譜》出山草譜卷一，清光緒昆陽縣署刻本。

38 （民国）《汤溪县志》卷一《编年》，第十七-十八页。《中国地方志集成·浙江府县志辑》，第72-73页。

39 蔡少卿：《中国近代会党史研究》，第163页。

40 蒲慕州：《追寻一己之福——中国古代的信仰世界》，台北：允晨文化，1995年，第282页。

41 刘坤一撰、陈代湘、何超凡、龙泽黯、李翠校点：《刘坤一奏疏1》，第100-105页。

42 《光绪乐清县志·风俗》，文成出版社版，第914页。

43 潘树棠纂；葛华、何乃容修：《光绪缙云县志》，《中国地方志集成·浙江府县志辑》，第521页。

44 赵钧《过来语》，载《近代史资料》第41号，第120页。

刀。”此外有大量通俗易懂的偈文劝人戒酒禁色。⁴⁵开山棚民容易嗜酒纵欲，这些规训能够正中他们弱点。如果按照这些伦理的规训，戒除酒色，不仅可以保养身体，还可减少花费。自然可以让他们感到入教的好处。

更为重要的是，成为斋教徒可能意味着一系列互助救济。罗教在传播时，便建立了一些救济机制，其中最典型的的就是设立庵堂供水手养老之用。⁴⁶斋教可能继承了这一传统。姚文宇在世时，便采取“贫穷者给之衣粮，暴路者助之棺衾，涉渡之水架以桥梁，难行之路砌而平坦”等举措。⁴⁷此后斋教内部一直有互助活动。乾隆十三年福建老官斋案中，闽浙总督喀尔吉善在六月份的奏折提及当地教众平日除了“诵经礼忏”外，还救济那些“废疾衰老无所依倚之人。”⁴⁸这些被救济之人很可能是加入斋教的山民或其家属亲友。斋教在此相当于发挥了宗族机构或慈善机构的部分功能，这对于脱离既有社会秩序的移民来说尤其吸引力。

在山区的移民社会中，斋教之类结社成为一种互助机制。犹如宗族在发挥保障的同时，成为身份认同的标签。斋教在发挥救济功能的同时也成为一种有着清晰边界的共同体。崇奉同一神灵成为信众共同的纽带，入教后教首一般都会赐予一个新的法名，法名中第二个字皆为“普”，即象征着成为兄弟姐妹。定期斋堂念经聚会更是加强信众之间的联系，教徒们可以通过研讨教义获得共同话题，产生共同的规范。此外，教内人士相互救济更增加了认同感。由是，斋教成为移民群体认同产生的一种机制。

移民们正是依靠这种共同体争取生存资源，应对各种风险。但与此同时，内部的认同也可能激化移民群体（客籍）与土著群体（土籍）的矛盾，甚至导致移民群体内部“教民”与“非教民”的矛盾。乾隆十三年建瓯地区的老官斋教案中，吃斋教徒“与附近不吃斋村民素日原系交恶”⁴⁹在实际行政中，出于治理成本考虑，多数地方官员平时并不太多过问异端信仰本身，他们担忧的是信仰本身所带来的族群矛盾激化以及隐含的秩序隐患。汤肇熙主政浙江开化县时严禁包括斋教的各类宗教结会，原因便在于他顾虑那些信众一旦结成群体，遇事便可“滋闹、挟制、扛帮，”成为地方秩序挑战者。⁵⁰在山区遭遇生存资源紧张的情况下，各个群体内部认同的加强为群体间的暴力冲突埋下种子。

三、从“斋教”到“斋匪”

斋教的日常活动除了持斋外，并没有与暴力特别相关内容。查办斋教的官员向乾隆帝报告时也毫不讳言“其平日所为不过诵经礼忏”。⁵¹此类教派属于韩书瑞所说的“念经型”，原本不容易与暴力活动产生联系。但是在清代后期，以斋教徒名义发生的暴力事件逐渐频繁。据统计雍正、乾隆、嘉庆三朝，仅有两次斋教暴动，一次为乾隆十三年（1748）闽北两县的老官斋教（即姚门教）暴动，一次为嘉庆八年（1803）宁都、广昌、石城廖干周等人的未遂

45 如“酒本合欢养内神，节饮方能益己身。修真炼士须戒酒，清静玲宫做主人。”“色本续世继后代，劝君切莫尽贪淫，修得精固丹田壮，返本还原始透玄。”“财是养命之根源，劝君须要义中求，悟道玄人修炼子，莫将此物挂心头。”“人气存心祸不招，劝君毁却斩人刀，莫招怨恨争长短，自古恒言忍自高。”《太上祖师三世因由总录·缙云舟转》，王见川等编：《明清民间宗教经卷文献》（第六册），第258-259页。

46

47 《太上祖师三世因由总录·庆云三复》，王见川等编：《明清民间宗教经卷文献》（第六册），第298页。

48 《喀尔吉善潘思渠折》（乾隆十三年六月二十六日），《清代档案史料选编2》，第563页。

49 《新柱等折》（乾隆十三年四月初二日），《清代档案史料选编2》，第551页。

50 （清）汤肇熙：《禁结党饮香灰酒示》，《出山草谱》卷一，清光绪昆阳县署刻本。

51 《喀尔吉善潘思渠折》（乾隆十三年六月二十六日），《清代档案史料选编2》，第563页。

暴动。但道光以后，斋匪暴动频繁，同治和光绪尤为集中。⁵²闽、浙、赣三省内，暴动在同治时期最为集中（见表一），那么这些平日以“诵经礼忏”为主教派如何转向暴力化？

表一：晚清闽浙赣三省交界斋匪暴动列表

时间	地点	简要情况
同治五年 (1866)	福建崇安县	斋匪攻占崇安、建阳等县城。时任闽浙总督的左宗棠听闻战报，立即调集闽、浙六路官军围剿。在官军重兵压境下，匪徒从建阳县城撤退，一路“由西北回崇安”，一路“由西南出麻沙以入九龙山”。
同治五年	江西吉安永新县	该县韩懿章与署莲花营都司余大胜访闻南乡绥源山内有匪徒（斋匪）敛钱聚众，图扑县城，即共同商定畚大胜与县丞、典史督率兵勇绅团防守城池，韩懿章与把总、外委率领兵勇添调乡团驰往拏办；一面移会连界之龙泉、泰和等县，一体兜捕。
同治七年	浙江处州庆元县	山岱村地方，访有斋匪潜集滋事。九月十一日前往查拿。该匪窜至四都境内，放火杀人，召集匪类，意在拒敌。该县会营募勇迎头堵剿。该匪闻风窜踞险要，负隅固守，距城约二十里许。四面搜捕，获得吴启庭等二名，起获红布上写“威灵显应，万古传名”八字。并称匪首头戴红巾，身披红布，令人吃斋。愿入教者，散给红布为号，纠约闽匪。现已聚集二三百人等语
同治八年	浙江衢州龙游县	有斋匪之警，一夕数惊。自咸丰兵燹后，本县人存者十不逮一，外来客民，温处人占其十之二三，余皆江西广丰人。……其间更有传教、吃斋、结盟、拜会者，当时谓之斋匪。匪首周洪海意图起事，而客民附和者颇众。是年三月三日，遂有三更破城之谣，居民惶恐，连夜出城避匿。继又传言北乡某处藏贼若干，东西两乡匪聚尤众，人心益觉不安。知县黄秉中虽令民团防堵而谣言终不止，自八月后乱象益甚，竟无宁日矣。
同治九年	福建崇安、浦城交界黄柏山	内“聚有江西斋匪多人，希图起事。”后因走漏消息被当局挫败。
同治十年	浙江严州寿昌县	谣传外来匪徒（斋匪）暗中勾结滋事。经该县督团缉获徐保洪、包膳幅二名。五月初八夜间，复有匪徒突入严州府城。
光绪五年 (1879)	浙江金华汤溪县	东谷源之大坑地方山赋僻深，棚民聚居烧炭，阴设斋会。有闽人严姓，习符咒，众奉为祖师。则奉一王姓婴儿为主，谬言其先墓有王气，用相煽惑无藉流民附之。约以十年十月十五日揭竿起事。附近居民纷纷迁避，时署理汤溪县知县赵煦侦悉匪中虚实，谓此宜速剿，缓则难图。以仓猝不及请发省兵。而金华府协镇舒奎方调充武闾差事，乃密启金华府知府赵曾向檄金华县募勇助守东路各要隘，而自与分汛把总庞载熙率乡勇二千余人，于十月十一日黎明分道疾进，直捣匪巢。

⁵² 马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，第 380 页。

		<p>匪猝不及防，仓皇惊窜，当获住伪丞相以下二十八人，王姓婴儿亦一并就擒，搜出伪官木质印章及火器、旗帜多件，余匪溃散。于是按照严办土匪章程先斩首要六名，梟示。翌日，讹传匪党千人将谋劫狱，乃解二十二匪于府，由府署派员鞠治。复正法八名，其余十四名并后数日获解之。伪国师等俱分别严办，事定，省城调洋枪队二千人，至取犒赏二千余缗而去，而巡抚某以履新之始，不欲将判案入告，遂并府县弥乱之功抑而不叙云。</p>
--	--	---

资料来源：《左宗棠全集·奏稿 3》，第 18-20 页；（民国）《龙游县志》卷一《通纪》，第二十一-二十二页。《中国地方志集成·浙江府县志辑》，第 32 页；（清）王先谦：《东华续录（同治朝）》同治九十，清刻本；马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，第 382 页；（民国）《汤溪县志》卷一《编年》，第十七-十八页。《中国地方志集成·浙江府县志辑》，第 72-73 页。

负责平定叛乱的官员或书写地方文献的士人多将此类暴动归咎与“斋匪”，似乎是斋教的蛊惑导致教民发生叛乱。最典型莫过于左宗棠对同治五年福建崇安的斋匪叛乱报告：

愚民动于（斋教）祸福之说，易为所惑。迨人数既多，竟敢谋为叛逆，戕官踞城，蔓延四起。其党坚交秘，执迷不悟，实有出寻常意料之外者。⁵³

这一说法似乎构成一条密谋暴动的逻辑链，但却也留下很多未决之疑。所谓的斋匪叛乱事件中，一些口号或装扮并没有展现出斋教元素。如崇安暴动时，打出写有“天国普有”的旗帜，起义者还头裹白巾、绿巾、红巾。而庆元斋匪暴动时，官方起获红布，上写“威灵显应，万古传名”八字。并称“”匪首头戴红巾，身披红布”。⁵⁴这些口号都不是斋教所应有的内容，“天国普有”像是受到太平天国的影响，而头裹各色布巾则是哥老会等会党做派。

不少信息指出斋教活动不具有谋反叛乱的意图。左宗棠部署围剿崇安斋匪路过兴化府时，当地官绅“均言近日地方吃斋念佛者多，但无包藏祸心之事。”⁵⁵无独有偶，汤肇熙在开化任县令时，严禁吃斋拜会之类行为。不仅自撰禁条，招贴告知，而且经常向谒见的绅耆询问情况，但是地方绅耆“大抵多以斋而不匪为辞”，为吃斋受戒者辩护。⁵⁶

一些比较开明的官员已经看到信仰斋教并不一定导致叛乱。何绍祺就提出：“持斋者未必皆习教，习教者未必皆敛钱，敛钱者未必皆谋逆。”如果一并处以重刑，可能导致局面失控，因此他建议政府在镇压过程中，区别对待：“有官职僭号者为一等，有藏匿军器者为一等，有荒谬经咒者为一等，仅持斋念佛者为一等。”⁵⁷

那么斋教徒为何会发起叛乱？可惜官员很少报告具体的事件肇因，即使有所涉及也疑点重重。如乾隆十三年老官斋叛乱，地方官员声称因为官方抓捕了其中一位会首，其他各会首和重要成员因为害怕牵连而选择劫狱。但是此说难以令人信服。既然害怕受到牵连，为何不是选择逃跑而是选择劫狱。进城劫狱等于与官方相对立，面对官军的围剿，风险极大。按照常理，劫狱行动应该尽量低调迅速，这样才能避免走漏风声，降低官府的压力。但是这群斋教徒却大肆招摇，惟恐他人不知。严氏女巫带领的一路吹吹跳跳，旗帜飘飘。其他两路还烧

⁵³ 《官军越境追剿斋匪殄灭净尽并提臣前赴署任折》（同治五年四月十九日），《左宗棠全集·奏稿 3》，第 34-35 页。

⁵⁴ （光绪）《庆元县志》卷十二《艺文·奏疏五》，《中国地方志集成·浙江府县志辑》，第 871-872 页。

⁵⁵ 《官军越境追剿斋匪殄灭净尽并提臣前赴署任折》（同治五年四月十九日），《左宗棠全集·奏稿 3》，第 34-35 页。

⁵⁶ 《复西安张明府言保甲事》，（清）汤肇熙：《出山草谱》卷一，清光绪昆阳县署刻本。

⁵⁷ 何绍祺《请臬宪区别斋匪稟》，（清）葛士浚：《清经世文续编》卷八十七刑政四，清光绪石印本。

了其他大量村落，似乎惟恐官府不知。

进一步细查，很多所谓斋匪叛乱的只是得自“谣闻”、“传闻”（见表一），并未有确切证据。很多案件中，所谓的斋匪也没有叛乱的行动，而是官兵围剿后缴获了一些令旗、簿册、分封官职名册等。这是否能够成为斋教徒谋反的证据？正如一位地方严禁斋教的官员所怀疑的，“所称伪官、伪印，查询僧、道教中亦有天曹官职、法司印信”，因此这些在孤立情况下并不能够成为谋划叛乱的证据。⁵⁸

此外，即使有后续的暴力行为，此暴动是否真的就是斋教蓄意已久？如果回答是肯定的，那么为何当官兵围剿时，斋匪几乎没有有什么抵抗就四散逃窜？因此，很可能这些暴动并不是蓄谋已久的，而很可能是在外界刺激下，矛盾逐步升级的结果。汤溪县所谓斋匪暴乱即是如此。

汤溪县的暴动并非如表一所说出于斋匪蓄谋，而是另有原委。光绪五年（1879），汤溪县城外一个山村突然流传一个颇为神秘的说法，该村朱姓家庭生有一儿“状貌魁梧，其两耳直垂肩际，乡愚无知争以为帝王之相”，有一游方僧人遇见后就要求收养孩子，遭到孩子父母拒绝后，说了诸如“必欲留必致灭门”之类预言。这一传闻被知县听闻，立即派差役下乡缉拿游方僧人、朱姓夫妇及其子。不过差役只抓到朱氏夫妇到案，此后知县“严刑讯究”，此举招致乡中父老的不平，于是“联名具保”。但是知县强硬宣布“此儿不至，则其父母必不能出狱。”此举激怒乡人，于是“出知单邀集各村庄公议今年钱粮一文不纳。”从而导致纳粮之时无一人纳粮。知县怒火中烧之下，“以顽发抗粮详府且请借兵弹压。”在此种情况下，乡人才“高扯义旗，各执器械，声言先攻县城，杀官劫狱，然后会同九龙山，再破金华府城。”此言是否属实还需斟酌，不过知县便以此为民变依据，“连夜带印上郡告变求救”。第二天乡民攻入县城，但是并没有大肆抢掠。“邑中诸绅士出为理说”的情况下，“仓库衙署一切均不敢动。”⁵⁹这哪里是斋匪谋逆暴动？分明是官方激发出来的民变，只是这些民可能都是移民，而斋教是他们之间重要纽带，从而被贴上斋匪暴动的标签。怪不得随后新任浙江省巡抚“不欲将判案入告，遂并府县弥乱之功抑而不叙云（参见表一）”，因为此事根本就是知县之责。

斋匪暴动可能肇始于一些偶然因素，但亦有一个潜在的脉络，那就是土客之间的矛盾。三省多次斋教的暴动多爆发于灾荒年份，当地都处于粮食匮乏的状态。同治八年（1869）龙游县“有斋匪之警”。此时该县已经连续两年遭受水灾。七年五月的水灾造成“歉收田凡一千三百二顷十一亩有奇，占原额十分之三强。”⁶⁰同治九年（1870）崇安、浦城交界的黄柏山斋匪希图起事也正是江西遭遇天灾民食紧张之时。⁶¹光绪五年汤溪县地区也遭受着旱灾。毗邻的东阳县便因土民向富户争夺粮食而爆发大规模械斗。媒体还一度将此事与汤溪县斋匪暴动混淆。⁶²

遭遇荒歉，民食供应成为最大问题。移民生活较少保障，他们需要争取食物。土著富户可能因担心遭到移民的抢夺而心生恐惧，双方关系处于紧张状态。因此我们可以理解，为何不少记录都出现斋匪来袭的传闻，这些传闻可能是土著富户有意无意传出，他们或者出于恐惧，或者希望借此利用官方力量打压客籍。

斋教的确成为移民形成坚固团体的纽带，但是在暴力行动中有军旅经历的人士才是真正的动员主力。崇安县的暴动主要组织者并不是单纯的斋教信徒，而是一些游兵散勇和土匪：

.....陆续捕获窜扰建阳匪首伪大将军陈奴奴即武生陈顺光、伪将军安亲德即安宝妹、王

⁵⁸（清）汤肇熙《出山草谱》出山草谱卷一，清光绪昆阳县署刻本

⁵⁹《申报》1879年12月14日，第1版。

⁶⁰（民国）《龙游县志》卷一《通纪》，第二十一页。《中国地方志集成·浙江府县志辑》，第32页。

⁶¹马西沙、韩秉方：《中国民间宗教史》，第365页。

⁶²《东阳乱耗》，《申报》1879年12月14日，第2版；《论汤溪斋匪肇乱案》，《申报》1879年12月21日，第1版。

搭耳、杨富孙及起意倡乱之杨维忠，并安寿仔（即安邦庆）、安喜孙叛属，讯明分别办理。……据江西广信府知府钟世桢稟报，讯据安寿仔供：系崇安县人，年二十六岁，先充营兵，因事责革。并供认与陈奴奴等为首谋叛、戕官、踞城等情不讳。⁶³

张树英留驻崇安搜剿余匪，除捕斩匪首陈奴奴等七犯，业经专折奏报外，续获谋逆戕官匪首安坎孙，……并获造作谣言，乘机抢掠之游勇陈文魁、陈得胜、吴弟等三名；又会同分驻崇安之署建宁左营游击朱光斗，查拿通逆内应之革兵彭元标、吴占标、衷占兴、衷元标、范占荣、周海亮、章凤高等七犯。……

据黄少春、张树英擒获逆匪金供：首匪胡老大、胡老三，江西南昌府人，家距府城四十里，在家为匪不法，房屋被焚，逃至铅山石溪空口牌楼前破屋内居住。大浑、石塘诸战，该逆兄弟曾否歼毙，无从查悉。比即飞咨江西抚臣派队搜山，闽军随时会缉。⁶⁴

以上资料可以看到负责暴动的人员一大部分为武生、革退兵勇和土匪，或许我们可以称之为“武装份子”。他们并非采用斋教的宗教资源动员棚民，而是用他们所熟悉的一套军事政治的象征资源进行动员。在官方对于永新县斋匪情况的报告中我们可以看到相当具体的细节：

……此次图攻永新县城，系吴宾官起意，勾结金生亮、吴光发纠党帮助。吴宾官因知李合其曾充贼目，藏有伪印执照，足以假藉号召。至年七、八月，屡至李合其山棚声称愿归管束，请封伪职。李合其当给吴宾官正统戎执照，并刑审伪印一颗，在逃之段五庆副统戎执照、统戎伪印一颗，金生亮统戎执照，涂观生巡察伪印一颗；邹三指挥执照。吴宾官又向李合其领得空白纸布伪照多张，转封吴光发为大元帅，杨九俚为将军，吴亚俚为检点，张映俚为指挥，并各处胁人上名，每名得钱三千六百文至三百六十文不等。随令周接俚制造旗帜，雇在逃铁匠唐恩普、朱寿禄打造大刀、腰刀数十把，遥胁过路铁匠朱鹤龄打造大刀、腰刀各一把，买得线抢数杆。议定九月初八夜子丑时破城，令龙仔官邀党入城为内应，商允城内斋妇刘陈氏窝藏，其乞养子刘接开适在外不知情。又约定攻城之时，各人左手衣

⁶³ 《官军越境追剿斋匪殄灭净尽并提臣前赴署任折》（同治五年四月十九日），《左宗棠全集·奏稿3》，第34-35页。

⁶⁴ 《查办崇安斋教余匪搜缉事竣折》（同治五年十月初十日），《左宗棠全集·奏稿3》，第152-154页。

袖卷起，右手衣袖放落，左腿裤脚卷起，右腿裤脚放落，南乡以红布裹头，西乡以青布裹头，东乡以三角纸旗插头为记，城内放火，城外杀人。张凤开恐吴宾官人少，转纠永宁县（民国改宁冈县）斋匪黄三洋邀人助逆。……⁶⁵

李合其曾被太平天国翼王石达开掳去，并在太平军内担任“刑审”一职。被官军击败后，“携带大军略、统戎、巡察、刑审伪印四颗，潜逃回江”，⁶⁶因此才有引文中所提及各种印信。从以上文字，我们可以看到吴宾官等人正是借助他的这套权力象征工具，分封职位。同时，还用暴力威胁和金钱收买的方式招募团伙，制备武器。其中采用的手段完全与斋教的宗教内容无关。由此，我们就可以理解为何同治五年以后的斋匪暴动并没有明显的斋教元素。

斋教暴乱的组织者不乏来自斋教等教派的信徒，但暴乱的组织手段和所采用的象征资源却与斋教关系并不密切。斋教的信仰力量并不足以动员，其内部人员都知道“斋匪骗不动人”，而是要采取“封官”等新的手段吸引民众。⁶⁷唯一与斋教有关的动员资源可能是暴动所需的资金。因为那些革退兵勇和土匪不太可能拥有丰富的积蓄，而斋教领袖可以通过传教积累部分资金，所以当时民间有“斋匪出钱，会匪打仗之说。”⁶⁸

将斋匪叛乱归结为斋教的传播，显然将问题简单化。因为真正的问题恰恰与土客矛盾的激化及太平天国以后武装力量的散布有关。斋匪暴动的动员依靠一系列军事政治的制度，而暴动的组织者部分曾参与太平天国的武装，部分则是参与清军的团勇，无论如何他们都是战后军事力量过剩的产物。

结论

明朝中后期，罗教在山区的传播，衍生了各种变异教派，在南方一般称为斋教。其中以处州地区姚氏家族为核心的教派影响为大。姚氏创制了一套可以使各级传播者获得不同收益的“十二步道行”而使教势扩展迅猛，其后这套体制也被其他斋教团体所复制。斋教在山区的迅速扩展与其满足大量开山棚民的精神与物质需求有密切关系。斋教仪式和活动为在山中开垦的棚民提供面对灾害威胁的心理力量，同时，为这群移民提供了群体凝聚的条件以及种种互助的机制，成为山区移民形成认同的一种方式。这背后折射的是在人口压力下，清政府在思想意识形态以及基层的保障体系建设所面临的种种缺失。

不过斋教在浙、闽、赣三省山区的传播并没有成为棚民参与各种暴动的刺激因素。以左宗棠为代表的官员将晚清闽、浙、赣一系列斋匪起义归结为斋教的传播，无疑将复杂的问题简单化。其实在太平天国运动以后一系列密集的斋教起义与斋教信仰传播并无太直接的联系，而是与土客之间的资源争夺及大量失业军人流入有关。较之于土著，移民的生计模式可能更加无法抵抗天灾的侵袭。多数山区并没有建立义仓等粮食救济体系。一旦遇到灾害，移民便面临饿毙山野的命运。其中比较强悍者自然更可能采取铤而走险的方式。这也是客民所恐惧之事，因此土著往往利用斋匪暴乱的说法打压移民。

⁶⁵ 《永新县匪徒谋逆获犯审办折》（同治五年十二月二十日），《刘坤一遗集 1》，第 114-116 页。

⁶⁶ 同前

⁶⁷ （清）张鉴：《雷塘庵主弟子记》卷五，清光绪间仪征阮氏刻本。

⁶⁸ 史部集成·历史地理与方志·方志典籍·各地县志·河南·新乡县续志（成文出版社影民国十二年刻本）·卷三·艺文志上·公牍

晚清长期的叛乱，特别是太平天国运动，导致了大量过剩的武装力量。不少斋教领袖也曾参与太平天国运动中的暴乱。太平天国运动被镇压后，不少参与者流亡四处，而那些战时募建起来的团勇也面临解散的命运。这些过剩的武装力量渗透到山林，用之前习得的军事组织方法动员移民，从而造成了同治时期浙、闽、赣三省山区连续的斋教起义。所以太平天国运动过后一波连续的斋匪暴动，是当时政府无法垄断武力与土客矛盾激化所致，而非异端思想传播的结果。

生存資源供給源としての山野の役割

——清代中国を事例とした考察

相原佳之

1. はじめに

本論の目的は、清代中国において山野¹が地域社会の人びとの生存に関わる一定の経済基盤としての役割を果たしていたという見通しのもとで、それが如何なる仕組みと論理のもとで維持されていたのかに関して、一定の見解を示すことにある。具体的には、当時の裁判行政文書の一つである「刑科題本」から山野の所有・利用・管理にかかわる記述を抽出整理して検討を加える。なかでも、史料上に「官山」や「官荒」と称される、いわゆる「無主の山野」においておこなわれた人びとの営みを取り上げる。このことにより、これまで農地開墾や林業経営やといった主要な土地利用・土地管理方式の影に隠れて検討の対象とされにくかった、薪や草などの燃料採取や、小規模な樹木栽培など、人びとが日常的に生存のためにおこなった山野とのかかわりに光をあててみたい。

2. 重層的コモンズ論・「業」論と「官山」

まず、なぜ本論で「官山」や「官荒」に着目するのか、自然資源にかかわるいくつかの先行研究をとりあげつつ述べる。

今日、自然資源と人びとのかかわりを検討する際に「コモンズ」という概念と言葉を用いた分析が盛行している。その論の広がり、資源分配をめぐる不公正さの是正を目指す社会運動の促進に繋げる意図をもつものから、実態として過去に存在した資源利用のあり方を検討するものまで幅広い²。

なかでも本論でとくに参照したのが宮内泰介の「レジティマシー (legitimacy 正統性／正当性)」概念を用いた重層的コモンズ論である。宮内のいうレジティマシーとは、「ある環境について、誰がどんな価値のもとに、あるいはどんなしくみのもとに、かかわり、管理していくか、ということについて社会的認知・承認がなされた状態 (あるいは、認知・承認の様態) を指している³」。この論の一つの特長は、ある土地の自然環境に対して、ある人びとは濃いかかわりを持ち、他のある人びとは薄いかかわりを持つという形で重層的

なかかわりが存在しており、それぞれのかかわりが社会的に認知されている状態を前提としていることにある。濃淡のあるそれぞれのかかわり（権利）の源泉や正統性を分析するという手法は、耕地や宅地などと比べればかかわりや権限が重層的になりやすい森林や水面などにおける人びとと自然資源とのかかわりを検討するに際して、有効な参照枠組みとなる。

一方、清代中国において人びとがどのような観念のもとにいかなる仕組みで自然を領有していたのかについては、寺田浩明による整理がある。寺田によれば、清代中国農村における土地売買契約や典契約などの定型などにもとづくかぎり、当時の契約で取引の対象となっているのは実体としての自然領域に対する包括的排他的全面的な支配ではなく、経営収益のための自然領域である。そして収益行為をおこなう対象領域と、そこに働きかければ相応の収益を生み出す収益方法とがまとめて「業」として取引されるとする。この「業」について寺田は、「特定の（ある領域姓を持つ）収益経営形態を巡り、それぞれに独自の正当性が社会的に成り立ち対世的に承認され、その正当性が順次、次主へと付与されて行くという正当性付与の連鎖構造が存在している」[寺田 1989: 219] とし、この連鎖構造を「来歴と管業のシステム」と名付けている。

二つの論を比較すれば、対象となる自然領域に対して複数のかかわりを持つ主体があることを容認するシステムであること、正当性／正統性の付与と社会的認知が重要となる点などで、寺田の「業」論で整理された清代の自然領有システムは宮内の重層的コモンズ論と相応の一致を見る。

ただし、寺田の挙げる「業」で、宮内のいう濃いかかわりから薄いかかわりまでの全てが捉えられているわけではない。「業」の範疇に含まれるのは相応に安定した収益形態に限定され、それらは基本的には契約文書などで売買・譲渡されるものである。いわば、さまざまなかかわりのうち、「商品化」された部分がはじめて「業」となる。山野について言えば、収益を生み出す林業経営やそれに関わる労働などは「業」と見なされやすいが、薪取りをはじめとする日常的な山野とのかかわりは「業」となりにくい。

もちろん、「業」のある土地でも収益活動と重層的に日常的な山野とのかかわりがあったと想定される。ただ、「業」のある土地では薪取りなどのかかわりも含めて「業」に付随して取引されることが多いと考えられるため、その内実が史料上の文字としてあらわれづらい。それに対し、「業」となりにくい自然資源とのかかわりが最も実行されやすく、表面にあらわれやすいのが、誰も「業」を持っていない土地である。これらの土地は観念上はい

まだ王朝の統御のもとにあることから、史料上「官」の語をつけて、地形等に応じて「官地」、「官山」、「官荒」、「官湖」、「官水」などと表記された⁴。本論で山野と人とのかかわりを分析する際に、「官山」「官荒」に着目する理由は、上記のごとく、この誰も業を持たない土地においてこそ、薪取りなどのマイナーだが生業にとっては無視できない山野とのかかわりが表に現れやすいからである。

「官山」は誰も業を持たない土地であるが、地域のなかで複数の人びとが土地にかかわりを持っている場合が多く、当然のことながら全く無秩序な状態で存在していたわけではない。かかわりを持つ人びとそれぞれが、何らかの形で自らのかかわりに正統性を基礎づけながら、土地に関与していた。その正統性の交錯のあり方を紐解き、いかなる秩序やルールのもとで人びとと山野とのかかわりが実現されていたのかを検討するのが、本論の課題となる。

本論に入る前に「官山」の類型につき注記しておく。清代の史料をみるかぎり、史料上で「官山」と表記される土地は、その経営・管理・利用に国家的行政的コントロールがどの程度濃くおよんでいるのかに着目して、次の三類型に分類できる。第一は、官が管理・経営し、かつ官が利用する山である。皇族の狩猟用の囲場や、盛京郊外で木材や人参が採取された山、また皇帝の陵墓周辺の土地などがこれにあたる。第二は、叛乱の淵藪となった、あるいはその虞があるなどの理由で、官が明文で立ち入りを禁じ開発を停止した山である。原則として官も民もその土地や土地から上がる生産物を利用できない。全国各地にある「封禁山」や、利用を停止（封閉）された鉱山はここに含まれる。官側の政策上、第一、第二の官山については、民による利用を制限する施策、具体的には盗伐・盗採の禁止や封禁の確実な実行が課題であった。三番目が、官が直接経営・管理せず、かつ誰の業ともなっていないため山である。「未陞科（税糧未設定）の地」、「無主の地」と同義であり「無税官山」と表記されることもある⁵。本論でおもに扱うのはこの第三の類型の官山である。

この三番目の類型の官山には誰もがアクセスでき、そこが生存のための資源供給地となっていたことについては、先行研究でも指摘されている。たとえば仁井田陞は、法制史の観点から、官山が無主であり原則として誰に対しても利用が認められていたことを夙に指摘している⁶。また森田明は福建省の『福寧府志』の資料を用い、官山の利用が広く一般に開放されていたが、開発の進行にともない次第に私有化が促されたものの、私占者も用益条件のよい場所から占有していくため、私有化の範囲には自ずから一定の限界があったことを論じる⁷。メンジーズは官山が自由利用に供されていたと同時に、王朝が開墾という形

で今後課税地に含める可能性のある土地として位置づけている⁸。さらに漁業や交通に使われる内水面においても同様な「官」の語が冠された「官湖」という語が使用されていた事例に基づき、太田出が論じている。太田は太湖流域の漁民の事例を用いて、この事例と同じく「官」の語を冠されて「官湖」と呼ばれる水面が存在し、そこでは誰も利用権を持っていないことを指摘した。またその土地が生活弱者への資源供給地としての役割を果たしていたとも見通している⁹。また著名な環境史家マーク・エルビンも、「官山」という用語は用いていないが、誰もがアクセスできる土地に野草や木の実が自生し、それらの自然産物を人びとが利用できたことが、その土地の民衆の健康維持や長寿の実現に役立った可能性を指摘している¹⁰。

これらの研究では、おおむね官山のオープンアクセス性が強調されたが、その内実にさらに一步踏み込んで官山の存在形態を分析するため、本論では「刑科題本」という資料群から事例を抽出し分析する。刑科題本とは清代の裁判文書の一類型であり、科刑に際し皇帝の決定が必要な重大案件について量刑を決めるため、総督・巡撫や三法司（刑部・都察院・大理寺）が皇帝に提出した文書である。清代の刑事裁判では容疑者および関係者の供述が事実認定と科刑決定の重要な判断材料となったため、刑科題本にも容疑者・関係者の供述が記述される。供述には容疑者・関係者の年齢や籍貫のほか、生活状況や事件現場の状況、事件に至る経緯などが含まれる。現在、そこに見られる多様な情報を抽出してさまざまな社会史研究に応用する研究が盛んになっている¹¹。

本論で利用した刑科題本は、中国第一歴史檔案館と、中央研究院歴史語言研究所に所蔵される。出典を示す場合にはそれぞれ下記の略称を用い、檔案番号、作成者、年月日、地域とともに示した。また歴史語言研究所所蔵のものうち、張偉仁主編『明清檔案』として出版されているものは、その情報も併記した。

- ・一檔刑：中国第一歴史檔案館所蔵刑科題本。
- ・内大：中央研究院歴史語言研究所所蔵内閣大庫檔案。

3. 刑科題本からの事例抽出

①山野における経済活動の多様性

まず、山野利用の重層性、多様性を見るため、史料の中から様々な経済活動の事例を挙げる。順不同にあげれば、タケノコ取りや放牧¹²、「断腸毒草」の採取¹³、炊爨用の竹の葉の採取¹⁴、田に鋤き込むための草の採取¹⁵¹⁶、松葉の採取¹⁷、雀など小鳥の捕獲¹⁸、墨石の採

取¹⁹、採石と販売²⁰などがあつた。また風水保護や田畑の灌漑を目的に樹木を植栽する場合もあつた²¹。

②官山における「樵採」

山野の利用方式は上記のごとく多様であるが、官山での活動として史料上もっとも多く出現するのは「樵採」や「樵牧」と表記される燃材採取と、死者の埋葬である。以下、燃材採取に関する事例を中心に検討する。

官山は基本的には誰もがアクセス可能な土地として認識されていた。実際に「官山」は他人の「税業」と明確に区別され、「官山」ではおこなえる薪取り・草刈りが「税業」では認められないという認識がある程度共有されていたことは、官山だと思い込んで他人の土地に入ってしまった者の供述などから伺うことができる²²。

史料上では、官山で燃材採取をするのはどのような人びとであると、表記されているのか、具体的にみてみたい。最も一般的なのが、「附近居民」ないし「附近郷民」すなわち近くに住民である²³²⁴²⁵²⁶。「衆姓」とする事例もある²⁷。一方、「族衆」²⁸や、二つの村²⁹、近くにある三つの保³⁰に対し官山での樵採が認められている事例もある。このような特定の族姓や村の名が明示されている場合、燃材採取をおこなう人びとが地理的位置などから実質上その範囲に限られていたことのみを示すのか、明示された一族や村がその土地に対して優先的にかかわる権限を有していたのかによって意義付けが異なるが、どちらであるのか判断できない場合が多い。また民間の認識としては、官山が村の境界にある場合、それぞれの村が近い方から利用するのが通例であつたことがうかがわれる³¹。

一人あるいは一族のみで官山での資源独占を図り、他人の侵入や燃材採取を認めないことは禁止される場合が多い。他人の資源利用を阻む側の言い分としては、山が自分の村の近くにあることや³²、生えている芝草が少ないこと³³、自分の祖先の墳墓があること³⁴などがあつたが、判決ではいずれも独占的な利用は斥けられている。また、秋冬の柴草が少なくなる時期を見越してあらかじめ一定区画の山場草地に印を付けておくことも禁止されている³⁵。さらに、連日何度も柴を刈りに行くことも非難された³⁶。

また興味深い事例として、官山の資源を優先的に使えるのは土地を持たない居民であると判断された例がある。乾隆三十四年、江西の余干県において、官山上の薪採取をめぐる万姓と朱姓が争いを起こした案件である。判決では、「争いの対象となつた官山を調査したところ、砂礫地であり開墾はできず、『無業居民』（土地を持たない住民）に薪取りを認

めるべきである。朱姓と万姓は官山附近に山場を持っており、炊爨に供すことのできる柴薪が育っている。今後はどちらの姓も（官）山で草取りをしてはならず、そのことによって争いの元を防ぐ³⁷。」と書かれる。この案件で死傷事件を起こしたのは万姓であったが、万姓だけでなく、被害者側の朱姓についても官山の利用を禁止し、「無業居民」の樵採のために官山が優先的に使われるべきと判断されている。

総じていえば、官山における燃材採取の利用は近隣の住民を中心におこなわれ、独占を図ったり争いを起こしたりすることは望ましくないとされたといえるであろう。また近隣住民のなかでも土地を持たない貧窮者が優先的に利用するという観念があったこともうかがわれる。

③ 樵採と他の経済活動

次に、官山における燃材採取と、他の経済活動との重層性について検討する。

燃材採取以外の経済活動で事例としてもっとも多いのは、ある個人ないし一族による松などの樹木の植栽である。このような場合、樹木を植えた個人や一族は自身が植えた樹木については権利をもつものの、土地そのものは開放し附近住民による燃材採取が認められるのが一般的であった。

事例をみてみよう。乾隆十年、広東省海豊県の謝法科が、頼俊祥が官山に植えた松柏林の側で雑木を取り炭に焼いた。頼俊祥は謝法科が松柏を盗み切りしたものだと思って阻んだため悶着が起り、謝法科が頼俊祥を殴り死なせた。調査の結果、謝が炭に焼いた雑木は頼が植えたものではないとされたが、判決の中ではさらに「官山の柴木については、頼俊英（頼俊洋の一族）に対して現在松柏が植えてある範囲を境界として経営させるが、そのほかの場所は民の樵採を認めて、境界を越えさせないようにする」と述べられる³⁸。同様の傾向を示す事例は数多い。また風水の護衛や田畝への灌漑を目的に植えた樹木についても、経済目的で植えた樹木と同じく、植えた者の一族に管理を引き継がせている³⁹。

ただし、官山に植えた樹木をめぐっては、植えた者の権利を保護する認知された慣習に対して異議が申し立てられる事例も多い。道光七年、広西宣化県の事例では、ある一族の祖先が官山に松樹を植えて以来、附近の村民はそこで薪取りはせず、放牧のみを行う状態が続いてきた。しかし後に別な一族は、松樹を植えた一族が管業の契拠を持っていないことを理由に、その山での薪取りを認めさせようと協議し、県に訴え出ようとした。見解の相違から生じた諍いが元で人命が失われ裁判となったが、山に関する結論は、「那壠嶺官山

については、従来どおり村衆が牛を放牧することを認めるが、山内の松樹は韋書勝の祖先が費用と手間をかけて植えたものであり、今までどおり村衆による薪取りを禁止し、それで争いの種を絶つ」というものであった⁴⁰。

また乾隆十三年の広東陽春県の事例では、官山に樹木を植えた側と、樹木を伐採する側の双方の論理が明瞭に示される。植えた側の韓重寒は「これは叔父の韓振挙が植えたものだから、お前等は伐採するな」といい、一方伐採する側の謝誉聖は「これは官山官樹であり、誰でも伐って良いのだ」と述べたと供述にある。判決の中では、謝姓は韓姓に対して伐採した樹木の価格を賠償するよう命じられ、「その山は官業に属するが、樹木は韓振挙が植えたものであり、むやみに伐採してはならない」と決めている⁴¹。

これらの事例では、手間と費用をかけて育てた樹木に対する権利主張に対して、土地の契拠がないという主張や、官山上のものは誰のものでもないという主張が対立している。

一定の地域内で通用するルールが存在がわかる事例もある。嘉慶十七年、広東陸豊県の事例では、費用や手間をかけて植えたものではないが、家屋の風水の護衛になっている樹木が伐採された際、家屋の持ち主が「郷規」によって檳榔を買って賠償させようとしたが、その履行をめぐる争いが起こり、結果として、人命にかかわる事件を引き起こしたという理由で、官山の伐採を禁じる判断が下されている⁴²。さらに、伐採禁止されている官山も、「郷衆」に断れば伐採が認められるという言が一定の説得力を持っていた⁴³。

また次の事例のように、長年にわたる樹木の管理が地域の人びとにより認知されていることが、裁判でその権利主張のために重要となる場合がある。乾隆八年、貴州貴陽府開州で起こった官山上の樹木の紛争において、伐採を咎められて紛争の上殺された人物の伯父である趙君之は「この山は小地名を阿利田と、総地名を猪場坡といい、官山ではあるが、私の家が長年保護して、はじめて成林したことは、その一帯の人びとがみな知っている。それゆえ、外甥がそこに柴刈りに行った。決して自分のものだと言ったのではない。」と述べた。判決ではその主張が認められ「争われた阿利田の山林は、調査したところ官山であり、(外甥を殺した)趙阿十の業ではない。すでに趙君之が長年樹木を栽培しているので、これまでどおり趙君之に保護樵採させるべきである。」と述べられている⁴⁴。

乾隆十五年、広東高州府石城県の事例では、村の背後にある「無税官山」で鍾姓と李姓が紙竹を植え、境界を分けて伐採していた。この紙竹の伐採をめぐる争いが起こり人命が失われたが、県の命令で境界は確定されたものの、紙竹の栽培と伐採そのものは禁止されていない⁴⁵。

総じて言えば、官山における経済活動が禁止されることは少なく、ある個人や一族が手間と資金をかけて植えた樹木や竹については、他人の燃材採取などを妨害しない限りにおいて、その個人や一族の優先権が認められる傾向があったといえる。

④官山分割の判断をめぐって

官山上の資源をめぐる争いをきっかけに、官山の空間的分割に関する判断がなされることがある。乾隆十六年、広西全州の事例では、唐姓と胡姓がそれぞれ祖墳の所在によって管轄範囲を分けていた金盆形官山について、燃料用の草刈りの場所をめぐって争論が起こったことをきっかけに、郷地の立会いのもとで絵図を作り分割して境界をわけ、各姓がそれぞれの境界内を管理するように命じられた⁴⁶。また嘉慶五年、江西吉水県における官山の東西に居住する一族の間で官山上の茅草採取をめぐっていざござが起こった事例では、その山場がただ草が生えるのみで開墾に堪えないことを調査した後、中間に境界の標識を立てて境界を越えないように命じ、争いの元を絶つとしている⁴⁷。

一方、嘉慶十五年、江西樂安県の事例では、当該の山場を分割しないという判断が支持されている。十一都と三十九都の間にある三角峰官山には境界がなく、もともと十一都の民は東から、三十九都の民は西から柴草を採取していた。ある日、十一都に属する陳言仔らが、東側の山に柴草が少ないために西側に入って採取していたところ、三十九都の黄三保らに見咎められた。陳言仔らは「どちらも官山である」という理由で言い返したが、それが元でもみ合いになり、黄三保が落命した。この案件では、やはり「争いの元を絶つ」ということが理由で「強引に境界を分けてはならない」とされた⁴⁸。

この二つの案件では、境界を分けるか分けないかの判断は異なるものの、いずれも「開墾に堪えない」ことが調査された上で、燃材採取は禁止されないという共通点がある。

また県境を跨ぐ形で存在する官山の事例も存在する。福建の長樂県と福清県の境界にある官山については、境界を分けて樵採の範囲を定めた⁴⁹。一方、下記の江西の樂平県と弋陽県の境界にある野鷄窩山場については、人びとによる燃材採取までを禁じている⁵⁰。また樵採の実行については不明だが、荒山に境界がないという状態が争いを招いたとして、境界を跨ぐ二県の知県が主導して山の調査と分割が行われた事例もある⁵¹。これらは、人びとの薪取りの範囲が県境の山間地域にまで至った結果として、県境が定まったことを想起させ、興味深い。

⑤官山伐採禁止の判断

事件をきっかけとして官山上における民の活動が禁止される事例を見てみよう。

最も厳格なものは、山を封禁して燃材採取すら認めないものである。江西の樂平県と弋陽県の境界にある野鷄窩山場は、嘉慶二十五年に官山とされ、石碑が立てられて封禁され、樵採を認めない判決が下された⁵²。また、草取りをめぐる争論の結果、知県がその山について絵図を提出させ、樵採を禁じる事例がある⁵³。

道光元年の広西富川県の事例では、村全体の風水に関わるとして、村の衆議により樹木の伐採が禁じられていた大壩寨官山について、違法伐採事件が起こった後も、村の取り決めを追認する形で従来どおり樹木伐採を禁止している⁵⁴。一方、道光二年の広西灌陽県の事例では、封禁された官山の禁樹が伐採された事件を受けて、「樵採を認めず、争いの元を絶つ」との決定がなされている。この山は従来「砍伐を認めていなかった」山であり、事件を切っ掛けとして、樹木の伐採のみから、燃材採取全般まで禁止事項が拡大したと考えられる⁵⁵。同様に、乾隆五十二年の広東英徳県の事例では、遠近の居民に対して伐採の禁止が通達された⁵⁶。

一方、嘉慶十七年の広東陸豊県の事例では、家屋の風水の保護となっている官山上の樹木の枝を他人が伐採した場合に家屋の持ち主に檳榔を買って渡すという「郷規」があったが、その郷規の実行をめぐる人命案件が生じたため、伐採自体を禁じるという決定がなされている⁵⁷。この事例では、人々による燃材採取までは禁じられていない。

樵採が禁じられるのは、紛争防止などの理由が主であったが、事例数としては少ない。

⑥官山と契拋・税糧

官山は無税の土地であるが、当然、税糧をおさめれば個人や一族の民業に転化しうる土地であった。ここでは、紛争を切っ掛けとして、官が官山の民業化の判断にかかわった事例をみる。

まず乾隆五十六年、江西省峽江県の事例を見てみよう⁵⁸。張鼎妹は事件の切っ掛けと官山の取り決めに関して次のように供述する。「この禾擔腦山は私の家と顔晚妹・習冬妹の三姓が祖先の代から代々共同で管理してきたもので、三姓とも契據は持たず、税糧も納めていない。樵採のみを認め、栽種は許さないと共同で取り決めしていた。私の家の祖墳二塚がそこにある。五十五年二月、顔晚妹が勝手に山内で松秧を栽種したが、私たちは知らなかった」。事件後の官の判断は、次の如くであった。「禾擔腦の山場は、契約文書がなく、

税糧の支払いもしていないけれども、顔・張・習の三姓が先祖の代から受け継いできたもので、彼らが占拠して管理しているものではない。もしこの土地を官に帰すことにしたら、山に専ら業を持つ人がなくなれば、かえって揉め事を引き起こしてしまうだろう。現在、三姓がそれぞれに開墾を請け負い税額を定めることを望んでいるので、測量に基づいて三股に分けて、境界を定め、それぞれに開墾許可証を与え、試墾の年限が終わったら、税則に応じて課税をはじめると。かかわりをもつ三姓がそれぞれ開墾を希望し、紛争防止の観点から官もそれを促した事例である。

江西泰和県の事例では、土名「油潭嶺」の荒山について、長年にわたり東南を鳳崗村が、西北を帰仁城村が管業の契拠なしに管轄してきた。その山で死傷事件が起こり山の管轄も問題となったが、「そこの油潭嶺山場は、双方に管業の契拠はないものの、この二村によって長いこと分けて管轄されてきた。もし判決により官荒としたら、双方とも樵採放牧する場所がなくなってしまう、必ずや揉め事が起こるだろう」と述べて明確な境界を設けて樵牧の場所を分けている⁵⁹。燃料採取の場所を維持する観点から、税糧納付なしでの空間分割を追認している。

また、江西の武寧県で引き続いて冷姓と聶姓による山場土地争いの裁判では、裁判の過程で双方から提出された契約や冊子が実際と符合しないことが判明した。そのため、「本来は全て官荒にすべきであるが、冷姓は明代より管業しており、今となつてはその山の下截に祖墳もあるため、全てを官荒にするのは難しい」との理由で、山を上截下截に分け、上截のみを官山にし、下截を冷姓の業としている。その新たな官山については、冷姓・聶姓とも開墾と埋葬をしてはならないとされた。この山場については十数年後に再び訴訟となり、境界の誤認を防ぐためにより詳細な範囲が決められるが、その訴訟における聶姓の供述では、官山で燃料用の草取りが行われていたことがうかがわれる⁶⁰。

江西の新昌県の事例で、土名を院前坑という荒地はもともと官山であり、近隣に住む梅姓が代々管理し樵牧をおこなってきたが、契約書はなかった。この山に徐定喜が母親を埋葬したことから諍いになり、梅安能が徐定喜を殺害した。判決では、「調査したところ、院前坑の山場は、梅姓が代々管理しているものの、そもそも官山であり、自分の業とは異なる。徐定喜が徐雨とともに山で母親を埋葬し、梅安能が徐定喜を毆殺した件は、闘殺にしたがって処理する。」とされ、官山で起きた事案は自分の業の土地で起きた事案と区別されている。一方、「院前坑は官山であるものの、梅姓が附近に住み代々長年管理している。もし判断により官荒としたら、梅姓が一朝にして業を失い、樵牧する場所を無くしてしま

う。さらに山に業をもっぱらにする戸がいなければ、かえって争いがおきるもとになってしまうであろう。県に命じて旧のとおり測量して境界に印をたて、梅姓に管業させ、もし開墾できれば、報告して課税を開始する⁶¹。」とも述べられ、梅姓の生計やさらなる紛争の可能性なども考慮した上で、山の管理を追認している。

他に、訴訟の当事者双方とも契拠がなく官山（官荒）であることが確認された場合、すでに作った祖墳での祭祀は認めるが、新たな埋葬は認めず、作りかけの灰屋も取り壊すとされた事例もある⁶²。「祖遺」すなわち祖先から引き継いだものであることは認められたものの、契拠がないため官荒とし、附近の郷民に樵採を認める例もある⁶³。両姓の管業地に挟まれて誰も業を持っていない土地を「入官」つまり官へ没収し、開墾者を招く例もある⁶⁴。

これらの事案では、いずれも契拠がないことが訴訟の場で確認されたが、判決によりそれを税業に変えるか官山のままとするかについては判断が分かれている。おそらくは継続的に開墾できる土地であり、開墾に耐えうる能力をもつ一族がいる場合は開墾させ、それ以外の場合は燃料採取を保護しているということになる。

また事例中に示される官山は、契拠がなくとも訴訟前の段階で「某姓の山」という形で実際ある一族の管轄となっていて、その状態が継続的に社会的な認知を受けていたと考えられる。税糧地と官山の間形態の位置づけと言えるであろう。

⑦ 樵採にかかわる多様な人々——女性・外来者・貧窮者

関連資料を通覧すると、燃料採取の担い手や燃料の利用法にかかわる多様な側面が浮かび上がる。

まず、燃料用の薪採りや草刈りには、女性や子供も大きく関与した。女性同士が樵採に行き争いとなった事例もあれば⁶⁵、男女に樵採させることを明確に示した資料もある⁶⁶。草取りを行っていた子供同士の争いに端を発して訴訟となったケースも存在する⁶⁷。

また、「樵採度日」すなわち薪を伐って生活の糧にするという生き方は、貧窮者が行うものとしても認識されていたようである。広東省、陽江県の人梁振奇は妻を娶って四年になったが、ずっと次姉の夫である潘尚志の家に住んでいた。乾隆十九年九月、梁振奇は妻の馮氏とともに長姉の夫である謝天爵の家に行き、「貧しく生活が苦しいので、柴を刈って生活させて欲しい」と頼み込んだ。謝天爵は梁振奇夫妻が親戚であることを思い、夫妻を家に住ませることとしたが、たまたま山には刈って売れる柴が無かったため、十月十三日、梁振奇夫妻は再び潘尚志の家で耕作するため戻って行った⁶⁸。この事例は、貧窮した親戚

などの関係者に対して、自分の家で薪取りをさせる形で生活の糧を提供する場合があったことを示す。また別の事例では、法廷における供述をした人物が自ら「私の家は貧しいので、柴を砍って生活しています」と述べている⁶⁹。また、広東従化県の事例では、官山に生える竹の伐採をめぐる諍いから相手の父を殺した謝東華について、「採樵貧民」であり「無力」であることが汲むべき事情として附言されている⁷⁰。

一方、山野から取れる薪が自家用ではなく販売用に供されていた例も多い。乾隆七年、河南省宝豊県のある夫婦の資料からは、山で柴を刈り、それを市場（集）で売って生計をたてていた様子がうかがえる⁷¹。また乾隆十三年、福建甌寧県で起きた事件では、殺された朱章生は「砍柴度日」していたとされ、県城の外河にいる柴運搬船の船主に対して「火柴五百担」を運んでくることを約束していた⁷²。さらに嘉慶二年、四川省西昌県の事例では、同省名山県籍の羅正舉がその地の官荒山地に来て薪を刈って販売していた。地元の夷人啣鐵はそれを見て、外来の人は刈るべきではないと咎めたが、官の判断は無主官荒の柴草は誰でも刈り取ってよいとの旨であった⁷³。

これらの事例からは、山野は附近住民に対して生活資源を供給するだけでなく、外来者がそこに入り込んで稼ぎをおこなうことのできる場所であったり、貧窮者が「樵採度日」をおこなうために地域外から流れ着く場所でもあったことがうかがわれる。

⑧族山、公山における燃材採取

以上、官山における燃材採取など日常的な山野利用の事例を見てきた。官山は確かに生存の基盤となる資源を提供する役割を果たしていたことが窺われる。他方、刑科題本をみると、ある一族がもっている「族山」や「公山」も、「官山」と同様に、附近の居民が燃材を確保する場所としての役割を担っていたという事例に行き当たる。断片的ではあるが、いくつか事例を挙げてみよう。

江西省鉛山県の劉姓は土名を北源嶺という山場を持っており、山上の柴草は誰でも刈ってよかった。嘉慶四年九月、費継矮は甥とともに刀を持ってその山に行き柴を刈った。たまたま通りがかった劉大丑が、嚴寒の季節に当たり、山内の柴草も多くないので、自分の分を残しておくようにと言って遮った。これに費継矮が反発して諍いが起こり、揉み合いの中で劉大丑が命を落とした。この案件の判決の中で、その山については、「その山の柴草は従来どおり人びとによる採取を認めて、民用を便するように」⁷⁴と述べられる。

湖南省綏寧県の事例では、曾姓の山場で羅姓の人びとが牛にやるための草を刈り豆を播

いていたのを咎められたことがもとで争いが起こり、豆を播いていた羅伯賢が揉み合いの中で亡くなった。訴訟の中でなぜ自分の産業でない曾姓の山場で草取りをしていたのかを問われた傅博侯は、「その山場の樹木は、外の人が濫りに伐採することは認められていないが、青草採取は代々禁止されず、人びとに伐採されていた」と述べている。判決は「曾姓の山場は羅姓が旧来どおり管業するのを認めるべきである」と述べていて、他姓の山で樵採する側に有利な内容になっている。⁷⁵。また浙江省建徳県の事例でも、山主章姓が持っていた丁家塢の山場の茅草が「附近郷民」に対して開かれている⁷⁶。

これらの事例からは、ある宗族が所有する山場であろうとも、「民用の便」を実現するために燃材採取の実現が実施されており、訴訟の場でも官によってそれが追認されている。

次の事例では、官は現状追認だけではなく、より積極的な介入をおこなっている。乾隆三十四年、広東省新寧県の事例である。ここでは、一旦黄姓が五十五畝分の税を払い税糧地とした土名大坑陂の山地について、「民が樵採の頼みとしており、黄姓に業として管理させるのは都合が悪いため、以前どおり官に帰して住民の便ならしむべきである」との理由で、別の場所で五十五畝分の税にあたる官荒を探して税糧地とさせる判断がなされている⁷⁷。附近の住民の燃材採取場所を確保しておくことが、税糧を払い民業とする請願に変更を迫るほど強く要請されていた。

また、公山における地域単位でのルール、取り決めがあることも明らかである。

湖南省長沙府安化県では、李一族が顔家塘に共有の山を持っており、一族の者の薪取りの場となっていたが、李茂奇は（その山で）自分の栽培した樹木が伐採されるのを恐れ、碑を立てて（樵採を）禁止した。李茂求はその碑に気がつく、「勝手に碑を立てるべきではない」と言ってとがめたが、争いになった。判決では、その墳山は共同で伐採を禁じよ、と判断された⁷⁸。

また、浙江省遂昌県の事例では、山場に植えられた松木がたびたび村人によって切られたため、もし再び伐採事件が起こったら、「村規」にしたがって伐採した者が銭を出して肉を買い皆に食べさせると決めた。再び事件が起こったため「村規」にしたがって処理をしようとしたが、犯人が取り合わなかったため争論になった。これに対して知県は「民間の窃盗事件は官に訴えて取り調べるべきで、勝手に規則を議論してはならない」として禁止の通達を出している⁷⁹。

さらに次の事例は、山の共有とその取り決めの広がりやを伺う上で興味深い。江西樂平県と万年県の境界付近にある胡姓の山場は荒地であり、伸びた茅柴は人びとによる樵採を

認めて長く時間が経過していた。乾隆十年、胡張がその山に松の苗を植えたが、茅柴を採取に来る人が誤って松苗まで傷つけてしまうことを恐れて、「隣村の長輩を酒席に呼んでともに禁を議し、茅柴の採取は禁じないが松苗は切ってはならないとし、衆人が全て納得した⁸⁰」。ここでは、自姓の持ち山で樹木の植栽をおこなう時に隣村の長輩たちと協議した方が順調にことが運ぶ可能性があったこと、また長輩らから衆人へ禁止の通達が伝わっていたことなどが着目され、複数村における取り決めが日常的にあった可能性を示唆する。

4. おわりに

以上、刑科題本のなかから、人びとによる山野の利用につき、事例をあげてきた。採取しえた事例は中国南部のものが大半を占めたが、史料中には、人びとの日常的な燃材採取などによる山野とのかかわりが、相応の分量で記述されていることが示された。また官山は基本的には誰でも活動できる空間であったが、全てフリーのオープンアクセスではなく、費用や手間をかけて育てたものに対しては、育てた人や一族の優先権が認められるなど、一定のルールや慣習にのっとり重層的なかかわりが実現されていた場合も多いことがうかがわれた。

さらにそのルールの形成には、刑科題本の対象となった事案を切っ掛けに官がかかわりを持ったことも多かった。訴訟における官の判断については相互に異なるものも存在するため、にわかに包括的な結論をえることは難しいが、敢えて整理すれば、山野に関する官の判断を支える理念は、紛争防止と、住民の燃材採取場所の確保という二つであったといえるであろう。燃材採取を原因とする紛争が多く起こっていることも考えれば、この二つは不可分に繋がっていたともいえるが、官の判断においてはこの二つが比較衡量され、前者に対して後者の優先度が高ければ、住民の燃材採取が現状維持され、逆ならば封禁や伐採禁止などの措置もとられた。またどちらか、あるいは両者を目的として、官山の空間的な分割や、民業化などもおこなわれた。

なお、紛争防止も、住民の燃材採取場所の確保も、王朝の理想統治を体現する裁判文書上の言辞に過ぎないという見方もありうるが、現場の実地調査等がおこなわれた上で判決が出されている場合も多いことから、まったくの空虚な言辞としてのみ片付けることはできないであろう。さらに注三七の事例のように、土地を持たない無業の住民など、いわゆる社会的弱者を指名して官山を利用させる事例が見られたことは、特筆してよいであろう。

さらに、3-⑧の事例でみたように、この二つの理念に基づいて官が山野へのかかわり

に關与する範圍は、官山のみでなく、族山・公山にもおよんでいた。注七七の事例も考えれば、部分的には民業にもおよんでいたとも言えるであろう。その事例では、税糧支払いのみでは官山を自らの業とすることはできず、他の存在の燃材採取を妨害しないことが確認されてはじめて自らの業とすることができた。菅豊はその論のなかで、本来利用できる資源を利用しないこと、「私」を消極的に停止することで中国の伝統的なコモンズが形成されたと論じる [菅豊 2009]。山野でのこの事例は、そもそも「業」の成立時点で他の民の燃材採取を妨害しないために「私」を譲ることがなければ、「業」が対世的に承認されえなかったことを示すだろう。

また評価が困難なのは、こうした弱者扶助的な意味を持った官山が、どの程度持続的なものであったかという点である。たとえばムスコリノは近世から近代の水産資源を論じる中で、自然資源に関する合意や慣習のある種の脆弱さを論じている。彼によれば、清代末期に建てられたある漁業碑文は、一見すると資源の持続的な利用を目的としているように見えるが、取り決めは異なる集団間における紛争防止の規定でしかなかったため、近代以降の漁業的新技術が獲得されて以降、その技術を用いた乱獲に対する歯止めにはならなかったとする [Muscolino 2009]。

近代以降、山野や森林に関しても、科学的林業管理が導入されたり、排他的所有権を内実に持つ形での財産制度が確立するなど、資源に関する新しい関わりの方法が進展する。それが各地方においてどの程度普及したかは別に検討すべき問題ではあるが、これらの変化の中で、本稿で取り上げたような「官山」における薪取りや草取りに代表されるマイナーな生業活動がどのように保障されていたのか、いかなかったのか、これが今後検討すべき課題である。

引用文献：

Buoye, Thomas M., *Manslaughter, markets, and moral economy : violent disputes over property rights in eighteenth- century China*, Cambridge University Press, 2000

Elvin, Mark, *The retreat of the elephants : an environmental history of China*, Yale University Press, 2004

Menzies, Nicholas K., “A survey of customary law and control over trees and wildlands in China”, Louise Fortmann and John W. Bruce eds., *Whose trees?* :

- proprietary dimensions of forestry*, Westview Press, 1988
- Menzies, Nicholas K., *Forest and land management in Imperial China*, St. Martin's Press, 1994
- Muscolino, Micah S., *Fishing Wars and Environmental Change in Late Imperial and Modern China*, Harvard University Asia Center, 2009
- Osborne, Anne, "Property, taxes, and state protection of rights", Madeleine Zelin, Jonathan K. Ocko, and Robert Gardella eds., *Contract and property in early modern China*, Stanford University Press, 2004
- 井上真『コモンズの思想を求めて——カリマンタンの森で考える』岩波書店、2004
- 太田出「中国太湖流域漁民と内水面漁業——権利関係のあり方をめぐる試論」室田武編著『グローバル時代のローカル・コモンズ』ミネルヴァ書房、2009
- 岸本美緒「土地を売ること、人を売ること——「所有」をめぐる比較の試み」三浦徹等編『比較史のアジア 所有・契約・市場・公正』東京大学出版会、2004
- 菅豊「中国の伝統的コモンズの現代的含意」『グローバル時代のローカル・コモンズ』ミネルヴァ書房、2009
- 寺田浩明「中国近世における自然の領有」『シリーズ世界史への問い第1巻 歴史における自然』岩波書店、1989
- 仁井田陞『中国法制史研究 奴隸農奴法・家族村落法』東京大学出版会、1962年
- 堀地明「清代刑科題本と乾隆十年（一七四五）山西大同府天鎮県開賑案」吉尾寛編『民衆反乱と中華世界——新しい中国史像の構築に向けて』汲古書院、2012
- 三俣学編著『エコロジーとコモンズ——環境ガバナンスと地域自立の思想』晃洋書房、2014
- 宮内泰介編『コモンズをささえるしくみ——レジティマシーの環境社会学』新曜社、2006
- 森田明「明末清代の『棚民』について」『人文研究』28巻9号、1976年
- 相原佳之「清朝中期的森林政策——以乾隆二十年代的植樹討論為中心」王利華主編『中国歴史上環境与社会』、生活・読書・新知三聯書店、2007

¹ 史料上では「山」あるいは「荒」と表現されることが多い。事例分析する史料からうかがわれる土地の状態は、草のみ生える荒地から、高木の茂る森林までさまざまである。本論ではそれらを含み比較的こなれている用語として、ひとまず「山野」という言葉を用いた。

² コモンズ論の展開や内容を整理した文献は数多いが、井上真 2004、三俣学 2014 などを

参照。

³ 宮内 2006 : 20 頁

⁴ 王土王民論については、岸本 2004 を参照。

⁵ 官山の分類については、相原 2007 を参照。

⁶ 仁井田陞 1962。

⁷ 森田明 1976。

⁸ Menzies 1994.

⁹ 太田出 2009。

¹⁰ Elvin2004 : 314.

¹¹ 刑科題本の内容および関連文献については、堀地明 2012 を参照。

¹² 内大 044535-001 (《明清檔案》A161-069)、湖南巡撫開泰、乾隆十四年十二月初八日、[湖南、芷江縣]。「其妻田氏赴山摘筍、忠富亦在山牧牛唱歌」。

¹³ 内大 059406-001 (《明清檔案》A358-001)、広東巡撫成格、道光七年五月二十六日、[広東、長樂縣]。「緣由朱亞二戀姦情密、起意商同朱鄧氏、用藥將朱丙秀毒死……尋取瓦罐壹個、帶赴山上採摘斷腸毒草、併取水放入罐內、用樹枝然火煎濃、將藥罐交給朱鄧氏攜回、囑令乘便下毒、朱鄧氏隨將毒罐收藏廚房水缸腳下」。斷腸毒草とは、学名を *Gelsemium elegans* という猛毒植物。雑木林などに自生する。

¹⁴ 内大 066706-001、刑部尚書兼内務府総管来保、乾隆十年二月初二日、[福建、安溪縣]。「蟻妻吳氏……本月初六日往山採取竹葉供炊」。

¹⁵ 内大 001306-001 (《明清檔案》A294-080)、護理湖南巡撫布政使通恩、嘉慶五年正月二十二日、[湖南、茶陵州]。「小的見山上有草可以肥田、攜帶鐵鋤并挑草柴棍、同曾從隴曾新妹赴山挖草」。

¹⁶ 内大 062797-001、刑部尚書来保、乾隆八年十二月十六日、[浙江、諸暨縣]。「五福赴郭姓山上割草肥田、侵入庵界」。

¹⁷ 内大 062797-001、刑部尚書来保、乾隆八年十二月十六日、[浙江、諸暨縣]。「小的在冠珠庵後山採摘松花」。

¹⁸ 一檔刑 02-01-07-12092-020、江西巡撫陸応穀、咸豐元年三月初二日、[江西、樂平縣]。「魯盛佶同邵鬼仔郡年麻子、分拏禾鎗竹銃、在野雞窩山脚砍柴打雀」。

¹⁹ 一檔刑 02-01-07-08694-017、大学士管理刑部事務慶桂、嘉慶四年六月二十一日、[江西、信豐縣]。「該處產石官山應仍聽村民照舊挖取、會姓不得混阻滋事」。

²⁰ 一檔刑 02-01-07-05574-007、刑部尚書鄂彌達、乾隆二十三年五月二十一日、[貴州、綏陽縣]。「據原任貴州巡撫周琬疏稱、符之節與劉章富素識無嫌。緣劉章富籍隸楚省、在綏邑皮家山打石售賣」。

²¹ 一檔刑 02-01-07-05036-008、広東巡撫蘇昌、乾隆十六年十一月十一日、[広東、河源縣]。「緣士端屋後有土名平石官山種植樹木、護衛風水、并蓄水灌蔭田畝」。

²² 内大 012901-001 (《明清檔案》A111-061)、広東巡撫王安国、乾隆七年四月二十一日、[広東、英德縣]。「小的們同族叔謝上貴一供四人往山割草、經過白水際山、不曉得是鄧伯祥的稅業、因見茅草多、只道是官山、就在那裡採割」。

²³ 一檔刑 02-01-07-05483-014、署理広東巡撫周人驥、乾隆二十二年十二月二十日、[広東、潮陽縣]。「土名鷄籠山係屬官山、應聽附近居民樵採、毋許爭占滋事」。

²⁴ 一檔刑 02-01-07-06720-002、広東巡撫德保、乾隆三十七年三月二十六日、[広東、陸豐縣]。「官山樹木應聽附近居民樵採、毋許爭阻、以杜爭端」。

²⁵ 一檔刑 02-01-07-06765-002、広東巡撫德保、乾隆三十七年五月初四日、[広東]。「該處官山樹木、應聽附近鄉民樵採、不許廖姓占管、以杜釁端」。

²⁶ 内大 027180-001 (《明清檔案》A164-067) 署刑部尚書阿克敦、乾隆十五年六月初七日、

[廣東、揭陽縣]。「至石母官山、應聽附近居民樵採、毋許爭阻、以杜釁端」。

²⁷ 內大 050512-001、大學士內務府總管兼管刑部事務來保、乾隆十四年五月二十八日、[江西、樂安縣]。「邱流民與吳文二各村居住、緣該地有官山一嶂、山內柴薪向係眾姓樵採」。

²⁸ 一檔刑 02-01-07-09498-018、江西巡撫先福、嘉慶十六年六月二十九日、[江西、新淦縣]。「土名打古坪官山一嶂、山上茅柴向係該族公砍。」……「該處打古坪山係屬官荒、應聽該族照舊樵砍、嚴飭毋許爭競、以杜後釁」。

²⁹ 一檔刑 02-01-07-09733-001、大學士管理刑部事務董誥、嘉慶十九年三月十五日、[廣東、南雄州]。「村外有土名黃茅坪官山、所產茅草向係鄧謝兩村男婦採割發賣。」……「茅坪官山茅草、飭令附近居民公同採割、毋許恃強爭占、以杜釁端」。

³⁰ 一檔刑 02-01-07-05512-011、刑部尚書鄂彌達、乾隆二十二年十一月初六日、[福建、建寧縣]。「該處官山土名桃林嶺、所生柴草向係隆安、癸洋、靜安三保居民樵採」……「桃林嶺一帶官山、仍聽三保居民樵採、不許汪姓藉墳阻占」。

³¹ 一檔刑 02-01-07-09466-024、刑部尚書勒保、嘉慶十五年八月三十日、[江西、樂安縣]。「該處山場止生茅草、不堪墾種、應仍聽都民公共割取、毋許強分界址、以杜釁端。」……「小的十一都與黃三保住的三十九都有三角峰官山一嶂、並無界址。山上茅草向來十一都人在附近東首割取、三十九都人在附近西首」。

³² 一檔刑 02-01-07-07699-006、暫署廣東巡撫巴延山、乾隆四十七年五月初九日、[廣東]。「陳先裔往土名心頭嶺官山割草、適曾宗昌先在山上裁割、曾宗昌聲言、該山在伊村前、不許陳先裔樵採。」……「土名心頭嶺官山、飭令聽人樵採、毋許曾姓踞占滋事」。

³³ 一檔刑 02-01-07-10932-016、大學士管理刑部事務托津、道光十年七月十八日、[廣東、從化縣]。「謝亞文攜帶柴刀、在小的們住居銀溪村後土名山涯凹官山樵採。適小的同族人駱亞九駱幅隆各拿鐵[金邦]木扁挑往田工作、走到看見、駱幅隆因那山柴草無多、喝令謝亞文往別處採取」……「該處官山柴草、應聽附近居民照舊樵採、毋許爭占、以杜釁端」。

³⁴ 一檔刑 02-01-07-05512-011、刑部尚書鄂彌達、乾隆二十二年十一月初六日、[福建、建寧縣]。「該處官山土名桃林嶺、所生柴草向係隆安、癸洋、靜安三保居民樵採、汪龍山住居隆安保、與汪學藉有祖墳在山下、議禁不許靜安、癸洋二保之人採取」……「桃林嶺一帶官山、仍聽三保居民樵採、不許汪姓藉墳阻占」。

³⁵ 內大 043620-001 (《明清檔案》A146-113)、廣東巡撫準泰、乾隆十二年四月初四日、[廣東、連平州]。「亞隆在黎峒凹山場草地預先號記、秋冬收割。迨捌月拾伍日、亞隆將刈割之草堆積在山、拾捌日師宗亦往該山割草、亞隆以伊號記在先、向前攔阻、互相爭論。」……「黎峒凹官山柴草、飭令聽民樵採、毋許預行號記、致滋釁端」。

³⁶ 一檔刑 02-01-07-09498-018、江西巡撫先福、嘉慶十六年六月二十九日、[江西、新淦縣]。「屍弟鄒照四供……近村有土名打古坪官山、山上茅柴向聽族眾公砍。嘉慶拾伍年捌月貳拾陸日下午、哥子同族人鄒仟九往官山砍柴、路過南山地方、撞過鄒沈二也在官山砍柴回家、哥子因鄒沈二連日往砍多次、斥責鄒沈二不是、沈二不服、致相爭鬧」……「該處打古坪山係屬官荒、應聽該族照舊樵砍、嚴飭毋許爭競、以杜後釁」。

³⁷ 一檔刑 02-01-07-06475-001、大學士管理刑部事務劉統勳、乾隆三十四年七月二十八日、[江西、余干縣]。「萬良先同族人萬層俚萬公和萬欽然萬會吉萬妹俚萬丈俚萬思俚等先後往官山砍柴、適朱文獻看見、以萬姓原籍東鄉、不應砍取餘干官山柴草。」……「所爭官山業經勘明、均係砂石、不能開墾、應聽無業居民樵採、朱萬兩姓於官山附近各有山場、自蓄柴薪可以供爨、嗣後均不許赴山採草、以杜爭端」。

³⁸ 內大 013518-001 (《明清檔案》A139-053)、兩廣總督暫署廣東巡撫印務策楞、乾隆十年八月十八日、[廣東、海豐縣]。「緣賴俊祥在官山栽有松柏、乾隆十年三月初五日謝法科往山砍取雜木燒炭、適俊祥遇見、疑係偷砍伊樹、向前爭阻嗔角」……「小的在賴俊祥栽種松柏林邊、砍取雜木燒炭、纔砍了三條、俊祥走來罵小的偷砍他的松柏、小的說砍的是山上雜木」……「官山柴木、飭令賴俊英照現栽松柏為界經管、其餘聽民樵採、毋許越佔」。

- ³⁹ 一檔刑 02-01-07-05036-008、廣東巡撫蘇昌、乾隆十六年十一月十一日、[廣東、河源縣]。「緣 [田] 士端屋後有土名平石官山種植樹木、護衛風水、并蓄水灌蔭田畝。乾隆十六年五月二十九日、陳繼瑞往山樵採砍伐樹木、士端見而攔阻、維瑞不依、致相爭論。」……「至平石官山、既經田士端種植樹木、應聽士端親屬管理、陳姓不許砍伐、以杜訟端」。
- ⁴⁰ 一檔刑 02-01-07-11316-018、廣西巡撫梁章鉅、道光十七年三月二十日、[廣西、宣化縣]。「據何建棕供、……村外有土名那壠嶺官山一座、於乾隆年間、經韋李氏公公韋學賢種植松樹、遺傳管業、附近村民只在山牧牛、向未樵採。道光拾陸年伍月內、小的見那壠山樹木叢茂、韋李氏家並無管業契據、不應獨佔、要議歸村眾公共樵採。」……「那壠嶺官山斷令村眾照舊公共牧牛、山內松樹係韋書勝之祖費用工本種植、仍禁村眾樵採、以杜爭端」。
- ⁴¹ 內大 049759-001、廣東巡撫岳濬、乾隆十三年七月十一日、[廣東、陽春縣]。「問據謝譽聖供……小的與姪子同到王氏屋後官山砍柴、姪子見有壹株小樹用刀砍伐、小的也幫砍樹枝。韓亞寒走來說、這是我叔子韓振舉種的、你們不要砍伐。小的們說、這是官山官樹、人人砍得的。」……「謝昌富等所砍韓振舉樹木、照估追賠、該山雖屬官業、但樹木係韓振舉所種、應禁濶砍、以杜爭端」。
- ⁴² 一檔刑 02-01-07-09562-021、廣東巡撫韓崧、嘉慶十七年三月二十八日、[廣東、陸豐縣]。「查吳亞汪等所砍樹枝、係產自官山、並非劉日開用工本栽種、劉日開欲圖護衛住屋風水、因而拏取刀桃令其照鄉規買送檳榔賠禮、以致索討爭毆斃命。」……「該處樹木係在官山、既釀人命、應請禁止砍伐、以杜釁端」。
- ⁴³ 一檔刑 02-01-07-05052-006、署理刑部尚書阿克敦、乾隆十六年閏五月十八日、[廣東、豐順縣]。「緣學古鄉中有土名三岐章官山一所、種植樹木不許砍伐。乾隆十五年四月二十三日、黃學古見樹木茂盛、商同蔡景祥賣與蔡宰臣砍做做屐坯、宰臣慮及鄉眾不允、學成答以先交銀分給鄉眾、宰臣信以為實、議定每擔屐坯價錢二百六十文、并出定銀二十兩交與學成接收。五月初九日、學成雇蔡景祥及景祥之弟蔡阿邨、蔡阿完進山砍伐、許給景祥每擔酬謝錢十五文。十六日、甲長葉用梅鄉老彭玉林日新、劉端才查知、」
- ⁴⁴ 內大 011911-001 (《明清檔案》A125-071)、貴州總督管巡撫事張弘泗、乾隆八年九月初六日、[貴州、開州]。「這山小地名叫做阿利田、總地名叫猪場坡、雖是官山、實係小苗家護蓄多年、纔得成林、那一塊地方通知的。因此、纔叫外甥去砍柴、並不是冒認。」……「所爭阿利田山林、既已查係官山、並非趙阿十之業、已經趙君之蓄養多年、應仍聽趙君之護蓄樵採」。
- ⁴⁵ 內大 052697-001、廣東巡撫蘇昌、乾隆十五年九月初十日、[廣東、石城縣]。「緣鍾璣與永國村後有官山嶂無稅官山、向係鍾李貳姓種植紙竹、分界砍伐」……「官山嶂紙竹、經縣飭令立界、以杜爭端」。
- ⁴⁶ 一檔刑 02-01-07-05102-005、署理刑部尚書阿克敦、乾隆十六年閏五月十八日、[廣西、全州]。「緣該州恩鄉金盆形官山上下、唐胡兩姓各墓有祖墳、上下毗連、俱倚墳管山、未分界址。」……「金盆形山場、已飭令分界繪圖、胡唐二姓各照界址管業、應毋庸議等語」。
- ⁴⁷ 一檔刑 02-01-07-08749-016、大學士管理刑部事務董誥、嘉慶五年十一月十九日、[江西、吉水縣]。「據屍兄郭銘四供、已死郭鏡八是小的胞弟、小的村外有官山一嶂、土名塔坑。小的家住在那山西邊、族叔郭潤堂住在那山東邊、山上茅草向聽附近居民樵採、不分界限。乾隆四年八月十二日、小的兄弟郭鏡八同族人郭向榮往東邊山上割草、郭九苟郭星照郭潤堂向阻爭毆、」……「郭九苟說、小的們西邊人不該到他東邊山上割草、向前阻止。」……「該處山場業據該縣勘明砂石間雜、僅生茅草、不能墾種、應飭於山之中間釘立界限、聽其兩造各分東西就近樵牧、毋許越界、以杜爭端」。

⁴⁸ 一檔刑 02-01-07-09466-024、刑部尚書勒保、嘉慶十五年八月三十日、[江西、樂安縣]。「據陳言仔供……附近東首割取、三十九都人在附近西首割取。……小的因東首山上茅草無多、順到西首山上割取。適黃三保與曾禮九各攜刀擔走來看見、黃三保斥責小的們不應越割、上前阻止。小的因都是官山、不依詈罵、致相爭鬧。」……「該處山場止生茅草、不堪墾種、應仍聽都民公共割取、毋許強分界址、以杜釁端」。

⁴⁹ 一檔刑 02-01-07-10063-001、兵部尚書管理刑部尚書章煦、嘉慶二十三年三月初四日、[福建、長樂縣]。「陳學桂供……福清縣人、與長樂縣人陳嫩嫩隔山居住、同姓不宗、素無嫌隙。小的村內有土名南陽官山一崙、與長樂縣界址毗連、以山頂倒水分界、南屬福清、北屬長樂、山上柴草向聽鄉人樵採」……「該處山場、係屬長福兩縣分界官山、飭令嗣後各分界址樵採、毋許越界、以杜爭端」。

⁵⁰ 一檔刑 02-01-07-12092-020、江西巡撫陸應穀、咸豐元年三月初二日、[江西、樂平縣]。後揭注 52。

⁵¹ 內大 043351-001 (《明清檔案》A192-060) 署刑部尚書阿里袞、乾隆二十一年二月三十日、[浙江、永康縣]。「該地有栢巖山一座、係東永二邑交界荒山、向係聽人樵採。盧起耕有管業山場、土名山樹凹、與栢巖荒山相連。」……「實因荒山無界、偶爾誤砍、一時爭角、失手致傷、並非偷砍、亦非有心致死」……「山界已經勘明、卑職會同東邑曉諭居民照界管業、毋許越砍滋事」。

⁵² 一檔刑 02-01-07-12092-020、江西巡撫陸應穀、咸豐元年三月初二日、[江西、樂平縣]。「卷查野鷄窩山場坐落樂平弋陽二縣交界處所、嘉慶二十五年、樂平縣民馬修竹京控弋陽縣民邵周文等占山案內、斷作官山、勒石封禁、不准樵採、詳奉咨准部覆飭遵在案。」……「該處野鷄窩山場、飭令照舊封禁、不准樵採、以杜釁端等情」。

⁵³ 一檔刑 02-01-07-08073-006、大學士管理刑部事務阿桂、乾隆五十七年三月二十七日、[廣東、平和縣]。「官山禁止樵採、以杜爭端」。

⁵⁴ 一檔刑 02-01-07-10287-015、大學士管理刑部事務戴均元、道光元年四月二十日、[廣西、富川縣]。「緣甘曹養籍隸富川、於于玉才隣村無隙、甘曹養村內有土名大壩寨官山樹木、因關合村風水、經眾議明禁止砍伐、嘉慶貳拾肆年拾貳月、」……「于玉才攜帶柴斧前赴該山砍取樹木、經甘曹養族人甘揚連遇見不依、將柴斧奪去。」……「大壩寨官山樹木、既有礙合村風水、應仍聽該村議禁砍伐」。

⁵⁵ 一檔刑 02-01-07-10322-006、護理廣西巡撫高溥、道光二年三月初二日、[廣西、灌陽縣]。「據趙大和趙雲材同供、小的們村處有土名呂福庵官山一座、長有樹木、歷來封禁、不許砍伐。道光元年陸月貳拾日、史道良與史道七因村內修理社廟需用木料、在山砍樹、經陳思梅查知、邀同小的們前往向阻。」……「該處官山仍行封禁、不許樵採、以杜爭端」。

⁵⁶ 一檔刑 02-01-07-07868-003、大學士管理刑部事務阿桂、乾隆五十二年三月初六日、[廣東、英德縣]。「村後官山樹木飭行封禁、毋許遠近居民砍伐、以杜釁端」。

⁵⁷ 一檔刑 02-01-07-09562-021、廣東巡撫韓對、嘉慶十七年三月二十八日、[廣東、陸豐縣]。「查吳亞汪等所砍樹枝、係產自官山、並非劉日開用工本栽種、劉日開欲圖護衛住屋風水、因而拏取刀桃令其照鄉規買送檳榔賠禮、以致索討爭毆斃命。」……「該處樹木係在官山、既釀人命、應請禁止砍伐、以杜釁端」。

⁵⁸ 一檔刑 02-01-07-07988-016、大學士管理刑部事務阿桂、乾隆五十六年四月十五日、[江西、峽江縣]。「問據張鼎妹供、這禾擔腦山是小的家與顏晚妹習冬妹三姓祖傳公管、各無契據、都未承糧。公議只許樵採、不許栽種。小的家墓有祖墳二塚在內。五十五年二月裡、顏晚妹私在山內栽種松秧、小的們先不知道。」……「禾擔腦山場、顏張習三姓雖無契據、亦未承糧、但究係三姓祖手流傳、並非伊等占管、若斷令歸官、恐山無專業、轉致紛爭。現據

各願認墾陞科、據勘丈分作三股、立定界限、各給墾照、俟扣滿試墾年限、按則陞科」。

⁵⁹ 一檔刑 02-01-07-11475-009、大學士管理刑部事務王鼎、道光二十年四月二十四日、〔江西、泰和縣〕。「據蕭繼青投稱、伊家住居仁城村、同姓不宗之蕭首霑及曾衍棋等住居鳳崗村、兩村中間有土名油潭嶺、即下嶺荒山一嶂、向係兩村居民分界樵牧、東南歸鳳崗村、西北歸仁城村、歷年已久、均無管業契據。本月初九日、鳳崗村蕭首霑蕭命勝等赴山樵採、蕭命勝因誤認界址越砍伊界松秧、」……「該處油潭嶺山場、雖兩造均無管業契據、惟該二村分管已久、若斷作管荒、兩造無處樵牧、勢必復起爭端。查該山共有五坑、中坑土名白禾、斷令以白禾坑直下立石為界、東南二坑歸鳳崗村、西北二坑歸仁城村、白禾坑各管半坑、毋許越界樵牧、以杜釁端」。

⁶⁰ 一檔刑 02-01-07-10268-012、大學士管理刑部事務戴均元、道光元年五月二十五日、〔江西、武寧縣〕。「該處茅嶺山南面并相連之石壁塢山場、現經委員勘丈界止畝數、核與兩造所呈契冊不符、本應概斷官荒、惟冷姓自前明管業、至今歷於該山下截墓有祖墳、未便全行入官。應請將該山分為上下兩截、中以冷姓祖墳九弓之外斷作官山、聶冷二姓俱不得墾墓、以杜爭端。下截山場仍斷結冷拔崇等管業、飭令明立界址、內除一畝三分有糧外、餘仍報丈陞科。所有北面山場向無爭競、仍聽聶煥冬等照管、茅腦尖山仍歸冷陳鄧黃等姓照契各管各業」／一檔刑 02-01-07-10944-004、大學士管理刑部事務盧蔭溥、道光十一年三月初四日、〔江西、武寧縣〕。「據聶象志供、…前往茅嶺南面上截官山割草」

⁶¹ 一檔刑 02-01-07-08386-011、江西巡撫陳准、乾隆六十年十月十一日、〔江西、新昌縣〕。「緣該處有荒山壹嶂、土名院前坑、本係官山、因梅姓住居附近、世管樵牧、並無契據。乾隆伍拾玖年陸月貳拾肆日、徐定喜之族人徐雨、因母故未葬、知院前坑係屬官荒可以安埋、邀同徐定喜、將母棺擡往院前坑葬畢。正在培土、梅安能走至瞥見斥阻、徐定喜不服、致相爭罵。」……「查院前坑山場、雖係梅姓世管、但本屬官山、與已業不同。徐定喜幫徐雨赴山葬母、梅安能向阻爭毆致傷徐定喜身死、應照鬪殺、定擬梅安能依律擬絞監候、請題請旨。」……「徐雨母棺並免起遷。再院前坑雖係官山、但梅姓住居附近世管有年。若斷作官荒、不特梅姓一旦失業、樵牧無所、且山無專業之戶、恐轉起爭端、應飭縣照舊勘丈立界、給梅姓管業、如可開墾、報明陞科。嗣後徐姓不得續墾、以杜後釁」。

⁶² 一檔刑 02-01-07-08152-002、署江西巡撫約蔡、乾隆五十七年四月十五日、〔江西、安福縣〕。「該處楊陂山、兩造既無契據、亦未承糧、其為官荒無疑、所有周姓祖塋仍許醮祭、毋許添葬、彭雅操所豎房屋尚未完工、應令拆毀、以杜後釁」。

⁶³ 一檔刑 02-01-07-11312-010、協辦大學士管理刑部事務王鼎、道光十七年三月十一日、〔湖南、晃州〕。「據馬老二供、年二十二歲、晃州人……楊倡珩有祖遺地名鬼講坳各處山場、並無契據、向來聽人樵採、並不禁止。」……「該處雖係楊姓祖遺、第楊姓既無契據、即不得踞為私業、自應斷作官荒、照舊聽人樵採、毋許混爭、以杜後釁」。

⁶⁴ 一檔刑 02-01-07-09935-003、刑部尚書崇祿、嘉慶二十一年五月初八日、〔江西、會昌縣〕。「據胡吉沾供、……小的家與王姓各有祖遺山一嶂、地名猪子狹。王姓的山在左、小的家山在右、中有荒山一塊、歷久無人管業、所長茅草兩姓向禁樵採。」……「該處無主荒山照例入官、召人認墾、以杜覬覦爭端、兩姓祖遺山場、仍令各管各業」。

⁶⁵ 一檔刑 02-01-07-06148-011、大學士管理刑部事務劉統勳、乾隆三十一年四月二十一日、〔廣東、歸善縣〕。「據楊氏供、本年三月三十日、小婦人媳婦林氏盧氏往山割草、午候盧氏回家告訴我、同林氏在何崗官山割草、林氏隨手砍了小松五枝、鄧茂樟同劉氏走來說、山上松樹不許砍伐、林氏與他爭辯」。

⁶⁶ 一檔刑 02-01-07-09733-001、大學士管理刑部事務董誥、嘉慶十九年三月十五日、〔廣東、南雄州〕。「村外有土名黃茅坪官山、所產茅草向係鄧謝兩村男婦採割發賣。」……「茅坪官山茅草、飭令附近居民公同採割、毋許恃強爭占、以杜釁端」。

⁶⁷ 內大 047448-001（《明清檔案》A158-021）安徽巡撫納敏、乾隆十四年二月初四日、〔安

徽、安慶府]。「緣殷九保年僅拾肆、與李勝保比鄰而居、均屬童稚、素無嫌怨、乾隆拾參年閏柒月初陸日、李勝保與幼童胡雙保方懷保在殷九保公山爬取山草」

⁶⁸ 內大 041692-001 (《明清檔案》A164-074)、廣東巡撫蘇昌、乾隆十五年六月初九日、[廣東、陽江縣]。「問據謝天爵供、梁振奇是小的妻弟、一向在潘尚志家居住、乾隆拾肆年玖月內、振奇同妻馮氏搬到小的家來說、家裏貧窮、要來砍柴度活、小的見是至親、就留地住下、因山上沒得柴砍、他又想搬回潘尚志家耕種」

⁶⁹ 內大 071529-001、刑部尚書兼內務府總管來保、乾隆八年二月三十日、[江西、新喻縣]。「問周受二……孫氏是小的結髮的妻子、平日和好、生了兩個兒子……因小的家貧、砍柴為生、乾隆七年五月二十六日清早、小的叫妻子起床煮飯、吃了乘天涼好去砍柴」

⁷⁰ 內大 012471-001 (《明清檔案》A107-081)、廣東巡撫王安國、乾隆六年十一月十二日、[廣東、從化縣]。「再謝東華因被李伯宗拾石擲打、致用竹棍打傷伯宗右胳膊偏右二處、並非金刃、尚屬情輕、且採樵貧民、委係無力」

⁷¹ 內大 013783-001 (《明清檔案》A113-077) 河南巡撫兼提督銜雅爾圖、乾隆七年七月十四日、[河南、寶豐縣]。「乾隆六年十月初六日、孔二丟自集賣柴歸家、令趙氏造飯、趙氏不理、旋即出外、孔二丟待氏不回、攜帶鋤頭赴山砍柴」……「孔二丟供、小的是本縣人、二十九歲、了娶女人趙氏有十三年了、平日是和好的、小的每日在山裡打柴度日」

⁷² 內大 026972-001 (《明清檔案》A156-018)、署刑部尚書兼掌翰林院事鑲白旗漢軍都統阿克敦、乾隆十三年十月十七日、[福建、甌寧縣]。「小婦人丈夫砍柴度日、與吳公琳並無縫隙。問據溫天賜供、小的在本縣城外河邊搭運販柴生理、上年十二月初五日、朱章生來對小的說、他有五百擔火柴搭邱廣琳的船載來發賣十二月初六日就到、我先來等候、小的留他喫飯、在小的廠裡歇宿」。

⁷³ 一檔刑 02-01-07-08530-007、大學士管理刑部事務和珅、嘉慶二年十一月十七日、[四川、西昌縣]。「緣羅正舉、籍隸名山、來至該縣、在官荒山地砍賣柴薪度日、與啣鐵素不認識、並無縫隙。嘉慶二年二月二十六日、羅正舉赴山砍柴、啣鐵以羅正舉係外來之人、不許砍取。羅正舉分辯、啣鐵混罵」……「至荒山柴草、原是無主官荒、隨人砍取是實」。

⁷⁴ 一檔刑 02-01-07-08720-012、江西巡撫張誠基、嘉慶四年九月初二日、[江西、鉛山縣]。「據費繼矮即費繼而供……劉姓有公共北源嶺山場一嶂、山上柴草向來聽人樵採、並不禁止。嘉慶三年拾二月初拾日、小的與族姪費宗矮攜帶刀擔、赴劉姓山上砍柴、適劉大丑路遇看見、說時值寒冬、山內柴草不多、要留他自己取用、向小的攔阻。」……「該山柴草仍飭照舊聽人砍取、以便民用」。

⁷⁵ 內大 071100-001、刑部尚書來保、乾隆六年十二月十五日、[湖南、綏寧縣]。「問傅伯侯……詰問那會家山既不是你們的產業、你們為什麼往那裡去割草、這不是你蠻要去強佔山場、有心把他打死的嗎。供、小的們那裡山上的樹木是不許外人亂砍、至青草歷來不論、彼此聽憑人割的、並不是小的們圖佔他的山場……」……「會家山場應聽羅姓照舊管業」。

⁷⁶ 一檔刑 02-01-07-09114-016、浙江巡撫清安泰、嘉慶十年九月二十一日、[浙江、建德縣]。「據山主章世經供、貢生家有土名丁家塢山場、向托族人章年開看管、山上茅草向聽附近鄉民樵採」。

⁷⁷ 一檔刑 02-01-07-06481-009、大學士管理刑部事務劉統勳、乾隆三十四年五月十三日、[廣東、新寧縣]。「復往勘該山係在甄黃二姓村後、原屬無稅官山、民藉樵採。山之東北係黃姓住村、西南係甄姓住村。據黃達盤等指稱、此山土名大坑陂、狗頭嘴、虎山庵各處、經伊族眾於乾隆二十九年十月十一日、以黃軒祖出名、共承斥稅五十五畝、蓄長樹木、乾隆三十年報陞有案等情。」……「大坑陂官山雖據黃姓呈請陞科、但經前縣方顯勘明、民藉樵採、不便給與黃姓管業、應仍請歸官、以利居民。其黃軒祖原陞斥稅五十五畝、另查官荒撥抵、

以杜爭端」。

⁷⁸ 內大 000148-001 (《明清檔案》A294-081)、護理湖南巡撫印務布政使通恩、嘉慶五年正月二十二日、[湖南、安化縣]。「李茂求等有顏家塘公山向供族內樵採、李茂奇因蓄有樹木、惟恐砍去、豎碑禁止。嘉慶肆年陸月初玖日、李茂求知覺遇見李茂奇、斥其不應私立禁碑、李茂奇不服、彼此吵鬧」……「該處墳山飭令公共禁采」。

⁷⁹ 內大 015540-001 (《明清檔案》A355-030)、浙江巡撫帥承瀛、道光元年五月二十四日、[浙江、遂昌縣]。「兒子(劉雲學)赴山砍柴、順砍方元進山上松枝一束、被他工人李應鰲見、報知方元進的妻子、方何氏把松枝奪回。貳拾玖日早、方元進走來、就兒子犯了村規要罰錢買肉、挨家分食、兒子認出錢八百文、約拾日內交付、方元進不依、必要見錢二千四百文、兒子拏不出錢、不肯應允。」……「至民間被竊例應告官緝究、另擅自議規、實屬滋事、並出示嚴禁、以杜釁端」。

⁸⁰ 一檔刑 02-01-07-04773-008、刑部尚書阿克敦、乾隆十一年十一月十八日、[江西、樂平縣]。「訊據孫廣居供、小的是樂平縣人、因小的住的地方與這萬年縣連界、界上原有胡姓山場、長有茅柴、向來荒蕪、聽人樵採、向沿已久、從未禁阻。到乾隆十年、胡張在那山上栽了松秧、恐怕那砍茅柴的人混將松秧損壞、就設酒請鄰村的長輩公飲議禁。當議砍伐茅柴仍不禁阻、只不許砍伐松秧、衆人都依允了。以後小的們村鄰仍照常在山內砍柴供爨、並無說話。」……「查胡姓茶園等處山場本屬荒蕪、向聽村鄰樵採」。

清代浙江の山林資源紛争

—十九世紀末の諸暨県を例として—

山本英史

はじめに

まもなく二十世紀を迎えようとしていた中国のある地域社会において、「山林資源を伐採する」という行為はいかなるものとして受け止められたのであろうか。少なくとも他者が排他的に所有する山林資源を許可なく伐採することは「盗伐」と称され、それが不法行為(犯罪)とされるのは世界共通の認識であったものと考えられる。しかし、中国の伝統社会にあっては、それが単なる不法行為として受け止められるだけでなく、そこにさまざまな附帯要素が加味され、それに規定された中国特有の解決がなされた。そして、それは中国地域社会の山林資源紛争に独特の性格が現れているものと思われる。本稿ではその具体的なあり方を十九世紀末の浙江・諸暨県の事例によって検討するものである。

最初に本稿で用いる主な史料『諸暨論民紀要』三卷(清光緒二十三年自序刊本)を紹介する。著者倪望重は安徽・祁門県の人、同治十三年(一八七四)の進士、光緒年間に浙江・紹興府諸暨県の最高責任者として三度赴任した。その内訳は、①光緒九年(一八八四)～光緒十一年(一八八六)七月、②光緒二十一年(一八九五)～光緒二十三年(一八九七)十月、③光緒二十六年(一九〇〇)二月～同年七月である¹。最初は知県として、後の二度は知県代理として業務に当たった。『諸暨論民紀要』は彼が二度目に諸暨県に赴任した乙未の年、すなわち光緒二十一年(一八九五)からの三年間において作成した、大半が民事案件の判牘二一八件を収める。彼自身の「序」によれば、「余が諸暨に再び赴任して以来、県民が訴訟で争うに忍びなく、弊害を防ぎ善に導く方法がないものかとその間久しく思い続けてきた。いま交替の時に当たり、職員たちに乙未の年から現在に至るまでの判牘を集めさせ、みずから校訂して、併せて三卷、『論民紀要』と名付けて印刷に附した。これを山奥の僻地にも一家に一冊置けば、〔これを読んだ〕彼らは反省・自戒し、訴訟を繰り返すことがなくなるだけでなく、争う心が譲る心になり、睦あう気持ちを生むことになるだろう」とあり²、その書を編んだ目的は諸暨県という地域社会の民衆が反省・自戒して訴訟を減らし、親睦を深めることにあったという。

原刊本は中国社会科学院法学研究所図書館の所蔵になり、楊一凡・徐立志主編『歴代判牘』第一〇冊(北京、中国社会科学出版社、二〇〇五年)に鉛印で収められている。鉛印本には若干の誤植があり、最良のテキストとはいえないが、現在原刊本が一般に公開されていない状況の下、本稿では鉛印本を使用せざるをえないことを断わっておく。

¹ 宣統『諸暨県志』卷二一、人物志、職官表、国朝知県。朱保焯・謝沛霖編『明清進士題名碑録索引』上海、上海古籍出版社、一九八〇年。また、三木聰・山本英史・高橋芳郎編『伝統中国判牘資料目録』汲古書院、二〇一〇年、一七九頁参照。なお、後者に「台州府諸暨県」とあるのは、「紹興府諸暨県」の誤りである。

² 『諸暨論民紀要』序。

一 諸暨県における山林資源紛争の諸相

『諸暨論民紀要』は前述のように倪望重が県民の反省・自戒を促すことを目的として編んだ判牘集であり、もちろん彼が任期中に出したすべての判牘を網羅するものではない。刑事案件がほとんどなく、また倪望重自身が処理した自理案ですべてが占められているのもその所以である。しかし、収録された判牘の中には諸暨県における山林資源、なかでも竹木の伐採をめぐる紛争が少なくない。それは全部で三七件を数え、判牘全体の約一七パーセントを占めていて、山林資源紛争が地域紛争の少なからぬ因子であったことがうかがわれる。そして、それらは諸暨県における山林資源紛争がどのような文脈の中で発生し、かつ解決されたのかを具体的に明らかにしている。そこで、本稿ではこのうち、その行為が紛争の主要な原因となって訴訟に持ちこまれたもの、なかでも諸暨県の地域社会特有の性格を示す二三件を選び、まずはとりあえず収録順に紹介する。

ところで、倪望重が選別した判牘の叙述形式は、判牘の表題とでもいうべきものを示したのち、その内容として訴訟の発端となった事情、続いて提出された書類や証言を検討した調査結果、最後に原告・被告に対して自身の判断をそれぞれ示すという定型の形態が大半を占めている。それゆえ本稿でもこの三部構成によって判牘の内容をそれぞれ〈発端〉〈査訊〉〈断案〉に分類して要約する。

なお、史料の要約に当たって頻出する史料用語については原語をそのまま用いるが、それらは以下の意味であると考えられる。

〈管業〉不動産である土地や家屋を保有し、それを経営し収益する関係を指す。通常、所有と同義で用いることもあるが、中国の伝統社会にあっては私人が有する不動産の権利は単一所有者に限られないという認識から、このような表現になるのであろう。

〈買禁〉不動産売買の際、売者が買者に対し金を出し、その不動産において買者の風水等を侵害する行為を禁止することをいう。

〈出拵〉管業者が竹木を伐採する際、業者等に委託して伐採・搬送することをいう。

〈拵価〉管業者が竹木を出拵した際に受け取る対価をいう。

〈贖回〉抵当に入れた不動産物件に対し、金銭を返還して請け戻すことの意味で、〈回贖〉というのが一般的である。

〈絶売〉請け戻し条件をつけない不動産物件の売却をいう。

〈影射〉一般には土地の不法登記を示す語であるが、ここでは土地の名義をすり替えて訴訟に有利になるよう書類を偽造する不正行為として用いられている。

〈洋銀〉清末から流通した中国の銀貨で、〈銀元〉〈銀洋〉〈大洋〉ともいう。なお、洋銀一元は当時の諸暨県では制錢一四〇〇文に換算されている³。

〈混争〉道理に合わない主張で訴訟を起こして利権を争うことをいう。

〈来脈〉風水家が地相を占う際の山の氣勢や地形が龍のように連なり起伏している状態をいい、墳墓などの風水の保護の役割を果たす場所をいう。〈龍脈〉〈来龍〉ともいう。

まずは他人の竹木を伐採したことが原因で紛争になる場合から始めよう。

³ 『諸暨論民紀要』巻二、許芳来等呈控許海棠等私拵蝕価由。

① 周志高らが朱喜玉らに対し墳木を盗伐したとして訴えた件⁴

〈発端〉周志高らは祖墳や風水樹を蓄養する山地⁵をもっていたが、清明節のおり、風水樹二株が盗伐されていることを発見し、管理人の朱喜玉らに抗議した。朱喜玉らはしらばくれたため、墳木を盗伐したとして朱喜玉らを訴えた。

〈査訊〉朱喜玉らには山木の管理責任があり、盗伐に遇えば、周志高らに報告しなければならない。彼らは山木の近くに居住し、知っていながら通報しないのは盗伐に結託したのと変わらない。盗伐された大樹二株のうち一株はすでに枯れてしまっている。

〈断案〉朱喜玉らは洋銀六元を周志高らに支払い、樹木の代価を弁償し、祖墳を安堵する費用とする。その山はなお朱喜玉らが管理し、今後二度と盗伐してはならない。

② 宣光円すなわち広円らが蔣秀法らと互いに山場を争った件⁶

〈発端〉宣旺寅が蔣秀法らの祖遺の山場⁷で柴を刈ろうとしたところ蔣秀法らに阻止されたことから、宣光円（宣広円）らはずいにこれを口実に山の利権を争うことになり、互いに訴え出た。

〈査訊〉係争の場所は確かに蔣秀法らの山である。

〈断案〉蔣秀法らは元通り山を管業し、宣光円（宣広円）らは混争してはならない。蔣姓の山内にはその墳墓が多くあるが、別に宣姓の孤墳が一基あり、宣姓はそれを祭っていた。このたび宣広円はその祖墳を口実に山を占拠しようとしたが果たせなかった。その行為はもとより一律に責懲すべきだが、宣光円（宣広円）は後悔しているので追究を免じる。ただし、宣旺寅はすでに人夫を擁して柴を刈り、その後の態度も悪いので、管責に処して戒めとする。

③ a 阮月良らが張志祥に対し大勢で埂上の竹木を伐採したとして訴えた件⁸

b 阮月良・虞錦校らが張志祥らに対し、埂を争い、凶暴を逞しくしたとして訴えた件⁹

〈発端〉阮月良と虞錦校の両姓には庇護に資する祖遺の風水埂¹⁰一条があり、毎年初めに改修補強していた。ところが虞姓の埂において竹木数株が伐採されていたため、阮月良らはそれを張志祥らの仕業と見て、彼を「大勢で埂上の竹木を伐採した」として訴えた。さらに今年の正月二日、阮吉康らがまた補修作業を始めたが、張志祥らはその埂が彼らの村の筋向いにあったことから悪心を抱き、築埂の泥が張姓の田内に落ちたといいがかりをつけて工事を阻止し、阮吉康らを殴り、さらに虞錦生を捕縛したため、阮月良らは張志祥らを「埂を争い、凶暴を逞しくした」として訴えた。

〈査訊〉埂は阮・虞両姓の村荘にあり、その下手に伐採された小竹木がある。張金鏞らは

4 『諸暨論民紀要』巻一、周志高等控朱喜玉等盗砍墳木由。333

5 とりわけ「山地」とある場合には、一般的には「開発されていない山」を意味する。

6 『諸暨論民紀要』巻一、宣光円即広円等与蔣秀法等互争山場由。343

7 とりわけ「山場」とある場合には、一般的には「木材伐採などのために施設を調べてある山」を意味する。

8 『諸暨論民紀要』巻二、阮月良等控張志祥糾砍埂上竹木由。353

9 『諸暨論民紀要』巻二、阮月良等虞錦校等呈控張志祥等争埂逞凶由。354

10 「埂」とは、宣統『諸暨県志』巻一三、水利志、によれば、「吾が県で湖田の水をせき止める堤防を意味する方言」という。「風水埂」とはそのうちの風水に係る堤防をいう。

妄りに名義を騙り、埂の修築を妨げてその埂の占拠を図ったのは明らかである。さらに彼らが粗暴なふるまいをしたことも事実である。

〈断案〉阮月良、虞錦校らは元通り埂を管業し、埂を改修補強する。張金鏞らはそれを妄りに妨げてはならない。阮・虞両姓所管の埂は勝手に高さを増してはならない。暴力をふるった張志祥らは分別して答責し枷を加える。さらに張金鏞らは阮文琴・阮吉康に目の傷の治療費を支払う。張姓に加担した供述を行った地保の張阿庚もまた責懲する。

④ 金奎鼎らが謝春栄らに対し勝手に墳墓を増やし墳樹を伐採したとして訴えた件¹¹

〈発端〉謝姓の山が左に、金姓の山が右にあり、二姓の山の境界は複雑な様相を呈していた。そこに植えられた樹木は両姓の墓地風水であり、伐採は協定により永久に禁じられていた。いま金奎鼎らは謝春栄らが約定に反して再び伐採したとして謝春栄らを突然訴えた。

〈査訊〉謝春栄らが新たに墳墓を設けたことも樹木を伐採したことも事実がないという証言から判断して、金奎鼎らが謝春栄らを訴えた意図は、その訴えを口実に山の占拠をもくろんだことは明らかである。

〈断案〉代訴人の金和甸を答責に処して誣告者の戒めとする。今後は以前の協定に基づいて墳墓の増設と樹木の伐採を永久に禁じ、両姓の以前の境界に杭を打ち、後顧を絶つ。

⑤ 馮秀潮らが李貢来らに対し盗伐して山の占拠を図ったとして訴えた件¹²

〈発端〉馮秀潮らの山と李貢来らの山は隣接していた。李貢来らは咸豊八年（一八五八）に山の一部を馮秀潮らに売り、馮姓の祖墳を保護する来脈にさせ、かつ〔李姓が付近の自身の管業地で〕耕作することを買禁する協約を結んだが、李貢来らが売却した山の樟樹の枝を伐採したため馮秀潮らは李貢来らを訴え出た。

〈査訊〉樟樹は李姓の山のものではなく、馮姓の管業内の樹木である。馮秀潮らは馮姓の山に祖墳があるので李姓の山を買って来脈を保ち、侵害を防いだのである。

〈断案〉馮秀潮らは樟樹以内の山を元通り管業し、境界地では妄りに樹木を伐採してはならない。李貢来らは協約に従い耕作することを禁じ、馮姓の祖墳を害してはならない。李貢来らの山は元通り彼らの管業に帰し、その山の樹木もまたそれに従う。李貢来らが越界して柴を刈ったことは極めて些細なことであるため、李貢来らには香燭紙銭の費を出させ、馮秀潮らの祖墳を安堵することで事態を收拾させる。

⑥ 酈錦瑞が王金田に対し、越界して樹木を伐採し、土地の占拠をはかったとして訴えた件¹³

〈発端〉酈錦瑞の管業地には祖墳が多く、王金田の管業地にも祖墳三基があった。最初、酈錦瑞が王金田らの管業地内で小樹三株を伐採したため、王金田はこれを恨み、酈錦瑞の管業地内の桑樹一〇株余りを伐採した。両姓は仲裁に応じず、とうとう互いに訴えた。

〈査訊〉仲裁人陳春甫によれば、王金田らは酈錦瑞の管業地内の桑樹を越界して伐採し、争地の計としたが、説得により宴席を設けて弁償させたのに、その後また蒸し返したという。両姓の境界は明白である。

〈断案〉両姓の管業地は元通りそれぞれの管業に帰す。王金田らが伐採した酈錦瑞の桑樹一一株については酈錦瑞が伐採した王金田の樹木三株の費用を控除し、王金田に洋銀六元

11 『諸暨論民紀要』巻二、金奎鼎等控謝春栄等盜葬砍樹由。361

12 『諸暨論民紀要』巻二、馮秀潮等控李貢来等盜砍図佔由。397

13 『諸暨論民紀要』巻二、酈錦瑞控王金田等越砍図佔由。407

を出させ、うち四元を樹価の弁償金として酈錦瑞に、二元を和解宴席の費用として仲裁人の陳春甫に支払う。

⑦ 周賢東らが周松林らに対し松樹を盗伐したとして訴えた件¹⁴

〈発端〉周賢東らはその高祖周遇吉や周壁奎の墓がある祖遺の山を有していた。周松林は自己の山が周賢東らの山に近いことを口実に周賢東らの山内にある大松を手に入れようとしてむやみに出拵したため、周賢東らは周松林らを訴えた。

〈査訊〉周松林が出拵した松樹三株のうち、平岡上にあるやや大きな一株はもとより境界地にあるが、他の二株は周賢東らの山内にあるものである。

〈断案〉平岡上の一株の代価については両者が均分すべきだが、周松林が高齢で貧しく、かつ伐採工賃を独りで負担したことを鑑み、周賢東らに族誼によって憐みをかけ、受け取るべき半価を周松林の手当てとする。しかし山腹の松樹二株については、周松林が阮舟木に出拵して搬出させており、周松林に洋銀一元五角、さらに出拵人の阮舟木に洋銀一元五角、併せて洋銀二元五角を周賢東らに支払わせ、拵価の弁償とする。今後、周賢東・周松林のそれぞれが有する山は元通り管業し、周松林は混争をしてはならない。周炳文が殴り殺されたとして周賢東が周炳来らを訴えた件については、調べた結果、周炳文は病死であることがわかった。周賢東らは悔い改めているが、誣告の風潮はその浸透を防がねばならないので、周賢東を答責に処す。周松林が樹木を越界して伐採したことについては、高齢であることから寛大に扱い、その代訴人周賢善を答責に処す。

⑧ 周載賢と宣昌定らが互いに山を占拠し樹木を伐採したとして訴えた件¹⁵

〈発端〉周載賢らは黄婆衙口という祖遺の山を有し、宣昌定もまた黄婆衙という祖遺の山を有していた。いま宣法雲らは柴薪を伐採するため黄婆衙口の松樹九株を越界して伐採したところ、周載賢らは察知し、周姓の仲裁者を立てて宣昌定に罰金を払わせ墳墓を安堵させようとした。宣昌定らは伐採の場所が彼らの祖遺の黄婆衙の山場であると主張したため、両者互いに譲らず訴え出ることになった。

〈査訊〉宣法雲らが松樹を伐採した場所は確かに黄婆衙口、すなわち周姓の山である。両姓の山には祖墳が多い。

〈断案〉両姓の山はそれぞれが元通り管業する。宣法雲らが越界して伐採した小松樹九株については、彼らに錢五四〇文を弁償させ、さらに墳墓を安堵する香燭各物費として錢四六〇文を加え、合計錢一〇〇〇文を周載賢らに支払う。

⑨ 陳継品らの場諭の件¹⁶

〈発端〉鴈鵝山には楼屋三間があり、裏には竹が植えられ、墳墓が並んでいる。また左側の山内には松雑各樹があり、多くの墳墓がある。陳継品らの指摘によれば、この山の墳、屋、竹木および屋前の田地と塘¹⁷はみな彼の祖遺の資産であるとした。楊文友は家屋ならびに竹木がある場所はみな自分の資産であると称した。

14 『諸暨論民紀要』卷二、周賢東等控周松林等盜砍松樹由。419

15 『諸暨論民紀要』卷二、周載賢与宣昌定等互控佔山砍樹由。423

16 『諸暨論民紀要』卷三、楊（陳）継品等場諭由。454

17 「塘」とは、「平地の凹所に周辺から流入する水を貯溜した溜池」をいうが、ここではその本来に意味の「堤防」の意味であると思われる。本田治「宋代婺州の水利開発—陂塘を中心に—」『社会経済史学』四一卷三号、一九七五年、参照。

〈査訊〉調査の結果、先の判断で誤りはない。陳継品らが族人を使って楊文友の家の裏で新竹数十株を秘かに伐採したことに対し、その場所を自分の管業地と主張するのは、明らかに混争である。

〈断案〉証人が集まるのを待って再び尋問して定断する。

⑩ 張金鏞らと阮月良らが互いに塘樹を争った件¹⁸

〈発端〉張金鏞は以前に隣人の阮月良らと埭の権利を争うも、もとより塘の権利を争うまでには至らなかった。しかし、このたびは虞錦校と塘の権利を争うことになった。そのやり方は埭を争った時と変わらない。

〈査訊〉虞姓の埭と張姓の塘とは隣接するが土名が異なり、したがって塘も異なる。

〈断案〉張金鏞らは買契に基づいて本来の塘を管業させ、虞錦校らは妄りに占拠してはならない。阮・虞両姓の風水埭において張朝連らがまた樹木を伐採したことについては、再び張金鏞らは錢二〇〇文を出して「家外人等永禁砍伐」と書いた土布を路傍の樹木にかけてそのことを周知させる。以後阮・虞両姓は埭を修築する際、拡張して張姓の塘を侵してはならない。

⑪ 何蘭生らが宣開宏等に対し人の死を口実に騒動を起こしたとして訴えた件、ならびに宣維龍らが何蘭生に対し越界して伐採し、仮埋葬地を設けて山を占拠したとして訴えた件の内情¹⁹

〈発端〉何蘭生は小山という山と井頂という地を宣姓から購入し、去年の冬、井頂に小屋を建てて住んだ。宣開宏らはいとこの宣開云が病死したことでその小屋が祖墳の気脈を塞いでいるとして何蘭生に対して騒動を起こし、土地の贖回をもくろんだため、何蘭生に「人の死を口実に騒動を起こした」として訴えられた。宣維龍らもまた何蘭生が妻の棺を小山に仮埋葬しているが、その山内の境界地は祖墓の気脈を妨げているとして大勢でその地の杉樹を伐採したことから、何蘭生を「越界して伐採し、仮埋葬地を設けて山を占拠した」として訴えたが、好き勝手に暴力をふるったため、何蘭生に逆に訴えられた。

〈査訊〉何蘭生は同治三年（一八六三）に宣廿八・宣開云から小山という山を購入、また光緒八年（一八八二）に宣世玉から井頂という土地を購入した。何蘭生が小屋を建てた場所は購入地内にあり、もとより宣開宏らの祖墓を妨げるものではない。何蘭生の妻が仮埋葬されている場所は宣維龍らの留める祖墳に近い。

〈断案〉何蘭生は山・地を契約に基づいて管業し、宣開宏らは小屋を建てた場所を混争してはならない。また絶売の土地を無理やり贖回してはならない。ただ井頂山内は宣維龍らが祖墳を留めて祭祀を行っており、その墳上の樹木の伐採は以前に禁止されている。何蘭生は妻の棺を仮埋葬するのをやめ、秋になるのを待って墓を移し、再び余計な問題が起こらないようにする。宣開宏らが何蘭生の子何啓明を拘留した件は本来ならば厳罰に処すべきところだが、何啓明は殴られてはおらず、同じ村に住むこととて、寛大な措置を取り「和を以て貴と為す」によって各々のわだかまりを解く。何蘭生が伐採した杉木についてはす

18 『諸暨論民紀要』卷三、張金鏞等与阮月良等互争塘樹由。457

19 『諸暨論民紀要』卷三、何蘭生控宣開宏等藉屍擾害並宣維龍等控何蘭生越砍佔殯各等情由。461

でに搬出されており、穀酒や洋銀を奪われたというのは根拠のないことゆえ、詮議しないことにする。

⑫ 陳炳仁が夏登官すなわち阿登に対し松樹を秘かに出拵したとして訴えた件²⁰

〈発端〉夏登官は大松樹三株を越界して伐採し、孫啓照に出拵して搬送させた。陳炳仁は抗議したが、利益は人の明知を盲目にさせるためか、夏登官が自分の山から伐採したものと強弁したので、陳炳仁は夏登官を訴え出るようになった。

〈査訊〉夏登官らの山は上にあり、陳炳仁の山は下にあり、山腹には堤があって境界は明白である。夏登官が越界して松樹を出拵し、陳姓の墳墓を自分の祖墳と言い張るのは山の占拠が目的である。夏登官が松樹三株を出拵した場所は確かに陳姓の山内である。

〈断案〉樹価の洋銀八元は夏登官と出拵人の孫啓照が四元ずつその代価を弁償して陳炳仁に支払わせる。

つぎに、みずからの管業地内で樹木を伐採したにもかかわらず、他人から何らかの理由で訴えられた場合を挙げる。

⑬ 黄張書らが黄張魁らに対し風水樹を秘かに出拵したとして訴えた件²¹

〈発端〉黄張魁は松株各樹を蓄養する土地を有していたが、城董が東嶽廟（泰山に祭られている神の廟）再建のため黄張魁にその地に蓄養されていた一三株の樹木の出拵を求め、見積額として洋銀八〇元を黄張魁に支払おうとした。そこで黄張書らは非望を抱き、その地は黄張書らの陽基（住宅風水）を保護するものだとし、洋銀二〇元を出して樹木の買禁を求めた。黄張魁はわずか二〇元だったためその提言に応じなかった。そこで黄張書らはずいぶん秘かに協約を作成して、黄張魁らを訴えた。

〈査訊〉樹木は黄張魁の地内にあり、出拵する目的も東嶽廟を造るためで、公に利するものである。黄張書らは陽基と無関係の樹木において保護を口実とし、勝手に買禁協約を作り、黄張魁の花押を捏造し、わずか洋銀二〇元を出すだけで一〇〇元以上の価値のある松株各樹を買禁しようとした。

〈断案〉黄張魁は土地と墳樹を元通り自らが管業し、出拵で得た洋銀八〇元はそのまま領収して詮議するに及ばない。黄張書が供述する仲裁人黄国堯らが黄張書の子を捕まえ、その家を壊したというのはみな嘘である。黄張書は妄りに訴訟を起こしたのであるが、同宗の誼、「和を以て貴と為す」により、大目に見て深く追及しない。

⑭ 宣鳳竹らが祝克永らと互いに山木を争った件²²

〈発端〉祝克永らは祖遺の廟後と廟後山の山場と田畝を有し、その山内には先祖の墳墓があり、雑木が植えられていた。その西側の山麓には、恵、宣、祝、兪、楊、趙各姓が共同で建てた全湖廟があったが、これは去年崩落したため取り壊した。祝克永らが管業する廟後山内で大樹六株を伐採したが、宣応龍はその山が全湖廟に連なることを口実に、廟の責任者の宣鳳竹と結託し、そこが恵姓の廟後の山であると主張して混争した。

〈査訊〉祝克永らの祖遺の山は全湖廟の裏にあり、宣鳳竹らがそことかけ離れた恵姓管業の太平廟の裏にある山の名義を騙って影射したことは明らかである。

²⁰ 『諸暨論民紀要』巻三、陳炳仁控夏登官即阿登盜拵松樹由。495

²¹ 『諸暨論民紀要』巻二、黄張書等控黄張魁等盜拵蔭樹由。391

²² 『諸暨論民紀要』巻二、宣鳳竹等与祝克永等互争山木由。394

〈断案〉祝克永らの山場と田畝、および墳樹は祝克永らが元通り管業する。ただし、祝克永らもまた同じく全湖廟の廟主であることから、廟の再建のための援助金として一万文を寄付し、宣鳳竹らに受け取らせる。

⑮ 趙昌祥が趙志仁に対し越界して柴を刈ったとして訴えた件²³

〈発端〉趙志仁は光緒九年（一八八三）に周太和と洋銀二四元を出資し趙昌祥の山を共同購入した。山麓には趙昌祥の亡伯父趙心湖らの浮厝（仮埋葬地）二カ所があった。いま趙志仁はみずからが管業する小路という山で柴を刈ったが、二人は口論となり、趙昌祥は趙志仁を訴えた。

〈査訊〉小路は趙志仁の契買の中にある。趙志仁の供述によれば、柴薪を伐採した場所は小路の付近であり、越界していない。趙昌祥は自ら売契を作成したにもかかわらず、真実を曲げて混争するは正しくない。ただ、趙志仁が柴を刈った場所は趙昌祥の亡伯父の浮厝の来脈であり、彼の行為が亡伯父を驚動したことは免れない。

〈断案〉趙志仁は祭品、錫箔、香燭を具えて祖墳を安堵し、事態を收拾する。

⑯ 楊田高らが楊啓桂らに対し樹木の伐採を阻止したとして訴えた件²⁴

〈発端〉楊田高らは祖遺の山を有していたが、楊啓桂らは買禁を根拠に楊田高らが木を伐採して公用にすることを禁じ、木材の伐採・搬送を妨害した。そのため楊田高らは楊啓桂らを訴えた。

〈査訊〉協定書を調べたところ山全体の樹木伐採を禁じた項目はない。ましてや買禁にしてもまたわずか銭七〇〇〇文を出して一〇株の墳樹を禁止対象にしたに過ぎない。その残りは買禁の対象ではなく、楊田高らが出拵しても当然である。

〈断案〉楊田高らが出拵した山の樹木は伐採・搬送を行い、楊啓桂らはそれを妨害してはならない。

⑰ 周瑞国らが僧殷蓮と互いに界を争った件²⁵

〈発端〉周瑞国らの風水地は、その祖先が嘉慶年間に購入して二棺を埋葬し、さらに道光年間に侵害を恐れてその来龍を買禁させたものである。いま僧の因蓮（殷蓮）が自身の墳墓である境内左側の山内の樹木を出拵したことから、周瑞国らは彼が周姓の祖墳を驚動させたとして、初めは冷静に抗議したが、続いて凶頼を行い、凶暴をほしいままにしたため、互いに訴えることになった。

〈査訊〉道光年間の協約には「来龍を侵害してはならない」と明記され、かつ道光十四年（一八三四）の協約では、僧は来龍を侵害・再買してはならないこと、周姓はさらにそこに仮埋葬地を加えてはならないことが明言されている。周姓は道光三十年（一八五〇）に再び来龍を買禁している。

〈断案〉因蓮の伐採地は周墳の境内にはなく、彼が出拵して樹木を下山させるのを周瑞国らはむやみに妨げてはならない。周瑞国らは買禁の協約を証拠にして、今後殷蓮は来龍を侵害してはならない。また買禁した場所においては周墳の風水樹を越界して伐採してはならない。周瑞国らが凶頼を行い、騒動を起こして寺内の建物や器物を破損したことについて

²³ 『諸暨論民紀要』巻二、趙昌祥控趙志仁越界砍柴各情由。414

²⁴ 『諸暨論民紀要』巻三、楊田高等控楊啓桂等阻砍樹木由。443

²⁵ 『諸暨論民紀要』巻三、周瑞国等与僧殷蓮互争界由。455

ては、寛大に処置し、周瑞国らには洋銀一元を出させて因蓮に弁償させる。

最後に、族産または族産と見なされた山内で樹木を伐採して族人から訴えられた場合を挙げる。

⑩ 吳元桂が吳旆良らに対して樹木の搬出を妨害し、騒動を起こしたとして訴えた件²⁶

〈発端〉吳旆良らは樟樹一株、白楊樹二株を蓄えた山場を有していたが、吳六敖が勝手に吳元桂に出拵したため、その木はすでに切り倒されて山に残されていた。吳旆良らは搬出を阻止しようとしたが止めなかったので、吳元桂の家に押しかけ、器物を壊して騒ぎたてたことから、吳元桂に訴えられた。

〈査訊〉吳旆良らの供述によれば、この山場には祖墳が二つあり、墳墓の左にある樟樹一株は風水樹である。その山は吳旆良、吳旆潮、吳旆周、吳六敖の四つに分けて管業された。相続された山については、前三氏が一族にそれぞれ売却したのに対し、吳六敖のみがまだ売却していなかったという。その木は事実、吳旆良らの公共のものであり、吳六敖が樟樹を秘かに出拵した咎は免れないが、彼は吳旆良らの実の叔父であることから、大目に見て強制出頭を免じて連累を省く。

〈断案〉吳元桂は樹木伐採の代価として洋銀六元を出して吳旆良ら三人にそれぞれ支払う。切り倒した樟樹は山内の白楊樹でないため、すべて吳元桂の搬出に帰し、吳旆良らは阻止してはならない。吳旆良と吳旆潮が吳元桂の家に押しかけ乱暴を働いたことについては被害状況によって彼らを分別して咎責し、洋銀一二元のうち樹木の代価の洋銀六元を控除した洋銀六元（吳旆良一・五元、吳旆潮一・五元、吳旆周三元）を吳元桂に弁償させる。

⑪ 趙瑩らが趙金鑑らと互いに砍樹・凶殴で訴えた件²⁷

〈発端〉趙瑩らと趙金鑑らは明代以来祖墳が累々とし、墳傍には松雑の風水樹が蓄養されている公山を共有していた。趙金鑑の供述によれば、彼らは協議して樹木を出拵し、墳莊を造ることにしたのに、趙瑩らはまだ族衆にそのことを諮る前に趙金鑑が勝手に伐採してしまったと言ったことから、互いに「砍樹」と「凶殴」で訴えた。

〈査訊〉協約を調べてみると、「祀山の柴片は公用に出拵する」の一文があった。そもそも柴片とは確かに大木ではない。いま趙金鑑の称する所では樹枝を刈りとっただけで、ささやかな利益を得ようとしただけなのは明らかであるが、趙啓華らは冷静に阻止せず、暴力をふるったのは憎むべきである。

〈断案〉趙金鑑には傷跡があり、もとより趙啓華らを分別して責懲すべきところであるが、趙金鑑が勝手に樹枝を刈り取ったのも理に合わない。両造は同族であり、「貴とする所は和に在り」なので、寛大な措置として趙瑩、趙啓華らは樹木の代価洋銀二〇元のうち趙金鑑が祖墳安堵の費とする洋銀八元を控除した洋銀一二元を趙金鑑に支払い、治療や対物賠償の費に充てる。今後誰であれ、この山での勝手な伐採を禁ずる。

⑫ 蔣歩元らが沈金伝に対し樹木を盗伐したとして訴えた件²⁸

又 再論²⁹

〈発端〉蔣歩元らは井頭龍の山を有し、沈金伝こと蔣茂清もまたこの山を有していた。そ

26 『諸暨論民紀要』卷二、吳元桂控吳旆良等捺樹滋鬧由。349

27 『諸暨論民紀要』卷二、趙瑩等与趙金鑑等互控砍樹凶殴由。367

28 『諸暨論民紀要』卷二、蔣歩元等控沈金伝盜砍樹木由。383

29 『諸暨論民紀要』卷二、又 再論。384

れぞれ山には祖墳があった。蔣歩元らの祖墳はその高高祖蔣海龍であり、沈金伝の祖墳はその叔高高祖蔣景高父子であった。蔣景高の家系は蔣東升に至って途絶えたが、沈金伝はその由を知らず、蔣景高をもって直系の高高祖とした。その意図は蔣景高父子の墳墓のある山で樹木を伐採しても分を超えないということだった。蔣歩元らは沈金伝が勝手に杉樹八株を伐採したため仲裁者を立てて抗議し、沈金伝は沈姓を継いだのだから蔣姓の山を管業し得ないと指摘した。しかし、互いに譲らなかったため、蔣歩元らは沈金伝を訴えた。

〈査訊〉蔣姓の宗譜を調べれば、蔣景高は蔣金富から出て、蔣東升に至って途絶えている。蔣海龍は蔣金討から出て、直接蔣歩元まで至っている。沈金伝とは蔣茂清のことであり、蔣景高の兄蔣景魁の子の蔣国達から出たものである。すなわち、井頭龍の山はもとより蔣歩元らの遠い祖先と分かち合ったものである。沈姓の宗譜によれば、沈金伝は沈百卉を継いで養子となっており、本来ならば蔣姓の資産を管業できない。しかし、蔣景高に継嗣がなく沈金伝はそのためにその墳墓を祭っており、蔣景高が遺した井頭龍の山は蔣歩元らと共同管理すべきものである。ただし沈金伝が公山の樹木を秘かに伐採したことは理に反する。以前に仲裁人が沈金伝に罰金として洋銀一五元を支払わせ、伐採を禁じ祖先を祭る費用としようとしたことはもとより問題ない。

蔣金富└蔣景魁└蔣国達…□…□…□…→蔣茂清（沈金田）

└蔣景高……………蔣東升└×

蔣金討└蔣海龍…□…………□…□…□…→蔣歩元

〈断案〉伐採した杉樹八株の評価額洋銀一二元のうち、被告が六元を取り、残りの六元を原告蔣歩元に支払い、再び勝手な伐採を禁じるものとする。

⑳ 許芳来らが許海棠らに対し勝手に柴薪を出搾し、その価を蝕んだとして訴えた件³⁰

〈発端〉許海棠（棠）と許相文は許姓一族の公山を王小青に秘かに出搾して柴薪を伐採させ、代価錢一四〇〇文を得たことで、許芳来らは許海棠らを訴えた。

〈査訊〉許海棠が柴薪を出搾したにもかかわらず、族人に申し出ていないのは不当である。

〈断案〉許海棠は罰金として洋銀六元及び搾価の代価洋銀一元を許芳来らに支払い、祠の公用に帰す。許相文は許芳来が叱責したことからあえて不遜な言葉を吐き、許芳来の子の許銀生を殴ったのは、誠に憎むべきではあるが、寛大な措置を取り、許相文は錢二四〇〇文を許芳来に支払い、和解の宴を設けて礼に服する資とする。

㉑ 何学安らと何咸定らは互いに山場を争い、何祥茂らが何咸定に対し祭祀を担当し公山を秘かに売り飛ばしたと訴えた件³¹

何仲明〔始祖〕└何柏舟└何俊義└〔東何〕……………→何祥茂

└〔中何〕……………→何咸定

└何俊良〔西何〕……………→何学安

³⁰ 『諸暨論民紀要』巻二、許芳来等呈控許海棠等私搾蝕価由。402

³¹ 『諸暨論民紀要』巻二、何学安等与何咸定等互争山場及何祥茂等控何咸定管祀盜売等情由。416

〈発端〉何学安は始祖が葬られている学士隴と東庵の墳山の管業権を争おうと思い、何咸定が樹木を伐採し墳墓を設けたとして訴えた。何咸定もまた逆に訴え出た。何祥茂らもまた何咸定が祭祀を担当し、公田を秘かに売り飛ばしたと訴えた。

〈査訊〉学士隴と東庵は東何と中何の管業に係わり、西何の何学安は別の山を管業しているので、何学安が始祖らの墳墓を口実に勝手に山の管業権を争うことはできない。

〈断案〉この山は東何の何祥茂らと中何の何咸定らが元通り管業し、みずから侵害行為禁止の協約を作成する。今後は祖墳に近くで開掘や炭焼きを行ってはならず、また墳上や墳墓に近い大樹を伐採してはならず、それによって墳墓の損傷を免れ、保護に資するようになる。何咸定らが祠内の田畝を勝手に売り飛ばしたことについては、それによりわずか洋銀一六元を得ただけなので、大目に見て期限内に買い戻して祠に返す。

②③ 楊瑞宝と朱貢元らが互いに山地を争った件³²

〈発端〉楊瑞宝は朱情宝の女婿であった。朱情宝は子の朱周朝が匪賊に拉致されて帰らず、夫婦ともに年を取っていたため、継嗣に困難が生じた。そこで光緒十二年（一八八六）に親戚の仲介にて女婿楊瑞宝の子炳朝を朱周朝の跡継ぎにした。光緒十七年（一八九一）に及んで朱情宝夫妻が相次いで死んだ。遺産は元より少なく、朱炳朝（楊炳朝）は相続した山を趙瑞賓に売却して管業させた。またもう一つの地を趙金益に売却して管業させた。いま朱昌徳と朱貢元らが突然異議を申し立て、朱情宝の山の占拠を図り、趙瑞賓が購入した山内の樹株を強引に切り倒したことから、互いに訴え出るようになった。

〈査訊〉朱炳朝は父の命に従い家系を移して朱周朝の後を継ぎ、資産を管業し、墳墓を祀っていた。そのうえ山を他人に売り、入手した代価をその外祖父母を埋葬する費用としたのは実に理にかなったことである。朱昌徳らは甥が舅の資産を売ったことを口実に趙瑞賓が買った山の樹木八株を強引に伐採したのは特に正しくない。

〈断案〉切り倒された木はさほど大きくないため、朱昌徳は洋銀二元、朱貢元は洋銀一元の合計三元を出し、趙瑞賓に弁償する。朱昌徳と朱貢元は大目に見て叱責するに止める。趙瑞賓と趙金益が購入した山と地は契約通りに分別して管業する。朱炳朝は朱周朝の遺産を管理し、これによって墳墓を祭れば、飢え嘆かずに済むことになる。

二 諸暨県における山林資源紛争の特徴

ここでは上記二三件の判牘を 1 祖墳に絡むもの、2 風水に絡むもの、3 同族に絡むもの、の三つに大まかに分け、各案件の要点を列挙する。

1 祖墳に絡むもの

②これは宣旺寅が蔣秀法の管業山の柴を刈ろうとして阻止されたのを契機に宣広円が山の管業権を得ようとして訴訟した案件である。宣広円と宣旺寅との関係は不詳だが、同族であろう。倪望重は、宣広円が「祖墳を口実に山の利権を争おうとした（藉墳佔山）」のは混争であり、その犯行は責懲に当たるとするも、彼の祖墳祭祀を務めてきた実績と反省の態度を加味して、それ以上の追究を免じている。ただ、その一方で、宣旺寅の犯行は未遂であったにもかかわらず、答責処分にして他者への戒めになっている。

³² 『諸暨論民紀要』卷三、楊瑞宝与朱貢元等互争山地由。477

⑥これは単純な樹木伐採紛争案件であるが、互いに相手の管業地の樹木を伐採した弁明を祖墳に求めていることがうかがえる。倪望重は互いの伐採行為に対して賠償責任を負わせ、両姓の紛争の解決を図ろうとしており、一時和解を調停した仲裁人にもその労に報いる措置を取っている。

⑦これは同族間の紛争案件である。周松林は自分の山が周賢東の山と近いことを口実に、その山内の松樹の出柁を強行した。倪望重はそれに対し周賢東の山内にあった松樹の代価を周松林と出柁人に半分ずつ負担させて弁償させる命令を出している。その一方で、周松林が高齢・貧困であることを考慮して、境界地での伐採した代価のうち周賢東が受け取るべきものを周松林に手当てとして支給することを命じ、族内のよしみを重んじ、さらに周松林の越界伐採行為に対しては代訴人を身代わりで処分するなど、周松林に対して寛大な措置を取っている。反対に周賢東が周松林を訴えた際、身内の周炳文の病死を口実に周松林の身内の周炳来らに凶頼（人の死を口実に相手を恐喝・誣告する行為）を行ったことについては周賢東を答責処分にするなどの措置を講じている。

⑧これは他姓管業の山に越界して柴薪を伐採したことで訴えられた案件である。宣昌定らは樹木伐採の場所が周姓管業の山ではなく、自分らの祖遺の山場だと強弁することで、その正当性を主張している。宣法雲と宣昌定との関係は不詳だが、同族と思われる。倪望重は、越界して伐採した宣法雲に賠償責任を認めている。興味深いのは周・宣両姓の山には祖墳が多いことからその行為が祖墳を騒がせたとして樹価の弁償に加えて香燭等の祖墳の安堵代の支払いがそこに上乗せされていることである。

⑨審議未了の案件。内容は不明だが、これより先、陳継品らは小作人兼山の管理人であった楊清礼、すなわち楊文友の父が住む鴈鵝山の楼屋三間の独占管理をもくろんで訴えを起こしたが、倪望重はその主張を退け、楊文友に対し、家屋に元通り居住する断を下している³³。にもかかわらず、陳継品らは家屋を自分の管業として、その周辺の竹木を伐採したものと思われる。陳継品らが竹木を伐採した場所を自分のものと主張する背景には、その場所に祖先の墳墓が多いことが何らかの関係していることが推測される。

⑩これは隣接する山に越界し、松樹を出柁して訴えられた案件である。夏登官は陳炳仁の墳墓を自分の祖墳と称することで、樹木出柁の正当性を主張している。倪望重は夏登官と出柁人に代価を半分ずつ負担させて弁償させる命令を出している。

以上の六案件中、まず②⑥⑩はみずからの祖墳が存在することを口実に他人の管業地に越界して、その樹木を伐採し、その山の占拠をはかった場合である。つぎに⑦⑧⑨は、伐採地が自管業地内であると主張して越界したうえ竹木の伐採ないしは出柁をした場合である。これらは樹木伐採事件の審議の中に何らかの意味で祖墳が関わりを持ち、倪望重もその因子を念頭に置きながら審議を進め、それに見合った判断を下している。ただし、これらの案件においては祖墳の存在がなぜ樹木伐採と絡むのかがいまひとつわかりにくい。

2 風水に絡むもの

①これは管理人ないしはその関係者による盗伐案件である。倪望重は朱喜玉らに賠償責任を嫁するに止め、二度と盗伐しないことを条件に管理人の地位を保全している。また樹木が風水樹であったため、賠償金の中に祖墳を安堵する要素が加味されている。

³³ 『諸暨論民紀要』巻二、陳継品等控楊文友欠租佔屋由。

③これは祖遺の風水埂上の竹木に関わる紛争である。張志祥らは阮・虞両姓の風水埂が何らかの理由で自身の墓地風水を妨げていることを口実に埂上の竹木数株を伐採し、工事を妨げた。これに対し倪望重は阮・虞両姓の風水埂の管業・補修を認め、張姓の妨害を不当とするも、当初の竹木伐採についての処分についての言及はなく、また阮・虞両姓に風水埂の拡張には釘を刺し、張姓との紛争の再発防止を考慮している。張志祥らは結局分別して答責処分を科せられるが、それは竹木伐採のためではなく暴力行為のためである。なお、張志祥らに捕縛された虞錦生が張姓から殴られたと訴えたことは、その事実がなく詮議していない。

④これは協定で禁じられていた場所で風水樹を伐採したことを捏造された案件である。金奎鼎らは謝春榮らを誣告し、山の占拠をもくろんだにもかかわらず、倪望重は代訴人（恐らく金奎鼎の一族）のみを処罰対象とし、両姓の今後の紛争防止を重視している。また、誣告された謝姓に対しても今後約定を遵守することを確認し、両姓の管業地の境界を明確にして紛争の再発がなるべく起こらないよう判断を下している。

⑤これは売主による越界・盗伐の案件である。李貢来らは馮姓に売り、馮姓の来脈とした山で越界して樟樹の枝を伐採して柴にしたが、その場所をみずからの管業の山と強弁することでその行為の正当性を主張したと思われる。倪望重はそれに対し、李貢来らが枝を伐採した行為自体に重きを置かず、李貢来らには香燭紙銭の費を出させて馮秀潮らの祖墳を安堵することを命じている。

⑩これは③で埂の権利を争った張姓と阮・虞両姓が今度は塘の権利を争って訴訟を起こしたものである。張姓の一員と見られる張朝連らが阮・虞両姓の風水埂において樹木を伐採した行為に対して、倪望重は張金鏞らに「家外人等永禁砍伐」と書いた土布の費用を求めており、両姓の紛争の火種を極力除こうとする姿勢がうかがえる。

⑪これは風水の妨害を口実にした越界・伐採案件である。何蘭生が山の境界地で杉樹を伐採した根拠は「その山内の境界地は祖墓を妨げている」ということである。倪望重は、その山内は「宣維龍らが祖墳を留めて祭祀を行っており、その墳上の樹木の伐採は以前に禁止されている」ことを理由に何蘭生に対し妻の仮埋葬の停止処分を命じている。また、宣開宏らが何啓明を拘留した件については不問にして両姓のわだかまりを解く方向が示されている。何蘭生が「穀酒や洋銀を奪われた」という訴えは虚言であると判明するも、それに対する処分はなされていない。

⑬これは管業地で樹木を出せようとしたところ同族から買禁を根拠に阻止された案件である。黄張魁が東嶽廟の再建をはかる城董の求めに応じてみずからが管業する場所の樹木を出せようとしたが同族の黄張書は捏造した買禁協定を持ち出し、伐採を協定に違反して勝手に行ったとして訴えた。倪望重は黄張魁の行為を合法と認めるとともに、黄張書の虚言や混争行為に対しては寛大な措置を取り、同族の融和を図ろうとしている。

⑭これは伐採地が祖廟に連なることを口実に山の管業権を争った案件である。宣応龍はその山が全湖廟に連なることを口実に祝克永らの伐採地が恵姓管業の山であると主張している。倪望重は宣姓の混争を不問にしたのに対し、みずからが合法で樹木を伐採した祝姓に対しては共同建設した廟が近くにあったという理由から廟再建の寄付を命じている。

⑮これも⑤と同様に売主による越界・盗伐の案件である。趙志仁が趙昌祥から購入した

山で行った柴の伐採が元の持ち主から「越界して柴を刈った」として訴えられている。倪望重は趙志仁の行為を合法とするが、その場所が趙姓祖墳の落脈であることから、趙志仁に祖墳を安堵するための若干の費用を支払うよう求めている。

⑩これは祖遺の山で樹木を伐採しようとしたところ同族から買禁を根拠に阻止された案件である。倪望重は楊田高らが伐採した樹木は協約においては禁止対象外のものとして、楊田高の行為を是認している。

⑪これは買禁の協約に背いて樹木を伐採したとして訴えられた案件である。周瑞国らは因蓮が樹木を出拵したことが周姓の祖墳を驚動させたとして訴えている。倪望重は因蓮の樹木の出拵は合法とするも、この機会をとらえて境内の来脈損傷と墳樹の越界伐採の禁止を再確認し、周瑞国らの凶頼を行い、暴力をふるったことに対しては周瑞国らに加害賠償を求めている。

以上の事案は風水、とりわけ墓地風水に絡めて竹木の伐採が問題にされている場合である。このうち、①⑤⑬は、伐採した樹木が風水樹であったり、その場所が他姓の来脈であったりしたことから、倪望重はともに伐採者に「祖墳を安堵する」ための費用の供出を求めているのが特徴である。③⑩⑪⑭は他姓の管業地やその場所における樹木を自らの祖墳を妨げていることを口実に、越界・伐採を敢行した場合である。さらに④⑬⑯⑰は他姓または異姓管で結んだ協約を根拠に風水樹の伐採が問題にされている場合であり、倪望重はこのような紛争を契機に今後の協約の遵守を双方に再確認させ、紛争の再発を防ぐ意向を示している。

3 族産に絡むもの

⑱これは出拵した樹木が一族の公共物だとされた案件である。呉六敖が出拵した呉元桂は伐採した樹木が呉一族の公共墳樹であることを理由に訴えられた。倪望重は、呉六敖が樟樹を秘かに出拵した咎は免れないとしながらも、出頭を免じている一方、樹木伐採の当事者である呉元桂にはその賠償責任を求めている。

⑲これは公山での出拵行為が族議に諮る前に行ったものとして訴えられた案件である。倪望重は趙金鑑の伐採を大きな問題とはせず、伐採を阻止しようとして暴力をふるった趙瑩・趙啓華側に趙金鑑へ治療費や対物賠償の費用を支払わせることで、一族の紛争の根を断とうとしている。

⑳これは族産の場所で樹木を勝手に盗伐したとして訴えられた案件である。沈金田は蔣景高の後裔であると主張することで、その祖遺の山での樹木伐採の正当性を担保しようとした。倪望重は沈金田が元々蔣姓の一員であり、継嗣の途絶えた蔣景高の墳墓を祭ってきたことを考慮し、蔣姓の公山を共同管理させ、伐採した公山の杉木の代価を蔣歩元と折半する判断を下している。

㉑これは一族の公山の柴薪を勝手に出拵したことで族人から訴えられた案件である。倪望重はその行為を不当として賠償金を課すととともに、それを祠の公用、和解のための宴席・服礼の費用に充てさせるなど、一族の意向を重視する措置を取っている。

㉒これは祖先の祭られている墳山で樹木を伐採したことを同族からそれを口実に訴えられ、山の管業権を奪われそうになった案件である。倪望重は何祥茂らと何成定らによる旧来のからの山の管業権を確認し、彼らに今後侵害行為を禁じる協約を結ばせることで墳樹の伐採を防ぎ、同族間の紛争の再発を防ごうとしている。

⑳これは女婿が山の管業権を継承し、のちに他人に売却した山の樹木を他の朱姓の者が伐採した案件である。倪望重は朱昌徳・朱貢元に対して樹木の賠償責任を嫁するほかは叱責に止め、女婿の朱炳朝が遺産を管理し墳墓を祭ってきたことを高く評価している。なお、倪望重は「朱昌徳はすなわち喜玉である」と述べており、㉑の朱喜玉とあるいは同一人物なのかもしれない。

以上の族産に絡む案件のうち、㉑㉒㉓は公山の樹木の伐採が問題視された案件、㉔㉕㉖は伐採した樹木やその場所が族産であることを口実にして族人から訴えられた案件ということになる。

さて、以上の案件事例から導き出される諸暨県の山林資源紛争の諸特徴とはいかなるものであろうか。

諸暨県における山林資源紛争は、以上に挙げた地域社会特有の案件だけでなく、単純で普遍的な盗伐ないしは山の利権争いの一環として生じたものも無論少なくない。たとえば周大金らが、自管業地に屠資深の山が連なることを口実に越境してその山の孟宗竹五、六十株を盗伐したとして訴えられた案件³⁴、方光元がみずからの管業の山と主張して王炳福の山の小樹八株を伐採した案件³⁵、周徳元らが祖遺の山で柴を刈って積んでおいたところ、王啓官らがそれを自管業の山から伐採したものと主張し、族人を率いて運び去った案件³⁶などは比較的わかりやすい事案といえよう。倪望重はこうした案件に対して非があると判定した側、すなわち周大金らには竹価銭六〇〇〇文、方光元には樹価銭四〇〇文を、王啓官らには柴の遺失代洋銀一〇元をそれぞれの被害者に賠償させ、双方の管業地の境界を明示して新たな混争を防ぐことで一応の決着をつけている。

しかしながら、諸暨県の山林資源紛争は上掲の史料のように、祖墳・墓地風水に絡んで展開されることがおびただしくあった。風水樹とは何か。上田信は、「祖墳を保護する来脈が穏やかであるためには、その上の「蔭林」と呼ばれる樹林を保護する必要があったことが明らかとなる。墳墓の場合にも、その周辺でつながる「墓林」が保護の対象となった」という³⁷。諸暨県の地域社会にあっても祖墳に近在する竹木が単なる山林資源だけでなく風水樹・風水竹として機能している場合が少なくなく、それらはこのような理解の下に尊重され、庇護の対象とされたことは疑いない。それゆえにその損傷、ましてや盗伐は極めてゆゆしき事態であると受け止められたのである。事実、倪望重が裁いた案件の中には、黄金生の祖墳の裏に蓄養された風水樹としての松樹が周庚燾らにより焼き払ってしまった事件は周姓が風水の説に惑ったことが原因であったとされる案件も確かに存在する³⁸。ただそれは一例に過ぎず、祖墳・風水に絡む大半の山林資源紛争はそれを利用ないしは口実にした伐採の正当化や管業権の獲得に求められる傾向が強い。さらに族産もまたこの地域の宗族との関係で重要な意味を持つとはいうものの、排他的管業権が必ずしも明確でない山での樹木伐採は宗族内部での

³⁴ 『諸暨論民紀要』巻二、周大金等与屠資深等互控砍竹由。

³⁵ 『諸暨論民紀要』巻三、王炳福与方光元及楼性瑞等控争地畝由。

³⁶ 『諸暨論民紀要』巻二、周徳元等控王啓官即啓貴搬柴凶佔由。

³⁷ 上田信「山林および宗族と郷約—華中山間部の事例から—」木村靖二・上田信編『人と人の地域史』〔地域の世界史一〇〕山川出版社、一九九七年。

³⁸ 『諸暨論民紀要』巻一、黄金生控周庚燾等暗焚墳蔭由。

紛争の火種となる場合がしばしばあった。

少なくとも倪望重が選別した判牘に現れた紛争は一面では賠償で済まされるほどの、いずれも大きな問題ではなかったにもかかわらず、地域社会の内部で自主的に解決されることなく県の裁きの場に持ちこまれる場合が多かった。唯一、姚宗虞が姚桂法の樹木を伐採したところ宗族の姚万森の説得で姚宗虞に宴席を設け祖墳を安堵させて事態を収めた記事が存在するが、これものちになって姚宗虞に疑いを抱かせ、結局は収拾のつかない結果になっている³⁹。ましてや沈金伝が樹木を伐採したことで蔣歩元らが寿景太らを立てて仲裁をはかるも沈金伝はそれに従わず提訴するに至った案件(⑩)、酈錦瑞と王金田が互いに樹木を伐採し、陳春甫の仲裁を経て和解の宴席を設けて弁償させたにもかかわらず、再び蒸し返されて結局互いに訴えるに至った案件(⑥)、宣法雲らが柴薪を越界して伐採したことで周才方等を仲裁に立て、樹価の賠償と祖墳の安堵をはかったにもかかわらず、結局は互いに提訴に至った案件(⑧)、などは地域社会内での解決がことごとく失敗に終わったことを示している。ただ、これらは当時において地域社会が紛争解決能力を十分具えていなかったひとつの表象として見ることを可能にする。宗族の連携もまたその内部においては資源獲得競争の戦場と化していたため、自力での紛争解決は困難だった。そこで地域社会はそのような厄介な問題の解決を公権力を標榜する第三者にかなりの部分を委ねたのである。諸暨県もまた他の浙江地方と同様に明末以来、好訟の地として知られている⁴⁰。これもまた、そうした事情を背景に持つ可能性を示している。

ならば、裁定を委ねられた王朝の末端機関であった県は山林資源をめぐる地域紛争にいかに対処したか。倪望重は前述のように単純な盗伐案件に対しては非があると認めた者にその代価を弁償させることで解決をはかった。しかし、祖墳、風水、族産に絡む案件の場合はそれだけでは済まなかった。

「非がある」と認めた者たちへの対処はどうか。まずは情状酌量である。そこには「もとより××ではあるが」との表現のもと、後悔、被害の少なさ、高齢貧困、同族の融和などの理由を挙げ、「従寛」によって責懲や賠償を免除する措置を取ることが多い(②⑤⑦⑪⑬⑱⑲⑳㉑㉒㉓)。その一方で態度不良や暴力を伴った場合は答責処分にすることがあった(②③)。

逆に「非がない」と認めた側に対しても相応の負担を求めている。相手の風水を妨げるような埂の変更を認めない(③⑩)、仮埋葬墓を移転させる(⑪)、廟の再建のための援助金を寄付させる(⑭)、祭品、錫箔、香燭を具えさせる(⑮)、などはその意味である。⑮に関して倪望重は、伐採者の正当性を全面的に認めつつ、「彼の行為が亡伯父を驚動したことは免れない」と述べていることは興味深い。

樹木伐採行為が「祖墳を驚動した」ことから、「祖墳を安堵させる」ことで事を収めねばならなかった。弁償金の中に祖墳を安堵する費用を含めて弁償させる(②⑱)、弁償に加えて香燭銭の費用を出させる(⑧) 弁償の代わりに香燭紙銭の費用を出させる(⑤)、祭品、錫箔、香燭を具えさせる(⑮)などはそうした意思と見られる。

図頼・誣告への対応についても比較的緩やかな対応がとられているように感じる。一方で

³⁹ 『諸暨論民紀要』卷二、姚桂法与姚宗虞互控凶傷由。

⁴⁰ 宣統『諸暨県志』卷一七、風俗志、風俗総は、万曆志を再引用して「諸暨嚴邑好訟、所争毫末、累歳不休。村居自為党、豪宗武断」とある。

は「誣告者の戒めとする」(④)、「誣告の風潮はその浸透を防がねばならない」(⑦)などの原則的な言辞を示すものの、実際の処分は答責止まりであり、凶頼に至っては刑事処分に至っていない(⑪⑫)。さらに訴状における虚言についてはほとんどの場合詮議無用として軽視されているのが実情である(③⑪⑬)。

注目すべきは倪望重の判牘の多くには紛争の当事者同士による管業領域・境界の再確認(②③⑤⑥⑦⑧⑩⑪⑬⑭⑰⑲⑳㉑)や既定の協定の遵守や新たな協定の締結(④⑰㉒)が命じられていることである。ここには紛争を契機にして今後起こりうる新たな紛争の再発を防止したいという意思が強く示されているものと思われる。

総じて倪望重が諸暨県の山林資源紛争に対して示した判断は、地域・宗族の価値意識を極力尊重しながら加害者と被害者の間に禍根を残さないよう処分に均衡を図り、法の適用を極力抑え、かつ紛争の火種を取り去って、今後起こりうる紛争の再発を防いで、地域・宗族の間の秩序の安定を図るものだったといえる。それは彼の判牘にしばしば現れる「和を以て貴と為す」という表現に象徴されよう。

とはいえ、諸暨県の民衆はむしろこのような地方官の判断を逆に利用し、依然としてなお管業地や山林資源の獲得競争のための訴訟を止めることがなかったのであり、その限りでは倪望重が「これを山奥の僻地にも一家に一冊置けば、[これを読んだ]彼らは反省・自戒し、訴訟を繰り返すことがなくなるだけでなく、争う心が譲る心になり、睦あう気持ちを生むことになるだろう」として『諸暨論民紀要』を刊行した思いは諸暨県の民衆には通じなかったことになろう。

おわりに

以上、諸暨県における山林資源紛争のありかたを倪望重の判牘を中心に検討した。つぎなる課題は、こうした諸暨県の実情を他地域・他時代にまで普遍化できるかということであろう。

私見によれば、浙江の山間部にあっては山林資源としての竹木が商品としての価値を持った明中期以降にはそれに伴って山林資源獲得のための伐採が地域紛争の要因となり始めたが、著しい人口増加とともに木材の需要が高まった清代には山林資源紛争はとりわけ顕著になったものと思われる⁴¹。

さらにこのようなあり方は、単に浙江一省に止まらず、とりわけ宗族連繫が強く、山林面積が省全域に占める割合が高く、さらに竹木が貴重な資源と見られ、かつ風水が尊重されたという点においては著しく類似性を持つ安徽、江西、福建など浙江に隣接する諸省にも広く見られた現象であったことが無理なく推測される。

福建の伝統社会のありかたを論じた三木聰は、「地方官はその担当地域において国家支配の原則を貫く義務を負っていたが、いざ裁判という実際的な判断が求められる段になると、地域社会が納得する判決を余儀なくされた」という⁴²。本稿で検討した倪望重の裁断はこの点と一脈通じるものがあると思われる。

三木はまた、特定の目的でわざと死者を裁判に持ち込むことと理がないものの「情」を

⁴¹ 『資治新書二集』巻二〇、判語部、墳墓四、『末信編二集』巻五、盗砍墳墓争、など。

⁴² 三木聰『伝統中国と福建社会』汲古書院、二〇二五年。

念じて訴訟を起こす側に比較的有利な判決が下されるという状況の下、図頼という行為が訴訟の手段として用いられるのが顕著となったことから、それを「図頼の詞訟化」と表現したが、同じく福建において風水を研究した魏郁欣は、三木の研究を受けて「図頼の詞訟化」のみならず、風水の損傷にかこつけて風水以外の目的を遂げようとする「風水の詞訟化」の存在を論証している⁴³。本稿で検討した祖墳・風水に絡めた山林資源紛争もこの文脈でとらえることができるのではないか⁴⁴。

⁴³魏郁欣「清代の墳樹紛争に見る福建宗族の資源獲得戦略—清流安豊羅氏を例として—」（未定稿）。

⁴⁴ ちなみに『諸暨論民紀要』には、本稿で紹介したもの以外にも、「陳廷学控周如裕等図頼欠款由」「陳長貴控陳秋槎図頼佃田押価由」「楊蔭繁即順国控迫楊周烈等図頼票款由」「錢章武控王昌太図頼借款由」（以上巻一）、「吳茂癸与吳宣氏互控図頼估管由」「徐禹平控徐文照聽信徐逢見主使図頼由」「斯琢相控黄錦湘図頼田価由」（以上巻二）、「陳蘭生等与楊文煜互控捨脱図頼由」（以上巻三）など、図頼を扱った案件が少なくなく、この問題についての検討は今後の課題としたい。

林産物からみる近代銭塘江流域社会

——建徳・桐廬における口述調査を手がかりに

佐藤仁史

はじめに

本稿は明清期から近代の銭塘江流域において水運業に従事した「九姓漁戸」に着目し、彼らが運送した薪や木炭などの林産物の角度から銭塘江水系と流域山区社会との間の社会関係を明らかにするものである。「九姓漁戸」に関する従来の研究は、もっぱらその誕生の起源や差別の実態、賤民としての法身分、陸上民と相当異なる特色を有する各種儀礼などに集中し¹、彼らの生業の実態、とりわけ水運業についてはほとんど取り上げられることは無かった。実のところ、少なからぬ「九姓漁戸」が銭塘江流域などにおいて水運業に従事し、上流の山間部や丘陵地帯で生産された薪や木炭、木材といった林産物を杭州や上海など下流の大都市に運搬し、帰路には大都市から各種の工業製品や加工品、および塩など上流の内陸部において欠乏する物資を上流に運搬した。かようなモノの流通状況は、山間部開発の進展や商品経済の山間部への浸透、流域社会と都市化といった状況と密接不可分の関係にあった。

視点を林産物の生産に移すと、山間部における生業の実態や生産を巡る社会関係を理解する必要がある。しかしながら、華北農村や江南農村に関する研究成果と比較すると、山村社会の構造に関する研究蓄積は極めて不足しており、このことは地域間の関係や比較の分析の不十分さに繋がっている²。したがって、本論において近代における銭塘江水系と流域山区社会の実証分析を行うことは、関連分野において一定の学術的価値を有すると思われる。

また、近年市場経済の過度な浸透が環境や人々の生活全般にもたらす悪影響が指摘されており、例えば環境経済学の分野では共同体や地域者社会が有していた役割について肯定的な意義を見出さんとする論者も登場している³。本稿との関係でいえば、人々は山や森林との間にどのような関係を築くべきなのかという問題が喫緊の命題の一つとして我々に突きつけられている。中国の山間部社会の分析もこうした命題を環境史の角度から考察する上で重要な情報を提供しうるように思われる。

本稿では本科研とそのベースとなったニンプロ科研の一環として行ったフィールドワークで得た種々の「史料」を用いる。本科研での調査状況については序章を参照されたい。本科研の土台となったフィールドワークとは、2004年から～2010年度文部科学省科学研究費特定領域のいわゆる「ニンプロ」と呼ばれるプロジェクトで、筆者は現地調査部門下の調査チームに所属して九姓漁戸に関する現地調査を行った⁴。彼らについての文献史料は極めて限定されているため、未裔や地域住民に対する口述調査が不可欠である⁵。当該調査班は彼らの生活史の詳細や生業の実態についての掘り起こしに重点をおいて聞き取り調査を進めた。このことは九姓漁戸研究そのものに対して貢献があるばかりでなく⁶、聞き取り調査の過程の中で、九姓漁戸が運搬した林産物を取り巻く商慣行や林産物の生産そのものに関する情報を得たことで山間部社会の分析に少な

らぬヒントがもたらされた。このことが本科研において本格的に浙江山間部の調査の展開に繋がったのである。

本稿の対象は、大都市の商人、水運業者、埠頭の小商人、山間部の農民（地主、佃戸、棚民）など多岐にわたる。従来に研究においては、都市史や商業史研究、水上居民研究、農村（山村）史研究など様々な領域において個別で行われてきた対象であった。しかしながら、林産物の生産・供給から需要・消費までの全過程を包括した角度から異なる集団や地域間の相互関係を分析する際には、流域社会の歴史を総合的に把握する必要がある。地域社会史の方法として、水系に着目してスキナーの提唱した大地域(macro region) や上田信が浙東社会史を分析する際に援用した「小盆地宇宙」という枠組みは相当程度の説得力を有している⁷。ただ、筆者は、大地域より下意の地域社会における様々な集団が地域の相互関係を明らかにするためには、具体的な流域に即したミクロな分析の蓄積が必要であると考えている⁸。

本論に入る前に本稿で用いる「钱塘江流域」という用語に説明をしておく。本稿が分析対象とする清代の嚴州府から杭州府に至る一帯は、厳密に言えば新安江、蘭江、富春江（「建德三江」とも称される）も包括しており、狭義の钱塘江とは異なる。しかし、煩雑さを避けるため、本稿では個別の河川名を述べる場合以外、新安江から钱塘江流域一帯のことを広義の钱塘江流域と捉えて使用する。

以下、1では钱塘江流域における林産物流通の状況についてもつばら水運業者の状況に即して概観する。2では、林産物の流通をめぐって陸上居民と水上居民とが取り結んだ関係について分析する。3では、運送された林産物生産の背景にある状況、すなわち山村の社会関係について検討を加える。

1 钱塘江水系における林産物の移動

(1) 浙江省の経済地理

本論に入る前に、九姓漁戸をはじめとする水上居民を取り巻く自然環境について簡単に説明しておく。自然生態を中心とする生態環境によって大幅に規定されていた農業経済地理の観点から見れば、浙江省の地理は杭嘉湖平原、钱塘江下流と杭州湾両岸の平原、寧紹平原、温黄平原、金衢低丘盆地、浙西丘陵低山、浙東丘陵盆地、浙南山地、沿海海洋島嶼に分類できる。これらの分類からは浙江省における生態環境の多様性を見て取ることができよう⁹。従って、浙江省は自然生態と人類社会との関係を考える上で極めて興味深い分析対象であると言える。

このうち、東部は「海」への窓口、すなわち対外貿易の拠点である寧紹地区である。北部は大都市杭州を中心として、経済の最先端地帯である江南デルタと連なっていた。そして、西南部は中国東南部と同様の環境を有する山間部であり、その他の地域は丘陵・盆地地帯で覆われていた。

海洋世界に隣接する寧紹地区や沿海の海洋島嶼とは対照的に、浙江省西部を貫流し、内陸や東南部の盆地世界とを繋ぐ重要な水系である钱塘江、富春江、新安江の重要性は従来の研究においては十分な注目を集めてこなかったように思われる。現在の钱塘江流域は点在する観光地がその名を馳せている。上流の新安江や富春江沿いに点在する観光名所以外に、1959年のダムと水力発電所の建設に伴って出現した千島湖がその名を馳せている。無数の島を要することから命名さ

れた千島湖は、現在では高速道路によって杭州と直接接続しており、都市近郊の観光地として好評を博している¹⁰。

歴史的な角度から見れば、銭塘江、富春江、新安江流域は中国の内河交通における最重要ルートの一つであり、海運や大運河運輸を経て当該流域において南北貨が輸送されるさまは、『唐国史補』下巻に、「揚子江と銭塘長江の両江は、潮の満ち引きに則して權がこがれる。船の盛んな往来は江西まで連なっている。蒲編んで帆となし、大きいものは数十幅にもなる。白沙より流れに逆らって行くため、常に北東風を俟たなければならない。これを潮信(潮時をまつこと)という」と描写されているが如きである¹¹。かような歴史的背景を考慮した場合、我々は流域に居住し、そこを生活空間とする内水面の水の上居民の角度から当該流域史の実態を先ず明らかにしなくてはならないであろう。以下では、口述調査によって得られた具体的な情報を手がかりとして、水運業の実態及び当該流域において流通していた林産物についてみてみよう。

(2) 銭塘江流域における林産物の移動

水運業に従事した建徳の九姓漁戸はどのように貨物を運送したのであろうか。またそのルートはどうであったのであろうか。1949年以前の状況について、当時水運業に従事していた老人(1935年出生)は次のように語った¹²。

問：あなたの父方の曾祖父はここに埋葬されたとのことですが、そして彼はかつてここで生活し、後にあなたの祖父が淳安県に移動したのですか。

答：うん、私の二人の祖父はともに淳安に行きました。

問：淳安へ移動し、それから〔建徳県〕大洋村に至ったと。その後ずっと水運業(撐船)に従事したのですか。

答：杭州行きの船を走らせたな。

問：杭州行きの船ですか

答：うん。ここの人間はみな杭州行きの船を操ったよ。淳安の者はみな杭州行きの船を運航していたね。

問：船主が杭州の人だったのですよね。

答：うん。我々の貨物はみな杭州に運んだのですよ。

問：つまり船は自分のもので、客のために貨物を杭州まで運んだと。

答：うん、そうです。かつて我々は薪を運んで杭州や上海まで行きました。もっぱら薪や炭を運びました。

問：大きめの木材や炭でしたか。

答：これくらいの長さの薪です。一担ずつ運ぶことができました。

問：燃やすためのものですか。

答：杭州の人たちが料理を作るのに使ったんだよ。

この語りにも示されているように、建徳の水運業者は薪を中心として、木材や炭などを含めた林産物を杭州や上海に運送し、そこで荷を柴行や木行、炭行などに売却した。また同氏に拠れば、運送中に建徳の梅城鎮(当時の県城)、桐廬、富陽などにおいては、官が派遣した船が彼らの船

のところによって水運業者から税を徴収し、東館と蘭溪においては卡子税が徴収された。このほか、ある九姓漁戸は国府軍に徴用され、無償で物資の運輸に従事した際には、杭州で「地頭蛇」（土地の顔役）のゆすりにあったという¹³。当時の状況については、ある九姓漁戸の末裔は生々しい記憶を有していた¹⁴。

1949年以降から1970年代にいたる状況については、かつて航運会社の総経理を務めた人物からの口碑を得ることができた。彼によれば、新安江ダムの建設以前、航運社などに所属した九姓漁戸は薪や木材、茶葉などの建徳の特産物を杭州に運送し、杭州からの岐路は工業製品を運送してきたという。航運会社が成立した1968年以降は、薪や木炭などを杭州に運送した状況は同様であったが、帰路に建徳に持ち帰ってきた生産品の内訳は海産物、砂糖、塩、棉布、紹興酒、醤油など詳細が示されている¹⁵。これらの口述は、林産物と丘陵盆地地帯において入手困難な加工品や工業製品の移動や交換の状況、そして異なる性質を有する地域間の関係を具体的に示している¹⁶。

続いて、水運業に即して九姓漁戸の分布をみても。もっとも有名な分布地は「建徳三江」が合流する建徳や桐廬であり、江山、蘭溪、杭州などの地が両地に続いた。彼らの活動範囲は建徳、淳安、桐廬、富陽、杭州などの錢塘江流域一帯に広がっていた。水系に即して水運業の範囲をみると、「建徳三江」、江山港、常山港、衢江、金華江、桐江流域と基本的に一致しており、このことは浙江省内部の地域性と密接に関連していた¹⁷。すなわち、「面」としての浙江省内部は様々な異なる個性を有するいくつかの下位の「面」によって構成されており、デルタ地帯や海洋世界と丘陵地帯、盆地や山間部との間は錢塘江、富春江、新安江といった水系によって接続されていた。このような角度からみれば、九姓漁戸とはもっぱら河川という「線」の世界を生存空間とする集団であったということもできよう。

九姓漁戸の末裔の口述も水運業が有した空間的な特徴について微細かつ重要な情報を提供している。上述の林氏の口述記録からは知られるように、九姓漁戸にはそれぞれ「根拠地」があった。例えば、陳姓は衢州や金華、蘭溪に、孫姓は富陽、桐廬、建徳に多かった。陳、銭、許の各姓は新安江に集中しており、葉姓は漁業にせよ水運業にせよ多くは安徽黄山附近に集中していた。水運業に従事した九姓漁戸は何、李、銭、許の各姓が多くを占めたい¹⁸。各姓の「根据地」には違いがみられたものの、彼らは時には通婚関係などのネットワークを通して活動範囲や生業を変えることによって生存を謀っていた。

上述の状況はもっぱら関係者の記憶に拠るもの、すなわち語り手の視点から理解された状況であり、俯瞰的な角度から錢塘江流域の全体状況を捉えたものではない。個別の記憶を分析する際には、俯瞰的な情報を有する文献史料と対照させ、流域全体のヒトとモノの移動状況の中に位置づけなければならない。明清期に編纂された路程書は記載こそ簡略ではあるものの、当時の水運ルートを端的に示していて有用である。『天下水陸路程』『客商一覽醒迷』『士商類要』などの路程書において建徳や桐廬について解説してある部分では、みな異口同音に白沙埠、楊溪、小溪巖、巖州府（梅城）、東館、胥口、釣魚台などの地名に言及しており、この路線は語り手が述べた民国期の状況と基本的に一致している。したがって、これらの文献は口述記録の内容の検証にとって一定の有用性を有している¹⁹。清末民国期に行われた調査の記録も参考になる。例えば、

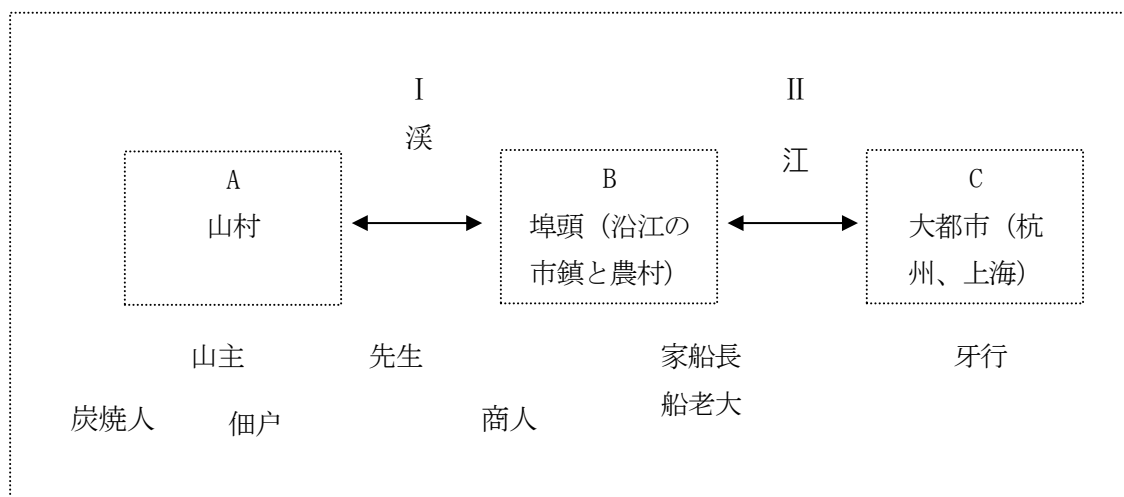
東亜同文書院の学生が卒業旅行の後に提出した報告書や、これらをもとに編纂された『東亜同文書院中国調査旅行報告書』も少なからぬ情報を提供してくれる²⁰。とりわけ、語り手が経験した事象の同時代に記されたものは、語りの内容を検証する上で有用である。

別の記述をみてみよう。清末の嚴州府知府戴槃が「錢塘江よりさかのぼって衢州に至る地域は交通の要衝（八省通衢）であり、福建の茶や紙、江西の陶磁器や紙、広東の洋貨、寧波の海産物の流通は必ずここを経由する」と述べている点からも²¹、中国東南沿岸部と内陸部とを繋ぐ「線」としての役割を果たしていた錢塘江水系の特徴が看取できよう。「八省通衢」と九姓漁戸の生存空間とは密接不可分の関係にあったのである。

2 林産物の流通をめぐる陸上居民と水上居民

(1) 林産物の流通をめぐる交易関係

図 林産物の交易場所と輸送ルート関係図



続いて、林産物の流通をめぐる陸上居民と水運業者（九姓漁戸を含む）との間にどのような関係が成立していたのかをみてみよう。

図は林産物の交易地点と運送ルートとを簡略に示したものである。林産物の交易地点は二箇所あった。一つは林産物が搬出される出発地、すなわちB市鎮および埠頭を擁する河沿いの村である。もう一つは林産物が運送される目的地、すなわちC杭州や上海などの大都市である。そして、林産物はA山間部において生産された。BとCとは新安江、富春江、錢塘江などII江という動脈を通して繋がっており、換言すれば、水運業に従事する九姓漁戸はここを生存空間としていたということもできよう。AとBとはI“溪”を通して繋がっていた。『建徳郷土教材』において「大江は上流から淳安を経て本県の境界に至り、洋溪、下涯溪、馬目溪、諸塘溪、黛溪、派溪といった支流の水と合流して滔々と東へ下っていく」と述べられているように²²、I“溪”は細い急流であり、船舶の航行はまったく不可能であった²³。

まず、B市鎮及び埠頭を擁する河沿いの村における交易状況をみてみよう。「溪」や陸路を通して埠頭に運搬された林産物は、水運業者に引き渡された後に杭州などの大都市に運ばれ

た。その取引対象は農民と商人の二種類であった。1949年以前の時期に15歳から水運業に従事し始めた老人（1935年生）は次のように述べる²⁴。

問：前回、薪や木炭の類を杭州に運送したとおっしゃっていましたが、誰のために運んだのですか。

答：郷村や山間部の老闆です。彼らは農民ですが、我々は彼らを「柴客人」と呼んでいました。

問：農民があなた達のもとに薪や木炭を持ってきて、それらを杭州に行って売ったのですか。

答：そうです。

問：特定の組織があなた達に貨物の輸送を依頼するということはありませんでしたか。

答：ありませんでした。解放前にはそのようなことはありませんでした。みな以下のような状況でした。私とあなたと関係がよければ、私の貨物はあなたに委ねて輸送してもらいました。我々船上のもの同士でもそうです。船主の中にも大老闆がいて商売をしていました。貨物を運ぶ時、あなたを信用している場合、あなたに貨物〔の一部〕を杭州まで運ぶように依頼したのです。つまり、かつては大船と小船とがあり、小船の商売の一部は大船の老闆が依頼したものでした。大船の老闆は船老闆と呼ばれていました。この方言では「家長」と呼ばれました。年齢がいった者は「老家長」と、比較的若い者は「小家長」と呼ばれました。

問：もし外部の老闆であった場合、直接貨物を運ぶように依頼してくることはありませんでしたか。

答：老闆はまず貨物を船老闆に委託しました。そして船老闆がいくつかの仕事を我々のような小船〔の業者〕にまわし、〔紹介料として〕運送費の一部を受け取りました。小船は直接大口の客とは連絡できませんでした。山の人は私たち〔のような小船の業者〕を信用せず、「船家長」を信用しておりましたので、我々はこうした「船家長」を頼り、おこぼれに預かるしかなかったのです。

問：つまり、陸上の人々は比較的規模の大きな船老闆を信用し、貨物を彼らに輸送してもらっていた。そして、その他の規模の小さな船の業者は商売の機会が少なく、船老闆に頼んで一部の貨物の輸送をさせてもらっていたということですね。

答：その通りです。

問：比較的小さな規模の船主はどうですか。

答：信用されませんでした。

問：つまり信用力が欠けていたため、大船の老闆から仕事を分けてもらったということですか。

答：そうです。

問：この取引の中には、純粋な商売人が貨物輸送に関わった事例はありますか。

答：商売をする人は農村にいました。農村の状況は私たちはよくわかりません。山間部には有名な商売人がいました。彼らは山で薪を取ってくると、船家長に委託して杭州に運輸しました。

問：彼らは規模の大きな商人でしたか。

答：はい。大商いをする商人も農民でした。

他の箇所においては、「先生」と呼ばれる農民が薪を集めて水運業者に引き渡しことに言及されている²⁵。したがって、彼らの口述からは、「柴客人」や「先生」などと呼ばれる富裕な農民が代表となって林産物を集散し埠頭まで運んだこと、埠頭では「船家長」などと呼ばれる規模の大きな船を操る水運業者が主となって林産物を大都市の牙行に運搬ないし売却に赴いていたことなどが判明する。「先生」は船の出発時に一部の運送費を「船家長」に支払い、「船家長」は輸送記録などを出発地に持ち帰った後で残りの運送費を受け取った（もちろんこの方式は唯一のものではなかった）。小型船の水運業者は自ら小商いを探してくる以外は、大船の業者が処理しきれない貨物の運送をまわしてもらうしかなかった。

それでは、水運業者と商人との間の取引はどのようなものであったのであろうか。林樟秋氏（1928年生）の実家は馬目鎮において茶葉、茶籽、桐籽などの土産を扱う商家であり、1949年以前に彼自身も商売に従事し、のちに供銷合作社に長期にわたって勤務したという経験を有する。彼の語りは商人の立場からみた交易・輸送の状況を示している²⁶。

問：船はあなたたちが所有していたものでしたか。

答：雇いました。かつて〔水運業者は〕みな個人で営業しており、航管部門の許可を経る必要はありませんでした。〔船は〕ここにも停泊していましたので、運送業者が必要な時は、大型のものであれ小型のものであれ問題ありませんでした。貨物を積み込んで杭州まで運んでくれました。

問：これらの船はみな業者のものでしたか。

答：彼らはみな個人で営業していました。

問：馬目の埠頭の〔業者〕を雇ったのですか。

答：はい。埠頭の船には大型のものも小型のものもありました。荷物が多いときは大型船を雇い、少ないときは小型船を雇いました。

問：馬目に停泊していた船は、どこから来た船でしたか。

答：個人営業の船でした。

問：様々な地方の船が停泊していたということですか。

答：はい、様々な地方の船がいました。

問：彼らは馬目の業者でしたか。

答：現地でした。基本的に現地が多かったです。

問：つまり、馬目の業者が多かったのか、それとも……

答：〔今話題にしているのは〕馬目の埠頭に停泊していた業者のことです。

問：埠頭の水運業者は馬目の人でしたか、それともそのほかの地方から来た人たちでしたか。

答：全員が馬目の人ではなく、半分くらいでしたね。

問：それ以外は県内各地の人がいたということですか。他県からきた業者はいましたか。

答：県外では義烏や蘭溪の業者がいました。彼らが比較的多かったです。目立っていたのは大体これらの地方から来た業者でしたね。

問：彼らは年中馬目の埠頭にいたのですか。それとも固定的では無く……

答：時には商売があるところに出かけていきました。

問：業者には固定した埠頭に停泊するということはありませんか。

答：仕事が無いときはこの埠頭に戻ってきました。貨物があれば出かけていきました。

もし桐廬で仕事があれば、彼らはそこにでかけていきました。

ここからは、商人の側から見た水運業者との関係が決して固定的ではなかったこと、埠頭は地元の業者が大半を占めていたとはいえ、他地域の業者も停泊していたことなど、重要な情報が示されている。それでは、この埠頭に停泊し、どのような船を操業し、いかなる林産物を運搬していたのかについて、この語りと他の情報を総合すると以下の通りである。多くの埠頭は「江」と「溪」とが合流する位置にある市鎮や郷村に設けられていた。具体名を挙げると、三都、下洋、大洋、馬目、下涯、洋溪、梅城、七里瀧などがあった²⁷。続いて船の規模をみてみよう。嚴州府の府治が置かれていた梅城鎮在住の呉連樟氏（1925年生）は様々な要素から判断すると1949年以前における標準的な水運業者であったが、彼が所有した船の積載量は30トンであった²⁸。船の規模以外に商売にとって決定的に重要であったのが船の形状である。例えば、彼の船は「半蓬船」という形状であったため、濡らしてはならない貨物を積むことはできなかったという²⁹。

新安江、富春江、钱塘江の流域各地から杭州に運ばれた林産物は杭州の牙行に渡された。林産物の内容によって、例えば柴行、木炭行、茶行等対応する牙行があった³⁰。荷を下ろして出発地へと戻る際、帰路に荷を積載するか否かは様々な条件を考慮する必要があった（勾配の関係で上流への航行の際には人力で船を引く必要もあった）。輸送費については、ある男性が次のように述べている³¹。

商店を開いていた老闆が杭州に荷を運送する場合、相手方に手紙を書き、どんな荷があるか、どれだけあるかを記しました。そして杭州から戻ってくるときは、回單（受け取り書き）を持ち帰ってきました。例えば、三割は支払わずにとどめて起きました。貨物をもし渡し間違えたりした場合、船主は賠償する必要がありました。荷揚げして間違いがない場合、一元のうちの七角を業者に渡しました。回單を持って帰ってきてから残りの三角を支払いました。

すなわち、往路で荷を下ろした後に7割の輸送費を受け取り、さらに帰路では回單を依頼主に引き渡すことで残りの3割の輸送費をうけとるという支払い方法を示している。この過程で積み荷に何か問題が発生した際には船主は賠償をせねばならなかった。

ところで、極めて興味深いことに、ある水運業者は荷物を杭州に届けた後、茶館で休憩していたところ、たまたま説書の上演を聴いた。内容は自分の境遇や祖先の状況を語ったものであったため、自分が九姓漁戸であるということを突然悟ったという³²。

（2）「地盤」の性質

香港や広東の水上居民研究からは、船上生活者の漁業が漁欄呼ばれる魚問屋による支配を実質的に受けていたことが明らかにされている³³。また、九姓漁戸が有した賤民身分から彼らの社会関係を考察する際、彼らの取引には固定的排他的な業務独占のような関係が存在していたのか否かも重要な問題である。筆者が口述調査を実施した際、水運業者、商人、農民、地主（山主）な

ど異なる立場にあった語り手に対し、意識的にこの問題を尋ねた。その中で、長年水運業に携わった林炳賢氏（1935年生）はこの問いかけの含意を最も明晰に理解していたので、その語りの内容を紹介しよう。彼は先にも言及した「船家長」と呼ばれる水運業者と埠頭との関係について次のように詳細に語った³⁴。

問：当時次のような決まりがありましたか。梅城の船家長は梅城でのみ貨物を積み込むことができ、他の埠頭では荷を積んではいけないというような。

答：決まりはありましたよ。〔貨物の積み込みは〕友人や親せきが私を呼んだのです。例えば、私は普段は洋溪を拠点としていても、梅城で親せきが私に仕事を回してきた場合、そこで荷を積むことができました。

問：決まりはあったということですね。しかし、親戚や友人などに他の埠頭へ呼ばれた場合は、そこに行って荷を積んでよかったということですね。

答：はい……好きなどころに行くことができたという意味ですね……。その後解放してからは、〔水運業者は〕組織され、下涯や白沙に停泊していた者は洋溪に集められることが規定となりました。私が住んでいた大洋だと、三河や麻車の業者が大洋にあつめ

られました。この合併には調整がありました。これは後のこと、開放後のことですね。

問：まず解放前の話に限定しましょう。その後で解放前の話をお願いします。

答：解放前の商売はばらばらでしたね。あるときはこの埠頭、あるときはあそこの埠頭というように、固定してはいませんでした。

問：〔普段〕洋溪と大洋に停泊している船でも、梅城に親戚や友人がいれば荷を積みについてもよいということですね。

答：そうです。梅城の船も洋溪や大洋で荷を積んでもよかったのです。

ここからは、各地の水運業者にはそれぞれ一定の「地盤」があったことを一応読み取ることができる。しかしながら、このことは彼らが固定した商人や農民との間に排他的な関係を結んでいたことを意味しない。たとえ普段停泊しない埠頭であっても、もし血縁関係や婚姻関係のある者がいたり、友人がいたりする場合、荷を引き受けることがあったからである。したがって、ここでいう交易上の「地盤」とは、固定的な地縁関係に基づくものではなく、各種の社会関係などの要素によって緩やかに定められたものであったといえよう。

別の水運業者の口述をみてみよう。「実は荷を積み込む場所に行くと、村の「頭頭」（世話役、一種の連絡人）と連絡しました。彼と連絡すると、彼らは一人一人荷を担いでやってきました」³⁵、「農民が私たちに〔直接〕荷を運ぶよう声をかけてくることもありました。また〔林産物の〕商いを専門に従事しているものもいました」³⁶、「薪を集めて〔輸送を依頼して〕きた者は農民で、『客人』〔と呼ばれる商人〕もいました」³⁷。これらの語りの中でブローカーのごとき存在について具体的な言及はみられなかった。農民（「先生」と呼ばれる農民の仲介者を含む）にせよ、「客人」をはじめとする商人にせよ、陸上居民は信頼のおける水運業者を選んでいたことが強調されていた。

陸上居民の口述内容も大同小異である。商家出身の林樟秋氏は固定した水運業者には言及していない³⁸。桐蘆在住の在野研究者である邵春朝氏によれば、「老闆によっては何時も依頼する船

は同じでした。船主が信用に足りたから」であった。陸上の「老闆」も信用における「船老大」（水運業者に対する俗称）に固定的に委ねたいと考えていたが、これは裏を返せば、かような信用関係が成立していない場合、業者の選択は固定されていなかったことを示している³⁹。

これらの口述内容を総括すると、彼らの「地盤」とは固定的排他的な関係性を示すのではなく、経済活動における「根拠地」とでもいう性質を有した。陸上の「先生」をはじめとする農民や商人と、「船家長」「船老大」との間には固定した関係はなかった。最も重要なのは商売上の信頼関係であり（船の規模も「信用」を決定する要素の一つ）、血縁関係や婚姻関係はリスクを減少させる装置として活用されたネットワークであったといえる。

ただ、慎重に検討されなければならないのは、口述調査によって遡及できるのは「解放」前夜の時期、すなわち 1940 年代までの状況に限られており、そこに直接反映されているのはせいぜい 20 世紀前半の状況にすぎないということである。したがって、これらの状況と建徳において九姓漁戸に対する「漁課」が廃止された同治年間とは相当異なることは当然のことである。

「漁課」が廃止された時期における取引に固定的排他的な業務独占があったのか否か、もしあったのであれば何が経緯となって変化したのかなどについては今後の分析の進展に期待したい。

3 林産物の生産と山村社会

(1) 建徳・桐廬の山村と林産物

溪や陸路を経て新安江、富春江、蘭江沿岸の埠頭に運ばれた林産物の生産地点はA山村と山林であり、生産に従事していたのは山村の住民たちである。ここでは林産物生産を取り巻く社会関係を概観しよう。調査において主要な調査対象となったのは、建徳市大洲村と芳山村、桐廬県蘆茨村と茆坪村である。これらの調査地は隣県に有りながらも、対照的な特徴を有している。まず、森林資源の内容に決定的な影響を有する土壌や森林形態について言うと、当該地域は「亜熱帯常緑針葉林」に属するものの、前者は肥沃な土壌を背景として杉の植樹に適していたのに対して、後者は痩せた土壌のため松や雑木のみが生長できる岩山が主となる環境にあり、荒山も多く見られた⁴⁰。したがって、対照的な森林資源のもとで、いかなる生産様式が展開したのかを考える上で、興味深い事例であると言える。また、これら4村は、ともに同一市県の隣村という関係であり、前二者は佃戸の角度から山村生活を述べており、後二者は山主や商人の角度から回想がなされており、それぞれ異なる生態環境において展開した山村における生産制度について、異なる角度から考察する好個の材料を提供している。

まず、杉が優勢であった建徳市の状況について、佃戸の立場から民国期における林産物の生産状況を見てみよう⁴¹。集団化期に長期にわたって建徳市下涯鎮大洲村支部書記を務めた姚金海氏（1928 年生）に拠れば、土地改革以前の当該村の耕地は極めて限られており、他家は耕地を借りることができず、山地を借りていた。村には十三戸の地主（山主）がおり、姚家はもっとも多くの山地を擁した葉氏から山を借りた（租山）。租山の際には契約書を交わす必要があり、その条件とは杉の木を植えることであった⁴²。佃戸が租山した後、日常生活を維持し、現金収入を得るためにはどのように山地を経営する必要があったのであろうか。次の語りを見てみよう⁴³。

問：あなたたちは油桐を植えていたと以前おっしゃっていましたが、どのように植えたのですか、また一年の収入はどれくらいでしたか。

答：〔油桐の〕最初の一年は……、我が家が借りた山は五十担のトウモロコシと油桐有十多担の油桐が採れました。二年目には〔油桐の収穫は〕二十一三十担になりました。三年目には〔油桐の収穫は〕四十一五十担になりました。

問：油桐の栽培に対して租金を支払う必要はありましたか。

答：油桐については支払う必要はありませんでした。トウモロコシもです。トウモロコシも植え続けました。我々は租山すると、一年目にトウモロコシを植えました。二年目には油桐の種を〔トウモロコシの〕中に植えました。このように相作したのです。二年目に植えた油桐の背丈は非常に小さかったので、トウモロコシも引き続き植えました。三年目になるとトウモロコシの収穫は少なくなり、油桐が大きくなってきます。油桐が成長すると、杉も大きくなります。そうするとトウモロコシは育たなくなりますから、油桐〔の収穫〕に頼ることになります。油桐も〔収穫して〕三年で終わります。〔油桐の収穫をはじめて〕一年目はよし、二年目もよし、三年目もよし、4年目になると杉が成長して油桐を植えられなくなると、土地を地主に返したのです。

隣村の老人も「三年玉米、三年油桐」（トウモロコシを三年、油桐を三年）と述べているように⁴⁴、この状況は田地を借りることのできない（できたととしても面積が足りない）当該地域における貧農の普遍的な状況であった。植えられた作物にはそれぞれの目的があった。姚金海氏の父親はかつて彼に「トウモロコシを植えるのは日々の生活を送るため、油桐を植えるのは『工資』（労賃）を得るためであった」と語ったように⁴⁵、トウモロコシは日々の食料に当てられ、油桐は溪の下流にある榨油廠や商人に売却して現金収入を得ることを目的とするものであった⁴⁶。附言すれば、僅かではあるが現金収入の方法として薪の採集も行われた。

ところで、上述の姚氏は父の代より棚（アンペラ）に居住していたと述べており⁴⁷、所謂「棚民」であったことが推測される。当該地域では清代中期に山林の乱開発による山津波の被害に苦しんでいたことに対して、巖州府知府が道光 15 年（1835）に現地の村民に命じてトウモロコシ栽培を禁ずる石碑を建てさせたというが、これも棚民と無縁ではなかろう⁴⁸。太平天国軍の侵攻に伴う人口激減や耕地荒廃という事態に直面して、巖州府知府戴槃は棚民を招来して荒地の開墾を試みた点から彼らが近隣において普遍的に存在していたことを読み取ることは容易である⁴⁹。この時の棚民の招墾に伴い、外地からきた棚民が山林を開墾してトウモロコシを植えたことによって、土壌の流失や水資源の確保に大きな支障をきたした。「はじめは山を争い、続いて水を争うようになり、大きな事件がしばしば聞かれるようになった」という状況に至った。民国期にいたって農林部が設置されたものの有効な林政は講じられなかった⁵⁰。したがって、棚民に依拠した上述のごとき山林経営は清代中期より長期にわたってみられた方式とみなしてよからう。

次に松や雑木が優勢であった桐蘆県の事例に即して、山主の立場から山林の経営の実態をみてみよう。桐蘆県茆坪村周辺の山々は杉を植樹するのに適さない岩山であり、大部分の山では雑木が木炭を焼くのに用いられた⁵¹。胡宗陶氏（1925 年生）の過程は木炭の商いをしており、彼の父は自らの山を利用して「白炭」の商いをしていた⁵²。彼に拠れば、一月に 1 トンの白炭を生産することができたという。興味深いことに、現地の農民は「黒炭」が焼けるのみであり、縉雲県か

らやってきた棚民を雇用して白炭を焼いていた。村には 30 戸あまりの山主がおり、1000 人にも及ぶ縉雲人が雇用されていた点からは炭焼きの規模をすることができよう⁵³。

ところで、縉雲の棚民は個別に当地に来たのではなく、組織化された地縁職業集団による出稼ぎであったことも聞き取り調査によって明らかになった。かような出稼ぎがいつ頃から始まったのかを確定するのは難しい。隣県の寿昌県（後に合併して現建徳市）の供銷合作社が 1957 年に行った木炭に関する調査資料に拠れば、当該地域での木炭の生産は 1920 年に漸く始まり、白炭は縉雲人によって担われた。白炭は商人によって杭州の炭行に輸送されたと記録されている点は聞き取り調査の内容と一致している⁵⁴。

彼らには集団毎に「灰頭」という炭焼き作業を統括するリーダーと、「包頭」と呼ばれる炭焼きのための薪を集める仕事のリーダーとがおり、それぞれ 40～50 人の配下がいた。配下を受け取る賃金はリーダーがどのように山を請け負ったのか（包山）によって異なっていたが、「灰頭」が事前に話し合った固定額を毎月支払った。そして、木炭を焼き終わると、年末の農曆 12 月 23 日の前に縉雲へと戻っていたという⁵⁵。

炭を焼き終わると、山主は白炭を竹で組んだ筏に載せて隣村蘆茨村に運搬し、そこで水運業者に渡されて杭州へと輸送された⁵⁶。木炭の交易が極めて繁栄したため、村は「小杭州」と称されたという⁵⁷。

上述の事例は、それほど多くの地産を有していない在地の山主の関係者の回想であるが、少なからぬ山は不在地主によって所有されていたことも幾つかの証言から浮かび上がってくる。例えば、清末に桐廬商務分会の総理を務めた俞英耀（1871—1937）は清末民初の嚴州を代表する著名な紳商であった⁵⁸。その末裔の口述に拠れば、俞家は太平天国軍の侵攻後に木材の商売を始めたことで材をなし、俞英耀の代には近隣で屈指の家産をもつ一族に発展していた。戲台を有する宗祠を擁していたという⁵⁹。また、桐廬県蘆茨村の郷土史家が語るところでは、現地の山の多くは清末民初に進出してきた寧波人地主に帰していたという⁶⁰。これらを総合すると、山林の多くが個別地主の私有に帰していた錢塘江流域の特徴を読み取ることができよう。

以上、建徳・桐廬の山地利用において、杉の植樹にせよ、炭焼棚民を雇用して炭焼をするにせよ、林産物はみな大都市に輸送・売却され、現金収入を得るために生産されていたことは明白である。商業化や貨幣経済の浸透は当該地域の山間部においても各農家まで深く浸透していたのである。

（2）浙江山村のコモンズ

上で検討してきたように、錢塘江流域の大部分の山林は私有地として山主の所有に帰属していた。山林の利用と管理という角度からかような状況を考えると、ローカルコモンズ論を切り口として錢塘江流域山村をどのように捉えうるのかという問題が重要な研究課題として浮かび上がってくる。ローカルコモンズとは、地域住民が共同の資源を管理・利用する種々の慣行の総称のことを指し、グローバル化が極度に進展する中でミクロな地域社会が物質循環の維持をなし得る条件は何かという問いかけのもとで次第に注目を集めてきている。日本においては、村落共同体が所有した入会林野や入会権がローカルコモンズに相当し、財産区有林や事務組合、共有林などの

形式で現在まで継承されている。このような意味において、日本の基層社会史研究においても、現在の課題を検討するにせよ、ローカルコモンズは重要な分析視角になりうると思われる⁶¹。

この分析概念をもう一步掘り下げて捉えるためには、それと基層社会の歴史との関係を概観しなければならない。民俗学者の菅豊は、中国村落共同体論争を素材として、ローカルコモンズの角度から日中両国の農村における社会関係の違いを論じている⁶²。「私（個）」と「公（官）」との関係について菅は、新自由主義へと突き進んでいる現代社会界において「私」という個人主義とそれを認定する「公」の権威主義による統治以外に、絶対的な影響力を有する市場経済の両者に対する浸透は看過できず、「私」と「公」の両領域において突出した存在感を有するという。このような状況において、「共的世界」（共同性）とはいかに成立しうるのかと彼は問題提起する。日本の基層社会におけるローカルコモンズとは農山漁村など伝統的村落共同体に存在する「コミュニティ型コモンズ」であり、その主要な形式は生存経済（subsistence economy）を支える入会地などであった。対照的に、中国の伝統社会はすでに高水準の個人化、市場経済化の段階に至っており、「私」の要素の影響力が普段に膨張している現代社会と類似していた。したがって、中国におけるコモンズとは「ネットワーク型コモンズ」、換言すれば、「個人を媒介とする流動的かつ可変的な網の目状のネットワークによって、合目的かつ合理的な意志によって結ばれる非空間的な柔軟構造」を有するものであった。菅の議論は、伝統社会の村落共同体論争の根幹に関わる論点を提示しているので、以下ではまず筆者が2004年以来フィールドワークを進めている太湖流域社会の例に即して、ローカルコモンズの問題を考えてみたい。

例えば、「捉落花」（田に残った綿花をひろうこと）は中国農村において古くより広く見られた風習であった⁶³。この風習の主体は生活に困窮した人々であった。筆者が参加した別の口述調査によれば、呉江市北厓鎮大長港村において土地改革以前には収穫の後、土地所有者乃至耕作者ではないものでも綿花拾いをする事は許されていた⁶⁴。村落や耕作地の分布等の諸状況や明確な村の境界が存在しなかった状況を考慮すると、実際に綿花拾いができた者は耕地近隣の集落に居住していた貧困者に限定されていたとはいえ、決して特定の村の住人のみに許されていたのではなく、原理的にはあらゆる者に開かれていた。それでは、土地所有者や耕作者以外にも綿花拾いが許される背景にあった原理とはいかなるものであったのか。国共内戦期に短期間ながら副郷長を務めた経験をもつ楊誠氏（1928年生）が「〔村外の人が拾いにくるのは〕割に合わなかった。もしたくさん採れそうであれば来る可能性もあった」と述べているように、「収益性」（割に会うか否か）の問題であった。換言すれば、十分な収穫の得られた農民にとっては、綿花拾いは精を出すに値しない作業であった⁶⁵。伝統中国におけるローカルコモンズの特徴について、菅豊は「積極的に『共』の領域を打ち立てる」のではなく、「私の拡張を抑制すること」にあったと指摘している⁶⁶。この見方を敷衍して考えるならば、収益性の有無は土地所有者乃至耕作者が暫定的に「私」の権利を停止してもよいと考える要因の一つであった。この意味において、収益性とはすなわち、「私の拡張を抑制すること」に対して実際に作用する原則の一つであったといえることができる。

上述のように、収益性の有無はコモンズのあり方に多大な影響を与えていた。もう一つ太湖流域社会の事例を見てみよう。近年、太田出は太湖隆起漁民の生活と集団の特徴について調査・研究を進めており、ローカルコモンズの視点から水面の所有や利用の形態について議論している。

太田に拠れば、所有権について言えば、内水面は基本的に「官有」すなわち王朝や国家に所属していた。これを前提として、内水面の利用には以下の如き状況が出現していたことが指摘されている。①商品的価値の高い魚や蝦の類を捕獲できる、比較的規模の大きな内水面には「蕩主」と呼ばれる占有者がおり、漁民が水面を利用する際には使用費を徴収した。この状況は、彼らが「官有」の水面を「占有」ないし「私占」していた過ぎず、換言すれば「官」の領域に「私」の空間を確保した状態であった（即地盤）。②収益性があまり高くない小規模の水面は基本的にオープンアクセスの状態であった。費孝通が観察した事例には収穫後の資源を全村民で平等に分配する状況が報告されている。しかし、この事例は外部の視点から村の共同財産（すなわちローカルコモンズ）を理解していた可能性も捨てきれない⁶⁷。したがって、この事例が示す状況を真に理解するためには、収益性のあり方が一つの鍵になるように思われる。

関連議論が長くなってしまったが、ローカルコモンズの利用方式という観点から建徳・桐廬山村の状況を考えた場合、どのような特徴を見出すことができるであろうか。現在までの調査によって以下の如き基本的な情報が得られている。①所有形式については、個別の山主が所有する私有山が大部分を占めており、荒山（open access）や族山は極めて少なかった。また、「入会地」に相当する共有山の例は確認できなかった。②山主は一般的に私有山の売却を忌避していたが、売買の事例も少しは見られた。③山地の利用方式については、杉や油桐などの商品作物が一般的に植えられた。杉を伐採した後の山は貸し出され、山地にはトウモロコシや油桐が植えられ、前者は食用であった。④租山において、杉木の利益は山主に帰し、その他の収益は佃戸に帰した（しかし分配方法はこれが唯一ではなかった）；⑤杉の植樹に適さない岩山の雑木は木炭に焼かれ、市場に投入された。堅く燃焼時にほとんど煙の出ない「白炭」は縉雲県からきた出稼ぎ集団によって焼かれた⁶⁸。

この一帯においては、高度に市場経済に依頼した生活方式が確認できるのと同時に、「コミュニティ型のコモンズ」の存在は確認できなかった。それでは、かような状況のもとローカルコモンズとはどのような形で成立しうる（しえない）のであろうか。ある村の老幹部に拠れば、1949年以前には私有山であっても目的があって植えられたものではない野生の植物や菌類、薬材、枯れ枝などについては、所有者以外も自由に採ってよかった⁶⁹。私有山におけるこのような慣行についても、上述した収益性の有無・高低という尺度で解釈することが可能であるかもしれない⁷⁰。

しかしながら、同時に筆者は「共同体」の規制をうけるコモンズともみることのできる事例を一つ見出した。建徳市下涯鎮芳山村を訪問した際、土地改革小組のメンバーを務めたこともある老幹部が極めて興味深い慣行に言及した。それに拠れば、村落に最も近接する山の利用は相当の制限を受けてきており、集団化や「聯産承包」などの諸政策を経ても大隊が所有し続けており、現在に至っても個人の請負が許されていない。彼らの説明に拠れば、それは「保水」のためであるという⁷¹。ここから判断するに、山の保水能力の確保が村落全体に関わる風水との関係性が考えられよう。

概括すると、収益性の高低を基準として成り立つ「私」の要素は当時の当該山村においても決定的な影響力を有していた。それでは、かような「私」の領域における「共」の要素や、「共同

体」の規制をうける共同資源との間にはどのような関係にあったのであろうか。この点を明らかにするためには先ず、詳細を明らかにできる事例や文献情報を分厚く蓄積していく必要がある。

おわりに

歴史的に見れば、「八省通衢」の钱塘江水系は中国における内河交通の最重要ルートの一つであり、内陸の「盆地世界」、山間部、下流のデルタ地帯、沿海部を繋ぐ「線」としての役割を果たしていた。薪や木炭、木材などの林産物は建徳や桐廬などの上流から下流の大都市へと供給され、各種工業製品、加工品および塩や砂糖など上流では入手困難な物資が大都市から輸送された。このような地域間関係の中に九姓漁戸の生存空間との密接不可分な関係を見出すのは容易であろう。

九姓漁戸が有した賤民身分から彼らを取り巻く社会関係を考察する際、真っ先に連想するのは彼らの取引には固定的排他的な関係が存在していたのか否かという問題である。なぜならば、かつての日本の賤民身分と排他的な業務独占とは密接不可分の関係にあったからである。この点について口述調査が示しているのは、馬目、洋涯埠、白沙、東館などの小埠頭には「船家長」などと呼称される水運業者がおり、それぞれ一定の「地盤」を有していたということである。しかしながら、このことは彼らが固定した商人や農民との間に排他的な関係を有していたことを決して意味しない。もし血縁関係や婚姻関係がある場合、別の埠頭でも荷を積み込むことができたからである。したがって、取引の「地盤」とは

したがって、固定的な地縁関係に基づくものではなく、各種の社会関係などの要素によって緩やかに定められたものであったといえよう。慎重に検討されなければならないのは、口述調査によって遡及できたのは「解放」前夜の時期に限定されていることである。したがって、これらの状況と建徳において九姓漁戸に対する「漁課」が廃止された時期とでは相当異なることは当然のことである。しかしながら、水運業に従事した九姓漁戸は、血縁関係や婚姻関係に依拠してリスクを減少させつつ、陸上の人々と信頼関係を築いていた。このような社会関係の特徴は、地域間交易の発展と市場や貨幣経済の影響力が基層社会に浸透していた状況と不可分である。

市場経済に大きく依拠した生活方式が確認できる当該地方においては、「コミュニティ型コモンズ」を見出すことは困難である。それではかような状況において、それでは、かような状況のもとローカルコモンズとはどのような形で成立しうる（しえない）のであろうか。ある村の老幹部に拠れば、1949年以前には私有山であっても目的があって植えられたものではない野生の植物や菌類、薬材、枯れ枝などについては、所有者以外も自由に採ってよかった。私有山におけるこのような慣行も、上述した収益性の有無・高低という尺度で解釈することが可能であるかもしれない。

収益性の高低を基準として成り立つ「私」の要素は当時の生活においても決定的な影響力を有していた。それでは、かような「私」の領域における「共」の要素や、「共同体」の規制をうける共同資源との間にはどのような関係にあったのであろうか。この点を詳細に分析できる事例や文献情報を分厚く蓄積していくことが目下の急務である。

¹ 九姓漁戸に関する研究は民国期には既に開始されていた。馮翼占「畚民墮民九姓漁戸考」『地学雑誌』11、1914年、童振藻「錢江九姓漁戸考」『嶺南学報』2期、1931年、初歩的な研究には、方向「富春江的“九姓漁戸”」『中国民間文化』1994年第2期、頼青寿『九姓漁戸』福州：福建人民出版社、1999年がある。また、張小也「制度与觀念——九姓漁戸的“改賤為良”」（『社会科学』2006年第4期）」は法制史の角度から九姓漁戸の賤民身分を論じる。明清期における賤民の概況については、「穢れ」の角度から検討したハンソンの研究を参照のこと。Anders Hansson, *Chinese Outcasts: Discrimination and Emancipation in Late Imperial China*. Brill Academic Pub, 1996.

² 日本における近現代中国農村史研究は華北に集中してきた。内山雅生『中国華北農村經濟研究序説』金沢大学経済学部、1990年、内山雅生『現代中国の農村と「共同体」——転換期中国華北農村における社会構造と農民』御茶の水書房、2003年、三谷孝編『農民が語る中国現代史』内山書店、1993年、三谷孝編『中国農村変革と家族・村落・国家——華北農村調査の記録』第1巻・第2巻、汲古書院、1999-2000年。

³ このような議論はコモンズ論において蓄積がなされている。日本におけるコモンズ研究については、室田武、三俣学『入会林野とコモンズ——持続可能な共有の森』日本評論社、2004年、三俣学、森元早苗、室田武編『コモンズ研究のフロンティア——山野海川の共的世界』東京大学出版会、2008年、室田武編著『グローバル時代のローカル・コモンズ』（環境ガバナンス草書3）ミネルヴァ書房、2009年、三俣学、菅豊、井上真編『ローカル・コモンズの可能性——自治と環境の新たな関係』ミネルヴァ書房、2010年。

⁴ いわゆる「ニンプロ」とは2004年～2009年度日本文部科学省科学研究費特定領域「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成 - 寧波を焦点とする学際的創生」（研究代表者・東京大学小島毅教授）の略称である。その主旨は「中国の海港都市寧波を焦点として東アジア海域交流の歴史的経緯について調査し、日本の伝統文化形成との関係を考察する」ことにあった。筆者はこのプロジェクトの三部門のうち、現地調査部門下の設けられた調査班に参加した。現地調査部門は「水」を媒介として繋がる地域間の関係について着目し、フィールドワークの手法を用いて文献史料の限界を突破することで、水上世界の実態を明らかにせんと意図した。調査班は太田出氏と筆者が中山大学歴史学系の呉滔教授のもとで実施した。当時の調査は2007年8月より2010年10月の4年間に35日実施し、42人に及び関係者を訪問した。

⁵ 調査の具体状況については、SATO Yoshifumi, “The Recent History of the Fishing Households of the Nine Surnames: a Survey from the Counties of Jiande and Tonglu, Zhejiang Province”, in He Xi and David Faure eds., *The Fisher Folk of Late Imperial and Modern China: A Historical Anthropology of Boat-and-Shed Living* (London: Routledge), 2015. を参照されたい。

⁶ 本調査によって得られた成果の一部として、小島毅監修・高津孝編集『東アジア海域に漕ぎだす3くらしがつかなく寧波と日本』東京大学出版会、2013年、155-170頁、も参照されたい。

⁷ 施堅雅（史建雲、徐秀麗譯、虞和平校訂）『中国農村的市場和社会結構』北京、中国社会科学出版社、1998年。上田信『伝統中国——「盆地」「宗族」からみる明清時代』（講談社、1995年、16-29頁）、は、明清期の東南中国においては盆地を中心とする小宇宙が形成されたと指摘

する。日本の小盆地宇宙論については、米山俊直『小盆地宇宙と日本文化』（岩波書店、1989年）を参照のこと。

⁸ 清水江文書の発見と整理に伴って、近年では清水江流域史の研究が蓄積されつつある。例えば、梁聡『清水江下遊村寨社会的契約規範与秩序——以文斗苗寨契約文書为中心的的研究』北京：人民出版社、2008年。

⁹ 林国錚編『浙江省経済地理』（北京：新華出版社、1992年）、頁139-156、張其昀編『浙江省史地紀要』（上海：商務印書館、1925年）。

¹⁰ 建徳県志編纂辦公室編『建徳県志』（杭州：浙江人民出版社、1986年）、第3編経済、第9章「電力」。三都鎮漁民村は観光地としての開発を進め、「九姓漁民新漁村」という名の漁家楽が設置されている。九姓漁戸の歴史も観光資源の一つとして利用されているのである。最近では、村全体を「生態産業」なかに位置づけていこうという計画がある。『建徳市三都鎮三江村生態産業發展与新農村建設企画書』（建徳：建徳市三都鎮三江村、2010年10月）。

¹¹ 『唐国史補』卷下。

¹² 林柄賢氏口述記録（2007年8月19日採訪、未定稿）。

¹³ なお、当該地域には南京国民政府期には水上保甲が編制され、保長には水上居民が政府から指名されたという。

¹⁴ 林柄賢氏口述記録（2007年8月20日、2008年8月15日採訪、未定稿）。

¹⁵ 唐雲應氏口述記録（2007年8月24日、2008年8月18日採訪、未定稿）、浙江省建徳市交通局編『建徳市交通志』（北京：海洋出版社、1996年）、第1章「水路交通」。

¹⁶ このような地域間関係はダム建設や道路・鉄路のなどの交通機関の整備によって抜本的に変化した。新編『建徳県志』第10章「交通運輸」、『建徳市交通志』概述。

¹⁷ 『建徳市交通志』、第1章水路交通；頼前掲書、頁23-34；林前掲『浙江省経済地理』、頁139-156。

¹⁸ 林柄賢氏口述記録（2007年8月19日、20日採訪、未定稿）。

¹⁹ 『天下水陸路程』和『客商一覽醒迷』は楊正泰校注『天下水陸路程、天下路程図引、客商一覽醒迷』（太原：山西人民出版社、1992年）を、『士商類要』は楊正泰撰『明代驛站考』（上海：上海古籍出版社、2006年）をそれぞれ参照した。

²⁰ 『東亜同文書院中国調査旅行報告書』1916-1935。

²¹ 戴槃『嚴陵紀略』（清同治7年重刻本）「九姓漁政考」。

²² 丁嗣華編『建徳郷土教材』（浙江省立嚴州中学附属小学、1935年）「五河流」。

²³ 水量が安定していなかったこれらの溪流は春夏の季節に水量が急増したため、木材を筏状にして下流に運送した。『建徳交通志』第1章水路交通、第1節航道、四「山溪支流」。このような方法は民国期のみならず、集団化期も依然として同様であった。呉小関氏口述記録（2014年8月18日採訪、未定稿）。

²⁴ 林柄賢氏口述記録（2008年8月15日採訪、未定稿）。

²⁵ 林柄賢氏口述記録（2008年8月15日採訪、未定稿）。

²⁶ 林樟秋氏口述記録（2008年8月16日採訪、未定稿）。

-
- 27 陳連根氏口述記録（2009年8月28日採訪、未定稿）。歴代県志や『建徳郷土教材』などの史料からはこれらの埠頭の存在を確認できる。1956年に進められた水上合作化運動以降、建徳の水運業者は梅城、洋溪、大洋の三箇所に成立した航運社に集められた。『建徳市交通志』頁69—70。
- 28 吳建樟先生口述記録（2010年8月27日採訪、未定稿）。運輸船には「小平頭」と「大平頭」という区別があった。小平頭の積載量は10—20トン、大平頭は20—30トンであった。一部の「柴船」は50—60トンを積載できた。『建徳市交通志』頁69—70。
- 29 吳建樟氏口述記録（2010年8月27日採訪、未定稿）。
- 30 当時の杭州における商習慣については、東亜同文書院関係史料（『東亜同文書院中国調査旅行報告書』1916—1935）や満鉄上海事務所が進めた商慣行調査記録（例えば、南満洲鉄道上海事務所調査室『中支慣行調査参考資料第3輯』南満洲鉄道株式会社満鉄調査研究資料第69編、1943年、満鉄上海事務所調査室『杭州本山紙行業慣行概況』1942年、南満洲鉄株式会社上海事務所調査室『杭州ニ於ケル運動業』1942年）なども参考になる。
- 31 林柄賢氏口述記録（2008年8月15日採訪、未定稿）。
- 32 陳連根氏口述記録（2009年8月28日採訪、未定稿）。残念なことにそれがどの演目であったかについての記憶はなかった。
- 33 可児弘明『香港の水上居民——中国社会史の一断面』岩波書店、1970年、38—48頁。
- 34 林柄賢氏口述記録（2008年8月15日採訪、未定稿）。
- 35 許小根氏口述記録（2009年8月28日採訪、未定稿）。
- 36 吳建樟氏口述記録（2010年8月27日採訪、未定稿）。
- 37 前掲陳連根氏口述記録。
- 38 林樟秋氏口述記録（2008年8月16日採訪、未定稿）。
- 39 邵春潮氏口述記録（2009年8月20日採訪、未定稿）。
- 40 『建徳県志』第三編経済、第三章林業、第一節「森林資源」。
- 41 中華人民共和国建国以降の情報であるが、大洲村は杉の生産地として県内でも屈指の存在であったようである。1976年の森林普查の結果（『建徳県志』第三編経済、第三章林業、第一節「森林資源」）や1983年段階で大洲郷が浙江省用材林基地郷に指定されている点（『建徳県志』第一編建置、第三章行政区画、第二節「郷鎮」）からも読み取れよう。
- 42 中国語の杉とは *Cunninghamia lanceolata* であるのに対して、日本語でいう杉とは *Cryptomeria japonica* を指す。したがって、共におなじ「杉」という字を当てるものの、実際には異なる属に分類される。上田信『トラが語る中国史——エコロジカル・ヒストリーの可能性』山川出版社、2002年、頁84、118—123、参照。
- 43 姚金海氏口述記録（2008年8月19日採訪、未定稿）。
- 44 王来生氏口述記録（2010年11月4日採訪、未定稿）。
- 45 姚金海氏口述記録（2008年8月19日採訪、未定稿）。
- 46 『建徳郷土教材』「十三実業」。

- 47 姚金海氏口述記録（2008年8月19日採訪、未定稿）。王来生氏口述記録（2013年8月18日採訪、未定稿）によると、棚民は元々多くはなかったが、民国期に江西など他地域から避難してきた人々が山のアンペラに住み、情勢が安定すると多くは帰郷したという。
- 48 『建徳林業志』大事記、道光十五年の条。
- 49 『巖陵紀略』「巖属墾荒章程」。
- 50 民国『建徳県志』卷二、地理、林場。
- 51 桐廬県林業局林業志編社組編『桐廬林業志』（桐廬県林業局、1990年）「桐廬県森林資源分布図」によれば、この二村周辺の山林は薪炭林に分類されている。
- 52 白炭とは窯の中で活性化した木炭を燃焼した状態で外に出し、その後火を消す方法によって作成された木炭の種類のことであり、硬く火力が強い特徴を持つ。龍泉市林業局編『龍泉市林業志』（北京、中国林業出版社、2009年）第4編森林利用、第5章木質産品、第3節「柄棍柴炭」。
- 53 胡宗陶氏口述記録（2010年8月29日採訪、未定稿）。
- 54 「關於開茶、竹、木、柴、炭等九種産品価格調査計劃、意見、報告及価格調査的資料」『壽昌県供銷社』建徳市檔案館（寿10-1-77）。浙江省全体で見ると、炭焼き農民は永嘉、青田、縉雲、永康などの地域から、龍泉、遂昌、淳安、開化、昌化、於潜、孝豊などの地域に赴いて炭焼きに従事した。代々炭焼きを生業とする者もいたという。『浙江省志』編纂委員会編『浙江省供銷合作社志』（杭州、浙江人民出版社、1989年）第二編經營業務、第七章土産品、第2節「柴炭」。
- 55 胡明君氏口述記録（2010年8月29日採訪、未定稿）。
- 56 1949年の段階で杭州市において經營されていた柴炭行は225家に達し、商品の主要な供給元は錢塘江流域およびその上流の山間部であった。『浙江省供銷合作社志』第二編經營業務、第七章土産品、第2節「柴炭」。
- 57 前掲胡宗陶氏口述記録。
- 58 民国『桐廬県志』卷三「自治団体」。
- 59 俞庭樟氏口述記録（2014年8月22日採訪、未定稿）。俞庭樟氏は俞英耀の孫である。
- 60 邵春潮氏口述記録（2009年8月29日採訪、未定稿）。
- 61 室田武、三侯学前掲『入会林野とコモンズ』。
- 62 菅豊「中国の伝統的コモンズの現代的含意」室田武前掲書所収。
- 63 地方志などの文献史料にも関連する記載を見出すことができる。例えば、上海の農村部における落棉に関する記載がそれである。秦栄光が光緒八年に記した「請禁作踐妨農稟」には、「棉花は十月以降、ばらばらの小花が残る。農村部の古い習慣では、現地の孤児や未亡人がこれらを摘んでも、業戸は目くじらを立てなかった。これを属に捉落花といった。古典に言う遺秉滞穗（落ち穂や残り穂）が意味するところである」。葛士濬編『皇朝經世文統編』卷三十六、戸政十三、農政下。
- 64 楊誠氏口述記録（2010年9月2日採訪、未定稿）。
- 65 前掲楊誠氏口述記録。楊誠氏に拠れば、平時は太湖周辺の湖田地帯に居住していた湖南の移民は、収穫の季節になると、鴨をつれて移動した。楊氏の村も通過し、最後は松江の呉城の市場

まで連れて行き売却した。興味深いことに、鴨が田の落ち穂を啄んでも村人は阻止しないばかりか、それを歓迎したという。なぜならば田において鴨がした糞は肥料となったからである。

⁶⁶ 菅豊前掲論文。

⁶⁷ 太田出「中国太湖流域漁民と内水面漁業——権利関係のあり方をめぐる試論」室田武前掲書所収。

⁶⁸ 姚金海氏口述記録（2008年8月19日、2010年8月28日、11月3日採訪、未定稿）、前掲胡宗陶氏口述記録、邵春潮氏口述記録（2008年8月22日、2009年8月29日採訪、未定稿）。

⁶⁹ 姚金海氏口述記録（2010年8月28日、11月3日採訪、未定稿）。

⁷⁰ 潘高癸氏口述記録（2010年11月4日採訪、未定稿）。

⁷¹ 前掲潘高癸氏口述記録。

晚清民国山林所有权的获得与证明

——浙江龙泉县与建德县的比较研究¹

杜正贞

摘要：各地山林在国家赋税体系中的不同地位，造成山林所有权确权方式的差异。无税山产的确权以契约为主要证据，而有税山林的鱼鳞山册，以及掌握在册书手中的私册，也构成了纠纷和诉讼中主要的证据。浙江省龙泉和建德两县分别是这两种情况的典型。因此，民国山林国有化、契税和不动产登记等一系列政策，对两地山林的确权，产生了不同的影响。在此过程中，原来以契约为主要确权凭证的习惯、以及由册书把持的、通过升科纳粮获得山林所有权的方式，都遭遇了挑战，国家与山区民众之间的关系也变得更加紧密。

关键词：山林所有权；确权；契约；册书；民国

一、山林所有权法律的变迁

林业史对中国历史上山林的所有权，常常只是笼统地将其定性为“官有林和私有林”、“朝廷和各级官府占有”，“私人占有”或“地主阶级所有制”、“农民阶级所有制”等²。这些抽象的概念，并不能让我们了解古代山林所有权的观念和实际占有的状况；也忽视了这些问题的历史演变过程和区域差异。唐长孺曾经从历史过程的角度研究南朝山泽占领。他依据历史文献，勾画了山林川泽从国有（天子所有）到被迫承认私人占有的过程。他说：

山林川泽在古代一向不承认私人有占领的权利。……在中国似乎维持山泽公有更久，直到出现了国家以后，便算作天子所有，私家还不能占领。……随着皇权的消涨与禁令的宽严，对于山泽的控制虽不能常常十分严格，但山泽王有的法律依据却始终保存。

根据他的研究，南朝的宋开始承认私人（主要是豪强、品官）对山泽的占有，这就是“羊希立法”。羊希立法是在山泽开发的过程中，国家试图对大族以及山泽之利进行管辖的一种

1 本文受到香港特别行政区大学教育资助委员会卓越学科领域计划（第五轮）“中国社会的历史人类学”的资助，是“国家社会科学基金重大项目“龙泉司法档案整理与研究”（13&ZD151），浙江省社科规划优势学科重大项目，“从契约到土地产权状：近代浙江地权证明的习惯、诉讼与司法”（14YSXK04ZD-1YB）的阶段成果。

2 参见南京林业大学林业遗产研究室主编，熊大桐等编著：《中国近代林业史》，中国林业出版社1989年版，第131-133页；樊宝敏：《中国林业思想与政策史（1644-2008年）》，科学出版社2009年版，第40-42页。

努力。³但是，唐长孺也证明了这些限制和管理都是不成功的。

唐宋以后封禁或弛禁山泽的政令，所针对的大部分是皇陵、园囿、名山等一些特殊的山林，它们被认为是“国有”或皇家专有，设专门的官员管理。但对于其他广大的山林地，国家并没有常态化的管理机制。与田土很早就因为赋税而进行了清丈，并建立起砧基簿、鱼鳞册等官方档案相比；山林地的赋税记录也较少。因此，在漫长的帝制时期，有大量的森林都处于法理上“国有”（天子所有）和事实上“失管”的状态。

在上述制度背景下，现有的研究认为，明清时期民间在山林开发的过程中，自发以契约的方式，形成林业的产权市场和经营秩序，即林产的占有、转移和买卖都仅依靠契约为凭据。这在清水江等林区的研究中，已经一再被证明和强调了。依靠近 20 年来在该地发现的大批清代林业契约，张应强、梁聪、罗洪洋等人，对这一地区的林业开发、经营习惯和规则，以及社会组织、文化形态等都进行了详细的考察⁴。其中梁聪和罗洪洋的研究主要是从法律的角度进行的。梁聪对文斗苗寨契约的分析，特别利用了“法秩序”的概念⁵，分析林业契约在一个苗寨社会中的作用机制，也探讨了契约所代表的“民间规范”与“国家法律”之间的关系。

如果以现代国家的标准来看，明清政府和法律对于山林的干预和“权利”保护都是非常薄弱的。《大清律例》中涉及平民的山产林木的法律，仅有“盗卖田宅”条下对盗卖坟山、告争坟山的规定，以及“弃毁器物稼穡”条下对“毁伐林木”的量刑等。特别是《大清律例》乾隆三十二年（1767）的“凡民人告争坟山”例，虽然只针对坟山，但在很多山林诉讼的理断中都被援引。也有很多山林纠纷为了能与法律相合，当事人都以是否在山上有自己祖先的坟茔，作为重要依据，甚至多有毁坏、涂改墓碑的控诉。薛允升特别说明：“此等案件南省最多，与北省情形大不相同。”⁶龙泉司法档案中“光绪三十年八月十八日金林养等为控吴礼顺势欺占砍越界混争事呈状”中就有“界内又有身家坟茔赤凿”的申述。⁷又如，“光绪三十二年洪大猷与沈陈养互争山业案”⁸，两造供词中均强调山产内有自家坟茔：“监生（洪大猷）坟茔有几十穴，这沈陈养越界砍木，监生曾是走出，今蒙复讯，还说监生无坟墓碑，总不能移。”“（沈陈养）山里他无坟茔，就是小的墓多。”⁹不论法律是否承认、不论是否有契约对山界进行过描述，在纠纷诉讼中，坟茔总是会被作为证据而被强调。这种“籍坟占山”的观念和行为在乡民

3 唐长孺：《南朝的屯、邸、别墅及山泽占领》，《山居存稿》，中华书局 1989 年版，第 13-17 页。

4 张应强：《木材与流动：清代清水江下游地区的市场、权力与社会》，上海三联出版社 2006 年版；梁聪：《清代清水江下游村寨社会的契约规范与秩序——以文斗苗寨契约为中心的研究》，人民出版社 2008 年版；罗洪洋：《清代黔东南锦屏人工林业中财产关系的法律分析》，云南大学博士论文，2003 年。

5 梁聪：《清代清水江下游村寨社会的契约规范与秩序——以文斗苗寨契约为中心的研究》，第 21 页。

6 薛允升著、黄静嘉编校《读例存疑重刊本》第二册，台北成文出版社 1970 年版，第 277 页。

7 包伟民主编：《龙泉司法档案选编》第一辑（晚清时期），中华书局 2012 年版，第 85 页。

8 该案档案收录于包伟民主编：《龙泉司法档案选编》第一辑，第 96-99 页。

9 《龙泉司法档案选编》第一辑，第 96-99 页。

中是普遍存在的。

值得注意的是，“告争坟山”例在承认近年山林的买卖转移以印契为凭的同时，还否定了远年契约的证据力，而是诉诸于依靠官方档案，即“山地字号、亩数及库贮鳞册、并完粮印串”。换言之，山林只有开发为山地，纳粮升科之后，才能获得官方的认定和保障。这一法律仍然基于农业赋税体制而制定，并没有赋予林业所有权以独立的地位。

晚清新政，清廷设立农工商局，并屡屡颁布各种诏令，振兴林业作为一种求治之道进入各级官员的视野。山林地的开荒植种和所有权确认，也开始成为一些地方官关注的事务。光绪年间陕甘、福建等地的官员在劝民种树的各项规定中，都提出了所有权保护的问题。例如《福州府程听彝太守劝民种树利益章程》中就说：“九、民间契管山场，听其自种。如无主官荒，有能开种各项树木者，准其呈县立案，以杜争端。十、有主荒地，自此次开种后，定以五年为限，勒令本主随时种植。如五年后尚未种植者，即以无主论，听凭他人开种管业，旧时地主不得出而阻挠。”¹⁰这个章程，一方面正式承认了原来民间自发形成的、以契约管业的状态。另一方面，也提出了“荒山官有”的理念，并鼓励人们开垦荒山，以到县“立案”的方式获得林地所有权。同样的章程在陕甘等地也有颁布。但我们还并不清楚它们在晚清的施行效果。

民国初建，无主荒地、荒山的国有化成为最早宣布的法令之一。民国元年（1912），农林部制定的林政方针里就说：“凡国内山林，除已属民有者由民间自营并责成地方官监督保护外，其余均定为国有，由部直接管理，仍仰各该管地方就近保护，严禁私伐。”¹¹ 1914年11月《森林法》颁布，确认无主森林均编为国有林。民国4年（1915）6月30日农商部颁布了《森林法施行细则》，第一、二两条也规定公有或私有森林之所有权之变更均须于三个月内，逐级上报政府。¹²这些法令在承认已经存在的、有确切证明（主要是契约证明）的私有山林的前提下，将无主山林、林地都划归国有。最关键的改变是，这在法律上中止了过去民众通过垦植开发，纳粮升科，即自动占有山林，获得山林所有权的做法。

南京国民政府时期森林国有化进步一加深。1931年5月《实业部管理国有林共有林暂行规则》停止了国有林、公有林的发放。1945年的《森林法》继承了北洋时期《森林法》确认国有林的基本方针，并且规定，国家认为必要时，可以给予补偿金的方式征收公有林和私有林为国有，等等。根据这些法律，国民政府对森林所有权的确认，仅限于民国之前有契

10 《农学报》，上海，农学报馆，1902年第185期，第1-3页。

11 陈嵘：《历代森林史略及民国林政史料》，金陵大学农学院森林系林业推广部1934年版，第65页。

12 陈嵘：《历代森林史略及民国林政史料》，第68页。

约登记的林地；对森林他项权利的认可，则限于承领执照等官方证书，承领荒山不等于获得该荒山林地所有权。直到1948年2月28日农林部修正公布《森林法施行细则》，才承诺荒山荒地造林完竣后，由地政机关依法发给土地所有权状¹³。

民国时期这一系列林业国有化的趋势，以往林业史的学者也有所论及。戴丽萍认为，近现代林权制度变迁过程“它首先是一个政治过程。……林权供给主体的利益（国家或政党）在林权制度变迁过程中居于非常重要、甚至是决定性的地位，而林权需求主体的利益在林权制度变迁中则相对居于次要地位，但对林权制度变迁的影响有上升的趋势。总体而言，近现代中国林权制度变迁始终是一个强制性制度变迁过程。”¹⁴中国近代的林权法律是一个由国家强制推行的制度，并且在制定过程中甚少考虑林区原有的习惯和民众利益。但它们却对传统林区产生了一系列的影响。

与以往同类问题的研究主要梳理政策和法律的制定、颁布不同，本文将把注意力转移到传统林区山产确权方式的变化上。一方面，国家确认国有林的行为，以及提倡开荒造林鼓励承领荒山的法律和运动，激发了这些林区民众新的“占山”行为，从而对旧有的山林产权和经营秩序形成挑战。另一方面，国家加强控制契税、山林所有权确认，也开启了林权凭证从私契到官方登记、官颁证书的转变过程。这两方面的变化，不仅是传统“管业”概念向近代产权概念演变过程中的一个例证，同时也展现出现代国家林政的初步实践，以及它在不同林区产权传统中的反映。本文将利用浙江民国时期的地方档案资料，从山区民众的行动和策略的角度，来考察这个变化的过程，探讨这些法律和制度实践对于林业秩序和山区社会的实际影响。

二、无税之山的纠纷和确权

民国年间的多项调查都强调，丽水众山无山税，没有官方的山产档案可供稽查，相关纠纷只能依靠契约作为证据。

1920年植物学家胡先骕到龙泉考察，他在日记中写道：

九月二十七日午往晤赖丰煦知事少春。晚，赖君招饮。席次谈及县中状况，知米食不足者约二成。而竹木出产，年逾百数十万金。此间山林与山田皆无税。盖在明初朱太祖以刘诚意伯故，免处州全境山税。清季与民国皆仍其旧也。亦以此故，至官厅无存案可稽，

13 《森林法施行细则》，《浙江省政府公报》，1948年第3454期，第37页。

14 戴丽萍：《近现代中国林权制度变迁研究》，河北农业大学硕士学位论文，2009年，第46页。

诉讼遂极夥，且十九皆须上诉至三审始止云。¹⁵

1920年代《浙江民商事习惯调查报》告称：

遂昌县民间买卖山场先由卖主检出源流旧契，照其所载经界四至，订立卖契连同源流旧契付与买主管业。买主并不问其山地之字号、亩数及粮额。契上亦不载明前项字样，惟记载某某山场一处，以及东西南北界至，出卖于某某永远照契管业而已。倘遇山地毗连经界之讼争，如一造提出源流旧契及买契，所载界至与系争山场界至相符，彼造则俯首无词，并不主张以字号亩数及粮额为凭而加以攻击也。按前项习惯系遂昌县公署程、温会员所报告。据称遂昌山粮究系何年截止，年湮代远，无卷可稽详考。前清光绪年间，实征堂簿内则载有山额永不加赋之语，核诸全县民间户册仅有田地塘之粮额，亦无山粮之记载，故民间买卖山场向不以推收粮额及山地字号为凭也。又是项习惯不独遂昌一县为然，即旧处属十县亦一律相同云。¹⁶

李盛唐在1930年代的考察报告中也说：“丽邑民田，可分为田、地、山、塘四类……山、塘现均无税，并入田地内科征”。¹⁷概言之，龙泉县所在的处州地区山场因为没有税粮，在官方并无登记，因此山场本身并没有字号，也没有官方的档案可以查证。在清代和民国时期，这一地区的山林诉讼都依赖私人间的契约，作为确权的凭证。这被认为是山林诉讼难以决断的重要原因。

（一）凭契管业与据契判决

民国年间，历任政府进行了多次不动产登记，如浙江军政府在民国二年（1913）颁布不动产登记修正案¹⁸，民国十一年（1922）北洋政府颁布的《不动产登记条例》¹⁹，民国32年（1943）后，龙泉开始推行土地测量和强制性的登记；但这些法规和行动或者因为依赖民众自动申报因而不能有效执行，或者只限于土地房产而不及山林。因此，整个民国时期龙泉的山林仍然

¹⁵ 胡先骕《浙江采集植物游记》，《胡先骕文存》，江西高校出版社1995年版，第166-167页。

¹⁶ 《浙江民商事习惯调查报告会第二期报告》，日本东京东洋文库藏，第4页上-下。

¹⁷ 李盛唐《丽水田赋之研究》，萧铮主编《民国二十年中国大陆土地问题资料》，台北成文出版有限公司，1977年版，第2133页。

¹⁸ 《浙江公报》第二十一册，民国元年二月廿三日，第3页。

¹⁹ 《浙江公报》第三千六百九十九号，民国十一年五月三十日，第1页。

没有统一的官方登记。除了个别官山承领和山主申报，由政府发给执照外，山林各项权利的证明主要仍然依赖各类契约，司法机关对山产、林木诉讼的判决，也以契约为主要证据。

司法机关以契约为证据审理山林案件的方法，主要包括两个步骤：一是验证契约本身的真伪；二是实地勘验对比契约的记载与争执山场、林木的实际位置是否相合。“民国八年张元兴等控叶樟护等盗砍坟木案”²⁰为例。该案经龙泉县公署、浙江永嘉地方审判厅和浙江第一高等审判分厅三审判决。永嘉地方审判厅和浙江第一高等审判分厅的判决理由，都主要围绕双方契约进行陈述：

审究该山之所有权应归谁属，尤当以两造之凭证孰系确凿为准。查被控诉人提出周仁盛买契在前清时曾经投税，盖有官印，而契载四至与第一审堪图丝毫不爽，并于山内葬有伊祖张承翼墓，其墓碑所刊四至与契载又属相符。证据确凿，毫无疑问。至控诉人提出张姓宗谱载有张昭墓图，指称张昭葬在系争坟山之西，并称张昭为宋时人，然提出叶春茂之卖契却在康熙五十七年，是葬坟在宋而买地在清，此中情弊已难索解。本厅查阅该卖契在前清时又未遵章投税，则该卖契之本身究否足凭，尚滋疑窦。²¹

这份判决理由，既强调了原告（即被上诉人）契约的真伪（其中清代已税契是重要的证明），也论证了契约和实地勘验之间是否吻合的问题。被告的契约则因为无法和葬坟的年代相匹配，其真实性受到质疑，而且其中所载四至范围与查勘情况也不符，因此做出驳诉的判决。当然，契约在产权诉讼中的证明作用并不像这个案例的判决所展示的这么简单，由于传统契约本身的问题和理讼的性质，只有部分纠纷能够完全凭契约裁断产权。关于这个问题已有专文论述，在此不赘。²²

在山林确权的问题上，山林契约不仅和田土契约一样存在着伪契和上手契不完整的问题，而且还因为它对于山林的定义和描述方式，带来很多不确定性。在清代和民国时期，诉状和契约中对于山产的界定和描述，都是以地名、土名和四至构成的，无字号，也没有亩数。

20 该案收录于包伟民主编：《龙泉司法档案选编》第二辑（1912-1927），第22册，中华书局，2014年，第970-1098页。

21 《龙泉司法档案选编》第二辑，第22册，第1041-1044页。

22 参见杜正贞：《地方诉讼中的契约应用与契约观念——从龙泉司法档案晚清部分看国家与民间的契约规则》，《文史》，2012年第1辑。

所谓“本县山场，向以土名片段四至为重，绝不记载亩分，全县同此习惯，不仅一地一姓为然”。²³其中，土名又有大土名和小土名的分别，大土名中的山林可以分属于数个小土名。大小各片山林的东南西北四至几乎是划定山场范围的唯一标准，但四至一般都只以地形的自然形态，如山岗、分水岭、巨石、溪流为界，是相当粗略的。因此，契约对于山林界址范围的描述本身，常常成为争讼的焦点。民国十年叶水根与叶有绍因山产争讼。原告叶水根以嘉庆年间的买契、和息约的草稿为据。被告叶有绍则提出有乾隆年间“投税之印契”，以及民国3年“山皮”买卖的契约。²⁴被告攻击原告之契，所载土名与所争之山不是同一处山产。原告叶水根继而反击，称被告所提供的民国3年的契约“立字民国三年，直至本年始行投税，显系临讼捏造，倒填年月，不问可知。”而且，“民间置买产业，入手契之土名界址必根据于上手契而来，以证明其权原真实，莫不皆然。查叶有绍所呈乾隆四十九年之契及民国三年之契，土名界址，南辕北辙，判若天壤”。²⁵被告所提供的上手契和卖契记载的土名、界址也都不相同，难以认为是同一处山场的源流老契。最后，该案以亲族调解，两造和息结案。

此案中原被双方之间的论辩相当典型，即两造虽然都有契约作为凭证，但这些契约证据都有瑕疵，各件契约（包括历次买卖契约、分家书、租佃契约、出拚契约或者合股合同等）中描述的山产土名、四至各不相同，无法证明这些契约是同一处山林的证明文件。回到契约的生产过程，尽管在签订契约时，有“必照源流老契土名界至填写”的习惯，但山林的界址是在开发、买卖、分家析产的过程中不断变化，传统契约格式中以描述四至的方式定义山场，无法记录这个复杂和长期的变动过程。有关的纠纷和诉讼在整个民国时期都层出不穷。

“民国三十五年曾贤谦等与李振汉确认山场杉木所有权案”是民国晚期的案件。该案所涉山林原为曾姓兄弟五人所有，后其中一部分被一人出卖于李振汉。从两造的言词辩论和状词可知，虽然两造都有契约、宗谱等为证据，但前代数件契约所记载的土名、四至都不完全相同，契约所记与当时人们口头上称呼的土名、四至也不能吻合。被告李振汉的辩诉中就说：

原告呈崇祯二年王德政卖契土名为白石玄路后，与其状称土名白石玄口已不相符，而系争山为土名白石玄底外竹山安着，又与原告之契载状称均不相符。又其契载四至为东至岗顶，南至梅树湾，西至坑，北至大溪为界，与其庭供系争山四至为东至横岗、

23 《中华民国十九年十月十七日龙泉县卷宗土地类三号一件为关于测丈张雨亭案由》（1933），浙江省龙泉市档案馆藏，M10-1-170-1，第125-127页。

24 《龙泉民国法院民刑档案卷》（1912—1949），浙江省龙泉市档案馆藏，M003-01-00761，第45页。

25 《龙泉民国法院民刑档案卷》（1912—1949），M003-01-00761，第54页。

南至湾，西至小坑，北至火路大岗直下坑为界，亦两不相符。足见该契对其起诉原因不能为相当之证明。²⁶

这类在状词或言词辩论中的语言，当然只是一面之词，但其中所反映的契约对山场的描述与状词、口述之间的差异，却是常见的事实。从法院的判决来看，曾贤谦要求确认所有权的请求也被认为因为契据不足，而被驳回。²⁷最后龙泉县法院不得不以调查人员的主观推断，对山界的进行了重新划定。

上述案件都与山林契约中对山产的定义描述方式有关。由于契约书写格式，它对山林的描述并不严密，也不统一。在民国 22 年（1933）测丈张雨亭山场案的一份查勘报告中，测勘人员曾写道：“又张姓受买各该山场，其卖契所载之四至，均系依据界址形势、俗称，详载于契，其字句冗长衍蔓，非目睹该山形状者，几不解所载是何意。”²⁸这恐怕不仅是龙泉的情况，而是多数山区社会山林契约的共同特点。在山产木业纠纷中，即便有充分的契约证据，这些契约也必须回到山林现场，实地查勘山界，查访当事人的村邻、亲戚，以对契约中出现的山名、界址，进行实地的指认，才能被法官所理解和判断，甚或在很多情况下，只有抛离原有契约，对山界的重新划定。

（二）“傍田立名”与田土的鱼鳞册号在山林确权中的作用

尽管在龙泉山林本身无税额、无档案，契约构成了山林所有权保护和诉讼判决的主要依据，但我们仍然可以在晚清乃至民国的诉讼判决中，看到司法机构对于田赋档案证据的依赖。

龙泉档案“宣统元年郭王辉等控叶大炎等涎谋凑锦案”²⁹，是一起两村郭姓族人之间的山林族产纠纷。原被两造所呈交的契约只记载了某几次的交易，无法依据这些契约追踪山产自明代至清末 400 多年的管业、买卖过程，也就无法确定它在清末的权利归属。民国 2 年（1913）二月二十八日，浙江省第十一地方法院判决文中说，“两造所呈契据均无何等价值，难以即凭契断案。”判决书中说：

讯得两造所争之业，既无别项确实证据，自应即以官册为凭，如官册原文之名为车盘

26 《龙泉民国法院民刑档案卷》（1912—1949），M003-01-9181，第 64 页。

27 《龙泉民国法院民刑档案卷》（1912—1949），M003-01-9181，第 127-132 页。

28 《中华民国十九年十月十七日龙泉县卷宗土地类三号一件为关于测丈张雨亭案由》（1933），M10-1-170-1，第 125-127 页。

29 该案收录于《龙泉司法档案选编》第一辑，第 324-400 页。

坑族太祖，即为车盘坑族原来之业。如官册原文之名为地畚村族太祖，即为地畚村族原来之业。但官册只载既垦之田，并无载未垦之山。本院因是推定，以自己之山垦田为原则，买他人之山垦田为例外。如他人无确凿之反对证据，则田为谁家原丈，即推定田旁之山为谁家之业。至原丈后，田有出入，当仍以契据为凭，不在此例。³⁰

这份判决书认为，不完整的或难以判断真伪的契约，无法作为裁判的依据。可以依据的是所谓的“官册”，也就是官府对田土的登记，根据田土的权属来确定它们邻近的山林的归属。

在民间似乎也有相似的说法。“民国十八年吴继德与李亦梅山业纠葛等案”³¹，被告人在辩诉词中说，根据当地习惯，在契约中山名、四至的命名方法，也和附近田土的登记字号、名称有关：

山业应凭源流契据。乞察龙泉习惯买卖山业必照源流老契土名界至填写，方为有效。辩诉人契管之山均有源流老契为据。阅原告人状称土名圳古后，究竟从前有无此种名称。假如有此种名称，应照上手源流老契填注，方为证实，无则捏造矣。查龙泉山场之土名向无册号，傍田立名，田名甲者，田上之山名亦为甲。此为成立山契缘起一定之方式。辩诉人契管山场以下之田均名畚上地，与山相符，并无圳古后土名之名称（有必字号官册可查）。³²

但被告所称的这一“习惯”，却并没有被法院所认可。判决理由中说：“虽该被告攻击原告所执系争山场契据，其上手契与黄陈宝徐承发出卖之契据土名四至，两有异同，此点已由本院票传黄陈宝徐承发到案讯明……即核与本院勘验时所得情形，大致亦互相吻合。”³³被告

³⁰ 《龙泉司法档案选编》第一辑，第 378 页。

³¹ 相关档案保存于《龙泉民国法院民刑档案卷》（1912—1949），M003-01-1160、1711、4810、6171、8030、9941、14524 号卷宗。

³² 《龙泉民国法院民刑档案卷》（1912—1949），M003-01-4810，第 71—77 页。

³³ 《龙泉民国法院民刑档案卷》（1912—1949），M003-01-4810，第 35—39 页。

人指责原告契约中的土名、四至名与上手契不同，且在官册中无据可查的。龙泉地方法院的做法是，票传立契人（也就是卖主）到案质询，证明契约所描述的山场四至究竟对应着实际山场中的哪一处。

以田土“官册”作为附近山林所有权的参考证据，显然有很多缺陷。在长期的开发管业过程中，经过多次的产业转移，毗邻的山林和田土属于不同业主的情况是很常见的；而且由于民间田土买卖，存在很多“私推”的情况，田土的实际管业并不能在“官册”上得到反映，因此由田土的所有情况推定附近山林的所有权属，也不可能准确。但在上述案件中，司法机构和当地民众在为山林确权时，的确有依赖附近田土赋税登记档案的观念，这种观念也反映出山林契约本身在确定山林权利、界址上存在的缺陷。

（三）民国契税与登记对山林产权秩序的影响

如前所述，晚清民国时期龙泉山林的产权证明仍以契约为主要依据，因此，对于山林产权秩序来说，影响最大的是契税和验契。民国元年浙江省军政府提出契约登记的要求。最迟在民国二年，浙江各县就已经设立了契约登记所。几乎是在同一时间的山产诉讼中，都出现了契约登记的相关内容。

“民国二年张仁钱等与张德财等互争山业案”³⁴，张仁钱在状纸中说，宣统三年（1911）自己在祖遗山场上砍伐的木段，民国二年在放排运售的途中，被张德财等强盖斧印，计图抢运。在述及这些木段的所有权证明时，张仁钱等是这样表述的：木段所来自的山场“界址零清，前清契税，历管至今，毛无异议，其契据早交登记所，因证书未到，契存登记所，一时无从呈电……”³⁵而张德财一方随即宣称，张仁钱（田）等人不过是他们的山佃，这些山场是自己的祖先在清道光年间受买，“受买契据已送登记所登记。”³⁶。双方都宣称拥有该块山场的契约，并且双方的契约都正在“登记所”进行登记，等候政府发放“证书”。县知事令双方向登记所领回契约呈阅，再行核办。根据此后县知事的历次批词，双方的契约均无法证明对山场的所有权。因为张仁钱一方山场买卖的正契遗失，而只有之前两次出拚的拚批。张德财等虽然持有乾隆年间的一张买卖契和出当反赎契约，却缺乏能够证明将山场出领给张仁钱的领契。更重要的是，双方所提交的各类契约中，山场的四至、地点的叙述，均不相同。契约的来源、与所争山场之间的契合度、可信度，也均存有疑问，甚至承发吏和法警两次调查报告的结论也完全相反。

34 该案收录于《龙泉司法档案选编》第二辑，第3册，第115页-第161页。

35 《龙泉司法档案选编》第二辑，第3册，第117页。

36 《龙泉司法档案选编》第二辑，第3册，第119页。

这起山场争讼，仍然反映了前述在凭契管业的“制度”之下，山林所有权证明的困境：契约链的不完整、契约写作的不规范、白契、伪契、契约对于地方熟人社会网络和“地方知识”的依赖等等。这些问题在清代和民国初年的山林诉讼中频繁出现。但民初的验契和契约登记要求，成为山区民众提供了争夺山产或为存有争议的山产确权的一条途径，他们纷纷将有瑕疵的契约提交登记，希图获得官府在仓促之下的一纸证明。这在短期内激发了更多的山产诉讼。仅在民国二年，龙泉县就还有以“藉废（契）混争”而起的“徐永炎与章学伦互争山业案”³⁷和“陈秋亭与徐世克等互争山业案”³⁸等案件出现。

与龙泉相邻，同属于浙南林区的遂昌县，档案中也记录了民国初年契约登记政令下达之后的两起山产登记申请。这两份登记申请也都是以“契约遗失”为由而提起的，其中一件呈请登记的山产是在晚清争讼未决的产业。申请人显然看到了这次登记是一次“合法”占有的机会。知县的批词说明，按照民国元年的登记法令，只要将申请“榜示”一个月，如果没有人提出异议，登记处就可以为这些山产进行登记、发给证书。³⁹这说明当时民众对此项政策的反应是极为快速和积极的。尤其是对于那些本身可能存在有“瑕疵”的契约和山林产业来说，这种登记不啻于一个让契约和产业获得合法性的机会。

随着民国时期的验契和契税运动，在司法审判中，对契契的要求也在严格化。“临讼投税”受到了更严厉的指责和禁止。在民国十八年（1929）的一起山产纠纷的判决理由中说：

兹查本案被告人主张，系争山木为其太祖蔡玉星所受买，只能提出临讼投税之季世业远年卖契一纸，并无他项上手老契可资证明，殊难信其所持之契即为管有系争山场之证凭。且核其契载四至，又与勘图内载全山界址不符。……反之，原告主张系争山木为其所有，既呈民国十一十二年王心聪先后卖契以为入手产权之证凭，复提康熙年间季云翔夏允臣出卖之印契，以证明其上手之权源，手手衔接，源流正确，其契载四至，复与实地勘图，形势符合，自属征而有信，应认原告人之请求为有理由。⁴⁰

这份龙泉县政府的民事判决，从契载四至与实地勘图的相符度和契约本身的可信性两

37 该案收录于《龙泉司法档案选编》第二辑，第4册，第355-416页。

38 该案收录于《龙泉司法档案选编》第二辑，第4册，第619-661页。在这个案件中，县知事也采用了与山林相邻的山田赋税粮册作为证据。“查粮亩田段字号册，内载三百七十九号后坑突，三百八十九号上攀儿。田垦于山，突上有田，田名则本山名而呼，事所常有。”《龙泉司法档案选编》第二辑，第4册，第651页；“此案判决系根据粮亩田段字号册，并非专凭承吏之勘覆。”《龙泉司法档案选编》第二辑，第4册，第657页。

39 《民国遂昌县政府司法处档案》（1912-1949），浙江省遂昌县档案馆藏，M415-2-719。

40 《龙泉民国法院民刑档案卷》（1912—1949），M003-01-8351，第25-30页。

方面论证山林产权的归属。后者又涉及两个问题，一是契税，二是上手契的完整性。该判决后，败诉的被告针对前次判决对“临讼投税”的指责进行辩护：“窃龙泉山契，古时遗下未曾投税者多，判后临时投税者亦复不少。官厅解决契据，只研究其所持契据之真伪，并不因其临时投税之故而失其契据之效力。”⁴¹ 这不能不说是一个事实。但龙泉县政府在该案第二次审判的判决书中，再次强调了税契在证明山林产权上的重要性：

按现行法例，我国不动产登记办法未施行以前，现行税契允为证明取得不动产所有之要件。被告所提康熙年间契据，当时既不投税，即不能为取得该系争山所有权之证明，亦不能断定该契确为康熙年间所订立。⁴²

这一判决理据显然与《大理院判决例》七年上字第五七六号例相违背，七年上字第五七六号例说：“税契乃是国家一定征税的方法，而非私权关系成立的要件。故不动产让与契约虽系白契，未经过印投税，苟依其他凭证，可认为真实者，法律上仍属有效”⁴³。但在民国财政部门不断强调契税征收的背景下，这类判决常常出现，这不能不对民间以私契管业的做法产生影响，也使得官方产权凭证的权威性更加受到认可。

但是，另一方面，不论是在北洋还是民国时期，验契、登记的真实目的只在增加政府的财政收入，基本上并不对所涉山产进行查勘，甚至并未对所验契约中的山产进行登记，各类官颁执照在证明山产权利中的证据力，仍然备受质疑。“民国七年季仙护等控季盛荣等乘阅抢据案”，该案中的一件契约证据，是光绪二十八年（1902）季仁教出卖梨树岗契，粘有民国六年（1917）二月的补税执照和验契执照。但是在民国七年（1918）的诉讼中，却被披露说立契人季仁教在光绪二十一年（1895）就已经去世，这张契约是季庆堂专门伪造并到县署投税的。⁴⁴ “民国十二年项祖适控蒋保藻山场纠葛案”，其中附有数份验契执照。这些被要求重新契税的契约，有清代“白契”，也有清代“红契”。这几件验契执照，不论对应契约交易所涉金额为多少，都只征收二角的登记费，而没有查验费。验契手续在地方的执行是徒具形式的，颁发验契执照时，并未经过真正的查验手续，以至于一些获得“验契执照”的契约，在诉讼最后却被认定为伪契。⁴⁵

概言之，明清至于民国，龙泉山林没有官方的档案凭证，其所有权证明都以契约为基础。但契约对权利的保护并不周全，诉讼中的查勘和判决也不完全以维护和执行契约为目的。

41 《龙泉民国法院民刑档案卷》（1912—1949），M003-01-8351，第37-42页、第46页。

42 《龙泉民国法院民刑档案卷》（1912—1949），M003-01-8351，第70-74页。

43 郭卫编《大理院判决例全书》，成文出版社有限公司，1972年，第157页。

44 该案收录于《龙泉司法档案选编》第二辑，第17册，第1页-第127页。

45 该案收录于《龙泉司法档案选编》第2辑，第32册，第837-992页。

田土赋税档案有时作为附近山林的所有权证据而被参考。民国政府出于财政目的的验契、契税和登记，为争夺山林所有权的民众所利用，出现了很多有关的山产诉讼。一方面，判决中对契税和登记的强调，提高了各类官方证书的权威和效力，对私契管业造成冲击；另一方面，由于无法对呈请登记、查验的契约进行调查核实，山林契约在确定产权、定纷止争上的瑕疵和局限，并未因之而改变。

三、“鱼鳞山册”、官产承领与山林纠纷

与上述浙南山区依靠契约为主要凭证的情况不同，浙西严州府在清代的山额即已占相当比重，大部分山林造有鱼鳞册图。但是 1860-1861 年，太平军两次占领严州，私人契约和保存于官府的鱼鳞册图都遭到破坏。到了晚清民国时期，田、地、山、塘的赋税、交易、推收，都是由乡村中的庄书、册书所把持的。他们手中保存和编制的私册，成为私人契约之外，最重要的田地山林权属的证明档案。

晚清民国严州府的山林开发和所有权状况，也与太平天国之乱有密切的关系。由于当地人口大量损失、逃散，1865 年戴槃任严州知府时，即招募各地棚民前来开荒。尽管他的《定严属垦荒章程并招棚民开垦记》，主要吸引棚民下山开垦田土，但显然很多棚民到了严州之后仍然以种山为业。他们对山产的占有起初并没有契约凭证。直到民国末年，他们中的很多人，才为自己垦种的山林向政府申请管业凭证。居住在麻车上庄陈村乡第 10 保的周土金等 19 人，在民国 36 年 9 月呈递申请，其中就说：

民等原籍缙云，自祖手或父手迁居建德山中，垦辟荒山。至民国廿四、五年间均已成熟，现可栽植山木及各种杂粮，理合依照土地法第一百三十三条但书之规定，开列清册，报请钧府核准给发土地所有权状，并照章课税，以便完纳田赋。

根据他们开列的山产清单，每人名下有 2 至 6 处山产，这些山多则 40 余亩，少则 1 亩，均已有土名、字号。换言之，在报请县田赋粮食管理处之前，应该已经在庄册那里有过登记。但是他们却一直没有到官府登记。直到新土地法颁布，承认开垦者的所有权之后，才到政府申请土地所有权状。⁴⁶

46 《建德县田粮处关于清查粮仓存赋谷、垦荒成熟山地的升科、发所有权证等的报告、批复、训令、表报名册》(1947-1948)，建德县档案馆藏，1815-20-237。

在太平天国之后，除了上述一部分外来的棚民占有开垦了大量的山林之外，还经历了当地人回乡，收回或者霸占山林的过程。1949年之后的调查和档案经常谴责原来的地主通过伪造契约或绘制鱼鳞图册，占有山林。如《建德县山鹤乡山林情况调查》：

山鹤乡为山区，山林面积较多，在全乡土地中占有很大比重。……原先这些山地本是无主的，后为地主凭藉势力勾结旧官府强行霸占，特别是太平天国农民革命失败后，逃亡地主陆续归来，伪造假契来欺骗农民，或依仗恶势力诬指农民开垦的山地地权是他的，而将这些土地从农民手中掠夺过去，再通过租佃形式来剥削农民。⁴⁷

相邻的分水县王秉融所主持的“清山”曾被作为典型批判。

地主由对土地的兼并发展到对山林的霸占，有钱有势的人向官府“报粮认税”领取山林，有的则依靠势力“指山为界”，将大片“无主”的山林归并在自己私造的契约之内。如分水县蠡湖乡在一九一七年以前人口特别少，许多山林无主经营。一九一七年段祺瑞执政时，并勒令建立“清山局”，要群众领山认税。清山局多为地主豪绅所把持，该乡清山局即是本乡的满清拔贡王秉融任总董事，王曾任淳安县知事，其子王植民任清山局秘书，父子二人总揽大权，霸占了该乡四分之一的山林。⁴⁸

王秉融这次清山所编订的鱼鳞山册，现仍存于桐庐县档案馆。这些调查和档案证明，在山林无主或者因战乱失管的状态下，人们通过创造契约和鱼鳞册图，为山林确权，重建山林产权秩序的过程。

在上述背景下，民国年间该地发生了几次官产承领的纠纷。如前文所述，晚清民国政府均鼓励开辟荒山造林，但是由于官方林业档案的缺失，哪些山林属于“官荒”可以被承领？哪些是“有主”山林？并无统一可靠的官方记录。承领或承买“官荒”，也就成为了民众占山的一种手段。

民国17年（1928），建德县东关统捐局的职员方梅庵（即方琦），以其兄弟的名义承领

47 华东军政委员会土地改革委员会编：《建德县山鹤乡山林情况调查》，《浙江省农村调查》，出版机构不详，1952年12月，第257页。

48 华东军政委员会土地改革委员会编：《天目山区农村情况》，《浙江省农村调查》，第9页。

该县东乡杨家庄的一处“官荒山”。他在申请书中称，自己早在民国七、八年间就响应政府的号召，在这片山上开荒种植树木。这份申请经田赋征收主任的查勘、绘图、定价、山邻保证等程序，上报至浙江省财政厅。财政厅重新定价并两次要求重新绘图后，在民国 17 年 9 月 9 日颁发给承买执照。但到了民国 19 年，方梅庵以“承买官山有照，被册书串同蔡姓私收强占”，对蔡德松等人和杨家庄册书朱逊德提起呈诉，方梅庵这样指责册书的行为：

从前民间报荒，必以逃亡绝户、废弃无粮之产为限，其手续亦当由报户呈县批令该坐落地册书前往查明，确为无主者，而后丈量绘图具复，钧府据以核准承垦升科。

自民三清理官产处机关成立，凡有民荒亦同官产，其处分则给以布照。前项报荒承粮之例，因抵触而废除。今册书朱于已卖官山重为处分，既不须呈候钧府之示，又毋庸报部请照之烦，直截令蔡姓承粮。所谓目无成案，处分自由，文墨之吏，权大若此，能不骇人。⁴⁹

但根据册书朱逊德的具呈，当方梅庵拿着省财政厅给予的执照到他那里要求晰册时，他发现在执照中所开列四至内的山产，早已有人完粮。根据之前习惯，这些已经完粮纳税，在籍册中已有登记的田土山林，就是民有私产，而非官荒。

缘杨家庄清理书向书故父承当，自民国十七年七月间父故，即由书接管。奉公守法至今无误。乃该民方仰宋（即方琦）前因省买得荒山，令书晰册，无如查得底册，该所买之山，按照来图四至，实越出范围数倍。且均系有人完粮之产，无从再晰。……此种荒山，准民间认粮，虽未奉有明令，但建德各庄习惯，为顾全国课起见，照此办理者甚多。况前知事张任时，并因提倡森林，曾有面谕，准各书照办。书故父手内晰出似亦与违法飞洒者不同。⁵⁰

方梅庵和朱逊德的具呈都证明，在民国官产承买制度出现之前，人们获得荒山所有权的合法途径是承粮纳税。首先，业主需要向县衙提出申请，县衙责成册书进行调查，如果为无主之山，即报告县衙，由县衙出具执照，业主凭执照回到册书那里登记入册，从此开始每年交纳税赋。在这个程序中，册书本来只是一个中间环节。但是由于赋税征收也由册书把持，

49 《方琦为承买官山有照被册书串同蔡姓私收强占事呈请书》，《建德县府办理方琦承买官产纠葛文卷》（1928-1930），1808-7-14。

50 《杨家庄清理书朱逊德为声明事呈》，《建德县府办理方琦承买官产纠葛文卷》（1928-1930），1808-7-14。

人们往往绕过县衙这一层级，直接在册书那里登记，即所谓册书的私推私收。太平天国运动之后，这种私推私收的情况更加普遍。正如朱逊德在具呈中所说，它成为一种在国家制度之外的“习惯”。

蔡德松是这次纠纷中另一方的主要人物，他对自己山产权利的声称是这样的：

曩时张知事提倡森林，民国七八年间发贴布告，无论官荒私荒，都准农民垦植森林。至民国十四年由先父手晰收户册是实。溯民国八九年间，蒙前知事张以提倡森林为急务，明示煌煌，劝谕人民垦荒造林，因此益知注重林业，计全县四十余庄，凡开垦者无不一律众多。森林发达，国课增加，早有明效。民故父见此情形，故于十四年间，敢将上述各号山场出立认字，向庄认垦，迄今完粮已阅五年之久，其取得之产权，自系遵从本邑惯例及官厅认可之办法，与其他私晰者不同。况各号按照鱼鳞册籍，均载明系民蔡姓祖业，燹后失管，今仍由原业主认明纳税，更属恪遵理法。⁵¹

与方梅庵一样，他们都将之前县知事提倡整理荒山的布告，作为自己权利的来源。而且，同样他们也都声称自己早年已在开荒种植，却没有即时申请执照，将山晰入户册。所不同的是，蔡家在民国14年由庄册私登入册，他也声称这是当地的“习惯”。

在讯问记录里，其他林产占有人的回答也非常有趣，很直接地反映出当时人们对于林权来历的认识。其中一名叫陈顺桃的山主，当被问及“小坞的山你有多少税？”时，他回答说：“是民外婆家遗下的坟山，土名徐湾坞，计税五分，民家经管数十年了。”一名叫郑福培德山佃则说，他是仙居人，在建德为他的娘舅照料这片山和几亩地，每年娘舅会派人来一次（收租）。陈兆余则强调自己的山产“还是洪杨前管起，今呈上老册一本”。⁵²在他们的观念中，祖传的山产（尤其是坟山）；长期实际的占有和管理；以及承粮登记，等等，仍然是林产权利最重要的证据。

方梅庵作为一名外来的地方公职人员，挑战当地庄册私推的“习惯”和旧有的山林占有方式，他的“武器”是民国3年7月31日颁布的《官产处分条例》。“迨民三以后迄于今，兹凡无人承粮之产，国家为收入起见，一律划在官产范围，必须经过国家处分价卖给照，方可取

51 《蔡德松为陈述承粮造林经过请求察核排除侵害事呈》，《建德县府办理方琦承买官产纠葛文卷》（1928-1930），1808-7-14。

52 《民国十九年四月一日日讯笔录》，《建德县府办理方琦承买官产纠葛文卷》（1928-1930），1808-7-14。

得产权。”⁵³ 根据此条例，以报荒承粮获得所有权的制度，已经被新的官产承买制度所代替。正如他在呈状中说的：“对于册书职权论，民三以后，清理官产条例未奉废除。凡遇荒山荒地只有官厅处分，毋再准民间报荒升科理，今册书为蔡陈等姓晰收，而时间又明注民十四年之后，此项晰收显属与条例抵触，当然根本取消。”⁵⁴ 《官产处分条例》对官产的处分分为三种形式，一变卖、二租佃、三垦荒，并且在第十八条规定“以前私垦之官荒自本条例施行后应补缴荒价，照章升科。”⁵⁵ 换言之，报荒升科之前，需履行承买的环节，才能获得所有权。这在产权获得方式上是重大的变化。

在这场纠纷中，只有外来人方梅庵利用了新的法律，并刻意回避了原来的地方习惯。在被问及承买时为什么没有到册书那里查询时，他说：“我们查不来的。”后来，他又在清折里这样解释“查不来”的含义：

无主之产，册书利在民间收付，于官卖非其所愿，盖一公一私绝不相容者也。承买官产而曰必先查庄册，是犹夺食于虎口，……民间同一出钱，恐将乐于册书私人之拨付，又何事报官勘查缴价请照，作种种麻烦之手续乎。⁵⁶

正如方梅庵指责的，之前册书私晰的所谓习惯，不过是当地人们规避国家制度的方法。不仅该案的各方当事人在刻意回避与己不利的制度或习惯，民国 17 年方梅庵承买荒山的一系列程序中，负责的田赋征收主任和作为上级最终核审机关的浙江省财政厅，也都没有要求其向册书核实官荒。这种对旧习惯和旧地方制度的漠视，与民国新政权对册书以及他们所代表的那一套在国家之外的旧体制的恶感有关，但这种漠视并无补于清理林地所有权的目标。

政府、册书和不同的人群之间，围绕旧规旧习和新法律之间的纷争，是通过不断地竞争和磨合而得到改善的。民国 25 年（1936），建德林场森林学校同学会的 12 位成员提出承领杨家庄的另一块山林。县政府下令清理书（即前案中的册书朱德逊）详细查明这块山林的归属。这次承领申请，同样出现了与附近山主之间的纠纷。县政府即飭传朱德逊带同庄册及原图，在规定时间内到府接受讯问⁵⁷。朱德逊的讯问笔录记录如下：

问：你管的庄有田地山塘多少？

答：二千余亩山，田千七百余亩，塘四十余亩，地约二千亩，一共六百多元正税。历

53 《方琦为补充简明意见仰祈鉴察施行事呈》，《建德县府办理方琦承买官产纠葛文卷》（1928-1930），1808-7-14。

54 《方琦为再行呈明事清折》，《建德县府办理方琦承买官产纠葛文卷》（1928-1930），1808-7-14。

55 《官产处分条例》，《浙江财政月刊》，1933 年“现行财政法规专号”，第 61-62 页。

56 《方琦为再行呈明事清折》，《建德县府办理方琦承买官产纠葛文卷》（1928-1930），1808-7-14。

57 《建德县吴锦荣等请领官荒造林卷》（1936-1937），建德县档案馆藏，1808-7-61。

年没有很大进出。

问：你管的庄有无无税山地？

答：不甚清楚。

问：你管的庄册有无鱼鳞？

答：土地陈报时，造过新册。老鱼鳞已经不齐，所有推收根据他们的户册推收。

问：现征粮的山税，照老号还是照新号？

答：老号新号都有，在三戾地，自一号至四十号均照新号，余照老号。

问：鲍吴氏的地土地陈报时曾否编过新号？

答：编过的。

问：鲍吴氏在吴锦荣等请领官荒内管有山地多少？

答：依照土名所在计算三戾，（苏州码）在龙门顶有十四亩，（苏州码）金鸡岩有二亩八分三厘，（苏州码）西坞殿二亩六分六厘六毛，（苏州码）毛竹里三亩三分三厘五毛。

根据朱逊德的供词，册书手中的山林记录，也是根据人们的开垦报税而逐步积累起来的。这个积累的过程在民国年间还在继续。只不过这时候，新的法令规定，新承垦的山林，即便经查证原属无主荒山，其性质也属于“官荒”，即为国有。在这个民国末年的案例中，虽然政府本身仍没有能力对山林进行全面的清丈、建立官方的山林档案，但是通过对“册书”群体的整编和控制，政府将确权的最终权力重新拿到了自己的手中，册书回到了中间人和执行者的角色上。

四、结语

晚清民国时期，面对着国家层面同样的林业政策和法律，浙江龙泉与建德两县林区在山林所有权获得与证明方式上有着显著的差异，这种差异其根源在于两地山林在原有的地方赋税体系中的地位有根本的不同。建德最晚在南宋经界之后，已经对大量的山林征收赋税，并且留下了记录。《景定严州续志》中记载有 1258 年举行的经界法，其时即已丈得“山若桑牧

之地以亩计得五十四万五千二百九十七”，超过田亩数四倍之多。⁵⁸而在处州现存最早的明成化《处州府志》中并没有山税的专项记载，至嘉靖《浙江通志》处州官民山额数远低于官民田数的格局就已经定型。⁵⁹清代雍正《浙江通志》记录严州府建德县，田额仅 1667 余顷，而山额达到了 5125 余顷。⁶⁰而在同样以山区为主的处州府各县，山额的比重却小得多；龙泉县实在田 1699 余顷，而实在山仅为 133 余顷。⁶¹每年征收的山银数量几乎可以忽略不计。这一历史上长期以来的差异，造成了建德的林产确权以纳粮升科，登入鱼鳞山册、获得字号为主要方式，而龙泉的山林产权证明主要依靠私人间的契约，在契约无法确证时，参考山林附近的田土赋税档案。

对明清山林的研究中，学者们往往更多地强调契约和地方习惯的作用，即认为各种林业权利的来源、获得和保护是来自并仰赖于契约的。同时也承认“国家法律在这个法秩序体系中有保障社会稳定、肯定和维护民间规范并对民间规范进行调控改造的功能。”⁶²以往学者对清代产权的研究也强调“官府本身尽管对财产权进行确认，然而在权利的执行上无所作为，以至于人们打赢了官司只会，还要使其权利得到地方社群的承认”⁶³。龙泉和建德的例子，让我们看到林业产权秩序确立的历史过程，与国家权力的进入、赋税制度的设计和推行有密切的关系。而且赋税制度不仅是提供产权凭证那么简单，如果放在一个长时段的角度来看，它提供了一套地方社会经济结构、所有权习惯演化于其中的结构。仅就浙南和浙西这两个相邻的小区域来说，山林赋税历史传统的差异，影响到两地确权方式、纠纷形态和审理过程等都呈现出不同的特点。

晚清民国时期，统一化的造林运动、林产国有化、契税和验契、土地陈报、不动产登记等等的政策和法规陆续上演，我们今天在档案中看到的大量山林产权纠纷和案件，是两地民众应对甚至利用这些新政的结果。例如，前述龙泉县民国 19 年的张雨亭山场案和建德县方琦承买官产案，其直接背景都是当时在浙江省疾风暴雨般推行的土地陈报。这次土地陈报的效果，在当时已经饱受批评，它在各地都掀起了一波确权纠纷和诉讼的浪潮。但由于两地山林在古代国家赋税体系中的地位不同，这些新政所激发的地方反应、山林纠纷和确权方式的变化都有差异。

民国龙泉山区的山林确权纠纷和诉讼，主要是围绕着契约进行的，验契和契税新政对其

58 方仁荣、郑瑶撰：《景定严州续志》卷二，《宋元地方志丛书》第 11 册，大化书局，1980 年，页 14 下。

59 薛应旂纂修：《嘉靖浙江通志》卷一七，《天一阁藏明代方志选刊续编》第 24 册，上海书店，页 17 下-页 18 上。

60 嵇曾筠、李卫等修：《雍正浙江通志》卷六十九田赋三，中华书局 2001 年版，第 1424 页。

61 嵇曾筠、李卫等修：《雍正浙江通志》卷七十田赋四，第 1737 页。

62 梁聪：《清代清水江下游村寨社会的契约规范与秩序——以文斗苗寨契约为中心的研究》，人民出版社，2008 年，第 257 页。

63 安·奥斯本：《产权、税收和国家对权利的保护》，曾小萍、欧中坦、加德拉编：《早期近代中国的契约与产权》，浙江大学出版社，2011 年，第 144 页。

影响最大。但这种影响仍然与契约本身在山林确权中的弊病有关。传统的山林契约对山界的描述模式，为山林确权带来很多隐患。从契约动态的使用过程来看，确定山界的并非仅是一道道的自然地理分界线，而是人们围绕着这些地理标志物以及契据、查勘报告、判决书等等，建立起来的对山林的认识。这种认识永远是动态和变化的，在认识过程中充满了各方的解释、协商和斗争。因此，尽管赋税档案在龙泉的山产纠纷中不如契约使用广泛，但人们对契税凭证等官文书和官方确认的需求一直存在。民国时期政府一系列新政相当密集地制造出了各类官方凭证，尽管它们并不是经过实地测丈的林权证书，但仍然被民众追逐和使用，并且在一定程度上冲击了私契在确权中的效力。

对比龙泉县的情况，在上述建德县的林产纠纷中，并没有契约出现。在方琦承买官产案中，不管是试图通过新的官产承买制度而获得林产的方琦，还是以坟山、祖产、开垦有年或在册书那里已经登记等等理由，声称拥有林产的人，他们都没有提出一张契约作为证据。这种情形也许是太平天国之后，社会经济秩序经过重建的结果，却为我们提供了非常有价值的个案，在我们所熟悉的、以契约为中心的产权秩序之外的另一种情形。

由于鱼鳞山册的存在和庄书册手把持山林的升科、登记和纳税、推割，他们手中的私册是山林所有权证明的主要证据。而且，战乱之后人们对山林的争夺，也主要围绕着鱼鳞山册的再造而展开。册书和他代表的地方“习惯”，成为民国林权新政推行过程中，各种矛盾和纠纷的焦点。虽然直至民国末年也未能建立官方的山林产权档案，但新的法律挑战和否定了过去人们通过开荒升科，获得山林的所有权的方式；政府通过对册书的控制，在一定程度上将山林所有权的最终确认权，收归至政府的手中。

概言之，由于山林在传统时期国家赋税体系中的不同地位，造成两地确权方式的差异，并且衍生出以契约为核心和以鱼鳞山册（或私册）为中心，两种不同的山林产权证明体系的架构。民国现代国家在契税、契约管理、林地丈量和登记、林业国有化等方面的不断进取，在这两种架构下呈现出不同的面貌。在民众应对、利用新的国家权威和法规地过程中，国家和民众在合力创造一种新的国家与山区地方社会之间的关系。

近現代中国における林学知の普及と林学界に関する初歩的考察

—中国東南部の事例に着目して—

宮原佳昭

はじめに

本稿は、近現代中国における林学知の普及と林学界の実態を解明するためのアプローチの一つとして、本科研において収集した陳嶸（1888-1971）・金陵大学など近代中国林学界に関する史料、および浙江省建徳の山村における聞き取り調査に基いて初歩的な考察を行うとともに、今後の研究の方向性を提示することを目的とする。

19世紀後半以降、中国の知識人層は富国強兵を図るため、軍事・工業・農業など多様な分野における西洋近代の学知や技術を中国に導入した。そのなかで、ドイツやアメリカで発達した近代林学は、欧米および日本を通じて中国に伝来し、中国各地で普及が試みられた。近現代の林業・林学に関する主要な先行研究としては、林業部教育司主編『中国林業教育史』（中国林業出版社、1988年）や熊大桐主編『中国林業科学技術史』（中国林業出版社、1995年）によって、中国に伝来した林学知の具体像や林業教育の普及過程の概要が明らかになっている。また、近年では、平野悠一郎が現代中国の林業政策の観点から、著名な林学者にして中華人民共和国の初代林墾部（のち林業部）部長となった梁希に着目し、梁希・韓安・陳嶸ら近代中国における林学専門家層の形成や梁希の林業政策思想および業績を明らかにしている¹。

これらの先行研究をふまえ、教育史、学術史、地域社会史の観点からは、梁希・韓安・陳嶸ら日本および欧米への留学経験者によって形成された中国の林学知に関する次の2点を解明することが課題と考えられる。一つは独自性、すなわち中国の林学知は日本および欧米のそれと比べてどのような特徴を有しているのか、である。もう一つは基層社会との関係、すなわち中国の林学知は基層社会へどのようにして伝わり、基層社会にどのような影響を与えたか、である。これらはいずれも大きな研究課題であるため、多くの研究事例を蓄積する必要があることは言うまでもない。

筆者は上記の課題に取り組むうえの事例として、山地が多く林業がさかんな地域であった中国東南部に着目する。そして、研究機関については、中国東南部における林学研究・教育の一大拠点であった私立金陵大学を、人物については、梁希らと並ぶ近現代中国の著名な林学者の一人である陳嶸（1888-1971）をそれぞれ選定した。陳嶸、字は宗一、浙江省安吉県出身で、東北帝国大学農科大学およびハーバード大学で林学を学ぶ。1925年より金陵大学森林科教授をつとめ、『造林学概要』『造林学各論』など林業関連書籍を多く執筆した²。本科研においては、陳嶸・金陵大陵など近代中国林学界に関する文献史料を

収集するとともに、浙江省建徳の山村で林業学校に関する聞き取り調査を実施した。本論ではこれらに基いて初歩的な考察を行うとともに、今後の研究の方向性を提示したい。

本論は以下の構成をとる。第1章では、先行研究をもとに、清末から北京政府期における林学知の流通経路と学会の形成について整理する。第2章では、南京国民政府期における金陵大学農学院と陳嶸の著述について検討する。第3章では、中華人民共和国建国初期の浙江省建徳の山村における聞き取り調査を手がかりに、林業教育と基層社会との関係について検討する。

1. 清末から北京政府期における林学知の流通経路と学会の形成

(1) 林学知の流通経路

本節では、清末から北京政府期における陳嶸の活動を追うにあたり、まずは同時期における林学知の流通経路、すなわち林業教育機関、教員、書籍の概要を確認する³。

林業教育機関に関しては、高等と中等に分けて述べる。高等林業教育機関については、1904年に「奏定学堂章程」が公布され、京師大学堂内に農科大学が成立し、林学門が設けられた。中華民国成立後、大学の農学院のなかに森林系が設けられたり、林業専門学校のなかに林科が設けられたりした。北京政府時期には、全国で7ヶ所の大学の農学院に森林系が設けられた。なかでも、全国で林科が最も早く設けられた学校として、国立の北京農業専科学校と私立の金陵大学が挙げられる。前者は1914年に林科が増設され、1923年に北京農業大学森林系となった。後者はもともとあった農科に林科が増設され、1915年に農林科となった。

中等林業教育機関については、清末の林科は主として高等農業学堂（18～22才の中学堂卒業者が入学、修学期間3年）および中等農業学堂（12～15才の高等小学堂卒業者が入学、修学期間2～3年）のなかに設置された。辛亥革命前の時点で、高等農業学堂は山西、湖北など5箇所に設けられている。中華民国の成立後、教育部が1913年に公布した「実業学校令」では、甲種農業学校と乙種農業学校の二種類に分けられ、森林学科がおかれた。1922年より、甲種農業学校は高級農業学校（修学期間4年、高級中学と同等）に、乙種農業学校は初級農業学校（修学期間3年、初級中学と同等）に改められた。北京政府時期には中等林業学校は全国で20ヶ所余りあったが、1922年に「大学規程」が公布されて多くの中等林業学校が大学へ昇格したため、校数が減少する。

このように、清末から北京政府期にかけての林業教育機関は、普通教育機関と比べると圧倒的に校数は少ないものの、それでも確実に林学教育の拠点が存在していたことが分かる。ここでは次節に関連することとして、陳嶸が1913年に帰国後、浙江省および江蘇省の中等林業教育機関で教鞭をとること、そして私立金陵大学が中国東南部における高等林業教育の拠点であったことを確認しておきたい。

次に、教員や書籍に関して述べる。清末の林業教育機関では造林学、森林学、土壌学などの課程がおかれたが、当時は外国に派遣されて農業や林業を学ぶ学生がまだ帰国していなかったため、外国とくに日本から教員を招聘して授業が行われた。中華民国の成立後、

教育部が1913年に公布した「大学規程」第12条には、大学農科林学門には、地質及土壤、農学総論、森林管理学、造林学など41門を置くことと定められた。この頃には、陳嶸・梁希ら清末の留学生が続々と帰国し、大学や農業学校で教職をつとめた。

清末の戊戌変法期、外国の書籍が数多く翻訳され、そのなかに林業に関する書籍としては、上海農学会が刊行した農学叢書86巻があり、7年に分けて刊行された。最初に出版された『農学初階』および『農学入門』のなかには、アメリカの『樹木育苗』『論森林刈伐』『論植物与動物』、イギリスの『植物起源』、日本の林学家の奥田貞巳『森林学』（農学叢書巻20）、本多静六『学校造林法』（農学叢書巻30）がある。清末から北京政府期の林業教育機関では多くの場合、教員が上述の書籍や留学先で得た知見をもとに独自のテキストを編纂し、自らの講義で用いていた。

このように、中国は近代林学を導入するにあたって、教員はいわゆるお雇い外国人を招聘しつつ、留学生を日本や欧米に派遣して教員を養成し、書籍は欧米や日本の書籍の翻訳から始まった。これらは林学に限らず、近代学知の導入にあたって一般的なルートであった⁴。陳嶸や多くの林学者もまた、日本や欧米へ留学し、帰国後に中国国内で教鞭をとるなかで、独自の書籍を編纂していくことになる。

（2）学会の形成

清末から北京政府期にかけての陳嶸の経歴は次のとおりである。1906年に日本へ留学し、東京の弘文学院および大学預科で学ぶ。1909年、東北大学農科大学（のちの北海道帝国大学農学部）森林科へ進学する。1913年に卒業して帰国すると、浙江省立甲種農業学校の初代校長に就任する。1915年、江蘇省第一農業学校林科主任をつとめる。翌年、江蘇省教育団公有林の創設に参加し、技務主任を兼任する。1917年、上海で中華農学会を組織して初代会長兼総幹事に就任する。1922年、アメリカのハーバード大学で樹木学を研究し、翌年に理学修士号を取得する。1924年、ドイツのザクソン大学でさらに研究を深め、あわせてヨーロッパの林業を実地調査し、1925年に帰国する。

以上の陳嶸の経歴のうち本論で着目したいのは、陳嶸が日本から帰国後、浙江省および江蘇省で教育に従事し、1917年に上海で中華農学会を組織したことである。さらに言えば、中華農学会と同時期に中華森林会が南京で創設され、陳嶸もこれに関わっていた。これは、上海・南京を中心とする一帯に農学・林学に携わる人材が多く存在していたことを意味する。以下、近代中国における林学知の伝来過程を解明するうえで、中華農学会と中華森林会の中心人物に焦点を当て、彼らの学歴を検討したい。

中華農学会の概要は、王思明の研究によると次のとおりである⁵。江蘇省立第一農業学校および第二農業学校の陳嶸、過探先らが発起し、1917年に上海の江蘇省教育会で成立大会が挙行され、張謇を名誉会長、陳嶸を会長とした。会員は1919年に200人、のちには1932年に2157人、1948年に6251人となる。北京政府期における主要な活動は、年次大会の開催や学術雑誌『中華農学会叢刊』（1918年12月創刊）の刊行などである。

一方、中華森林会は、中国林学会が2008年に出版した『中国林学会史』では、中華農学会とのいわゆる双子の兄弟として、大略次のように記されている⁶。中華森林会は1917年に誕生した。当時、金陵大学林科主任であった凌道揚が中華森林会の発起人である。陳嶸が発起して成立した中華農学会は、成立時の会員はわずか50人余りで、梁希、曾濟寛、呉愷、李寅恭、凌道揚、韓安、傅煥光らはみな中華農学会の会員で、陳嶸、梁希、曾濟寛らは農学会の初期の会長および幹事でもあった。同年、凌道揚は別に中華森林会を組織して林学界自身の組織とすることを提案し、陳嶸、金邦正らの支持を得て、中華森林会の成立を宣言した。中国森林会の当時の会員は少なく、そのうえその多くが中華農学会の会員と金陵大学林科の教員・学生で、活動範囲は南京に限定されていた。1921年、中華森林会の会所は南京から上海の北京路4号へ移っている。

以上のとおり、1917年に成立した中華農学会と中華森林会の中心人物は互いに重なり合っている。彼らは1917年時点でどのような学歴を有していたのであろうか。現時点で経歴が判明する人物の主要な学歴は【表1】を参照されたい。

中華農学会と中華森林会の中心人物の学歴は、梁希・陳嶸・曾濟寛ら日本留学と、韓安・金邦正・過探先・凌道揚・鄒秉文らアメリカ留学に分かれる。以下、各人の留学先について簡単に触れておきたい。

東京帝国大学は、駒場農学校（1878開校）・東京山林学校（1882開校）が東京農林学校に併合（1886年）され、1890年に帝国大学農科大学となった。その後、1897年に東京帝国大学農科大学、1919年に東京帝国大学農学部となる。本田静六や川瀬善太郎らがドイツ林学を日本へ導入し、本学で教鞭をとっている⁷。東北帝国大学農科大学は、札幌農学校（1876-1907）を前身とし、1918年に北海道大学帝国大学となる。1902年より中国からの留学生の受け入れが始まっている⁸。鹿児島高等農林学校は1908年に設立された官立の高等農林学校である。『鹿児島高等農林学校一覽（自大正四年至六年）』の卒業生名簿によると、林学科選科第四回、大正四年七月修了者として、曾濟寛を含め3名の中国人留学生が挙げられている⁹。コーネル大学、イエール大学、ミシガン大学はいずれもアメリカの林学教育が盛んであった。アメリカにおける森林・林業教育は、保護林の設置と林業の始まりとほぼ並行してはじまった。1870年代より森林破壊への対応が本格的に模索され、この1870年代に、コーネル大学、イエール大学、ミシガン大学などの高等教育機関の植物学や園芸学の学科で林業に関わる講義が始まっている。その後、コーネル大学には1910年にニューヨーク州立大学林学科が設置された。また、イエール大学は1900年に林学大学院を設置し、学部卒業者に2年間の専門教育を施し林学修士の学位を授けた¹⁰。

【表1】に挙げた林学者はごく一部であり、今後より詳細な検討が必要であるが、中華農学会の成立について言えば、江蘇省立第一農業学校の教員であった日本留学組の陳嶸と、同校の校長であったアメリカ留学組の過探先らが中心になって発起、成立したという構図になる。先に検討したとおり、中華農学会と中華林学会の成立に関わった人物もまた日本留学組とアメリカ留学組に分かれていた。その後、アメリカ留学経験者の沈鵬飛

【表 1】 林学者の経歴（1917年時点）

姓名	生年	籍貫	主な学歴	職歴など
韓安	1883	安徽巢県	金陵大学卒業 コーネル大学文科卒業 ミシガン大学林学修士	1912年帰国、北京政府農林部叢事、 東三省林務総局局長
梁希	1883	浙江湖州	東京帝国大学農科大学林科卒業	1916年帰国、北京農業専門学校林科 教員
曾濟寛	1883	四川	鹿児島高等農業学校林科卒業	不明
金邦正	1887	安徽黟県	コーネル大学林学修士	1914年帰国、安徽省立第一農業学校 校長
過探先	1887	江蘇無錫	コーネル大学農学修士	1915年帰国、江蘇省立第一農業学校 校長
陳嶸	1888	浙江安吉	東北帝国大学農科大学林科卒業	1913年帰国、浙江省立甲種農業学校 校長、1915年江蘇省立第一農業学校 林科主任
凌道揚	1890	広東宝安	マサチューセッツ大学理学学士 イエール大学林学修士	1915年帰国、1916年『森林学大意』 出版、1917年北京政府農商部技正、 南京金陵大学森林科主任。
鄒秉文	1893	江蘇呉県	コーネル大学学士	1916年帰国、金陵大学農林科教授

出典：徐友春主編『民国人物大辞典』河北人民出版社、1991年、周棉主編『中国留学生大辞典』南京大学出版会、1999年、浙江省人物志編纂委員会編『浙江省人物志』浙江人民出版社、2005年。曾濟寛は「農界人名録」『農業周報』1931年1-3。

（1893年生、広東番禺、オレゴン大学およびイエール大学林学院、1921年帰国）、姚伝法（1893年生、江蘇上海、オハイオ大学およびイエール大学林学院、1921年帰国）、日本留学経験者の陳植（1899年生、江蘇崇明、東京帝国大学農学部林学科、1922年帰国）、安事農（1901年生、安徽無為、北海道帝国大学林科、1927年帰国）らが中国の林学界に参加したことがうかがえよう。

陳嶸は中華農学会成立後、『中華農学会叢刊』創刊号に「中国樹木誌略」を發表し、以後1923年まで連載を続ける一方、1922年にハーバード大学へ留学して樹木学を研究し、翌年に理学修士号を取得する。1924年にドイツのザクソン大学でさらに研究を深めた後、1925年に帰国し、金陵大学森林系教授に就任する。日本および欧米への留学経験を有した陳嶸は、1926年より『中華農学会叢刊』へ継続的に寄稿し、また1930年代に林学関連書籍を相次いで刊行する。果たして、陳嶸が執筆した書籍には、日本・欧米からどのような要素が取り入れられているのであろうか。また、彼が所属する金陵大学と日本および欧米との関わりはどのようなものであろうか。次章で検討したい。

2. 南京国民政府期における金陵大学農学院と陳嶸の著作

本章では、1930年代の金陵大学農学院および陳嶸の著作に焦点を当て、中国林学界と日本・欧米との関わりについて考察し、あわせて今後の研究の展望を示す。

(1) 金陵大学農学院

高等林業教育機関については、1920年代後半から1930年代前半にかけて、中央大学農学院（1927年）・広西大学農学院（1929年）・浙江大学農学院（1929年）・中山大学農学院（1931年）・四川大学農学院（1934年）・安徽大学農学院（1934年）の農学院に森林系が増設された¹¹。

学術団体については、1922年以降活動を停止していた中華森林会にかわって、1928年に中華林学会が成立している¹²。1928年5月18日、姚伝法ら数十人が南京で集会し、姚伝法、韓安、陳嶸、陳植、林剛ら10名を林学会籌備委員に推挙された。6～7月に籌備会を3回開き、姚伝法らを推挙して林学会章程を起草し、南京以外の各地から梁希・凌道揚ら32名を推挙して林学会発起人とした。同年8月4日、金陵大学農林科で成立大会が挙行され、姚伝法、陳嶸が大会主席となった。大会では「中華林学会章程」が通過し、姚伝法、陳嶸、凌道揚、梁希、陳植ら11名が理事に、姚伝法が理事長となった。中華林学会の会所は南京の保泰街12号に置かれている。また、この時期の学術雑誌については、中華農学会が『中華農学会報』を引き続き刊行し、中華林学会が1929年10月に雑誌『林学』を創刊するほか、上記の各大学が学報を刊行した。

このように、南京国民政府の成立後、林学界が活性化するなか、陳嶸は1925年より金陵大学農林科教授として教育・研究につとめ、『中華農学会報』や金陵大学農林新報社が刊行する『農林新報』に文章を発表するとともに、1933年から1935年にかけて林学関連書籍を相次いで出版するのである。以下、金陵大学農学院が刊行した『私立金陵大学農学院概況』の「金陵大学農学院概況」を参照して、陳嶸が所属していた金陵大学の概要を確認する¹³。

金陵大学はアメリカのメソジスト監督教会が1888年に設立した匯文書院を前身とし、1910年に南京で成立した私立大学である。農科は1914年、裴義理（Joseph Bailie, 1860-1935）・芮思婁（Reisner, J. H, 1888-?）によって創設された。翌年に林科が増設されると、1916年に両科が合併して農林科となる。その後、蚕桑系や園芸系が加わるなど規模が拡大し、1930年に大学改組によって金陵大学農学院となった。

農林科主任は裴義理や芮思婁がつとめた後、1925年秋、コーネル大学農学修士の過探先が招聘されて主任となった。1929年春に過探先が死去すると、同年秋にコーネル大学農学修士の謝家聲が主任となり、1930年の農学院成立後も謝家聲が農学院院长をつとめた。1930年、芮思婁の辞職後、院長の職務を分担するため、1934年に章之汝が副院長となった。

1932年から1935年にかけての時期、農学院には農業経済系・農芸系・植物学系・動物学系・森林系・蚕桑系・園芸系・鄉村教育系・農業推广部の8系1部が設けられてい

る。各系には教授・講師・助教・助理・推广員・事務員らスタッフが置かれ、「本院教職員一覧」には、1932年から1933年には合計83名、1934年から1935年には合計132名のスタッフが列挙されている。このなかから、教授および副教授のみを抽出したものが、【表2】である。

教授および副教授の学歴に着目すると、全体としてコーネル大学出身者が多いことが分かる。金陵大学は創設当初よりコーネル大学と関係が深く、農林科・農学院はコーネル大学と協力関係を結んでコーネル大学からの派遣教員を受け入れ、また農林科・農学院卒業者のコーネル大学への留学も盛んであった。この時期、著名な農業経済学者であるト凱すなわちジョン・ロッシング・バック（John Lossing Buck, 1888-1974）¹⁴をはじめ、農業経済系・農芸系・植物系・郷村教育系の教授はコーネル大学をはじめアメリカ人およびアメリカ留学経験者が多数を占めている。

その一方で、森林系・園芸系・蚕桑系には日本留学経験者の姿が見られる。森林系の陳嶸（北海道帝国大学）、園芸系の胡昌熾（東京帝国大学）・陳錫鑫（京都帝国大学）、蚕桑系の單昌祺（東京帝国大学）である。これらの学系では、日本の農学・林学の知識が導入されていると考えられる。

教員陣のほかに、金陵大学農学院と日本との関係がうかがえるものとして、森林系の事業報告では、協力機関として、アメリカのニューヨーク州立林科学院・カリフォルニア大学林学院やドイツのプロイセン林科大学、オーストリアの墾殖大学造林学研究室、オーストラリアのオーストラリア博物院に並んで、日本の北海道帝国大学、台湾中央研究所林業部が挙げられている¹⁵。陳嶸と北海道帝国大学との関係がこの時期にも継続していることが推測できよう。また、蚕桑系のカリキュラムにおいては日本語が必修とされている¹⁶。今後、金陵大学農学院の授業内容や事業について検討を進めるべきであろう。

（2）陳嶸の著作

周知のとおり、陳嶸は日本の北海道帝国大学、アメリカのハーバード大学へ留学し、またヨーロッパでの視察も経験したことによって、日本、アメリカ、ヨーロッパの林学知を吸収して1930年以降に多くの著作を残している。近代中国の知識人による近代学知の受容と伝播においては、単に海外の書籍を逐語訳して紹介するだけでなく、国情に合うように内容を取捨選択したり独自の見解を織り交ぜたりするなどの主体性が見られた¹⁷。これを踏まえると、陳嶸が有していた林学知のあり方を解明するうえで重要なのは、彼の著作のなかに日本、アメリカ、ヨーロッパの林学知がどのように参照されているかを検討することであると言えよう。

本科研においては、陳嶸の著作の収集につとめた。これまで収集した史料は【表3】の網掛け部分を参照されたい。今後、収集をさらに進めるとともに、各著作の内容を精査するのが今後の課題であることは言うまでもないが、以下、初歩的な作業として、1930年代の著書である『造林学各論』『歴代森林史料及民国林政史料』『中国樹木分類学』の3点について、編纂過程と参考文献一覧を分析する。

『造林学各論』の「序」によると、本書の初稿は民国初期に江蘇省第一農業学校で授業した造林学各論の講義であり、金陵大学で教職について以来、中国・西洋の学友の切磋琢磨を得て、標本や図書の参考もまた多く拡大したという。本書の「主要参考書報一覧」は国文、日文、西文の3部に分かれ、国文の部は書籍9点、雑誌・報告36点、日報5点、日文の部は11点、西洋の部は15点が列挙されている。とくに日文の部の文献を挙げると、本多静六『本田造林学』、本多静六等『森林家必携』、金平亮三『台湾有用樹木誌』、竹内叔雄『竹の研究』、坪井伊助『日本竹類図譜』、北海道帝国大学『米材の栞』、神谷辰三郎『顕花植物分類学』、東亜同文会『支那省別誌』、大日本山林会『大日本山林会報』、日本林学会『日本林学雑誌』、北海道林業会『北海道林業会報』、である。

『歴代森林史料及民国林政史料』の「序」によると、史料の収集については、張福延の『中国森林史略』（『中華農学会報』77期）、魯佩璋の『中国森林歴史』（『森林』2巻2号）、および李代芳の『中国森林史略考』（『林学』第1期）ら三氏の努力を継いで少し拡充させただけである、という。本書の「参考書報一覧」は国文の部が書籍91点、雑誌・報告36点、日文の部は帝国森林局『満蒙の森林及林業』の1点、西洋の部も1点である。

『中国樹木分類学』の「編撰経過及内容概説」によると、編纂の経緯は次の通りである。1917年から1923年にかけて『中華農学会報』に連載した「中国樹木誌略」に加え、これまで採集した中国の樹木の標本を1923年に欧米の各研究所へ携えて校正作業を行った。帰国後、公務で西南各省へ赴いた際に採集・調査の機会を得たものをもとに、原稿を整理して教学のために「中国樹木学講義」を編纂した。その後、中華農学会叢書委員会の要請にこたえ、資料を増加させて本書が成立した、という。「本書引用参考書目一覧」は中文・日文・英文・徳文・法文・その他の6部に分かれ、中文161点、日文42点、英文54点、徳文7点、法文7点、その他2点（ラテン語1、オランダ語1）が挙げられている。

以上、3点の書籍には日本語や英語など欧米諸言語による書籍・雑誌がともに引用されていることが確認できる。また、編纂過程については、『造林学各論』では西洋の学友、『中国樹木分類学』では欧米の研究所の成果が挙げられ、日本に対する言及がないが、引用文献の点数を見る限り、欧米の書籍には及ばないながらも、日本の書籍も相当数が参照されていることが分かる。今後、陳嶸の著作の内容と日本・欧米のそれとの比較を進めたい。

陳嶸の著作のほか、彼が文章を多く発表した『中華農学会報』および『農林新報』は、近代中国の林学知に関する研究を進めるうえで重要な史料であるため、本科研において各研究機関の所蔵状況を確認し、陳嶸の文章を収集するとともに、史料の全体像の把握につとめた。陳嶸が設立・運営に大きく関わった中華農学会および『中華農学会報』の分析が重要である¹⁸。中華農学会の活動報告によると、同会と日本農学会は1926年より毎回の年次大会に互いに代表を派遣して学術交流することを取り決め¹⁹、1930年4月には曾濟

【表2】金陵大学農学院 教授・副教授

①1932～1933年

所属	姓名	籍貫	学歴	担当職務
農業経済系	徐澄	江蘇宜興	本校農学士、コーネル大学農学修士	副教授、系主任代理
	張心一	甘肅	コーネル大学農学修士	教授
	萬国鼎	江蘇武進	本校農学士	副教授
	孫文郁	山西寧武	本校農学士、スタンフォード大学修士	副教授
農芸系	張乃鳳	浙江吳興	コーネル大学農学士、ウィスコンシン大学農学修士	副教授
植物系	戴芳瀾	湖北江陵	コーネル大学学士	教授
	俞大紱	浙江山陰	本校農学士、アイオワ州立農科大学農学博士	副教授
森林系	陳嶸	浙江安吉	北海道帝国大学林学士、ハーバード大学科学修士	教授
園芸系	胡昌熾	江蘇蘇州	東京帝国大学農科卒業	副教授、系主任
	陳錫鑫	江西萍鄉	京都帝国大学農学士	副教授
	葉培忠	江蘇江陰	本校林学士	兼任副教授
鄉村教育系	章之汶	安徽來安	本校農学士、コーネル大学農業教育修士	副教授、系主任
蚕桑系	單昌祺	安徽滌県	東京帝国大学農学部農学科卒業	副教授、系主任

②1934～1935年

所属	姓名	籍貫	学歴	担当職務
農業経済系	ト凱	アメリカ	コーネル大学農学博士	教授、系主任
	徐澄	江蘇宜興	本校農学士、コーネル大学農学修士	教授
	萬国鼎	江蘇武進	本校農学士	教授
	孫文郁	山西寧武	本校農学士、スタンフォード大学修士	教授
	沈壽銓	浙江嘉興	本校農学士、コーネル大学農学修士	教授
	邵德馨	江蘇興化	本校農学士	教授
	喬啓明	山西猗氏	本校農学士、コーネル大学農学修士	教授
	南秉方	吉林	シカゴ大学修士	教授
	路易士	アメリカ	博士	教授
	史蒂芬	アメリカ	イリノイ大学理学し、西北大学修士、アメリカ大学経済学博士	教授
	金克教夫人	アメリカ	カリフォルニア大学文学士	教授、英文書記
	施蘭德	イギリス	オックスフォード大学文学士	教授
	羅伯安	ニュージーランド	経済修士	教授
農芸系	王綬	山西沁県	本校農学士、コーネル大学修士	教授、系主任
	張乃鳳	浙江吳興	コーネル大学農学士、ウィスコンシン大学農学修士	教授
	沈宗瀚	浙江餘姚	コーネル大学農学博士、ジョージア大学農学修士	教授
	郝欽銘	山西武郷	本校農学士、コーネル大有農学修士	教授
	林查理	アメリカ	コーネル大学農学修士	教授
植物系	史德蔚	アメリカ	ハーバード大学博士	教授、系主任
	俞大紱	浙江山陰	本校農学士、アイオワ州立農科大学農学博士	教授
	司楽堪	アメリカ	ウィスコンシン大学学士	教授
森林系	陳嶸	浙江安吉	北海道帝国大学林学士、ハーバード大学科学修士	教授、系主任
	朱會芳	江蘇丹陽	プロイセン林科大学林学士	教授
園芸系	胡昌熾	江蘇蘇州	東京帝国大学農科卒業	教授、系主任
	陳錫鑫	江西萍郷	京都帝国大学農学士	教授
	管家驥	浙江上虞	本校農学士、コーネル大学農学博士	教授
鄉村教育系	章之汶	安徽來安	本校農学士、コーネル大学農業教育修士	副院長、系主任
	周明謨	江蘇南通	本校農学士	教授
	趙石萍	遼寧	コーネル大学鄉村教育学修士	教授
蚕桑系	單昌祺	安徽滌県	東京帝国大学農学部農学科卒業	教授、系主任

注：網掛けは、①と②に両方掲載されている人物を示す。

出典：『私立金陵大学農学院概況（自民国二十一年至二十二年）』および『私立金陵大学農学院概況（自民国二十三年至二十四年）』の「本院教職員一覧表」

【表3】陳燦の著作

①著書

書名	出版社	出版年
中国主要樹木造林法	金陵大学農林叢書	1930年
造林学概要	中華農学会	1933年
造林学各論	中華農学会	1933年
歴代森林史略及民国林政史料	金陵大学農学院森林系林業推广部	1934年
学校林經營之实例	金陵大学農学院農林推广部	1935年
中国樹木分類学	中華農学会	1937年
中国森林史料	中国林業出版社	1951年
造林学特論	中国図書發行公司年南京分公司	1952年
中国森林植物地理学	人民教育出版社	1961年
竹の種類及栽培資料	中国林業出版社	1984年

②文章

文章名	掲載誌	巻号	年	月
中国樹木志略（連載） ※	『中華農学会叢刊』	第1集	1918年	12月
雜草對於樹木生長之害	『森林』	第1卷第1号	1921年	3月
推广江蘇金陵道林業的我見	『中華農学会報』	第49期	1926年	1月
世界林業之沿革及其趨勢	『中華農学会叢刊』	第59期	1927年	12月
菩提樹与養蜂	『農林新報』	第131期	1928年	4月
南京森林植物帶之變遷（英文）	『中華農学会叢刊』	第64・65期合刊	1928年	10月
發展首都附近各県林業意見書	『中華農学会報』	第68期	1929年	6月
世界林業問題及其趨勢	『区政導報』	第8期	1930年	
大水災後樹木被害狀況之調査	『農林新報』	第9卷第2期（第266期）	1932年	1月
大水災後樹木被害狀況之調査（続）	『農林新報』	第9卷第3期（第267期）	1932年	1月
中華農学会成立十五周年之経過	『中華農学会報』	第101・102期合刊	1932年	7月
女貞（冬青）応尽本月内播種	『農林新報』	第10卷第1期（第301期）	1933年	1月
日本針葉樹在南京附近造林之失敗	『中華農学会報』	第120期	1934年	1月
森林与造紙事業	『農林新報』	第11卷第25期（第361期）	1934年	9月
樹木開花落葉之時期与移植工作之關係	『中華農学会報』	第129・130期合刊	1934年	11月
列強林業經營之成功与我国林政法案之擬議	『中華農学会報』	第137期	1935年	6月
記日本林業專家之談話	『農林新報』	第12卷第32期	1935年	11月
樹木對於水旱抵抗力之調査	『中華農学会報』	第142・143期合刊	1935年	11月
因植樹節回憶裴義理先生	『農林新報』	第13卷第8期（第416号）	1936年	3月
中国造林事業之商榷	『農林新報』	第13卷第8期（第416号）	1936年	3月
造林上引用外来樹種之問題	『中華農学会報』	第153期	1936年	10月
中華農学会成立二十周年概況	『中華農学会報』	第155期	1936年	12月
世界各国林業行政之組織	『農林新報』	第13卷第35期	1936年	12月
油桐栽培改進方法之討論	『中華農学会報』	第158期	1937年	3月
戰時之救荒植物	『農林新報』	第14卷第24・25合期	1940年	1月
論広植“食糧樹木”為防災備荒之要図	『中華農学会報』	第170期	1940年	8月

※「中国樹木志略（二十八続）」『中華農学会報』第41期、1923年8月まで連載。

注：網掛けは、本科研の研究期間中に収集できたものを示す。

出典：「陳燦著作索引和簡介」（『陳燦紀念集』所収）。

①は上海圖書館所蔵の書籍の奥付に基づき、筆者が一部修正。

寛が代表として日本農学会年次大会に参加している²⁰。また『中華農学会報』誌上には日本人学者の論説の翻訳や日本の林学界に関する記事が多く掲載されている。また、金陵大学農林新報社が1924年に創刊した『農林新報』には金陵大学の教職員・学生による農村での実習報告や、陳嶸や中国の林学者の文章が多く掲載されている²¹。陳嶸や近代中国の林学者が林学知をいかにして中国社会へ普及させようとしたかを明らかにするうえで、今後さらに本史料に対する分析を進める必要がある。

3. 中華人民共和国初期の林業教育と基層社会

本章では、浙江省建徳の山村における聞き取り調査を手がかりに、中華人民共和国初期における林業教育と基層社会との関係について検討する。

まず、1949年から1960年にかけての全国および浙江省における林業教育機関について確認する。中華人民共和国の建国後、初代林墾部（のち林業部）部長に就任した梁希は、1958年に病没するまで精力的に森林行政を推進する。1952年、高等教育機関として北京、南京、東北に林学院が創設され、省・県レベルの森林関係の職業専門学校が設置された²²。なお、後述のとおり、南京林学院は金陵大学と南京大学が合併して成立したものである。

浙江省に目を向けると、中等教育では1953年9月、中等農林学校に対して調整と整頓を行うという通知を林業部・農業部・高等教育部が連名で発し、独立した中等林業学校を設立することを決定する。これにより、省立処州農業学校は麗水林業学校に、衢州農業学校は衢州林業学校に改められた。また、省立金華実験農業職業学校は廃止され、教員および学生は麗水、衢州に分けられた。1954年10月29日、林業部は麗水林業学校を含む全国19ヶ所の中等林業学校を林業部が集中的統一的に指導することを決定。これにより、1955年7月、衢州林業学校は麗水林業学校に併合される。その後、1957年、麗水林業学校の管轄が林業部から浙江省林業庁へと移る。1958年8月、大躍進下において、麗水林業学校は昇格して温州林学院となる。同年、寧波、嘉興、台州に中等林業学校が成立する。1959年、温州林学院が廃止されて麗水林業学校が復活する²³。

高等教育では、1952年に浙江大学農学院が独立して浙江農学院が成立する一方、浙江大学農学院森林系はハルピンの東北林学院に併合された。1958年に天目林学院および温州林学院（麗水林業学校より昇格、上述）が設立されるが、1959年に温州林学院が廃止されて天目林学院に合併、1960年に浙江農学院と天目林学院が合併して浙江農業大学林学系となり、その後も改廃が相次いでいる²⁴。

このように、浙江省で中等・高等の林業教育機関が設けられるなか、建徳県でも1958年に林業初級中学が設立された。この学校の概要は、『建徳県林業志』（1987年発行）によると次のとおりである²⁵。

1958年、「教育は無産階級政治に服務し、教育と生産労働を結合せよ」という〔中共中央宣伝部部長の陸定一が示した一引用者注〕教育方針に基づき、建徳県初

級林業中学が創設された。校地は梅城鎮に設けられ、学生は28人、修学年限は2年である。学生は人民公社より選抜して推薦され、卒業後は公社に戻って林業技術員を担当する。カリキュラムは語文、政治、数学、物理、化学、植物、造林、森林工業、林産化工、土壌、肥料、測量、樹木学などである。学生の費用は主として勤工儉学、半工半読を実行し、工を以て学を養った。

1959年、建徳県農林技術学校が創設され、初級林業中学は該校に合併された。新入生を募集して、林業、農業、牧畜の3専攻を開設し、10クラスのうち林業が5クラス、学生は200人であった。1961年、林業クラスと農林技術学校が分離し、単独で林業学校を運営することとなり、校地は乾潭苗圃（今の乾潭祖家山一原注）へ移転した。同年9月、経費不足により学校は閉鎖し、学生はもとの所属先へ戻って、林業生産において重要な役割を果たした。

この記述に対して、建徳県の山村の出身で、1959年から1960年まで建徳の林業学校で学んだ経験を持つ林登樟（1938年生）氏が語る内容²⁶は、いくつかの部分で異なる点があり、大変興味深い。

あらかじめ、林氏と林業学校の関係を他の史料で確認すると、建徳市档案馆所蔵の檔案のなかには、建徳県初級林業学校の1959年度夏期学生募集に関する報告と正式合格者45名および補欠合格者6名のリストがあり、正式合格者として林氏の名前が上から38番目に記載されている²⁷。また、林氏が自宅で保管していた「肄業証書」すなわち修学証書が現存している。この証書は「建徳林業技術学校」から1960年9月17日付で発行されており、本文には彼が22歳で「本校で1学年を修学し、いま党中央による「大辦農業、大辦糧食」の偉大なスローガンに応えるため、学校の批准を経て農業生産を支援すること、ここに証明する」と記載されている²⁸。

彼の語りは、①学校設立の経緯・教員陣、②志望動機、③カリキュラム・教育内容、④卒業後、に分けることができる²⁹。以下、彼の語りを引用し、『建徳県林業志』の記述と比較したい。

① 学校設立の経緯・教員陣

問：その林業学校の名前は何か？

答：その当時は建徳県初級林業技術学校です。省林業庁が建徳林場に委託して開いたものです。省林業庁が資金を出して、教員の調達や給料、運営費としていました。当時の教員のなかには南京林学院から来た人が数人いて、省林業庁が彼らを呼び寄せたのです。沈叔琴や彼女の夫の周黎清です。

問：他には誰がいましたか？

答：省林業庁から来た楊賢燦、そして建徳県当地の教員で語文教師でしたが、すでに死んでしまった蔡昌慈です。彼は乾潭中学から移ってきました。当時、私は104クラスでした。

② 志望動機

問：あなたはどのようにして林業学校へ行ったのですか？

答：林業学校が学生を募集していることを聞き、自分から梅城へ申し込みに行きました。我々3名で一緒に行きました。

(中略)

問：申し込みの際、あなたはどんな狙いがありましたか？

答：私はもともと小学校卒業で文化水準が不十分だったので、さらに学習したいと思って申し込んだのです。

(中略)

問：申し込みの際、あなたは林業に興味がありましたか？

答：ありました。なぜなら我々の山地はみな林産物だからです。

③ カリキュラム・教育内容

問：当時、一日にどれくらい授業がありましたか？

答：午前3時限、午後2時限。日曜は休みでした。

問：どのような授業がありましたか？

答：記憶しているのは、語文、数学基礎課、造林学、土壌学です。造林学の内容は種まき、植樹、育苗です。当時、我々は学費や食費を払っていません。我々は半工半読で、上級機関が資金を一部出し、我々自身で一部を稼いだのです。

問：あなたはお金を稼ぐ仕事をいつやったのですか？

答：ひとまとまりの時間です。ある時は林場の工作计划に従って造林をしました。これは半工のなかに含まれ、給料をもらいました。

(中略)

問：当時、あなたは教科書を何冊持っていましたか？

答：授業ごとにみな教科書がありました。数学は一般的な初級中学の教科書です。造林学は省林業庁の版本で、自ら編纂したものです。

問：当時の教科書をまだ持っていますか？

答：見当たりません。

(中略)

問：あなたが学んだ造林学の内容は、以前に自分でやっていた農作業の知識と同じものでしたか？

答：違うものでした。学校は整地、種まき、若苗、黄泥で覆うこと、苗の状況を見ること、施肥などを教えました。我々の山の苗は苗木ではなく、みな挿し木でした。老樹の2尺余りの新芽を切って挿し木をするのです。挿し木のとき

には1尺5寸で、この新芽は生長が早いのです。我々は一般的に土の中に7寸埋め、8寸を土の上に残します。

問：挿し木はあなたがた農家のやり方ですか？学校のやり方ではないのですか？

答：学校のやり方ではなく、我々農家の従来やり方です。学校ではみな苗圃を用了しました。

④ 卒業後

問：あなたはこの学校でどれくらいの期間学びましたか？

答：2年足らずです。私は59年に入学し、60年11月に下放されました。

問：下放とは農村に戻るという意味ですか？

答：そうです。

問：あなたが農村に戻った当時、学校は解散したのですか？

答：解散していません。16歳以下の学生は残り、1年ほど継続してから解散しました。1960年に学校は於合から乾潭へ移転しました。乾潭では自分たちで学校の校舎を造り、梨の木や桃の木を植えました。基本的に勉強はしませんでした。校舎を半分ほど造ったところで私は農村へ戻りました。

(中略)

問：あなたが林業学校で習得した知識は、農村に戻った後で役に立ちましたか？

答：いいえ、従来やり方をなおも用いました。なぜなら、農村の種子はみな生産隊が手配したものからです。

問：それならば、農村に戻った後、生産隊で林業技術の教員になったことはありますか？

答：いいえ、私は生産隊が手配したことをやりました。私は挿し木で茶を植えるのをやったことがありますが、これは生産隊が私にやるようにと手配したのです。

①で興味深いのは、林業学校の教員の一部が南京林学院から来ていることである。南京林学院は、金陵大学農学院森林系と南京大学農学院森林系が合併して1952年に成立したものである。そもそも、南京林学院の学生が建徳に来た理由は、中央政府の方針によるところが大きい。1958年8月、中共中央宣伝部部長陸定一が各学校における勤工儉学、半工半読を提唱し、この方針に基づいて10月に林業部が全国高等林業院校座談会を開催した。この結果、高等林業教育機関の教員および学生全員を農村へ下放して1年から2年の間鍛錬させることが決定され、高等林業教育機関の教員および学生は農村や林場へ下放され、生産労働に参加して教室での授業に替えることとなったのである³⁰。このような経緯により、南京林学院の学知が建徳の林業学校、そして農村へ伝わる契機が生じたと考えられよう。

②について、『建徳県林業志』の記述では、学生は人民公社が選抜して推薦するとあったが、林氏によると自ら応募したという。応募方法は厳密ではなかった可能性がある。また、教育の受け手が林業学校へ応募する動機が、林業自体に関する興味とともに、学歴を高めることを狙っているさまがうかがえる。中国社会では学歴を高めることが社会的上昇に大きくつながるため、林氏ら農民にとって林業学校の学生募集は貴重な機会であったと言えよう。

③からは、林業学校では造林学や土壌学など「近代的」な内容を自編のテキストで学んでいたこと、そしてその内容は苗圃に象徴的なように、農村の従来 of 農法とは異なる「近代的」なものであったことがうかがえる。教材について言えば、建国後、中国共産党および中国政府はソ連に学ぶことをスローガンとし、1955年から北京、南京、東北の各林学院において、ソ連の専門家を招聘して講義させた。また、ソ連の教材を大量に導入したことから、林業部や高等林業教育機関は林業や森林工学に関するソ連の教材を組織的に翻訳したという³¹。南京林学院から来た林学教員が建徳でどのような内容の授業を行ったかは現時点では判然としないが、学知の伝播と普及を考えるうえで、彼らの知識が中華民国期以来の日本および欧米に由来するものか、ソ連に由来するものか、それとも複数が混合されたものかという問題は今後検討すべきと言えよう。

④について、『浙江省林業志』の記述では、林業学校で学んだ学生は農村に戻って林業技術員をつとめるよう期待されていたこと、また学生は農村での林業生産において重要な役割を果たしたことが記されていた。これに対して、林氏の語りは、林業学校で習得した知識が農村で実際に活かされることはなかったことが示唆されており、極めて興味深い。

以上、1950年代の建徳の林業学校について、地方志の記述と卒業者の語りとの差異を比較した。ある地域に林業学校が設立されること、その学校で林学知が伝達されること、その林学知が基層社会に普及・定着すること、これらはすべて区別して個々に検討する必要があるが、教育史研究においてはある教育がその受け手や社会に与えた影響について考察することが極めて難しい。この点において、聞き取り調査はある教育が人や地域に与えた影響を考察できる有効な手段であると言える。今後は林業学校の卒業生らに対する聞き取り調査を継続し、文献資料の内容を比較することによって、林業教育が基層社会に与えた影響をより明らかにすることができよう。

むすびにかえて

本論では、本科研において収集した陳嶸・金陵大陵など近代中国林学界に関する史料、および浙江省建徳の山村で林業学校に関する聞き取り調査に基いて初歩的な考察を行うとともに、今後の研究の方向性を提示した。本論により、中国の林学知の独自性、および中国の林学知と基層社会との関係を解明するうえでは、中国東南部および陳嶸、金陵大学が重要な事例であることを確認できた。今後の研究の方向性については、繰り返しになるが、金陵大学における林学関連のカリキュラムや実践、陳嶸の著作の内容と日本・欧米のそれとの比較、『中華農学会報』『農林新報』の分析が必要と考えられる。また、近代中

国の林学知を理解するうえでは、陳嶸や近代中国の林学者が日本・欧米の留学先で何を学んだかを把握する必要がある。今後、日本国内および海外の各機関において資料収集を継続し、分析を進めたい。

-
- 1 平野悠一郎「現代中国の森林資源管理における専門家層の成立背景 —梁希（初代林業部部长）の思想と業績を中心に—」『アジア研究』60-2、2014年。
 - 2 《浙江省林業志》編纂委員会編『浙江省林業志』中華書局、2001年、第十篇第六章 人物。
 - 3 以下、林業部教育司主編『中国林業教育史』中国林業出版社、1988年、第一章第二節一、および第一章第二節二を参照。
 - 4 王建軍『中国近代教科書発展研究』広東教育出版社、1996年。
 - 5 以下、中華農学会については、王思明「中華農学会与中国近代農業」『中国農史』2007年4期を参照。
 - 6 以下、中国林学会編『中国林学会史』上海交通大学出版社、2008年、第一章第二節を参照。
 - 7 森川潤「ドイツ林学の受容過程—農科大学成立の条件について—」『作陽学園紀要』19-2、1986年。
 - 8 許晨「北海道帝国大学における中国人留学生の留学生活」『北海道大学大学文書館年報』6、2011年。
 - 9 鹿児島高等農林学校『鹿児島高等農林学校一覧（自大正四年至大正六年）』鹿児島高等農林学校、1916年、卒業生。
 - 10 伊藤太一「アメリカにおける森林・林業教育の展開」『森林科学』10、1994年。
 - 11 前掲『中国林業教育史』第一章第二節二。なお、中華人民共和国建国直前の時点で、農学院のなかに森林系が設けられた大学は19ヶ所である。
 - 12 以下、前掲『中国林学会史』第二章第一節を参照。
 - 13 私立金陵大学農学院院長室編『私立金陵大学農学院概況 民国二十一年至二十二年』私立金陵大学農学院、1933年、および私立金陵大学農学院院長室編『私立金陵大学農学院概況 民国二十三年至二十四年』私立金陵大学農学院、1934年。
 - 14 バックと金陵大学との関係については、久馬一剛「中国土壌学の近代化に寄与した二人のアメリカ人 —John Lossing Buck と Walter Clay Lowdermilk—」『肥料科学』34、2012年を参照。
 - 15 前掲『私立金陵大学農学院概況 民国二十三年至二十四年』本院概況、五（4）森林系。
 - 16 前掲『私立金陵大学農学院概況 民国二十三年至二十四年』課程。なお、森林系のカリキュラムでは、第三学年以上の必修科目（計39単位）として、気象学（普通気象学・2単位）、造林学（造林学原論・2単位、造林学本論・3単位、造林学本論・3単位）、森林植物学（中国樹木分類学・3単位、中国樹木分類学・3単位）、森林工学（測量学・3単位）、森林経理学（測樹学・2単位、林価算法及森林較理学・2単位、森林経理・2単位）、森林利用学（木材之工芸性質・2単位、森林利用・2単位）、林政学（森林政策及森林法規・3単位）、森林学（造林設計実習・1単位、畢業論文・2単位）が置かれている。

-
- 17 著名な例として、清末に政治学や経済学など多様な近代学知を中国に伝えた梁啓超が挙げられる。狭間直樹『梁啓超一東アジア文明史の転換』岩波書店、2014年。
- 18 『中華農学会報』は東京大学東洋文化研究所が第69期（1929年4月）から第163期（1937年8月）を所蔵し、筆者がすべて実見した。このほか、日本国内では森林総合研究所が第31、35、41～47、61～76期を、北海道大学附属図書館が第35～62、64～77期を所蔵するという情報を得ており、今後の調査が必要である。
- 19 陳方濟「本会一年間概況」『中華農学会報』第70期、1929年10月。
- 20 曾濟寛・彭家元「出席日本農学会年会記事」『中華農学会報』第77期、1930年6月。また、このときの講演が日本の『林学会雑誌』に掲載されている。曾濟寛「広東省に於ける木材の需要供給（昭和五年四月十二日日本農学会大会演講）」『林学会雑誌』第13巻第3号、1931年3月。
- 21 『農林新報』は京都大学人文科学研究所が第38～192期（欠号あり）の複写版を、南京大学図書館が第215～783期（欠号あり）をそれぞれ所蔵し、本科研代表者の佐藤仁史氏とともに実見した。
- 22 前掲平野論文。
- 23 前掲『浙江省林業志』第八篇第一章第二節。
- 24 前掲『浙江省林業志』第八篇第一章第一節。
- 25 姜銀森主編、建徳県林業局編輯『建徳県林業志』内部発行、1987年、第十一章 林業教育。
- 26 林登樟氏に対しては、2013年8月15、17、19日に彼の自宅で聞き取りを行った。
- 27 建徳档案館、127-1-14（建徳林場、本場關於林業中学的的通知・意見総結報告及上級批示）、建徳県初級林業学校關於1958年度第一学期招生・録取狀況報告。
- 28 肄業証書は現在も林氏の自宅に保管されている。
- 29 林登樟氏口述記録（2013年8月19日採訪、未定稿）。
- 30 前掲『中国林業教育史』第一章第三節二（一）。
- 31 前掲『中国林業教育史』第一章第三節二（一）。

山林資源の民間における共同管理と国家による掌握・開発の試み

—近代福建省の事例から

山本真

はじめに

日本史や日本民俗学では農村や農民に対してだけでなく、山村や漁村、そこで暮らす人々に対して多角的な研究が行われ、奥ゆきの深い民衆像・社会像が提示されてきた。一方、中国研究ではこれまで農村や農業経済に対する蓄積の多さに比較して、山村・漁村については、興味深い業績がすでに存在するとはいえず¹、全体としては未だ手薄な段階に止まってきたように思われる。とりわけ都市における近代化や政治史、エリートへの関心が強い近現代史の領域にあっては、山村・漁村も含めた社会史研究は脆弱であると言わざるを得ないだろう。こうした状況に鑑みて本稿では、中華民国時期の民間社会での山林の利用慣行、そして政府による山林資源の掌握などの山林と社会、山林と国家との関係及び近代におけるその変容について、福建省を事例にとり、検討を加えることにしたい。

山地が連なる福建省には「八山一水一分田」との言葉がある²。これは山地が8割を占め、河川と田畑がそれぞれ一割を占める同省の地勢を示す成句である。事実、1943年の国民政府主計処による統計では、福建省の森林は全省面積の36%を占めると見積もられ³、人民共和国期の1988年の調査では、全省の森林被覆率は43%とされている⁴。また「靠山喫山」（山の近くに住む者は山で暮らしを立てる）という言葉もあるように、山国である福建では林業、手工業（竹紙）、などに従事し生計を立てる人々が多数存在した。それゆえ中国における林業や山村を研究するに際して、同省は格好の事例となると考える。

ところで、森林の利用慣行については、近年コモンズ（共的世界）研究の視角から「共同資源管理」に関心が寄せられている⁵。例えば、民俗学者の菅豊は、従来「バラバラの沙」と形容されてきた中国社会において「人々が行ってきた共同資源管理はいかなる特徴を有していたのであろうか」との問いを発している⁶。また現代中国の森林政策を研究する平野悠一郎は、社会主義公有制の確立、改革・開放後の個人的経営化といった共産党政権による森林政策は、基層社会における多様な森林環境、および人間—森林関係の様態と結びついてきたと述べている⁷。これはつまり、現代中国の森林政策を理解するためには基層社会レベルでの森林環境や人間—森林関係に対する理解が不可欠との指摘だろう。平野自身の研究は人民共和国時期を対象としているが、森林環境や人間—森林関係が歴史的に形成される以上、この問題をより掘り下げるためには、歴史的な考察が今後の課題となるだろう。こうした関心に立ち、本稿では主に中華民国時期の林業の盛衰、民間における山林資源の利用と管理を検討する。

なお、近代以降の国家によると国土資源の掌握というテーマについては、国民党政府による土地行政の領域において既に一定の成果がみられる⁸。しかし山林に対する国家の掌握や管理についての政策理念や実践に関しては、その実態がほとんど研究されてこなかったというのが現実であろう⁹。そこで、中華民国国民政府による山林資源に対する掌握と開発政

策を明らかにすることも本稿の課題としたい。

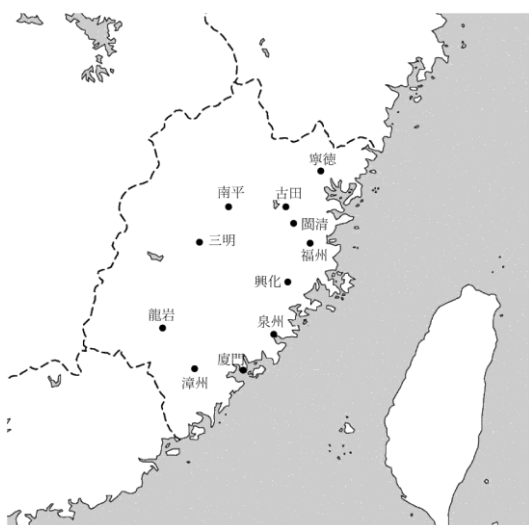


図 1、福建省地図

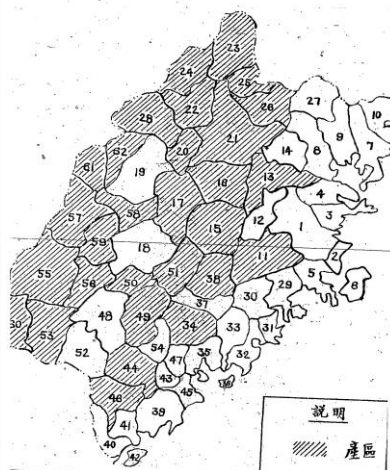


図 2、福建木材産区（「福建特産之分布」『福建統計月刊』1巻3期、1935年10月）。

I 近代福建における林業の盛衰について

(1) 木材の種類、産地、造林と護林の状況

福建木材の主要な品種は馬尾松（台湾アカマツ）、杉木（広葉杉：コウヨウザン、以下、本稿で登場する杉はコウヨウザンを指す）、樟樹（クスノキ）であった。福建西北から福州に注ぐ閩江流域の天然林が馬尾松の主要な産地であり、炭薪材として広く利用された。建築材として最も重要とされたのは杉木であり、林業の専門戸により人工造林が行われ、15年から20年の周期で伐採された。また樟樹は、馬尾松や杉ほどの産量はなかったが、樟腦の原料として経済価値が高かった。ただしその生産は天然木に依拠していた¹⁰。東亜同文会編『支那省別全誌』（1920年）は、杉と松とを主要木材と見なし、次のように述べている。

福建産木材は大部分杉材にして松之に次ぐ。福建杉は建築用として我臺灣の鑿大杉と共に世界有数良材にして白蟻を防ぐの特効を有す。是を以て杉材は建築用として需要多きのみならず茶箱の製造に用ゐらる。反之松材は多く建寧、泰寧両縣下に産すと雖も、薪炭用を主とするが故に、福建木材は全く杉を以て其の代表とするものなり¹¹。



図 3、閩江と沿岸部の山林（閩清県と古田県付近）筆者撮影 2010年8月筆者撮影。



図4、外邦図による福建省古田県水口镇付近の閩江と地勢（東北大学理学部自然史標本館所蔵）。図3の画像とほぼ同地点。

また樟樹については、『北部福建事情』（1921年）における次の記載が興味深い。

明治35年頃我が三五公司は福建各地の樟脳を輸出せしが漸次樟樹の減少するに及びて遂に其業を閉づるに至れり、樟樹は閩江上流尤溪、沙溪等に多かりしが運搬に便なる地方は伐採され盡されて漸次に交通開けざる地方に現存するのみ（中略）會々現存せる樟樹も官有あり公有あり迷信による、墓樹、社祠の大樹の伐採を忌むあり…¹²

つまり、明治末年には伐採によってすでに樟樹が減少していた一方で、迷信により、墓樹、社祠の大樹の伐採は禁忌されていたことが上記資料から読み取れる。これに関して民国『建甌県志』は、「樟木に数百年或いは千年の樹有り。凡そ村頭水尾の類は皆之有り」として、村頭・水尾には樟樹が保存されていたことを記録している¹³。村頭・水尾は風水に関わる概念であるが、これについては次節で再度触れることにしたい。



図 5、上杭県蛟洋郷蛟洋村の水口に茂る樟樹（風水樹）、2006 年 7 月筆者撮影。

さて、福建省における木材の生産地は、武夷山麓から南平を経て省都福州へと注ぐ閩江の流域、福建西部を通り広東東部汕頭へと注ぐ汀江の流域、福建南西部龍岩から漳州へと注ぐ九龍江の流域であった（図 2 を参照されたい）。1935 年の統計ではそれぞれ総生産の 72%、16%、6%を占めていた¹⁴。

林業が盛んであった閩江流域、特にその中心地であった南平県での杉木について、『支那省別全誌』は次のように叙述している。

現時盛に造林業行はれ、峽陽を中心とし、其附近嶮峻ならざる山地は手入れの行届きたること福建省内稀に見る所なり。蓋し此の地方は地味肥沃にして福州杉の生育に適すること其原因なりと雖、亦販売市場たる福州に近く、而も運搬上の便あること亦其一因と見るべし。然れ共造林面積は廣大なるものなく、大なるものと雖、五六町歩より十町歩を出づるもの稀なり。林地の左右は山麓より山頂に到る迄幅二丈餘の空地を残し、之を火城と称し防火線とし、併せて境界線に利用す。此空地は何れも僅かの雑草を見るのみにして、灌木だに生じたる所なし¹⁵。

ここから南平県の杉木は人工造林によるものであり、その保護・管理に相当人手が入っていたことが読み取れる。その一方で、天然林に対する管理は行き届かず、深刻な乱伐が発生していたことは複数の調査記録が強調するところである。例えば、台湾総督府系の企業であった三五公司による調査（1908 年）は以下のように記している。

福建省ノ木材ハ重要産物ノ一ニ算セラレシモ漸次伐採セラレテ減少シ将来ハ一時産出中絶スルノ恐ナキニ非ス支那人ノ常習トシテ目前ノ利ヲ図ルヲ冀フノミニシテ殖林ヲ為シテ填補ニ備フルヲ敢テセス¹⁶

また、『支那省別全誌』も伐採が進む一方で植林が怠られている状態を報告していた。

福建の林産は茶と共に重要物産中の首位に居るものなりと雖も、多年植林を怠り、徒に伐木を重ねたる結果、近来は啻に其の産額を減じたるのみならず、現存樹林も小木多きに至れり¹⁷。

しかし、植林が進展しないのは、単に福建民衆が長期的展望に欠けていたなどの単純な理由ではなく、民国時期の福建では匪賊や民軍¹⁸の横行による社会の混乱も深く関係していたことには留意しなければならない¹⁹。この問題は以下に引用する東亜同文書院第 20 期生の調査報告からも読み取ることができる。

蓋シ杉材ノ如キハソノ植林ナクシテハ自然的ニ繁成スルコトハ能ハズ。其他ノモノニアリテハ土匪ノ横行ニテ植林計画ヲ妨害セラレ乱伐ニ放任スルノミニテ更ラニ植林ヲ為スコトナク現在ニテハ極メテ交通不便ナル山地ヲ除クノ他ハ殆ンド秃山ナリト²⁰。

さらに、1913 年に福建南西部の汀江流域を旅した東亜同文書院 11 期生は、「福建の山は概ね秃山だ。ところどころ松や杉の茂って居るのを見ると、万更植林の不可能でもあるまいと思うが、大抵は「地磽确」²¹の三字で形容ができる」と、その荒廃した景観を描写していた²²。ただし、その前年に福建西部の帰化県から沙県への陸路を進んだ東亜同文書院 10 期生は、「大小の木は鬱蒼として無限の寂寞を誘い昼尚暗い」と相当異なる印象を書き残している²³。では、これら二つの記録における矛盾を我々はどのように理解すべきだろうか。この問題については、1940 年に福建省政府秘書処から発行された『福建之木材』にある「徒に河川付近の林地の木材を伐採したために河川沿岸の林地は「満目童目」となった」との記載

に注目したい²⁴。つまり重い木材を市場へ搬出するためには河川を利用し、筏として放流する必要があった。このことを踏まえれば、搬出が容易な大河の両岸においては樹木の伐採が過度に進んだ一方で、伐採が不便な内陸では樹木が保存され易い傾向にあったと考えるべきだろう。さらに閩江沿江部での乱伐が水害の原因となったことも看過できない。この問題は王振忠の『近600年来自然災害与福州社会』においても指摘されているが²⁵、ここでは日本の外務省の報告書にある乱伐と水害に関する記載を引用しておきたい。

往昔ヨリ濫伐打チ續キ殖林行ハレサルヲ以テ山ハ閩江ノ上流江西省ニ接シタル地及北部浙江ニ接シタル地方ニ鬱蒼タルヲ見ルニ過キス他ハ盡ク秃山若クハ僅カニ灌木山ニシテ水利ノ敢テ考慮セラルナク夏期閩江ノ水氾濫縷々ナル亦故ナキニアラスト云フヘシ²⁶。

これに加えて、農民による野焼きも秃山を生む重大な原因となっていた。例えば、山林付近の田地は春になり放置しておけば草に覆われてしまうため、田植えの時期になると野焼きが行われた。しかし、強風による飛び火のために山林火災が発生し、周辺の樹木を焼き尽くして秃山だけが残る惨状が発生していた。そのほか山林の傍らを開墾して芋を栽培するために樹木や草を焼き払ったり、薪拾いのために山に入った子供が面白半分にマッチで火を付けたりすることもあったという²⁷。民衆によるこれらの不用意な行為が山林破壊を深刻化させていたようである。

(2) 木材業の盛衰

先に紹介した『福建之木材』は、福建木材業の沿革を四期に分けて説明している。すなわち①萌芽時期＝清初から同治中期(1650－1870)、②進展時期＝同治末年から民国7年(1871－1918)、③極盛時期＝民国8年から18年(1919－1929)である²⁸。戴一峰の研究によれば清初には徽州商人が木材の運輸・販売に携わっていたが徐々に江浙商人、地元福建商人、潮州商人にとって代わられるようになっていった。そして乾隆年間には木材貿易は既に福建の三大貿易項目の一つとなっていたという²⁹。

アヘン戦争後に福州と廈門が開港されると、上海などへの供給地として福建省の木材業は一層の発展をみせることになった³⁰。その後、太平天国の乱により華中、江南地区が混乱に陥ったことに加えて、木材の産地である福建西北部にも太平天国軍が侵入したため一時的に福建木材業は停滞した³¹。しかし、光緒年間以降に中国における工業が発展していくとともに、木材需要も急激に伸長することになったのである³²。清末の上海における福建商人の活躍や福建木材の需要については東亜同文会発行の『支那経済全書』に次の記述を見いだせる。

福建省ノ建寧府、汀州府等閩江上流地方ノ商人ヲ建汀幫ト呼フ共ニ皆福建ノ商人ニシテ其来販スル主ナル貨物ハ材木ナリ福建省ハ材木ノ産出ヲ以清国ニテ最モ有名ナル地方ニシテ上海及附近ニテ需要スル木材ハ米國及日本ヨリ外國建築向キ若クハ鐵道用トシテ輸入スルモノノ外支那人ノ建築用トシテハ皆其供給ヲ福建ニ仰ケリ³³。

その後、第一次世界大戦が勃発すると、外国からの木材輸入が減少しただけでなく、ドイツやイギリスなどの商社も福建から撤退した。代わって日本の商社や福建省内外の中国人木材商人が活躍するなかで、福建木材の生産と販売は隆盛を極めることになった³⁴。長江下流域を中心として工業化が進み「民族資本の黄金時代」と呼ばれた1920代³⁵が福建木材業

においても最も栄えた時期であり、海関統計によると 1919 年に 500 万元余りであった販売額が、1920 年には 1,000 万元、1923 年には 2,300 万元まで増加した。その後、販売額はやや減少したものの 1928 年、29 年には 2,200 万元余りにまで回復している³⁶。つまり清末以降 1920 年代末までの時期に福建林業、木材業は繁栄を謳歌したと理解できるのである。

しかし 1931 年以降、福建の林業は衰退期に入り、木材の対外移・輸出は 1930 年に 1,300 万元、1931 年に 360 万元、1934 年には 200 万元余りにまで急激に落ち込み、木材商も相次いで倒産していった³⁷。この衰退について、台湾総督府熱帯産業調査会編『南支那の資源と経済』は以下の理由を指摘している。すなわち樹木を乱伐する一方で植林を行わなかったこと、匪賊が跋扈したこと、交通不便に加えて通過税などの不当な課税が絶えなかったこと、経済上の不況が発生したこと、閩北木材最大の顧客である東三省での融資関係に頓挫が発生したことなどである。特に閩北林業の中心地であった南平の木材産額の衰退については「一落万丈」との比喩が用いられた³⁸。これをもう少し解説すれば、福建木材の衰退には、福建西北部や西部などの木材産地が共産党の革命根拠地となり地域社会が国民党軍との戦闘に巻き込まれたこと、民軍などの国民党系軍事勢力が木材業に重税を課したこと、1920 年代の木材業の繁栄時期に乱伐が進み資源が枯渇したこと、恐慌が中国での木材需要に悪影響を与えたこと、そして満洲事変・満洲国の建国などにより東北での商売に困難が発生したこと³⁹、などの複合的要因が背景となっていたと指摘できるだろう。

さらに 1937 年に日中戦争が勃発すると、従来福建産木材の需要地であった中国各地が日本軍に占領された。加えて、福州などの省内の木材販売の中継地が日本軍に占領されたり、沿岸部が海上封鎖を受けたりしたため、木材の運輸・販売に極めて大きな影響がでることになった。また、木材は軍用に提供され得るため中国政府も戦略物資の輸出統制を実施した⁴⁰。こうして福建省木材の国内・国外への販路は縮小していったのである。

II 清代から民国時期、福建民間社会における山林資源の共同管理

日本では、民衆生活の維持に重要な意味をもつ入会山林の管理が、村落共同体によって担われた⁴¹。では、山地が面積の多くを占める福建省では、山林の所有・管理はいかに行われたのだろうか。また、それに福建の宗族や村落はどのように関係していたのだろうか⁴²。本節ではこの問題を考察したい。

(1) 新編地方志に見られる山林の所有・管理と宗族・村落

現代福建の林業について概括的に論じる『福建省志 林業志』は、共産党政権による 1951 年の山林改革時に調査した、民国時期の所有権状況についての統計(表 1)を掲載している。これによれば、山林改革前は全山林の 11.93%が「祭山」⁴³であり、8.65%が「公山」、18.82%が「郷有」であったという⁴⁴。「祭山」とは宗族や村落により管理され、祖先や廟の祭祀のために収益を利用した山林、「公山」とは宗族や村落が所有・管理し宗族の族人や村人が利用した山林と理解できるだろう。では山林全体面積の 18.82%を占めた「郷有」とは何を指すのであろうか。これは国民党政府時期に地方行政単位とされた「郷(鎮)」所有の山林ではないかと推測されるが、残念ながら『福建省志林業志』には「郷有」の具体的な説明は付されていない。その実態の考察については本論第Ⅲ節と第Ⅳ節での考察に譲ることにして、ここでは、「祭山」、「公山」、「郷有」とを併せると統計に表れた山林全体の約 40%が非

私有であったことだけを確認しておきたい（ただしこの統計の正確さについては疑問が残るが、その理由も後述する）。

表 1、福建省主要林区、山林改革前後における山林所有権の変遷

階層	山林改革前				山林改革后			
	人数	面積(畝)	%	人平均	人数	面積(畝)	%	人平均
合計	1,276,405	12,463,859.69	100.00	9.76	3,579,463	14,299,832.03	100	4.00
地主	72,546	1,374,370.8	11.03	18.94	56,051	239,534.8	1.68	4.27
半地主	12,288	238,209.3	1.91	19.39	11,937	83,606.5	0.58	7.00
富農	35,288	389,633.7	3.13	11.04	32,106	332,417.6	2.32	10.35
中農	461,586	2,393,312.6	19.20	5.18	641,172	3,525,792.4	24.66	5.50
貧農	626,859	2,629,831.7	21.10	4.20	2,750,925	5,849,680.1	40.91	2.21
雇農	31,464	102,553.5	0.82	3.26	40,439	464,766.6	3.25	11.49
其他	36,374	229,111	1.84	6.30	46,833	286,968	2.01	6.13
祭山		1,487,311.8	11.93					
公山		1,077,819.2	8.65					
其他の山		157,130.2	1.26					
国有		38,758.89	0.31			1,161,027.03	8.12	
郷有		2,345,817	18.82			2,126,658.9	14.87	
村有						229,380.1	1.60	

典拠：『福建省志 林業志』132頁。

注：ただし上表は永安、南平、建陽、龍岩等4つの専区の統計数字から整理したものである（そのうち南平県と順昌県は欠けている）。

以下では、共産党による1951年の改革以前における山林の所有状況について、福建各地の新編地方志に基づきその実態を確認したい。

福建南西部の龍岩では、「姓氏」・「家庭」が管理する「祠堂山」（宗族の祠堂の山）や「後龍山」（龍脈を保護する山）、また「郷村」が管理する「風景山」や「水口山」（風水や水口を保護する山）、そして廟宇・寺院の山が存在した。宗族の所有と郷や村の公有とを合わせると山林総面積の85%を占めたとする⁴⁵。つまり宗族や村落の共有山林が圧倒的に多く、個人所有の山林は少数に止まっていたのである。なお、上田信は「後龍」とは集落の背後にあって気を供給してくれる尾根のことであり、「水口」とはよどんだ気を運び出してくれる河川の出口のことと説明しているが、いずれも伝統的な風水思想に基づいている⁴⁶。風水の観念は福建では民間に浸透しており、人々は良い風水地を占有するために械闘に及ぶこともたびたびあった⁴⁷。

また連城県でも「族有林」、村の「風景林」、祖先の「風水林」、柴山などがあり、これらは村或いは宗族の所有であった⁴⁸。長汀県では、人民共和国内成立前には「集団所有林」は主要には風水林を指したという。風水林は多くは自然村の「村口」或いは村や房屋の後背部に

存在した自然防風・防砂林であったという。たとえ土壌の流出が深刻な地区でも、この部分の林や樹木はよく保存されていた。そして共産党政権による山林改革を経ても、風水林は防護林（土壌の流出や崩壊を防ぐための保安林）或いは「風景林」として保全された⁴⁹。なお、「風景林」という言葉であるが『福建省志 林業志』には、古より名山古刹、村や道の傍らそして「風口水尾」などの場所に「風景林」を栽培・経営する習慣があり、あるいは原有の天然林を「風景林」として保護していたとする記載がある。それゆえこの「風景林」はすなわち風水林そのものか、部分的にそれを継承する林と理解できるだろう⁵⁰。

また沙県では、各地の村頭、水尾（川が村に流れ込む地点や流れ出る地点）の風水林については地方紳士が表面に出て禁約を立てたとされる。宗族林であれば均しく厳格な保護措置がとられ、伐採が禁止された⁵¹。尤溪县での調査（1952年）によれば、山林権改革前では全県の山林の55%が宗族の公有山林である一方で、「郷村」の公共山林も約30%を占めたという⁵²。その他、福建北部の福安県では、歴史上民間には「禁山・護林」の習慣があり、禁山碑や喫禁山飯、分禁山餅などの禁を犯した場合の罰則規定があった。通常村庄の後山を封禁（利用を禁止する）範囲とし、水源地を保全したり土壌の流出を防止したという⁵³。

以上各地の新編地方志からは人民共和国成立以前において、山林の一部は宗族や村などにより共有されており、その利用は風水思想により規制されていたことを確認できた。

（2）聞き取りに現れた宗族、村落による山林の所有と管理

引き続き、筆者による現地での聞き取り（一部は委託調査）によって得られた民国時期の宗族、村落による山林の所有・管理の状況を紹介する。

①宗族共有林での管理

◎山林には管理者がいた。杉の木は祖宗のものだ。家長が管理していた。村規を立て、もし違反する者がいれば、罰として餅を配らせた（謝 JZ 氏、龍岩市新羅区適中鎮 LT 村、2010年6月13日、地元出身の大学院生陳 GM 氏への委託調査）。

上記口述では宗族の所有と村落の所有が混同されている。同族村であるからだろうか。

◎薪について大部分は茅を燃やした。茅を刈るには自分の宗族の山か或いは誰も管理していない山に行く。別の姓の山に行くのはだめだ。昔の人には掘るべき法度があった（頼 ZX 氏、1916年生まれ、龍岩市新羅区適中鎮 YD 村、2009年12月25日）。

燃料としては薪以上に茅が重要であった。筆者による現地調査でも田の畔や荒地などに大量に自生しており、容易に手に入ることを確認した。特に枯れた茅は利用しやすい手頃な資源であったと考えられる。

◎上方山（地名）には宗族により管理された山があった。例えば“維東”だ。とても厳格に管理され、もし規則に違反すれば、罰として餅を配らせた。

（謝 YS 氏、1938年生、龍岩市新羅区適中鎮 ZX 村、2010年6月10日、地元出身の大学院生陳 GM 氏への委託調査。ただし筆者自身も現地を度々訪問した）。

民国前期の1915年、龍岩の適中では林姓宗族が上方山の西部において崇林実業公司を、翌年謝、頼、陳の三姓宗族が合資で維東公司を創設し、林場（杉）を経営した。両公司は上方山の西部で「封山育林」を行い、専門人員を配置し巡回・管理したという⁵⁴。

◎郷規民約について、石碑に刻み民衆に示した成文のものはここには無かった。しかし不文の規定があった。例えば濫りに筍を掘らない、祖先の墳墓の山の樹木を伐採しないなどだ。解放前はもし違反すれば、宗族の大伯（房族長に類似する）が処罰した。

（王 TJ 氏（女）、1933 年生まれ、上杭県旧県郷 HX 村、2010 年 8 月 6 日、地元出身の大学院生陳 GM 氏への委託調査、なお筆者自身も当地を複数回訪問している）。

◎村落の共有林或いは無主林について

◎山地の所有権は祠堂有、私人有、自然村有（公山）があり、各村の山には境界があり、それが認識されていた（陳 XG 氏、80 歳（訪問時の数え年）、元小学校教師、上杭県旧県郷 HD 村、2006 年 8 月 1 日）。

◎「解放前は村ごとに境界（界限）があった。山林や土地は境界が明らか（分明）だった。

（羅 GX 氏、80 歳（訪問時の数え年）元教師、龍岩市新羅区雁石鎮 YK 村、2006 年 8 月 5 日訪問）。

◎山の所有権について：謝 MX 氏の住んでいた老屋の背後の山は、名前がなかった。「大衆山」すなわち、みな（大家）の所有する山だ。平日みなが柴刈りをするのには「上方山」（地名）の背後に行った。とても遠いところだ。（謝 MX 氏、元教師、85 歳（訪問時数え年）、龍岩市新羅区適中鎮老人活動中心、2009 年 12 月 21 日）。

この時謝 MX 氏は「上方山」として遠方の山を指さした。先に宗族が経営した林場がこの山の西部にあったことを紹介したが、柴刈り場はこの「上方山」のさらに背後の遠方であったようである。

◎当時、開墾によって多くの土地を切り開いた。周囲の山中一帯でサツマイモを植えた。荒地の産権には比較的こだわらなかった（林 JH 氏、1934 年生、元鎮党委秘書、龍岩市新羅区適中鎮 RH 村、2009 年 12 月 24 日）。

◎公用の山は自由に柴刈りができた。私人が植えた山は、みなよく分かっていた。もしあなたが山を開いて墾植するなら、植えたものはあなたのものだ。公山ではあなたが勤労し管理した物はあなたの物になる（林 RM 氏、1953 年生まれ、農民、龍岩市新羅区適中鎮 SY 村、2009 年 12 月 24 日）。

訪問地の SY 村は山深い地理的環境に存在した。山地では山は至る所にあり、また山は深く、周辺の村人は比較的自由に利用できたことが窺える。

◎共産党時代の山林について：風水林は崇文書院の背後の山林は破壊されなかった。水口の山林も一般的には破壊されなかった。一般的に言って（大躍進の）大煉鋼鉄の時、交通が比較的便利なところでは、つまりトラクターが入れるところでは、伐採されつくしてしまった。道が通じていないところでは保存された。水尾、水口的の樹木は、赤い布をかけている樹木は、一般的にみな伐採には行かなかった。

(謝 YS 氏、1938 年生、龍岩市新羅区適中鎮 ZX 村、2010 年 6 月 10 日、地元出身の大学院生 陳 GM 氏への委託調査。ただし筆者も当地は複数回訪問している)。

◎風水林では伐採、開墾、サツマイモの植え付けをしてはならなかった。風水林は解放前から現在まで村中の公有用地だ(陳 XQ 氏、1936 年生まれ、退職教師、古田県大橋鎮 HY 村人、ただし古田県城での訪問、2010 年 8 月 14 日)。

筆者による聞き取りからも宗族に所有・管理される山林、村の公山とされる山林の存在が確認できた。宗族や村の風水に関わる山林、そして経済価値のある山林の管理は厳しかった一方、地域の人々が柴刈りに利用する公用の山(誰も管理していない山)があったことや各村の山に境界があったことなども語られており、興味深い。さらに風水に関わる樹木は大躍進時の伐採からも保護されたことも判明した。以下では宗族や村落による山林の共同管理や誰も管理していない山(無主山)について、文献資料から考察を加えたい。

(3) 族譜や社会調査から見る山林資源の所有と管理

清代の福建省における山林資源の伝統的な管理形態について注目すべきは、地域社会(郷村)による利用規制が郷村の共有地のみならず宗族や私人所有の山林にも及ぶ場合があったことである。例えば、龍岩県適中の龍埔林姓の族譜『長林世譜』によれば、乾隆 45 年(1780 年)には、適中社の各姓の代表が「東山禁約」を立てた。そもそも、適中社の東側の山地は地域を灌漑する水源であったが、そのころ山木が伐採され、若芽が出てきても牛羊に食い荒らされ、さらに無知な輩が土地を掘り起こした。遂に地は裂け、山は崩れ、一度雨に遭えば泥流が田間に横溢し、作物に被害が及んだ。このため、地域の廟である東山庵で開墾を禁止する「約」が立てられた。東山にある所有権者のある土地については朽ち果てた樹木を販売する場合は代金の四割を所有者に、六割を衆人に与えるとした⁵⁵。この事例から、地域全体の公共の秩序に関わる問題に対しては、地域という生活の「場」を共有する宗族が連合して禁約を立て、それは個別宗族や個人の土地の使用をも規制したことが判明する。



図 8、龍岩市新羅区適中鎮林姓宗族の『長林世譜』、2009 年 3 月筆者撮影
同じように「郷規民約」が郷村の共有地の利用を規定するだけでなく、宗族や個人所有の山林・墳墓の樹木の利用をも規制した事例を、「将楽県南口郷蛟湖村村規民約」光緒 18 年

(1892年)から紹介したい。

衆の周知するように後龍と水尾は郷村全体を保護するものであり、山を焼いたり伐採したりすることは許されない。また各家の山の蔭木は各家が必ず用いる資産であり、物にはそれぞれ主があるのだから、(他人が)濫りに伐採することは許されない(中略)禁約を立てた後は各家の山は各家で管理しても、焼いてはならない。全ての松や杉はたとえ小さいものでも濫りに伐採してはならない(中略)後龍と水尾そして各家の墳墓の蔭木に至ってはなおさら伐採してはならない。もしこのようなことがあった場合は、公罰として銭八千文を出させ衆の用に充当させる(中略)これより後、柴木・雑樹はどこで刈ったり拾ったりしてもよいが、松や杉などの木を伐採する者は自家の山で行わなければならない。自家の山をもっていない者はただ雑樹・柴木を伐採したり拾ったりすることは許されるが、乱伐してはならない⁵⁶。

この史料からは、各家の山を各家で管理しても、焼いてはならない。松や杉はたとえ小さいものでも濫りに伐採できない、風水や墳墓に関わる蔭木を伐採してはならないことが、個別宗族の範囲を超えて生活の場を共にする地域の人々の間で取り決められたことが理解できる。さらに経済価値が低い柴木・雑樹は村人の誰が利用してもよい資源であったことも読み取れる。

また宗族の影響力が強かった福建では、たとえ個人が権利をもつ山林であっても、その売買に際しては宗族内の同房・近親者の先買権が尊重された。福建師範大学歴史系編『明清福建経済契約文書選輯』に掲載された「山林典売文書」には、売却に際してまず同族内の同房の近親に尋ねたが、買い手がつかなかったためにその範囲の外の人に売却したことが明記されている。例えば、光緒十一年南平県葉邦梓売山契には「先向親房伯叔兄弟人等、各不承受」とあり、光緒二十九年南平県潘開成売林契にも「先向親房人等各不成就」の記載がある⁵⁷。これら条項は祖先が蓄積した財産を可能な限り外部に流失させないことを目的とした規制であったと理解できよう。

続いて、民国時代の山林の所有と管理制度について考察する。ここでは福建の南西部とは武夷山を挟んで至近距離に位置する江西省南部の尋烏県における山林制度を分析した毛沢東の「尋烏調査」を紹介する。

山地はその生産力が低いために通常は一姓の山(一姓は一村に居住している)は全て公堂により管理されている。周囲五～六里以内では公禁公採制度を用いている。所謂公禁は売買を禁止するだけでなく絶対的に自由伐採を禁止している。死者が出て樹木を切り倒して墓地を作るときに伐採が許可されるだけである。また陂を作り圳を開く、橋梁を建設するなどの公共の利益に供する場合は伐採が許される。(中略)以上は家族主義の山林共産制度であるが、地方主義の山林共産制度もある。多くは村を以って単位としており村内各姓により禁長を公挙している。私的伐採を厳禁し、定期的に関山することなどは家族共産の山林と同じである。(中略)尋烏の山地は以下のように分配されている。一姓の公山は百分の十五、一郷の公山は百分の五、私山は百分の十、人家を離れること遠く、開発が及ばず荒廃するに任せている所謂荒山が百分の七十を占めている⁵⁸。

上記調査では、一姓の「公山」が15%、一郷の「公山」が5%、私山が10%、家を離れること遠く開発が及ばず荒廃するに任せている所謂荒山が70%を占めていたと記されており、注目に値する。つまり当地の山林の所有と管理について、宗族所有の山は公堂(宗族の理事

会)により管理された。また郷村所有の公山もあり、その管理の主体は、「村内各姓により公挙された禁長」であった。地域化した(生活の「場」を共有する)宗族連合が山林資源の共同管理を行っていたのである。

では、宗族の「公山」や郷村の「公山」と荒山との関係はいかなるものであったのか。これを理解する糸口を与えてくれるのが福建北部の屏南県に関する以下の資料である。

各姓は自ら一つの部落を成している。全郷で一姓の者、二三姓で一大郷を組成する者、また一姓が数郷に分布する者がある。ただし郷ごとに均しく旧習に沿う郷界がある(中略)本県の荒山・荒地で未だ私人の経営や買契のないものは国有地と見なすべきである。ただし本県では郷界の旧習があるので、某一村地を某姓が先に開拓・居住し、子孫が増えて郷となると、郷界の周囲以内の荒地はその族の私有と見なされる。凡そ異姓や異郷がその界内で葬墓・造林しようとするれば、山祖(山の賃貸料金)を納めなくてはならない。ここに於いて国有の荒地は郷有或いは族有に転入されるのである⁵⁹。

この資料では、当該地域には「郷界」という郷村の境界が存在したことが明記されている。これは満鉄の慣行調査により村と村との境界が明確でないとされた華北(河北・山東)の平野部の農村とは大きく異なる福建山村の特徴ではなかろうか⁶⁰。それゆえ「郷界」内の荒山・荒地(無主地)は、徐々にそこに居住する特定宗族の所有や郷の共同管理地となったと解釈できるだろう。

次に、地域住民による山林の所有・共同管理についての事例をもう一件挙げておきたい。福建省の西北部武夷山の南麓に位置する建陽県の印山村において、1950年代初頭に実施された調査は次のように報告している。

印山村は7つの自然村を含む行政村である。林地面積は全村の81%を占めていた。林地面積のうち49%は天然林であり、経済林は51%であった。全村の共有林の面積は林地面積の31%を占めた。共有林のうち最大は無主林であり74%を占め、無主林の8割は天然林であり、全村人の薪取りに供する以外は特に経済的価値はなかった。族林は共有林の17%を占め、杉林などの経済的価値をもつ樹木が多かった。廟林は共有林の6%を占め、全村人の共有であった。私人は勝手に伐採できず、橋や道路の補修、水閘や廟宇の補修の際にのみ伐採できた。風水林は共有林の2.6%を占め、私人や公家どちらも伐採はできなかった。なぜなら風水を損なうからである⁶¹。

以上の資料からは、村内の無主林は全村人の共有林であり、村人のための薪取りに供されるものの管理がほとんど行われない土地であったこと、これに対して廟林や風水林はやはり村人の共有であるが、管理の度合いがより厳密で規制が多い土地であったこと、が理解できるだろう。郷の境界内の無主地を外村人が利用できたか否かについては、残念ながら同調査には記載がない。ただ、山地では薪取りに供する程度の価値しかない天然林(荒山、雑木林)は至る所に存在したから、他の郷村にまでわざわざ遠征してまで伐採する必要はあまりなく、本郷人にしても外部から柴刈りに来る者に敏感にならずともよかったのではなかろうか。なお先に示した屏南県での事例のように異姓や異郷の人がその界内で葬墓・造林する場合は山祖(山の賃貸料金)を納めたというのは葬墓や造林に利用できる立地は条件が良く希少であったため排他的に管理する必然性があったのだろう。

ところで、「尋鳥調査」や建陽県の印山村での調査で登場した広大な無主の荒山の存在を国家はどのように認識していたのだろうか。これについて、福建省政府秘書から出版された

『福建之木材』は次のように述べている。福建省の官有の荒山は約5,000万市畝(約333万ヘクタール)余りもある。過去において、これらの官山の収益は多くは付近の郷村に属していた。歴代政府は「山澤の利は民とこれを共にする」⁶²の放任政策をとって、一向に干渉しなかつた。そのために官山はついに郷民の共有物となつてしまひ、いくたびもの破壊を経て極度に荒廢した悲惨な状況に陥つた、との認識を示していた⁶³。つまり、無主の荒山は元來官山であつたと理解されていたのである。なお法制史家の仁井田陞は、後世の記録には「官山」または「官地」ということが見えているが、それは官有地というように所有意識が明確化されているよりは、個別的所有または共同体の所有に属さない土地の総称といった方がよい場合が少なくないようであり、いわゆる官山官地の利用も無償で一般に開放されていたものが少なくなかつた、と指摘している⁶⁴。また清朝の森林政策を研究した相原佳之相原義之は、官が直接管理せず、かつ誰の民業ともなつていないため、誰に対しても利用が認められている山を官山と説明している⁶⁵。

「官山」についての情報は、福建西北部の将樂県安仁郷を事例とした朱冬亮の研究でも登場する。これによれば1950年代以前、安仁郷の山には「官山」と「私家山」の区別があつたという。当地の墓葬習俗では、「官山」については誰でも良好な風水の場所を探して墳墓を作ることができたのに対して、「私家山」では宗族、宗族の分支である房や股の権利が明確に存在した。ここからも「官山」が誰でも利用できる事実上無主の山林であつたことが確認できるだろう⁶⁶。

さらに、いわゆる「コモンズの悲劇」⁶⁷とみなせる状況が描写されている資料もある。すなわち「本省の官山は皆多数の人の共同使用、収益の地となっている」、「斧をもつて濫りに薪を伐採して山を禿山としている。草を刈り取つて飼料や肥料の用として、草を刈るのに便利なところは相争つて採取している。放牧に便利なところはかれこれ争つて放牧している。しかし、それらに不便なところは棄てて顧みない」⁶⁸。つまり村落付近の官山(無主山)は周辺農民の共同利用地となつていたが、管理が行われなかつたために荒れ放題に陥りやすかつたのである。



図6、福建省閩清県の盆地と集落、周囲の山林 2010年8月、筆者撮影。

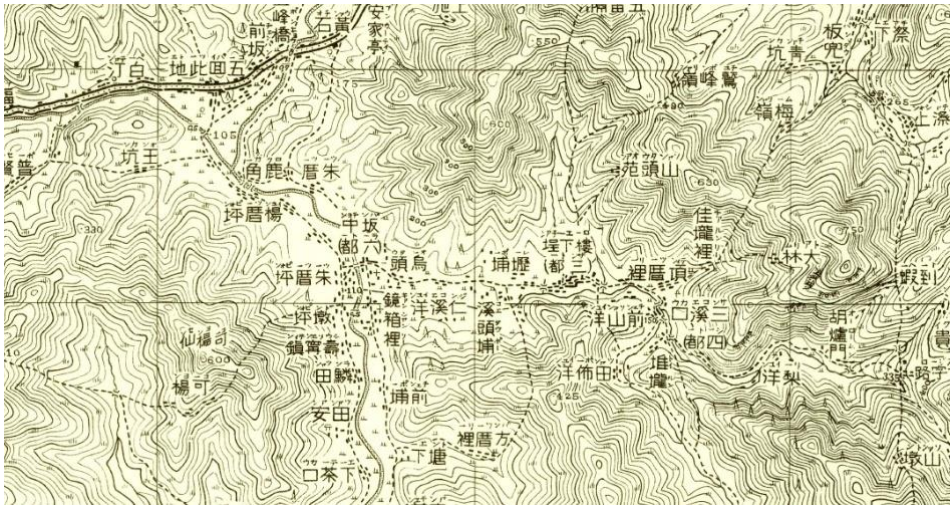


図7、外邦図による福建省閩清県六都の盆地と山林の地勢（東北大学理学部自然史標本室所蔵）。図6と同地点。

Ⅲ 国民党政府による山林の掌握と開発政策

清朝の森林政策を研究した相原佳之は、清代でも木材の枯渇や森林の過剰利用は認識され、その対処法としての知識も蓄積されていた。しかしその森林政策は、総じて官の森林への関わり方が比較的弱いものであった、との見通しを示している⁶⁹。しかし、近代以降は国家による天然林や荒山などの国土資源への関心が次第に高まっていった。本節では主に国民党政府による山林資源の掌握に関する方策と実践を検証したい。

（1）孫文と蒋介石による大方針

中華民国の成立後、北京政府には農商部林務局が設けられ、林務が専管された。1915年には植樹節を規定し、大總統令により各省に植樹を執行させようとしたが、軍閥割拠の状況では実行性をもたなかった⁷⁰。そうしたなか国民党の指導者孫文は1924年に発行された『三民主義』の「民生主義」において林政に関する次の見解を提起していた。

いまの人民は木材を伐採しすぎ、しかも伐採したあと植林をしないので、森林がひじょうに少なくなっている。多くの山々が禿山であるから、ひとたび大雨にあえば山には雨水を吸収したり阻止したりする森林がないために、山の水はすぐさま河にながれこんでしまう。河の水はたちまちあふれて水害になる。それゆえ、水害防止には植林がひじょうに関係をもっているのである。植林してたくさんの森林をつくることは、とりもなおさず水害を防ぐ根本治療の方法である。森林さえあれば、大雨にあっても樹木の枝や葉が空中の水分を吸収するし、樹木の根や株が地下の水分を吸収する。もし鬱蒼たる森林があれば、大量の水を吸収できる。そこで、大水はみんな森林のなかに蓄積され、そのあとゆっくりと河に流れこむ。すぐさま直接に河に流れこまないから災害にはならない。したがって、水害防止の根本治療による方法は、やはり森林である。飯を食う問題について、水害を防ぐためには、まず森林を造らなければならぬ。森林ができれば全国の水禍は避けられる。

われわれは話が全国的植林の問題になってきた。それは帰するところ、やはり国家

の経営に頼らなければならぬものである。国家が経営しなければ、この問題は容易に成功しない⁷¹。

もちろん森林の伐採が土壌の浸食と洪水の原因となることは清代から認識されていた⁷²。しかし民国時期に入ると、欧米留学の著名な林学者たちが当時多発していた各省での水災が森林破壊に起因するものであると強調して警鐘を鳴らすようになっていたのである⁷³。孫文は「精力的な読書によって自然・社会・人文の各領域を跨ぐ広義の科学的知識を吸収し、それらを自説の具体的裏付けとして動員した」評価される人物である⁷⁴。『三民主義』における上記の森林と水害の議論もこうした近代以降の科学的知識を背景としていたのではなからうか。また植林に国家が介入する必要性を強調した点も注目に値するだろう。

その国家による調査・開発という点では、「建国方略」の第5計画でも孫文は次のように論じている。

地質探検はまさに地図測量と並行して行い費用を省くべきである。測量が全て完成すれば各省の荒廃した未耕地に或いは農作物を植えることができる、或いは放牧することができる、或いは造林することができる、或いは鉱山を開発することができるなど、その価値を計算することが可能となり、使用する者に貸し出すことに備え、最もふさわしい生産を行うことになる⁷⁵。

孫文は「民生主義」の平均地権を実施するために全国の土地測量の実施を目指しており、この政策は国民党政府の土地行政官僚により部分的に実施に移されていった⁷⁶。そして山林資源の調査と開発の方針についても決して空文ではなく、国民党内において検討され、徐々に実施されていくことになるのである。

さらに1924年の「国民政府建国大綱」第11条では、土地の年収入、地価の増益、公地の生産、山林川澤の息、鉱産水力の利は皆地方政府の所有とする。それにより地方人民の事業及び育幼、養老、貧困救済、災害の救済、病気の治療、種々の公共の需要を経営することに用いると論じられた⁷⁷。これは訓政から憲政へ移行するに当たり地方自治の実現が前提となる以上、自治を安定させるためには財源の確保が必要であるとの認識に基づいた提言であったと解釈できよう。

孫文の森林に関するこのような方策は、まずは植樹の奨励として実現された。南京国民政府が成立すると毎年3月12日に植樹の式典を行い、その週を造林運動宣伝週とすることが定められたのである。ただし造林後の樹木の保養には十分な注意が向けられなかったため、植樹された樹木が生長し得た比率は20%程度に過ぎないと見積もられた。それでも、植樹が実施に移されたことは事実であり⁷⁸、その福建での実践は第IV節で紹介したい。

以上で紹介してきた孫文による森林政策や開発の基本方針は、後継者となった蒋介石にも継承された。1936年1月に出された「中華民國25年元旦全国軍民同胞に告げるの書—国民自救救国の要道」では⁷⁹、救国のための経済建設の必要性を論じた後に、土地は一切の生産の根源であるため、公有・私有の荒地をできるだけ開墾しなければならない、そのためには国民を義務労働に動員し、交通の開発、水利の修理、森林の育成、荒地の開墾に従事させなければならない、との見解が示された。なお、この義務労働への動員はその後の植林事業推進実践の重要な手段となる。

さらに1936年3月12日に出席した植樹節において、蒋介石は次の講演を行った。4億の国民1人1人が1年に1株の樹木を植え、1株が1元の価値と計算すれば、10年後には国

家の財富は40億元増加する。さらに植林には各種の副産物があり、水害、旱魃を防ぎ、土壌を改良することができ、気候も改善できる。それゆえ我々が広大な土地を利用し、国家の富力を増加するためには植樹に努力しなければならない。また、造林には美しい風景を増し、生活を芸術化し、間接的には社会の文明を促進し、空気を新鮮にし、寒暖を適度にすることで、一般人民の健康を保障する効果がある、とも述べていた⁸⁰。そしてこの時期蒋介石が注力していた新生活運動にも造林運動が取り入れられたことは重要であろう⁸¹。加えて、戦時の国家経営の方針を示す「抗戦建国綱領」が採決された後の1939年1月に作成された「全国の士紳及教育界同胞に告げるの書」では、積極的に地方経済を開発し、荒地を開墾し、造林と牧畜を行い、農村での生産を強化し、原料の生産を増加させることが訴えられた⁸²。以上に見てきた孫文や蒋介石による経済開発の大方針は、その後戦時総動員の掛け声の下で国民党の専門官僚たちにより具体的な政策として実践されていくことになるのである⁸³。

(2) 国民党政府による山林掌握の具体的方針

近年の研究では、国土や資源を掌握するために国民党政府が地籍整理・地稅徵收制度改革に精力的に取り組んだことが明らかにされた⁸⁴。具体的には、1930年に「土地法」が公布され、土地測量と所有權登記を根幹とする新たな土地制度の導入により、伝統的な重層的權利關係（たとえば一田兩主制など）を整理し、土地に関する權利を一元化することが目指された。これは所謂「近代的土地所有制度」の中国への導入の試みであったと評価できよう⁸⁵。こうした厳密な地籍制度は1930年代前半に南京国民政府の影響力の強かった江蘇・浙江・江西などの一部地区で実施に移された。しかし日中戦争時期には広大な農村部での地稅の把握が優先されたため、自己申告と抽出調査を組み合わせる「治標策」（代替的臨時措置）として「土地陳報」が推進された。ただし県や鎮市街地では、引き続き厳密な測量が維持された結果、国民党政府は、1934年から1948年にかけて全国で約15万4300km²の土地を測量した。これは中国全土からすればごく限られた面積に過ぎないが、それでも日本の国土面積の約40%、山東省の面積に近似する広さが測量されたことは看過できない。また測量が完成した地区では、引き続き土地所有權登記が実施された。厳密な審査を経た所有權登記は戦時中では、県城や郷鎮市街区に限定されたが、それでも四川省では、全省144県の内、大半の県城で登記が実施されたのである⁸⁶。日中戦争により、新たな土地管理（地籍）制度の導入は遅滞したものの、少なくとも国民政府が、その推進を真剣に模索していたことは認めなければならないだろう。

引き続き、国民党政府による山林資源の掌握方針を概観していきたい。これに関連する専門法規としては1932年に「森林法」が制定された。その総則は、森林を所有權の帰属により国有林、公有林及び私有林に分類している。さらに1945年2月に修正公布された「改訂森林法」には、「森林は国有をもって原則とする」の一文が付け加えられた。つまり個人所有權あるいは県、郷鎮、保などの公有地（これについては後述する）と認められた土地以外は原則として国有地とする方針が示されたのである。

これに対して、私人や地方政府の森林に対する權利も登記を経て認められた。1943年7月に農林部により公布された行政命令である「公私有林登記規則」は、凡そ国有林区範囲以外の公・私有林は均しく県市林区管理機関に登記しなければならない、未だ林区管理機関を設置していない県市では県市政府に対して登記すると規定された。さらに、林区管理機関が

前条の登記申請書と証明文献を受けとった場合、人員を派遣して申請が真実であるか否かを調査し、これを社会に公告して1ヵ月を経て異議がでなければ、農林部に報告し、権利を核定し、登記証明書を発給することが定められた⁸⁷。加えて1948年の農林部令では、林業管理機関は森林用地編定の時、地方政府機関とともに荒地・荒山の所有権と他項目権理、その位置及び荒廢の状況を調査しなければならない、さらに所有権者や所有権以外の他項目権理を保有する人に通知し、共に測量に赴き面積、地形及び定着物などの事項を記録しなければならないと、より詳細な規定が示された⁸⁸。こうして林地の調査と登記を通じて森林資源の掌握を進める政府の方針が具体的に制度化されていったのである。

そして、1948年に農林部が修正公布した「森林法施行細則」の第二章では、国有林とは国家所有の森林を指して言う。国家領域内の一切の無主の天然森林は均しくこれに属す。公有林は省有林、縣市有林、郷鎮有林、或いは公法人所有の森林を指して言う、とした⁸⁹。1932年の「森林法」と異なる特徴は、無主の天然森林が国有と明記されたことと、公有林に縣市有林、郷鎮有林の区分が設けられたことである。これは1930年代後半から開始され、特に日中戦争時期に注力された郷鎮や保による荒山造林事業の対象地が正式に郷鎮の共有地として認定されたことと関係があるだろう（その実態は次節で述べる）。

このように国民党政府は孫文や蔣介石が示した大方針に沿って国土資源を掌握することを志向し、登記制度などを具体的に整備していった。もちろん理念が現実に先行したことは否めないが、まったく実態が伴わないものでもなかったように思われる。特に、県有、郷鎮有、保有などの多様な公有形態が生まれたのは、戦時の資源の有効な活用、民衆を動員しての公共資源の創設すなわち「郷鎮造産」政策に関係していると思われるため、以下ではこれを考察する。

(3) 戦時の山林開発と「郷鎮造産」事業

日中戦争時期、国民党政府は所謂「新県制」を実施し、県級以下郷（鎮）級、保級までの行政単位を上から設定し、地方行政制度を整備していった。そこでは県、郷（鎮）を独自の財源を保有する法人と認定し、それを下支えする自主財源を保有することを承認した⁹⁰。さらに県や郷（鎮）が管轄する地区における資源を積極的に開発することが奨励されたのである。これに関連して、戦時期に農林官僚や地政官僚が発表した資源開発に関する論文を以下に紹介する。

近代の大量消耗戦争に従事し、消耗が多くして補給も多ければ戦争を支える期間も必ず長い。そしてその期間が長ければ勝利の望がある。国際戦争では交戦国の双方のうち人力、物資を絶え間なく相手より多く補給できる方が勝算を得ることができるのである⁹¹

戦時動員に就いて言えば、長期の困難で苦しい抗戦のなかにあつて、一つ一つの人力や地力を無駄にすることはできず、十分に開発運用し、国家の力量を増強しなければならない。公共造産ではまさに一切の労力、地力と物力を運用し、無用を化して有用とする。これは国防、生産上に積極的意義を具有するだけでなく、戦時措置の上でも動員の作用を富ませるものである⁹²。

こうした戦時の経済開発の一環として、1942年3月に行政院の院令「郷鎮造産辦法」が發布された。そのうち本稿のテーマに関係する条項は、公有の山地を開墾し、茶・桐・桑・竹及びその他各種の林木を栽植する、郷鎮造産は郷鎮を以て単位とするが、保に分けてこれを経営することもできる、などであった⁹³。ただし福建省ではこの中央政府の命令に先んじて、郷（鎮）・保の公有林の形成が目指されていたが⁹⁴、その実態については後述したい。

この郷鎮造産事業は、住民の労働力を無償で徴用する「国民工役」により推進された。その法規である「国民工役法」（1937年7月公布）は、18歳から45歳の男子は毎年3日間の工役に服する義務があると定めている⁹⁵。さらに農林部は1942年10月、蔣介石の手令により各省の主席に命令して郷（鎮）林場を設立し、民衆に植樹させることを指示した⁹⁶。その実施に関わる行政命令である1943年の「強制造林辦法」は以下のように規定された。

地方の造林・保林を推行するために郷（鎮）を以て単位とし、一郷（鎮）ごとに単独経営することを原則とする。郷（鎮）林場は少なくとも苗圃3市畝を有し、毎年苗木を少なくとも2万株育て本場、本郷の居民に供給し植樹の用とする。各郷（鎮）林場は毎年少なくとも5,000株以上を造林し、居民は戸ごとに毎年少なくとも3株以上植林する⁹⁷。

さらに、1943年の「農林部林業施政方針及五年造林実施綱要」では、土地の合理利用を推進し、造林に適した原野を迅速に森林に回復する、林産の自給自足に努めて、民生の安寧を保障する、天然の森林を整理・保護するとともに開発利用する。林業の生産を増進し、抗戦建国の需要に供給する、各省が森林法の規定に基づき森林用地を編定し、並びに公私有林登記辦法に照らして登記を行う、ことなどが目指された⁹⁸。

では、山林の掌握は実際にはどの程度進捗したのだろうか、次節では福建省での具体的事例に基づき、その実態を明らかにしていきたい。

IV 福建省政府による山林の掌握と開発の試み

(1) 福建省における地籍整理方針のなかでの林地の取扱

孫文の『三民主義』の「民生主義」で提示された土地整理の方針に基づき、国民党政府は全国の農地においては土地陳報（所有者の自己申告に基づく簡易地籍整理）を実施し、これに応じて福建省でも土地調査が開始された。

1936年の「福建省地政局土地陳報編查暫行実施規程」によれば、地籍調査は地権の性質により公有と私有の二類に分け、地目は菓（果樹園）、田（水田）、農（畑）、宅、蕩（池）、汶（墓地）、林、雑の8種とした。そして林地については次の各項の一つを満たすものは私有地として調査し得ると規定した。それは、①正当な証明書類がある土地、②確定判決により私有とする土地、③現在錢糧（税）を納入しているか、或いはかつて錢糧を納入していた土地、④荒地を私人が開墾し、年数を経て事実が明確な土地。所有権人がいない場合、また占有者や管理者がいない場合は暫時無主地或いは公有の荒地とする。さらに無収益の山地は暫時調査と登記を延期できると規定した⁹⁹。一般の耕地でも土地所有者による申請がない場合、土地は郷（鎮）の公産とする¹⁰⁰ことが原則とされたが、林地もそれに準じたようである。

ここで重要なことは、所有権が証明されない土地は公有地とすることが原則とされた一方で、無収益の山地については暫時調査と登記を延期し得るとされ、権利の調査・確定を棚上げしたことである。これは現実問題として、無収益で課税対象にならない雑木林の山地までを急いで調査する余力が政府にはなく、またその緊急性も認められなかったためであろう。ただし荒山であっても所有権登記を希望する者がいた場合には、民法に則って対応された。福建省政府は1937年の指令で、「人民が地理或いは習慣・祖伝を理由として、荒山・荒地の所有権登記を申請した場合、民法第769条、第770条の条件を具備しているか否かを見て登記を認めるか否かを決定する」としている¹⁰¹。なお民法第769条、第770条には「所有ノ意志ヲ以テ二十年間平穩ニ継続シテ他人ノ未登記ノ不動産ヲ占有シタル者ハ申請シテ其所有者ト為ルコトヲ得」、「所有ノ意志ヲ以テ十年間平穩ニ継続シテ他人ノ未登記ノ不動産ヲ占有シ其占有ノ始善意ニシテ且過失ナカリシ者ハ登記ヲ申請シテ其所有者トナルコトヲ得」との規定がある¹⁰²。この場合の「他人の未登記の不動産」には無主地・官山も当てはまるだろう。つまり無主地・官山も継続的かつ平穩に占有されていれば占有者に所有権が発生することになるため、農村における伝統的山林利用の実態に即して民衆の権理を追認するという現実的判断が下されたと解釈できるだろう。

他方で、経済的価値がある林地は所有権の確定後に課税対象となった。事実、仙遊県、永春県、同安県では林地の税率は3等に分けられた土地等則の第3等に位置づけられていた¹⁰³。しかしこの調査には多くの問題がともなったようである。戦時にあって民意を政治に反映させるために組織された福建省臨時参議会の記録からは、林地が耕地として登記されたために課税額が数十倍になったことなど、土地の分類に関わる紛糾の発生事例を確認できる¹⁰⁴。つまり土地調査の不正確さは否めなかったのである。

(2) 福建省政府による荒山調査

それでも戦時における国土資源の精確な掌握のためには、現状においては経済価値が低い荒山も含めた調査が必要と認識されていた。福建省政府による1939年の「福建省農業改進黨工作報告」では、福建省は山地が多いため今後は立体農業を励行して戦時生産を高めなければならない、それにより長期抗戦の力量を助け、最後の勝利と建国の成功を期さなければならない、今後はできる限り丘陵、荒原の自然環境の特質を發揮させ、山地利用の方策を發展させ、山地に生長するのに適した作物を栽培することを奨励する、ことが記載されている¹⁰⁵。

さらに同報告は、官山について歴代政府が「山澤の利は民とこれを共にする」の放任政策をとって、一向に干渉してこなかったために、ついに郷民の共有物となり、いくたびもの破壊を経て極度に荒廃した悲惨な状況に陥ってしまったとの認識を示していた¹⁰⁶。それゆえ、官地の整理が課題とされ、1938年12月に荒山調査隊を組織して詳細な調査を実施する運びとなったのである。ただし省政府の人力・財力には限りがあったため、まず林業の中心地である南平県において調査を開始し、次いでそこから閩江の下流域に向けて沿江2華里以内の荒山を順次調査していく方針がとられた¹⁰⁷。その後1年間に、南平県の樟湖坂から古田県の水口一帯までが勘測され、荒山の面積は5万297市畝と判明した。また南平の進賢郷の荒山7,000余畝を勘測し、油桐を植樹することも実施された。しかし荒山調査事業は困難でかつ政府の経費も枯渇したため、1940年に調査隊は他機関と合併することを余儀なくされ

てしまった¹⁰⁸。

その後、1941年に農林部農産促進委員会の勘測団が沙県の林区を勘測した¹⁰⁹以外では、福建省独自での山地の大規模な調査は実施されなかったようである。1943年に福建省地政局の機関誌『地政通訊』に掲載された論文は、「本省の山地は未だ勘測調査が行われていない。全省の各県で實際上、利用と未利用の山地がいったいどれほどあるのか、原有の林地がどれほどあるのか、山地の権利がどうなっているのか、山地の風土に適した作物は何か、交通、水利、地勢等の情形はいかなるものか、などは均しく詳しく知ることができない。このために計画的な墾殖ができないでいる。もし本省の山地を利用し尽くそうとするのなら、山地の勘測調査を一刻も緩めることはできない」との認識を示していた¹¹⁰。

つまり国民政府により発布された『森林法』は、山林の帰属を国有林、公有林、私有林の三つに分け、国有を原則とすると規定したものの、福建全土に及ぶ調査を行えなかったため、大面積を占める無主の天然林を正式に国有地に画分し、管理する体制は整えられなかったのである。

(3) 福建省における育苗・造林事業と荒山の開発

ただし1930年代以降、地方政府による造林事業は徐々にではあるが進展を見せることになった。ここではその実態を検討する。

表2、各苗圃育苗情況表

年	育苗株数	育苗樹木の種類
1935年	4,410,580	馬尾松、相思樹、ユーカリ、桐、油桐、ナンキンハゼ、樟、漆、油茶、シナグリ、タブノキ、其他
1936年	4,491,430	
1937年	6,948,794	
1938年	10,566,944	
1939年	6,554,039	
1940年	10,359,056	
1941年	10,031,882	
1942年	13,149,356	
1943年	10,507,655	
1944年	3,995,393	
1945年	2,646,493	
1946年	4,000,000	

典拠：1935～1938年『福建之木材』224頁。1939年～1941年『福建省林務專業報告』1947年6月、中央研究院近代史研究所檔案館、農林部檔案、20-00-039-07。1942年～1946年「国民政府主計部關於戰時林業生産狀況的調查統計1948年6月」『中華民國史檔案資料匯編』第5輯第2編財政經濟(8)、483頁。この表では1939年から41年までの数字は欠けているが継続して実施はされていた。

植林を実施するためには、まず苗木を育てなければならなかった。福建省では1935年に農林改良総場が成立した後、育苗事業が本格的に取り組みされた。具体的には福州に省立苗圃

が、また林業の中心地であった南平にも苗圃が設けられた。これら省立の苗圃では、民衆の労働力を徴用して造林を実施する際に、或いは民衆が自身で造林を行う際に無償で配布するための苗木が栽培された。さらに県級や区（行政督察区＝数県を管轄する行政区）級の苗圃も設立されていった。1935年以前は道（北京政府時期の地方行政区画）立の苗圃が省全体で4か所あるだけで、県レベルではほとんど苗圃が設置されていなかったが、1935年からは行政督察区の苗圃が4か所、県立の苗圃が8か所設置された。1936年には県立苗圃は28か所、37年には41か所にまで増加した。さらに建陽県と連城県には省立の第一及び第二中心苗圃も設置された¹¹¹。その結果、1930年代から40年代にかけての育苗株数は表2のように1942年まで年々増加していったのである。

次に民衆を徴用して実施した造林事業を紹介する。1937年には「福建省各市県区公有林管理及保護暫行辦法」が出され、公有林は国民労役公有林、総理紀念林、国民公役公路林、などの3種類に分類・整理された¹¹²。

①国民労役公有林（荒山造林）

農閑期を利用して民衆を徴用し造林に従事させる事業は1936年から開始されていた。当年には460万株を植樹し、種子を270斗播種した。その面積は2万4,000余畝、民工を11万人徴用し、これに参加した県は21であった。1937年には1,127万株を植樹し、播種75斗660斤、造林面積は3万1,600余畝、民工は18万7,400人が徴用された。当年この運動に参加した県は全省の80%以上を占める51県であった。1938年には日中戦争により相当の影響を受けたが、労働者を徴発しての造林は継続された。479万9,000株を植樹、1,636斗を播種し、実施面積は4万6,200余畝となり、徴用民工は8万8,900人となったが、実施県は43県に減少した。なぜなら沿海の各県では民工を戦争のための防衛工事に動員したからである。このように1936年から38年の3年間において、労働者を徴用しての荒山造林の成果は、合計2,000万株、播種2,600斗1800余斤、面積10万余畝、民工延べ37万6,700余人であったと記録されている¹¹³。

その後、国民労役公有林についての法整備が進められた。1940年の「福建省各県郷（鎮）保実施造林暫行辦法」によれば、各郷（鎮）そして保が造成した森林は、全保或いは全郷（鎮）の共有とする場合は「某某保」公有林、「某某郷（鎮）」公有林と名付け、もし私有とするならば、収益は郷（鎮）或いは保長と業主双方が協議し、契約をもってこれを定めること、保ごとに毎年少なくとも2,000株、郷ごとに少なくとも6,000株以上を造林することが定められたのである¹¹⁴。さらに1941年の「福建省各郷（鎮）保公共造産実施綱要」では、郷（鎮）・保公有林が必要とする土地については、公有・私有の荒廃した土地及び政府が法に基づき収用した土地を利用すべきことが明記された¹¹⁵。

日中戦争後期における荒山の造林状況は表3のとおりである。これら国民労役・公共造産により植林された林地は郷（鎮）・保の公有林とされた。ただし先に述べたように行政単位としての保は法人格をもち得ないため、保が管理する山林は、法人格をもつ郷（鎮）所有の山林に分類されたはずである。第Ⅱ節に挙げた表1の山林改革前の所有状況には郷有山林が含まれるが、これは国民労役により造営された郷（鎮）有林を含むものであると推量できるように思われる。

表 3、1935～1945 年 福建省荒山造林状況

年度	植樹株数	年度	植樹株数
1939	9,602,277	1943	35,413,673
1940	13,772,184	1944	32,894,240
1941	49,772,184	1945	14,086,120
1942	7,7070,892	1946	1,204,410

1939年～1941年は『福建省林務專業報告』(1947年6月)、中央研究院近代史研究所檔案館、農林部檔案、20-00-039-07。1942年～1946年「国民政府主計部關於戰時林業生產狀況的調查統計 1948年6月」『中華民國史檔案資料匯編』第5輯第2編財政經濟(8)、485頁。

②総理紀念林の造林

南京国民政府が成立すると毎年3月12日に植樹の式典を行い、その週を造林運動宣伝週とすることが定められたことは既に第Ⅲ節で説明したとおりである。こうして植樹された林地は総理紀念林と呼ばれた。福建省政府の「福建省農業改進工作報告」(1939年)によれば、1930年に15万8,000株の植樹が行われ、1932年には40万株余り、1934年には28万株余り、1935年には64万株余り、1936年には88万4,000株余り、1937年には68万9,000株余りが植樹されたという¹¹⁶。日中戦争時期の状況について『福建省志 林業志』は、『福建農報』に基づき1938年68万3,101株、種植面積3,366畝、1939年28万5,363株、種植面積1,365畝、1940年92万4,249畝、種植面積10,518畝、1941年24万1,316株、種植面積1,408畝との数字を挙げている¹¹⁷。なお、1942年以降の実施は明確では無い。

③公路(自動車道路)植林

「福建省農業改進工作報告」によれば、公路植林は道路の基盤の土壌を強固にし、美観を増進するだけでなく、軍事上では遮蔽の役割があると見なされた。1936年には26万4,000株余り、距離1,000km、4万5,000人を徴用、参加県区は69県、1937年には46万6,000株、1,000 km、2万7,600人を徴用、参加県は42県、1938年には34万6,000株余り、1,140 km、1万1,000人を徴用、参加県は37であった¹¹⁸。その後の状況について『福建省志 林業志』は各種統計を織り交ぜながら、1939年155,904株、1940年116,505株、1941年19,529株という数字を挙げている¹¹⁹。なお『福建省林務專業報告』は、1942年に123.25 km、1943年に82.3 km、1944年に429.45 km、1945年に215.098 km植林したとするが、植樹の株数は荒山造林の株数に併合して記載されたため明瞭ではない¹²⁰。

④明溪県の事例

個別の県での造林の実施状況も紹介しておきたい。1935年、福建省中部の明溪県政府は『明溪民衆へ告げる書』を發布し、民衆を動員し、杉木や松14万1,700株を植樹させた。また1941年に県政府は、造林実施計画を制定し、県有林、郷有林、保有林、合作社有林、私有林、(総理)紀念林などを制定するとともに督導団を編成し、造林技術の普及に努めた。

この年、県有林 83.3 畝、郷有林 256.6 畝、保有林 1,564 畝、合作社林 112.6 畝、総理記念林 25 畝、が造林されたという。さらに 1943 年には郷有林を造営することに重点を置き、油桐（アブラギリ）、油茶（アブラツバキ）、烏桕（ナンキンハゼ）などの経済林 1,219 畝を営造した。1944 年には幾つかの郷で郷林場を設置し、1935 年から 49 年までの期間に全県で 1 万畝余りを造林したという¹²¹。

ただし、造林運動が行われても、植樹するだけで、その後は保護もせず放置しているため、苗木に対する費用や植樹の労働力が無駄になっている、との批判があった¹²²。たとえば、長汀県からの報告は「たとえ保甲長に責任をもたせても、一般の民衆は私を重視し公を軽くするために、ほしいままに家畜を放ち、樹木が蹂躪されたり、枝が折られたりすることが免れ得ない、さらに植樹方法がよくなかったり、土質がよろしくなかったりで、夏の炎天下に太陽に晒され枯れてしまう」と訴えていた¹²³。ここから、植樹が実施されたとしても、樹木が枯れてしまうなどで、成果が維持されない場合が多かったことが窺い知れる。それでも、造林された荒山が政府により新たに設定された郷（鎮）所有の公有林として把握されていったことは政府の山林資源の掌握・開発として注目すべきである。

ところで、表 2 や表 3 からは、日中戦争後期の 1943 年以降になると育苗数も植林数も急激に減少していったことに気付かされる。全国統計での育苗数や造林数はこの期間も一貫して増加していたことに対比すれば¹²⁴、育苗数の減少は日本軍による海上封鎖による財政の悪化や戦時に社会・治安の混乱などの福建特有の原因が背景にあったものと思われる¹²⁵。1944 年度の『省政府施政報告』は、深刻な財政状況やそれにより行政が滞っている状況を次のように吐露していた。

諸予算の執行の情景を見るに、物価が高騰する下で、各項目の行政費用が超過してしまうことは止め難い。しかも本省は中国の東南僻処に位置し、交通は阻害されている。予算の拘束により既に定めた施策をひっくり返さなければならなくなり、その結果、小さな失敗に懲りて大切なことを止めることになってしまう。まことに中央政府が改革を進めるのを待つものである¹²⁶。

日中戦争末期、福建省政府は疲弊しきっており、それが造林政策にも影響したと言わざるを得ないだろう。

（4）福建省における山林の保護政策と民間の対応

1939 年の「福建省農業改進工作報告」は、森林火災は福建省において常に見られるものであり、人民が放火して山を焼くことが習慣になっているが、これは以前官庁が放任して干渉しなかったためである、政府がこの種の悪習を禁絶しなければ全省の山林はみな禿山になってしまう、との危機感を吐露していた。これに関して省政府は 1935 年に「福建省保甲長弁理禁止焼山奨懲辦法」を公布・施行し、各県の保甲長に護林工作に従事するように督促していた¹²⁷。なお上記の辦法（行政命令）は第一条で、福建省政府は本省内の一切の国有、公有及び私有の森林火災を予防するために本辦法を特に制定する。第二条で、本辦法施行後、およそ省内の人民は放火し山を焼くことを得ない、と明記した¹²⁸。また森林の乱伐については、1937 年 6 月に「福建省管理松木暫行辦法」を公布し、民衆に対して乱伐を禁止する一方で、山の権利者に強制して伐採の跡地に苗を植えさせることを命令していた¹²⁹。それでも放火して山を焼く挙措を根絶することはできていなかったのである¹³⁰。

ところで、森林保護の重要性を民衆に理解させるためには教育・宣伝活動が不可欠であり、例えば国民党中央宣伝部所属の中国文化服務社が刊行した啓蒙書である青年文庫の『中国林業建設』では、第3章において「森林と水旱天災の関係」が説明されていた¹³¹。さらに日中戦争時期に福建省の中心学校小学部高学年の教材では、森林の価値のなかに水害の防止が挙げられた¹³²。国民党政府が企図した森林保護の政策が法令、学校教育や社会教育を通じてどの程度民衆のなかに浸透し、理解されたのかを正確に知ることは困難である。それでも、地域社会において森林や樹木の権利をめぐる紛糾が発生した際に、政府の森林政策や資源開発に関わる宣伝文句を借用して自己を正当化することが地域の指導層により試みられたことは、以下に示す農林部の檔案史料から確認できる。

〔事例1〕屏南県の薛氏宗祠の墓林保管の代表が森林法などの法規を根拠として軍隊による乱伐から墓林を保護することを1944年に農林部に請願した案件。

重慶農林部沈部長のご高覧を請います。思いますに森林は国民経済並びに戦時生産に関係すること巨大です。中央は森林法並びに森林保護法規を頒布されました。このことから我が政府が林政を重視されていることが十分見てとれます。代表薛雲官等の支派の祖先兄弟の墳墓は均しく本邑城西の土名を際下洋というところにあり、これは県城から二里に及ばぬ一衣帯水の処です。先世が墓林二か所を植林し、これを子孫に残してから今まで、本支族は草木が茂るよう繁栄してきました。しかし、最近軍隊が当地を通過するに際しては蹂躪を免れず、もし禁止しなければ損害がでることを恐れます。代表等の一姓の墓林のことは尚お小事ですが、国家の林政を破壊し、政府の法令を軽視することの害はとりわけ大きいものです。そこで墓林を保護する命令を出していただき、並びに随時警察に命じて伐採を禁止するよう屏南県政府に指令して下さることをお願いするものです¹³³。

この事例で薛氏宗祠の墓林保管代表は、中央政府が森林法並びに森林保護法規を頒布したことに依拠して、軍隊が墓林を蹂躪したことを非難していた。なお、この請願対しては農林部長沈鴻烈が、風景（風水のことと思われる—引用者）に関わる墓林に対してはとりわけ切実に乱伐を禁止しなければならないとして、福建省政府に対して調査の上で厳禁するように命令していた。伝統的価値観をことさら重視して、請願者の訴えを認める判断を農林部長が下していたのは国民党政府の閣僚の意識形態を知る上で興味深い。

〔事例2〕平和県双溪の天利植牧場での場長による森林伐採に対する内部告発

平和県の双溪にある天利植牧場の技術員は下記の内容の請願を1941年に農林部長に提出した。以下はその要旨である。すなわち、天利植牧場は政府に登録された農場であり、抗戦の勃発以来農場の全体職員は生産に努め、民生を裕にし、抗戦の陣営を益々強固なものにしてきた。しかし場長の頼某は国家民族の大義を思わず、自分の60歳の祝いに勝手気ままに農場が20年来苦心して栽培してきた森林を流氓（ごろつき）を雇って伐採し売り払ってしまった。この農場の資本は元より私人の所有ではあるが、森林が繁茂したのは政府の保護や隣里・郷人の協力があったがためである。それゆえ森林から得られる利益を少数の資本家だけの所有に帰すべきではない。また、抗戦開始以来中央政府は農林を保護し、民用を統制する非常時期の法令をだしてきた。さらに過分利得に対する課税の規則もあるが、場長はそれ

を申告しておらず、伐採後に補植する考えもない。それゆえ場長の行為は政府の実業に関する企図を破壊するものであり、場長には国家民族の観念が無い。今回の木材販売の利益を森林の補植や地域の公共事業に還元させるべきである¹³⁴。

この告発では、天利植牧場は民間の農場ではあるが、抗戦の勃発以来農場の全体職員は生産に努力し、抗戦に協力してきた、中央政府は農林を保護し、民用を統制する非常時期の法令をだしている、それにも拘らず樹木を勝手に伐採し利得を私する場長には国家民族の観念が無い、として政府側の森林資源保護政策、戦時における国家民族の利益の優先などを大義名分として、場長を非難した請願・告発であったと理解できるのである。

〔事例3〕福州南門郊外陽岐郷聖廟の公有林保護の案件

福州の南門郊外に位置する陽岐郷の聖廟には公有林があり、数百年來の松樹や柏樹が繁茂しており、石碑に刻んで伐採を禁止してきた。ただし陽岐郷は勢力が弱かったため近隣の台嶼郷の地痞（ごろつき）によって夜間に密かに樹木が盗伐されることがしばしば発生していた。1941年に日本軍が福州を占領した際には、混乱に乗じて台嶼郷の地痞が公然と聖廟の樹木2万株を伐採した。そればかりか聖廟の神像まで破壊しようとし、これを阻止しようとした陽岐郷の住民に重傷を負わせる事件が発生した。そこで、陽岐郷の複数の姓からなる住民たちは、主に陳姓から構成される台嶼郷の地痞の処罰を求めた。併せて台嶼郷の暴徒の非行を社会に広く訴え、援助を請う文書を配布したのである。なお地域社会へ向けての告発文（これも併せて農林部へ送られた）には陽岐郷では政府の造林の意向に沿って松樹を栽培してきたことも申し添えられていた¹³⁵。

この案件は、本来は廟の樹木が隣郷の人々により伐採されたという地方性の紛糾に過ぎなかった。しかし地方レベルでの解決が困難であったのであろう。隣郷の行為は政府の造林の意向に反するものであるとの論理を用いて、森林行政を主管する重慶の農林部長に助けが求められたのだと推量される。

〔事例4〕政和県田賦管理处の科長が山林の樹木を不法に伐採した案件

政和県では県の田賦管理处科長の方城が徴兵のために駐屯していた部隊の官兵と手を組み、新兵に山林の樹木を半月に亘って伐採させた上で、それらを売却して金を儲けたという。福建を管轄する第三戦区司令部と福建省政府そして県政府が連名で乱伐を禁止する布告を出しているにも拘らず、千百年にわたり育てられてきた良好な森林が損ねられ、将来地方の風水に災いをもたらし、害をなすこと少なくない、地方の大局に立ち森林を保存するために黙ってはいられないとの強い不満を該地方の人々が表明した。これにより政和県の農会幹事を通じて方城科長の免職と処罰を田賦管理处に求めることが、農林部長に対して、請願されたのである¹³⁶。

この場合は第三戦区司令部と福建省政府そして県政府が連名で乱伐の禁止を布告しているという国民党政府の命令を根拠にするに加え、地方の風水という伝統的観念が原告の訴えを正当化する根拠とされたのである。

以上から、地域の指導層が、森林保護政策や国家民族を踏まえた戦時の民生の充実などの政府のスローガンをもとに、自分たちの主張を正当化する戦略を駆使していたことが判明した。つまり政府の森林政策の意図は少なくとも郷村の指導層までには届いており、

彼らは政府の論理を自分たちの請願や告発の論理に利用していたのである。

V 共産党政府による山林改革と伝統的利用慣行の継続

本節では、共産党による山林改革後に伝統的な山林の利用慣行がどのように変容したのか、また共産党政府がどの程度山林資源を掌握できたのかを検討する。

(1) 山林改革と伝統的山林利用の継続

福建省が共産党政権の統治下に入った後、1950年の秋からは土地改革が実施された。それから遅れること1年、1951年9月には「福建省土地改革中山林処理辦法」が發布され、山林の所有権改革が開始された。山林処理辦法の主な内容は以下のとおりである¹³⁷。

◎地主の山林及び祠堂、廟宇、寺院、教堂（キリスト教）、学校、団体の山林及び各種の族山、衆山を没収する。没収した山林は本辦法に照らして国有とする場合を除いて均しく分配する。

◎山林を一戸で経営するのに便利な場合は各戸に分け与えて経営させる。一戸に分け与えることが不便な場合は、当地の原有の習慣を参照し、数戸に分け与え共有とする。或いは自ら望んで結合した組の所有とする。或いは一郷或いは一村の共有とし、合理的に経営させる。

◎没収、徴収した元来農民の公有であった柴草山は原有の習慣に照らして原使用者である郷或いは村の人民に分け与えて所有させ、郷或いは村の人民により民主的に管理・経営させる。必要な際には郷と郷、村と村の間で適当に調整させる。

◎没収、徴収した山林のうち防風、防砂、防洪、護路、護堤、護村、示航、国防に関わるもの及び風景区の山林は、私人に分け与えてその所有とすることができない。規模が比較的大きなものは県以上の人民政府の決定によって国有とし、当地の人民政府と林業専門機関に管理保護の責任を切実に負わせる。規模の比較的小さなものは、県人民政府の決定により郷或いは村人民の所有とし、郷人民政府が管理・保護の責任を負う。以上の森林は特定の林業専門機関の批准がなければ伐採することができない。

◎没収、徴収する山林の分配方法は、国家の所有に帰すべき山林を先に選び出し、その後に山林の情况及び各郷が元来経営していた山林の範囲に照らして、郷と郷の間で調整する。そして郷を以て単位として自報公議（住民による自己申告と相互協議）させ、民主協商の原則に基づき、郷から村に、村から組へ、と分配する。そして山に境界を定め、地権を確定する。

なお、この場合の郷は土地改革時期に設置され、複数の自然村を包摂した行政単位（小郷）¹³⁸を指し、国民党政府の郷（鎮）や一般名詞である郷村の意味とは異なる。1950年から開始された土地改革はこの郷を単位として実施されたが¹³⁹、山林改革も同様に郷を単位とし、分配の際の調査は自主申告と民衆の間での協議とされた。そして以上に見た規定からは、山林分配に際しては原有の利用習慣や公共の必要性が踏まえられ、柔軟に国有、郷有或いは村の共有とされたことが判明するのである。

引き続き、具体的な事例を見ていきたい。例えば、沙県の杉口村（行政村）における山林改革前の所有形態は「祖宗山」（宗族の山）、個人の山、そして無主山に区分された。山林改革では、地主階級の山林を没収し貧農に分配し、地主以外の階級が所有した山林については

現状のままとした。そして山林をもたない貧農・下中農には地主あるいは宗族の山林を分配した。無主山は国有とし、宗族の山林のうち貧農・下中農に分けた残りを集団（小郷）所有とした¹⁴⁰。龍岩市新羅区の適中鎮では、家屋の前後の林・樹木や小規模な林地や散在する樹木などは農民の所有に帰された。規模が大きい林地或いは宗族の林地は国有或いは集団所有とされた¹⁴¹。さらに『福建省志 林業志』も、村の付近にあり山林改革において国有地とされた荒山、柴山、放牧地などを伝統的習慣に則り、一つ或いは複数の生産隊に固定して使用させた事例を記載している¹⁴²。それゆえ、総じて、歴史的な山林の使用慣行が山林改革や農業の集団化以降も尊重されていたことが窺い知れるのである。

（２）山林改革における調査の限界

既に本稿の第Ⅲ節と第Ⅳ節では、国民党政府による山林資源の掌握の方針と実践を検討し、その限界性を明らかにしたが、共産党による1951年の山林改革も山林資源を精確に掌握できるものではなかったようである。

朱冬亮・賀東航による調査は、山林改革時の工作は粗放なものであり、広大な面積の無主の荒山の権利や所属は定められなかった、そのため山林登記面積と実際の面積との間には大きな差異が発生した、と指摘している¹⁴³。また南平市王台郷の事例からも、山林改革時の調査は時間も短く、粗雑なものであり、自己申告には漏れがあった、特に郷（小郷）と郷、区と区、県と県の境界、交通の便が悪い天然林では不正確さが深刻であり、山林権理の帰属に大きな問題を残したことが読み取れる¹⁴⁴。さらに本稿で注目してきた伝統的な無主の山林については、山林改革の登記と分配の範囲に含まれなかったようである¹⁴⁵。これらに鑑みると、（表1）で示した統計には広大な無主地はほとんど反映されず、そのごく一部が国有として計上されたに過ぎなかったものと推量できるのである。

山林改革時の調査の粗放さ、そのために発生した紛糾については、共産党の文献である「山林改革を徹底的に完成さ、護林育林工作をきちんと行おう」（1952年8月）が参考になる。この資料では、没収の不徹底、誤った没収、所有地を少なく報告したり、分配の際に多く受け取ったりすること、調査を請け負いながら、実際には調査しなかったり、他郷との周縁の交接地帯では林界が不明確なままであったこと、などが取り上げられている¹⁴⁶。こうした問題点については『福建省志 林業志』も次のように総括している。すなわち「山林権について遺留した問題により引き起こされた紛糾はとても多かった（中略）山の境界が不明なために、草刈りにおいて械闘が引き起こされた」と¹⁴⁷。

なお山林改革時の杜撰な調査、産権確定の後遺症として農民の間で紛糾が発生したことは、江西、湖南、広西などの華南の諸省でも共通していた。共産党の幹部だけが閲覧できた内部情報誌『内部参考』では、郷村の間、宗族・宗派（宗族の分支）の間で械闘が発生した事例や山の争奪が紛糾の原因となった案件が紹介されている。そして、こうした問題の原因として、権利を分配する際に歴史的な習慣を破壊したからである、との説明が付されていることは注目すべきであろう¹⁴⁸。共産党政権の統治下にあっても、山林の調査や権利の確定は容易ではなかったのである。

おわりに

民国時期の福建林業は杉木や松樹を中心とした木材の販売で繁栄し、特に1920年代がそ

の絶頂期であった。ただし、伐採して搬出することが容易であった沿江部の樹木が乱伐に遭うこと甚だしく、人工林に再生産を依拠した杉木にしても、伐採後の補植が十分ではなかった。また 1930 年代になると、世界恐慌の中国への波及による木材需要の減退、共産党革命根拠地に対する討伐戦争、民軍などの軍事勢力による搾取、さらには乱伐による森林資源の枯渇などの複合的要因により、林業は衰退に向かったのである。

民間での山林の所有や管理については次のようにまとめられる。歴史上、政府からは官山とみなされていた無主山が山地の大部分を占める以外に、宗族や村落による共有の山林、そして個人の山林が存在した。その利用・管理については、宗族の共有地や村落の共有地では郷規民約による利用規制があり、特に風水に関わる林地や樹木に対する保護は手厚かった。なお郷村には境界があり、境界内の無主の山地では自由な薪拾いが認められた一方で、他の郷村や宗族の人が郷界内で葬墓・造林する場合は、山祖（山の賃貸料金）を納めねばならなかった。そして民国時期には天然林の乱伐という「コモンズの悲劇」とも呼べる状況が深刻化したが、風水に関係する山林や経済的利益を生み人工造林が行われる林場に対する管理はなお厳格であった。それゆえ山林破壊は、管理が希薄でかつ人里から遠過ぎない（侵入に便利な）官山＝無主地において深刻であったと考えられる。

国家による森林政策や山林資源の掌握と開発については、以下のことが明らかになった。国民党政府時期には、森林保護の必要性や国土資源の掌握と開発の重要性が国家指導者により提言され、その後専門官僚層により政策に具現化されていった。広く行われた土地陳報での耕地の調査に付帯して、経済的価値の高い林地の所有権確定は部分的に行われたようである。さらに中央政府は山林の権利を規定する森林法やその登記規則を定め、国土資源の掌握と管理の規則を整備していったが、戦時に山林資源の開発が喫緊の課題となると、官山（無主地・荒山）には一層の関心が寄せられるようになった。

そして、国民党政府は 1930 年代後半以降、国民工役により民衆を動員して荒山を造林し、その収益を新たに設定した地方行政単位である郷（鎮）政府や保の財源とすることを企図したのである。福建省では、実際に荒山造林、総理記念林の造林、公路造林、そして荒山の調査も初歩的に実施され、郷（鎮）・保という国民政府の行政単位が所有・管理する新たな公有林が誕生した。ただし旧官山（無主地）は「森林法」により法律的には正式に国有とすることが定められたものの、一部の地区を除き、その大部分においては調査・登記を行う余力を国民党政府はもたなかった。それゆえ、山林資源掌握の方針にも拘らず、国有林として把握されないまま、広大な山林が取り残されることになった。その一方、国民党政府の山林の保護や開発政策の意図は、民間では少なくとも指導層までには意識されており、彼らは山林に関わる紛糾に際しては政府のロジックを援用しつつ、自らの主張の正当化に援用したことが確認できた。

その後、共産党政権の下では、山林を貧農に分配する改革が実施されたが、権利の確定は住民の自己申告に止まり、広大な無主地に対する厳格な調査の実施は困難であった。共産党政権においても、この段階での山林の権利の確定は不正確なものに止まったのである。また山林改革を経ても従前の宗族や村落の共有地が個人に分配されるとは限らず、必要に応じて郷（小郷）や村の共有林（集団所有林）として維持された。山林が多く、山が深いという福建の自然環境や歴史的に形成されてきた共同資源管理の慣行に規定され、伝統的な「人間－森林関係」は山林改革後も持続性をもったのである¹⁴⁹。

¹漁業については割愛し、ここでは山林の利用や林業に関わる研究だけ紹介する。明清史研究においては上田信「山林および宗族と郷約—華中山間部の事例から」木村靖：上田信編『地域の世界史10 人と人の地域史』山川出版社、1997年；同『森と緑の中国史：エコロジカル・ヒストリーの試み』岩波書店、1999年；同『トラが語る中国史—エコロジカル・ヒストリーの可能性』山川出版社、2002年；同『風水という環境学』農文協、2007年。武内房司「清代「封禁」論再考—西南中国の視点から」『白山史学』（42）2006年。相原佳之「清代中国における森林政策史の研究」2009年、東京大学博士論文などが注目される。また魏郁欣「清代福建の宗族と墳樹：福州郭氏を具体例として」『東洋学報』97（1）、2015年、は墓地に植えられた樹木を手掛かりとし、清代福建の宗族の風水認識を考察している。

²唐文基主編『福建古代経済史』福州、福建教育出版社、1995年、502頁。

³「国民政府主計部關於戦時林業生産状況的調査統計 1948年6月」（中国第二歴史檔案館編『中華民国史檔案資料匯編』第5輯第2編財政経済（8））、南京、江蘇古籍出版社、1997年、487頁。

⁴福建省地方志編纂委員会編『福建省志 林業志』北京、方志出版社、1996年、1頁。

⁵三俣学・森元早苗・室田武『コモンズ研究のフロンティア』東京大学出版会、2008年、1頁。

⁶菅豊「中国の伝統的コモンズの現代的含意」室田武編『グローバル時代のローカルコモンズ』ミネルヴァ書房、2009年、221-226頁。このような観点から広西の少数民族地区村落を事例とした研究としては、菊池真純「伝統的村共同体による森林資源管理」奥田進一編著『中国の森林をめぐる法政策研究』成文堂、2014年が興味深い。

⁷平野悠一郎「現代中国の森林をめぐる権利関係—社会主義体制での変容と現状—」『環境社会学研究』11号、2005年。

⁸笹川裕史『中華民国農村土地行政史の研究』汲古書院、2002年。山本真1998「日中戦争期から国共内戦期にかけての国民政府の土地行政—地籍整理・人員・機構—」『アジア経済』39巻12号、1998年。

⁹ただし国民党政府による林業行政については、農林部中央林業実験所を中心に分析した林志晟『農林部中央林業実験所の設置と発展（1940-1949）』国立政治大学歴史学系出版、2011年、また侯嘉星『1930年代国民政府的造林事業—以華北平原為個案研究』台北、国史館、2011年などがある。林業に関する法制については、呉金贊『中華民国林業法制史』台北、正中書局、1991年、制度史・政策史の概観としては樊宝敏『中国林業思想与政策史（1644~2008年）』北京、科学出版社、2009年などが参考となる。

¹⁰林慶元主編『福建近代経済史』福州、福建教育出版社、2001年、88-89頁。

¹¹東亜同文会編『支那省別全誌 第14巻、福建省』1920年、624頁。

¹²台湾総督府官房調査課『北部福建事情』1921年、64-65頁。

¹³詹宣猷修；蔡振堅等纂 民国『建甌県志』巻25 実業、1929年印、上海、上海書店出版社、2000年重印。

¹⁴戴一峰『区域性経済発展与社会変遷—以近代福建地区为中心』長沙、岳麓書社、2004年、245頁。同書は福建省の木材販売や国民政府の植林政策を概観する論文を掲載しており、本論文執筆においても参考とした。

¹⁵前掲『支那省別全誌 第14巻 福建省』655頁。

¹⁶三五公司『福建事情實查報告』1908年、13頁。

¹⁷前掲『支那省別全誌 第14巻 福建省』623頁。

¹⁸長野朗は、以下のように叙述している。「福建は四川や湖南と同じやうに一時は南北の争

奪地となつたため、戦争の絶え間が無く、双方で土匪を利用して味方とするため、土匪か軍隊か区別がつかず、土匪自身でも自治軍と名乗っていたために、軍隊か土匪か区分のつかない曖昧なのが少なくなかった。又土匪出身の軍人が多いことも四川等と同じで、大土匪団は常に軍閥の頭目と連絡して居る。土匪の遣り口も半官半匪であり、往来の要道に徴税局を設けて、上下の民船や往来の車馬行人から通行税を徴して、納めなければ掠奪するので皆納めた。或いは沿道を租税を徴して歩くのさへある。見た目も軍服を着て新式銃を持ち、土匪と軍隊の混血児見たやうなのが福建土匪の特色である」長野朗『支那兵・土匪・紅槍会』坂上書院、1938年、275—276頁。

¹⁹これについては拙稿『近現代中国における社会と国家 一福建省での革命、行政の制度化、戦時動員』創土社、2016年、第2章を参照されたい。

²⁰東亜同文書院第20期生『支那調査報告書』第17回、1923年、42—43頁。

²¹確実とは地味がやせていて、小石などが多いさまを表す言葉である。

²²東亜同文書院第11期生編『沐雨櫛風』上海、東亜同文書院、1914年、216頁。

²³東亜同文書院第10期生編『樂此行』上海、東亜同文書院、1913年、198頁。

²⁴翁禮馨『福建之木材』福建省政府秘書処統計室、1940年、7頁。

²⁵王振忠『近600年来自然灾害与福州社会』福州、福建人民出版社、1996年、40頁。

²⁶外務省通商局『福建省事情』1921年、127頁。

²⁷瑩子「閩北的焼山」『閩政月刊』8巻4期、1941年4月。

²⁸前掲『福建之木材』1頁。

²⁹前掲『区域性経済発展与社会変遷：以近代福建地区为中心』99—100頁、221頁。

³⁰前掲『福建省志 林業志』190頁；前掲『福建近代経済史』87頁。

³¹前掲『福建之木材』3頁。

³²前掲『区域性経済発展与社会変遷：以近代福建地区为中心』99—100頁、221頁。

³³東亜同文会編『支那経済全書』（二輯）1907年、83頁。

³⁴前掲『福建省志 林業志』191頁。

³⁵岡本隆司編『中国経済史』名古屋大学出版会、2013年、243頁。

³⁶前掲『福建之木材』5頁。

³⁷前掲『福建之木材』6頁。

³⁸台湾総督府熱帯産業調査会編『南支那の資源と経済』第一巻福建省、南洋協会台湾支部発行、1938年、425、456頁。

³⁹満洲国の成立は、満洲と閩内の間の貿易量を激減させた。木越義則『近代中国と広域市場圏—海関統計によるマクロ的アプローチ』京都大学学術出版会、2012年、158頁。

⁴⁰福建省政府建設庁『福建経済概況』1947年、83頁；前掲『福建之木材』8頁。

⁴¹室田武・三俣学『入合林野とコモンズ』日本評論社、2004年、第1章「日本の入合林野の歴史と財産区有林」。

⁴²福建南西部での地域社会での血縁や地縁の特徴については前掲『近現代中国における社会と国家』1章を参照されたい。

⁴³社区の公共祭祀に用いるものと説明される。これについては、朱冬亮・賀東航『集体林権制度改革与農民利益表达—福建省将樂県調査』上海人民出版社、2010年、42—43頁。

⁴⁴福建省地方志編纂委員会編『福建省志 林業志』北京、方志出版社、1996年、132頁。

⁴⁵龍岩市地方志編纂委員会編『龍岩市志』北京、中国科学技術出版社、74頁。

⁴⁶前掲『トラが語る中国史』141頁。

⁴⁷例えば「邑人の興訟は争地墳案を以って最多と為す。其故は迷信風水に由る」。徐元龍修、張超南・林上楠纂『永定県志』巻15、禮俗志、1949年、連城縣文化印刷所石印→上海書店出版社、2000年。また「もし公共の風水を破壊或いは妨害するものが現われれば必ず

団結して報復するか、それによって械闘に至る」上杭県概況初歩調査』『福建省統計月刊』3 卷 3 期、1936 年 9 月。

⁴⁸連城県地方志編纂委員会編『連城県志』北京、群衆出版社、1993 年、193 頁。

⁴⁹福建省長汀県地方志編纂委員会編『長汀県志』北京、三聯書店、1993 年、152 頁。

⁵⁰前掲、『福建省志 林業志』106 頁。

⁵¹沙県志地方志編纂委員会編『沙県志』北京、中国科学技術出版社、1992 年、173 頁。

⁵²尤溪県志編纂委員会編『尤溪県志』福州、福建省地図出版社、1989 年、163 頁。

⁵³福安市地方志編纂委員会編『福安市志』北京、方志出版社、1999 年、435 頁。

⁵⁴福建省龍岩市新羅区適中鎮志編纂委員会編『適中鎮志』北京、華夏出版社、2008 年、172 頁。

⁵⁵「四十五年庚子春与各姓家長立東山禁約」龍岩県適中鎮龍埔林姓『長林世譜』本族大事記、1931 年。原文：立合同人陳林頼謝四姓人等、今因東山一帶山場墳墓宅攸閑、田疇灌溉泉源出焉、近来山木既被斧斤、萌芽復遭牛羊、泉失蔭而缺少、而無知之輩又横行挖石、遂致地裂山崩、一遇雨淋、沙流壅淤、橫溢田間、禾稼尽被毀壞、貽害無窮。乃募同里樂捐需費、在東山庵立約、嚴行禁止開關火圍演戲、聞知其禁例、俱載在簿、各宜遵禁、但該処山場原係各人契界物業、日後樹木森茂、倘有朽壞樹木、凭公佑壳、衆得六部山主得四部。

⁵⁶「蛟湖合衆等為嚴禁燒山戕賊蔭木事」光緒 18 年（1892 年）、中共福建省委宣传部・中共福建省委文明弁・福建省地方志編纂委員会・福建省文化庁編『福建郷規民約』福州、海峡文芸出版社、2016 年、267—269 頁。原文：照得後龍水尾為一郷之保障、固不得焚山砍伐。即各家山場蔭木為各家必用貨、物各有主、亦不得乱行焚砍（中略）自禁之後、各家山場各家管業、不得焚煉。所有松杉之木、雖小不能乱伐（中略）至於後龍水尾以及各家墳頭蔭木、更不得伐採。如有此情查出、公罰錢八千文以為衆用（中略）嗣後砍榔起雜柴随处可砍。伐松杉等木者、必至自己山。至若無山場者、即砍榔起雜柴亦可使用、何必擅行伐木。

⁵⁷「光緒十一年南平県葉邦梓壳山契」原文：未壳之日、先向親房伯叔兄弟人等、各不承受、後方立契即將抽出梓已下山貳片。「光緒二十九年南平県潘開成壳林契」原文：且成茲因乏銀応用、情愿將前嫩苗杉木出壳。未立契日、先向親房人等各不成就、後托中説諭、寸草寸木根枝弗留、尽行立契出壳与小瀛洲葉玉泉親刃承買為業」福建師範大学歴史系編纂『明清福建經濟契約文書選輯』北京、人民出版社、1997 年、358 頁—363 頁。

⁵⁸毛沢東「尋鳥調査」第 4 章（7）山林制度、毛沢東『毛沢東農村調査文集』北京、新華書店、1982 年。

⁵⁹周冕「屏南農業環境与農業建設計画」『閩政月刊』5 卷 6 期、1940 年 2 月。

⁶⁰さしあたり旗田巍『中国村落と共同体理論』岩波書店、1973 年を参照されたい。

⁶¹華東軍政委員会土地改革委員会編『福建省農村調査』1952 年、123—125 頁。

⁶²原文は「山澤之利當與民共之」であり、『春秋左傳正義（昭公）』卷第四十九に見られる。

⁶³前掲『福建之木材』223 頁。

⁶⁴仁井田陞『補訂 中国法制史研究 奴隸農奴法・家族村落法』東京大学出版会、1962 年、697 頁。

⁶⁵注 1 で挙げた相原佳之の博士論文、132 頁。なお相原の論文 4 章、5 章では官山について詳しく論じられており、大いに参考となる。

⁶⁶朱冬亮『社会変遷中的村級土地制度 閩西将楽県安仁郷個案研究』厦門、厦門大学出版社、2003 年、78 頁。

⁶⁷これは G・ハーディンによる言葉であり、資源が誰のものでもない共有の性格を持つ場

合、その資源を誰でも利用できる。その結果、資源が乱獲され枯渇しても誰も責任をとろうとしない状況を指すという。秋道智彌『コモンズの人類学』人文書院、2004年、29頁。

⁶⁸謝申図「整理本省官山方案」『福建農報』1938年11・12期。

⁶⁹前掲「清代中国における森林政策史の研究」終章。

⁷⁰鄧雲特『中国救荒史』上海、商務印書館、1937年、488頁。北京政府期の森林・林業政策の梗概については、前掲『中国林業思想与政策史(1644～2008年)』を参照されたい。

⁷¹孫文・安藤彦太郎訳『三民主義』岩波文庫、168－169頁。

⁷²さしあたり王淑芬「清代治山防洪環保策略之探討：以長江流域為中心」『国立台北教育大学学報』第19巻第1期、2006年、を参照されたい。

⁷³たとえば、凌道揚「論近日各省水災之激烈欠乏森林實為一大原因」『東方雜誌』14巻11期、1917年；韓安「造林防水意見書」『農商公報』4巻7期、1918年。

⁷⁴武上真理子『科学の人・孫文 歴史的考察』勁草書房、2014年、151頁。

⁷⁵孫文『孫中山選集』北京、人民出版社、1981年（2版）350頁。

⁷⁶前掲『中華民國農村土地行政史の研究』及び前掲「日中戦争期から国共内戦期にかけての国民政府の土地行政—地籍整理・人員・機構—」。

⁷⁷前掲『孫中山選集』602頁。

⁷⁸前掲『中国救荒史』488頁。

⁷⁹蔣介石「中華民國25年元旦告全国軍民同胞書—国民自救救国之要道」（1936年1月）、蔣介石著・秦孝儀主編『先總統蔣公思想言論總集』巻30、書告、中華民國14年—27年、台北：中国国民党中央委员会党史委員会、1984年、195－197頁。

⁸⁰蔣介石「植樹造林增進国家財富」（1936年3月）、前掲『先總統蔣公思想言論總集』巻14、演講、中華民國25年—26年、148－149頁。

⁸¹段瑞聰『蔣介石と新生活運動』慶應義塾大学出版会、2006年、197頁。

⁸²蔣介石「告全国士紳及教育界同胞書」（1939年1月）、前掲『先總統蔣公思想言論總集』巻31、書告、中華民國28年—31年、3－4頁。

⁸³胡馨芳「公共造産之研究」『閩政月刊』8巻1期、1941年；姚傳法「民生主義的森林政策」『林学』（中華林学会）1巻7期、1941年。姚傳法「森林与建国」『林学』1巻10期、1943年。姚傳法は中華林学会理事会主席であった。

⁸⁴前掲、笹川裕史著『中華民國期農村土地行政史の研究』第1章。

⁸⁵宮嶋博史は、近代的土地所有制度とは、近代社会を支配する商品經濟の論理が、土地所有においても貫徹することを保障するような土地制度であり、土地の私的所有者は土地に対する包括的所有権が認められるとともに、土地所有には何らの人格的な関係も存在しないことが必要である、と定義している。宮嶋博史「東アジアにおける近代的土地変革」中村哲編『東アジア資本主義の形成』青木書店、1994年、163頁。

⁸⁶山本真「中国国民政府統治区における農村建設の研究—鄉村建設運動及び国民政府の土地政策を中心に—」一橋大学博士学位論文、2004年、312頁。

⁸⁷「公私有林登記規則」台湾省政府農林処編『台湾農林法規彙要』1948年、57頁。

⁸⁸吳金贊『中華民國林業法制史』台北、正中書局、1991年。

⁸⁹前掲『台湾農林法規彙要』1948年、45頁。

⁹⁰張俊頤『新県制之研究』台北、正中書局、1988年、96－97頁。

⁹¹唐啓宇「抗戰与建国」『人与地』（重慶版）2巻7期、1942年。

⁹²施中一「公共造産之認識与推行」『農業推行通訊』2巻10期、1940年。

⁹³「郷鎮造産辦法」行政院院令、1942年3月、国民政府檔案、02600004249A 台北、国史

館藏。

⁹⁴福建省農業改進處編印『鄉保造林須知』1940年。

⁹⁵梁楨『國民工役』商務印書館、1941年、119頁。

⁹⁶「農林部關於戰時林業建設概況報告（1943年7月）」前揭『中華民國史檔案資料匯編』第5輯第2編財政經濟（8）、487頁。

⁹⁷「強制造林辦法」前揭『台灣農林法規彙要』58頁、所收。

⁹⁸「農林部林業施政方針及五年造林實施綱要」1943年、中央研究院近代史研究所檔案館『農林部檔案』、20-23-001-05。

⁹⁹蘇宗文「福建省辦理土地陳報之經過」蕭錚主編『民國二十年代中國大陸土地問題資料』台北、成文出版社重印、1937→1977、20181-20292頁。

¹⁰⁰李奮「福建省田賦研究」（蕭錚主編『民國二十年代中國大陸土地問題資料』台北、成文出版社重印、1935年→1977年、2836-2837頁。福建省地政局編印『福建省田賦沿革及現狀』1936年、4-5頁。

¹⁰¹「公牘」『福建省政府公報』第724期、1937年、33頁。

¹⁰²我妻榮·川島武宜『中華民國民法』物權（上）、1941年、中華民國法制史研究會、96-99頁。

¹⁰³李奮「土地等則之改訂問題」『地政通訊』（福建版）3期、1938年。

¹⁰⁴原文「查各縣經已編查完成改制征收賦份，每多將地目錯亂（如林地誤編為農地）。雖經地方人士申請複核，歷一年余之長久時間尚未曾舉行辦理複核」、「漳平縣黨洋鄉白寮保林地概被誤編為農地以致此次田賦改征食物時，全保賦額較前增加三十余倍且該鄉並不出產米谷須向外鄉高值購買繳納」『福建省臨時參議會第六次大會彙編』民31年5月、中國國民黨黨史館、一般檔577/112.4、68-69頁。

¹⁰⁵福建省政府編印「福建省農業改進工作報告」1939年、中國國民黨中央委員會黨史委員會編『革命文獻 第105輯 抗戰建國史料 農林建設（四）』台北、中央文物供應社、1986年、147頁。

¹⁰⁶同上、136頁。

¹⁰⁷前揭『福建之木材』1940年、223頁。

¹⁰⁸「福建省林務專業報告」（1947年6月）、中央研究院近代史研究所檔案館、農林部檔案、20-00-039-07。

¹⁰⁹前揭『福建省志 林業志』407頁。

¹¹⁰宣益豪「促進山地利用之管見」『地政通訊』（福建版）44·45期合期、1943年。

¹¹¹夏之驊「農林事業在本省（中）」『閩政月刊』4卷3期、1939年。

¹¹²「福建省各市區公有林管理及保護暫行辦法」1937年5月、前揭『福建之木材』242頁。

¹¹³前揭「福建省農業改進工作報告」134頁。

¹¹⁴前揭『福建之木材』236頁。

¹¹⁵「福建省各鄉（鎮）保公共造產實施綱要」『閩政月刊』8卷5期、1941年。

¹¹⁶前揭「福建省農業改進工作報告」134頁。

¹¹⁷前揭『福建省志 林業志』77頁。

¹¹⁸前揭「福建省農業改進工作報告」134頁。

¹¹⁹前揭『福建省志 林業志』77頁。

¹²⁰『福建省林務專業報告』（1947年6月）、中央研究院近代史研究所檔案館、農林部檔案、20-00-039-07。

¹²¹雪峰林「明溪植樹造史考」『明溪文史資料』6輯、1989年、19-20頁。

¹²²李樹桐「福建荒地墾殖與平均地權的研究」『新福建』3卷3期、1943年。

- 123 「連城県農業概況」福建省政府統計処編『福建省各県区農業概況』下冊、1942年、475—476頁。
- 124 「国民政府主計部關於戰時林業生產狀況的調查統計 1948年6月」前掲『中華民國史檔案資料匯編』第5輯第2編財政經濟(8)、487頁。
- 125 これについては前掲『近現代中国における社会と国家』第8章を参照されたい。
- 126 「財政」『福建省政府施政報告』1944年4月、13頁。
- 127 前掲「福建省農業改進工作報告」1939年、135頁。
- 128 「修正福建省保甲長弁理禁止燒山獎懲辦法(1935年)」前掲『福建之木材』245—246頁。
- 129 前掲「福建省農業改進工作報告」1939年、135頁。
- 130 前掲「福建省農業改進工作報告」1939年、135頁。
- 131 郝景盛『中国林業建設』(青年文庫)、重慶、中国文化服務社印行、1944年。
- 132 「甲 福建省的森林 森林の価値」徐君梅『福建省森林産和漁産』(福建省地方教育乙種之四)、福建省政府教育庁出版、1943年。台北：中国国民党党史館、一般檔506/284.4。
- 133 「拋屏南県薛雲官等呈請出示禁止砍伐墓林等情查照轉飭查明嚴禁示知照由」(1944年8月)「各方請求護林」、中央研究院近代史研究所檔案館『農林部檔案』、20-23-034-24。
- 134 「福建省平和双溪天利植牧場林木遭砍伐」(1941年10月)、「各方請求護林」、中央研究院近代史研究所檔案館『農林部檔案』、20-23-035-06。
- 135 「呈為地痞兩度乘機劫掠鄉閭懇請轉飭派隊拿辦以安閭閻由」(1941年9月)；「為台嶼鄉暴徒兩度乘機劫掠財物搗毀文廟聖像損失達二十萬元籲請各界人士暨隣鄉父老兄弟援助書」(年不記載)。ともに「各方請求護林」、中央研究院近代史研究所檔案館『農林部檔案』、20-11-133-15。
- 136 「福建省政和県農会以田賦処科長方城盜壳森林懇查究辦」(年不明、推定日中戦争時期)、「各方請求護林」、中央研究院近代史研究所檔案館『農林部檔案』、20-11-133-05。
- 137 「福建省土地改革中山林处理辦法」(1951年9月)『江声報』(厦門)1951年、9月17日。
- 138 小郷とは国民党時代の大郷とは異なり、従来を保よりも広い範囲で、土地改革実施時の農民協会を設立する単位として設置された行政単位であった。田原史起『中国農村の権力構造—建国初期エリートの再編』御茶の水書房、2004年、77—78頁。ゆえに土地改革時期の郷とはすなわちこの小郷のことを指す。
- 139 「蘭圃郷土地改革怎樣進行的」『土改通訊』第1期、1950年、5頁。
- 140 沙県農業委員会「杉口村林業合作史調査」蔡和睦主編『福建省農業合作經濟史料』1巻、福建科学技術出版社、1988年、291—292頁。
- 141 前掲『適中鎮志』172—173頁。
- 142 前掲『福建省志 林業志』136頁。
- 143 前掲『集体林権制度改革与農民利益表達—福建省将楽県調査』42—43頁。
- 144 南平市農業委員会「王台郷林業合作史」前掲『福建省農業合作經濟史料』1巻、278頁。
- 145 前掲『南平市志』670頁。
- 146 「徹底完成山林改革、做好護林育林工作」(1952年8月)福建省人民政府土地改革委員会編『福建省土地改革文献彙編』上冊、1953年、161頁。
- 147 前掲『福建省志 林業志』138頁。
- 148 「中南区各地農民爭奪山林、水利的糾紛很多」(1953年5月30日)及び「中南区山林糾紛很多」(1953年7月25日)ともに『内部参考』(香港中文大学中国研究服務中心蔵)。
- 149 なお、共産党政権下での森林の権利関係の歴史的変遷については、平野悠一郎「第8章 森林の権利関係の歴史的推移」前掲『中国の森林をめぐる法政策研究』所収、を参照されたい。

建德西坞第一生产队账本资料介绍

王丹萍

人民公社时期，中国社会尤其是农村社会发生了巨大的变化。人民公社制度深刻地改变了中国的乡村面貌并影响了农民基本的生产和生活方式。过去学术界对于人民公社的研究主要着眼于宏观的国家制度政策，鲜有以人民公社社员为中心的“自下而上”的研究。张乐天的《告别理想：人民公社制度研究》一书是国内最早开始利用翔实的基层文献对人民公社制度进行研究的著作。¹该书最早由东方出版中心于1998年出版，其中张乐天利用浙江省海宁市联民村的详细账本资料以及生产队会计的工作日记，从大队层面，利用外部冲击——村落传统的模式对人民公社制度作出一个横向的剖析。另一项“自下而上”的代表性研究是2009年由斯坦福大学出版社出版的《中国乡村纪事：集体化和改革的微观历程》。²李怀印通过对江苏瀛东人民公社从集体化到改革开放期间的长时段研究，集中讨论了“中国农民在不同制度设置下的动机和行为的复杂性和多样性”、“国家和乡村的关系，基层干部与村民的关系”这两项对立关系，以及“集体化时期的经济激励与农业效率问题”。

近年来，学术界对于底层研究开始逐渐重视，许多学者将目光逐渐集中到乡村资料的收集以及整理中。其中，最为典型的是由行龙主持的山西大学中国社会史研究中心和由张乐天组织的当代中国社会生活资料中心。山西大学中国社会史研究中心在过去十几年中，考察收集了山西农村集体化时代一百余村庄的上千万件原始档案资料。2011年10月，由行龙、马维强以及常利兵利用收集到的典型档案合作完成的《阅档读史——北方农村的集体化时代》由北京大学出版社出版。复旦大学当代中国社会生活资料中心成立于2011年10月，由张乐天担任中心主任。在过去的五年中，该中心搜集整理了100多批社会生活资料。而由张乐天主编的《中国当代社会生活资料长编》系列从2015年起开始出版。

¹ 张乐天：《告别理想：人民公社制度研究》，上海：上海人民出版社，2012年。

² 李怀印：《中国乡村纪事：集体化和改革的微观历程》，北京：法律出版社，2010年。

2013年8月,日本一桥大学历史系佐藤仁史教授与浙江大学历史系地方文献研究中心合作,在浙江省建德县大洲乡开展有关近当代浙江山林经济的田野调查。在调查过程中,发现了大洲乡西坞村村民林发樟先生保存的建德西坞第一生产队1962年至1981年的账本资料、两次人口普查数据以及林发樟先生用于记录每日工作生活内容的历书等内容。这一类资料通常都是由当时的会计或生产队队长保存,有部分由大队保管。由于年代久远,保管人重视程度不够、保护不当等,保存至今的账本资料已为数不多,大多被破坏、当作柴火焚烧或作废纸出售。这套发现的账本保存完好,具体内容包括生产队每年的粮食和经济分配表、分类账、分户账、现金账、劳动工分账以及各类单据等等。像这样保存完好的生产队长时段的账本此前鲜有发掘。尽管这类资料从发现的数量上来说极为稀少,但是一经发现、整理和保存,将成为研究人民公社时期农村生产、农村经济生活以及农村家庭研究的珍贵一手资料,对进一步了解人民公社时期农村面貌有着极为宝贵的价值。笔者曾于2013年至2015年以研究助理的身份参与在建德的田野调查,对这批材料有一定理解与认识,也曾利用这批新发掘的资料研究当地农民家庭在人民公社时期的历史。本文将着重介绍这批账本的具体内容及其学术价值。

一、背景简介

建德西坞第一生产队在人民公社时期隶属于浙江省建德县大洲人民公社大洲大队。大洲大队即为现在的大洲行政村。大洲行政村下辖三个自然村,分别为芳山、西坞和大洲。从地理上来说,西坞村和整个大洲行政村位于建德县的北部,属于浙西山区地带,地势北高南低,山坡坡度较大,素有“九山半水半分田”之称,是浙江省重要林业基地之一。1961年大洲公社成立之初,下分七个生产队;其中,西坞下分两个生产队、芳山村下分三个生产队,大洲村下分两个生产队。本文主要介绍的账本资料来自于建德西坞第一生产队,也就是当时的大洲大队生产一队。根据《建德县地名志》,1983年西坞自然村共有85户家庭,共366个人口。³根据此次发现的账本记载,西坞第一生产队1964年共有25户家庭,138个人口。到了1979年则涨至40户家庭,185个人口。

根据《建德农业志》的记载,建德县1966年至1971年,个人人均收入为80

³ 建德县地名委员会:《建德县地名志》,建德县地名委员会,1985年,第136页。

元至90元，而到了1970年代中期，个人人均收入攀升到110元左右。从账本记载来看，同一时期西坞第一生产队的个人人均收入稍稍高于建德县的平均水平。总体上来说，我们可以将西坞第一生产队看作浙西山村一个普通的生产队。

这次发现的账本时间跨度为1962年至1981年，在这一期间内，该账本的保管人林发樟为西坞第一生产队的会计。在我们进一步考察账本内容之前，需要对农村生产方式以及农村经济生活在集体化以及人民公社期间有一定的了解。有关乡村集体化以及人民公社制度的建立及变迁，过去的研究已经做了非常详尽的叙述。本文将结合西坞当地的历史变迁做一个简单的梳理。

1952年到1957年，国家组织乡村开展农业集体化运动。中国乡村的集体化运动经历了“互助组”、“初级社”和“高级社”三个阶段。1951年12月15日，中共中央颁布了《关于农业生产互助合作的决议》，强调建立互助组要基于“自愿”和“互利”两大原则。⁴互助组成员在农忙季节自发地相互帮助完成农活，由互助组组长负责召集成员，并协调生产，由记账员记录各家帮工的具体时长、如果各家的帮工时间大致相同，则不用支付额外的帮工费用。这一形式与农村传统的帮工模式大体相同。由此，该形式受到多数农村家庭，尤其是生活水平较低的农村家庭的欢迎。这种合作模式解决了农民在农忙时期由于缺少劳动力而影响劳动生产的问题。

1954年春，全国开始创办“农业生产合作社”。合作社期间，社员须将土地交给合作社，由合作社社员集体耕种，但是仍然合法持有该土地的所有权。在这一模式下，社员的主要收入来源于集体的土地分红。西坞村在1954年至1955年成立西坞农业生产合作社，农民将自己的农具折价作为股份加入合作社，入股后的农具归合作社所有，社员拥有使用权，估价由社长、会计和乡干部集体完成。收归合作社的生产资料，按照田亩数量进行平均分摊。⁵

尽管初级社已经实现了一定程度的集体化，但仍然不符合毛泽东对于社会主义的期望。1956年，在中央的号召下，全国各地开始成立高级社。所谓高级社，是指土地和大型农具集体化的农业组织，每个高级社大约拥有250户成员家庭，

⁴ 中国农业委员会：《农业集体化重要文件汇编（一九四九—一九五七）》，中国中央党校出版社，1981年，第95-105页。

⁵ 林发樟，2013年8月15日上午，建德县大洲乡西坞村林发樟家。

社员的收入取决于需求和劳动投入，而非生产资料和生产工具的私有权。⁶根据林发樟回忆，1956年，大洲成立三星高级农业生产合作社。三星高级社由三个初级社合并而成，下分七个生产队。三个初级社合并后的田地由高级社进行集中管理，山林和田地全部归集体所有，而具体的耕种形式还是和初级社时相同。⁷

1958年，在高级社的基础上，人民公社在全国农村范围内广泛地建立。这一时期“自上而下创办的大公社，以无偿占有农村基层生产资料和农民生活资料为其所有制的基础；以‘政社合一’高度集中的‘组织军事化、行动战斗化、生活集体化’为管理模式；以吃饭不要钱的公共食堂和供给制为其主要分配方式，创建了中国乡村千年未有的新制度。”⁸“一大二公”是1958年至1960年大公社期间，人民公社最鲜明的特征，而这一特征也被认作是通往社会主义的桥梁。

大跃进运动的结果以及三年自然灾害宣告了“共产风”的大公社模式的失败。中央于1961年颁布了《农村人民公社工作条例（草案）》（简称“农业六十条”），否定了“一大二公”的大公社经济制度，确立了“三级所有、队为基础”的公社新体制，而这一体制一直延续到改革开放，是人民公社最重要的制度之一。生产队作为“基本核算单位”，其经营的好坏直接关系到每一个社员的生存情况。尽管大队和公社不直接对生产队的劳动进行管理，但是会不时向生产队提出指示与命令。根据林发樟回忆，西坞第一生产队从1961年开始作为基本核算单位，在此之前由大队统一记账。他本人于1961年开始担任西坞第一生产队会计一职，直到1981年。而这一时期也是本文研究介绍的具体时段。

二、账本内容

总体而言，生产队账本资料主要包括三个部分：账簿、单据以及收益分配（到户）方案。从这套账本的内容来看，尽管主要的记账思路保持一致，六十年代初和六十年后期至八十年代人民公社解体前生产队具体的记账方法和账簿名称略微不同。1962年，西坞第一生产队的账本内容主要包括现金粮食日记账、社员往

⁶ 中国农业委员会：《农业集体化重要文件汇编（一九四九—一九五七）》，中国中央党校出版社，1981年，第564-588页。

⁷ 林发樟，2013年8月15日上午，建德县大洲乡西坞村林发樟家。

⁸ 辛逸：《农业六十条的修订与人民公社的制度变迁》，《中共党史研究》，2012年第7期，第40页。

来分户账、分类账以及各类单据；1963年主要包括分户账、分类账、劳动工分账、现金日记账、年终分配方案以及各类单据；1964年主要包括分户账、劳动工分账、分类账以及各类单据；1965年主要包括分配收益分配决算方案、分类账社员分户账以及各类单据；1966年以后记账方法和内容较为一致，每年的账本内容包括现金收付账、实物收付账、工分肥料登记簿、投资预支登记簿（1972年后改为实物预支登记簿）、现金收付月结表（1973年后改称收付存余额表）、社员分户账、多项分类账、收益分配方案以及各项单据。

在这次发现的资料中，笔者发现了于1966年出版的《生产队简明收入账和记账方法（改革草案）》。这一草案旨在指导生产队会计记账，以达到账面通俗易懂的效果。在草案颁布后，西坞第一生产队的记账方法逐渐固定下来。下文将以草案为参照，具体介绍这套账本的主要内容。

草案规定生产队会计在工作中应贯彻“六十条”和“二十三条”规定的勤俭班队，自力更生和财务民主的方针，公开记账，并接受贫下中农的监督审查，实行现金和食物分开记账，实物实付，统一核算。草案同时要求各生产队的账簿包括“二账三单二簿”，即现金收付账、实物收付账；劳动工分清单、土肥投资清单、实物预支清单；社员分户登记簿以及固定财产登记簿。

从西坞第一生产队的账本来看，其实际操作大体遵循草案的规定，但同时存在些许出入。按草案规定，现金收付账专记现金的收入、付出和结存情况，按照单据顺序记账，账上的结存数须与经济保管员结账一次，核对一次，并由经济保管员在账页上盖章；实物收付账顾名思义，专记粮食和其他产品收入、付出和结存情况，按照单据顺序记账，并实行按季分名品收付结存数量公布。由于西坞第一生产队所有粮食产出都用于上交国家农业税、集体提留以及社员分配，有部分年份只有现金收付账而不单独做实物收付账，在1973年以后，两个账目合并为收付日记账。

按规定，社员工分清单须按照社员劳动力姓名记工分，每天记每天公布，每月结出合计与社员核对；土肥投资清单按照每户社员肥料投资情况逐笔登记，计算出粮食数量，做到每天记，每天公布，每月结出合计粮食与社员核对；实物预支清单按每户社员在预支实物时登记数量，并按实物品名、单价，折出金额和算出本单合计金额。现存账本中并没有找到逐日记载的工分和土肥投资清单，而只

发现了工分肥料登记簿。其中工分仍旧以个人为单位逐月进行记录，肥料投资则以户为单位进行记录。值得一提的是，尽管绝大多数工分都是记录在各个劳动力名下，一小部分工分包括采茶叶、砍树、放牛等，则记录在各户而非个人名下

草案还规定，社员分户登记簿的正面为工分肥料登记簿，背面为投资预支登记簿。投资预支登记簿根据现金收付账分月登记，实物折价根据实物预支清单登记，预支粮食分季按品名数量登记，一个品名登记一笔，并分别结出金额和累计金额；固定资产登记簿则按名称、按件登记，可以折金额，也可以登记数量不折金额。实际生活中，西坞第一生产队从 1972 年以后就不再单独制定社员投资预支登记簿，而是改为制定实物预支登记簿。现金投资与现金预支部分则统一记录在分户账之中。现金投资的情况在人民公社时期并不常见，其来源主要是生产队队员从事手工业等副业的现金收入。在现有的生产队账本中并未找到相应的固定资产登记簿。

除了上述的“二账三单二簿”之外，草案还规定各生产队制定分类账以及月结表。根据草案，一般情况下生产队分类账可以下设以下十个类别：生产收入（包括农、林、牧、副、渔等生产收入和其他收入）、成本开支（包括农、林、牧、副、渔等生产成本和管理费开支）、税款（包括农业税和副业税等税款）、公积金（包括提存公积金和交纳生产费股金等收付）、公益金（包括提存公益金和储备金等收付）、贷款（生产队向国家银行和信用社借、还贷情况）、暂收款（临时性借入或未确定收入的款项）、暂付款（临时性借出和未确定开支的款项）、社员投资（社员投资现金或结转上年分配找账款项）以及社员预支（社员平时预支或结转上年社员分配超支款项）。各个生产队可以根据自身的情况增加或减少相应栏目。而为了检查现金收付有无纰漏，生产队会计在每月需要收付结账一次，记在现金收付月结表中。正常情况下，月结表一式三份，一份代分类账，一份连同单据由会计装订保管，另一份交由经济保管员保管，在审查核对后须由审查人员盖章。西坞第一生产队分类账和现金收付月结表的实际登记情况与草案规定的无较大出入。现金收付月结表在 1973 年后改称收付存余额表，实际功能不变。需要单独指出的是，根据林发樟回忆，公积金算作生产队集体财产，主要用于购置大型农具，按照每年收入的 3% 进行提留，实际操作中部分集体收入不好的年份不提留公积金。公益金则主要负责生产队的公益开支，包括修路费、广播费、电影

费等等，通常情况下占纯收入的 1%。如果第一年提留的公益金没有用完，自动结转到下一年，如果第二年仍有存余，第三年就暂时不提留公益金。⁹

各类单据是人民公社时期生产队账本的另一大组成内容。按照草案规定，现金和实物的收付都要根据单据记账，同一类的单据可以数张合并记一笔账，没有单据不能记账，所有单据按照收付时间先后，顺序编号，记账后按月装订成册。从实际账本内容来看，单据主要分为队内和外来单据。外来单据多数来源于供销社、森工站、粮油局、茶叶收购站、粮食加工厂与农业信用合作社。队内的单据主要包括收款单、付款单以及农民书写的预支条。人民公社时期，农民生活中需要现金时，须向生产队打预支条。通常情况下，由各户的户主主笔，内容包括预支人姓名、预支理由、预支金额以及日期等信息。在预支请求得到生产队队长的同意与盖章后，预支人去经济保管员处领取相应金额，并将预支条上交给生产队会计以作留底。常见的预支理由包括家庭经济困难、开木匠和篾匠工资、购买生活必需品、购买高价米、外出开会、子女教育、看病、定亲、结婚、生子、葬礼、节日开销以及还账等等，具体金额不定。

由于各类单据的数目繁多，为了方便记账，生产队会计通常会在积累一定数量的单据之后进行汇总，将已有的单据按照时间和门类进行划分，统一登记在记账凭证上。记账凭证包括记账时间、记账凭证编号、总账科目（分类账上的具体页数）、账目摘要、以及收入和支出的金额。记账凭证和相应的单据会编订成册，而在分类账、社员分户账以及收付日记账上一般也会标明每一笔账的具体记账凭证编号，以方便社员或是审查人员进行核对与审查。从现有的账本来看，林发樟并非每一年都按上述的方式登记账目。有些年份，林发樟并没有制定记账凭证，而是将各类单据进行编号（有时同一类别的单据有统一编号），以此编号来填写分类账、分户账以及收付日记账。

除了各类账簿与单据之外，人民公社时期生产队账本资料的最后一项重要内容就是每一年的收益分配方案。按照草案规定，每一年度各生产队都要进行春季、水稻、秋收预分年终结算分配。在预分和决算时，实物要统一折价与现金一起进行分配。顾名思义，预分方案是在生产前预先计划的分配情况，而决算分配方案是根据实际的生产产出进行分配。生产队分配的内容包括粮食和经济两大部分，

⁹ 林发樟，2014年8月16日上午，建德县大洲乡西坞村林发樟家。

根据西坞第一生产队的账本内容，正常情况下分配方案包括春花（水稻、晚秋粮）粮食分户方案（预分与决算）、春花经济分户方案、春花分配到户方案（包括粮食和经济）。

生产队年终分配到户方案中记有详尽的生产队信息，包括生产队及每户家庭的人口、口分、工分数、应分口粮（包括基本口粮和工分粮）、应分口粮品种及数量、应分现金、预支粮食折价以及预支现金、年底盈亏情况，有时还包括家庭阶级成分。生产队收益分配方案中则有翔实的经济数据，包括全队全年的总收入、总支出以及总体分配情况。

从分配方案中我们发现，生产队进行粮食分配时主要遵从三个原则。收益分配的首要原则是“先国家，后集体”。生产队在进行社员分配之前首先要完成国家的征购任务，其中征指的是国家的农业税，购则是指收购农民的余粮。收益分配的第二项原则是要留足集体的。集体提留主要包括种子、饲料粮以及储备粮等。粮食分配的最后一项原则是在社员分配时兼顾好按劳和按需的比例。根据分配方案的记载，在除去国家征购以及集体提留之后，剩下的粮食 85%按照家庭基本口粮分配，剩余 15%按照工分数量进行分配。家庭基本口粮在农民的表述中也作口分，每户家庭的口分是根据家庭成员的年龄、性别进行评定。

与粮食分配不同，经济分配完全依据各户的工分数量进行。该年度生产的总收入除去生产支出、管理费、集体提留以及国家农业税以后，除以当年生产队的工分总和就是每一个工分对应的现金额度。每个家庭能够获得的现金分配，则是该家庭当年年度工分总和乘以每个工分的折价金额，再扣除集体实物分配折价以及年中预支的现金。

三、学术价值

西坞第一生产队 1962 年至 1981 年的生产队账本包含了极为丰富、详细的经济生活信息，是研究农村经济、农民生活和农民家庭不可多得的珍贵一手材料。这批账本是了解人民公社期间农村经济生活最原始的记录，能较为客观地反应当地 20 年间经济社会活动的真实情况。比如从收益分配方案中，我们可以充分了解该生产队的主要收入来源（比如西坞第一生产队的主要收入包括农业与林业收入，其中林业收入是其现金收入的最主要来源），该队当年的农林业情况，国家

税收以及集体提留占总体可分配收入的比例，以及每年工分的折价金额等等。这些信息能够帮助学者形成对该生产队、该地区经济情况的基本了解，进而从地方层面理解人民公社制度的内容与运作情况。

更为难得的是这套账本中保存完好的各类账本以及数万张交易单据。通过这些集中或零散的账目记录，我们真正可以尝试着去重现人民公社时期西坞第一生产队的经济活动，近距离且生动地还原各户家庭的经济与生活。这些看似繁杂的记录，是我们得以打开通向人民公社时期农村生活大门的钥匙，帮助我们更为准确地把握人民公社时期农村经济以及农民生活的特征。比如结合分户账以及对生产队队员预支条的时间与内容的整理，我们可以梳理出各户家庭每一年的生活开支情况。这批账本能够帮助我们进行合理的历史想象。通过对账本的解读，我们可以重建起中国农民在人民公社时期如何经历生老病死、婚丧嫁娶的生活图景，从而更好地书写农民的历史，人的历史。

除了这批账本资料，此次调查还发现了其他珍贵的民间材料，包括多本林发樟用来记录日常生活的历书、人民公社时期印发的宣传文件与学习资料等等。这些文献的发掘不仅给学者提供了新的史料，更能促进学者以新的视角来研究人民公社时期的乡村历史。

**近現代太湖流域農山漁村における
自然資源管理に関する現地調査**

2017年3月1日印刷

2017年3月8日発行

編 者 佐藤仁史

〒186-8601 東京都国立市中 2-1

一橋大学大学院社会学研究科内

印刷所 (株)ウエルオン